

歌姫と宝石の姫と共に  
頂点を目指す者！（調  
整中）

シュリーダ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

少年はまだ幼い頃に両親に捨てられて自分の心の中の感情が無くなってしまった。

そんな少年は失意の底に沈み……暗く自分の日常から色が無くなってしまった。

ある日——少年は毎日行く森の中でいつもと違う何かを感じてその気配のもとへと行く。

そこには自分の失ってしまった心の中の感情と何かを満たしてくれる美しく可憐なお姫様達と出会う——綺麗で美しい歌声の旋律を奏でる歌姫と——おしとやかで気品で優雅な雰囲気綺麗な輝く宝石の姫と運命的な出会いをする。

そして少年は二人のお姫様と絆を結び愛を深めて、共に旅立つ!!

これは少年の自分には何かを見つけるための……様々な場所を巡り、色んな体験をし、笑い、喜び、時には悲しみ、落ち込みながらも家族（ポケモン）と一緒に乗り越えていき、仲間を増やして家族となり、共に成長していく物語。

今、少年と二人の姫と家族（ポケモン）と共に失った何かを探し、夢を叶えるための冒険が今始まる。

この小説は——話しの展開が早かったり、唐突だったり、かなりご都合主義な展開もありますのでそれでも構わない、許せるという方だけご覧ください。

# 目次

- プロローグ ————— 1
- プロフィール&これまでの記録 ————— 27
- 歌姫と宝石の姫〜冒険の始まり〜
- 第一話 旅立ち! はじまる冒険!! 103
- 第二話 決意する夢! 初めてのゲットと挑戦! ————— 121
- 第三話 歌姫のマル秘特訓! 特訓の成果! ————— 162
- 第四話 エスパールレイ ナツメの脅威! 晴れる心 ————— 184
- 第五話 麗しき舞姫エリカ! くさタイプの境地! ————— 232
- 第六話 シロガネ山で修行開始! ジョウト地方に向けて ————— 285
- 第七話 ワカバタウンへ! はじまりの風 ————— 304
- 第八話 突然の出会い! 新人アイドルレーナー マリナ ————— 324
- 第九話 VS ハヤト…てんくうのバトル! ————— 349
- 第十話 リザードンのたに! いちじの

わかれ ————— 389

第十一話 ヒノアラシ！ゲットだよ！

————— 415

第十二話 VS ツクシ……むしタイプ

の底力!! ————— 435

第十三話 おてんばマリルとボングリ

の実！水辺の戦い ————— 466

第十四話 ウパーがいっぱい！あばれ

んぼうのワニノコ ————— 492

第十五話 新タイプはがね！もうこう

エアームド ————— 542

第十六話 コガネシティ大パニック！

R 団強襲……前編!?! ————— 601

第十七話 コガネシティ大パニック！

R 団強襲……後編!?! ————— 646

第十八話 プリティギヤルアカネ！ダ

イナミックパワー ————— 753

歌姫と宝石の姫〜番外編〜

ミュウツウの逆襲 ————— 827

ミュウツウの逆襲 バージョン2

884

舞い降りる伝説！ファイヤー現る。

1000

シロガネ山での出会い……双子の小さ

な竜……

シユンもタジタジ!!アカネとドキドキ ————— 1025

デート!?

1086

ポケモン検定試験! トントン拍子で

リーグ出場?

1182

始めてのポケモンリーグ! セキエイ大会

編!

ポケモンリーグ開会式! サトシとの再

開とR団パニック!

1216

第一回戦 水のフィールド! スロー

ニューフェイ!!

1268

いわのフィールド! かくとうのプライ

ド!

1306

# プロローグ

ここはマサラタウン……カントー地方にある町の一つで自然が豊かな町である。

だが他の町に比べて田舎と言っても過言ではないくらい何にもない町である。しいて何かあるといえればポケモン学の権威であるオーキド博士の研究所があるくらいである。

そしてこれはそんなマサラタウンに住んでいる孤独な少年が大切な二人のお姫様と出会い、自分には何かを探す物語。

ここはマサラタウンの森の中のさらに奥にある湖のほとり、そこに一人の少年がただぼうつとした表情で湖の先を見つめていた。

そこは少年しか知らない秘密の場所で何か嫌な事があるとここに来てただ一日中ばおつとしていた。

「……」

少年はさつきから一言も喋らずにずっと湖の先を見つめていた。

少年は初めてこの場所に導かれるように来た日からずっと何かを感じてこの場所に

来ていた……もしかしたら自分のこの色のない毎日を変えてくれる何かを見つける事が出来るかも知れないと感じていたからだ。

少年はまだ赤子の頃に両親に捨てられた。以来……周りの親切な人達の援助を受けながら一人で生活している。幼なじみの母親から一緒に暮らそうと言われたが少年はそこまで迷惑は掛けられないと言つて断り、以来ずっと一人で暮らしている。

両親に捨てられたその日から……少年の心が壊れ……色（感情）が抜け落ちてしまったのだ。

少年は9年前のある日、まだ年端もいかない赤子の時にマサラタウンから程近い森の入口に揺りかごに入った状態で捨てられていたのだ。

そこに当時、最近 マサラタウンに引越してきた夫婦に拾われたのである。

その夫婦は最近、日課にしていた朝のジョギングの最中……ふとマサラタウンから程近い森の入口近くを走っていた時に……入口のある一カ所に森のポケモン達が集まっていた事に気づいた。気になってポケモン達を警戒させないように近づくとそこには揺りかごの中で気持ち良さそうに寝ている生後1年位の赤子がいたのである。

夫婦は驚き、妻の方は驚きながらもゆっくりと優しく赤子を抱き上げる。



その赤子は何やら不思議な雰囲気を感じたが、ぐっすりと眠っておりその無垢な寝顔に妻は微笑ましくなり笑みを浮かべる。

夫の方がなぜこんなところに捨てられているのか不思議に思い取り合えずジュンサーさんや周りの者達に連絡するために一度マサラタウンに戻る事を提案し妻も頷く、夫が赤子の寝ていた揺りかごを持つ、すると赤子を連れていくのを確認した森のポケモン達はそろそろと森へと帰っていく。

その光景に不思議に思った夫婦、ポケモン達のその行動がまるで赤子が安全になるまで守っているように見えたからだ。

夫婦は色々と気になりつつも先ずは赤子をちゃんとした場所で保護しなければとマサラタウンへと急いで戻るのだった。

その後が大変だった。

マサラタウンの人達に赤子が森の近くに捨てられていた事を報告すると皆大変驚き、通報を受けて出勤してきたジュンサーも含めてマサラタウンの住人でこの赤子を捨てた者がいないかと詳しく調査や取り調べをされてその結果……この赤子は町の住人の子供ではない事が分かった。ジュンサーは引き続き赤子を捨てた親達を探そうとマサラタウンから近い街の病院を当たり引き続き調査する事になった。

その間その子をどうするかということになり、ジュンサーが孤児や捨て子を預かる保護施設で預かるうかと最初に赤子を拾った夫婦に提案したが……夫婦は相談して決めたのか結果が分かるまで自分達が面倒を見る事を決めた。

互いに話し合い、マサラの親しい人達とも相談して決めたのである。

こうして赤子は本当の両親が見つかるまで夫婦の元で暮らす事になった。

夫婦は初めての育児で大変だったが……不思議と苦とは思わなかった——。

何故なら妻は昔、病気の治療で子供を産めない体になってしまい夫婦は子供を持つのを半場諦めていたからだ。

そんなおりに赤子を見つけたのは運命だと思い、例え触れあえる時間は少なくともそれまでは自分達で面倒を見ようと思ったのである。

そんな夫婦をマサラタウンの人達は称賛し、何か困った事があれば親切に協力し、マサラタウンに住むポケモン研究者として有名なオーキド博士や夫婦の家から程近い近所に住んでいる奥さんも色々と親切にしてくれた。

その奥さんにも生後1年の赤ちゃんがいて、オーキド博士にも生後1年の孫がおり、成長して仲良しになれたら良いなど微笑み合う。

そして色々な人達から助けられて赤子を育てていた夫婦は数ヶ月後にジュンサーか

らの連絡で赤子の両親についての調査について報告を受けた。

様々な病院に赤子についての記録があったら提供するようにお願いし、ジュンサーも色んな人脈を使ったりしたが赤子の事について全く分からなかった。それどころかカントー中ほどの病院にも赤子の出生記録事態存在しなかったのである。

どうやら赤子はカントー地方で産まれたわけではなくどこか別の地方の病院で産まれたのだろうという結論になり、そうすると捜査は困難となつてしまい長い時間が掛かつてしまうので赤子は養子となる事となり、数ヶ月過ごして慈しみ愛情も湧いていた夫婦は赤子を正式に養子としてもらい赤子は晴れて夫婦の子供となり二人は喜び、名前を付ける事も許されたので夫婦は考えにも考えて赤子に名前を付ける……赤子の名前は『シユン』。

そして赤子はシユンと名付けられ夫婦の元で愛情いっぱい育てられてスクスクと成長していった。夫婦はシユンを本当の子供のように優しく愛情をかけて育てられた。そのおかげでシユンは優しい子へと成長した。

そして同い年の子供二人とも仲良くなり、楽しく遊んだりもしてシユンも自分が義息だと気づかず両親を本当の親だと思ひあまえていた。

しかしシユンは不思議な子供だった。赤子の頃から不思議とポケモンが近くに來て懐かれる事が多かった。

最初 野生のポケモンに囲まれているのを見た時は夫婦は驚いたがポケモン達は何もせず優しく触れあう様子を見て取り敢えず安心して見守るようにしていた。

赤子から成長しても変わらさずそれどころか益々ポケモンを惹き付けるようになり、シユンもどんなポケモンでも怖がる事なく仲良くなっていた。

ポケモン達もシユンが怪我しないようにしてくれている様子が夫婦にも分かり、最初は野生のポケモンは危ないと思っていたが今は安心して、仕事や家事で忙しい時は家の庭で遊んでくれているのでむしろ助かっている程である。

夫婦は最初、マサラタウンに住む有名なポケモン研究者であるオーキド博士に相談したが……オーキド博士もシユンがどうして野生のポケモンと直ぐに仲良くなれるのか分からず、マサラタウン付近にはそこまで狂暴な野生のポケモンはいないとはいえ……そこまで野生のポケモンと仲良く触れあえる事例はこれまでにない。

現にシユンの親である夫婦（義）には多少の警戒を解いている野生のポケモンだが博士には警戒して近づこうとするとあからさまに威嚇する者までいた、しかしシユンが一言大丈夫と言うと不思議な事に威嚇を止めてシユンとじゃれあい始めたのだ。

博士は大変驚いたがシユンがどうしてこんなにポケモンに好かれるのかは分からずにいたがポケモンに好かれるのは良いトレーナーになれる証だと笑みを浮かべ、夫婦も問題がないならと納得した。

こうして少年『シユン』は夫婦の元で愛情いっぱい育てられて幸せな毎日を送っていた。

しかしそんな幸せは長く続かなかつた――。

シユンが夫婦に拾われてから4年後……シユンが5歳の時、シユンや夫婦の周りでも穏な事が起こり始めたのだ。

買物に出掛けて家に帰ってくる……シユンは気づかなかつたが夫婦は気づいていた、自分達が不在の時に何者かが自分達の家の中で何かを探していた形跡があると……。

夫婦は自分達の過去の過ちからそうされる試み当たりがあつた――その日から家の周りで誰かが自分達を見張るような視線を感じたりしていた。

夫婦はその自分達を監視するように見張る存在に心当たりがあり、このままでは自分達や周りの人達が危険だとある決断をする。

そしてある日、夫婦は愛する息子のシユンやマサラタウンの人達に何も言わずに姿を消した。

シユンやマサラタウンの人達、仲良くしていた幼なじみのお母さんやオーキド博士は

夫婦がシユンを置いて消えた事に驚いてあちこち探したが見つからず、ジュンサーに通報して捜索してもらっても見つかる事が出来ずに手掛かりの一つも見つけられなかった。

マサラタウンの人達はあの夫婦の人となりを知っておりあの息子を愛し優しい夫婦が子供を捨てて夜逃げなどあり得ないと——何か危険な事に巻き込まれたのだと思ひ自分達でも色々調べたが消えた夫婦の所在はようとして分からなかった。

こうして何も手掛かりも見つからず——時だけが過ぎた……マサラタウンの人達や幼なじみのお母さんやオーキド博士が親切にまだ幼いシユンのお世話をしてくれた。

最初は両親がいなくなつたという自覚はなく、幼馴染みの母親やオーキド博士に両親は急な仕事で遠くに行つていてその間シユンのお世話を自分達にお願いしたのだと説明し、まだ幼いシユンはその言葉を信じて自分に何も言わずに行つてしまひ寂しい思ひはあつたが素直なシユンは良い子で両親の帰りを待つのだつた。

シユンは両親の帰りを待ちながら毎日を過ごした……時に仲良しの二人の幼馴染みと遊んだり、オーキド博士にポケモンの事について教わつたり、お世話になつてる幼馴染みの母親とお買い物に出掛けたりと色々な事をして、楽しい毎日を過ごしながら両親が自分の元に帰つて来てくれるのを待ち続けた。

何日も……何週間も……何カ月も……何年も……シユンは両親が帰って来るのを待ち続けた……。

そしてシユンの両親が姿を消してから3年が経過した……自分の元に帰って来てくれる事を信じていたシユンも……数年も何の音沙汰もなく両親が帰って来なければ嫌でも気づいてしまう。

自分は両親に捨てられてしまったのだと……。

両親は自分を捨てて消えたという残酷な現実に気づいてしまった……幼馴染みの母親やオーキド博士が君は捨てられたのではないと熱心に説得しても——まだ幼く心も未熟なシユンにはその残酷な現実だけを受け入れてしまうのだった。

それ以来——シユンは笑うことも少なくなり、幼なじみもずっとそんなシユンを元気付けようとしますがシユンはそんな幼なじみの気遣いに感謝するも笑うことはなかった。

そんなある日……いつもと同じように何もなく色の抜け落ちてしまった自分の日常……両親に捨てられた絶望と孤独の悲しみの中を迷う毎日。

気晴らしのために……日課のマサラタウン近くの森へと出かけていた。勿論、子供だけで森に行ってる事がばれれば注意されてしまうので内緒で見つからないようにこっそ

り行っている。

シユンは昔からポケモンに懐かれやすくポケモン達もシユンから感じる不思議な魅力に惹き付けられ襲う事もなく、すり寄って来るのでシユンも安心して森の中を歩いていける。

静かな森に風で葉が揺れる音を聞き、ポケモン達と触れあっていると…一瞬だけでも両親に捨てられたという悲しみを忘れられる気がした。

しかしそう思えるのは一瞬でやはりその辛い想いは消える事はなかった……。

そんなある日、今日も日課の森に出かけると何か違和感を感じた——。森の様子がいつもと違う感じがする事に気づき森の奥を進んで行くと…神秘的な雰囲気や漂う湖のほとりへと辿り着いた。

マサラタウンから近いこの森の中にも湖はあるが…そことは明らかに周りの景色や漂う雰囲気も違うのでその湖ではなく…何回も森に通っているシユンも初めて来た場所である。

神秘的な雰囲気と透き通る程に綺麗な湖…その綺麗な景色に見とれてしまうシユンだが…シユンは湖の奥から感じる不思議な気配を感じていた…湖の奥は不自然な事にそこだけ深い霧が立ち込めて見る事が出来ない…しかしシユンは湖の奥から感じ



る気配に不思議と引き付けられる感覚がした。

それ以来……シユンはその日、感じた不思議な気配の正体を知るために毎日この場所に通っている。

「……………」

シユンは最初にこの場所に訪れたその日から湖の湖畔に座り、湖の奥を見つめる――。

不思議な気配の正体が現れてくれるのをじつと待ちながら――何日も何日もずつと座って待っていたが現れる事はなかった……ここに訪れて2年も経過していたがその不思議な気配の正体が出てきてくれる事はなかった。

そんなある日、シユンは10歳になり、今日もシユンだけが迷う事なく行ける不思議な湖を訪れて座り同じように目線をずっと湖の奥へと向けている。

そしてシユンが湖の奥を見つめて、ふとした瞬間――気づけばシユンの横にどこから現れたのか二つの小さな影がシユンの左右に現れる。

「こんにちわですわ♪」

「……………」

「(っ)っ……(っ)こんにちわ……」

シュンの左右に現れた存在、右に居るのはピンクに輝くダイヤモンドの体をした可愛らしいポケモン？と左にキラキラと五線譜のような綺麗な髪をした美しくも可憐なポケモン？がいた。

寶石のようなポケモン？はにつこりと微笑みシュンに挨拶し、シュンも突然現れた存在に驚きながらも挨拶を返す。一方もう一体の綺麗なポケモン？はジト目でシュンを見ている。

「ねえ、あなたは毎日ここに来ていますけど…ずっと座って何をしていますの？」  
「初めてここを訪れた時からずっと座って湖を見ていましたね…」

座っているシュンの両隣からそう聞いてくる二つの小さな影が座っているシュンに近づき声を掛ける。

「やっと出てきてくれたんだね！ぼくがずっと感じてたのはキミたちだったんだね…」

シュンは初めてこの場所に訪れたその日からずっと感じていた不思議な気配の正体が自分の前に出て来てくれたことに嬉しくなって出てきてくれた二人に喜びの声をあげる。

「それはあなたが毎日、この場所に来るからです。普通はわたしの力でここには人はおろかポケモンすら近づけないはずなのにどうしてあなたは毎日ここに来れるのですか？」

シユンの左にいる綺麗な髪の小さいポケモン？が自分の力で人やポケモンが来れないはずのこの場所に迷う事なく毎日通えるのか不思議に思い訪ねる。

「さあ？ いつもみたい森に向かつてたら不思議な感じがしてそこに向かつてたらこの湖に出たんだ。そして湖の奥からキミたちの気配を感じたんだ……どうして入れるかはぼくも分からない……でもここに来ると不思議と安心するんだ……何もなければ心の心を満たしてくれる何かがある気がして……」

シユンはいつも行く森とは何か異なる違和感を感じてその違和感を感じる方に向かうと不思議な湖のほとりへと辿り着いた……湖の奥だけ霧で覆われた神秘的な雰囲気漂う不思議な場所……しかし不思議とシユンを引き付ける何かを感じた……。

どうしてここに訪れる事が出来るのかは分からないが……以来、シユンは毎日この場所へと訪れて、あの日感じた者が何なのかを確かめるためにここに来る。

空っぽの自分を満たしてくれる何かがあるかもしれない事を期待して――。

「そうなのですか？この場所に入れるということはあなたは心の優しい方なのですね」

シユンの言葉を聞いて右にいる綺麗に輝く宝石のようなポケモン？は人やポケモンですら入る事の出来ないここに入れたシユンは心の優しい方なのですねと嬉しそうに微笑む。

「まったく！あなたはそうやってすぐに人間を信じるのですね。それがあなたのいけないところですよ！あなたは人間に非情なまでに襲われてここに来た事を忘れたのですか！」

左のポケモン？がシユンを心の優しい方だと言うのを聞いて、人を簡単に信じてはいけないと言い、かつて人間に非情なまでに襲われたのを忘れたのかともう一人を叱る。「それは……ですがこの方があの時の人間と同じとはわたくしには思えません。あの時と同じ わたくしを襲った人達と同じならここに入れるはずがありませんもの……」

片方のポケモン？に注意されたもう一方のポケモン？が……かつて自分を襲った人間のような非情な心の持ち主ならここに来ることは出来ないはずだともう一方のポケモン？に言う。

「それはそうですが……」

そう言われたもう一方のポケモン？が返答に困った様子で……それはそうですがと返事する。

確かにこの場所に普通の人間やポケモンを近づけないようにさせているのは自分であり、そんな醜い心の人間は絶対に入る事など出来るはずはないからだ。二人のポケモンがそうやって話していると……。

「ごめんね……」

シユンは二人？の話しを聞いていて詳しい事情は分からないが……かつて自分と同じ人間が二人？に酷い事をしたという事は分かり、申し訳なきように謝る。

「えっ？」

「…どうしてあなたが謝るのですか？…あなたがしたわけでもないのに…」

二人はシユンがいきなり自分達に謝罪した事に驚き、どうしてあなたが謝るのだと不思議そうに尋ねる。

「うん…確かにぼくがしたわけじゃないけど……でもぼくと同じ人間がキミたちに酷いことをしていたって知って謝らなきゃって思ったんだ……本当にゴメンね…キミ達に酷いことをして…」

シユンはそう言って二人に頭を下げると、二人はさも可笑しそうに笑みを浮かべる。

「フフツ♪やっぱりあなたは心の優しい人なのですな。あなたがしたわけでもないのに謝るなんて」

宝石の体をしたポケモン？が微笑み、シユンにやっぱり優しい人だと嬉しそうに微笑む。

「ハア…あなたみたいなのは人間は初めてですよ……太古の昔から色々な人間を見てきました、あなたのような自分が悪いわけでもないのに…他の者を思いやり、頭を下げ

る事の出来る人間と出会ったのは初めてですよ……確かにあなたならここに入ることが出来ても可笑しくなさそうですね。フフツ♪」

五線譜のような模様の綺麗な髪のポケモン？も……シユンのような人間と会うのは初めてだと言って、良く分からない事を呟いて、シユンならここに入ることと出来ると納得し嬉しそうに微笑む。

「そうなんだ……あつ！そろそろ帰らなきゃ……」

シユンはその綺麗なポケモン？の言うことは理解しきれなかったが……空が夕焼け色に染まっている事に気づいてそろそろ帰ろうと立ち上がる。

「もう帰るのですか？」

宝石の体のポケモン？が今日はもう帰るのかと立ち上がったシユンに聞く。

「うん、良かったらまたここに来てもいいかな？ここに来ると何だか心が安らいで落ち着ける気がするんだ……ダメかな？」

シユンは二人のポケモン？にまたここに来てもいいかなと尋ねる。

「ええ、かまいませんよ。また来て下さいね♪」

「まあ、あなたならいいでしょう。ですがこの場所の事は絶対に他の人間には言っはいけません！」

二人はシユンなら再びここに来る事を認め、そしてこの事は絶対に他の人間に言っ

てはいけないと念を押してシユンに約束させる。

「うんわかったよ。絶対に誰にも言わない！それじゃあ また明日会おうね、じゃあね！」

シユンは二人にまた明日会おうと言って、霧の中を走っていき やがて見えなくなつた。

「フフツ、不思議な子でしたわね……」

「そうですね。まだあんな心の優しい人間が残ってるなんて驚きましたね……」

二人はシユンが入れないはずのこの場所に毎日来ている事を知っており、2年近くもずっと通っているシユンの事が気になり、今日 初めてシユンの前へと出て来てどうしてここに来ることが出来るのかを尋ね そしてシユンが心の優しい人間だという事を知る事が出来た。

散々人間の残酷な姿や行いなど醜い部分を見てきた二人……宝石のような姿のポケモン？はともかく、五線譜模様の美しい髪のパケモン？はとつくに人間への信頼を無くしていたが……シユンのような心の優しい人間が残っていた事に意外そうに驚いている。

そして二人はまたシユンが明日、自分達に会いに来てくれる事を楽しみに思いながら湖の奥へと消えていった。

シユンと二人のポケモン？が初めて会ったその日から……シユンは毎日 その場所に通い二人と会って色々な話を話した。

シユンと二人は楽しく話しをして、シユンは二人と毎日 話しをしていると——自分の……何もない心の中に……少しずつ何か暖かい物が溢れてくるように感じ、そんなシユンの純粋な心に二人も段々と心を開いていき、毎日シユンがこの場所へと来てくれるのが二人の楽しみとなっていた。

そしてシユンと二人が直接出会った日から数ヶ月がたったある日……その日はその場所にシユンが来る事はなかった——。

「どうしたんでしょう？あの子はいつもだったらここに来て、今頃は楽しくお話しをしていますのに……」

「何か用事が合って来れないのでしょうか。いくらあの子が子供とはいえ、そう毎日ここに来れると言うわけでもないでしょう……今日は帰りましょう」

そう言つて二人はシユンに会えなかったことにしよんぼりと残念そうにしながら湖の奥へと帰つていった。あのシユンが来なかった日から二人は毎日 湖の奥から出てきてシユンを待つていたが……シユンはその日から湖へと来ない事が続き、その日から十日ばかりが過ぎていた。

「あの日からずっとあの子は来てくれませんか……」



「そうですね……いったいどうしたのでしょうか……」

初めてシユンが湖に来なかつた日から十日が経過し、シユンが自分達に会いに来てくれなくなつたことに寂しさを感じていた。

たつた数日前に直接 会つたばかりだというのに……互いに色んな事を話し、いつしかお互いその時間が楽しいと思えるようになっていた。

そして楽しい時を過ぎす内に二人？にとつてもシユンはかけがえのない存在へとなつていたのである。

「やっぱり今日も来ないようですね……戻りましょう……」

「ええ……そうですね……」

二人は今日もシユンは来ないと思い、諦めて湖の奥へと帰ろうとしたその時――。

ザツザツ……向こうから足音がこちらに近づいて来る音と共に自分達の知つている少年の気配を感じた。

「この足音……それにこの気配はもしかして……」

「ええ……来てくれたんですね……」

二人のこの場所の入口の森の方から歩いて来る気配の方に視線を向ける。そして霧から二人が会いたかつた少年……シユンが姿を現す。

「ごめんね二人共。会いに来るのが遅くなつちやつて……」

シユンは久しぶりに二人に会えたことを嬉しそうに笑みを浮かべて、会いに来るのが遅くなったことを謝る。

「いいえ……良いんです。こうして今日 会いに来てくれたことが嬉しいんです！」

「ええ……でもどうして今日まで会いに来てくれなかったのですか？」

二人はシユンが自分達に会いに来てくれたことが嬉しいと笑顔を浮かべ、シユンにどうして今日まで会いに来てくれなかったのかと尋ねる。

「うん……きみたちと最後に会った日の次の日から風邪で寝込んで……今日まで全然体調が良くならなくてね……。今日 やつと良くなったから会いに来たんだよ……風邪の間 きみたちに会えなくて本当に寂しかったよ……（涙）」

シユンは二人に最後に会ったあの日の帰りに、重度の風邪をひいてしまい40度の熱を出し家で幼馴染みの母親に看病されていたが……今日まで全く良くならず、数日前に少しずつ熱がひいてきて今日やつと良くなったので二人に会いに来たのだ……シユンは二人に会えずに寂しかった事を告げる。

数日前に初めて直接出会い、毎日一緒に楽しく過ごしたりしている内にシユンにとつて二人の存在は……いっしか大切な者へととなり、かけがえのない存在へと変わっていたのだ……。

自分の……何もかも失い……暗く……空っぽになった心を満たしてくれる大切な者となつ

ていたのである。

「…それはわたくしたちも同じです。あなたに会えなくてこの数日どれだけ寂しかったことか…（涙）」

「…その通りです。あなたはわたしたちにとっても…あなたはかけがえのない人です。あなたに会えなくてどれだけ悲しかったか…寂しかったですよ…」

いつしか二人にとっても…少年はかけがえのない存在へとなっていた。初めて出会ったあの日…少年（シユン）と直接相対し、人間という事で最初は警戒していたが…話してみるとこの少年は…その見た目通りに清く、誠実で優しさを持つ少年で心も綺麗な少年だったが…その心の中には暗く寂しいという想いがある事にも気づいていた。寶石の姫はそんなシユンの優しさと内側に潜む寂しさを感じて、気になり出てきてしまったのをきっかけで直接相対し、話しをするようになった。

シユンと直接 互いに色々話し、お互いの事を知った…毎日と来るシユンとその日あった事を話したり、楽しかった事、面白かった事など時に楽しく話しをして過ごしたり、辛い事や悲しい事があった時は互いに励ましあったりと過ごす内に——シユンの存在は二人にとって大切な存在になっていったのだ。そんなシユンに久しぶりに会えたこととに…嬉し涙を流してシユンに抱きつく。シユンも久しぶりに会えたことが嬉しくて涙を流しながら二人を抱きしめる。

「ぼくも二人に久しぶりに会えて嬉しいよ（涙）……キミたちと出会えて本当に良かった……」

シユンは抱きついてくる二人を優しく抱き止めて……自分の空っぽな心を暖かい何かで埋めてくれる二人に感謝し、二人に出会えて良かったと心の底から強く思えた。

そうして三人は久しぶりに会えた嬉しさ喜びを感じて深く抱き締めあっている……。

「……でも言いにくいんだけど……来週からぼくは旅に出る事になったんだ……」

そしてシユンは久しぶりに再会したばかりで言いにくそうに来週から旅に出る事になった事を話す。

「この町のポケモン研究家のオーキド博士から 最初のポケモンとポケモン図鑑を貰って図鑑を完成させるための旅に出るんだ……だから残念だけど もうここには来れないんだ……ごめんね二人とも……」

シユンは二人に旅に出る事の経緯を説明する……ポケモン研究家で有名なオーキド博士からポケモン図鑑を貰って旅に出る。ポケモンを扱うための法律で10歳になればポケモンを持つ事が許されて旅に出る事が出来る……シユンもその年にマサラタウンを旅立つトレーナーの一人として来週から旅立つ。

そのため来週からはもうここに来る事は出来ないのだと残念だと……二人に寂しそ

うな表情で謝る。

「そうなんですか…それでしたら大丈夫ですわ。あなたの旅にわたくしたちも着いていきますわ!」

「ええ…わたしも もうあなたと会えなくなるのは嫌です。わたしもあなたに着いていきます!」

二人はシユンにまた会えなくなることを嫌がり…シユンに着いていく事を決める。

「えっ?!二人ともぼくの旅に着いて来てくれるの?」

シユンは二人が自分に着いて来てくれると言ってくれたことに嬉しくなり、二人に本当に着いて来てくれるのかと尋ねる。

「ええ、もちろんですわ。もうあなたに会えなくなるのは嫌ですもの…」

「これからはあなたの事をマスターと呼ばせてもらいますね。今 ボールはありますか?」

二人はシユンと もう会えなくなる事を嫌がり、シユンの旅に着いていく事を決めて、これからシユンの事を マスターと呼んでシユンに今 モンスターボールはあるかと聞く。

「えっ? うん…旅に出るために準備してたから モンスターボールは持つてるけど…」

シユンは旅に出るための準備をしていたため ポケットに入れておいたモンスターボールを取り出して二人の前に置く。

「えい！」

「それ！」

二人はモンスターボールのスイッチに手を触れる……するとモンスターボールが開いて二人はモンスターボールの中に吸い込まれる——そしてモンスターボールが数回揺れて……そしてモンスターボールの揺れが止まると……ポンッ！となつてゲットした事を知らせる。

「ありがとう二人とも……出てきて！」

シユンは二人の入ったモンスターボールを投げて二人をボールから出す。

「フフツ♪これからよろしくお願いしますね。マスター♪」

「これからのどんな旅になるのか……楽しみですねマスター♪」

二人ともシユンにこれからよろしくと言つて楽しい旅になりそうだと微笑む。

「うん！これからよろしくね。んっ……えっど？」

「ああ……そう言えば ずっとわたしたちの名前を言つてませんでしたね……」

「すっかり名前を言うのを忘れていましたわ……」

二人とも互いに自己紹介をするのを忘れていた事に気づいて、シユンに自分達の名前

を教える。

「わたくしの名前はディアンシーと言います。よろしくお願ひしますわ♪」

「わたしはメロエッタです。これからよろしくお願ひしますマスター」

綺麗な五線譜模様の長髪のポケモンはメロエッタ、宝石の体の綺麗なポケモンはディアンシー、二人はシユンに自分達の名を教える。

「じゃあ改めて…ぼくはシユン！これからよろしくねメロエッタ！ディアンシー！」

「はい♪」

「ええ♪」

シユンも二人に改めて自分を名を名乗り、これからよろしくねと言うと、二人も頷いた。

マサラタウンの森に捨てられていたシユンは幸運にもマサラタウンに住む夫婦に拾われて養子として家族に迎えられ幸せな日々を過ごしていたが——ある日突如としてその幸せは終わりを告げる。

ある日、突然、両親が自分の前から消えて数年経っても帰って来ずに自分は捨てられてしまったのだと絶望し、シユンの心から感情という色が抜け落ち…空っぽになってしまった……。

そんなある日、シユンは偶然にも不思議な場所に辿り着き、そこにいた不思議な存在

と出会った。

そしてその不思議な存在……メロエツタ、デイアンシーといつしか強く絆を結び、互いに想い合う存在になっていた。そしてシユンはメロエツタとデイアンシーと共に旅に出る。

これは大切な存在の二人と一緒に——両親に捨てられた現実をまえに感情という色が抜け落ち、空っぽになってしまった自分の心と……辛くても向き合いながら旅をして、様々な人やポケモンと出会い、色々な事を経験し、たくさんの出会いや別れをしながら……成長していく少年とポケモン達の物語である。



## プロフィール&これまでの記録

プロフィール（設定）

名前『シユン』

年齢——11歳（ジヨウト地方旅開始当時）

見た目——銀髪のショートヘアに中性的な男にも女にも見える整った顔付き、成長し  
たらかなりイケメンになりそう。

身長——153センチ（ジヨウト地方旅開始当時）

体重——36キロ（ジヨウト地方旅開始当時）

特徴——マサラタウンの森によく行っていたからか身体能力は高い。  
他人を思いやる優しさを持つ。

自分のポケモンに対する愛情は人一倍強くポケモン達の事が大好きでポケモン達も  
そんなシユンの事が大好きである。

そのルックスと誰にでも優しい性格から幅広い年の少女や女性にモテる。

『プロフィール』

まだ幼い頃、物心つく前にマサラタウンの森に捨てられていたのを最近、マサラタウンに引越してきた夫婦に拾われて育てられた。

義親の夫婦に拾われそれから数年——幸せな毎日を過ごしていたがある日——二人はシユンの前から姿を消してしまった。しばらくは帰って来ることを信じていたが……数年も帰って来ない義親に自分は両親に捨てられてしまったことを理解して絶望する。

両親に捨てられてしまい絶望するシユン——皆はそんなシユンを憐れんで優しくしてくれるが……愛されていたと思っていた両親に捨てられ……周りの子供が両親と楽しく笑う様子を傍目から見ても——自分はなぜ両親に捨てられたのか……自分は要らない子供だったのかと絶望し、そしていつしか周りの人からも心を閉ざしてしまったマサラタウンに住む少年。

そんな心の寂しさを少しでも紛らわすためかマサラタウンから程近くにある森へと足を運ぶようになった。本来は自分のポケモンも持つておらず、ましてや年端のいかないう子供が一人で森に行くなど大人達が許す筈もないが……シユンは大人達の目を盗み森に行くようになった。なにかに導かれるように——。

最初の森に入ると天から降り注ぐ暖かい太陽の光、青々と茂る綺麗な森と心地よい風のせせらぎ、少し先に行くと川があり水の流れる音がしてポケモン達が思い思いに過ごしていた。

シユンは初めて見る景色にいつしか夢中になりながらその森を探検していた。

そして毎日森に通うようになりその度に新しい発見をする。そして森に行く度に両親に捨てられたシヨックで体を壊す事が多く、体が弱かったのが少しずつ丈夫になり最初シユンを警戒していた森のポケモン達も——シユンの不思議な雰囲気にならずに触れあったりして仲良くなり 一緒に遊ぶ度にその年の子供に比べて身体能力がどんどん高くなっていった。

ポケモン達と遊ぶ日々は楽しかったが両親に捨てられた心の傷は癒えず、森のポケモン達には見せないが：自身の色の抜け落ちてしまった日々を過ごす。こんな自分を思ってくれる周りの人や幼馴染みには感謝しているがやはり気持ちは晴れる事はなかった。

そんなある日、気晴らしにまた森に行くといつもと何か違う事に気づいて、何かに導かれるまま感じた方に行くと森の奥にある霧に覆われた湖のほとりへと辿り着いた。

シユンがその神秘的な湖の光景に目を奪われていると、湖の奥から何かの気配を感じるが：その何かが姿を現す事はなかった。

シユンはその正体を確かめるために——毎日この湖に通って数年後のある日、その湖にいた不思議なポケモン？に出会う。

一体はシユンよりも大分小さくシユンの肩に乗れる位で綺麗な黄緑色の髪にまるで

踊り子のような姿でまるで歌の女神のように美しかった。

もう一体はシユンの膝より少し高い位のピンクダイヤモンドの輝く体でまるで宝石のお姫様のような雰囲気を漂わせて綺麗だった。

シユンはそんな綺麗で美しい二人の存在に目を奪われていた。これがシユンと二体のポケモン、メロエツタとディアンシーとの出会いだった。

最初は人間という生き物を険悪し警戒していたメロエツタ。ディアンシーはこの場所に入つてこれた事からシユンの綺麗な心で優しいシユンを受け入れていた。

そして毎日ここに来るシユンと過ごしている内にメロエツタも少しずつシユンを受け入れるようになりディアンシーもシユンの事を気に入っていた。そして一緒に過ごす内にいつしかお互いに取つて掛け替えない存在となつていたのである。

そしてシユンのポケモンになつてくれた二人と共にオーキド博士からもらつたヒトカゲと一緒にマサラタウンを旅立つた。

そしてシユンは旅立つてから——自分を捨てた両親を探し、自分を捨てた理由を聞くために：トレーナーとして有名になれば自分に会いに来てくれるかもしれないとチャンピオンかトップコーディネーターのどちらかを目指そうと志す。

ただポケモン達とチャンピオンになるために努力し、苦楽を共にする度にいつしか本気で頂点に立ちたい、チャンピオンになりたいと思うようになり、ポケモン達と一緒に

にチャンピオンを目指して旅をしているのである。

『メロエッタ』

シユンが毎日行く森の奥にある不思議な湖の秘密の場所に居たポケモン。

ある日、人間は入ることの出来ないこの場所に入ることの出来たシユンを不思議に思い、数年間——湖の奥から様子を見て悪い人間ではないと分かるとシユンの前に姿を現した。

そして数日間 一緒に時間を過ごす内にシユンへの警戒も和らぎ、メロエッタにとってシユンはいつの間にか大切な存在へとなっていた。

元々は別の地方にある、とある島で妹と共にその島の人間達と一緒に暮らしていたが、ある日その島の人間達が争いのためにメロエッタのその強大な力を利用しようとしてメロエッタは怒り、その島の人間を文明ごと滅ぼした。

メロエッタは妹と一緒にその島を出て行こうとしたが、妹はもう一度島の人間達を信じたいと言い、僅かに残った島の人間達ももう二度と過ちを犯さないと誓うも、メロエッタは信じる事が出来ずに妹を残してその島から出て行った。

幅広い博識な知識とどんな事態にも動じる事のない冷静な性格で、太古の昔から生きているので世界で起こった様々な出来事を見てきた——そのどんな事にも動じない冷静な性格はシユンやディアンシー、仲間のポケモン達からも慕われて頼りにされてい

る。

基本的にシユン以外の人間は大嫌いであらう受け入れられない——特に邪な欲望にまみれた人間には嫌悪感を露にして敬愛するシユンや仲間には害する者には容赦せず圧倒的な力で叩き潰すがシユンと仲の良い人間には少しばかり心を開く……シユン以外の前では透明になり滅多に姿を現さない。

その可愛らしい見た目からは想像出来ない程の無類の強さを誇り、その辺のポケモンでは相手にすらしてもらえずジムリーダーのポケモンでも相手に成らず四天王のポケモンでも少し戦える程度——チャンピオンのポケモンでやっと少し渡り合える程度であり、伝説や幻クラスのポケモンの中でも敵うポケモンは少なく——神と呼ばれしポケモン達と渡り合える。

メロエツタの力に勝っているポケモンは只一体、全てを生み出したと云われる創造神のみ。

『ボイスフォルム』

タイプ——ノーマル・エスパー

性別——♀

特性——てんのめぐみ

技

- 1、サイコキネシス
- 2、いにしえのうた

3、 ?

4、 ?

『ステツプフォルム』

タイプ——ノーマル・かくとう

1、インフアイト

2、 ?

3、 ?

4、 ?

様々な強力な技が使えて：フォルムチェンジすると使える技も全て変わる……技以外でも超強力なエスパーの力も使えて、並外れた身体能力を併せ持つ。

『ディアンシー』

シユンが毎日行く森の奥にある湖のほとりにある秘密の場所に居たポケモン。

メロエツタと一緒にこの秘密の場所で休んでいたところに入ることの出来ない場所に入つて来たシユンに興味を示したディアンシーがメロエツタに言つてシユンの前に姿を現した。

そしてシユンと一緒に数日を過ごす内にシユンの綺麗で優しい心に惹かれていつの間にか掛け替えのない存在となっていて、シユンと一緒に行くことを決める。

元々はとある国のお姫様だったが——この広大な世界にある色々な物を自分の目で見たいからと王国を妹に任せて旅に出たという。しかし、旅をしていると悪い人間達に捕まりそうになっていたところをメロエツタに助けられて以来、一緒に旅をしている。

元は王国のお姫様だった事もあり、おしとやかで生粋のお嬢様。ほがらかでみんなの事を気遣える優しい性格にシユンやメロエツタは勿論、仲間のポケモン達からも好かれている。

その宝石のように輝く体は美しく、可愛らしい容姿はお姫様と呼ぶに相応しい。

お姫様としての教養は完璧だが少しばかり世間知らずなところや天然な一面もあり……たまに予想外な行動を取る事もあって、シユンやメロエツタを困らせたりすることも多々ある。

タイプ——いわ・フェアリー

性別——♀

特性——クリアボディ

技

1、ダイヤストーム



2、ムーンフォース

3、 ?

4、 ?

???

特性——マジックミラー

タイプ——いわ・フェアリー

1、 ?

2、 ?

3、 ?

4、 ?

ディアンシーと出会ったあの日……マサラタウンを旅立つ前の日にディアンシーから貰った綺麗なピンク色のダイヤモンド——謎の力を秘めている。

『シユンの持っているポケモン』

手持ち

1、リザードン

オーキド博士にポケモン図鑑と一緒に貰ったシユンの初めてのポケモン。

ハナダの洞窟でリザードへと進化しシロガネ山の特訓でリザードンへと進化した。シユンのポケモンの中でも1・2の強さを持つ。勇敢な性格。

現在はジョウト地方にあるリザフィックバレーでリザードン達のボスをしており、群れの中でも綺麗で美しい三体のリザードンの♀を侍らしている。

タイプ——ほのお・ひこう

性別——♂

特性——もうか

出会った場所——オーキド博士から譲り受けた。

- 1、かえんほうしや
  - 2、ドラゴンクロー
  - 3、ちきゆうなげ
  - 4、かみなりパンチ
- 2、フライゴン

マサラタウンを旅立ったシユンが最初にゲットしたナックラーが進化したポケモン。ホウエン地方の砂漠に止まっていたトラックに食べ物目当てに乗り込んでしまいそのままカントー行きの船でカントーへと来てしまった。見慣れない場所で迷ってお腹を空かしていたところをシユンに助けられてシユンに着いて行く。ハナダの洞窟でピ

ブラーバに進化しシロガネ山の特訓でフライゴンへと進化を果たす。

現在はタمامシジムのエリカの元で預かってもらっており、タمامシジム等で物資の運搬の手伝いなどをしている。

タイプ——じめん・ドラゴン

性別——♂

特性——ふゆう

出会った場所——マサラタウンの近くの森

1、かえんほうしゃ

2、りゆうのいぶき

3、じわれ

4、はがねのつばさ

3、ドレディア（色違い）

メロエツタがどこかの地方から連れてきたチュリネが進化したポケモン。

カントーには居ないばかりか珍しい色違いで、シユンにとてもよく懐いており、甘えん坊でシユンにべったりでシユンに誉められて頭を撫でられるのが大好き。

進化させるために必要な太陽の石をタمامシジムのジムリーダーエリカから譲り受けてドレディアへと進化した。素早い動きと強力なくさタイプの攻撃が得意。

現在はエリカの元で預かってもらい、ジムの手伝いをしたり幼いくさタイプのポケモンをお世話するお姉さんをしている。

タイプ——くさ

性別——♀

特性——マイペース

出会った場所——マサラタウンの近くにある森（メロエツタが別の地方から連れて来た）

1、はなびらのまい

2、ちようのまい

3、ソーラービーム

4、リーフストーム

4、フーデイン

シユンがハナダの洞窟に行く途中でゲットしたケーシイが進化したポケモン。

ハナダの洞窟での特訓でユンゲラーへと進化し、ヤマブキジムのナツメとのジム戦で窮地に陥ったユンゲラーがシユンの思いに込めて奇跡を起こしフーデインへと進化した。

今もシユンが頼りにしている冷静で賢いエスパーの戦士。メロエツタに鍛えられた

お陰で技ではなくテレポートが使えるようになった。現在はオーキド研究所に預けている。

タイプ——エスパー

性別——♂

特性——シンクロ

出会った場所——ハナダシティ近郊の草むら

1、サイコキネシス

2、れいとうパンチ

3、サイケこうせん

4、はかいこうせん

5、パルシェン

シユンがクチバシティの港で釣り上げたシエルダーが進化したポケモン。

シロガネ山での修行中にシロガネ山にある岩場に含まれる進化の石と同じ成分のある鉱石に触れたことによりパルシェンへと進化した。今ではシユンの手持ちの中でも守りの要となっている。

タイプ——みず・こおり

性別——♂

特性——シエルアーマー

出会った場所——クチバシテイの港

1、オーロラビーム

2、とげキャノン

3、れいとうビーム

4、こうそくスピン

6、フシギソウ？フシギバナ

シユンがタمامシジムに居たフシギダネをエリカから譲り受けた。フシギダネがシロガネ山の特訓でフシギソウへと進化した。まだまだ成長途中でシユンにとっても懐いていて、ドレディアを姉のように尊敬している。

コガネジムでのアカネとのバトルでピンチに陥った時に……今まで戦ってくれた仲間への期待に答えてフシギバナへと進化した。

その進化し大きくなった体と力——そして新しい技でコガネジム戦に勝利した。

タイプ——くさ・どく

性別——♂

特性——しんりよく

出会った場所——タمامシジムのリーダーエリカから譲り受けた。

- 1、はっぱカッター
- 2、つるのムチ
- 3、ソーラービーム
- 4、とっしん

『オーキド博士にあずけているポケモン』

これまでの旅の道中にゲットしたポケモン。

1、ポリゴン

タマムシシティのゲームコーナーの景品として手に入れた。人から貰ったポケモンは中々言うことを聞かないと言われていてポリゴンも最初はシユンの言うことを全く聞かずに懐かないでいたが、数日間一緒に過ごす内にシユンの言う事を段々と聞いてくれるようになった。今ではすっかりシユンに懐いている。

タイプ——ノーマル

特性——トレース

- 1、トライアタック
- 2、テクスチャー
- 3、でんじほう

4、サイケこうせん

2、ニヨロゾ

タمامシシティに行く途中でゲットしたニヨロモが進化した。

タイプ——みず

性別——♂

特性——ちよすい

1、みずでつぼう

2、おうふくビンタ

3、バブルこうせん

4、さいみんじゅつ

3、ニドリーナ

クチバシティに行く途中でゲットしたニドラン♀が進化した。ニドキングの事が大好きでいつも一緒に居る。

元々ニドラン♂と一緒に食事を楽しんでいた時にニドラン♂に近寄って来てニドラン♀を気に入ったのかニドラン♂にスリスリと体をすり寄せていた——どうやら一目惚れしたらしくニドラン♀はシュンに自分もゲットするようにお願いしてきたのである。優しい性格。



タイプ——どく

性別——♀

特性——どくのトゲ

1、どくばり

2、にどげり

3、かみつく

4、みだれひつかき

4、ニドキング

ニドラン♀と同じ場所で先にゲットしたニドラン♂がシロガネ山での特訓でニドリンノへと進化し、パルシエンと同じで進化の石の成分が含まれた石に触れニドキングへと進化する。わんぱくでかなりのパワーを持つ、最初はニドラン♀に好かれて戸惑っていたが一緒に旅する内にニドラン♂もニドラン♀の事が好きになっていたのである。

タイプ——どく・じめん

性別——♂

特性——とうそうしん

1、にどげり

2、じしん

3、つのでつく

4、いわくだき

5、ロコン

タمامシシテイを出た森でゲットしたポケモン。まだまだ特訓中、甘えん坊でシユンにベツタリ。隙があればシユンに抱きつこうとする。

タイプ——ほのお

性別——♀

特性——もらいび

1、ひのこ

2、でんこうせっか

3、あやしいひかり

4、おにび

6、プリン

タمامシシテイを出た森でゲットしたポケモン。まだまだ修行中で歌う事が大好き……だがプリンの歌は聞いた相手を眠らせてしまうので特訓して力をコントロール出来るようにして技の“うたう”以外の時は力を発揮させないようにすることが出来たのである。

タイプ——ノーマル：？

性別——♀

特性——メロメロボディ

1、うたう

2、おうふくビンタ

3、ころがる

4、はたく

7、クサイハナ

タマムシシティを出た森でゲットしたナゾノクサが進化した。進化当初は臭いが酷かったが、くさいタイプのエキスパートのエリカに相談すると快くアドバイスをしてくれて今ではすっきり臭いも押さえられている。

タイプ——くさ・どく

性別——♀

特性——ようりよくそ

1、メガドレイン

2、しびれごな

3、どくのこな

4、はっぱカッター

8、ゴリキー

ニビシティ近くの岩場でゲットしたワンリキーがシロガネ山での特訓で進化したポケモン。わんぱくで修行が大好き。暇さえあれば筋トレしている。

タイプ——かくとう

性別——♂

特性——こんじょう

1、クロスチョップ

2、ちきゆうなげ

3、からてチョップ

4、あてみなげ

9、ゴローン

ハナダの洞窟でゲットしたポケモン。まだまだ特訓中。

タイプ——いわ・じめん

性別——♂

特性——いしあたま

1、いわおとし

2、ころがる

3、マグニチュード

4、すてみタツクル

10、ポニータ

セキクチシテイの近くにある草原でゲットしたポケモン。とても足が速い。大人しい性格でゲットしてからもシユンに懐くのも早く、直ぐにシユンを背中に乗せてくれた  
—シユンに体を撫でられるのが大好き。しかし、シユン以外の人間に触られるのが大嫌いで前にシユンのポニータを見て巫山戯てうっかり触ろうとした少年が居て、ポニータの炎の鬣に触れて火傷した……その時は少年の火傷も大した事なく、少年の方に否があるからとポニータは咎められずにそれ以来シユンはポニータを他人に触らせないようにしている。

タイプ——ほのお

性別——♂

特性——もらいび

1、ひのこ

2、ふみつけ

3、ほのおのうず

4、こうそくいどう

11、コイル

発電所の近くでゲットしたポケモン。無表情で感情を読み取れないが——シユンに  
 誉められた時だけは嬉しくて笑顔になる。

タイプ——でんき・はがね

特性——じりよく

1、10まんボルト

2、ちょうおんぼ

3、ソニックブーム

4、でんじは

12、ゴースト

シオンタウンにあるポケモン達の墓地でゲットしたゴースがシロガネ山での特訓で  
 進化したポケモン。陽気でイタズラ好き。

タイプ——ゴースト・どく

性別——♂

特性——ふゆう

1、さいみんじゆつ

2、ナイトヘッド

3、シャドーボール

4、あやしいひかり

13、タマタマ

タマムシシテイを出た森でゲットしたポケモン。

タイプ——くさ・エスパー

性別——♂

特性——ようりよくそ

1、さいみんじゆつ

2、メガドレイン

3、ねんりき

4、しびれごな

14、サイドン

サファリゾーンでゲットしたサイホーンがシロガネ山での特訓でサイドンへと進化したポケモン。超強力なパワーでどんな大岩をも砕く。

タイプ——じめん・いわ

性別——♂

特性——ひらいしん

1、つのドリル

2、じしん

3、いわなだれ

4、なみのり

15、ストライク

タマムシシティを出た森でゲットしたポケモン。クールな性格でその両腕の鋭い力マはどんな堅い物でも切り裂く。

タイプ——むし・ひこう

性別——♂

特性——むしのしらせ

1、きりさく

2、かまいたち

3、れんぞくぎり

4、かげぶんしん

16、エレブー

発電所でゲットしたポケモン。強力な電撃で攻撃しゲットする時もだいぶ苦戦した。



少々乱暴なところもあるが……根は優しく仲間を気遣う事も出来る。

タイプ——でんき

性別——♂

特性——せいでんき

1、かみなりパンチ

2、かみなり

3、ひかりのかべ

4、10まんポルト

17、ギヤラドス

ヤマブキシティを出た所にある川で釣り上げたコイキングがシロガネ山の特訓でギヤラドスへと進化したポケモン。ギヤラドスへと進化した時は凶暴になり言う事を聞いてくれるまでに時間が掛かったが、今ではちゃんと言う事を聞いてくれるようになった。

タイプ——みず・ひこう

性別——♂

特性——いかく

1、りゆうのいかり

- 2、はかいこうせん
- 3、ハイドロポンプ
- 4、かえんほうしゃ

18、ブーバー

グレン島の火山近くでゲットしたポケモン。強力なほのおタイプの攻撃でゲットする時少し苦労した。

タイプ——ほのお

性別——♂

特性——ほのおのからだ

- 1、かえんほうしゃ
  - 2、ほのおのパンチ
  - 3、だいもんじ
  - 4、あやしいひかり
- 19、モンジャラ

タマムシシテイ近くの森でゲットしたポケモン。まだまだ修行中。何を考えているのか分からない無表情だが力が強い。

タイプ——くさ

性別——♂

特性——リーフガード

1、つるのムチ

2、しびれごな

3、たたきつける

4、ねむりごな

20、ドガース

ヤマブキシティの路地裏のゴミ捨て場近くでゲットしたポケモン。ぼけっつとして  
いる。

タイプ——どく

性別——♂

特性——ふゆう

1、スモッグ

2、たいあたり

3、えんまく

4、ヘドロこうげき

21、カラカラ↓ガラガラ

シオンタウンにあるポケモンの霊園近くでゲットしたポケモン。まだまだ修行中だが少しずつ骨棒の扱いが上手くなってきている。

特訓でガラガラへと進化を果たし、骨棒の扱う技術も向上している。

タイプ——じめん

性別——♂

特性——いしあたま

1、ホネこんぼう

2、ずつき

3、ホネブーメラン

4、いかり

22、ビリリダマ

発電所近くでゲットしたポケモン。すぐ自爆しようとするのでゲットするのに少し苦労した。機嫌が悪くなると直ぐに「じばく」しようとする困った癖がある。

タイプ——でんき

特性——せいでんき

1、じばく

2、たいあたり

3、ソニックブーム

4、いやなおと

23、クラブ

クチバシティより少し先の海辺の街の海岸でゲットしたポケモン。はさみの力は強力でバトルするのが好き。

タイプ——みず

性別——♂

特性——シエルアーマー

1、はさむ

2、バブルこうせん

3、ふみつけ

4、にらみつける

24、スリーパー

サファリゾーンに行った時にゲットしたポケモン。 “ざいみんじゅつ” を使おうと  
してくるので見ないようにしてゲットした。

タイプ——エスパー

性別——♂

特性——ふみん

- 1、さいみんじゆつ
- 2、かなしばり
- 3、サイコネシス
- 4、ゆめくい
- 25、ジユゴン

ふたご島の近くでゲットしたポケモン。レベルも高くゲットするのにだいぶ苦労した。こおりタイプの強力な技を持つ。

タイプ——みず・こおり

性別——♂

特性——うるおいボディ

- 1、オーロラビーム
- 2、れいとうビーム
- 3、ずつき
- 4、こごえるかぜ
- 26、メノクラゲ

クチバシテイの近くの街の海岸で大量発生していたのをゲットした。

タイプ——みず・どく

性別——♂

特性——クリアボディ

1、どくばり

2、ちようおんぱ

3、まきつく

4、バブルこうせん

27、ウツドン

ニビシティ近くでゲットしたマダツボミが特訓でウツドンに進化した。ひょうきな性格。

タイプ——くさ・どく

性別——♂

特性——ようりよくそ

1、はっぱカッター

2、せいちよう

3、どくのこな

4、つるのムチ

## 28、ガーディ

グレンタウンの火山近くで出会った。勇敢な性格でシユンのポケモンとバトルした時も怯むことなく攻撃してきた。ゲットしたばかりの頃はあまりシユンの言うことを聞かなかつたが、特訓やバトル——他のポケモンのシユンの評価を聞いてシユンを主人と認めて今では忠実にシユンの指示を聞いてくれる。

タイプ——ほのお

性別——♂

特性——いかく

1、かえんほうしゃ

2、かみつく

3、ほえる

4、ひのこ

29、ディグダ

ニビシテイ近くのディグダの穴でゲットしたポケモン。地面を素早く潜るのでゲットするのに少し苦労した。

タイプ——じめん

性別——♂



特性——すながくれ

1、あなをほる

2、じしん

3、マグニチュード

4、いわなだれ

30、コンパン

セキクチシティ近くの森でゲットしたポケモン。夜寝ている時にいきなり出てきたのでシユン達は驚いてしまい、コンパンもビックリしてしまい襲いかかってきたのでゲットした。

タイプ——むし・どく

性別——♂

特性——ふくがん

1、ちようおんば

2、ねんりき

3、どくのこな

4、みやぶる

31、パラセクト

セキクチシティ近くの森でゲットした Paras が特訓で Parasect に進化した。状態異常による戦法が得意。

タイプ——むし・くさ

性別——♂

特性——ほうし

1、キノコのほうし

2、きりさく

3、ギガドレイン

4、あなをほる

3 2、ズバット↓ゴルバット

おつきみ山の洞窟でゲットしたポケモン。

シロガネ山での特訓でゴルバットへと進化した。

タイプ——どく・ひこう

性別——♂

特性——せいしんりよく

1、ちょうおんば

2、つばさでうつ

3、きゆうけつ

4、エアカッター

33、ライチュウ

発電所の中でゲットしたポケモン。強力な電気攻撃でだいぶ苦戦したがゲットすることが出来た。トキワの森でピカチュウをゲット出来ずにいたのでゲットしたいとは思っていたが、まさかライチュウに出会えるとは思っていなかった。

タイプ——でんき

性別——♂

特性——せいでんき

1、10まんボルト

2、かみなり

3、あなをほる

4、かげぶんしん

34、オニドリル

マサラタウン近くの森でゲットしたオニスズメが特訓でオニドリルに進化した。鋭い攻撃が得意。

タイプ——ノーマル・ひこう

性別——♂

特性——するどいめ

1、みだれづき

2、ドリルくちばし

3、かげぶんしん

4、はかいこうせん

35、ケンタロス

サファリゾーンでゲットしたポケモン。物凄い突進力でどんな物でも突き飛ばす。

タイプ——ノーマル

性別——♂

特性——いかく

1、すてみタツクル

2、じしん

3、つのでつく

4、とつしん

36、ピジョン

マサラタウン近くの草原でゲットしたポケモン。通常ピジョンは群れで行動してい

るがこのピジョンは群れを作らずに一匹で行動していた——どうやらあちこち旅する風来坊の一匹狼気質らしくゲットしようとした時も何回もしぶとく立ち上がってきて少し苦戦した。

タイプ——ノーマル・ひこう

性別——♂

特性——するどいめ

1、でんこうせっか

2、つばさでうつ

3、ふきとばし

4、かぜおこし

37、サウムラー

イワヤマトンネル付近でゲットしたポケモン。

シユンが修行でイワヤマトンネル付近を訪れた時にこのサウムラーを見かけ、イワヤマトンネルの奥に入っているのを見て気になり隠れて着いていくと奥にあるイワヤマトンネルのフロアにある巨大な岩に向けてキックをして特訓しているのだった。

そしてしばらく見ているとサウムラーに気配を感じづかれてあわゆく戦いになろうとした時にメロエッタの説得で自分達が敵でない事を説明し何とか納得してもらい、今度

はサワムラーの事を聞いてみた——するとサワムラーは以外にも自分について律儀に説明してくれた。

自分は前はある道場の師範のトレーナーのポケモンでそこでトレーナーと共に特訓し強さを極めていたのだが……いつしか道場に門下生が増えて道場の経営が鰻登りになり、何もせずとも講習料や門下生の派遣などで儲かるようになり師範のトレーナーは毎日のトレーニングも止めてしまい自堕落な生活を送る有り様になってしまったという。

サワムラーは何度もトレーナーの目を覚まそうと説得するも全く聞き入れずにサワムラーは等々そのトレーナーを見限りボールを壊しそのトレーナーの元を去った。その後は何をして良いのかも分からずに以来この場所で毎日修行をしているのだという。

サワムラーの話しを聞いたシユンは良かったら自分達と来ないかと誘うシユン。サワムラーの修行しているところを見てサワムラーの強さを感じこんなところでくすぶっているのは勿体ないと感じて自分と一緒に強くなろうとサワムラーを真っ直ぐ見て告げる。

サワムラーはしばらくシユンをじっと見た後にサワムラーは自分とバトルして勝てたらシユンに着いていくとメロエッタに通訳してもらい、シユンはゴリーキーでサワムラーへと挑み激しい攻防のバトルの末に見事サワムラーを倒した……負けたサワム

ラーはゆっくり立ち上がるとサワムラーはシユンとポケモンの強さと絆の深さを認めてシユンに着いていく事を決めてシユンの『一緒に来てくれるかい?』と言って差し出した手を握り、にこやかな表情で頷くのであった——メロエッタ達もサワムラーの加入を歓迎しサワムラーはシユンのポケモンとなりシユンと一緒にどこまでも強くなる事を誓うのであった。

タイプ——かくとう

性別——♂

特性——じゆうなん

1、とびひざげり

2、まわしげり

3、いわなだれ

4、メガトンキック

38、イワーク

マサラタウンから近い岩山、みはらし山でゲットしたポケモン。みはらし山の大きいワークの噂を聞いてゲットしに訪れた。通常のイワークよりもだいぶ大きく、その体の大きさから繰り出されるパワーにゲットするのに苦労した。

タイプ——いわ・じめん

性別——♂

特性——いしあたま

1、たいあたり

2、しめつける

3、かたくなる

4、いわおとし

39、ヒトデマン

クチバシティの近海でゲットしたポケモン。フライゴンで飛んで移動していた時に縄張りに入ったからか襲いかかって来たのを倒しゲットした。無表情でゲットしたばかりの頃は表情を読み取れず何を考えているか分からなかったが——最近、少し分かるようになってきた。

嬉しい時は真ん中の水晶を光らせている。

タイプ——みず

特性——しぜんかいふく

1、みずでっぼう

2、じこさいせい

3、こうそくスピン



4、バブルこうせん

40、カモネギ

セキクチシティの先にある森でゲットした。

タイプ——ノーマル・ひこう

性別——♂

特性——まけんき

1、いあいぎり

2、みやぶる

3、かぜおこし

4、でんこうせっか

41、ドードリオ

サファリゾーンでゲットしたドードーが進化したポケモン。

最初は シュンを警戒していたが一緒にいる内に少しずつ慣れてきてくれて今ではとても懐いてくれた。やがてドードリオへと進化して今ではシュンを背中に乗せて走るのが大好きになった。しかし シュンがドードリオを誉めたりする時に、一番シュンに誉められたいからと3つの頭同士で時々喧嘩をしてしまうのが玉に傷。

タイプ——ノーマル・ひこう

性別——♂

特性——はやおき

- 1、トライアタック
- 2、ドリルくちばし
- 3、こうそくいどう
- 4、はかいこうせん

『シロガネ山で特訓を開始してから色々な場所を巡りその途中でゲットしたポケモン』  
 (現在はオーキド研究所で預けている)

#### 42、ヤドン↓ヤドラン

アオプルコというリゾートの外れの岩場でゲットした……シユン達がたまたまシロガネ山に向かう途中に休憩に寄った島で休んでいた時に岩場で滑り、その拍子にバックからボールが落ちて岩場で寝そべっていたヤドンに当たりゲットしてしまった。

ポケモンリーグセキエイ大会で第一回戦の水のフィールドでのバトル——最初のバトルに勝利しその勢いに乗るようにヤドランへと進化した(番外編、初めてのポケモンリーグ編)

シロガネ山での特訓でヤドランへと進化した(本編の設定)

タイプ——みず・エスパー

性別——♂

特性——どんかん

1、みずでつぼう

2、ねんりき

3、メガトンパンチ

4、はかいこうせん

43、アズマオウ

シロガネ山の湖でゲットしたポケモン。シロガネ山に生息していた事もありゲットするのになんか苦労した。色彩が美しい。

タイプ——みず

性別——♂

特性——すいすい

1、みだれづき

2、つのドリル

3、ハイドロポンプ

4、たきのぼり

## 44、ゴルダック

シロガネ山での特訓中に湖でゲットしたポケモン。シロガネ山に生息していた事もありレベルは高い。クールな性格。

タイプ——みず

性別——♂

特性——ノーてんき

1、はかいこうせん

2、サイコネシス

3、ハイドロポンプ

4、みだれひっかき

45、ラフレシア

シロガネ山で見つけたポケモン。野生のラフレシアは珍しいためシユンは迷わずゲットすることを決めた。以外に強く苦戦した。

タイプ——くさ・どく

性別——♀

特性——ようりよくそ

1、にほんばれ

- 2、ソーラービーム
- 3、はなびらのまい
- 4、しびれごな

46、エビワラー

買い物からシロガネ山に帰る途中の荒野に居るのを見つけてゲットしたポケモン。  
素早いパンチが得意。

タイプ——かくとう

性別——♂

特性——てつのこぶし

- 1、ほのおのパンチ
- 2、かみなりパンチ
- 3、れいとうパンチ
- 4、メガトンパンチ
- 47、ルージュラ

ふたご島の洞窟の地下にある氷の道でゲットしたポケモン。怪しげなリズムで間合  
いを取るのが難しく強力な氷攻撃でだいぶ苦戦した。あの悪夢の技で一度フーデイン  
をノックアウトした程の強さ……リザードンのほのお技で何とかゲット出来た。

タイプ——こおり・エスパー

性別——♀

特性——よちむ

- 1、れいとうパンチ
- 2、あくまのキッス
- 3、サイコキネシス
- 4、れいとうビーム
- 48、ガルーラ

イワヤマトンネルを抜けた先の草原でゲットしたポケモン。警戒心がとても強く近づきただけでもだいぶ苦戦した——何しろ群れで行動しているため1匹に感じられると群れ全体に気づかれてしまうためである。最終的にスリーパーの”さいみんじゅつ”で眠らせてその中の1体をゲットした。

前に一度 特訓でシロガネ山を下りてトレーナーとのバトルで一度ガルーラでバトルをした時に思いもよらぬトラブルが起きた。そのバトルを見ていた周囲の人達の中にポケモン保護官の職員が居たのである。現在カントーでは貴重なポケモンのガラーラは一時期絶滅の恐れがあったが保護されてその個体数を増やしていた……そして現在はサファリゾーン周辺やポケモン保護区に生息しており勿論、ゲットは禁止されてる

ためガルーラを持つてるトレーナーはカントーでは殆ど居ない。

そのため、シユンがバトルでガルーラを出したのを見て保護区で違法にゲットしたのか密両者から買い取ったのかと思ひジュンサーに通報されて大騒ぎとなつてしまった。

そして取り調べを受けるシユンはあのガルーラをどうやってゲットしたのか白状するように言う——シユンはジュンサーや保護官の剣幕にも怯まずに冷静にイワヤマトネルを抜けた先の草原でゲットしたと説明し、ジュンサー達は裏付けのためにシユンのガルーラを詳しく調べる……ポケモン保護区に生息しているガルーラには個体識別や健康チェックのために腕に居場所も分かるメモリの入ったリングがはめており、シユンのガルーラにはリングがない事から保護区に生息するガルーラではないと思うが無理矢理力づくで壊されたり外された可能性があると考えられたがそれはないと結論づけた——。

なぜならそのリングは特殊な合金で出来ており軽くとても丈夫でどんなに強力なポケモンの技でも壊せない程の耐久力がある（伝説のポケモンの技は例外かもしれないが流星に試せない）そのためリングの着いてなかったシユンのガルーラは保護区に生息していたポケモンではない可能性が大きくなつたため改めてシユンにガルーラをゲットした場所について詳しく訪ねイワヤマトネルを抜けた草原に一番近い保護施設の職員に調査をお願いした。

その間シユンにはしつかりとした部屋で待つてもらおう事数日：調査をしていた職員から連絡がきた……草原でガルーラの群れを発見したという驚きの報告だった。

この草原のガルーラは人間の保護を受けていないにも関わらず100頭近くも生息していた。早速調査（あくまで野生の状態に自分達が干渉しないように）を始めると言う事で保護官の人はシユンに誤解してしまつた事を謝罪すると急いでその草原へと向かつた。

こうしてシユンの誤解は解けて無事にガルーラもシユンが持つていて良いことになつた。

シユンのガルーラは健康で懐いているため問題ないと判断されたのである。

ちなみにシユンのガルーラがバトルをする時はお腹の袋の中に居る子供はシユンと一緒に居て、ガルーラもトレーナーのシユンを心から信頼しているので大事な子供を安心して預ける事が出来るのである。

タイプ——ノーマル

性別——♀

特性——きもつたま

1、ピヨピヨパンチ

2、メガトンパンチ



3、すてみタックル

4、じしん

49、ブースター

シロガネ山での修業中に日常品が足りなくなり、買い出しに行つた帰りに休憩がてら川で釣りをしていた時に、何と色違いの金色のコイキングを釣り上げてしまいシユン達が驚いているとそこに釣り名人のおじさんが通りかかつて、シユンが釣つた色違いのコイキングはこの辺りで有名な主のコイキングだと教えてくれた。

その人は長年その主のコイキングを追い求めていたらしく自分のポケモン”ブースターと交換してほしいと言う事でシユンは既にギヤラドスも持っていて珍しいブースターと交換してくれると言うので快く応じて交換した。

交換したばかりの頃は中々馴れずにいたが一緒に日々を過ごす内に少しずつ馴れてきて今では深く絆を結んで息ピッタリにバトル出来るようになっていた。

タイプ——ほのお

性別——♂

特性——もらいび

1、かえんほうしゃ

2、ほのおのうず

3、でんこうせつか

4、スピードスター

50、サンダース

とある廃棄された発電所の近くで出会い、野生のサンダースは珍しいため迷わずゲツトした。後でサンダースに詳しい話しを聞くとどうやらイーブイだった頃に悪い人間達の所で酷い扱いを受けて耐えきれなくなり、ある日 隙を見つけて逃げ出してこの廃棄された発電所へと辿り着いたようでそこを住み処にして日々を過ごしていた。ある日に倉庫のような場所に置いてあった雷の石に触れてサンダースへと進化した（どうやらここを廃棄する時に職員が持ち忘れた物らしい）。

悪い人間達に酷い事をされていたためにゲツトした当初はシュンを警戒していたが、日々を過ごす内に少しずつシュンを受け入れてくれるようになった。

今ではシュンの指示をしつかりと聞く程に懐いている。

タイプ——でんき

性別——♂

特性——ちくでん

1、10まんボルト

2、ミサイルぱり

3、にどげり

4、こうそくいどう

51、シャワーズ

ある日、シユンがシロガネ山の湖の湖畔でみずポケモン達と一緒に修業していると、そこでお腹を空かして倒れているシャワーズを見つける。

シユンはシャワーズにお弁当や木の実をあげるとシャワーズは喜んで美味しくそうに食べ始めた。シユンはシャワーズに美味しい？と聞くとシャワーズは嬉しそうに笑顔で頷く。

そしてシユン達は修業の続きを始め、気がつくとは切りは暗くなり日が沈み始めている事に気づいたシユンはポケモン達をボールに戻すとシャワーズに別れを言つてシロガネ山の拠点へと引き上げる。

シユン達が拠点に向かって歩いていっていると後ろからシャワーズが着いてきている事に気づく。

シユンはシャワーズへと向き直り何で着いてきているのか聞くと（メロエツタの通訳を挟んで理由を聞いた）——自分がお腹が空いていた時に美味しいご飯をくれた優しいシユンを気に入って、そしてポケモン達と仲良く楽しそうに修業をしているのを見て自分もあの中に入りたいと思いついてきたという。話しを聞いたシユンは笑顔でシャワー

ズと一緒に来るかいと聞くとシャワーズは笑顔で頷き、シユンはシャワーズをゲットした。

甘えん坊な性格で、バトル以外の時は殆どシユンにすり寄っている。

タイプ——みず

性別——♀

特性——ちよすい

1、ハイドロポンプ

2、れいとうビーム

3、あなをほる

4、かげぶんしん

52、バタフリー「色違い（ピンク）」

トキワの森でゲットした色違いのキヤタピーがシロガネ山での特訓で一気にバタフリーへと進化した。

通常のバタフリーの色違いとは違いさらに色違いである超珍しいバタフリーで、何億分の確率で生まれてきた特殊なバタフリーであり、シユンは迷わずにキヤタピーの色違いの色違い（ピンク）をゲットした。

タイプ——むし・ひこう

性別——♀

特性——ふくがん

1、サイケこうせん

2、しびれごな

3、かぜおこし

4、かげぶんしん

53、スパアー（色違い）

トキワの森でゲットしたビードル（色違い）がシロガネ山での特訓で一気にスパアー（色違い）へと進化した。両手の鋭い針から繰り出される攻撃は強力でとても素早い。

このスパアー（色違い）はビードル（色違い）の時、色違い（ピンク）のキャタピーと一緒に居て仲良くしていた——最初見つけた時、色違いのビードルとキャタピーが一緒に居た時はシユンは物凄く驚いた。色違いのポケモンを一体見つけるだけでも奇跡に近いのにそれが2体一緒に居たのは何億分の確立のためシユンはこの幸運に感謝して2体をゲットした。

そしてゲットした後で一緒に居た理由を聞くと何とお互いに両想いであり、種族を越えた愛に最初聞いたシユン達は驚いてしまったが、2匹の仲の良い様子を見て微笑んでしまう。

それはスピアーとバタフリーに進化した今でも変わらず仲良しを越えて愛し合っている。

この前も休憩中に野生の♂のバタフリーがバタフリー（ピンク）に見惚れてちよつつかいにかけてきたが、激怒したスピアー（色違い）によってボロボロにされて撃退された。

タイプ——むし・どく

性別——♂

特性——むしのしらせ

1、ダブルニードル

2、こうそくいどう

3、ミサイクルぼり

4、ヘドロぼくだん

5 4、メタモン

シロガネ山の修行中に街での買い物から戻る途中の草原で休憩していた時にいつの間にか近くに居たポケモン。理由を訪ねると、シユン達が楽しくしている様子を見て思わず出てきてしまったと言う事であり、シユンはそんなメタモンを誘い、みんなと一緒におよつの時間を楽しんだ。そして休憩も終わり戻ろうとした時にメタモンが自分につきり寄って来る様子を見てシユンはもしかしてと思い、一緒に来るかい？と誘うとメタ

モンは笑顔で頷いてシユンのポケモンになるのであった——メタモンは特殊なポケモンのためシユンはメタモンでのバトルの構成を考えているので、まだまだ修行中。

タイプ——ノーマル

特性——じゆうなん

1、へんしん

55、カメール

トレナーと戦う特訓のために来た港町で出会った。トレナーに捨てられたゼニガメをシユンはゼニガメを捨てたトレナーに怒り、ゼニガメと一緒にそいつを見返そうとシユンについて行くことを決めた。今は強くなるために特訓中。

ジョウト地方での旅でカメールへと進化する。現在はオーキド研究所で待機中。

タイプ——みず

性別——♂

特性——げきりゆう

1、みずでつぼう

2、れいとうビーム

3、ロケットずつき

4、ハイドロポンプ

## 『番外編でゲットしたポケモン』

## 1、ファイヤー

シロガネ山で特訓をしていたシユン達の前に現れた伝説の鳥ポケモン。

シユンはその美しさと気高さに目を奪われて、ファイヤーにバトルを挑む。エレブー、サイドンとシユンの手持ちのポケモン達の中でもレベルの高いポケモン達を瞬く間に続けて倒す程強いファイヤーにシユンはメロエツタとデアアンシーを除いて手持ちの中でも一番の強さのリザードンで挑み一進一退の攻防の激闘の上に追い詰められながらもリザードンの奮闘のお陰でゲットする事に成功する。ゲットしたファイヤーにこれからともに頑張っていくことを誓う。現在はボールに入っている所以他のトレーナーにゲットされる事はないので自由にさせており、ファイヤーに何か危険が起きればメロエツタが念波を感じて助けに行けるようになっていたので安心である。だが強いファイヤーが追い詰められる事態等早々あるはずがないが念には念を入れて何かあればメロエツタに知らせるように伝えてある。

来てほしい時もメロエツタに念波で呼び出してもらえば直ぐに来てもらえるし、あるいはメロエツタがレポートで迎えに行けるのである。

タイプ——ほのお・ひこう



特性——プレツシャー

- 1、かえんほうしや
- 2、つばさでうつつ
- 3、ソーラービーム
- 4、げんしのちから
- 2、ミユウ

ニューアイランド島へと行く途中でいつの間にかボールの中に入っていた。その後もシュンのことが気に入り一緒について来る。

現在はファイヤーと同様に何かあればメロエッタに念波で知らせるように伝えて自由にさせている。シュンが呼べばテレポートで来てくれる。

タイプ——エスパー

特性——シンクロ

- 1、全ての技を使える。
- 3、ミニリュウ（色違い）

シロガネ山での修行中に盗賊団に襲われて傷だらけになっていたところを助けた事でシュンの事を気に入ってシュンに懐く。粒羅な瞳が可愛くシュンに甘えてすり寄ってくる。

タイプ——ドラゴン

性別——♀

特性——だつび

1、まきつく

2、にらみつける

3、りゆうのいぶき

4、

4、ミニリュウ（通常）↓ハクリュー

シロガネ山での修行中に色違いのミニリュウを助けて送る途中に湖で出会い——最初は警戒されていたが次第に信用するようになってくれて、そして盗賊団を倒したシュンの強さに憧れてシュンと一緒に強くなりたいと着いて行く事を決めた。色違いミニリュウの兄。

『ミュウツウの逆襲（バージョン2）』にて——海の見える断崖の上で勝負を挑まれたトレーナーは追い詰められると一対一のバトルなのに卑怯にも3体同時に出してきたのを”ミニリュウが新たに覚えた技”たつまき”で一掃。その勢いでハクリューに進化した。

ハクリューの能力で天候を自在に操る事が出来る。

タイプ——ドラゴン

性別——♂

特性——だっぴ

- 1、まきつく
- 2、たつまき
- 3、りゅうのいぶき
- 4、りゅうのいかり

『シユンがジョウト地方に来てゲットしたポケモン』

1、チコリータ

ワカバタウンに立ち寄った時に出会ったジョウト地方で有名なポケモン研究者のウツギ博士の研究所で出会った。一目見てシユンの事を気に入ったチコリータ（後でメロエッタに通訳してもらい聞いたら一目惚れとの事らしい）。

そしてシユンがウツギ博士と別れてワカバタウンを出発しようとする時チコリータがシユンを追いかけてシユンの胸に飛び付いた。チコリータを追いかけて来たウツギ博士はそれを見てシユンにチコリータを譲ってくれた。甘えん坊でシユンの事が大好き。

タイプ——くき

性別——♀

特性——しんりよく

1、はっぱカッター

2、たいあたり

3、つるのむち

4、あまいかおり

2、レディバ↓レディアン

キキヨウシティに向かう途中の道でゲットしたポケモン。コガネフェスティバルを襲撃したR団達と戦い、R団のヘルガー苦戦しピンチに陥るもシユンの想いに応えてレディアンへと進化を果たし新たに得た姿と力でR団達を倒した。とても素早く飛べる。

タイプ——むし・ひこう

性別——♂

特性——むしのしらせ

1、スピードスター

2、こうそくいどう

3、マツハパンチ

4、れんぞくパンチ

3、ヒノアラシ

ヒワダタウンで向かう途中の森で出会った。自己中心的で卑劣なトレーナーにゲツトされそうになっていたところをシユンが助けてくれた。

自分を助けてくれたシユンに懐いていてシユンと一緒に行く事を決めた。

タイプ——ほのお

性別——♂

特性——もうか

1、かえんほうしゃ

2、スピードスター

3、たいあたり

4、えんまく

4、イトマル↓アリアドス

ヒワダタウン直前の森でゲツトした。旅の途中で縄張りに入ってしまったのかオニスズメの群れに襲われてみんなまで撃退しその戦いでアリアドスへと進化した。

現在はオーキド博士に預けている。

タイプ——むし・どく

性別——♂

特性——ふみん

1、いとをはく

2、どくばり

3、ナイトヘッド

4、みだれひっかき

5、マリル

ヒワダタウンに住むボール職人——ガントツの手伝いで青ぼんぐりを取りに行った森の水辺で出会い、激闘の末にゲットに成功。

最初はシュンを警戒して全く懐く事なく大変だったがシュンの優しさに触れて少しずつ慣れてくれており、いじつぱりだが照れやでシュンに対して反抗的であるがシュンに撫でられたりすると嬉しそうに笑顔ですり寄るが——直ぐにハツとなつてその腕を振り払つてプイツと顔を背けて照れている。

タイプ——みず・？

性別——♀

特性——ちからもち

1、みずでっぼう

2、ころがる

3、れいとうビーム

4、メロメロ

6、ワニノコ

コガネシティに向かう途中にあるサナエさんの経営するウパーの保育園に現れて  
 プールを占拠するワニノコとバトルしゲットした。

以外に手強く、”ドラゴンクロー”と変わった技を使い 力も強く少し苦戦したがチ  
 コリータの活躍でゲットする事が出来た。ゲットした当初——しばらくはシユンや仲  
 間に慣れずにいたが、シユンの強さは認めているのか指示は聞いてくれていて、そして  
 一緒に過ごす内に少しずつシユンやみんなに慣れてきた。

タイプ——みず

性別——♂

特性——げきりゆう

1、みずでっぼう

2、ドラゴンクロー

3、かみつく

4、こわいかお

## 7、アーボ

コガネシティのゲームセンターの景品コーナーで売れ残っていたのをシユンが可哀想に思いアーボを貰う事を決めた。

アーボは自分を貰ってくれた事が嬉しくてシユンにとっても懐いている。

タイプ——どく

性別——♂

特性——だっぴ

1、まきつく

2、にらみつける

3、かみつく

4、どくばり

8、イーブイ

R団に人質にされていた審査員の1人、マサキに助けてくれたお礼に貰ったポケモン。

マサキがこれから研究などで忙しくなりイーブイの面倒を見られない事も多くなつてイーブイが可愛そうだからとシユンにお礼も兼ねてイーブイを託したいと言ってくれた。



とある研究家とのツテで自分の元に来たイーブイであり、ポケモンを大切な家族と  
思っているシュンにイーブイを譲りたいと思ってくれていたのでシュンはありがたく  
その申し出を受けてイーブイを受け取った。イーブイも優しいシュンに懐いている。

現在はオーキド研究所に預けている。

タイプ——ノーマル

性別——♂

特性——てきおうりよく

1、たいあたり

2、すなかけ

3、しつぽをふる

4、でんこうせつか

9、ポケモンのタマゴ

人質になつていた育て屋の夫婦からお礼に貰ったポケモンのタマゴ：まだ孵るには  
時間がかかりそうだ。リュックに大切にしまい手入れは毎日欠かさずしている。

『シュンが今までに出会った人達』

1、オーキド博士

シユンにポケモン図鑑とヒトカゲを託してくれたマサラタウンに住むポケモン教授。シユンの事情を知っている人の一人。

両親に捨てられて落ち込んでいた幼いシユンのことを色々世話してくれた。シユンにとつての恩人。たまに来るシユンからの連絡でカントーのリーグには出場しないことを聞き、ポケモンを育てるためにじっくりと特訓をすると聞いて、シユンから預かっているポケモンを見て強く育てられていることに感心しシユンのポケモン育成の才能に気づく。

## 1、タケシ

ニビシテイのニビジムのジムリーダー、いわタイプの使い手。

シユンが最初に挑戦したジム戦の相手である――。

いわタイプに相性の良いナックラーで挑んだのと…元々シユンのポケモントレーナーとしての才能の高さからか…始めてのジム戦は呆気ない程にあっさりとしユンの勝利で終わった。

## 2、サクラ

ハナダシテイのハナダジムのジムリーダー、美人三姉妹の長女で”みずタイプの使い手。

みずタイプのジムらしくプールに数カ所の陸地だけという特殊なフィールドに少々

戸惑うも……ヒトカゲに冷静に指示し、逆転の”かみなりパンチで勝利した。

### 3、マチス

クチバシテイにあるクチバジムのジムリーダーで強力なでんきタイプの使い手。

シユンがハナダの洞窟での特訓の成果を試そうと挑戦した戦の相手である。

このバトルでシユンとリザードは——メロエツタの特訓の成果を充分に発揮し、マチスと強敵ライチュウを撃破し、バッジを手に入れた。

### 4、ナツメ（ヒロイン）

ヤマブキシテイにあるヤマブキシジムのジムリーダーでエスパークタイプの使い手。

ナツメ自身も強力な超能力者。幼い頃に超能力に目覚め、その特訓にどんどん のめり込んでいく内にそれを邪魔する両親をも追い出した——。それ以来 誰にも負けないう強い心のナツメと、それでいて友達を欲しがらる寂しがりやの幼い心の二人のナツメが生まれた。

しかしシユンがナツメに勝利した事で 初めて負けたシヨックでナツメの心のバランスが崩れ超能力を暴走させてしまう。しかしシユンが体を張ってナツメを優しく抱きしめて止めてナツメの心を癒し、ナツメを救った。

シユンに心を救われたナツメは両親との関係も良くなり、ナツメの父親、人形から元に戻れた母親と一緒に別れの挨拶をしていた時にシユンとまた再会の約束をする。

次にシユンがヤマブキシティに来た時に立派なジムリーダーになっていることを誓う。

自分を救ってくれたシユンにほのかな恋心を抱く。

#### 4、エリカ（ヒロイン）

タمامシシティにあるタمامシジムのジムリーダーで華麗に舞うくさポケモンの使い手。お淑やかで麗しく清楚な女性。和服美人と言う言葉が似合うほど着物がよく似合う。

シユンがチュリネを進化させるための方法を聞くためにジムへと来た時にシユンにジムの仕事を手伝って貰う代わりに「たいようのいし」を譲る。

シユンはエリカにくさポケモンの事について色々と教わりジムの女の子達とも親しくなっていた。シユンはエリカからくさポケモンのことについて教わったシユンの師匠的な存在であり、進化したドレディアの力を試すためのバトルではエリカのドレディアの圧倒的な力に初の敗北を喫したが、エリカはシユンにバッジを受け取るに相応しいトレーナーだとシユンにレインボーバッジを渡す。目的を果たしてタمامシジムを出発した時にフシギダネを譲り渡した。そして、シユンとの別れの時に再会の約束をする。シユンが尊敬する女性。

#### 5、ウツギ博士

ジョウトリーグ挑戦の登録のために立ち寄ったワカバタウンでポケモンの主に進化に対する研究で有名な博士。オーキド博士に頼まれてシユンのポケモン図鑑をバージョンアツプさせてくれた。そしてチコリータと古くなったポケギアを譲ってくれた。

自分の尊敬するポケモン研究者のオーキド博士からシユンの事を色々聞いており、数日前に新人トレーナーとして送り出した彼らと出会いお互いに成長しあう事を期待している。

## 6、マリナ

シユンがジョウト地方の最初のジムのある街——キキョウシティを目指している途中で出会った元気いっぱいの少女。野生のプリンをゲットしようとするが返り討ちにあい困っていたところをシユンが助けた事で知り合う。

ウツギ博士から初めてのポケモンをもらいワカバタウンを旅立った3人の内の1人でウツギ博士からワニノコを譲り受けた。

将来の夢は歌って踊れるアイドルトレーナーになることでジョウト地方最強のチャンピオン『ワタル』の彼女になること。

マリナは夢を話す時にテンションが高くなるので始めて聞く人はその様子に少々驚いてしまう。2人の幼馴染みがいて同じ日にポケモンを貰いワカバタウンから別々の道を旅立った。

シユンのアドバースのおかげでプリンもゲット出来た。そしてシユンに再会を約束してポケギアの番号を交換した後に近くのポケモンセンターへと向かった。

## 7、ハヤト

ジョウト地方最初のジムであるキキョウシティのキキョウジムのジムリーダー。

華麗なるとりポケモン使い。ひこうタイプ独特のすばやさにも苦戦しながらもリザードン達の活躍で見事、ウイングバッジをゲットした。

## 8、ジーク

野生のリザードン達の保護区であるリザフィックバレーの管理者を勤める女性。

キキョウジムを勝ち抜いたトレーナーがリザードンを持つていると聞いて楽しみに通るであろう道で待ち構えていた。結果は期待を通り越して予想外であり、シユンのリザードンは見た目とリザフィックバレーの中でも上位に位置するリザードンを難なく倒しただけでなくリザフィックバレーのボスのリザードンにも勝ってしまったためである。

そしてジークは立ち去ろうとするシユンにリザードンを自分に預けてくれないかと頼み込んだ、ボスが倒されたためシユンのリザードンがリザフィックバレーの新しいボスになってしまったからである。

そしてシユンのリザードンを預けてからこれまでシユンのリザードンは次々とボス

の座を奪い取ろうとする♂のリザードン達を退けている（別にシユンのリザードンはボスの座にそれほど執着していないが負けず嫌いのため受けた勝負に全力で挑んでいる）そして強いボスのシユンのリザードンはリザフィックバレー中の♀のリザードンにモテモテであり回りには常にリザフィックバレーの中でも強く美しい♀のリザードンの3体が愛し合うように寄り添っている。その3体の♀のリザードン以外の♀のリザードン達も強いボスのシユンのリザードンに夢中であり、チャンスがあれば積極的に寄り添ってくる。

ちなみにジークの♀のリザードン——リサちゃんは余り強すぎるリザードンは好まないらしく他の♀のリザードン達と違い尊敬はしてるが寄り添ったりはしないようである。

そして先日、そんなシユンのリザードンと♀のリザードン達の近くにタマゴのような物が転がっていたとかいないとか……。

## 9、ツクシ

ジョウト地方2番目のジムであるヒワダジムのジムリーダーで歩く”むしポケモン大百科の異名を持つ。むしタイプの持つ力を充分に引き出したバトルにシユン達は大いに苦戦した。

## 10、ガントツ&チエ

ヒワダタウン近辺に住んでる有名なボール職人の老人とその孫の女の子。ボールを作つて貰おうと来たシユンに青ぼんぐりを取つて来てくれればボールを作つてくれると言つてシユンはその頼み事を快く引き受けてくれて見事に青ぼんぐりを持つてきてくれたので今時出来た若者であるシユンを気に入り快く自慢の腕をふるいお礼のボールを作つてくれた。

有名なボールの職人でそのボールの性能は凄くてボール作りの依頼が常に絶えない。

11、サナエ（準ヒロイン）

コガネシティに向けて旅をしている途中にあるピンク色の屋根の建物でみんなのウパー達の面倒を見ているウパーの保育園を営む女性。

サナエのウパーが保育園を抜け出して道を歩いていて足を滑らせて高い丘から落ちてしまうところを助けて怪我をさせたシユンを優しく手当てしてくれた。

そしてシユンとサナエがウパー達の事について話していると電話が掛かつてきて隣街に住む母が転んで腰を痛めてしまったという緊急の連絡だった。

サナエの母は病院嫌いなため平気なフリをして無茶していかないかと心配だがウパー達をほつとく訳にもいかず、かといつて近所に見に行つてくれる人もいないため自分が行くしかなくサナエが困っていたので自分がウパー達の面倒を見ることを提案するシユン。



サナエは悪いとは思いつつも他に頼める人もいないのでシユンにお願いしてウパー達の面倒の見方のメモを渡した後にすぐ戻ってくるからとバイクに乗って母の元へと向かった。

そしてシユンはウパー達の世話をして途中で現れた野生のワニノコを撃退したあとにサナエが帰ってきた。サナエの母の容体を聞いた後にワニノコの事を説明しワニノコがまた来るのを待っている時に自分の旅の目標や最終的な目的、そして身の上話を語った。

ウパー達を自分の子供のように大切に想うサナエに自分は感じ触れた事のない親の愛情や温もりを感じてそんな愛情を受けているウパー達がつい羨ましく想いそんな個人的な話しをしてしまったとサナエに謝る。

しかしサナエはそんなシユンを優しく抱きしめてくれた……サナエに抱き寄せられたシユンはとても温かく心が安らぐようであった。

シユンに母親の温もりとはこういうものを感じさせてくれた二人目の優しい女性である。

## 12、ミキ（準ヒロイン）

コガネシテイに向かう途中で休んでいた時に現れたエアームドをゲットしようとした時に邪魔をした女性。理由を訪ねると自分も前にエアームドに出会い、その勇猛果敢

に翼を羽ばたかせ飛ぶ姿に虜になりゲットしようとして一度失敗してしまい再挑戦しようとして後日エアームドを探していたところにシユンがゲットしようとしている場面に  
出くわして思わず邪魔をしてしまったと言うことである。

その理由に少々呆れながらもこれも何かの縁だとミキのエアームドをゲットを手伝う事を決めてそしてシユンの手助けもあり見事エアームドをゲットに成功。  
そしてシユンにエアームドを鍛えて再会の約束をして別れるのであった。

### 13、アカネ（ヒロイン）

コガネシティにあるコガネジムのジムリーダーでノーマルタイプの使い手。

異名はダイナマイトプリティギャル。

活発でポケモンに優しい元気がっぱいの少女。天真爛漫で極度の方向音痴。

迷子になっていたピツピを届けた事で知り合い、その後コガネフェスティバルを襲撃してきたR団と共に戦い、アカネはシユンに何度もピンチを救われその勇敢に立ち向かうシユンの勇姿とポケモンを想う優しさに少しづつ心惹かれていく。

そして後日、色々とお世話になったからとコガネシティの町案内をかねてのデートへと誘いコガネシティを2人で回った。

その時にシユンとデート前にジムに勤める女の子や女性達に色々と言われてしまい只のお礼のデートのつもりだったのに妙に意識してしまうのであった。

そしてシユンとデートしている内にその優しさと笑顔に段々と気になり心惹かれていき恋心を抱くようになっていた。

そしてジム戦が終わりシユンと別れる前にその想いを伝えるのであった。

返事はシユンがまたコガネシティに訪れた時で良いと言つて旅立つシユンを溢れそうになる涙を堪えて見送つた。シユンが去つた直後——ジムに勤めるお姉さんの胸を借りて大泣きしてしまうのであった。本来泣き虫の彼女が良く我慢した方だとお姉さんも思つていた。

『番外編で出会つた人達とポケモン』

## 1、ミュウツー

人間によつて生み出されたポケモン。自分を勝手に生み出した人間達に復讐を誓う。優秀なトレーナーのポケモン達のコピーを作るために最強のポケモントレーナーという肩書きを利用してトレーナー達をニューアイランド島に誘き出す。

シユンもその招待状をもらつてニューアイランド島で幼馴染みのサトシと再会した。そして最終的にシユンのボールから自分の元になったポケモンのミュウが現れて本物対コピーの最終戦争が始まつた。

サトシがその戦いを止めるためにミュウとミュウツーの技の間に飛び込み2つの技

が直撃しその相乗効果で石になってしまった……。ピカチュウはサトシを起こそうと電撃で攻撃するがサトシは全く反応もなくもう駄目だと思つたその時……。奇跡が起きた。悲しむ本物とコピーのポケモン達の涙が集まり、シユンがハーモニカで綺麗な旋律を奏でる中、朝日がサトシを照らしサトシが目を覚ました。その現状を見ていたミュウツーは憎しみの心が浄化されてみんな（シユン達以外）のここでの記憶を消すとコピー達の安住の地を求め旅立っていった。

そしてシユンはカントー地方でのポケモンの特訓をしていよいよジョウト地方へと旅立つ。

ジョウトリーグへ挑戦するために夢へと向けて！シユンのジョウト地方での冒険が始まる。

歌姫と宝石の姫く冒険の始まりく

## 第一話 旅立ち!はじまる冒険!!

マサラタウンに住む少年 シュンは旅に出る一週間前に久しぶりに会ってお互いに大切な存在になっていた事に気づいたシュン、メロエッタ、ディアンシー。

そしてメロエッタとディアンシーは…シュンと一緒に旅に着いていく事を自ら望み、シュンのモンスターボールへと入り 共に行く事を決めるのだった。

シュンが来週マサラタウンを旅立つ事を告げて、メロエッタとディアンシーがシュンの旅に着いてきてくれると言ってくれた日から一週間――。

メロエッタとディアンシーがシュンのポケモンになってくれた日から二人はシュンと一緒に家へと帰り、旅立ちの日まで一緒に生活していた。旅立ちの日までシュンと二人は楽しい生活を満喫していた。

そしてマサラタウンを旅立つ日が翌日に迫るとシュンは旅立つための準備をしつかりと済ませる。寝袋やテントに寝具、調理道具、食器、日常生活に必要な物や着替えの服や靴、帽子、ポケモンについての本や野生の木の实や野草の図鑑、レトルト食品やポケモンフーズ、傘、懐中電灯、折り畳み釣竿、水筒、バケツなどを大きなポストリユッ



シユンはドードリオの鳴き声と、窓から入る朝日で目を覚まし 朝になった事に気づいてゆつくりと起き上がり、背を伸ばして体をほぐしながら…片隅に置いてある時計を見ると、オーキド博士と会う約束をしていた時間よりも時間があり、ゆつくり身だしなみなどの準備をしても充分に余裕がある。

「うん。これならゆつくり準備してもオーキド博士と約束した時間に間に合う」

シユンは時計を見て時間に余裕がある事を確認すると 2人を起こさないようにベッドから出て前日から準備していた旅のための荷物を見て 入れ忘れてる物は無いか、足りない物は無いかなどの確認を始めた。そしてシユンが旅の荷物を確認している――。

「ううん…ふわあゝゝ。おはようございますマスター（眠）」

「ふわあゝゝ…（眠）よく寝ましたわ…マスター、おはようございます…」

すると…メロエッタとディアンシーの2人も眠そうにしながらもゆつくりと起き上がって背伸びとあくびをしながら目を覚まし…ベッドから起き上がり、旅の荷物の確認をしているシユンの元へと飛んで来る。

「おはよう！メロエッタ、ディアンシー。ゴメンね。起こしちゃった？」

シユンは起きて来たメロエッタとディアンシーに「おはよう」と挨拶し、起こしてしまった事を謝る。

「いえ…ちようど今日を覚ましたところですよ。マスターが起こしたわけではありませんわ…」

「そうです。朝になったので起きたんです。今日はマスターの旅立ちの日、早く起きるのに越したことはありません」

「ディアンシーとメロエツタは自然に目を覚ましたのだと言って、シユンに大丈夫だと言う。」

「そっか！ところで一週間前から二人の事について色々教えてもらって…改めて聞くけど、ディアンシーってダイアナ国って国のお姫様だったんでしょう？」

シユンは一週間前から一緒に生活し、メロエツタとディアンシーの事について色々教えてもらったシユン。ディアンシーが一国のお姫様だったことをディアンシーが教えてくれたのだ。

「はい、その通りですよ。本来ならわたくしは国を守らなければならぬ立場ですよ。」

ですがわたくしは国にいた時から…この広い世界を見ることを夢見ていましたの…。その一心からダイアナ国を妹に任せ、一人旅に出たのです。

旅の途中に悪い人間達に襲われているところをメロエツタに助けてもらって以来、一緒に旅をしているのですよ。その途中であの場所に立ちよってマスターと出会ったのですわ。」



「ディアンシーは『ダイアナ国』という国のお姫様だったが——どこまでも広がる広大な外の世界を見る事を夢見ていた——。その一心から自分には国のためにある使命があつたが……王国を妹に任せて、こつそりと一人 国を飛び出して外の世界に旅に出たところを……悪い人間に襲われてしまい、その時にメロエツタと出会い、助けてもらい、その日から一緒に旅をしているのだとシユンに教えてくれた。

「ディアンシーが一国のお姫様だつた事にも驚いたし、妹がいた事にも驚いたよ。でもやっぱりダイアナ国のみんなは一人旅にでたディアンシーを心配してるんじゃないの?」

シユンはディアンシーから身の上の話しを始めて聞いた時は……ディアンシーが一国のお姫様だつたことや、妹がいることに驚いたが……気になったのは一人旅に出たディアンシーの事を心配しているんじゃないかなとディアンシーに再度言う。

「そうですね……わたくしが旅に出ることは妹にしか伝えていませんで、やはり皆は……わたくしのことを心配しているでしょう……ですがわたくしはそれでもこの広い世界が見てみたかつたのです……」

自分が旅に出ることを妹にしか伝えていなかった……その妹も自分が旅に出る事を伝えた時は驚いて、姉と会えなくなるのは悲しいのと姉がいなくなつたら自分はどうすれば良いのかという不安で涙を流してひき止めようとするのをようやく説得した事

で国を出てきたのだ……。皆に伝える余裕もなかったため黙って出てきてしまったので、皆が心配していることを知りつつも……ディアンシーはこの広い世界を見てみたかったのだと言う。

「そしたらいつかディアンシーの仲間に行こう！みんなにキミが旅をしてした体験や見た景色を教えてあげようよ。きつと喜ぶよ！」

シユンは国の者達に心配させてしまっている事を申し訳なさそうに俯いているディアンシーに、旅での体験や見た景色の事を教えてあげれば……きつと喜ぶと言っていつか会いに行こうとディアンシーに約束する。

「フフツ、そうですね。いつかみんなに会いに戻りますわ。マスターありがとうございます」

ディアンシーは自分の事を励ましてくれたシユンにお礼を言い、シユンとディアンシーの国に一緒に行く事を約束する。

「うん、それで……メロエツタはどこかの島の人達と一緒に暮らしてたんだよね。どうして島の人達と別れたの？」

ディアンシーからの礼に頷いて、次はメロエツタから聞いた話で気になった事を教えてもらおうと尋ねる……。メロエツタはある島で一緒に人間と共に暮らしていたが……今は島の人間達とない理由を聞いておらず……何故島の人間達のもとから去ったのか

と――。

「…それは愚かにも太古の昔……島の人間達がわたし達の強大な力を利用してようと大きな争いを起こしたからです。

わたしはそんな愚かな人間達に裁きを下し、島の人間を文明ごと滅ぼしました。

わたしはそのまま妹と共に島を去ろうとしましたが…妹は島の人間達を信じたいと言つて島に残りました。島の人間達も二度と過ちを起こさないと言いましたが、わたしは到底信じる事が出来ず、妹を残しそのまま島から去りました。そうして長い時を旅し、その途中でディアンシーと出会い、旅の途中であの場所に立ち寄り、マスターであるシユン…あなたと出会つたんです（ニコッ）」

メロエツタは太古にとある地方の島に妹と一緒に住んでいたが…島の人間達が愚かにも自分達の強大な力を利用してしようと醜い争いを起こしたために…メロエツタは島の人間達を国や文明ごと滅ぼし、あんな事があつたのにまだ島の人間達の事を信じようとする妹に呆れ、島の人間達のもう過ちは犯さないとという言葉も到底信じられず…妹を残して島から去り、世界を旅する途中でディアンシーと出会い、そしてあの場所でマスターとなつたシユンと出会つたのだと微笑む。

「そうだったんだ………だけどぼくはメロエツタのことをそんな風には絶対にしないよ!

メロエツタもディアンシーも僕の大切な家族だからね!」

シュンはメロエッタの話しを聞いて自分は絶対にその島の人間達のようににはしないと誓って、メロエッタとディアンシーのことを大切な家族だと言う。

「フフツ、嬉しいですわ。マスター♪」

「わたし達にとつてもあなたは大切なマスターです♪」

シュンのその言葉を聞いてメロエッタとディアンシーは嬉しくて笑顔で微笑み、自分達にとつても大切なマスターだと言ってシュンの両隣に近づく。

「マスター／＼／＼！大好きです（わ）♪」

そしてほのかに顔を赤く染めながらシュンに愛おしそうにすり寄る。

「うん、ありがとう二人とも♪ぼくも大好きだよ！」

シュンも自分を好きと言ってくれる二人に嬉しくなり二人を抱き寄せて、ぼくも二人が大好きだと言って強く抱きしめる。

そうやって互いに愛情を深めあっていると……。

「おっと、そろそろオーキド博士との約束の時間だ！二人とも、一端ボールに戻って」  
部屋の時計を見ると……オーキド博士との約束の時間が近づいている事に気づいて二人に一度ボールに戻るようお願いする。

メロエッタとディアンシーというポケモンはシュンも聞いた事なく……メロエッタ達からも自分達の事を知られると面倒な事になるから黙っているようお願いされたの

でオーキド博士や町の人達にバレると大変だからとボールに入るように言う。

「大丈夫ですマスター。わたしの力で他の者からは…姿の見えないようにするので心配ありません。マスターの肩に乗らせていただきます。わたしの力で浮かせますので重さは感じないので疲れませんよ」

「そうですね。わたくし達はボールに入っているのはあまりなれていませんので…」

シユンはオーキド博士の研究所へと行くので、二人に一度ボールに入るようをお願いすると、メロエツタは自身の力で他の者には姿の見えないようにするから大丈夫だと言つてシユンの肩に乗ると言う。重さはメロエツタの力で浮かせるから大丈夫だと説明する。ディアンシーは手揚げの大きなバックに入るようだ。

そうしてメロエツタとディアンシーを透明の膜のようなオーラが包む。

「(これで大丈夫ですわ)」

「(わたし達の姿はマスター以外には見えません。それに声もマスターにししか聞こえませんが) せんで安心して下さい)」

「すごいね…これなら安心だ。それじゃ行くこうか二人とも」

シユンはこれなら安心だと思い、旅のために必要な物の詰まった大きなリュックを背負い、手揚げ鞆を肩に掛け、ウエストバッグを腰に巻いて、旅立ちの日のために用意していた服。

ホワイトのバスکشヤツの上から黄色のスウェットパーカーを羽織り、ライトブルー×グリーンのデザインデニムを履いて、オレンジのグローブ、ブラックのハイソックスを履く。

黒とオレンジのスポーツキャップ、新品のイエローのカジュアルスニーカーを履く。

そしてシユンは部屋に置いてある大きな鏡の前で自分の着こなしをチェックする。

「どこか可笑しなところはなかなかな？」

「(似合っていますわマスター♪)」

「(ええ、良くお似合いですどこも可笑しいところなどありませんよ)」

オーキド博士との約束の時間に近づいているのでシユンは出発する準備を全て済ませて最後に身だしなみや着こなしをチェックしてディアンシーもメロエツタも似合っていると言ってくれた。

「ありがとう二人とも！」

シユンは二人にお礼を言うと、全ての旅の用意が完了したので玄関から家を出て鍵を閉めると……家を感じ深そうに見つめる。

幼い頃に……両親と一緒に過ごした家……あの時は両親の愛を受けて毎日が幸せだった。両親がいなくなってしまうからもお世話になった家を出て旅に出る。

「……………いつてきます……」

そして今日までお世話になった家にこれから旅に出る家に一時の別れを告げる…。いつかまた帰って来ることを心の中で約束する。そのシユンの想いを肩に乗るメロエッタとバツグの中にいるデイアンシーは理解したのか何も言わず静かに見つめていた。

そしてシユン達はオーキド博士の研究所へと向かう。まだ朝も早いのかすれ違う人もおらず…。いつものマサラタウンの風景を見ながらオーキド博士の研究所へと歩いて行く。

家からオーキド博士の研究所はそこまで離れていないため数分歩くと研究所が見えて来た。

「あつ、オーキド博士の研究所が見えてきた」

川に掛かる橋を渡り、小高い山の上にあるピンクの屋根の建物『オーキド研究所』が見えてくる。シユンは研究所への階段を上がり、入口の前に立つ。

「ここが入口か…。すいませくん。オーキド博士、いらつしやいますかあ!」

シユンはオーキド博士の研究所の入り口へと来ると、オーキド博士の家のドアをノックしてオーキド博士を呼ぶ。

「…誰じゃね…。こんな朝早くから騒がしいのお…」

シユンがノックしてから数秒後にドアが開いてオーキド博士がシユンの前に出て来

る。

「あの……今日初めてのポケモンとポケモン図鑑を貰って旅に出るシユンです。」

オーキド博士：「ポケモンと図鑑をいただきにきました…」

シユンはオーキド博士に自分が今日オーキド博士から初めてのポケモンとポケモン図鑑を貰って旅立つ事になっているシユンだと伝え、ポケモンと図鑑を貰いに来たと話す。

「おおっ！シユンくんか。待っていたよ…まだ時間より少し早いがよく来てくれたのう」

「はい、ぼくの初めてのポケモンに早く会いたくて…思わず早く来ちゃいました…」

「うむ…その気持ちは分かるぞ。誰もが初めてのポケモンを貰う時はワクワクするものじゃ！遅刻するよりはずっと良いわい、歓心！歓心！さあ、入りなさい！」

オーキド博士は朝早く訪ねて来たのが…今日ポケモンと図鑑を貰って旅立つ事になっているシユンだと気づくと、まだ約束の時間より早いがよく来たと優しく迎えてくれて、シユンも初めてのポケモンに早く会いたくて思わず早く来てしまったと言うと、オーキド博士もその気持ちは分かる笑顔で頷き、遅刻するよりはずっと良いと誉めてシユンに中に入るように言う。

オーキド博士に家の中に招かれると……そこにはオーキド博士の孫であり、シユンの



もう一人の幼なじみであるシゲルが3つのモンスターボールが置いてある台の前にいた。

「おや…シユンじゃないか。キミもおじい様からポケモンと図鑑を貰いに来たのかい?」

そこにはシゲルがいてシユンが来たことに気づいてシユンに声をかける…幼馴染みである二人は今日…互いに旅に出る日である事を知っており、自分と一緒に約束の時間よりも早く来たシユンに確認するように尋ねる。

「シゲル…キミも来てたんだ。やっぱり初めてのポケモンだから早く会いたいよね」  
シユンはシゲルも来ていたことに気づき、初めてのポケモンだから早く会いたいよねと同意を得るように尋ねる。

「まあね…僕の最初のパートナーとなるポケモンだからね。おじい様からポケモンを貰って僕の素晴らしい旅が始まるのさ!」

シゲルは自分の初めてのパートナーとなるポケモンを貰って、自分の素晴らしい旅がスタートするとシユンに自信満々に告げる。

「ハハツ…相変わらずだねシゲルは…。それにしてもやっぱりサトシは来てないか。サトシ、今日を楽しみにしてたから遅刻せずに来ると思ってたけど…」

シユンはシゲルのその様子に相変わらずだねと苦笑し、そしてサトシがまだ来ていな

いことに気づく。シユンはサトシが始めてのポケモンを貰えるこの日を楽しみにしており、遅刻もせずに早く来ると思っていたが…約束の時間を過ぎて来る様子がない。

「ああ…サトシは相変わらずのようだよ…。まさかこんな大切な日にまで遅刻するとはね。昔からそういうところ変わってないようだね…成長してないと言うかなんというか——」

シゲルとシユンが約束の時間を過ぎて来る気配のないサトシに呆れた様子で話している…昔からサトシが大切な日に寝坊したり、遅刻したりする事が多いのは分かっていたが…まさかこんな大切な日に遅刻するとは思わなかったと二人して呆れてタメ息をつく。

「二人ともそろそろ良いかのう。通勤電車もポケモンも一秒の遅れが人生を変える…。時間通りここにいない者は自己責任じゃ！」

オーキド博士は話している二人にそろそろ良いかと話しを中断させ、ここにいない者の事で話している二人に約束の時間にこの場にいなければ自己責任だと厳しい言葉を告げる。

オーキド博士の言葉にシユンとシゲルは話しを止めてオーキド博士の話しを真剣に聞く。

「二人とも…ここに3つのモンスターボールがある。中には3匹のポケモンが入ってお

る。

この中から自分のパートナーとなるポケモンを1体選ぶのじゃ!一番左にあるボールの中には”くさタイプ”のポケモンであるフシギダネ。真ん中にあるボールの中には”ほのおタイプ”のヒトカゲ。一番右のこのボールの中に”みずタイプ”であるゼニガメ。カントー地方で初めて貰えるポケモンがこの3匹なのじゃ……さあ 選びなさい」

オーキド博士は3つのモンスターボールの置いてある台の前まで来て、モンスターボールに入っている3体のポケモンについて説明し、カントー地方で初めて貰えるポケモンだと丁寧に説明してこの中から選ぶように言う。

「シゲル。先に選んで良いよ。ぼくはその後に選ぶから」

シユンはシゲルに先に選んで良いと言って後ろに下がる。

「そうかい?それじゃあ お言葉に甘えて選ばせてもらうよ。と言っても僕が選ぶポケモンは初めから決めていたんだけどね!僕が選ぶのはこのポケモン、ゼニガメさ!」

シゲルはそう言って一番右にある”みずタイプ”のポケモン ゼニガメの入ったモンスターボールをその手に取る。

「シゲルはゼニガメにするんだ……それじゃあ残ってるのはくさタイプのフシギダネとほのおタイプのヒトカゲか……どっちにしようかな?」

シユンはシゲルがゼニガメを選んだのを見て、後に残った二体 フシギダネとヒトカ

ゲのどちらにしようかなと迷ってしまふ。

「よし！決めた。ぼくが選ぶのはこっちだ！」

シユンはそう言つて、真ん中にあるヒトカゲの入ったモンスターボールを手に取る。

「ぼくはヒトカゲに決めたよ！」

シユンは3体の中でのほのおタイプのポケモン、ヒトカゲを選んだ。

「へえ！…シユンはほのおタイプのヒトカゲに決めたのか…」

「二人とも。初めてのパートナーになるポケモンを決めたようじゃのう！そうしたら二人にこのポケモン図鑑を渡そう。お前達の旅の記録となるポケモンのデータを収集していくのじゃよ」

オーキド博士はシユンとシゲルが初めてのポケモンを決めたのを確認し、二人に二つのポケモン図鑑を渡してポケモン図鑑についての説明をする。

「さあ…これで渡す物は全て渡した。お主達はポケモン図鑑とポケモンと共に旅をして色々な事を経験し、そしてまだまだポケモンについて謎に包まれていることが多い！お前達が旅をしてそれを見つけ、解き明かしてくれる事を期待しておるぞ！」

「はい!!」

シユンとシゲルはオーキド博士の自分達に期待してくれるその言葉に力強い返事を返す。

「うむーその様子なら心配ないじゃろう。さあ、お前達の旅の始まりじゃ。頑張るんじゃぞ」

オーキド博士は二人の力強い返事に満足そうに頷き、その様子なら心配ないと安心して、今日旅立つ予定の後二人の新米トレーナーを待ったために奥へと入っていった。

「さてと…こうして初めてのポケモンと図鑑を貰ったからいつでも出発出来るわけだけど…シゲルはどうする?」

シユンはオーキド博士から初めてのポケモンと図鑑を貰ったから…いつでも出発できると思い、シゲルにどうするのかと尋ねる。

「僕は寝過ぎして慌てて走って来るだろうサ…トシくんを見たいから…サトシが来るまで待ってるよ!!」

「…相変わらずだね…シゲルとサトシは…。悪いけど、ぼくは一足早く旅に出ることにするよ。貰ったヒトカゲとも仲良くなりたいたし、サトシやみんなと会って…しめっばい空気になるのも嫌だしね。サトシやみんなによろしく伝えといてくれる?シゲル」

シユンはシゲルとサトシの相変わらずの様子に呆れながら…悪いが自分はシゲルやサトシよりも先に旅に出ることを決める。

オーキド博士から貰ったヒトカゲとも仲良くなりたいたのと、みんなと別れの挨拶をし、しめっばい空気になるのも苦手なので、シゲルに先に旅に出ることを伝えて、サトシ

やみんなによろしくと伝えてほしいとお願いし：研究所から出て階段を下りながら門へと向かう。

まだオーキド博士と約束した時間になってから少ししか経過していなかったの：まだ見送りに来てくれる人などはいなかった。

「ああ、わかつたよ。シユン！僕もサクトシくんやマサラタウンの人々やガールフレンド達に挨拶するからその時にシユンは一足早く旅立った事を伝えてあげるよ！」

「ありがとうシゲル！」

「シユン……これから僕達はライバルだ!!今度会った時はバトルしよう！」

「うん！ぼくもシゲルとバトルしたい！」

シゲルがシユンの頼みを了承してくれたのでお礼を言う。そしてシゲルとシユンはお互いをライバルだと認め、次に再会した時はバトルする事を約束し、堅く握手を交わす。

「それじゃ ぼくは行くよ。またね、シゲル！」

「ああ、またな シユン!!」

シユンはシゲルに別れを告げると……マサラタウンを出発した。

これから自分が体験するであろう冒険にワクワクと期待しながら：マサラタウンから出て、先ずは近くの森を目指すのだった。

## 第二話 決意する夢!初めてのゲットと挑戦!

オーキド博士からポケモン図鑑と初めてのポケモンであるヒトカゲを貰ったシユンは……マサラタウンを出発し、まずは町から少し離れた森を目指し、ヒトカゲに自分の事を紹介し、仲良くなるために……互いに自己紹介するために今、森の中にいる。

「よし……この辺りで良いかな?ここなら誰も来ないだろうし……」

「良いのではないでしょうか。ここなら人も来ないと思います」

「わたくし、新しいお仲間さんに会えるのが楽しみですわ♪」

シユンは……マサラタウンから少し離れた森の中に入ると、人が立ち入ら無さそうな森の奥の方に来て、ヒトカゲをボールから出すために手にボールを持つ。

メロエツタもこの場所なら他の人も来ないと思い、ディアンシーは新しく仲間になったヒトカゲに会えるのを楽しみにしていた。

今は周りにシユンしかいないのでメロエツタもディアンシーも姿を消していない。

「よし!それじゃあ出てきて、ヒトカゲ!」

「カゲ……!」

シユンがモンスターボールを投げるとボールからヒトカゲが元気よく飛び出してく

る。

「カゲ？」

出てきたヒトカゲはボールから出て見知らぬ場所が目に入り、ここはどこだと思いいりを見回している。

「これがヒトカゲ……よし、ポケモン図鑑を使ってみよう！」

シユンは出てきたヒトカゲを見て、オーキド博士から貰ったポケモン図鑑を使ってみようと思いい、ヒトカゲに向かってポケモン図鑑を向けると……ヒトカゲのデータが表示される。

「ヒトカゲ——とかげポケモン。生まれた時から尻尾の先に炎が灯っていて、その炎が消えると死ぬと言われている——」

ポケモン図鑑からヒトカゲについての説明が流れる。

「なるほど……ポケモンの方に向けると自動でそのポケモンのデータが表示されるのか」

シユンはポケモン図鑑の使い方について学んでいると——。

「カゲ……」

ヒトカゲが自分をボールから出したと思われる人間……シユンの方に顔を向けて、どうすれば良いのか分からないので……対応してほしいといった様子で待っている。



「あつーごめんねヒトカゲ…。キミのことほつといて、ぼくの名前はシユン。今日からキミのトレーナーになったんだ。よろしくね!」

シユンはヒトカゲを放置していた事を謝り、今日から自分がヒトカゲのトレーナーになったのだと教えて自己紹介する。

「カゲ?カゲカゲ〜♪」

ヒトカゲは一瞬言われたことがわからなかったが…言われた意味を理解したのか、ヒトカゲは喜ぶ。実はこのヒトカゲはまだオーキド研究所にいる時に自分達じゃない…ヒトカゲ、ゼニガメ、フシギダネが新米トレーナー達に貰われて行くのを奥で見ている…そのポケモンと 新米トレーナーの様子を見つめて、ヒトカゲはいつか自分もそんなトレーナーと一緒に旅に出ることを夢見ていたのだ。

そして今日、モンスターボールから出てきて自分のトレーナーだと紹介されたシユンを見て、今日やっと自分の夢が叶うことを大喜びではしゃいでいる。

シユンを見て、優しそうなトレーナーだと思いい安心していた。

「ヒトカゲ…ぼくがトレーナーで良いかい?」

「カゲ!」

シユンはヒトカゲに自分がトレーナーで良いかと確認し、ヒトカゲも笑顔でシユンに頷く。

「うん、ありがとうヒトカゲ。それじゃ後二人、ぼくの家族を紹介するね。こつちがメロエツタ！それにディアンシーだよ！」

シユンはヒトカゲが自分をトレーナーと認めてくれた事が嬉しくて笑顔になり、お礼を言う、そして後ろにいるメロエツタとディアンシーをヒトカゲに紹介する。

「はじめまして！わたくしはディアンシー。これからよろしくお願いしますね♪」

「わたしはメロエツタ。あなたも一緒にマスターのために頑張りますよ。よろしくお願いします」

ディアンシーとメロエツタはヒトカゲに自己紹介をして、これからよろしくと挨拶し、ヒトカゲは見覚えのない存在で綺麗な二人に呆然としてしまう。

「カゲ……カゲ！カゲコ〜♪」

ヒトカゲは少し呆然としていたが……仲良くしてくれる二人に嬉しくなり、自分も二人に自己紹介をする。

「さてと……これでお互いの自己紹介も終わったね。そうだ！せっかくだし、二人のこともポケモン図鑑で見よう！」

シユンはみんなが自己紹介を済ませたのを見て、せっかくだからメロエツタとディアンシーのこともポケモン図鑑で調べてみようかとポケモン図鑑をメロエツタに向ける。

「データ無し——。この世界にはまだ知られざるポケモンが多い——」

メロエツタにポケモン図鑑を向けても該当データが見つからずデータ無しと表示される。

「あれ?データ無し:それじゃあディアンシーは?」

シユンは:メロエツタをポケモン図鑑で調べようとしたが:該当データが見つからず、データ無しと表示されたので不思議に思い、今度はディアンシーにポケモン図鑑を向けてみる。

「データ無し——。この世界にはまだ知られざるポケモンが多い——」

しかし、結果は同じでディアンシーも該当データが見つからずに:ポケモン図鑑はデータは無しと表示される。

「メロエツタもディアンシーもデータが無いつて出たよ。どういうことかな?」

シユンはポケモン図鑑に二人のデータが表示されないことを不思議に思い、どういふことなのかと?マークが浮かぶ。

「さあ?わたし達はまだ見つかっていないということではないのでしょうか?」

メロエツタもはつきりとは分からず:曖昧な返事をする。

「そうなの?まあいいか。それでヒトカゲへの挨拶も終わったけど:これからどうしようかな?」

シユンはヒトカゲへの自己紹介や挨拶も終わり、これからどうしようかと考えてい

る。

「それでしたらマスター。ポケモントレーナーとして、何を目指すにしても先ずは自分のポケモンを育てて強くすること。そしてポケモンをゲットして手持ちのポケモンを増やすこと が重要だとこのトレーナービジュアルガイドブックに書いてあります」

メロエツタがこれからどうしようと考えているシユンに：「トレーナーの心得などが書いてあるビジュアルガイドブックを見せる：その本はシユンが旅に役立たせるために持ってきた本の一冊で、そこにトレーナーとして、何を目指すにしても：ポケモンを育てる事とポケモンをゲットして手持ちを増やすことが重要だと説明する。」

「なるほど……：そうしたらとりあえず、この辺りのポケモンをゲットしようかな？ 行こうみんな！」

シユンはメロエツタが説明してくれたトレーナーとしての大切な事について納得し、先ずは手持ちを増やそうとこの辺りのポケモンをゲットするために、移動を開始する。

「はい」

「わかりましたわ」

「カゲー！」

メロエツタ達も頷いて：メロエツタはシユンの肩に乗り、ディアンシーは大きな手提げ袋に入り、入ったのを確認してシユンが手提げ袋を肩にかける。

ヒトカゲはシユンの隣を歩き、シユン達がポケモンをゲットしようとして探していると――

…ボコツ……。

「ん?」

シユンが歩いている地面の先が盛り上がり……何かが地面から這い出て来る。

「ナツク……」

そこには小さい薄茶色の体をした四足のポケモンがシユン達の前に姿を現した……しかし、心なしか元気がないように見える。

「このポケモンは?」

「このポケモンはナツクラーですね。しかしおかしいですね?ナツクラーはこの地方には生息していないはずですが……」

シユンは突然出てきたポケモンを不思議そうに見つめて、メロエツタはそのポケモンの名前を教えてください、ポケモンの名前はナツクラー、だがナツクラーはカントー地方には生息していないはずだと疑問に思う。

「このポケモンはナツクラーって言うんだ。通りで図鑑にも表示されないわけだね……」

シユンはナツクラーをポケモン図鑑で調べてみたが……【データ無し――】。別地方のポケモンの可能性あり――と表示された。オーキド博士から貰ったこのポケモン図鑑

はカントーのポケモンしか認識しないようだ。

「でも、この地方には生息してないナツクラーがどうしてここにいるの?」

シユンはナツクラーが別の地方のポケモンだと分かると、どうしてカントー地方に生息していないはずのナツクラーがここにいるのかと不思議に思う。

「聞いてみましょうか。もしもし、どうしてあなたはこんなところにいるのですか?」

メロエツタはゆっくり飛んでナツクラーに近づいて、どうしてここにいるのかを訪ねる。

「ナツク……ナツクナツク……」

ナツクラーはメロエツタに聞かれて、弱々しい鳴き声で話し出す。

「ふむふむ……なるほどなるほど……そう言うことでしたか……」

メロエツタはナツクラーから一通りの話を聞いて、ナツクラーがここにいる原因が分かり納得する。

「それで……いったいどういうことでしたの?」

「カゲカゲ?」

「ディアンシーとヒトカゲはナツクラーがどうしてカントー地方にいるのか……その理由をナツクラーから聞いたメロエツタに尋ねると……メロエツタはみんなに説明する。」

「つまりですね……このナツクラーはハウエン地方の町から近い砂漠地帯に住んでいた

らしいのですが……たまたま休憩か何かで止まっていたトラックから食べ物匂いがしたので、食べ物目当てで中に入ってしまった、そのまま荷物と一緒に港まで運ばれて、荷台ごと一緒にカントー行き船の船に運ばれて来たらしいのです。カントーの港について慌てて逃げ出したらしいのですが……ここがどこかも分からず迷ってしまった……空腹になりながらもなんとかここまで来たらしいです……」

メロエツタはナックラーから聞いたカントー地方にいる原因をそのままシユン達に説明する。

「なるほど……食べ物目当てで乗り込んで、出れなくなっちゃって……荷物と一緒に船でカントーまで来ちゃったのか」

「……ナック……」

ナックラーはお腹が空きすぎて限界なのか……力なくふにやりと地面にお腹をつける。

「お腹が空いてるんだ。ポケモンフーズならあるけど食べる?」

シユンはナックラーがお腹が空きすぎて動けない事に気づいて、ナックラーの前にポケモンフーズを持って近づく。

「ナク……ナック!ナック……♪」

ナックラーは匂いを嗅いでポケモンフーズに気づいて、空腹に我慢の限界だったのか勢いよく食べ始める……そして美味しかったのか笑顔を浮かべる

「ナツクナツクウ〜!!」

「もつとほしいの? はい、どうぞ!」

ナツクラーはあつという間に食べ終わり、もつと欲しいと言うようにシユンの方に顔を向けて、シユンはポケモンフーズを出してまたナツクラーの前に置く。

「ナツクナツクウ〜♪」

ナツクラーは大喜びで再びポケモンフーズにかじりつく。

「そんなにお腹が空いてたんだね……美味しいかいナツクラー」

「ナツク〜♪」

シユンはナツクラーの良い食べっぷりに驚き、余程お腹が空いていたんだなと思いナツクラーに美味しい? と聞くと ナツクラーは笑顔で頷く。

「そっか、良かった♪」

ナツクラーが大喜びで美味しそうにポケモンフーズを食べているナツクラーを見て笑顔になるシユン。

「でも……どうしますのマスター? この地方に他にナツクラーいませんし、ほっておくわけにはいきませんわ」

ディアンシーはカントー地方に他にナツクラーはいないため……このナツクラーが一匹で生きていけるか分からず……ほっておくわけにはいかないとシユンに言う。



「そうだね……ほっておくわけにはいかないよね……」

シユンはディアンシーの言う通り、このままではナツクラーがカントー地方で生きていける保証もなく危険なので……ほっておく訳にはいかないと……ナツクラーの前にしゃがみこむ。

「ねえナツクラー。カントーにはキミ以外のナツクラーは一匹もいないんだ。ここではキミは一匹では生きていくのは難しいかもしれない……」

「……ナツクウ……」

シユンがナツクラーの前に屈んで、カントーではナツクラーは生息しておらず……ナツクラーは一匹で生きていくのは難しいだろうと言うと……ナツクラーはこれからの自分を思い浮かべて不安な想いが募り、しょんぼりとした様子で下を向く。

「だからナツクラー……。もし良かったら……ぼく達と一緒に来ない?」

シユンはナツクラーがこのままでカントーで生きていけないかもしれないという危機感と、ナツクラーを助けたいという思い、良かったら一緒に来ないと誘う。

「ナツク!?……ナツクウ……ナツクウ……」

ナツクラーは親切に助けてもらったシユンに自分と一緒に来ないかと誘われて、自分を助けたいという強い気持ちも感じて嬉しくなり、ナツクラーは涙目になってシユンに抱き着く。

「ありがとうナツクラー。これからよろしくね」

「ナツク！」

シユンはナツクラーが自分と一緒に来てくれる事を受け入れてくれた事に喜び、ナツクラーにこれからよろしくね！と言ってボールを出すと…ナツクラーは自らモンスターボールにタッチしてボールへと入る。

「よし！ナツクラーゲットだね」

「初めてのポケモンのゲットおめでとうございます！マスター♪」

「良かったですね。マスター」

「カゲカゲ♪」

シユンがナツクラーをゲットし、仲間にしたのを見て、メロエツタ達も一緒に喜んでくれる。

「うん。ありがとうみんな。それじゃあ出てきてナツクラー！」

「ナツク〜！」

シユンがモンスターボールを投げると、ナツクラーが元気よく飛び出してくる。

「これからよろしくねナツクラー！」

「ナツク！」

シユンはナツクラーにこれからよろしくねと言うと、ナツクラーも笑顔で頷く。

「みんなもナツクラーと仲良くしてあげてね」

シユンはメロエツタ達にのナツクラーと仲良くしてあげるようにお願いする。

「もちろん、よろしくお願いしますね」

「仲良くしましょうね♪」

「カゲカゲ!」

メロエツタはもちろんと頷いて、デイアンシーは笑顔で仲良くしましょうねと微笑み、ヒトカゲはよろしくと挨拶する。

「ナツク〜〜!」

ナツクラーもメロエツタ達に自分のことを紹介し、これからのよろしくと挨拶する。

シユンは……新たにナツクラーを仲間にした日から数日。

シユンは旅をしながらも……トレーナーとして何をを目指すのかを考えていた――。

自分は何を目指すのか……ポケモン達と何をしたいのかを考える……幼馴染みのサトシやシゲルと同じで……ジム巡りをしてバッジを集めて、ポケモンリーグに挑戦しようかどうかどうしようかなと考えながら歩き、特にトラブルに会うことなくトキワシティに到着した。

そこでポケモンセンターに向かおうとした時に、交番にいたジュンサーさんに呼び止められる。最近、この辺りでポケモン泥棒が横行しており警戒中のため……身分証明書を

見せてほしいのだとお願いされる。シユンは一通りポケモン図鑑の操作方法の説明を聞いており、図鑑のボタンを押して、音声が出る。

「この図鑑がシユンの物である証明と、シユンがマサラタウン出身のトレーナーである」事を証明してくれる音声が出て、特に問題もない事が分かったので町に入る事を許可される……最近、この町でポケモン泥棒が出没しているので注意するようにだけ言われて、ジュンサーさんに送り出された。

そしてポケモンセンターに到着したシユンは、まずポケモンの回復をジョーイさんにお願ひする……ヒトカゲとナツクラーをジョーイさんとラッキーに預ける。ナツクラーを預けた時にジョーイさんに珍しいわねと言われた。

ナツクラーはカントーに生息していないので珍しいが……他の地方のポケモンがポケモンセンターに預けられて治療をお願ひされること事態は珍しくない。特に問題もなく預かってもらいたい治療をお願ひした。

その間にシユンは……電話をかける……何回かのコール音の後にガチャと相手に通じる。

「もしもし、どなたかね？」

「オーキド博士、こんばんわ！」

電話の相手先はオーキド博士、既に日も沈んで暗くなり初めていた……。シユンはオー

キド博士にヒトカゲを貰って、順調に進んでその日にトキワシティに到着出来た事を知らせる。

「おお、シユンくんか!そこはトキワシティかの?ポケモンを貰ったその日にトキワシティに到着するとはもう…今日 マサラタウンを旅立った四人のトレーナーの中ではダントツで一番じゃぞ!」

「そうなんですか?」

電話がシユンからである事に気づくとオーキド博士は、電話がトキワシティから掛かっている事が分かり、初めてのポケモンをもらったその日にトキワシティに到着した事に感心する。今日、マサラタウンを旅立った四人のトレーナーの中ではダントツで一番らしい。

「うむ、マサラタウンから一人でも優秀なトレーナーが旅に出るのは良いことじゃ!ワシも応援しておるぞ!」

「ありがとうございます!」

「じゃが伝言だけで、みんなに挨拶もせずに旅立ったのは感心せんぞ!」

「…:…すいません…:湿っぽい空気になるのが苦手なので…:シゲルにお願いして…:」

「キミが昔からそういう事が苦手なのは知っておるが…:サトシのママさんや、皆さんも何も言わずに行ってしまったキミの事を心配しておったぞ。落ち着いたら連絡するの

「じゃぞ」

「…はい、わかりました…」

「うむ、分かればよろしい！それでどうじゃ？ポケモンは何体捕まえたのかな？」

「まだ…一匹しか捕まえていません…」

「な、なんじゃと！」

「オーキド博士にもらったヒトカゲと仲良くなったりしてたので…」

「なるほどのう…自分のポケモンと仲良くなろうとするのは良いことじゃが…ポケモンのゲットのことも考えてほしいのう。シゲルは既に数匹ポケモンをゲットしておるぞ」

「シゲルも頑張ってるな…ぼくも頑張らなくちゃ！」

「うむ、シゲル同様にキミには期待しておる。頑張るんじゃぞ！」

「はい！」

「それじゃまたの連絡を待っておるぞ。ではの！」

そう言つてオーキド博士が電話を切ると画面が消える。

「あつ！サトシが間に合ったのか…聞くのを忘れたな…」

シユンがオーキド博士に聞こうと思つていた事を忘れた事に気づいていると――。

『テンテンテテ〜ン』

そしてオーキド博士との通話が終わった丁度良いタイミングでポケモンの回復が終わった事を知らせる音が鳴る。

「お待たせしました。あなたのポケモンは元気になりましたよ」

「ラッキー」

「ありがとうございます」

シユンは受付でジョーイさんからヒトカゲとナツクラの入ったモンスターボールを受け取る。

そしてシユンはポケモンの回復を済ませると…ポケモンセンターを出て次の町に向かう。

ポケモンセンターに止まることも考えたが…なんとなく先を急ぎたくなったのだ…それは人が多いところが苦手なためか…、それともシゲルやサトシのように明確な目標がないことへの焦りゆえか…。シユンはジョーイさんのもう遅いので泊まっていた方が良くという気遣いに感謝しながらもやんわりと断ってポケモンセンターを後にした。

トキワシティにも一応ジムがあるが…そのジムは閉まっており、しかもトキワジムのジムリーダーはカントー最強のジムリーダーなので今のシユンでは勝負にならないと思ひ、やっていたとして挑戦をしようとは思わなかった。

そしてトキワシティを出て次の町——ニビシティを目指して歩いているとその途中に広がる森：通称『トキワの森』の入口に差し掛かった。

もう辺りはすっかり暗いので森に入るのは危険なのでその日は森から少し離れた場所ので寝袋に入って朝まで就寝するのだった。

そして夜が明けて明るくなるとシユンは起きて、寝袋を片付けてトキワの森に入る。トキワシティに生息する野生のポケモン達とヒトカゲで戦いながらレベルを上げて進んでいると、甲冑を着た侍の格好の少年に声を掛けられた。

どうやらポケモンバトルの挑戦らしく：シユンは初めてのトレーナーとのバトルに緊張しながらも挑戦を受ける。使用ポケモンは一對一の勝負でポケモンバトルが始まる。

シユンのポケモンはヒトカゲ、侍少年のポケモンはカイロス、むしタイプのポケモンの中でも強力なパワーのあるポケモンだ。ほのおタイプのヒトカゲとは相性が良いが油断は禁物。

そしてバトルが始まる……早速、カイロスは頭の角で挟もうと迫ってくる。シユンはヒトカゲに距離を取るよう指示する。

ポケモン図鑑で見たヒトカゲの使える技は——ひっかく、なきごえ、ひのこ、きりさく——であり、この技を上手く活用しバトルをしなければならぬ。



侍少年はカイロスに たいあたりを指示、シユンはヒトカゲに交わして ひっかくを指示し、ヒトカゲはカイロスの たいあたりを交差するように交わして、ひっかくで攻撃する。

カイロスはダメージで顔を歪ませ侍少年は焦る……シユンはヒトカゲに ひのこを指示し、ヒトカゲはカイロスに ひのこを放ち、効果抜群の ほのお技が直撃し、戦闘不能になる。

初めてのポケモンバトルはシユンの勝利で終わり、シユンは自分達の勝利を喜び頑張ってくれたヒトカゲを誉める、侍少年はカイロスをボールに戻し自身の敗北を認め、拙者の完敗だと言ってシユンの勝利を称えてくれる。シユンも侍少年とのバトルを良いバトルだったと言ってお互いに握手を交じわし、またバトルする事を約束して別れた。

その後は別段 苦勞することなくトキワの森を抜けた。

そしてニビシテイに到着したシユン……ポケモントレーナーとして何を指すのかまだ決まっていなかった。——取り合えずジムに挑戦することも考えたがニビジムはいわタイプのジムなのでヒトカゲとは相性が悪い——。しかしシユンの手持ちにはいわタイプに有利な じめんタイプを持つナツクラーがいる。

しかしナツクラーでバトルするのは初めてなので少し調整をしてからの方が良いと

いうメロエツタのアドバイスを受けてニビシティから少し離れた川の見える場所で修行をする。

そして一通り、ヒトカゲとナツクラの体の動き、技と威力、タイミングを確認しそれらを向上させる特訓をしてニビジムに挑む。

ニビシティに戻り、ニビジムに向かうとそこは全体的に岩で出来た建物で何かチャレンジャーを圧巻させるそこはかとなし迫力を感じていた。

シユンはジム戦に挑戦するために扉を潜りニビジムへと入る――。

するとそこにはシユンよりも4、5くらい年の離れた青年がいた……青年の名前はタケシ、ニビジムのジムリーダーであり、いわタイプのエキスパートである。

シユンとタケシは互いに自己紹介して、タケシからニビジムのルールが説明される――使用ポケモンは一体か二体、どちらかを選べるといふ。

普通なら一体の方を選ぶ……しかしその場合、必ずジムリーダーの一番強いポケモンが出てくる……そのポケモンにこちらも一体だけで立ち向かわなければならぬといふ罠が隠されている。

二体ならば倒さなくてはならないポケモンが増えるが……上手くジムリーダーの一体目を倒せれば二体目に出てくるであろうジムリーダーの一番強いポケモンを倒せる確率はずっと高くなる。しかし一体目を倒せなければこちらが追い込まれてしまうが

…その時は育てが足りなかったと受け入れるしかない…。

シユンは一体の方を選択して試合が始まる…。タケシのポケモンは”いわへびポケモンのイワーク、その大きさに圧倒される。しかし気を持ち直してシユンはナツクラーを出す。

シユンがナツクラーをボールから出すと…驚くタケシ。タケシもナツクラーというポケモンは知っていたが…ホウエン地方に生息しているナツクラーを直接見たのは初めてで、他の地方のポケモンでジム戦を挑んでくるトレーナーも珍しいが…少なからずいるためこちらも気を取り直してジム戦を開始する。

どうやら審判はいないようだ…。普通こういうジムにはジムに勤めている者や公式の審判がいるものだと思うもジム戦に集中する。そして試合が始まった。

先行はシユン、シユンはナツクラーに”かみつく攻撃を指示、タケシはイワークに”たいあたりを指示し迫るイワークを素早い動きで交わし、尾に噛みついてダメージを与える。

そしてすかさず地面に”あなをほるで潜り、下から攻撃し”じめんタイプの効果抜群のダメージイワークの巨体を浮き上がらせるパワーにイワークはその一撃で戦闘不能になってしまった。

相性もあつたが…。始めてのジム戦は呆気なく…シユンの勝利で終わった。シユン

は頑張ってくれたナックラーを誉めて撫でる……タケシは自分のイワークがこんな短い攻防でやられた事に少し呆然としていたが、倒れたイワークをボールに戻し、頑張ったイワークを労う。そしてシユンへと近づき、ニビジムを勝ち抜いた証のグレーバツジを差し出す。

シユンはグレーバツジを受け取り、タケシに挨拶しニビジムを後にした。

そして何となくジム戦を受けて勝利したシユンはニビシテイでやる事はないのでポケモンセンターでナックラーの回復を済ませてニビシテイを後にした。

オツキミ山を通り掛かり、そこに岩場が崩れていて地層が剥き出しになっているところがあり二つの化石が埋まっているのを見つけた。しかしシユンが見つけたと同時に偶然そこにいた化石マニアの男もその場において、色々と相談した結果……二つの化石をそれぞれ分ける事になった。シユンは『こうらの化石』をもらった。

オツキミ山を通過する途中にピツピと出会い、お腹が空いていたようで途中の森で採ったオレンの実をあげたら喜び、お礼にオツキミ山にある事で有名な“つきのいしを貰った。

オツキミ山を抜けたところで、辺りはすっかり暗くなり、そこで野宿し一夜を明かした。

シユンがマサラタウンを旅立ってから五日間——ニビシテイから一番近い隣町のハ

ナダシテイへと辿り着いた。

ハナダシテイはカントー地方北部に位置する街で通称『花と水の都』。

カントーガイドブックによると——カントーにあるジムの一つハナダジムがあり、みずタイプのジムがある。

早速シユンはポケモンセンターで回復を済ませるとガイドブックに載っている地図を頼りにハナダジムへと向かう。曲がり角を曲がるとそこにはドーム型のピンクと黄色の屋根に大きなジュゴンの飾りの建物があった。ぱつと見ジムには見えないが看板にはハナダジム確かにあるので、こういうジムもあるのかな?と思いいジムの中に入る。

すると受付には誰もおらず——ジムの奥から歓声が聞こえてきたので入ると、そこでは三人にの美人の女性達が大きなプールでシンクロショーを行っており、アナウンスによるとハナダジムのジムリーダー、美人三姉妹によるシンクロ水中ショーであり、最初には三姉妹だけのシンクロショーだったが……次第にジムのみずタイプのポケモンも参加するショーに変わり、一通りの演目が終わると観客からの大歓声が木霊した。

シユンも確かに素晴らしいショーだったと思うが……シユンの目的はジム戦、客席にいたジムのスタツプらしき人にジム戦がしたいのだと話すとショーが終わるまで待つていてもらうようお願いされた……仕方なくシユンはショーが終わるまで待ち、一時間後……素晴らしい水中ショーに大喜びの観客達の拍手が三姉妹に送られ美人三姉妹達は

拍手に笑顔で手を振って答えながらシヨは終了した。

今日のシヨは終了ということでは早速ジムのスタッフに案内されて下の大型プールの方まで行くと、そこでは既に話しが伝わっているのか：ハナダジムのジムリーダーの三姉妹が待っていた。

金髪に赤い水着のお姉さんが長女のサクラ、青髪に緑の水着のお姉さんが次女のアヤメ、桃色の髪に黄色の水着のお姉さんが三女のポタン、ハナダジムの美人三姉妹と有名ならしい。

ジムリーダーなのになぜシンクロをしているのか尋ねると：趣味と言われて美女がビジョビジョなどと自分でギャグを言って笑い：シユンは思わずポカーンとしてしま

う。

シユンが自分達のギャグで言葉を失っている事に気づいた三姉妹は嫌な汗を流しジムスタッフの冷ややかな視線に気づいて、気を取り直すように咳払いをすると早速、ジム戦の準備をする。今回のフィールドは大型プールの上に幾つかの陸地のブロックが浮かんでいるフィールドであり、ニビジムのフィールドとはやっぱり違うんだと思うシユン。

ジムによってジムリーダーの使うタイプが違うように：フィールドもそのポケモンに合わせたフィールドになっている。

そしてジム戦が始まる……シユンはプールの前までいく…反対側には今回のジム戦の相手は長女のサクラさんだ。

審判はジムスタッフ…使用ポケモンは一体……全てのポケモンが戦闘不能になったら試合終了という一般的な公式ルールでジム戦が始まる。

サクラのポケモンは”きんぎよポケモンアズマオウ、シユンはヒトカゲで挑む。みずタイプのジムに”ほのおタイプのヒトカゲで挑む事を呆れられたりしたがシユンは気にせずに試合が始まる。

アズマオウはプールを縦横無尽に泳ぎ回りながら陸地にいるヒトカゲへと迫る…角を光らせて”つのでつくでの攻撃をヒトカゲは交わす。

アズマオウの水に潜っては別方向から繰り出す攻撃をヒトカゲは余裕を持って交わす…ここまで来る間にしたメロエツタとの特訓で 身体能力も動体視力も鍛えられており、余裕な動きで交わしていく。

その動きを見て、あのおヒトカゲの身体能力が高く ただ無謀に”ほのおタイプのヒトカゲを出したのではない事にサクラや客席で試合を見ていたアヤメやボタンも気づく。

しかしフィールドを見るとサクラは可笑しな事に気づいた。避けられているとはいえ……攻撃をしていたはずのアズマオウが逆に傷ついているのだ。

ヒトカゲがアズマオウの攻撃を交差する時に”ひっかくで攻撃しているのだ。その

ためダメージが少しずつ蓄積していきアズマオウは傷ついていきサクラが気づいた時には体が傷だらけでアズマオウはダメージで息を荒げていた。

アズマオウが追い込まれている事に焦ったサクラは一気に勝負を決めようとヒトカゲに効果抜群の”みずタイプの技、たきのぼりを指示し、アズマオウはフィールドの水を利用しその勢いのままヒトカゲに向かっていく。

ヒトカゲはシユンを信じており合図を待っている……そしてアズマオウが迫る瞬間に——シユンが『今だ！』と叫ぶとヒトカゲはアズマオウの”たきのぼりをギリギリまで引き付けて交わし、そこに切り札の”かみなりパンチを指示、ヒトカゲはかみなりパンチでアッパーをアズマオウに喰らわせる。

ここまでに来る途中のメロエッタとの特訓で”みずタイプへの切り札として”でんきタイプの技”かみなりパンチを覚えさせていたのだ。効果抜群の技がクリーンヒットしその一撃でアズマオウは戦闘不能になりシユンの勝利が宣言された。

三姉妹はこの結果を予想外だと言うように驚いていたが…審判をしていたジムスタッフはこの結果に納得していた。何故ならハナダジムのジムリーダーであるはずの三姉妹は最近、水中シヨアの経営や練習に集中しており、ジムの事を疎かにしていたからだ。

ジムリーダーとして自身のポケモンのバトルのトレーニングを怠ったりしていたか



らである。普通にジムリーダーなら自分のエキスパートのタイプの手強いタイプへの対策や、例えば苦手なタイプの技を受けたとしても……簡単には戦闘不能にならないくらいに鍛えているのが普通であり、この結果はジムリーダーとしての責務を怠った三姉妹の責任である。

シユンは苦手な水の上でも怖がらずに頑張ってくれたヒトカゲを優しく誉めるとヒトカゲも喜んで尻尾を振ってシユンにじゃれつく。

サクラは戦闘不能になったアズマオウを労いボールに戻すと二人の妹を引き連れてシユンの元へ行き、ハナダジムを勝ち抜いた証、ブルーバッジをシユンに進呈する。

シユンは礼を言つてブルーバッジを受け取り、サクラと握手を交わした後に別れの挨拶をしてハナダジムを後にした。

こうしてオーキド博士から初めてのポケモンを貰い、ポケモントレーナーになったシユンはトレーナーとして何を目指し、何を目標とするのか定まらないまま……取り合えず幼馴染み達が目指すポケモンリーグ出場のために必要なジムリーダーへ挑戦する事にして、マサラタウンを旅だつてから五日間と短い日数にニビジム、ハナダジムのジムバッジを手に入れた。

元々シユンの持つポケモントレーナーとしての天性の才能と、メロエツタによる特訓

のおかげでヒトカゲやナツクラーも急成長し、カントーのジムの中でも比較的難易度の低いと云われるニビ、ハナダジムのこの短い日数で突破することが出来たのである。

そしてニビジムに続いてハナダジムの勝ち抜きバッジを手に入れたシユンはハナダシテイを後にして…次の町を目指しながら考えていた。

夢もなくポケモントレーナーとして何を目標とし、何を目指すのか…トレーナーとしての夢や目標を探すか…ポケモン達と他の道を探すか…ポケモンを育てるブリーダー、それに近い育て屋さん、主にホウエンやシンオウ地方で開催されている、ポケモンや技の美しさやかっこよさを競い自身のポケモンの魅力を引き出す大会『ポケモンコンテスト』に参加するコーディネーターなど、ポケモンと深く関われる物はあるし、それ以外でも目指せる物はある。

シユンはハナダジムの後にした日からもメロエツタのアドバイスを受けて…ヒトカゲとナツクラーを順調に育てレベルアップさせながら考えていた。

そしてシユンがマサラタウンを旅だつてから十日間が経過したある日…シユンはメロエツタとディアンシーに旅だった日からずっと考えていたこと、その答えを告げる。

シユン達はハナダシテイを出発し、次の町を目指す途中で夜となり その森でみんなで野宿する。テントを立てて、焚き火を燃やし野宿の準備をして、みんなと晩御飯を食

べている。

「美味しいですわマスター♪」

「そうですね!」

「カゲ!」

「ナック!」

みんなもシユンが作ったシチューやポケモンフーズを美味しくそうに食べてくれている、シユンは両親に捨てられてから自分の事は自分でするために料理を幼馴染みの母親から教わっており、そんなに難しい調理でなければ大抵の料理は出来るようになっていた。自分が作ったシチューを美味しくそうに食べてくれるみんなを微笑ましく見つめて…シユンもシチューを食べながらマサラタウンを出発してからずっと悩んでいたことをみんなに話し始める。

「みんな…:ちよつと聞いてほしいことがあるんだ…」

シユンは食事中的メロエツタ達に…悪いと思うも…:自分の話しを聞いてほしいと言う。

「なんですの?」

「どうしたのですかマスター?」

「カゲカゲ?」

「ナツク？」

メロエツタ達は話しがあると云われたので、シユンの方を向いて話しを聞く体勢になる。

「…うん……みんなには話したかな？ぼくは昔、両親に捨てられて…きみたちと出会うまで一人で暮らしていたんだ……」

シユンは未だに自分が二度捨てられたことを知らない。シユンを育ててくれた両親が本当の両親だと思っている。

シユンを拾ってくれた両親はシユンが大きくなり心がきつちりと成長したら自分達は本当の両親ではなく…拾われたことを打ち明けるつもりだったがその前にシユンの前から消えてしまった。事情を知るマサラタウンの人達も二人に拾われ幸せだったシユンに捨てられていたことは内緒にしていた。そしてシユンが一度ならず、二度も捨てられた今、そのことを伝えることは計り知れないシヨックを受ける事は分かっているため言えないでいた。

「はい…聞きましたわ。その事が原因でマスター、あなたは悲しみ、心に深い傷を負ってしまい…あまり感情を表に出せなくなってしまったのでしたわね」

「幼いマスターを身勝手に捨てたこと…本当に許せません！」

ディアンシーとメロエツタは最初 シユンからその話しを聞いた時はシユンの両親

の身勝手さに怒りを露にして、両親に捨てられた事で心に深い傷を負ったシユンを哀れんでいる。

「…二人の言う通り……捨てられたことは本当に悲しかった……なんでぼくは捨てられたのか……愛されていたと思つてたんだけどな……」

シユンは両親に捨てられたことは本当に悲しくて心が深く傷ついてしまった——心から感情という色が抜け落ちてしまう程に——。

なぜ自分は両親（儀）に捨てられてしまったのか……今でも目を閉じればあの時の楽しく幸せだった両親との思い出が浮かぶ……愛されていたと思つていた……それなのに……。

「それから……辛く悲しい日々を過ごした……けどあの日、メロエツタとディアンシーに会えたから……今のぼくがいるんだ。二人に会えて本当に良かった……」

両親に捨てられてからシユンは感情という色が抜け落ちてしまい、世界が全て無色に変わつてしまった程に辛く悲しく絶望し……無機質に日々を過ごしていたが……ある日、メロエツタとディアンシーに会えたから……少しずつ心の傷が癒えてきて……完全に立ち直つたわけではないが……少しずつ前に進むことを決意した。

「……今はまだ……両親に会いたいのか……どうか分からない……」

シユンは自覚はないが……自分を捨てた両親のことを心のどこかで恨んでいるのかも

しれないという感情が奥底に潜み、現在は両親に会いたいのか……どうかは分からないでいた。

「でも……どうしてぼくを捨てたのか知りたい……どこにいるか見当もつかないけど……ぼくが有名になったら……両親はぼくに会いにきてくれるかもしれない……」

愛していた両親に捨てられて今は両親に会いたいのかそうでないのか悩むシュンだが……どうして自分を捨てたのかは知りたいと思い、両親の行方は見当もつかないが——有名になれば自分に会いにきてくれるかもしれないと一部の望みを賭ける。

「ぼくがトレーナーとして有名になれば……チャンピオンかトップコーディネーターになればもしかして……まだ目指すと決めたわけじゃないけど……」

シュンがポケモントレーナーとして有名になれば……チャンピオンやトップコーディネーターになれば両親が自分に会いにきてくれるかもしれないと思った……まだ完全に目指すと決めたわけではないが……静かにシュンの話しを聞いていたメモエツタ達は……。

「なるほど……どちらもトレーナーとして最高の称号ですし、もしマスターがどちらかになれば思惑はどうあれ……マスターの両親が会いにくる可能性はありますね……」

メモエツタもシュンの考えに同意し、どちらもポケモントレーナーとして最高の称号と言えるので……もしもシュンがどちらかになれたなら……両親の思惑はどうあれ……

会いにくる可能性はある――。

「しかしどちらも簡単になれる物ではありませんよ。チャンピオンになるには…ポケモンリーグで優勝し、チャンピオンリーグで、四人の実力者『四天王』を倒し、その上に君臨するチャンピオンを倒さないといけません……」

ポケモントレーナーの頂点――『チャンピオン』――各地方にあるリーグ公認のジムリーダー達に挑戦し8つのジムバッジを集めてポケモンリーグに挑戦し優勝して、四天王やチャンピオンに挑める『チャンピオンリーグ』に出場し、四天王とチャンピオンを倒すという超難関な関門に挑まなければならず……並大抵の努力では絶対に叶わない夢である。

「そしてトップコーディネーターになるには…様々な町で再開されるコンテストで優勝し五つのリボンを集めてグランドフェスティバルに出場し優勝する事でトップコーディネーターと呼ばれるようになります…」

ポケモンコンテストに参加するコーディネーターが目指す――『トップコーディネーター』――各地のコンテスト会場で大会に参加して優勝して五つのリボンを集めたコーディネーターだけが参加できる夢の祭典『グランドフェスティバル』で優勝という栄光に輝いた者だけがコーディネーターの頂点という称号を得る。

「と……」の冒険ガイドブックに書いてあります…」

ポケモンリーグ公式『ポケモントレーナー冒険ガイドブック』：トレーナーが目指す物のページに書かれている事をメロエツタがシユンに説明してくれた。

「うん……どっちも果てしなく厳しく困難なのは分かってる……まだどっちになるかは決まってるけど……それでもトレーナーとして有名になるには……どちらかしかないと思う……」

チャンピオン、トップコーディネーター……どちらも果てしなく遠く厳しく困難な道であり、なるには生半可な努力と覚悟では到底目指せず、途中で諦めてしまう者が大半である。

シユンもそんな事は分かっており、まだどちらになるかは決めてないが……それでもトレーナーとして有名になるには……そのどちらかしかない。

「……どっちを目指すにしても……果てしなく困難で、これまで以上に厳しい鍛練をして強くないといけない……ぼくもポケモンについてもっと勉強したり、バトルの腕も磨かなくちゃいけない……」

どちらを目指すにしても……果てしなく困難でありこれまで以上に厳しい鍛練をして体を鍛え技を磨き強くないといけない、ポケモンだけでなくシユンも……ポケモンについてもっと知識をつけ、自分のポケモンを生かせるバトルをするためにバトルの腕も磨かなくてはならない……、戦況を見抜く力、作戦や戦術を瞬時に立てる思考力、自



分のポケモンの状態や相手のポケモンの技や状態、行動を読み取るための観察力と判断力、バトルに勝つために時に自分のポケモンに辛く残酷な戦術を取らないといけない時もある……その時のために覚悟しておくために強い心力も必要である。他にもまだまだシユンに足りない物はたくさんある……もちろんポケモンと信頼と絆を結ぶ事も大切である。

「でも……信頼するみんなと一緒になら……どんな困難でも乗り越えていけると思うんだ……とても厳しい道になると思う……けど……みんなぼくについて来てくれるかな……?」

「だけどそんな困難な道でも……メロエツタやディアンシー、シユンの初めてのポケモンのヒトカゲ、シユンが始めてゲットしたポケモン」ナツクラ……信頼するみんなと一緒になら……どんな困難でも乗り越えていけると思い、少し不安そうにしながら……みんなについて来てくれるかなと尋ねる。

「わたくしはどんなことがあろうとマスターに着いて行きますわ!」

「わたしもです。確かにどちらを目指すにしても困難なのは間違いありません……ですがマスターと一緒にならどんな困難も乗り越えていけるはずですよ、わたしも一緒にがんばります」

「カゲカゲ!」

「ナツク!」

シユンは自分の目的のために目指す物について来てほしいとお願いとすると…ディア  
ンシーは微笑み、どんな事があるうとシユンに着いて来てくれると言ってくれた——メ  
ロエツタもどちらを目指すにしても困難だが…シユンと一緒に頑張らどんな困難でも乗り  
越えていけると信じており、自分も一緒に頑張ると言ってくれた。

もちろんヒトカゲとナツクラも笑みを浮かべて頷いてくれた。

「ありがとうみんな……これから一緒に頑張ろうね」

シユンは自分の目指す物について来てくれるメロエツタ達に嬉しくて笑顔でみんな  
に…これから一緒に頑張る事を誓う。

「ですが…どちらを目指すにしても手持ちのポケモンを増やさないといけません。わた  
しとディアンシーはわたしの力でボールの機能を封じているので手持ちには含まれま  
せん。なのでトレーナーの最大限持てる6体のポケモンを保持出来ますよ！」

メロエツタは自分の力で自身とディアンシーを除いて…ポケモントレーナーが持つ  
事の出来るポケモンの上限…6体まで保持出来ることを説明する。

「少し待っていてくださいねマスター」

「えっ！どこに行くのメロエツタ？」

メロエツタが突然どこかに飛んで行こうとしているのでどこに行くのかと尋ねる。

「すぐ戻りますので…待っていて下さいねマスター」

メロエツタはシユンに直ぐに戻ることでだけ伝えて空高く上がって姿を消した。

「消えた……!メロエツタはどこに行ったの?」

「レポートですわマスター。心配ありませんわ メロエツタならすぐに戻ります」

ディアンシーはシユンにメロエツタはすぐに戻って来るから心配ないと言う。

シユン達はメロエツタがどこかに行ってから数十分……夕御飯を食べ終わり、食器などの後片付けをしていると……メロエツタが戻ってきた……手には何かを抱いている。

「マスター!ただいま戻りました……」

「チュチュ……チュリネ!」

メロエツタは戻ったことを伝えてシユン達のところに下りてくる……メロエツタが抱いているのは……黄緑色の頭に葉っぱの生えた小さいポケモンだった。

「おかえりメロエツタ!それで……どこに行ってたんだい?それにそのポケモンは?」

シユンは帰ってきたメロエツタにどこに行っていたのかを聞き、メロエツタが抱いているポケモンは何なのか尋ねる。

「ええ……わたしはマスターの目指す物のために手持ちを増やしておいた方が良いと思いい、マスターに相応しいポケモンを探しに行っていました。わたしのオススメのくさタイプで可愛いポケモンです。しかしそのポケモンはカントーにはいないので……その地方までレポートで行って探し、その中から特に強く可愛い者に着いて来てもらった

わけです♪」

メロエツタはシユンにどこに行っていたのかとその目的を説明する——シユンの手持ちを増やすためにメロエツタがオススメのくさタイプの子可愛いポケモンを連れてきたのだと言う。

するとメロエツタの腕からシユンに向かってそのポケモンが飛び着いて来る。

「チュチュ~~~~♪」

「おっと——このポケモンって確か……チュリネ……だよね？」

シユンは前に他地方のポケモンの事が載っている本でイツシユの項目でそのポケモンを見たことがあり……チュリネの事は知っていた。

しかし全部のポケモンを覚えているわけではなく……ナツクラの事は分からなかった。

「ええ、マスターの言う通りそのポケモンはチュリネ——。主にイツシユ地方に生息しているポケモンです。しかもその子は珍しい色違いですよ！」

メロエツタはシユンにチュリネについて説明してくれる——。

「うん……前に本で見たのと色が違うのは分かるけど……どうして初めて会ったばかりのぼくに……までなついているの？」

「チュリチュリ~~~~♪」

シユンは前に本で見たチュリネと色が違うのは分かっていた——目は青く体の色も明るい黄緑色と通常種とは違う——それよりもシユンが気になったのは……初めて出会ったばかりのチュリネがどうしてここまで自分になつているのか気になつていた。「それはここに連れてくる時にマスターの素晴らしさをすり込んでおいたんです♪ さあ、マスター チュリネをゲットしてください!」

メロエツタはチュリネが初めて出会うシユンに物凄くなつている理由をシユンに説明する。

「すり込んだって……まあいいや。チュリネ ぼくと一緒に来てくれるかい?」

シユンはメロエツタの言葉に呆れながらも……サイドバックからモンスターボールを取り出してチュリネと一緒に来てくれるかいと聞く。

「!!チュチュ~~~~チュリ~~~~♪」

シユンがチュリネを仲間に誘うとチュリネは喜び笑顔で頷いて、シユンの持つモンスターボールのスイッチに触れて……そのまま揺れることなくボールの中へと吸い込まれてポンツ!と音がなりチュリネをゲットしたことを知らせる。

「よし!チュリネ ゲット。そして出て来て チュリネ!」

「チュチュー!」

シユンはチュリネをゲット出来たことを喜び、チュリネをモンスターボールから出

す。

「ということで——新しく仲間になったチュリネだよ！みんなも仲良くしてね」

シユンは新しく仲間になったチュリネをみんなに紹介し 仲良くするようにお願いする。

「改めて——よろしくお願ひしますね」

「よろしくですわ。仲良くしましょうね♪」

「カゲカゲ！」

「ナック！」

メロエツタは改めてよろしくと挨拶し、デイアンシーも仲良くしましょうねと微笑み、ヒトカゲとナックラーもよろしくと挨拶をする。

「チュチュ♪ チュリ♪」

チュリネも嬉しそうに笑顔でみんなに挨拶する。

「よし、新しい仲間も増えたし——明日からみんなで強くなるための特訓開始だ！」

「「おお（ですわ）！！」」

「カゲカゲ！」

「ナックウ！」

「チュリ！」

新しい仲間も増えて心機一転!!明日からみんなで強くなるための特訓開始だ!と気合を入れるとみんなも気合いを充分に頷いてくれた。

「それじゃ今日はもう寝ようか」

シユンは明日からの特訓のために鋭気を養うために今日はもう休もうとみんなと一緒に寝ようとテントの中に入る。

「おやすみ——みんな……」

「おやすみなさい——マスター……」

「おやすみなさいですわ——マスター……」

「カゲ……」

「ナツク……」

「チュチュ……」

シユンはテントの中で横になり毛布を被る……メロエツタとデイアンシーはシユンの左右で寄り添うように眠る……ヒトカゲは尻尾を抱えてテントに寄りかかり眠り、ナツクラーはシユンの足元で丸くなって眠る……チュリネはシユンの胸の上で眠る。

明日から強くなるための特訓をするために……今日はみんなでゆっくり眠るのだった。

## 第三話 歌姫のマル秘特訓！特訓の成果！

シユンが自分を捨てた理由を聞くためにトレーナーとして有名になるために、チャンピオン、トップコーディネーターを目指すことを決めた日から数日――。

シユン達は旅をしながら野生のポケモンとバトルをして鍛え、技の強化をしながら旅を続けていた。既にニビジムとハナダジムに挑戦しメロエツタとの特訓のおかげもあり比較的簡単にジムバッジを手に入れる事が出来た。

シユンはポケモンを鍛えながらカントーでポケモンリーグに挑戦するためにポケモン達を育てながら旅を続けていた。

シユンがナックラーとチュリネをゲットしてから数ヶ月――シユン達はハナダシテイを過ぎた所にある洞窟『ハナダの洞窟』でポケモンを鍛えていた。

この洞窟は化け物が出ると言われ誰も近寄らない場所であり、本来ならバッジを数十個持つ実力者しか入ることは許されないのでが…シユンはメロエツタのテレポートで簡単に中に入ることが出来たのだ。

最初はその洞窟に生息するポケモンが強すぎてヒトカゲ達では全く歯が立たなかつ



たのだがメロエッタのサポートを受けながらバトルを繰り返して強くなっていく。

そのおかげでシユンのポケモン達は順調に育っていた……。そしてある日……。シユンは洞窟の中で野生のゴローン達とバトルしていた。

「ゴローンー!!」

ゴローン達はヒトカゲとナツクラーに いわおとしを繰り返す。

「ゴローンの いわおとしですわ!気を付けてください」

ディアンシーがゴローンの いわおとしに気を付けるように注意する。

「分かっている!ヒトカゲ かえんほうしゃ!ナツクラー あなをほる!」

「カゲ!」

「ナツク!」

シユンはヒトカゲとナツクラーに技を指示、ヒトカゲは灼熱の炎で、ナツクラーは地面に潜って地面の下からゴローンに攻撃する。

「ゴロく……ゴロく……」

ゴローンは「効果はいまひとつ」だったが灼熱の炎によるダメージで戦闘不能になり、もう一匹のゴローンは「効果ばつぐん」の技を受けて戦闘不能になる。

「やった。よく頑張ったね!ヒトカゲ、ナツクラー!」

シユンは頑張ってくれたヒトカゲとナツクラーを誉める。

「カゲ♪カゲ！」

「ナツク♪ナク！」

シユンがヒトカゲとナツクラーをよく頑張ったねと褒めると嬉しそうに頷いていた二体は突然動いていた体が静止して体が輝き始める。

「これってもしかして……」

「はい 進化が始まったんですね」

シユンがヒトカゲとナツクラーが輝き始めたことに驚き、メロエツタはシユンが予想している通り、ヒトカゲとナツクラーの進化が始まったことを教える。

進化の光の輝きと共にヒトカゲとナツクラーはその姿を変えていき、光が消えるとそこには進化して姿が変わったヒトカゲとナツクラーがいた。

「リザード!!」

「ビブラ〜!!」

ヒトカゲは「かえんポケモン」リザードに——ナツクラーは「しんどうポケモン」ビブラーバへと進化した。

「ヒトカゲがリザードに進化した!」

シユンは進化したリザードにポケモン図鑑を向けるとリザードのデータが表示される。

「リザード——かえんポケモン。ヒトカゲの進化系。燃える尻尾を振り回し、鋭い爪で相手を切り裂く。荒々しい性格——」

ポケモン図鑑からリザードについてのデータが表示される。

ビブラーバはホウエン地方のポケモンなのでカントー版のポケモン図鑑では調べることが出来ない。で今回はパス。

「ナックラーはビブラーバに進化しましたね!おめでとうございますマスター」

メロエッタはナックラーがビブラーバに進化した事を教え祝いの言葉をかける。

「ありがとうメロエッタ。リザード ビブラーバ!これからもよろしくね!」

「ザ〜ド!!」

「ラ〜バ!!」

リザードとビブラーバもシユンに笑顔で、勿論だと言うように頷く。

ヒトカゲとナックラーがリザードとビブラーバに進化した日から数日後——その後シユン達は洞窟のポケモン達とバトルしながら順調にポケモン達のレベルを上げていった。

それに加えて シユンもポケモンバトルの腕を順調に上げていく。ポケモンバトルにおいての状況判断能力。自分のポケモンの状態、戦況の判断…どれをとってもマサラタウンを出発した頃よりも成長したと言えるだろう……。そして今日のトレーニング

も終わり、シユン達は洞窟から出て夕飯を食べながらこれからの事について相談していた。

「フウ……今日もトレーニングお疲れ様ですマスター。日を重ねるごとに実力が上がっているようで何よりです」

メロエツタは自分が提案した修行をしてシユンやポケモン達の実力が順調に上がってきているようで何よりだと言う。

「そうだね。ぼくもポケモン達もトレーニングを続けているうちに少しずつ力がついていくのを感じるよ……」

シユンもポケモン達と一緒にトレーニングを続けていると……少しずつ自分達が強くなっているの実感し、順調に実力が上がっていることを感じていた。

「それにここに来る途中で新しく仲間になったこの子も少しずつ強くなってるようだしね」

シユンはこのハナダの洞窟に来る途中で新たにゲットしたポケモンが入っているモンスターボールを持つ。

「そうですね。他のポケモン達も確実に強くなっています。明日は腕試しにジムに挑戦してみましよう！」

メロエツタが修行の成果を試すためにポケモンジムに挑戦してみようとシユンに提

案する。

「特訓の成果を試しにクチバシテイにあるクチバジムに挑戦してみてもどうでしょう。

クチバシテイは港町なので、みずタイプのポケモンもゲット出来るかもしれませんがよー!」

メロエツタはこれまでの特訓の成果を試しにクチバシテイにあるクチバジムに挑戦してみてもどうかと提案し、港町であるクチバシテイなら、みずタイプのポケモンがゲット出来るかもしれないと言う。

「なるほど!確かにどれくらいぼく達が力を付けたのか見るのもありかもしれない…。それにそこで新しい仲間をゲットするのも良いかもしれないね」

メロエツタの提案通り……シユンは明日クチバシテイに向かい、クチバジムに挑戦する事を決める。シユン達は明日に備えてテントの中で就寝するのだった。

「ここがクチバシテイか……」

シユンが特訓の成果の腕試しにクチバシテイのジムに挑戦することを決めた日から翌日……。シユン達はハナダの洞窟を出てクチバシテイに向けて出発する——途中の道でも野生のポケモンと戦いながらクチバシテイへと向かい、たつた今クチバシテイへと到着した。

「それで先ずはどうしようかな?早速ジムに挑戦する、メロエツタ」

シユンは透明になり自分の肩に乗っているメロエツタにどうするのかと聞く。

「そうですね…。一先ずポケモンを回復させましょう。リザードもビブラーバもここに来るまでにかなりバトルをしていましたからポケモンセンターで回復させた方が良いでしょう」

「そうだね。それじゃ先ずはポケモンセンターに行こうか。メロエツタ デイアンシー」

「はい（ですわ）！」

シユンは一先ずポケモンセンターに向かうことに決めてメロエツタとデイアンシーと一緒にポケモンを回復させるためにポケモンセンターへと向かった。

「ジョーイさん。ぼくのポケモン達の回復をお願いします」

シユンはポケモンセンターに到着すると…ジョーイさんにリザードとビブラーバ、チュリネのモンスターボールを預けて回復をお願いします。

「はい！お預かりいたします！」

「ラッキィ〜」

ジョーイさんはモンスターボールを置いた台を持ってシユンにお預かりしますと言って、奥の部屋に入っていった。

「さて、ポケモンも預けちゃったけどこれからどうしようか？リザード達の回復が終わ

るまで少し時間もかかるだろうし……」

シユンはリザード達の回復が終わるまでは……ジムに挑戦も出来ないものでどうしようかとメロエツタ達に尋ねる。

「でしたらマスター。みずタイプポケモンをゲットするのはどうでしょうか。港もありますしそこで釣りをすれば、ポケモンの回復が終わるまでの暇潰しにもなりますわ」  
ディアンシーはポケモン達を回復させている間、みずタイプのポケモンをゲットするのはどうかと提案する。港もありそこで釣りをすれば回復が終わるまで暇潰しにもなると言う。

「そうだね。釣り竿もあるし 時間つぶしにもなるし港に行こうか!」

シユンはディアンシーのその提案を聞いて港に向かうことに決めた。

「さて、ここなら良いかな?それじゃ早速釣ってみようかな」

シユンは港に到着すると……船の出入りの邪魔にならない所に行き、バックから折り畳み式の釣り竿を出すと座って海に向かって糸を垂らす。

「どんなポケモンが釣れるか楽しみですわね マスター」

ディアンシーがどんなポケモンが釣れるのか楽しみだとシユンに言う。

「そうだね。どんなポケモンが釣れるかな?」

シユン達は会話しながら釣りを続けて約30分後……ピクつと釣り竿が引つ張られ

る。

「これって！もしかして何かかかった？」

「マスター！慎重に糸をゆくり引いて下さい」

シユンは釣り竿が引かれているので何かが針にかかった事に気づく——メロエツタはシユンに慎重に糸を惹くようにアドバイスする。

シユンはメロエツタの言う通りに糸を少しずつ引いて段々とこちらに引き寄せて行く。

「そこで一気に引き上げてマスター！」

メロエツタはシユンが少しずつ自分の方に引き寄せてベストな位置に來ると一気に引き上げるように言い、シユンは釣り竿を上を思いっきり引き上げる。シユンは釣り糸の先を見つめるとそこには紫色をした二枚貝の舌を突き出したポケモンがいた。

「シエ〜……！」

「釣れた…確かこのポケモンは…」

シユンはそのポケモンにポケモン図鑑を向ける。するとそのポケモンのデータが表示される。

【シエルダー —— 2まいがいポケモン。 2枚の殻を開けたり閉じたりすることで泳ぐ。そのスピードはけっこう速い——】



ポケモン図鑑から首位の釣り上げたポケモン。シエルダーのデータが表示される。

「これがシエルダーか…初めて見たな。よし、シエルダーをゲットするぞ!」

シュンは釣り上げたシエルダーをゲットするために預けていなかった一匹のモンスターボールを取り出す。

「シエルダーは みずタイプですわ。マスター 頑張ってください!」

ディアンシーはシエルダーをゲットしようとするシュンを頑張つてと応援する。

「いくぞ。頼むよ ユンゲラー!」

「ユンゲラー!」

シュンはモンスターボールからエスパータイプの ねんりきポケモン…ユンゲラーを出す。

このユンゲラーはシュン達がハナダの洞窟に向かう途中でゲットしたケーシィがハナダの洞窟でのトレーニングでユンゲラーへと進化したのだ。

ケーシィは危険を察知するとすぐにレポートで逃げてしまうので…ゲットするのに苦戦し、最初は逃がしてしまっただが メロエッタの力でレポートを封じてもらおうとシュンはケーシィをゲットすることに成功したのだ。

「いくよユンゲラー!サイケこうせん!」

「ユンゲラー!」

ユンゲラーはエスパーの光線：サイケこうせんをシエルダーに向かつて放つ。

「シエ〜…!」

シエルダーはユンゲラーのサイケこうせんが直撃し吹っ飛ぶ。

「シエ〜…!」

シエルダーは反撃とばかりに：大量の泡　バブル光線をユンゲラーに放つ。

「シエルダーのバブルこうせんです。気を付けてくださいマスター!」

メロエツタはシエルダーがバブルこうせんを放つたのを見て、シユンに気を付けるように注意する。

「うん　分かってる。ユンゲラー　サイコキネシスでバブルこうせんをそのままシエルダーに返すんだ!」

「ユンゲラー…ユン!」

ユンゲラーはシユンの指示で　サイコキネシスを使い、自分に迫るバブルこうせんをシエルダーに跳ね返す。

「シエ!?!シエ〜」

シエルダーは自分の攻撃が跳ね返されたことに驚き、避ける間もなく跳ね返されたバブルこうせんがシエルダーに直撃する。

「シエ〜…!」

シエルダーは攻撃を立て続けに受けて目を回し倒れて動かなくなる。

「今ですマスター!」

「うん。頼むよ モンスターボール!」

メロエツタがシエルダーが倒れたのを見て今だと言うとシユンは頷いてシエルダーにモンスターボールを投げる。

シエルダーにモンスターボールが当たると…シエルダーはボールに吸い込まれる…。そしてボールが何回か揺れると…ポンッ!と音が鳴りゲットの成功を知らせる。シユンはシエルダーをゲット出来たのが分かるとシユンはモンスターボールを拾う。

「よし!シエルダーゲット。よく頑張ったねユンゲラー!」

「ユンゲラー!」

シユンはシエルダーがゲット出来たことに喜び、ユンゲラーをよく頑張ったと言って褒める。

「やりましたねマスター!」

「おめでと〜ございますわ♪」

メロエツタとディアンシーもシユンとユンゲラーがシエルダーをゲット出来た事を一緒に喜んでくれた。

「うん、ありがとう2人も。よし 出てきてシエルダー!」

「シエ〜!!」

シユンは早速 ゲットしたばかりのシエルダーをモンスターボールから出す。

「これからよろしくねシエルダー」

「シエ〜♪」

シユンはシエルダーをモンスターボールから出して、シエルダーの頭を撫でながらこれからよろしくと挨拶するとシエルダーも笑顔で頷いてくれた。

ゲットしたばかりのポケモンは……比較的直ぐにトレーナーの言うことを聞いてくれるポケモンと慣れるまでに時間が掛かり……なつくまでに時間の掛かるポケモンもいる。

シユンがゲットしたシエルダーは前者で、シユンの優しい雰囲気もあってから直ぐに気を許してくれたようだ。

「ここで みずタイプのシエルダーもゲット出来たし、時間も経ったしポケモンセンターに行こうか?リザード達の回復も終わってる頃だろうし……」

シユンはクチバシティに来た一つの目的……港町で海があるので みずタイプのポケモンをゲット出来るだろうと思ひ、ポケモン達の回復を待つ間……港で釣りをしシエルダーをゲット出来たし、時間も経過していたのでそろそろリザード達の回復も終わっただろうと思ひ、ポケモンセンターに向かう。

「そうですね。それじゃポケモンセンターに向かい、リザード達を受け取ってジムに行きましよう!」

メロエツタも頷いてポケモンセンターでポケモンを受け取ってからクチバジムに向かおうと言う。

「そうだね。リザード達を受け取ってジムに行こうか!」

シユン達はポケモンセンターにリザード達を受け取りに戻った。

「ここがクチバジムか…」

シユンはポケモンセンターでリザードとビブラーバを受け取り、さつきゲツトしたシエルダーの回復をお願いした後にそのままクチバジムへと向かい、今到着した。

「クチバジムはこのジム公式ガイドブックによると……でんきタイプのポケモンを使うジムらしいです」

メロエツタがカントーのジムについての公式ガイドブックを見ながらクチバジムは…でんきタイプのポケモンを扱うのジムだとシユンに教えてくれる。

「でんきタイプか……ビブラーバだったら楽に戦えるけど、それだと特訓の成果を試せないからここはリザードでいくことにするよ!」

でんきタイプに相性の良い じめんタイプのビブラーバだと有利で楽に戦えてしま

うので…特訓の成果を試せないと思い、ここは敢えて ほんのおタイプのリザードで挑むことにする。

「気を付けて下さいマスター。このジムリーダーは荒々しいバトルで有名で、挑戦してきたトレーナーのポケモンを バトルで大怪我させてポケモンセンター送りになっているらしいですね」

メロエツタがガイドブックのクチバジムのジムリーダーの覧を見てシユンに説明する。

「なるほど…それじゃあ気を付けて挑もう」

メロエツタの忠告を聞いたシユンは…覚悟を決めて気を付けて挑むように注意し、ジムの中へと入って行った。ジムの扉を開けるとジムの中は真つ暗だった。

「真つ暗だな……すいません 誰かいませんか」

シユンは真つ暗なジムの中に人がいないのかと大声で呼ぶ…すると…!!

バツと！突然ジムの一部の電気がついてシユンと奥に居た人達を照らす。

「ハイ！ようこそチャレンジャー！ミィはクチバジムジムリーダーマチス！よろしくな」

ジムの奥から歩いて来た人は…クチバジムのジムリーダーマチスと名乗る。軍服を着た大柄の男性でシユンよりもだいぶ大きく、軍人らしいたくましい体をしている。

「よろしくお願いしますマチスさん!ぼくはシユンと言います。ジム戦をお願いします!」

シユンはクチバジムのジムリーダーマチスに自分の名を名乗り、ジム戦をお願いします。

「OK!ボーイ!ユ一のチャレンジを受けよう!ここ最近は歯応えのないベイビーばかりの挑戦でウンザリしていたところだ!見たところ中々の面構えだ。久々に楽しめようだぜ!」

マチスはシユンの挑戦を受けた……シユンをバトルフィールドに案内する。

マチスはこのところ歯応えのないチャレンジばかりの挑戦にウンザリしていた……どいつもこいつも一撃でやられる雑魚のベイビーばかりであり、今日挑戦にやって来たシユンを見てジムリーダーとして感じるシユンのトレーナーとしての力量、雰囲気を感じて中々の面構えだと誉める……そして徐々に楽しいバトルが出来そうだと笑みを浮かべる。

シユンはマチスのその言葉にマチスが評判通りにチャレンジに対して過激なジムリーダーである事を確信した。先程ポケモンセンターにリザード達を取りに寄った時も……担架に乗せられた黒こげで傷だらけのポケモン達と自分のポケモンに寄り添うトレーナーを見た。

どうやらクチバジムに挑戦したトレーナー達は悉くマチスの強力な でんきタイプ  
のポケモンの攻撃にやられて酷い怪我を負ってポケモンセンター送りにされたようだ。

もしかしたら自分のポケモンもそうなってしまうかもしれないという不安にかられ  
てしまう……ただシユンは頭に浮かんだリザードが黒こげになり倒れる光景を頭を  
振って消し、始めてのジム戦に集中し トレーナーボックスへと入る。

「これより！ジムリーダーマチスとマサラタウンのシユンによるジム戦を始めます。

使用ポケモンは1対1、どちらかのポケモンが戦闘不能になったら試合終了となりま  
す。それではバトルスタート！」

審判によってジム戦がスタートする。

「OK！俺様はこいつだ。GO！ライチュウ！」

「ライ！ー！」

マチスはモンスターボールを投げ、ライチュウを繰り出す。

「あれは……ライチュウ！」

シユンはポケモン図鑑をライチュウに向ける。すると……ライチュウのデータが流れ  
る。

「ライチュウ——ねずみポケモン。ピカチュウの進化系。その電撃は強力でインド象で  
も気絶させる——」



「なるほどライチユウか…それならぼくは…頼むよ リザード!」

「リザード!」

マチスのライチユウに対し、シユンは ほのおタイプのリザードで対抗する。

「オオ!強そうなりザードだな。楽しいバトルになりそうだけ!行くぜライチユウ でんきシヨックだ!」

「ラ〜イチユウ〜!」

マチスはライチユウに でんきシヨックを指示し、ライチユウは両頬から電撃を放つ。

「リザード!かえんほうしや!」

「リザ〜!」

シユンはリザードに かえんほうしやを指示し ライチユウの電撃に対抗する。だがシユンの予想を良い意味で裏切り…かえんほうしやはライチユウの電撃を撃ち破つてライチユウにクリーンヒットする。

「ラ〜イ〜!?!」

ライチユウはリザードの かえんほうしやを受けて吹っ飛ぶ。

「オウ!?!しつかりしろライチユウ!」

「ライ〜…!」

ライチュウは体を震わせながらもゆっくりと立ち上がる。

「すごい！いつの間にかこんなに力が付いてたんだ…」

「リザード…」

シユンとリザードは自分達が予想以上の力が付いていたことに驚いて呆然とする。

「へい！思った以上の強さで驚いたがぼおつとしてちやいけないぜ。ライチュウ！メガトンパンチをお見舞いしてやれ！」

「ラーイ チュウ〜!!」

マチスはシユンのリザードが思ったよりも強かったことに驚いたが、ぼおつとしてちやいけないと忠告し、ライチュウにメガトンパンチを指示、ライチュウはリザードに向かつて強力なパンチを繰り出す。

「リザード！きりさくで迎え撃て！」

「リザード！」

それに対し シユンはリザードに鋭い爪を光らせ きりさくで迎え撃つ。

「ライ〜〜！」

「リザード〜〜！」

ライチュウのメガトンパンチとリザードの きりさくが交差して互いに直撃し、そして一瞬の静寂が流れる。

——そして——。

「ラ〜イ……」

ライチュウがリザードの鋭い きりさくの攻撃を受けて、その体がゆつくりと地面に倒れるのだった。

「オ〜ウ!?ライチュウ〜!!」

マチスはライチュウが倒れたことに驚き両手で頭を抱える。

「ライチュウ戦闘不能!リザードの勝ち!よって勝者 マサラタウンのシユン!」

審判によってシユンとリザードの勝利が宣言される。

「やった!ありがとうリザード!」

「リザード!」

シユンはリザードがライチュウを倒しクチバジムのジム戦に勝ったことを喜び、頑張ってくれたリザードを誉める。

「オ〜ウ……良くやったぜライチュウ。ゆつくり休みな…」

マチスは戦闘不能になったライチュウをゆつくり休むように言って、ボールに戻すとシユンの方へと近づいてくる。

「ヘイ!見事にやられちまったぜ……。ボーイとリザードの強さにはホントにビックリだ。これが俺に勝った証!オレンジバツジだ!」

マチスはシユンとリザードの強さを称賛し、自分に勝ちクチバジムを勝ち抜いた証オレンジバツジを渡す。

「ありがとうございます！ マチスさん！」

シユンはマチスからオレンジバツジを受け取る。

「またボーイとバトルできる日を楽しみにしてるぜ！」

「はい！ またいつかバトルしましょう」

シユンとマチスは握手をしてお互いの健闘を称えて再戦を約束する。

そんな2人に審判の人と周りの2人も拍手して2人を称える。こうしてシユンの初めてのジム戦はシユン達の勝利に終わった。

「やりましたねマスター！ 見事にジムバツジをゲットしましたね」

メロエツタは見事にクチバジムのバツジをゲット出来たことを喜ぶ。

「ありがとうメロエツタ。それにしてもぼく達がここまで強くなってたなんて驚いたよ」

シユンは自分達が予想以上に強くなっていくことに驚いていた。

「マスター達はわたしの提案したトレーニングをしつかりこなしています。強くなっているのは当たり前です！」

メロエツタは自分が提案したトレーニングを嫌な顔一つせずに真剣に行い、こなした

のだから強くなってきているのは当たり前だと言う。

「それでこれからどうしようか メロエツタ?」

シユンはメロエツタにこれからどうしようかと尋ねる。

「そうですね……。いつまでもあの洞窟で特訓をしても仕方ないので引き続きジムを巡るのはどうでしょうか? バトルの腕の向上にもなりますし:良いと思いますよ」

メロエツタはいつまでもハナダの洞窟だけで特訓していても仕方ないと……。引き続きジム巡りに挑戦することを提案する。

ジムリーダーはポケモントレーナーとして上位の実力者達! そのジムリーダーと戦えればポケモンバトルの腕の向上にもなるからと勧める。

「そうだね:ジムを巡りながらポケモンをゲットするのもいいかもね。リザードの回復も終わったし それじゃ次の町に行こうか:メロエツタ デイアンシー」

「はいー!」

「はいですわ♪」

シユン達は旅の目的の一先ず決める……。次のジムに挑戦するために次の町へと向かうのだった。

## 第四話 エスパールレディ ナツメの脅威！晴れる心

シユンがクチバジムのジムリーダーのマチスに勝利した日から数日――。

シユン達は次のジムがあるヤマブキシティに向かって順調に旅を続けていた……旅の途中もポケモンをゲットし 仲間も少しずつ増えてきたりとマサラタウンを旅立った日から少しづつであるがポケモントレナーとして成長していた。

今日もヤマブキシティを目指していたシユン達は夜になり近くの林でキャンプをしていた。

「うん。ヤマブキシティまで後少しって所まで来たけど……今日はもう暗いからここでキャンプして明るくなったら出発しよう」

「そうですね。暗い夜道を歩くのは危ないですからね……その方が良いでしょう」

メロエツタもシユンに賛成し、シユン達は野宿の準備を始める。

テントを立てて、薪を集めてリザードに火を付けてもらい 暖かいスープを作り盛り付ける、前の町で買ったパンを皿に置く、シユンは両親に捨てられてから一人で暮らしていた時間が長かったため……簡単な調理なら出来る。シユンはポケモン達にポケモンフーズを出してポケモン達のご飯の準備もする。

「よし、それじゃあみんな……ご飯にしようか!」

「そうですね」

「はい」

「リザ!」

「ビブ〜!」

「チュリ!」

「ユン!」

「シエル〜!」

シユンはみんなのご飯の用意をすると、みんなにご飯を食べようと言って、みんなは夕食を食べ始める。

「うん 今日良い感じに出来た……。みんな美味しいかい?」

シユンは今日も良い感じに料理の味付けが出来たと笑みを浮かべ メロエツタ達にご飯は美味しいかと聞く。

「はい。すごく美味しいですわ マスター♪」

「ええ。とても美味しいです マスター!」

シユンがみんなに美味しいかと聞くと……ディアンシーもメロエツタも シユンが作ったスープを美味しいと言ってくれた——リザード達も美味しそうにポケモンフー

ズを食べている。

「良かった。まだまだあるからお腹いっぱいになるまで食べてね」

「はい（ですわ）」

シユンはみんなが自分を作ったスープを美味しいと言って飲んでくれるので嬉しくなり、まだおかわりもあるからお腹いっぱいになるまで食べるように言う。

その後も……シユン達は美味しい夕食を楽しく会話をしながら味わい……全員が夕食を食べ終わるとみんなで食器などの後片付けを行い、食器を全て洗い終わると——シユンはみんなと一緒に夜空に輝く綺麗な満月を眺めていた。

辺りの草むらからは虫の鳴き声が聞こえてきて周りを月の光が照らし、そこには静かな空間が広がっていた。

「月が綺麗ですわねマスター……」

ディアンシーが曇一つなく広がる星と……綺麗に輝き夜空を照らす満月を見て綺麗だと呟く。

「そうだね……本当に綺麗なお月様だね」

シユンもディアンシーに同意し、真ん丸で綺麗に輝く満月をシートの上に座りながら見上げる。

「リザ……」



「ビブ〜……」

「チュリ……」

「ユン……」

「シエ〜……」

「シユンの周りでもザード達も……座つたり寝転がったりしながら一緒に満月を眺めていた。」

「虫達の鳴き声しきませんねマスター……。本当に静かです……」

メロエツタは草むらから聞こえて来る虫達の綺麗な鳴き声に耳を澄ませている。

「本当だ……。綺麗な音色だな……。不思議と心が安らぐみたいだ……」

シユンも草むらから聞こえてくる虫達の綺麗な鳴き声に耳を傾けて その綺麗な音色を聞いていると不思議と心が安らぐ感じがした。

シユン虫達の綺麗な演奏を聞いていると……思わず自分も吹きたくなったのか——サイドバックからケースを手にも持ち ハーモニカを取り出す。

「マスター……それは？」

「チュリ？」

肩に乗っていたメロエツタはシユンが取り出したハーモニカのことを聞いて、シユンの膝に乗っているチュリネも何だと頭を傾げる。

「うん、このハーモニカはね……とても小さい頃に両親から初めて貰った物なんだ……」  
シュンの持つハーモニカ——全体がシルバーのクロマチックハーモニカ——。

このハーモニカはシュンが両親に拾われてから初めての誕生日の日に両親からもらった物であり——以来シュンはこのハーモニカを大切にしている、一生懸命練習をして上手く弾けるようになり、両親に聞かせると上手と言って誉めてくれた。それが嬉しくて益々練習にのめり込み、今では色々な曲を弾けるようになった——しかし両親に捨てられてからは弾く気もなくなり——ずっとしまわれていたが、旅に出るその日に……ふと思い出してサイドバックに入れたのである。

「そうだったのですか……マスターにとってそのハーモニカはとても大切な物なのですね」

「ディアンシーはシュンの話しを聞いて……そのハーモニカはシュンと両親との思い出が詰まった大切な物なのだと分かった。

「うん……ぼくにとつて両親との繋がりが残ってる物だから……とても大切なんだ」

「ディアンシーの言う通り——ハーモニカはシュンに取って……捨てられてから両親との繋がりが残る唯一の物であり……とても大切なのである。

「マスターが奏でる曲……聞いてみたいですよ」

メロエツタはシュンのハーモニカで吹く曲を聞いてみたいとお願いする。

「わたくしもぜひ聞いてみたいですわ!」

「リザ!」

「ビブ!」

「チュリ!」

「シェー!」

「ユン!」

メロエツタだけじゃなく…ディアンシーやリザード達もシユンのハーモニカを聞いてみたいとお願いする。

「そんなに聞きたいの? わかった…: それじゃあ吹くね…」

メロエツタ達にお願いされたシユンは——ハーモニカを口にくわえて自分と両親の大切な思い出の中で一番思い出深く、好きな曲を吹く。

【BGM 空の軌跡FC ED (星の在り処)】

シユンはハーモニカを吹いて——両親がいなくなる前からお気に入り曲を吹き始める。

— ☒ (君の影) ☒ (星のように) ♪ (朝に溶けて消えていく) ☒ —

シユンがハーモニカで吹くその曲——明るい曲風だが…どこか切ない感じも伝わってくる…: 悲しみや寂しさ…: その旋律からは色んな想いが心の奥底から込みあげて

くる。

— ⊠ (真実も) ⊠ (嘘もなく) ♪ (夜が開けて朝が来る) ⊠ —

シユンはハーモニカで吹くその曲に感情を込める——両親に捨てられた日からこのハーモニカを吹くことはなかった——両親がいる頃はその曲のメロディは明るい感じが強かったが：今は切ない感じのメロディの方が強くなっていた。

メロエツタもディアンシーもシユンのハーモニカが奏でる明るくも切ないメロディに癒される——リザード・ビブラーバ・チュリネ・ユンゲラー・シエルダーもその旋律を聞いて心地良くなっていた。

— ⊠ (二人つないだ時を) ♪ (誰も消せはしない) ⊠ —

— ⊠ (孤独とか) ⊠ (痛みとか) ♪ (どんな君も感じたい) ⊠ —

月明かりしかない空間に広がっていく明るくも切ない旋律——シユンの両親に捨てられて悲しく寂しい想いがメロディに乗って伝わってくる。

— ⊠ (愛してる) ⊠ (ただそれだけで) ♪ (二人はいつかまた会える) ⊠ —

なぜ捨てられてしまったのかは分からない——けどいつかまた会えることを信じている。

そんな想いがメロディに乗って伝わってきたのを最後に曲は終わった。

「どうだった？上手く弾けてたかな？」

「素晴らしかったですわ♪」

「ええ、とても良い曲でした」

「リザ！」

「ビブ！」

「チュリ♪」

「ユン！」

「シエ〜♪」

メロエツタとディアンシーはシユンのその素晴らしい演奏だと笑顔で拍手し、リザード達も心地の良い演奏に笑顔で喜んでいた。

「フウ…久しぶりだったけど…上手く弾けたみたい…」

シユンはメロエツタ達が自分が弾いた曲を聞いて喜んでくれていることが嬉しくなり、久しぶりだったけど上手く弾けたことに安心する。

「マスターの素晴らしい曲を聞いていたらわたしも歌いたくなってきました♪」

今までシユンのハーモニカの奏でる曲——明るくも切ない旋律を聞いていたメロエツタも歌いたくなったと言って、メロエツタはシユンの肩から宙に浮かび歌い始める。

【BGM いにしえのうた】

『メツメレレメメ　メツレ♪メツレ♪』

せんりつぽケモンと言われるメロエツタ——その美しい歌声を響かせながら空へと舞い上がる——メロエツタの周りはキラキラ？と綺麗に輝き、その美しく幻想的な光景にシユンは思わず見惚れてしまう。

デイアンシーやリザード達もメロエツタの美しい旋律に聞き惚れており、綺麗なメロデイに心が安らぐのを感じていた。

『メツレ♪メツレ♪メツレレレレ』

メロエツタの美しい歌声から奏でるメロデイ……綺麗な髪を靡かせ、手で撫でながら空中で華麗に踊る——するとその美しい旋律と共にメロエツタの姿が光り輝いて鮮やかな黄緑の髪が縦に巻き上がり、オレンジ色に染まり纏っている衣装がスカートのような形状になる。

「えっ、姿が変わった！」

シユンはメロエツタの美しい歌声に心が癒されて聞き惚れていたが……メロエツタの姿がいきなり変化したことに驚いてしまう。

「驚きましたかマスター」

メロエツタの姿が変わったことに驚き呆然としていたシユンの前にメロエツタがゆつくりと下りてくる。

「うん、驚いたよ。メロエツタが綺麗な歌声を聞いていたらいきなり姿が変わったからね。その姿はなんなの?」

シユンはメロエツタの普段と違うその姿が気になり尋ねる。

「はい。この姿は『ステップフォルム』です。普段の姿は『ボイスフォルム』と言います」  
メロエツタはシユンに説明する。オレンジの縦に巻き上がった髪にバレリーナのような姿を『ステップフォルム』、普段の姿の方は『ボイスフォルム』である。

「そうなんだ?でも姿が変わるなんて……いや……前に何かの本で読んだことがある……ポケモンの中には特定の行動や条件で姿が変わる者がいるって……それを確か『フォルムチェンジ』……」

シユンはメロエツタの説明を聞いても姿が変わることに不思議そうにしていたが……昔、読んだ本の中に……ポケモンの中には特定の行動や条件、環境で姿が変わるポケモンがいる……その形態の変化を『フォルムチェンジ』というのを思い出した。

「流石はマスター!良くご存知ですね。わたしのこの姿もフォルムチェンジの一つです。特定の技を使うと姿が変わる、わたしのはこれです!」

メロエツタのこのフォルムチェンジは、特定の技を使うことにより姿の変化する例だと説明する。

「フォルムチェンジするとタイプが変わったり、とくせいが変わったりします!」

フォルムチェンジすると姿だけではなく、タイプやとくせいが変化することもある。ちなみに『とくせい』とは——近年の研究で発見されたポケモンごとに持っている特殊な能力のこと。いわゆるパッシブスキルと言われる物である。

ポケモンにはタイプや技以外に不思議な能力があることがハウエン地方でのポケモンの研究で初めて分かり、今もポケモンの『とくせい』についての研究が行われている。そのため…カントーやジョウト地方ではまだポケモンの『とくせい』について認知度が低く、あまり知られていない、理解している者も少なく…まだまだ知っている者は少ない。

「因みにこのステップフォルムの時はノーマル・かくとうタイプに変わります」

シユンは前にポケモン図鑑でも認識出来ないメロエツタとディアンシーのことについて技やタイプのことを聞いていた。

メロエツタはノーマル・エスパータイプ。ディアンシーはいわ・フェアリータイプ。シユンはフェアリータイプについては知らなかったが、詳しく調べて見ると——近年カロス地方で発見された新しいタイプである事が分かった。

ドラゴンタイプを完全無効化、かくとう・あくタイプに強く、どく・はがねタイプに弱い。

「なるほどね……でもその姿も可愛いし、歌もすごい良かったよ！」



シユンは『ステップフォルム』にチェンジしたメロエッタの姿も可愛いし、歌もすごい良かったと誉める。

「そんな可愛いだなんて／＼／＼！でも…ありがとうございます／＼／＼！」

メロエッタはシユンに可愛いと言われたのが嬉しくて顔を赤くして照れてしまう。

「ええ、マスターの曲もメロエッタの歌もとても良かったですわ♪」

「リザード！」

「ビブ！」

「チュリ！」

「ユン！」

「シエー！」

「ディアンシーやリザード達もシユンの曲とメロエッタの歌をととても良かったと誉めてくれる。」

「うん、ありがとうみんな。それじゃあもう遅いし、明日に備えてそろそろ休もうか？」

「そうですね…そろそろ休みましようか」

「わたくしも眠くなってきましたわ…」

シユンがそう言うのとみんなももう眠いのか目をウトウトとさせて、リザード達をあぐびをして今にも眠ってしまいそうになっている。

シュン達は明日に備えてもう眠る準備をする……今日は比較的 温かいのでシートの上に寝袋を置いてその上で寝る。

毛布を被ると左右にメロエツタとディアンシーが並んで眠り、リザード達をボールに入れようとすると今日は一緒に寝たいのかボールに入るのを嫌がり、みんなで眠ることにした。

「おやすみ……メロエツタ…ディアンシー」

「はい……おやすみなさい…マスター」

「おやすみなさい……マスター」

シュン達は明日に備えてゆつくりと休むのだった。

「ふう……やつと着いた。ここがヤマブキシテイか…」

シュンは朝になり目を覚ますと…寝袋などを片付けてヤマブキシテイを目指して歩く。

道中色々寄り道して木の実などを取ったり、珍しい石など拾った。そして大したトラブルもなく、たった今 到着したのである。シュンはヤマブキシテイを見渡すと…高いビルが建ち並び、人や車が次々と行き交う賑やかな街であり、カントー地方の中でも屈指の大都会である。

「すごい人がいっぱい歩いてるね。高いビルばかりでマサラタウンとは全然違う……」

シユンはたくさん人が行き交い、見上げる程の高いビルばかりであることに驚き、マサラタウンとは大違いだと思う。

「マスター。この街にはヤマブキジムがあります。エスパールタイプのポケモンジムのようです。ガイドブックによると……ジムリーダーのナツメも超能力者らしく、負けるとどうなるか分からないという噂から挑戦者が極端に少ないらしいですが、どうしますかマスター」

メロエツタはカントー地方のポケモンジム公式ガイドブックのヤマブキジムの紹介のページを見ながらシユンに説明する。

ヤマブキジムのジムリーダーについてや使うタイプーヤマブキジムに至ってはその危険性まで紹介されており、メロエツタはシユンにどうするのか尋ねる。

「うん。ちよつと不安だけど……メロエツタ達もいるし大丈夫だよな?行こうみんな」

シユンは少しばかり不安そうにしながらも……メロエツタ達もいるから大丈夫だと思いい、挑戦することを決める。

「そうですね。マスターの事は何かがあってもわたし達が守ります!」

「そうですわ。マスターはわたし達が守りますのでご安心を!」

メロエツタとディアンシーはシユンの事を絶対に守ると約束する。

「うん、ありがとう2人とも。それじゃあ行くか」

シユンは自分を守ってくれる二人に嬉しくなり頷いて、ヤマブキジムへと向かう。

シユン達はヤマブキジムに挑戦する決心をすると、ヤマブキジムへと向かい、そして大きい建物であるヤマブキジムへと到着したのだった。

「ここがヤマブキジムか……それじゃあ行くか！」

「はい（ですわ）」

シユン達はヤマブキジムの中へと入って行く。

「すいませ〜ん……どなたかいらっしやいませんか？」

シユンはジムの中へ入ると……誰かいないかと大声で呼ぶ。

「何だ少年……このヤマブキジムに何のようだ……」

シユンが誰かいないかと呼ぶと、ジムの奥の扉から白衣を着た顔にマスクを付けた手にスプーンを持った男性が出て来る。

「えと……ぼくはヤマブキジムに挑戦しに来ました。シユンと言います。ジム戦をお願いしますー！」

シユンは出て来た男性にジム戦に来たと言って挑戦させてくれるようお願いする。

「ふん……挑戦者か……この前も身の程知らずの小僧が来たが……まあ良からう！着いて来  
て」

白衣の男性はそう言うとき、 シュンに着いて来るように言つてジムの奥へと進んで行く。

シュンはその後を着いて行き、扉の先へと進むとそこにはバトルフィールドがあり、その奥にカーテンで包まれているが…その後ろに人がいることが分かる。

「ナツメ様!またジム戦を望む挑戦者がやつて参りました。先程のようにナツメ様のお力で返り討ちにして下さいませ!」

白衣の男性がカーテンの手前で跪いてナツメにジム戦の挑戦者が来た事を知らせると男性の体を青色の光が包み、男性が苦しみ始める。

「グウウ〜?!…申し訳ありませんナツメ様(苦)……私ごときがまたもや出過ぎた発言を申しあげまして……」

男性はナツメの超能力によつて苦痛を受けており、しばらくすると光が止んで…男性が解放されると一目散に逃げ出す。

「ヒッ!ヒイイ〜〜!!」

男性は苦痛から解放されると…恐怖からか慌ててバトルフィールドの出口へと走つて行つた。シュンは男性が逃げて行くのを見送るとカーテンの開く音がして前を向くとカーテンの奥から小さな女の子が姿を現す。

「フフフ…フフフフフ…」

小さい女の子が姿を現すと嬉しそうに笑う。

「あの女の子がジムリーダーのナツメ?……ガイドブックに書いてある姿とだいぶ違うけど……」

シユンはガイドブックに書いてあるナツメとだいぶ違うと不思議に思っている……。

「マスター……あれは本物のナツメではございません……」

シユンの肩に姿を消しているメロエッタがあれは本物のナツメではないと言う。

「本物のナツメじゃない?じゃあ あの女の子はいつたい?」

シユンがメロエッタの発言を疑問に思っていると……。

「フフフ……また来てくれた……ワタシと遊んでくれるお友達……」

小さい女の子はシユンを見て嬉しそうに目を妖しく輝かせる。

「色々と気になるけど……ぼくはシユンと言います。ジム戦をお願いします」

シユンは色々と気になる事があるが、ひとまずジム戦をお願いする。

「うん……戦っても良いよ……だけど負けたら……ワタシのお友達になって遊んでくれる?」

シユンが女の子にジム戦を頼むと女の子は了解するも……負けたらお友達になって遊んでくれるとシユンに言う。

「友達? うん…わかったよ!」

シユンは女の子の条件の意味は分からないが…取り合えず了解する。

「マスター、気をつけて下さい。負ければどうなるのか分かりません。ですがご心配なく…人間にしては強い超能力ですが、わたしに比べれば大したことはありません…何も心配せずバトルして下さい」

メロエツタはシユンに気をつけるように注意し、自分がいるから何も心配せずにバトルするようにとシユンを応援する。

「うん、ありがとうメロエツタ」

シユンとメロエツタがそんな会話をしていると――。

「誰と話してるの?」

女の子もメロエツタが見えずとも何かを感じるのか、シユンが小声で話してるのを聞き不思議そうに聞く。

「ううん…何でもないよ」

シユンは女の子に何でもないと行ってトレーナーボックスへと入る。

女の子もそれ以上は追求することなく、カーテンが全て開き女の子の後ろから女の子を抱いている女性が姿を現す。

「来たのね……来てくれたのね……でも不思議な感じ……あなたからは何か違う感じがする……」

女の子を抱いている女性がシユンの事を不思議と言い……イスから浮かび上がってトレーナーボックスへと立つ。

「マスター。あれが本物のナツメです。あの女の子はナツメの心が作った幻影です……なぜそうなっているのかはわかりませんが」

メロエツタは女の子を抱きかかえてる女性の方が本物のナツメだと教え、女の子の方をナツメの心が作り出した幻だと言う。

「1対1……掛け値なしの1本勝負……良いわね？」

「はい……」

ナツメはジム戦のルールを説明し、シユンは了解の返事をする。

「いでよ……ユンゲラー……」

「ユンゲラー！」

女の子が持つモンスターボールからユンゲラーが出て来る。

「ユンゲラーか……。ぼくの持つてるポケモンでエスパークタイプに有利なポケモンはいない……だったらこつちも……頼んだよユンゲラー！」

「ユンゲラー！」



シユンもナツメのユンゲラーに対抗しようと、自分もユンゲラーを出す。

「(マスター……。確かにエスパータイプ同士ならそう簡単にはやられません……。油断は禁物です!)」

メロエツタはシユンの判断に同意しながらも油断しないように忠告する。

フィールドではユンゲラー同士がお互いを睨み合う。ナツメは自分の使うポケモンと同じユンゲラーが出て来ても眉一つ動かさず冷静にしている。

「フフフ……。いくら同じポケモンだろうとワタシには勝てないわよ……」

小さい女の子の方が同じユンゲラーだろうと勝てないとシユンに呟く。

「それはやって見なくちゃわからないよ。ユンゲラー。サイケこうせん!」

「ユン!」

シユンはユンゲラーに「サイケこうせん」を指示し、ナツメのユンゲラーに放つ。

「ユンゲラー……。『テレポート』……」

「ユン!」

ナツメがユンゲラーに指示すると、ユンゲラーは「サイケこうせん」が命中する直前に……。そこから一瞬で消えてシユンのユンゲラーの後ろに現れる。

「ユン!」

「『テレポート』か! だったらユンゲラー……。『ねんりき』!」

「ユン〜！」

シユンのユンゲラーはナツメのユンゲラーに“ねんりき”を放つ。

「ユンゲラー……こちらも“ねんりき”……」

「ユン〜！」

ナツメもユンゲラーに“ねんりき”の指示を出し、“ねんりき”同士がぶつかり合う。

しばらく拮抗していたが……ナツメの超能力とユンゲラーの力が合わさった“ねんりき”は強力で、シユンのユンゲラーの“ねんりき”を破り、吹き飛ばす。

「ユン〜……」

「ユンゲラー！大丈夫ユンゲラー？」

「ユン〜！」

シユンは“ねんりき”で吹き飛ばされたユンゲラーを大丈夫かと心配すると、ユンゲラーは大丈夫だと言うように頷く。

「強い！さすがはジムリーダー。すごいパワーだ……」

「それだけではありませんマスター……おそらくはナツメ自身の超能力とユンゲラーの力が合わさり、あのパワーになっているのでしよう。気をつけて下さい……」

「（うん わかった）それならユンゲラー！“サイコキネシス”」

「ユン〜!」

シユンはユンゲラーに“ねんりき”よりも強力な技“サイコキネシス”を指示する。

「ユンゲラー……こちらも“サイコキネシス”!」

「ユン!」

ナツメも“サイコキネシス”を指示し、またもや同じ技がぶつかり合う。そしてまたもやナツメのユンゲラーが……シユンのユンゲラーの“サイコキネシス”を破る寸前に……!

「今だユンゲラー!交わして“れいとうパンチ”!」

「ユン!ユンゲラー!」

シユンは“サイコキネシス”が破られる寸前に……交わしてユンゲラーに“れいとうパンチ”を指示、ユンゲラーは“サイコキネシス”を交わすと素早くナツメのユンゲラーに接近して“れいとうパンチ”を繰り出す。

「ユンゲラー〜」

「何!」

ナツメのユンゲラーがシユンのユンゲラーの“れいとうパンチ”を受けて吹っ飛ばす……ナツメはシユンのユンゲラーの素早い攻撃に驚く。

「今だよユンゲラー!“サイケこうせん”!」

「ユン〜！」

シユンはユンゲラーに追撃の“サイケこうせん”を指示し、吹き飛ぶナツメのユンゲラーに“サイケこうせん”を放つ。

「ユン〜……ユン……」

ナツメのユンゲラーは“れいとうパンチ”の後に続けて“サイケこうせん”を受けただため……フラフラとして倒れそうになる。

「よし！もう少しだよユンゲラー」

「ユン〜！」

シユンはダメージの連続で……戦闘不能寸前で倒れかけているナツメのユンゲラーを見てもう一押しだと確信する。

だが――。

「ユンゲラー……“じこさいせい”……」

ナツメは戦闘不能寸前となっている自分のユンゲラーを見ても眉ひとつ動かさず……冷静に回復技の“じこさいせい”を指示する。

「ユン〜！」

ナツメのユンゲラーは“じこさいせい”をして失った体力を回復させる。

「あの技は〜！」

「(マスター。〃じこさいせい〃は体力を回復させる技です。ですが回復させた直後は動けません!今の内に攻撃を……)」

「うん!せめて少しでもダメージを……ユンゲラー〃サイコキネシス〃!」

「ユン〜!」

シユンは〃じこさいせい〃の直後で動けないナツメのユンゲラーに〃サイコキネシス〃を放つ。

「ユン〜……」

ナツメのユンゲラーは〃じこさいせい〃の直後で避けられずに〃サイコキネシス〃で吹っ飛ぶ。

「そのまま〃れいとうパンチ〃だ、ユンゲラー!」

「ユン〜!」

シユンはユンゲラーに追撃の〃れいとうパンチ〃を指示し、攻撃しようとする。

「ユンゲラー……サイコキネシス……」

「ユン……」

ナツメはユンゲラーに〃サイコキネシス〃を指示し、〃れいとうパンチ〃で攻撃しようとするシユンのユンゲラーの動きを止める。

「ユン!」

「ユンゲラー！」

シユンとユンゲラーは攻撃が止められたことに驚く。

「なかなかやるようだけどここまでね…ユンゲラー…：…サイケこうせん”！」

「ユン〜〜！」

ナツメはユンゲラーに”サイケこうせん”を指示する。

「ユン〜〜」

シユンのユンゲラーは”サイケこうせん”を受けて吹っ飛ぶ。

「ユンゲラー！大丈夫ユンゲラー！」

「ユン〜……」

シユンは…傷ついて大きなダメージを受けて吹っ飛んだユンゲラーを心配して大丈夫と声をかける――。

ユンゲラーはシユンの心配する声を聞いて…：…”サイケこうせん”を受けてポロポロ口になった体に必死に力を入れて立ち上がろうとする。

「頑張れ…：…頑張れユンゲラー!!」

シユンは傷つきダメージを負っても立ち上がろうとしているユンゲラーを見て、必死に戦ってくれるユンゲラーに心からの想いを叫ぶ。

頑張れと応援する…：…自分を信じて戦ってくれるユンゲラーを励まし、最後まで自分

の大切なポケモンを信じている……そんな想いを込めて――。

自分の大切なトレーナーが頑張れと応援してくれている――自分を信じてくれている――。そんなトレーナーの想いにユンゲラーは最後の力を振り絞り立ち上がる。そしてユンゲラーはトレーナーの想いに応える。

「ユン……ユン……!!」

立ち上がったユンゲラーの体が光り輝く。

「えっ!」

「何っ!」

「(これは!)」

立ち上がったユンゲラーが光り輝いたことにシユンだけでなく 相手のナツメも驚き、メロエツタはその現象に気付く。ユンゲラーが光り輝くとその姿を変えてその新しい姿を見せる。

「フリーデイン!」

そこには両手にスプーンを持ったユンゲラーの進化系フリーデインの姿があった。

「ユンゲラーがフリーデインに進化した……」

シユンは驚きながらもポケモン図鑑でフリーデインを見る。

「フリーデイン――ねんりきポケモン。ユンゲラーの進化系。両目を閉じると全身の感覚

がいつそう研ぎ澄まされ、最高の能力が出せる——」

「(おめでとうございませすマスター♪ マスターのポケモンを信じる強い思いがユンゲラーをフリーデインへと進化させたんですわ!!)」

ディアンシーはシユンのポケモンを信じる強い思いがユンゲラーを進化させたと笑顔で浮かべて喜ぶ。

「(通常なら交換する事でしか進化しないユンゲラーがフリーデインに進化した…。マスターのポケモンを信じる強い思いが奇跡を起こしたのですか? やはりマスターは凄いです)」

メロエツタは：通常では交換する事で進化する筈のユンゲラーがフリーデインへと進化した事に驚き——シユンのユンゲラーを信じる強い思いが奇跡を起こしたのだと確信し、やはり自分達が心を開き、愛しているシユンは凄いと笑みを浮かべる。

「フリーデイン……」

「ディーン!」

シユンはユンゲラーが進化したことに呆然としており：思わずフリーデインを呼ぶと、フリーデインは振り向いて頷く……固い絆で結ばれた二人は互いの心が分かっていた。

「……馬鹿な……だが、いくら進化しても無駄よ：ユンゲラー……『サイコキネシス』!」

「ユンゲラー!」



ナツメは本来あり得ないはずの進化を見て一瞬動揺するも——すぐに冷静に、無駄だと吐き捨ててユンゲラーに“サイコキネシス”を指示する。

フリーディンはシユンの方を向いて指示を待つ。

「うん!キミの進化した力を見せてあげよう。フリーディン: “サイコキネシス”!」

「フゝディン!」

シユンは進化したフリーディンの力を見せようと: “サイコキネシス”を指示する。フリーディンは念の力を込めてユンゲラーの“サイコキネシス”にぶつける。進化してパワーアップした“サイコキネシス”はユンゲラーの“サイコキネシス”を撃ち破り、ユンゲラーを吹っ飛ばす。

「ユンゝゝ!?!」

「何!」

先程とは違い: ユンゲラーの“サイコキネシス”を簡単に撃ち破り、ユンゲラーは吹っ飛ばされてしまい——それを見てナツメは驚きで目を見開く。

「これでとどめだ!フリーディン “れいとうパンチ”だ!」

「ディン!」

シユンはとどめの“れいとうパンチ”を指示し、進化して上がった身体能力で素早く接近してユンゲラーに“れいとうパンチ”を叩き込む。

「ユン……ユン……ユン……」

ユンゲラーの腹に「れいとうパンチ」が決まり吹っ飛ぶユンゲラー……ふらつきながらも立ち上がるうとしたが……限界が訪れて、力が抜けるように倒れて戦闘不能になった。

「やった……勝った！ やったよフリーデイン、ありがとう！」

シユンはユンゲラーが倒れて戦闘不能になったことを確認すると、シユンは勝利の喜びを感じながらフリーデインに走り寄り、抱きつく。

「フリーデイン♪」

フリーデインも嬉しそうに笑顔でシユンに抱きつく。

シユンとフリーデインがお互いに勝利を喜びあっていると……先程から静かなナツメの方を見ると……負けたことが信じられないのか呆然として……シユンはナツメに勝利したのでヤマブキジムのバツジを貰おうと声を掛けようと近づこうとしたその時!!

「……イヤ……イヤアアアア……?!?!」

ナツメは敗北の現実を受け止めきれず呆然としていたが……自分が敗北したことを自覚すると……なにかが壊れたように先程の無表情から一変して恐慌し、パニックになり叫びだす。

そしてナツメの狼狽した悲鳴に呼応して超能力で周りの物が飛び交い、壁が罅割れ

る。

「くっ!!いきなりどうしたんだろう?ナツメさん…」

シユンは突然、尋常じゃない状態で悲鳴をあげパニックになっているナツメに驚いて、ナツメの超能力の暴風から身を守りまながら被害に合わないように端に移動する。

「フリーディン。取り合えずユンゲラーを被害に合わないようにつちに移動させるんだ」

「ディーン!フリー」

シユンはフリーディンに倒れているユンゲラーが超能力の被害に合わないようについてから「ねんりき」で移動させる。

「よし、それにしてもナツメさんはいったいどうしたんだろう?」

シユンはナツメが何故いきなり恐慌し、パニックになっているのかと不思議に思っている——。

「それは私が説明しよう」

後ろから声が出たかと思うとそこには帽子を被った中年の男性がシユンの後ろにいた。

「えと…あなたは?それにいつからそこに…」

シユンはいきなり後ろに現れた男性に誰なのか尋ねる。

「私はナツメの父親だ。いつからいたのかは置いてこう。それより今は…ナツメがどうしてああなっているのかを説明しよう……」

男性はナツメの父親だと言い、ナツメがなぜあんなことになっているのかを説明すると言う。

「ナツメさんの父親ですか？どうしてナツメさんはあんなことになってるんですか？」

シユンはナツメの父親だと言う男性に…ナツメがどうしてあんな狼狽し、パニックになり、悲鳴を上げて超能力が縦横無尽に荒れ狂るっているのか尋ねる。

「うむ。幼い頃から超能力を使えたナツメは…次第に超能力の訓練にのめり込んでいったのだ…友達も作らず超能力の訓練ばかりしていたナツメを止めようとした私や妻もその力で追い出したのだ……」

ナツメの父親はシユンにナツメの生い立ちについて説明する。

「なるほど…ですが、それと今ナツメさんがこんな状態になっているのどう関係があるんですか？」

「慌てるな…それから私達を追い出したナツメは超能力の訓練を続けていく内にナツメの中に二つの人格が生まれたのだ。」

誰にも負けない強く冷酷な心のナツメと、それでいて寂しがり屋で友達を欲しがらぬ幼い心のナツメという人格が生まれた…あの女の子はナツメのもう一つの心その者な

のだ。ゆえに誰にも負けたことのない強い心のナツメは初めて負けたことで動揺し、精神が不安定になり超能力を暴走させているのだ……強い心のナツメの精神が不安定になれば残るのは孤独なナツメの心のみ……超能力を制御出来ず、このままでは不味いことになる……この辺り一帯が破壊されてしまうかもしれない……」

ナツメの生い立ちと、現在ナツメが暴走していることに何の原因があるのか尋ねるシユンをナツメの父親は慌てるなど言つて続きを話し始める。

ナツメは両親を追い出してからも超能力の訓練に明け暮れてその力を強力な物にしていった。その過程でナツメの心に二つの人格が生まれたのだという。

強く冷酷な心のナツメ——寂しがりやで友達を欲しがる幼い心のナツメ——そしてあの小さな少女は幼い心の人格が実体化したらしい。

それでナツメが何故超能力を暴走させているのかという……初めての敗北のショックで動揺し心が乱れ精神が不安定になり、超能力が制御出来なくなり暴走させてしまったのだ。

現にナツメはヤマブキジムのジムリーダーに就任してからエスパ―タイプのポケモンを操るトレーナーとしての才能も天才的……ナツメが育てたエスパ―ポケモンと自身の超能力の力が合わさり強力なパワーを生み出し、今日までチャレンジャー達を悉く打ち破ってきた。

いつしか『エスパ―少女』としてカント―中に知れ渡った――だがいつしかナツメの強さとその鋭い眼光と不気味な少女の雰囲気、ジムで超能力の訓練をしている怪しく不気味な者達を見た者が――ナツメとのジム戦で負けたらどうなるか分からないという噂が広がり、そんな噂が広がり始めた頃にとあるトレーナーがヤマブキジムに挑戦しに来てナツメに挑んだが負けてしまい恐ろしい目にあつたという――そのトレーナーはギリギリで逃げ出す事が出来たが……大怪我を負い入院したという。その一連の話しが、噂が事実であることを確定させ以来……挑戦者はめつきり来なくなつてしまつただ。

そのナツメが初めて負けたシヨックで強い精神のナツメの心が不安定になり、ナツメの強力な超能力が暴走し……このままではジムだけでなく……辺り一帯まで破壊されてしまふと緊迫とした表情で呟く。今まで二つの精神がバランスを取ることで強力な超能力の制御も不安定になり超能力の暴風が荒れ狂い、ジムの壁や天井に罅を入れ、破壊されていく。

「そんな……だつたら早くナツメさんを止めないと不味いことに……」

ナツメの父親の話しを聞いたシユンは焦り、早くナツメを止めなければ不味いことになるのではと危機感を抱く。

「それはそうなのだが……わたしの力ではナツメの超能力には適わない……打つ手がな

「いのだ……」

「それじゃあ止められないってことですか!」

ナツメの父親は自分の力ではナツメに適わないため止めることは出来ないかと打つ手がなく困った表情で言う……シユンはナツメの暴走が誰にも止められない現状に焦り、ナツメの超能力の暴走によって飛び交う物に当たらないように避けながら——ナツメの生い立ちと暴走している理由を聞き、ナツメを見ていて シユンは心の中で とある想いが駆け巡っていた。

「……何でだろう……ナツメさんを見てると昔の自分を思い出す……両親に捨てられたばかりの……失意の底にいたあの時を……」

シユンは頭を抱えて、一人座り込み超能力を暴走させているナツメを見て昔の自分を思い出していた——。

愛されていると思うっていた両親に捨てられて自身の中の心の中から感情という色が無くなり失意の底に沈み……孤独に苛まれていた時と同じだと感じていた。

超能力の訓練に明け暮れ……誰にも負けず強くあろうとする心の中にあつた、いたずら好きで友達を欲しがる孤独な心を持つナツメ——昔の自分を見ているようで……そんなナツメを見てシユンは決意を固めてナツメの元へと歩きだす。

「何をしている少年!!今 ナツメに近づくのは危険だ。戻って来い!」

ナツメの父親は暴走しているナツメに近づこうとしているシュンに危険だと、戻って来るように言うが…シュンはそのまま暴走しているナツメへと近づいていく。

「……ツ………（ギンツ）!!」

ナツメはシュンが近づいて来ていることに気づくと、精神が不安定になっている状態で近づいてくるシュンに恐怖を感じて、瞳を鋭くギラつかせ青く目を輝かせると超能力でシュンを吹っ飛ばす。

「クッ………ガハア!?!」

シュンはナツメの超能力の暴風を耐えるが…敢えなく吹き飛ばされ地面に背中を強く打ち付ける。

「少年……」

「（マスター……）」

「（大丈夫ですかマスター……）」

ナツメに勢いよく吹っ飛ばされたシュンを見てメロエツタとデイアンシー、ナツメの父親は声を上げる。

「ツツ……大丈夫だよ……心配しないで……」

シュンはみんなに大丈夫だと伝えると…立ち上がり、再びナツメの元へと歩き出す。幼い姿のナツメは静かにシュンの行動を見ていた。



「くっ……ガハア……っ！」

「がっ！」

シユンはナツメの超能力の嵐を何度も受けて地面や壁に叩きつけられたり、超能力で強く体を締め付けられ傷つけられながらも……痛みをこらえて立ち上がりナツメの元へと向かう。

ナツメの元に着く頃には——シユンは何度もナツメの超能力で体が傷だらけになり今にも倒れそうになっていた。

シユンは体への度重なるダメージで今にも倒れそうになるが……最後の力を振り絞って座り込み震えているナツメにそつと両手で優しく抱きしめる。

「……えっ?……」

超能力を暴走させ震えていたナツメは呆然とする……自身の超能力を暴走させて散々痛めつけたのに、自分を殴るでもなく優しく抱きしめてきたからだ。

「……はあ……はあ……大丈夫……落ち着いて……なにも怖がることはないんだよ……」

シユンはナツメを優しく抱きしめながら精神が不安定になっているナツメに大丈夫と……落ち着いて……怖がることはない……ナツメを落ち着かせる。

「……くっ(ズキッ!)……あなたは一人じゃない……あなたには……あなたのことを想ってくれる人(親)がいる……」

体に走る痛みを耐えながら……シユンはナツメに伝える——あなたは一人じゃないと——あなたのことを想ってくれる大事な人達がいると——。

「……ふう……ふう……例え強くなかったって……超能力が使えなくなかったって……ナツメさんのことを大切に想ってくれてるよ……だから……寂しくないよ……」

抱きしめられて呆然としているナツメに……そして少し離れた所で……シユンと強くあろうとする心のナツメを見ている、幼く寂しがりやの心のナツメを優しい言葉で安心させる。

例え強くなくても——超能力が使えなくても——大切に想ってくれていると——だから寂しくないよと——。

シユンの思いやりのある優しい言葉がナツメの不安定になっていた精神を落ち着かせ……強くあろうとする心の中に潜んでいた孤独感が癒されていくのを感じていた。

シユンの生来持つ優しさは……長年のナツメの強くあろうとすることで誤魔化していた孤独な心を癒していく——ナツメは優しい笑みを浮かべて、瞳から涙を流しながらナツメも両手でシユンを抱きしめる……そして——。

「……ありがとう……」

ナツメは長い間……することのなかった優しい笑みを浮かべてシユンに感謝の言葉を呟く。

ナツメは少しずつ落ち着きを取り戻し、不安定になっていた超能力も段々と収まってきた。  
いく。

暴走していたために激しく体力を消耗したのか、ナツメは気を失ってしまう……しかし、その表情は穏やかで優しい微笑みに満ちていた

そしてナツメに続いてシユンも……ナツメの超能力で散々体を痛めつけられて限界だったのか……ナツメを受け止めるように気絶してしまう――。

シユンとナツメ……二人の様子を見ていた幼い心の姿のナツメは嬉しそうに優しい笑みを浮かべて微笑むと……満足そうな表情で姿を消した。

「ナツメ！少年！」

「マスター！」

「しっかりと下さいマスター！」

シユンが気を失い倒れてしまったのを見て、思わず姿を現してシユンの元へと向かうメロエツタとディアンシー。

突然、姿を現した2体の人の言葉を喋るポケモンに……ナツメの父親は驚愕の表情になりながらも……今はナツメとシユンの治療が優先だと考えて、倒れたシユンとナツメを介抱するために二人を運ぶ。ナツメの父親がナツメを運び、シユンはメロエツタが「サイコキネシス」で優しく運んでいく。

あの後——ナツメの超能力の暴走を止めるために無茶をして体の痛みが限界に達し、気を失ったシユンは……ジム戦の翌日に目を覚ました。

目を覚ました後が大変だった……シユンのことを心配していたメロエツタとディア  
ンシーは、シユンが目を覚ました事に気づくと涙を流しながら抱きついて離れなかつた  
からだ。

2人に抱きつかれながらシユンは自分の体を見回すと……治療を受けて体中に包帯  
が巻かれていた。そして治療されて眠ったままだったシユンの身を案じて来てくれた  
ナツメの父親から、その後のことを教えてくれた。

気を失ったシユンとナツメは……ナツメの父親が呼んだ救急車で病院へと運ばれ治  
療を受けた——ナツメは超能力を暴走させた事による体力を消耗し、精神的疲労で衰弱  
していたがゆっくり休めば回復するという事で安心らしい。シユンも超能力によつ  
て体中に酷い打ち傷や青あざを負ったが——幸い骨に以上はなく、傷やあざも安静にし  
ていれば数日で治るようである——シユン達はその診断結果に安心する。

しかし、それだけではなく……ナツメの母親も戻って来たらしい——聞くところによ  
ると幼く寂しがりやの心のナツメの超能力によって人形へと変えられていたらしいが  
……ナツメが両親と過ごした頃の優しい心を取り戻したので、幼く寂しがり屋の心が消  
えて人形から元に戻る事が出来たのである。

その後…入院していたシユンの元にやってきたナツメの両親に娘のことでお礼を言われた。

ナツメを救ってくれて本当にありがとう——。シユンは2人の心からの感謝に思わず照れてしまう。そして続いて目を覚ましたナツメは両親に今までの事を謝る——2人はナツメの事を優しく抱きしめる——昔のように仲良しの家族に戻れたことが嬉しく涙を流している。

ナツメも自分の事を優しく抱きしめてくれた2人に、嬉しくて涙を流して抱きしめあった。

ナツメと両親がまた昔のように仲良しの家族に戻れた光景を見て、良かったと安心して微笑むシユン。

そしてシユンが入院してから数日後——超能力で受けた打ち傷や痣も思ったよりも早く治り、無事に退院することが出来た。そして退院の準備が終わると、まだ精神的疲労で入院しているナツメの代わりにナツメの父親からゴールドバッジを貰って出発しようとしていた。

「お二人とも…色々とお世話になりました」

シユンは自分を病院に運んで入院の手続きや治療費も払ってくれたり、ナツメを助けてくれたお礼にご馳走もしてくれたことを……お世話になりましたと頭を下げてお礼

を言う。

「いやいや……礼を言うのは私達の方だ！ ナツメが昔の優しい良い子に戻ってくれたのはシユンくん……君のおかげだ！」

「本当にありがとうございまして……。これからはまた昔のように家族全員で暮らすことが出来ます。シユン君本当にありがとう！」

シユンが礼を言うと2人はお礼を言うのはこちらだと言って、また昔のように娘と一緒に暮らすことが出来ることを喜んでおり、本当にありがとうと感謝する。

「いえ……これからは家族との時間を大切にして下さい。それじゃそろそろ行きますね」

「そうか……もう行くのか。シユン君 気をつけて行くんだぞ」

「また来て下さいね。ナツメと3人でまたシユンくんがヤマブキシテイに来るのを楽しみにしているわ♪」

「はい。それじゃナツメさんにもよろしくと伝えて下さい。さようなら」

シユンは2人にそろそろ出発すると伝えると、2人とも少々名残惜しそうな表情になりながらもナツメの父はシユンに気をつけて行くように言い、ナツメの母はまた来て下さいねと言ってくれた――。

シユンは2人に頷くと入院しているナツメによろしくと伝えて出発しようとしたそ

の時。

「待って……」

病院の入口からナツメが慌てた様子でこちらに向かって走って来る。

「ナツメさん!？」

シユンは、入院中でまだ精神的疲労の回復のためにベッドで寝ているはずのナツメが激しく走っているナツメを見て驚く。

「…ハア…ハア…良かった…まだ居てくれて…」

ナツメは超能力を暴走させた影響で体力が完全に戻っておらず…まだゆっくり休んでいなくてはいけないのに……激しい運動をしたためか、大きく息を乱している。

「駄目じゃないナツメ!!あなたはまだ寝てないと!体力がまだ戻ってないのだから」

「そうだナツメ。お前はまだゆっくり休んでなさい……ジムの事はお父さん達に任せて…」

2人は休んでなくてはいけないナツメが無理をしてベッドから出てきた事を注意し、ジムや身の回りの事は自分達に任せてゆっくり休むように言う。

「…うん…ごめんなさい…お父さん…お母さん……でもどうしてもシユン君に改めてお礼を言いたかったの…」

ナツメは心配させた事を2人に謝ると…どうしてもシユンにお礼を言いたいとシユ

ンの前まで近づく。

「…シユン君……本当にありがとう……。あなたのおかげで私は一人じゃないことに気づけた……」。

幼い頃に……超能力の訓練に夢中になって……私の事を想ってくれたお父さんとお母さんまで追い出して……友達も欲しいとも思わなかった……それで一人になって、私の中にあった寂しいと思う気持ち……もう一人の私を生んだ……。

お母さんを人形に変えたり……お父さんに酷い事をした……でもシユン君はわたしの目を覚ましてくれた……超能力なんかよりも……大切な物があることを教えてくれた……あなたのおかげで……わたしは本当に大切な物に気づく事が出来た……シユン君……本当にありがとう」

ナツメはシユンの両手を握って、シユンのおかげで本当に大切な物と存在に気づく事が出来たと心の底から感謝してお礼を言う。

「ううん……そんな感謝される事はしてないよ。ぼくはぼくの出来る事をしただけ……ナツメさんのお父さんとお母さんと……本当の家族に戻れて……良かったよ！」

シユンはそんな感謝される事はしてないと……、自分に出来る事をしたただけだと……ナツメの両親と本当の家族に戻れて良かったと喜んでる。

「……シユン君……！」



「シユンのその自分を飾らず相手を気遣う言葉にナツメはシユンの優しさに心から嬉しい思いが溢れて頬が赤くなる……そして……。」

「……ありがとうシユン君……!……これはお礼よ……!」

ナツメは再度お礼を言つて顔を赤くしながら、お礼だと言つてシユンの頬に顔を近づけて……そして――。

――チュツ／＼／＼／!――

ナツメが顔を赤くしながらシユンの頬にチュツ／＼／＼／と優しくキスする。

「えっ……ナツ! ナツメさん……!?!」

「なっ!!!」

「あらあら……。ナツメったら♪」

シユンは……一瞬なにをされたのか気づかず呆然としていたが……しばらくすると何をされたのか気づいて顔を真っ赤にして慌ててしまい、ナツメの父親も娘の行動に驚き、母親は娘の大胆な行動に嬉しそうに微笑む。

「(あの女! わたし達のマスターに何てことを!!)」

「(許せませんわ!!)」

「(落ち着いて……メロエッタ、ディアンシー)」

そのナツメの行動を見ていたメロエツタとディアンシーは——頬を膨らませて怒る。シユンは小声で2人を宥める。

「びつくりした／＼／＼／＼……」

シユンはナツメの突然の行動に驚き、鼓動が早くなっていた。

「…はあ…はあ…ふう…落ち着いた。それじゃナツメさん、お二人も…ぼくはそろそろ行きます。皆さん お元気で！」

シユンはゆつくり深呼吸をして鼓動を落ち着かせると……ナツメと2人にそろそろ行きますと言つて歩き出す。出発するシユンを見送りナツメと2人は手を振つてシユンを見送る。

「またね…シユン君〜」

「気をつけて行くんだぞ〜！」

「本当にありがとう〜！」

ナツメ、ナツメのお父さんとお母さんは旅立つシユンの無事を祈り、見えなくなるまで手を振つてシユンを見送るのだった。

「行っちゃったわねシユン君……大丈夫？ナツメ」

ナツメの母親は……シユンの去つて行つた方をずっと見ているナツメに大丈夫かと聞く。

「…うん…大丈夫よお母さん…。次にシユン君がヤマブキシティに来た時に立派なジムリーダーになつてるようにこれから頑張らなきゃ…」

ナツメは自分を心配する母親に大丈夫だと言つて…次にシユンがヤマブキシティに来る時には立派なジムリーダーになつてるように頑張らないといけないと意気込む。

「そうだな。これから頑張らないとな! だがナツメ、今はゆっくり休みなさい。後の事はお父さん達に任せて!」

ナツメの決意を聞いた父親は頑張らないとなと笑みを浮かべて言う。だけど、今はまだ体力が完全に回復してないためゆっくりと休むように言う。ジムなどの事は自分達に任せると言つて…。

「うん! ありがとうお父さん…!」

ナツメは自分を氣遣つてくれる、そんな父親にお礼を言う。

「フフ♪ナツメはそれだけじゃなくて、お嫁さんのスキルも磨かなくちゃね!」

ナツメのお母さんはジムの事だけではなく、女の子としてのスキルも上げないとね♪と笑顔でウインクして言う。

「…なっ／＼／＼! お母さん／＼／＼!」

ナツメは母親の発言に顔を赤くして驚く。

「フフ♪あら? 私はシユン君なら全然OKよ。ナツメより年下だけど、あんな良い子は

他に居ないわ！」

照れているナツメを見た母親はフツツと嬉しそうに笑って、ナツメよりも年下だけど、あんな良い子は他にいないと言って、既にナツメのお婿さんとして認めている。

「なっ!!確かにシユン君は恩人だが、それとこれとは話が別だぞー!」

ナツメのお父さんはそれを聞いて、慌てた様子でナツメのお母さんを説得しようとするが——お母さんはあらあらと旦那の説得の言葉を交わす。

ナツメはそんな両親を見て呆れて、シユンの行った後の方に再び視線を向ける。

「…シユン君…また会いましょうね……」

幼い頃に超能力に目覚め、誰よりも強くいようとしたナツメはシユンによって孤独の心から開放され家族との絆を取り戻すことが出来た…ナツメはシユンとまた会える日を願うのだった。

余談だが——ナツメがシユンによって家族との絆を取り戻し、シユンがヤマブキシテイを去った日から翌日——。

シユンがヤマブキジムに挑戦する数日前にヤマブキジムに挑戦しに来た少年がいた。ピカチュウを連れて2人の仲間と一緒にヤマブキジムに来てナツメに挑戦したが手も足も出ずにやられてしまい、ナツメに勝つためにシオンタウンでゴーストポケモンをゲットしてピカチュウを連れて少年がヤマブキジムに再び挑戦に来たが——ジムは

休日になっていた。

驚いた少年一行はジムの人に話しを聞くために向かおうとした時……ヤマブキジムから自分にゴーストポケモンのゲットを進めたおじさんが出て来たため驚く。

おじさんに話しを聞いたところ……自分はナツメの父親だと言い、昨日来た挑戦者によつてナツメの心は救われたのだと……心の底から嬉しそうにその時の事を語り、そしてナツメは精神的疲労で入院中のため……ジムは休業中だと言う。

少年は当然納得出来ずに何とかジム戦をしてほしいとお願ひするが……ナツメは療養中のため……ナツメの父親は特別にバッジを渡す。当然少年はジム戦をしてないのに受け取れないと断るが、仲間の少女と青年に必死に説得されてバッジを受け取る。

どうやら前回、少年のジム戦の付き添いでいき、ナツメの超能力によつて怖い目に合つたのがトラウマになつていようであり、もうナツメと関わり合いたくないのか一生懸命に少年の事を説得している——少年は2人の迫力に押されて……ジムリーダーと戦わずにバッジを受け取るのは納得いかないが……渋々納得して次のジムのある街へと旅立つのだった。

因みに少年に着いてきたゴーストポケモンは——何も面白い事がないと分かると詰まらなそうにしてシオンタウンの自分の住処へと帰つて行った。

## 第五話 麗しき舞姫エリカ！くさタイプの境地！

前回——シユンはヤマブキシジムに挑戦し、ナツメの強力なエスパータイプのポケモンの攻撃に苦戦しながらもシユンの想いに答えたユンゲラーが奇跡を起こしフリーデインへと進化して見事、ナツメのユンゲラーを打ち破りジム戦に勝利した。

そしてナツメは初めての敗北によるショックで精神が不安定になり超能力を暴走させてしまうが——シユンは傷つきながらもナツメに近づいて優しい心でナツメの閉ざされていた心を開き、ナツメの心を癒し、ナツメとナツメの家族との絆を取り戻す事が出来た。

そしてシユン怪我の治療が終わり退院すると…ナツメと再開の約束をしてヤマブキシティを旅だったのだった。

シユンがヤマブキシティを出発してから翌日——。現在シユンはメロエツタの指導の元でリザード達を特訓させながら次の街『タムムシシティ』へと向かっていた。

タムムシシティにはタムムシジムがあり、順調に進んでいて、途中の水辺の前を通ると偶然にも野生のニョロモが出て来る。

シユンはニヨロモをゲットしようと相性の良いチュリネでニヨロモに挑む。

「よし ニヨロモをゲットしよう。行くよチュリネ!」

「チュリ!」

シユンはチュリネに指示すると、チュリネは頷いてニヨロモに向かって戦闘体勢に入る。

「ニヨロ!?ニヨロ〜!」

ニヨロモはシユンとチュリネに気づいて警戒心を露にし、戦闘体勢に入り睨み付ける。

「よし チュリネ “エナジーボール”!」

「チュリ。チュリ〜!」

シユンはチュリネに “エナジーボール” を指示!チュリネはくさタイプのエネルギーをチャージしてニヨロモへと放つ。

「ニヨロ!ニヨロ〜!」

ニヨロモは迫り来る “エナジーボール” を交わすと、チュリネに向かって “あわ” を打ち出す。

「チュリネ、交わして “マジカルリーフ”!」

「チュリ!チュリ〜」

チュリネはニヨロモの“あわ”を交わして、“マジカルリーフ”をニヨロモに放つ。  
 「ニヨロ！ニヨロ〜」

ニヨロモは先程のように攻撃を交わす事が出来ず“マジカルリーフ”が命中し、効果抜群のくさタイプの技を受けて…ひんし寸前に追い込まれる。

「ニヨロー…ニヨロ……」

ニヨロモは“マジカルリーフ”を受けて体力もギリギリでふらふらしており、今にも倒れてしまいそうになる。

「よし、チュリネ。“くさぶえ”でニヨロモを眠らせるんだ」

「チュリ！チュ〜リリリ〜♪」

シユンはニヨロモが戦闘不能寸前に

戦闘不能寸前になっているのを見てチュリネに“くさぶえ”を指示、ニヨロモをねむり状態にしようとチュリネは綺麗な草笛を吹いてニヨロモを眠らせる。

「ニヨロ……zzzzzz……」

ニヨロモは“くさぶえ”を受けて眠ってしまった。

「今だ。いくよ！モンスターボール！」

シユンはねむり状態のニヨロモに向かってモンスターボールを投げる。

ボールがニヨロモに当たると開いてニヨロモを吸い込む……。ボールが数回揺れた



後にカチツとなり、ゲットが成功する。

「やった。ニョロモをゲットだ」

シユンはニョロモが入ったボールを持って、ゲットに成功した事を喜ぶ。

ニョロモの入ったボールはシユンのポケモンボックスへと送られていった。

『ポケモンボックス』——ポケモントレーナーが手持ちに持てるポケモンは6体。6体以上になると自動的にそのトレーナー専用のポケモンを預かるポケモンボックスに送られる。

大体の場合は——ポケモン図鑑を貰った『ポケモン研究所』に送られる。他にポケモンを預り育てる『育て屋』や稀に牧場や実家などに預けているトレーナーも居る。

7体以上になると、ボールが開かなくなったり、自動で転送されたりする。

「よくやったねチュリネ」

「チュリ♪」

シユンはチュリネをよくやったねと誉める。チュリネは喜んでシユンの胸に飛び込んでくる。シユンはスリスリとすり寄ってくるチュリネをよしよしと優しく撫でる。

「お見事でしたわマスター。チュリネもよく頑張りましたね♪」

ニョロモを見事ゲットしたところを見ていたディアンシーがシユンとチュリネを誉める。

「ありがとうディアンシー」

「チュリチュリ！」

3人がそうして話していると、メロエツタがチュリネをじつと見て何かを考えて……納得したように頷くと、こちらに来てシユンにある提案をする。

「マスター。先程のチュリネのバトルを見て思ったのですが……もうチュリネはだいぶ育っています。そろそろ進化をさせても良いかもしれません」

メロエツタは先程のチュリネのバトルを見て充分に強く育っている事を判断したメロエツタは、シユンにそろそろチュリネを進化させてはどうかと提案する。

「そうかな？でも確かにチュリネはだいぶ強くなったよね。うん、進化させてもいいかな。でもチュリネってどうすれば進化するんだろう」

シユンはメロエツタの提案通りにチュリネは確かに充分に育っていると思い、チュリネを進化させる事を決めるが、チュリネがどうすれば進化するのかが分からない。

「チュリ？」

チュリネがどうすれば進化するのか考えているシユンをチュリネは不思議そうに見つめる。

「うーん……あつ！そう言えば……前に何かの本でチュリネは石で進化すると書いてあったよな……」

「流石はマスター。そうです。チュリネを進化させるにはポケモンを進化させる石の1つ『たいようのいし』が必要です」

シユンは前に読んだイツシユ地方のポケモンが乗っている本で、チュリネのページでチュリネの進化の条件にポケモンの石が必要である事を思い出したが……何の石かは分からずにいるとメロエツタが教えてくれた。

「たいようのいしか……ポケモンを進化させる石の1つだよ。でもぼくはたいようのいしを持ってないよ、カントーではほとんど手に入らないみたいだし……」

現在カントー地方で主に扱われているポケモンを進化させる石は主に五種類。

- 1、ほのおのいし
- 2、かみなりのいし
- 3、みずのいし
- 4、リーフのいし
- 5、つきのいし

があり……たいようのいしはカントー地方ではあまり発見されず認知度も低い。シユンがポケモントレーナーとしての旅の役にたつだろうと持ってきたポケモントレーナーの知識マニュアル『進化の石』の項目の説明を見て、どうやってたいようのいしを手に入れようかと考えていた。

「その事については心配ありませんマスター。」

この先にタمامシシティがあり、そこにはタمامシジムがあります。そのジムリーダーはくさタイプの使い手です。このジムリーダーに話しを聞ければ、たいようのいしを手に入れる方法が分かるかもしれません」

たいようのいしをどうやって手に入れようかと考えるシユンに、メロエツタはカントー地方のガイドブック『ジムリーダー』の項目を見て、タمامシジムのジムリーダー『エリカ』はくさタイプの使い手。

たいようのいしを使う事で進化するポケモンはくさタイプのポケモンが多く——くさタイプのエキスパートであるエリカに話しを聞ければ、たいようのいしを手に入れる方法が分かるかもしれないとシユンに教える。

「なるほど！ジム戦に挑む時に聞いてみようか。タمامシシティに行こう」

「ええ」

「はいですわ」

シユンはメロエツタの提案に賛成する——。タمامシジムに挑戦する時に聞いてみようと思ひ、もうすぐ到着するタمامシシティへと向かう。

「……がタمامシシティか——」

シユン達はしばらく歩くと……カントー地方一の大都会『タمامシシティ』へと到着し、建ち並ぶ巨大なビル郡を見上げるシユン。

そしてシユンは街の中にある案内板を見て先ずはポケモンセンターへと向かい、ポケモンを回復させると……たいようのいしの入手するためのアドバイスを貰おうとエリカのあるタمامシジムへと向かう。地図を頼りに歩いていくと前方に大きなドーム型の建物が見えてくる。

「タمامシジム……くさタイプのエキスパートのエリカさんのジムか……」

シユンは大きなドーム型の建物『タمامシジム』を見上げる――。

「(それではいきましようマスター)」

「(レッツゴー!ですわ)」

いつもはシユン以外の人間が居る街ではボールの中に避難しているはずのメロエツタとディアンシーが、いつもの定位置に透明になった状態で出ている。

最初、街の中に入り、ポケモンセンターに向かうまではボールの中に入っていたのに……タمامシジムに向かおうとすると突然姿を消した状態でボールから出てきたのである。

シユンは人間の多い街の中で出てきた2人に理由を聞くと……何か分からないが嫌な予感が出たから出てきたという。シユンは何のことか理解出来ないが特に問題もな

いのでそのままタمامシジムへと向かったのである。

シユンは2人に促されて…タمامシジムの入口から中に入って受付へと向かう。

「すいませーん」

シユンが受付の前でタمامシジムの人を呼ぶ……すると奥から青い髪の女性と薄茶色の髪の女性が出てくる。

「あら？どうしたの僕。タمامシジムに何か用かしら？」

「フフウ。可愛いらしいお客さんねえ」

ジムの奥から出てきた2人の女性——きりつとした青い髪の女性がシユンの前で視線を合わせて何の用かと笑顔で尋ね、薄茶色のおっとりとした雰囲気女性がシユンの事を可愛らしいお客さんねと、ニコニコとした笑顔で言う。

「えつと!?……あの……その……」

シユンはこんな近くで年上の女性と会話した事がないためか焦り……タمامシジムに来た理由を話そうとするも…至近距離で見つめられて思わず照れてしまい中々話す事が出来ない。

ナツメの時は状況が状況だったので照れる事なく話せたが——こうも近くでまじまじと見つめられるとやはり恥ずかしいのか照れてしまうのを隠せない。

そんな目の前で…照れているシユンを見て青い髪の女性はウズウズとしている…そして…。

「あ〜ん♪もう我慢できなあ〜い!この子超可愛い〜♪照れてるところが堪んなあい♪」

シユンが恥ずかしそうに照れているのを見ていた青い髪の女性は顔をニヤケさせて、もう我慢出来ないと照れているシユンを可愛いと言つて抱き寄せる。

「えっ!?!」

「(なっ!)」

「(まあ!)」

シユンはいきなり抱き寄せられたことに驚き、メロエツタとディアンシーも…自分の大切なマスターであるシユンが抱きしめられたことに驚く。

シユンは中性的な顔立ちをしていて…可愛いくも格好良くも見える。マサラタウンには他に居ない珍しい銀髪の髪に、その整った容姿で幼い頃から町の子達にモテていたが…鈍感のシユンは気づかずのために…自分がモテることを自覚出来ていない。

—

「どうしたのぼく? 恥ずかしがらずにお姉さんに話してみて!」

恥ずかしそうにしているシユンを可愛いと思ひ、優しく抱きしめて恥ずかしがらずに

話してみるように言う。

「ちよつとズルいわよアヤコ〜！可愛い男の子を一人占めしてえ〜。わたしにも〜」  
すると、可愛い男の子のシユンを一人占めしている青い髪の女性に向かつて、薄茶色のおつとりとした女性がずるいと言って自分にも抱かせるように言う。

「嫌よ〜この可愛い子はワタシが可愛いがるの！リヨウコはどつか行つてなさいよ」

青い髪の女性はシユンを胸に抱き寄せながら、もう一人の女性にどこかに行くように言う。

胸に抱き寄せられたシユンは恥ずかしさが頂点に達し呆然としている。

「ちよつとアヤコ〜リヨウコ〜受付で何を騒いでるのよ」

「そうよ！受付で騒いでたらジムに来る人に迷惑よ」

ジムの受付で2人が騒いでるのを聞いて：ジムの奥からまた数人の女性達が出て来て、騒いでいる2人の女性に注意する。

「あら？その子はお客さん？」

奥から出て来た女性が、青い髪の女性に抱かれているシユンを見て客なのかと聞く。

「そうよ。このジムに用があつて来てくれたみたいなの！」

青い髪の女性は抱いているシユンの事を出てきた女性達に説明する。

「そうなの。それにしても……その子可愛い顔してるわね。男の子だけど女の子にも見



えるわね。綺麗な銀髪でなんとも言えない可愛さだわ♪」

「きゃ〜〜! 本当! この子超可愛い〜♪」

ジムの奥から出てきた女性達もシユンの事を可愛いと誉めてシユンの周りに集まって頭を撫でたり、抱き寄せたりとシユンを可愛がる。

「あの…その…」

シユンはたくさんの女性達に抱き寄せられて顔を赤くしながらも…要件を言おうとするが、女性達の勢いに押されて何も言えない。

「ちよつと!! この子はワタシが可愛がつてるのよ。離れなさいよあんた達!」

最初にシユンを抱き寄せた青い髪の女性が後から来た女性達に怒こり、離れるように言う。

「フン! 一人占めはさせないわよアヤコ。あなた可愛い系の男の子が好みだものね。」

この子、とても整った顔立ちだし、順当にいけば将来は良い男になるものね…今の内から自分好みにしようとしてるんでしようが、そうは行かないわよ!」

「そうよそうよ! こんな可愛い子の一人占めは許さないわよ」

すると他の女性達も…青い髪の女性に可愛いシユンの一人占めは許さないと怒ってシユンを自分の胸に抱き寄せようとする。

「何よ! 最初にこの子に目をつけたのはワタシよ。この子はワタシが可愛いがるの! あ

なた達は離れなさいよ」

青い髪の女性はシユンを自分の方に抱き寄せて、最初にシユンに目をつけた自分が可愛がると言つて、他の女性達に離れるように言つて自分の方に抱き寄せようとする。

「モガツ…モガ…（くっ…苦しい…）」

シユンは女性達の胸や体に挟まれて息が出来ず…喋る事も出来ずに苦しそうにしている。

「わたし達のマスターに何をしていますか！離れなさい」

「そうですね！マスターに触れて良いのはわたくし達だけですわ！」

先程からシユンが女性達に抱き寄せられたりしているのを見て——メロエツタとデイアンシーは怒つて思わず姿を現し、女性達に離れるように言うが…タママシジムの女性達はシユンに夢中で全然気づかない……。

「あらあら皆さん。そんなに騒いでましてどうしたのでございますか？」

するとジムの奥から着物を着た可憐な女性が受付の方が騒がしい事に気づいて、こちらに歩いてくる。

「「エリカさん!!」」

シユンの周りにいた女性達は…ジムの奥から歩いてきた着物を着た女性の名を呼ぶ。

「あら？その子は…それにそのポケモン達は…」

エリカは自分のジムに勤める女性達に囲まれているシユンやその近くに居たメロエツタとディアンシーに気づいて、特にメロエツタとディアンシーを見て目を丸くしている。

「あなたがエリカですか!ここのジムの女達はいったい何なんですか。マスターに向かっていきなり抱きついたりして!

「そうですわ!!」

こちらに来たのがタママシジムのジムリーダーのエリカだと分かるとメロエツタとディアンシーは いきなりシユンを抱き寄せて争い出したジムの女性達の事で文句を言う。

エリカやジムに勤める女性達は……人間の言葉を話したポケモン?のメロエツタとディアンシーに目を見開いて驚くも…エリカは心当たりがあるからか直ぐに落ち着いてシユンを囲んでいる女性達の方を向いて、女性達はエリカが視線を向けると シユンからさっと離れる。

エリカは自分ジムの女性達の誤魔化すような動作に気づいて静かにため息をもらす。

「あらあら……うちの者達が失礼をして申し訳ありません。うちの子達はあなたのような可愛い子が大好きなんです。それでこのジムに何か御用ですか?可愛いお客さん

♪」

エリカは自分のジムの女性達の失礼を謝罪する——そしてジムに何か用なのかと……まだ呆然としているシユンに尋ねる。ぼおつとしているシユンを肩に乗るメロエツタがつつく。

「マスター！いつまでも呆然としてないで……ここに来た理由を早く言つて下さい」

メロエツタは呆然としているシユンに早くタママシジムに来た理由を話すように言う。

「ハッ!?えと……あの……まず、ぼくの名前はシユンと言います。今日はジム戦のお願いと……エリカさんに聞きたいことがあって来ました……」

呆然としていたシユンは、エリカにジム戦のお願いと聞きたい事があってタママシジムに来たことを伝える。

「あらあら……あなたはシユンさんと言いますの。わたくしはエリカ。タママシジムのジムリーダーをしておりますわ!もちろんジム戦はお受け致しますわ。それで……わたくしに聞きたい事とは何でございますか?」

シユンがエリカにタママシジムに訪れた理由を説明すると……エリカは改めて名乗り、快くジム戦を承諾した後……自分に聞きたい事とは何なのかと尋ねる。

「はい……聞きたい事というのは……この子に関する事なんです。出てきてチュリネ」

「チュリ♪」

チュリネをボールから出すとチュリネはシユンに飛び付いてきたので、シユンは受け止めて抱き抱える。

「まあ、可愛い♪色違いのチュリネね♪」

エリカは、ボールから出てきた色違いのチュリネがシユンの腕の中で甘えるようにすり寄る姿を見て可愛いと微笑む。

「実はこのチュリネの進化に必要なたいようのいしの入手の方法を教えてください。エリカさんはカントーが誇るくさタイプのエキスパート。そのエリカさんならくさタイプのポケモンを進化させたいようのいしがどこで手に入るのかご存知だと思います、教えてください」

シユンはエリカにチュリネを見せて：チュリネの進化に必要なたいようのいしの入手方法を教えてくださいとお願ひする。

くさタイプのポケモンのエキスパートであるエリカなら——くさタイプのポケモンの進化に必要なたいようのいしが手に入る方法を知っていると思ひ、教えてくださいとお願ひしに来たと説明する——シユンのタママシジムを訪れた理由を聞いたエリカは……。

「なるほど…：そうでしたか。そういうことでしたらシユンさん、こちらにいらして下さい」

エリカは一つ頷くと…笑顔でこちらに来るように言つてジムの奥へと歩いて行く。  
「えと?…あの…」

シユンはジムの奥へと入つて行つたエリカを見て、どうすればいいのかと考えていると…。

「ほら!シユンくんもエリカさんに着いて行かなきゃ。ほら行きましょう!」

どうすればいいのか分かつていない様子のシユンを、青い髪の女性がシユンの手をとつてエリカの行く方に着いていくように言う。

「あつ…はい!」

シユンは青い髪のお姉さんに手を引かれて、周りのお姉さん達と一緒にジムの奥へと入つて行く。そこにはバトルフィールドがあり…:周りは植物などの緑に囲まれていて、まるで植物園のようである。

「ここがタマムシジムのバトルフィールドでございますわ!ここではジム戦をしたり、くさポケモンや香水についての講習などを行つたりしていますわ♪」

エリカはシユンが着いて来ている事を確認すると、バトルフィールドがあり、周りに植物があるこの場所についてや、ここで行われている事について説明する。

「ここでジム戦をするんですか。でも、くさポケモンの講習は分かりませんが…:香水つて言うのは?」

エリカの説明に——シユンはジム戦とくさポケモンについての講習をしている事は理解出来たが…香水についての講習とは何なのか分からず疑問に思い、尋ねる。

「シユンくん。このジムではね、色々な植物や花を育てていて、それを調べて香水を作っているのよ!ここで作った香水は街にあるうちの香水のお店で売られるの。それで香水の講習もやってるのよ」

シユンがエリカに香水の事について尋ねると……シユンの隣を歩いている薄緑色の髪をしたお姉さんが説明してくれた。

タママシジムでは色々な種類の花や植物を育てていて、そこから香水を作っており、作った香水を街にあるお店で売っているらしい。そしてその香水を使い、香水についての講習もしているのだと言う。すると紫色の髪をした女の人が小さな瓶を持ってシユンの前を出す。

「ほらシユンくん。これがここで作った香水よ。嗅いでみて」

ここで作った香水だと言ってシユンに臭いを嗅ぐように言う……シユンはお姉さんが手に持っている香水の瓶に顔を近づけてその香りを嗅ぐ。

「甘い香りがします…。良い香りですね。何というか……この匂いを嗅いでいると心が安らぐような…そんな感じがします」

「本当!とても良い香りですわ!」

「ええ、嗅いでいると癒されるようです♪」

シユンは前に出された香水の臭いを嗅ぐと——そこから甘い臭いが漂い、その臭いを嗅いでいるとまるで心が安らぐ感じがして良い気分になる。

デイアンシーとメロエツタも香水からする甘い香りに心も体も癒されリラククスしている。

「そうでしょう〜♪ここで作る香水はカントーの女性達に大人気なんだから♪」

薄紫色の髪のお姉さんが自信満々にここで作る香水はカントー中の女性に人気だと鼻高々に言い、他のお姉さん達もそのお姉さんの発言に頷く。

「因みに！……ここタママシジムは本当は男性は立ち入り禁止なんだけど……シユンくんは可愛いから大丈夫よ♪」

「うん♪可愛いくて、その綺麗な銀髪の髪も取ってもクールよ♪」

「うんうん！その辺の男とは存在その物が違うわ♪」

そしてジムの入口で——最初にシユンを抱き締めた青い髪のお姉さんが……タママシジムは本来男性の立ち入り禁止だが、シユンは可愛いから大丈夫だと笑顔で言う、他のお姉さん達もシユンを褒めて、そこから辺の男性とは存在その物が違うと褒めまくる。

「あはは（笑）……ありがとうございます……」

シユンは自分をそこまで褒めてくれるお姉さん達の言葉に苦笑いを浮かべる。



「あらあら…皆さん。お話しをするのもよろしいですが、そろそろ先にお行きましよう」

エリカはシユン達が楽しく会話をしているのを笑顔で見ている…話しをするのも言いがそろそろ先に行こうとみんなに言う。

「あつ! すいませんエリカさん。つい話し込んでしまつて!」

シユンに香水の事やタママシジムの決まりについて説明して、思わず話しを込めました事を謝罪する。

「いえいえ。それでは行きましようか」

エリカはそう言う…ジムの奥へと歩いて行く。

「えと? どこまで行くんですか?」

「より詳しく説明致しますので…奥の部屋に行きますわ。一般の方は入れないお部屋ですわ。わたくしとジムの者以外は入れませんの! さあシユンくん。こちらへ」

シユンはエリカに連れられて、バトルフィールドのある場所から更に先へと進む。そこは一般の人は入れないエリカとジムの人達だけが入れられる部屋へと案内される。

「さあ着いたわよシユンくん。入つて!」

エリカはその部屋に到着した事を教え、シユンに部屋に入るように言い、部屋の中に入る。

「…すごい…さっきの部屋も凄い緑でいっぱいだったけど…ここも植物ばかりだ…」

シユンがエリカに言われてその部屋に入ると…そこには部屋全体に緑が広がっており部屋にも天井から太陽の日差しが差し込んでいて、そしてそこには見たこともないポケモンがその場所で過ごしていた。

「ラフレシアにウツボット…。くさポケモンがいっぱいだ…それにあれは確か…ワタッコにキレイハナ…他にも見たことのない」くさタイプのポケモンがいるな…」

シユンはその部屋で思い思いに過ごしている”くさタイプのポケモン達を見て…知っているポケモンもいれば…見覚えのないポケモンもいて思わず見つめる。

「フフツ。この部屋にわね。ジムリーダーになる前のエリカさんが色んな地方を旅してた時に捕まえた”くさタイプのポケモン達がいる、その中にはエリカさんが旅をしていた頃の  
手持ちポケモンもいるのよ。」

勿論…ジム戦ではジム戦用に育てたポケモンを使うのよ」

青い髪のお姉さんがこの部屋にいる”くさタイプのポケモン達はエリカがジムリーダーになる前に旅をしていた時にゲットしたポケモンだと説明してくれた。

その中にはエリカが旅をしていた頃の手持ちのポケモンやジム戦用に育てたポケモンもいるという。現に同じ種類のポケモンが何匹もいたり、一匹だけのポケモンもい

る。

「カントー地方には生息していない」くさタイプのポケモンもたくさんいて…シユンの知らないポケモンもいた。

「そうなんですか。ここにいる」くさタイプのポケモン達はエリカさんが旅をしていた頃にゲットしたポケモンなんですね。道理でカントーには生息していない」くさポケモンもいるはずだ……」

「シンオウとイツシュ地方の」くさタイプのポケモンもいますね」

「カロスのくさタイプのポケモンもいますわ」

メロエツタとデアンシーもこの部屋にいる色んな地方の」くさタイプのポケモンがいるのに気づいた。

「シユン達が青色の髪のお姉さんの説明を聞いてふと思った疑問に納得していると—」

「んっ?」

シユンはズボンの裾を引っ張られる感覚に気づいて 下を見てみるとそこには—。

「ダネダネ!」

シユンのズボンの裾に フシギダネが頭をすり付けて引っ張っていたのだ。

「えと……フシギダネだね。何をしてるの?」

シュンはフシギダネが何をしているのかと思いつつ 凶鑑を開く。

「フシギダネ——たねポケモン。生まれた時から背中に種を背負っている。体が大きく育つ事に種は大きくなる——」

ポケモン凶鑑からフシギダネについてのデータが流れる。

「ダネダネエ〜♪」

フシギダネは嬉しそうにシュンに頭を擦り付ける。

「フフ♪。そのフシギダネは先日 わたくしのフシギバナ達が持っていたタマゴから生まれたばかりの子ですわ。人見知りもなくてとても人懐っこいですよ」

エリカはそのフシギダネのことについて教えてくれた——先日生まれたばかりで、人見知りもなく人懐っこいようである。

「そうなんですか。よしよし!」

シュンはエリカの説明を聞きながら：しゃがんでフシギダネの頭を優しく撫でる。

「ダネダネ〜♪」

フシギダネは気持ち良さそうに シュンの撫でている手に擦り寄る。

「あらあら。もうシュンくんに懐いちゃったの♪」

フシギダネがシュンの手に嬉しそうにじゃれているのを見てエリカは笑顔になる。

「それで：チュリネを進化させる」たいようのいしの入手の方法を教えてください

う話は……」

「ええ 勿論お教え致しますわ。キョウコさん。あれを持ってきてください」

「はい。分かりましたエリカさん!」

シユンが遠慮気味に尋ねるとエリカは勿論だと頷いて、薄緑の髪のお姉さんに何かを持って来るようにお願いすると 向こうの部屋へと走って行き、少しして何かの箱を持ってエリカの前に戻って来る。

「持つてきましたエリカさん!」

「ありがとうございます。キョウコさん」

エリカはキョウコからその箱を受け取るとシユンの前に来る。

「さて シユンくん。これがポケモンを進化させる石の一つであり、チュリネの進化に必要な”たいようのいし”でございますわ♪」

エリカはシユンの前で箱を開くと中には…太陽の様な形をした石である”たいようのいし”が入っていてチュリネの進化にはこの石が必要だと教える。

「これが”たいようのいし”ですか…初めて見ました…」

シユンは本物のたいようのいしを見るのは初めてであり、興味津々で見つめる。

「さて シユンさん。たいようのいしをどこで手に入るのかと言うことですが…:…カントー地方では殆ど流通していませんし、そう簡単には手に入りません」

「そうですか…。くさタイプのジムリーダーのエリカさんならもしかしてと思っただけですが……」

「ええ…：わたくしも必要になつたら別の地方から通販で仕入れているんですの。ごくたまに進化の石が名産品とされているストーンタウンという街のお店で売っているという話ですが…：あまり期待はされない方がよろしいでしょう…」

エリカは「たいようのいしをどこで手に入るのかと言うシユンの質問に丁寧に教えてくれたが…：やはりカントー地方では」たいようのいしは殆ど流通しておらず発掘もされていない。

エリカは「たいようのいしが必要になつた時は——別の地方から通販で仕入れているらしく、それ以外では…：タムシシティの遠く先にあるストーンタウンという進化の石が名産品として有名な街のお店でごくたまに別の地方から仕入れた進化の石が売っている事もあるが本当にごくたまにであり、あまり期待はしない方が良くと教えてくれた。」

「やっぱり…：カントー地方では」たいようのいしは貴重なんですな…：どうしようかな？」

シユンはエリカから「たいようのいしについての話しを聞いて、入手が難しい事だにため息をついてどうしようかと考えていると——」。

「シユンくん。よろしければあなたにこの”たいようのいしをお譲りしますわ!」  
するとそんなシユンにエリカが思わぬ提案をしてくれた。

「えっ!?でも…そんな…悪いですよ!」

シユンはエリカのご厚意に驚き、焦ってそんなの悪いと断ろうとする。

「いいえ…迷えるトレーナーを導くのもジムリーダーの務めですわ!」

しかしエリカはそんなシユンに微笑んで言う。

「ただし…たいようのいしは貴重ですので、そう簡単にお譲りするわけには行きません。  
そこで…シユンくんにはジムのお手伝いをしてもらいますわ!」

エリカは付け加えるように…たいようのいしは貴重だから、そう簡単に譲るわけにはいかないため…そこでシユンにはジムの仕事のお手伝いしてもらおうと言う。

「ジムのお手伝いですか?」

「ええ♪どういたしますかシユンくん…無理には言いません。断っても”たいようのいしはお譲りしますわ!」

シユンが恐る恐る聞き返すと…エリカは領いてシユンにどうするかと尋ねる——無理には言わず…断っても”たいようのいしは譲ってくれるという…シユンに取って 得の有りすぎる条件とエリカの試すような視線にシユンは……。

「いえ…ぜひジムのお手伝いをさせてください!タダで貴重なたいようのいしを貰う訳

にはいきません！」

シユンはタダで貴重な「たいようのいし」を貰う訳にはいかないと…ジムのお手伝いを申し出ると…シユンのその言葉を聞いて、エリカとジムのお姉さん達は笑顔になる。

「はい♪よろしくお願ひしますわ♪」

シユンの言葉にエリカは期待通りだと言うように微笑む。

「流星はマスターですわ♪」

「素晴らしい心掛けです！」

自分達のマスターであるシユンの精神を誇らしく思うメロエツタとディアンシー。

「流星はシユンくん！わたしたちが見込んだ子ね♪」

「ええ！前にリーフの石 目当てで来たあの図々しい男の子とは大違い！」

「うん、あいつは態度もでかくて失礼なやつだったわよね」

「そのわりにポケモンはてんで弱くて…エリカさんとのジム戦では一体も倒せずにストレートで負けて泣いて帰ってたものね」

「あの泣き顔ったら！可笑しくてしょうがなかったわね！フッフ（笑）」

シユンの立派な精神にタمامシジムに勤める女性達も感心し、前にジム戦とリーフの石を目当てで来たトレーナーの態度の悪さと比較し、同じようにエリカに二択の選択をされて…手伝わず楽にリーフの石を受け取る方を選んで…エリカはがっかりしてこれ



はトレーナーの人となりや心掛けを試す質問だと説明し、リーフのいしを渡すのを断る。

しかしリーフのいしを求めて来たトレーナーはエリカの答えに逆ギレしてジム戦を挑み、一体も倒せずにストレート負けで完膚なきまでに敗北し、泣いて逃げ帰ったのである。

その時の無様な泣き様を思い出してプツと吹き出すお姉さん達。

「タマムシジムにはジム戦だけでなく…リーフのいしや”たいようのいしを求めて来るトレーナーの方もいます。しかしポケモンの進化の石は貴重ですし、簡単にお譲りは出来ません。そこで先程の質問でそのトレーナーの人格や心構えを見させて頂いておきますの」

エリカは先程の二択の質問の意味を説明し、トレーナーの人格や心構え等を試し…不合格なら進化の石を渡すのを断っている。そこで心の狭い者は怒ってジム戦をして負けて帰る者が多い——エリカのトレーナーに対する観察眼は確かだ…不合格と判断されたトレーナーは実力もなくジム戦でも一勝も出来ずに負けるパターンが殆どである。

「シユンくんはわたくしの期待通りの…誠実で真面目な男の子ですわ♪」

エリカは最初に感じた通りのトレーナーだと微笑む。

「はあ…ありがとうございませす…」

エリカの自分に対する微笑みに困ったように笑みを浮かべるシュン。

「ですがそれも当然かもしれないですわね…イツシュ地方とカロス地方の幻のポケモン…メロエツタとディアンシーを仲間に行っているだけはありませんわね」

「えっ!?メロエツタとディアンシーの事を知っているんですか!」

「ええ…これでもジムリーダーになる前は色々な地方を旅してましたし、ジムリーダーとして各地方の伝説・幻のポケモンについても把握していますわ!といっても知っているのは名前だけで…人間の言葉を話せるのは知りませんでしたわ」

「それでもわたし達の事を知っているなんて…流石はジムリーダーですね…」

「大抵の人はわたくし達の事をよく知らないのに…すごいですわ!」

シュンのトレーナーとしての人格や心構えを認め、イツシュとカロス地方の幻のポケモンの二体を仲間に行っているのだから当然だと感心していると…シュンはエリカがメロエツタ達を知っている事に驚き、エリカがメロエツタ達を知っているのはジムリーダーになる前は色々な地方を旅し、その地方の伝説や幻のポケモンの話しを聞いて知っていたり——ジムリーダーに就任して様々な文献などを調べて…伝説・幻のポケモンについて知っていた…しかしメロエツタとディアンシーについては詳しい事は知らず名前のみ知っており、人間の言葉を話した時は驚いたと言う——。

それでも自分達の事を知っているエリカを流石はジムリーダーだと称賛するメロ

エツタとディアンシー。

「シユンくんは問題なく合格ですわ♪それではジムのお手伝い、よろしくお願ひしますね」

「はい!こちらこそよろしくお願ひします。エリカさん、皆さん。お世話になります!」  
エリカの目に叶い——たいようのいしを譲ってもらったための試験を合格し、エリカとジムのお姉さん達に”お世話になります”と礼儀正しく頭を下げるシユンに エリカやお姉さん達は暖かく迎えてくれた。

こうしてシユンはチュリネを進化させるための”たいようのいしを貰う代わりにジムの仕事の手伝いをする”ことになったのだった。

シユンがタママシジムに訪れた日から数日——シユン達はタママシジムの仕事の手伝いをしていた。

タママシジムの”くさタイプのポケモン達の食事の世話や手入れ。植物の世話などお姉さん達に優しく教えてもらいながら…ジムの仕事の手伝いをして過ごしていた。

最初は…人間の言葉を話す珍しいポケモンのメロエツタとディアンシーに驚いていたジムのお姉さん達も 何日と過ごす内に…メロエツタとディアンシーの可愛い風貌に…いつしか気にならなくなっていた。

シユンもジムの仕事に少しずつ慣れてきてジムのポケモン達もシユンに懐いていた。特にフシギダネなんかはシユンにベツタリで ご飯の時も遊んでいる時もずっとシユンの近くにいるのである。

この数日間……タママシジムで過ごした時間はシユンに取ってとても有意義な時間になっていた。ジムの仕事の手伝いの合間には「エリカが」くさタイプのポケモンについて教授してくれたり、ジムの仕事の休みの日にはお姉さん達にタママシシテイを案内してもらい デパートで買い物をしたりゲームコーナーで遊んだ。シユンはここで 以外な才能を発揮する。

スロットゲームでシユンは次々と目を揃えてコインを大量にゲットしたのであった。その様子を隣で見ていたお姉さん達は目を丸くして驚く。その後シユンは一緒に来たジムの女性にやり方を教えてもらいコインと景品を交換してついでにジムの買い物物を済ませるとジムへと帰るのだった。そしてその日から翌日……今日もジムの手伝いを終わらせて 手伝いが終わったら来るように言われていたのでエリカの元に向かう。

シユンはエリカの待つバトルフィールドのある部屋へと向かう——そこではエリカがシユンが来るのを待っていて エリカの周りにはジムに勤めるお姉さん達が全員集まっていた。

「あら シユンくん。来てくれましたね♪」

エリカはシユンが来たことに気づくと笑顔でシユンを迎える。

「はい。エリカさん。それでほかに何かご用ですか?」

シユンはエリカに返事して エリカになんの用があるのか尋ねる。

「シユンくん。この数日間 ジムのお手伝いをしてくれて本当にありがとう。おかげでだいぶ助かりましたわ」

エリカはシユンに今日までジムの仕事のお手伝いをしてくれたお礼を言う。

「いえ……こちらこそとても有意義な時間を過ごすことが出来ました。エリカさんのくさタイプのポケモンについての話しも とても勉強になりました!」

シユン自身も本当に有意義な時間を過ごせたと……くさタイプのエキスパートであるエリカから”くさタイプのポケモンについての貴重な話しも聞けてとても勉強になった。

「フフフ♪シユンくん。これを受け取って下さい」

エリカは”たいようのいしの入った箱を開いて受け取るように言う。

「えっ!でも……」

シユンは受け取るように言われた”たいようのいしを見て遠慮し断ろうとする。

「シユンくん。あなたは たいようのいしを受け取るのに充分過ぎるほどのお手伝いをしてくれましたわ。遠慮をする事はないですわ。受け取って下さいませ!」

エリカは遠慮をせずにシユンに　たいようのいしを受け取るように言う。シユンは少し考えてどうするか決めた。

「…分かりました。ありがたくいただきます!」

シユンは受け取ることを決めて　たいようのいしを手取る。

「マスター! たいようのいしも貰えましたし、チュリネを進化させてみてはどうでしょう」

メロエツタは　たいようのいしでチュリネを早速　進化させてみてはどうかと提案する。

「それは良い考えですわ。ぜひ進化するところをわたくし達に見せて下さいませ!」

エリカもぜひチュリネが進化するところを見せてほしいと言う。

「はい! 出て来てチュリネ!」

「チュリ!」

シユンは二人の提案に頷いてチュリネをボールから出す。

「チュリネ。この”たいようのいし”を使えば　きみは進化できるけど……きみは進化したいかい?」

「チュリイ? ……チュリ!」

シユンは先ずはチュリネの意思を聞こうと…チュリネにこの”たいようのいし”を使

えば進化出来るが：チュリネに進化したいか聞くと チュリネはジイっと”たいようのいしを興味深そうに見つめて 少しだけ考えた後に決心を固め 進化したいと力強く頷いた。

「うん、分かった。いくよ チュリネ」

シユンはチュリネの進化する決心を聞いて 満足そうに頷き 笑顔を浮かべチュリネに”たいようのいしを当てる——するとかチュリネを進化の光が包みその姿を変えていく。

「レディ〜♪」

チュリネは”たいようのいしを使って はなかざりポケモンのドレディアに進化した。

「おめでとうシユンくん。チュリネはドレディアへと進化しましたよ♪」

エリカはチュリネが進化系のドレディアになったことをシユンに教え微笑む。

「ドレディア。これからもよろしくね♪」

「レディ〜♪」

シユンは進化してさらに可愛くなったドレディアに：これからもよろしくねと微笑むと、ドレディアも嬉しそうに笑顔でシユンには抱きつく。

「シユンくん。どうでしょう? あなたの進化したドレディアの力を見るためにわたくしとジム戦も兼ねて一対一のポケモンバトルをしませんか?」

エリカはシユンに進化したドレディアの力を確認するためにジム戦も兼ねて一対一のポケモンバトルをする事を提案する。

「えっ！バトルですか……どうするドレディア？」

「レディ！」

シユンはエリカの提案にドレディアにどうするか聞くと ドレディアも進化した自身の力を確認したいのかやる気全開で頷く。

「フフフ。それではバトルをいたしましょう。審判をお願い致しますわ」

「はい エリカさん！」

エリカとシユンは…ジム戦と力試しを兼ねてのバトルをするためにバトルフィールドにあるトレーナーボックスに入り、エリカが審判をお願いすると青い髪のお姉さんが審判台に立つ。

「それではただいまより！ジムリーダーエリカと、マサラタウンのシユンによる…特別試合を開始致します。使用ポケモンは一体！先にどちらかのポケモンが戦闘不能になったところで試合終了となります。それではお二人ともよろしいでしょうか？」

シユンとエリカは審判のルール説明を聞いて頷く。

「進化したきみの力を見せて。頼んだよドレディア！」

「ドレディ！」



シユンは進化したドレディアの力に期待し、ドレディア自身も進化した自身の力を早く試したいのか気合い充分に華麗な動きでフィールドへと入る。

シユンはポケモン図鑑で自分のポケモンの技を確認する機能で…ドレディアの使える技を確認すると…進化前の時には覚えてなかった新しい技を覚えていた。

「シユンの現在持っているポケモン図鑑はカントー版であり、カントー地方のポケモンのデータしかないのでドレディアを認識しないが…自分のポケモンの覚えてる技を確認する機能では…そのポケモンの覚えてる技のみ読み取るので認識可能である（オリジナル設定）」

「フフフ。こちらも行きますわよ♪華麗に舞い登場しなさい」

エリカがボールを投げるとそこから出て来たポケモンは――。

「レディ〜♪」

エリカが投げたボールから出てきたのはシユンのドレディアと同じドレディアであつた。

「なっ!ドレディア」

「レディ!」

シユンとドレディアはエリカが同じドレディアを出してきた事に驚く。

「フフフ。この子でバトルをするのも久しぶりですわ」

「レディ〜」

エリカがドレディアをバトルに出すのは本当に久しぶりで……エリカもドレディアも久しぶりに共にバトル出来るのが嬉しく期待するようにシユン達を見ている。

「シユンくん 気をつけた方が良いわよ。あのドレディアはエリカさんが旅をしていた頃の主力にしていたポケモンの一体なんだから！」

観戦席でシユンとエリカのバトルを観戦する薄緑色の髪のお姉さんが……あのドレディアはエリカが旅をしていた頃の主力のポケモンの一体だった事を教えてくれた。

「それでは試合……始め！」

審判のお姉さんはフラッグを振って 試合の開始を宣言してバトルが始まる。

「さあ シユンくん。お先にどうぞ……あなた達の力を見せてくださいませ！」

「フルーフウー！」

エリカはシユン達に先行を譲り、シユンとドレディアの力を見せてくれるように言う。

「それじゃ遠慮なく……ドレディア！ はなびらのまい」

「フウールウ〜！」

シユンはドレディアに“ はなびらのまいを指示し、エリカのドレディアに放つ。

「フフフ。進化してパワーも上がりましたね♪素晴らしい威力ですが……ドレディア！ 華

麗に交わして ちょうのまい”をお使いあそばせ♪」

「フルウーフウ!!」

エリカは前にシユンが進化前のチュリネと技の鍛練をしているのを見ており、ドレディアへと進化して技の威力が上がっている事に気づき微笑む……素晴らしい威力だと感心するが…エリカのドレディアは簡単に華麗な動きで交わして 何やら舞うような動きをしている。

「交わされた!なんて軽やかな動きだ……それなら…ドレディア マジカルリーフ!」

「レディ〜!」

シユンはドレディアに必中技のマジカルリーフを指示、ドレディアはマジカルリーフを放つ。

「良い判断ですわ!ですが…ドレディア。優雅に舞い踊りながら”はなびらのまい”ですわ」

「フルウーフウ!」

エリカはシユンの技の最良の選択だと認めつつも……動揺する事なくドレディアに迎撃の指示を出す。

ドレディアはその場で華麗に舞い踊りながら…はなびらのまい を放ち迫るマジカルリーフを全て弾き落とす。そしてマジカルリーフを全て弾くと”はなびらのまい

がそのままシユンのドレディアを巻き込み吹っ飛ばす。

“マジカルリーフ”を全て弾き落とす。そして“マジカルリーフ”を全て弾くと”はなびらのまい”がそのままシユンのドレディアを吹っ飛ばす。

「フル!?フルウ〜」

「ドレディア!」

シユンのドレディアはエリカのドレディアの強力な”はなびらのまい”を受けてシユンの近くまで後退する。

「大丈夫 ドレディア?」

「レディ〜…」

シユンは こうかいまひとつとはいえ…エリカのドレディアの強力な”くさタイプ”の攻撃を受けたドレディアを心配し大丈夫か聞くと…ドレディアはダメージで息を乱しながらも大丈夫と言うように頷く。

「効果はいまひとつの筈なのに ここまでのダメージを受けるなんて…。そうかさっきの”ちようのまい”って技で”はなびらのまい”の威力が上がってたのか。

よし!それならこつちも…ドレディア!ちようのまい を使うんだ!」

「フルウ〜!フルウ〜!」

シユンはドレディアに進化して覚えた技——ちようまい を指示し、ドレディアは蝶

が優雅に飛ぶ様に舞って——とくこう・とくぼう・すばやさ がアップする。

「流石ですわシユンくん。もう” ちょうのまい の効果に気づくなんて。ドレディア、はなびらのまい ですわ!」

「フルウ!」

エリカはシユンが直ぐに先程まで知らなかった技の” ちょうのまいの効果が気づいた事に驚く。そしてエリカはすかさずドレディアに” はなびらのまいを指示する。

「それならこつちも同じ技で対抗だ!ドレディア、はなびらのまい!」

「フウ〜フルウ〜!」

シユンもドレディアに” はなびらのまい を指示して、エリカのドレディアが放つ” はなびらのまい に対抗。 はなびらのまい同士 ぶつかり合い相殺させる。

「シユンくん。進化したばかりのドレディアで上手くバトル出来ますね。息もぴつたりですわ!」

エリカは進化したばかりのドレディアで上手くバトルの指示をし、息もぴつたりでその様子からシユンとドレディアの絆の深さを感じ取れて微笑むエリカ。

「ありがとうございます。エリカさんに” くさタイプのポケモンの知識を学ばせてもらえたおかげです」

シユンはジムの仕事の手伝いの合間にエリカから くさタイプのポケモンの知識を

学ばせてもらい くさタイプポケモンの理解を深められたおかげだと言う。

「いいえ……それはあなたの努力の結果ですわ。さあ そろそろお終いに致しましょうか。ドレディア ソーラービーム！」

「フウ〜！」

エリカはこのバトルをそろそろ終わらせようと——くさタイプの技の中でも強力な技『ソーラービーム』を指示。ドレディアは頭の花に太陽の光のエネルギーを吸収する。「それならこつちも……ドレディア。ソーラービーム！」

「フルウー！フルウ〜」

シユンも迎え撃つためにドレディアにソーラービームを指示——シユンのドレディアも頭の花に太陽の光のエネルギーを吸収し、発射の準備をする。

——そして——。

『『ドレディアア！ソーラービーム！』』

シユンとエリカはドレディアがソーラービームのエネルギーの吸収が完了した事を確認し、同時に発射を指示する。

「フルウー！フルウ〜」

「フウー！ルウ〜」

シユンとエリカのドレディアはソーラービームをほぼ同時に発射!!

ソーラービームがぶつかり合う——しばらく拮抗していたがエリカのドレディアの方が威力があったのか……少々押し込まれてから相殺され……ソーラービームの激突の爆風で互いのドレディアが吹っ飛ばされる。

「フルウ……!?!」

「フルウ……!?!」

「くっ!」

「つつ!」

シユンとエリカは襲いくる爆風を腕で顔を隠して防ぐ——そして煙が晴れると——。

「……フルウ……」

「……フルウ……」

シユンとエリカのドレディアは互いに……大きなダメージを受けて激しく息を乱しながらもしつかりと立っていた。そして一瞬の静寂。

「フルウ……フルウ……」

先に限界が訪れたのはシユンのドレディア……ゆっくりとその体を倒していく。

「ドレディア!」

シユンはドレディアの体力の限界に気づいて急いでドレディアの元に向かい、倒れるドレディアをその腕で受け止める。

「シユンくんのドレディア 戦闘不能！よつてこの特別試合の勝者は…ジムリーダーの  
エリカさんの勝ち！」

審判のお姉さんによつてシユンのドレディアは戦闘不能と判断され、エリカの勝利が  
宣言される。

「大丈夫 ドレディア？お疲れ様。よく頑張ったね」

「…フルウ…」

シユンは倒れたドレディアの状態を確かめて…頑張ってくれたドレディアを労い  
良く頑張ったと褒める…しかしドレディアは大好きなシユンのために勝ちたかつた  
のに…負けてしまったためシユンに申し訳ないという思い落ち込む。

「そんな顔しなくていいよドレディア。きみは充分頑張ってくれたよ」

シユンはドレディアの表情から負けて落ち込んでる事が分かり…落ち込むドレディ  
アを慰め充分頑張ってくれたと励ます。

「そうですわ」

シユンがドレディアを励ましていると…向こうからエリカとジムお姉さん達がこち  
らに来る。

「進化したばかりなのに…覚えたばかりの技を理解し、あれほど優雅にバトルをしてい  
ましたもの♪」



エリカは進化しばかりのシユンのドレディアが覚えたばかりの技を理解して見事に使いこなし、あれほど優雅にバトルが出来ていた事を称賛する。

「そうよ。あのエリカさんのドレディアと互角にバトル出来てたんだもの! 凄いよシユンくんもシユンくんのドレディアも!」

ジムのお姉さんもエリカのドレディアと互角に戦っていたシユンとシユンのドレディアを凄いと褒めてくれた。他のお姉さん達も同意するように頷く。

「そうですよドレディア。落ち込むことはありません」

「あなたはよく頑張りましたわ♪」

メロエツタとディアンシーもドレディアをよく頑張ったと褒めて励ます。

「フルウ……フルウ♪」

ドレディアはみんなに良く頑張ったと励まされて落ち込んでいたが……少し元気を取り戻し微笑む。

「うん。ありがとうドレディア。ゆっくり休んでね」

シユンは負けて落ち込んでいたドレディアが少し元気を取り戻したのを確認してドレディアにゆっくり休むように言ってボールに戻す。

「さて……シユンくん。こちらを受け取ってくださいませ……」

エリカはジムのお姉さんにあらかじめ用意させていた箱から何かを取り出して手に

持ち、シユンに見せるように差し出す。それはタمامシジムのバッジ『レインボーバッジ』だった。

「これって!」

シユンはエリカが差し出した物を見て驚く。

「このタمامシジムの勝ち抜き、あるいはジムリーダーであるわたくしに認められた証である……レインボーバッジですわ♪」

エリカの手にはタمامシジムの勝ち抜いた証『レインボーバッジ』があり、シユンにレインボーバッジを受け取るように言う。

「でもぼくは……エリカさんに勝っていませんし、特別試合と言っても正式なジム戦でもないです……だからそのバッジは受け取れません」

シユンはエリカに勝っていないし、正式なジム戦でもなかったの……そのバッジを受け取る事は出来ないかと断る。

「いいえ……バッジはジムリーダーが認めれば受け取れるのですわよ。確かにタمامシジムの正式なジムバトルは三対三の勝負ですが……先程のあなたとのバトルはそれに相応しい物でしたわ♪ あなたはこのレインボーバッジを受け取るのに相応しいトレーナーですわ。」

「さあ、受け取ってくださいませ♪」

「遠慮深くバッジを受け取るのを断ろうとするシユンの真面目で礼儀正しい性格に改めて感心するエリカは微笑みながら……バッジはジムリーダーが認めれば受け取れるのだと諭し、確かに正式なジム戦ではなかったがそれに相応しいバトルだったと言って……そしてシユンをレインボーバッジを受け取るに相応しいトレーナーだと認めて受け取るように言う。

ジムのお姉さん達もシユンをバッジを受け取るに相応しいトレーナーだと認めて受け取るように促し、みんな頷いている。

「……分かりましたエリカさん。レインボーバッジ：受け取らせていただきますー!」  
シユンはエリカ達の好意に甘えて……自分自身でも納得してレインボーバッジを受け取る。

「ありがとうございますエリカさん!」

シユンはレインボーバッジを受け取り、エリカにお礼を言う。

「……みなさん。この数日本当にお世話になりました。エリカさん達のおかげで目的も達成する事が出来ました。なのでポケモンセンターに寄って旅に戻りたいと思います」  
シユンはエリカやみんなにこの数日間本当にお世話になったと礼を言い、エリカ達のおかげで当初も目的も達成出来たのでポケモンセンターでドレディアを回復させた後に旅に戻る事を伝える。

「…そうですね。寂しくなりますね…」

シユンがトレーナーとしての旅を再開する事を伝えると——エリカは寂しように表情が暗くなる…エリカだけでなくジムのお姉さん達も落ち込んでしまう。中にはシユンと別れるのが悲しくて涙を流しているお姉さんもいる。

シユンとエリカ達と過ごした時間は数日と短い時間だったが…その数日間を一緒に過ごして、色々な体験をして楽しい思い出を作り、楽しい時間を過ごした。そして互いに取って大切な存在へ地なっていたのである。

「シユンくん。あなたと過ごさせたこの数日間は本当に楽しかったですわ♪」

シユンとエリカ達は…ジムの入り口まで来て 別れの挨拶をする。

「はい…。ぼくもエリカさんやみなさんと色々な事が出来て本当に楽しかったです！」

シユンもエリカやお姉さん達とこの数日間で色々な事が出来て本当に楽しかったと笑みを浮かべる。

「シユンくんと会えなくなるなんて寂しいわ…」

ジムのお姉さん達も…シユンがもう行ってしまふのが寂しくて…涙目で抱きついたり、頭を撫でたりしてくれる。

「…ははは (失笑)…」

シユンはジムのお姉さん達の…自分に対する過度な愛情表現に…戸惑い 少し乾い

た笑いになってしまう。

「ダネエ〜!!」

「うん?」

シユンは鳴き声と一緒にズボンが引つ張られているのに気づいて足元を見ると……またフシギダネがシユンに……行ってほしくないからか 引つ張つてシユンを引き止めようとする。

「こら フシギダネ!!シユンくんのズボンを離さない!」

「ダネダ〜!!」

ジムのお姉さんが シユンのズボンを啜えているフシギダネを離そうと体を持って引つ張るが……フシギダネは必死に食らいついて離さない。

それほどシユンに行つてほしくないのだ。エリカはフシギダネの様子を見て微笑み、シユンにあるお願いをする。

「シユンくん。良かったらこのフシギダネを連れて行つてもらえないでしょうか!」

エリカはシユンにフシギダネを連れて行つてもらえないかとお願いする。

「えっ!」

シユンはエリカの言葉に驚き、戸惑いの声を出す。

「フシギダネもシユンくんに懐いていますし、それにこの子にはこの街だけじゃなくて

…この広い世界を見てほしいんです。シユンくんだったら安心してこの子を預けられますわ♪」

エリカはフシギダネがシユンにとても懐いているのでこのまま別れさせるのも可哀想だと思ったのと……フシギダネには……この街の景色だけでなく、果てしなく広がるこの世界の景色を見てほしいと望み、シユンにならフシギダネを安心して預けられると絶対の信頼を寄せてくれている。

エリカにそこまで言われてシユンは　しゃがんでフシギダネと目線を合わせる……フシギダネもズボンを離してシユンを見つめる。

「フシギダネ。良かったらぼくと一緒に来るかい？」

シユンはフシギダネに自分達と一緒に来るかと尋ねる。

「ダネ？ダネ！ダネエ〜♪」

フシギダネは最初……何を言われているのか分からなかったが　フシギダネはシユンの言うことを理解すると喜びで笑顔になり　元気よく頷いてシユンの胸に飛び込んで来てすり寄る。

「来てくれるかいフシギダネ？」

「ダネエ〜♪！」

シユンが改めて自分と一緒に来てくれるかなと尋ねるとフシギダネも笑顔で頷く。

「よし!フシギダネ。ゲットだよ」

「良かったですねマスター」

「新しい仲間が出来て嬉しいですわ♪」

メロエツタとディアンシーもフシギダネが仲間になったことを喜ぶ。シユンはエリカから:フシギダネのボールを受け取る。

「それじゃあシユンくん、エリカさん。最後にみんなで写真を撮りましょう♪」

ジムのお姉さんが最後に全員で思い出に写真を取ろうと提案する。

「まあ♪それは良いお考えですわ。さあシユンくん。みんなで撮りましょう」

エリカもみんなも賛成して思い出の写真を撮るための準備を始める。

シユンとエリカは真ん中に座る:メロエツタはシユンの肩に、ディアンシーとフシギダネはシユンが抱える——その周りにジムのお姉さん達が並び座ったり、後ろで立っている。

そしてジムのお姉さんの一人がカメラのタイマーをセットすると急いで戻って来る。

「」「ハイ!チーズ!!」「」

シユンとエリカ達は全員 笑顔で思い出の記念になる良い写真を撮ることが出来た。

「良い感じに撮れてますよ。エリカさん。シユンくん」

ジムのお姉さんがカメラから出来た写真を取り出してシユンとエリカに見せる。

「まあ、良い感じに撮れてて良かったですわ♪」

「そうですね」

エリカが良い感じに写真が撮れてる事を喜ぶと…シユンも頷いてその綺麗に撮れている写真を見て一緒に喜ぶ。

「じゃあ、そろそろぼくは行きますね。皆さんお元気で！」

シユンは切りもないので、思い出の写真も撮れたしそろそろ行くことを決めて先ずはポケモンセンターへと向かい歩き出そうとする――。

「…シユンくん…」

——チュツ／／／／♪——

エリカがシユンを呼び止めるとシユンのおでこに優しく口づけをする。

「えっ?」

シユンは突然の事に驚いて呆然としてしまう。

「フフツ／／／／。良い旅になるようにとおまじないですわ／／／／♪」

エリカはシユンのこれからの旅が安全で良い旅になるようにという願いを込めたおまじないだと微笑み、頬を赤くして恥ずかしそうにしながら言う。

「はあ……またですかマスター…」

「マスターは女性にモテモテですわ♪」



メロエツタはシユンの女性の好感度の高さにも呆れ、ディアンシーはシユンが女性にモテているのを見て嬉しそうにしている。

「ああ〜!!エリカさんズルいです／＼／＼／＼!」

「私達もシユンくんの良い旅になるようにおまじないします／＼／＼／＼!」

「わたしも／＼／＼／＼!」

「わたくしも／＼／＼／＼!」

「あたしもお〜／＼／＼／＼!」

エリカがシユンにおまじないのキスをしたのを皮切りに…ジムのお姉さん達は可愛いシユンにキスをしたエリカにズルいと言つて自分もと次々にお姉さん達はシユンの頬やおでこに優しくチュツ♥とキスをする…シユンは次々に美人で可愛いお姉さん達の魅惑で甘いキスにクラクラと酔いしれ…そして恥ずかしさで顔が真っ赤になつてしまう。

「(ポワ〜ン／＼／＼)ハツ!?えと／＼／＼／＼…あの／＼／＼／＼…そつ／＼／＼／＼それじゃあ!そろそろ行きます!エリカさん!みなさん!お元気で／＼／＼／＼!」

「それでは、きげんようですわ♪」

「またいつか会いましょう!」

シユンはみんなからキスされて思わず呆然としてしまったが…ハツと意識が戻り、

恥ずかしそうにしどろもどろになりながらも照れているのを隠すようにエリカやお姉さん達に別れを告げて歩き出す。

「「シユンくん～また来てねえ～」」

「「気をつけてねえ～」」

「「元気でねえ～」」

「シユンくんも二人もお元気で。また来てくださいね～」

ジムのお姉さん達とエリカはシユンに向かって手を振って別れの挨拶をする。

「エリカさん。みなさん。また会いましょう」

「どうかお元気で」

「さようならですわ」

「ダネダア」

シユン達もエリカ達に手を振り替えて別れの挨拶をしてエリカ達の元から去った後にポケモンセンターでドレディアの回復を済ませた後にタママシシティを後にするのだった。

「シユンくん……また会える日を楽しみに待っていますわ／／／／……」

エリカはシユンの去って行った方を向いて……頬を赤らめて——また再会出来る日を楽しみにするのだった。

## 第六話 シロガネ山で修行開始! ジョウト地方に向けて

シユンがエリカ達と別れタمامシシティを旅立った日から翌日：シユンはタمامシシティからだいぶ離れた草原でポケモン達とお昼の準備をしてみんなに新たに加わった仲間フシギダネのことを紹介していた。

「出て来て! みんな!」

シユンはボールを全て投げてみんなを出す。

「リザード!」

「ビブ!」

「デイン!」

「シエ〜!」

「レデイ!」

「ダネエ!」

勢いよくみんながボールから出て来る。

「リザ?」

「ビブ?」

リザード達は初めて見るフシギダネに不思議そうな顔をする。

「ああ、ドレディアはもう知ってるよね! みんな、新しく仲間になったフシギダネだよ。仲良くしてあげてね!」

「ダネエー!」

フシギダネはみんなによろしくと言うように鳴くとリザード達もよろしくと言うように笑顔で頷く。どうやら心配しなくても仲良くなれたようだ。

「さあ、みんな! 無事に仲良くなれたところでご飯だよ!」

シユンはみんなにご飯を配るとみんなも食べ始める。

「さて、エリカさんのおかげでチュリネもドレディアに進化出来たし、もうカントーではリーグに出ないって決めたしそろそろジョウト地方の方に行こうと思うんだけど!」

シユンは無事にドレディアに進化させたのとカントーのリーグには出場しないと決めていたためカントーからジョウト地方に行こうとメロエツタ達にジョウト地方の方に行こうと言う。

「そうですね、ドレディアも進化しましたし:リーグにも出ないのならもうカントーに居る必要もないですね」

メロエツタもシユンの提案に賛成して、カントー地方からジョウト地方に行くことに

納得する。

「うん・そうと決まったらジョウト地方に行く準備をしよう」

「そうですね! それでしたらわたしの”テレポート”でシロガネ山でトレーニングをしてジョウト地方へと行きましよう! 普通は船で行くようですが、それだと手間もかかりますしわたしの力なら一気に行くことが出来ます」

メロエツタは自分の力で一気に”テレポート”してシロガネ山からジョウト地方に行こうとシユンに提案する。

「そうだね! ご飯を食べたらさっそくシロガネ山に行つて修行をしよう!」

シユンはメロエツタの意見に賛成してご飯を食べたら行くことを決めた。シユン達のご飯を食べ終えると片付けて、さっそくシロガネ山へと向かうのだった。

こうしてシユンはジョウト地方のリーグに挑戦する事を決めると、シロガネ山でポケモンを鍛えるためにカントー地方を旅立ってメロエツタの”テレポート”でシロガネ山へと向かったのだった。

シユン達がメロエツタの”テレポート”で到着したシロガネ山は自然豊かな山で、そこに生息する野生ポケモンはハナダの洞窟に生息する野生ポケモンと同等の強さを誇り、ハナダの洞窟で修行をしていたリザード達はハナダの洞窟での特訓である程度強

敵とのバトルは馴れていたのだが：そうじゃないメンバーであるフシギダネやシエルダーは最初はシロガネ山の強いポケモンに全く対抗出来ず、メロエツタ達が手助けをしながら何とかバトルをすることが出来て順調にそのレベルを上げていった。特にフシギダネはエリカさんのフシギバナの子というだけあり、その実力をメキメキと上げていった。そのおかげでビブラーバはフライゴンにリザードはりザードンへと進化をすることが出来た。そして今シユンはシロガネ山にある湖の側に現れた野生のゴルダックとバトルをしていた。

「ゴバア〜！」

野生のゴルダックはフシギダネに向かって“ハイドロポンプ”を放ってくる。

「フシギダネ！交わして”はっぱカッター”！」

「ダネ！フシィ〜！」

フシギダネはシユンの指示通り“ハイドロポンプ”を交わすと、ゴルダックに“はっぱカッター”を放つ。

「ゴバア〜……」

ゴルダックに効果ばつぐんの“はっぱカッター”が命中し吹き飛ばす。

「ゴバア！ゴバア〜！」

しかし、さすがシロガネ山に住んでいることもあり、すぐに体制を立て直し”ねんり

き」で即座に反撃をしてくる。

「ダネエ〜」

フシギダネはゴルダツクの「ねんりき」でシュンのもとまで吹っ飛ばされる。

「大丈夫かいフシギダネ!」

「ダネエ!」

シュンがフシギダネに大丈夫かと聞くと、フシギダネは頭を左右にブンブンと振った後に大丈夫だと言うように鳴く。

「よし! フシギダネ、”つるのムチ”でゴルダツクを捕まえるんだ!」

「ダネエ!」

シュンはフシギダネに”つるのムチ”でゴルダツクを捕まえるように指示すると、フシギダネはゴルダツクに向かって”つるのムチ”で捕らえようとする。

「ゴバア! ゴバア〜」

ゴルダツクは自分に迫る”つるのムチ”を素早い動きで交わそうとするが、交わしきれずにゴルダツクの足に蔓が絡まる。

「よし! そのままゴルダツクを上投げ飛ばしてから”はっぱカッター”だ!」

「ダネエ!」

フシギダネはシュンの指示通りにゴルダツクを上空に投げ飛ばす。そして:

「フシィ〜！」

「ゴバァ〜」

フシギダネが上空にいるゴルダックに向かって”はっばカッター”を放ち、ゴルダックは空中で交わすことが出来ずに”はっばカッター”が直撃する……そしてゴルダックが空中から地面に向かって落ちて来る。

「ゴバァ〜……」

ゴルダックはフシギダネの攻撃を立て続けに受けて戦闘不能になる。

「よし！よく頑張ったねフシギダネ！」

「ダネエ〜…ダネ!!」

シユンはフシギダネによく頑張ったねと言うとフシギダネは笑顔で頷いたその時：フシギダネの体が光に包まれる。

「これって……!!」

シユンはフシギダネが光輝いたことに驚く。

「進化ですよ！マスター！」

メロエツタはフシギダネが進化するのだと言う。そして進化の光が止むとフシギダネは進化系のフシギソウへと進化していた。

「ソウソウ!!」



フシギダネはフシギソウへと進化した。

「やった! フシギダネがフシギソウに進化した」

シユンはフシギソウに進化したことを喜び、ポケモン図鑑を開く。

「フシギソウ——たねポケモン。太陽の光を浴びるほど体に力がわいて背中の蕾が育つていく——」

「フシギソウ! これからもよろしくね」

シユンはそういつてフシギソウの頭を優しく撫でる。

「ソウソウ!!」

フシギソウはシユンに撫でられると嬉しそうに頷き鳴く。

「やりましたねマスター!」

「この調子で頑張りましょう!」

メロエッタとディアンシーもフシギダネが進化したことに喜び、この調子で頑張ろうとシユンに言う。

「うん! そうだね! この調子でみんなを強くして行こう!」

シユンはメロエッタとディアンシーに言われて、この調子でポケモン達を鍛えて行くのだった。

シユンはフシギダネがフシギソウに進化をした日から翌日：シユンはその調子でポケモン達を強く育てながらカントーとシロガネ山を行き来していた。カントーでポケモンをゲットしシロガネ山で育てるというようにだ。シロガネ山にメロエツタ達のを借りてポケモンを育てるための簡単な拠点を作り、リザードンで近くのパケモンセンターへと飛んで行き、ドレディアとフライゴンを除く手持ちのパケモンを交換して自分のポケモン達をバランスよく育てていた。シユンがポケモンを交換するために近くの港町にあるポケモンセンターでオーキド博士に連絡した時に今どうしているのかを聞かれるとシユンはジョウト地方のリーグを目指してポケモンを育てていと説明すると、オーキド博士はカントーのポケモンリーグには出場しないのかと聞かれるとシユンは自分のポケモンを完璧に強くしたいのでカントーのリーグには出場しないと応える。

オーキド博士と話しをした後にシユンが預けているポケモンと交換した時に来たリザードンを見たオーキド博士はこんなに早くに進化させたうえに強く育てていることにオーキド博士は驚いてシユンのポケモンを強く育てていることに感心する。そしてシユンはサトシやシゲルはどうしているのかを聞くと：サトシとシゲルはバッジを見事に8つ集めてポケモンリーグ開催に向けてトレーニングをしているらしい：シユンはオーキド博士の話しを終わらせると：交換したポケモン達を入れてポケモンセンターを出て拠点に食料やキズぐすりなどが無くなったために調達しようとシヨップへ

と向かうのだった。

「ありがとうございまして!!」

シユンはシヨップで必要な物を買おうと店を出てシロガネ山へと向かうために歩いて  
いた

「これで必要な物は全部買えましたね! マスター!」

メロエツタはシユンの肩に姿を消しながら乗って必要な物が買えたと言う。

「うん、そうだね。トレーニングをしているからキズぐすりもすぐに無くなっちゃやし、食べ物には山にもあるけど一応買っておかないとね!」

シユンはメロエツタに返事を返すと早くシロガネ山に戻ろうと歩く。

「マスター! あれは何でしょう?」

シユンがシロガネ山に行こうと人気のなさそうな港の裏通りに行こうと歩いていたシユンに何かを見つけたディアンシーがシユンにあれは何かと呼ぶ。シユンはディアンシーに言われた方に目を向けて見ると……そこには!

「ゼニゼニ……」

港の近くの船着き場の所に何かしよんぼりとした様子のゼニガメが座っていた。

「あれってもしかして! ゼニガメ!」

「みたいですね！何か落ち込んでるみたいですが？」

シユンはこんな所にゼニガメが居ることに不思議そうにし、メロエツタは落ち込んでる様子のゼニガメを見ている。

シユンはポケモン図鑑を出してゼニガメに向ける。

【ゼニガメ——かめのごポケモン。生まれたては柔らかい甲羅もすぐに指でつつくと弾くほどの弾力性を持つようになると言われている——】

「こんな所にゼニガメが居るなんて：トレーナーとはぐれちゃったのかな？」

シユンはこんな所にゼニガメが居るのを不思議がりトレーナーとはぐれてしまったのかと言う。

「どうでしょうね？聞いてみればわかりますので聞いてみましょう！」

メロエツタは聞いてみればわかると言っつてゼニガメの方へと姿を現して向かう。

「ゼニ！」

ゼニガメは自分の近くにシユン達 came ことに気づくが座りこんだまま動かない！

「どうしてあなたはそんなに落ち込んでいますの？良かったらわたくし達に話を話して下さい！」

ディアンシーはゼニガメに何故そんなに落ち込んでいるのかと聞き、良かったら自分達に話してくれるように言う。ディアンシーがそう言うつとゼニガメはゆっくりと話し

出す。

「ゼニ……ゼニゼニ……ゼニガメガ……」

「フムフム……なるほど! そう言うことだったんですね!」

ゼニガメが話し出すとメロエツタが話しを聞いて、聞き終わるとシユンに話す。

「で、何でゼニガメは落ち込んだの?」

シユンは話しを聞いたメロエツタに何故ゼニガメが落ち込んでいたのかを聞く。

「はい……どうやらこのゼニガメはトレーナーに捨てられたらしいです……弱いからと……いつまでたつても進化しないからと……もういらなくなって持ち主のトレーナーから言われたようです……」

メロエツタはシユンにゼニガメから聞いたことを教える……ゼニガメがトレーナーに捨てられたことをいつまでたつても進化しないからとそんな理由でゼニガメが捨てられたということ……ゼニガメの話しを聞いたシユン達は心の底から怒りが込み上げて来るのを感じていた。シユンは怒りで拳を痛いほど強く握る。

「許せない……! 自分のポケモンを捨てるなんて!!! 進化しないのをポケモンのせいにするなんて!!」

シユンは手を強く握ってゼニガメを捨てたトレーナーに向けて怒りの感情が込み上

げて来ている。

「マスターの言う通りです！絶対に許せません!!」

メロエツタもシユンと同じでそのトレーナーに怒りの感情が浮かび上がって来る。

「何で…こんなことが出来るんでしょう…：トレーナーのために一生懸命頑張るこの子を…：進化しないのをこの子のせいにして捨てるなんて酷い…：」

「デイアンシーもトレーナーに弱いからと言う理由で捨てられて落ち込んでいるゼニガメを見て、悲しい表情をしてゼニガメを捨てたトレーナーに静かな怒りを抱いていた。」

「こういうことを人は普通にするんだ…：ポケモンを身勝手な都合で捨てたり、傷つけたり…：人間の都合でポケモンの住処を壊したり…：メロエツタ達が人間を信じられなくなるのも無理ないよね…：」

シユンは1人の人間が自分のポケモンを身勝手な理由で捨てたと言う事実で怒りと悲しみ…：2つの感情を抱いていた。そして、自分と同じ人間の身勝手にポケモンの心と体が傷つけている事実は何とも言えない複雑な思いを感じていた。そして、こんな身勝手なことをする人間が居たらメロエツタとデイアンシーが人間を信じる事が出来なくなるのも無理はないよねと2人に言う。

「確かに人間を信じることは出来ません。人間は私利私欲のために私と妹を利用しようとしてました……ですから人間は絶対に許せません……ですがマスターは違います! マスターはわたしやディアンシー、それにポケモン達のことをとても大切にしてくれています! だからわたしもみんなもマスターのことが大好きなんです!!」

「メロエツタの言う通りですわ! わたくしもマスター以外の人間は怖いですけど: マスターのことは大好きですわ! わたくし達のことを一番に考えてくれて大切に思っていて……そんなマスターが本当に大好きですわ!」

ディアンシーもメロエツタの言う通りだと言い、シユン以外の人間は怖いけど、自分達のことを大切に思ってくれているシユンのことをみんな大好きなんだと笑顔で言う。メロエツタとディアンシーの言葉にボールの中に居るポケモン達もボールを揺らしてその通りだと伝えているようにボールを揺らしている。

「メロエツタ……ディアンシー……みんな……ありがとう! ……うん、メロエツタ: ディアンシー: 決めたよ!!」

シユンはメロエツタとディアンシーとみんなに感謝を言うのと、みんなに決めたと言ってゼニガメのもとへと行きゼニガメにあることを告げる。

「ねえ、ゼニガメ! 良かったらばく達と一緒に来ないかい?」

シユンはゼニガメに自分達と一緒に行かないかとゼニガメに言う。

「ゼニ！」

ゼニガメはシユンの一緒に来ないかと言われてゼニガメは驚いてシユンを見る。

「僕はキミが進化出来なくなつてキミを捨てたりなんか絶対にしない！これから一緒に頑張つて強くなつてキミを捨てた奴を見返してやろうよ！お前が捨てたゼニガメはとても強いんだつて！ねっ、どうかなゼニガメ：一緒に来てくれるかな？」

シユンはゼニガメと一緒に頑張つて強くなつてゼニガメを捨てた奴を見返してやろうと言う。自分は例えゼニガメが負けても見捨てないと：ずっと一緒に居ると!!!

「ゼニィ〜：ゼニィ〜!!」

シユンの一緒に行こうと言う言葉を聞いたゼニガメは自分が弱いから負けてばかりだから捨てられた：そんな自分に一緒に行こう、頑張つて強くなろうと言つてくれたシユンに嬉しきで目から涙を流してシユンに飛びつく。

「ゼニガメ！一緒に来てくれるかい？」

シユンは腕の中に居るゼニガメに向かって改めて一緒に来てくれるかと聞く。

「ゼニゼニ！」

ゼニガメはもちろんと言うように笑顔で頷く。

「うん！ありがとうゼニガメ！これからよろしくね！」

「ゼニ!!」



ゼニガメが了解と言うように頷くとシユンはモンスターボールを出してゼニガメにこれからよろしくと言うとゼニガメも笑顔で頷いて自分からモンスターボールの中へと入って行った。

「うん!ゼニガメゲット!これからよろしくね!」

シユンはゼニガメをゲットしたことに喜び、これからよろしくと言う。

「やりましたねマスター!」

「仲間が増えて嬉しいですわ!」

メロエッタとディアンシーもゼニガメがゲット出来たことに喜ぶ。

「さて、以外な場所で新しい仲間もゲット出来たしシロガネ山に戻ろうか!頼むよフラ

イゴン!」

「フラ〜!!」

シユンはフライゴンをボールから出してフライゴンに乗ってシロガネ山へと飛んで向かうのだった。

ゼニガメをゲットした日から翌日…シユンはゼニガメのことをみんなに紹介するとジョウト地方のリーグに向けての特訓の続きを始めたのだった。

ゼニガメも最初はシロガネ山の強敵ばかりの野生ポケモンとのバトルに苦戦のしま

くりだったがみんなの力を借りながら修行をしていくうちに段々と実力が上がってき  
ていた：手持ちのポケモンを交換しながらバランスよく育てているうちに他のポケモ  
ンも次々と進化をしていった。野生のポケモンとのバトルばかりだとあれなので時々  
シロガネ山を降りて近くの町へと行き、トレーナーとバトルをしたりしてトレーナーと  
してのスキルを磨いたりもしていた。オーキド博士にポケモンの交換を頼んでいた時  
にカントーのポケモンリーグが開催していたことを聞かされサトシとシゲルが出場し  
たことを教えられた。

シゲルは予選敗退：サトシはベスト16まで進んだとのことらしい！今、サトシはオ  
レンジリーグに挑戦しているらしい：シユンはオーキド博士からの連絡を切るとポケ  
モンセンターで準備を済ませる：いよいよ今日ジョウト地方のリーグに挑戦するため  
にジョウトへと旅立つのだ！オーキド博士にもその話しをしておりジョウト地方に行  
くのなら最初はワカバタウンという町に向かうのがいいと教えられる。

そこにはオーキド博士の後輩というウツギ博士の研究所があり、図鑑をバージョン  
アップさせてくれるという。リーグへの挑戦のための申請もワカバタウンのポケモン  
センターで出来るということらしい：シユンはオーキド博士にいろいろと教えてくれ  
たことの礼を言つてオーキド博士との電話を切るとポケモンセンターを出る：今、シユ  
ンが居るのはセキエイ高原ポケモンセンターである：シユンはそこから人目のない所

に移動してフライゴンを出す。フライゴンはカントーには居ないためあまり目立つのを好きじやないシユンは目立たない所へと行き、フライゴンの背に乗ってワカバタウンへと飛び立つ。

「いよいよですねマスター!」

「うん! いよいよ僕達のポケモンリーグへの挑戦が始まるんだ!」

「応援していますわ! マスター!」

シユン達はいよいよ始まる夢に向けての挑戦にワクワクするのを感じていた: 持つ力を全て出してバトルすることを誓うのだった。

「まずはワカバタウンへと行って登録しないとね!」

シユンがまずはワカバタウンへと向かおうとフライゴンに言おうとしたその時:: シユンのポケットに入っているモンスターボールが開き中からポケモンが勝手に飛び出して来る。

「ミュミュウ! ミュミュウ!!!」

シユンのボールから勝手に飛び出して来たのはなんと幻のポケモン、ミュウである。

「あつ! ダメだよ! ミュウ・こんなところで出てきちゃ!」

シユンは勝手にボールから出て来たミュウにダメだと言うが、ミュウは:

「ミュミュミュウ!!」

ミュウは聞かずにシユンに甘えるようにすがりつく。

「コラ！あなたはマスターの話しを聞いているのですか!!」

メロエツタがそのミュウの態度に怒るもミュウは知らんぷりしてシユンに甘えてい  
る。

「まあまあ・良いでわありませんか！みんなで一緒に行けば!」

「ダイヤモンドはみんなで一緒に行こうとシユン達に言う。

「そうだね！それじゃみんなワカバタウンに出発しようか！お願いフライゴン!!」

「フラ〜!!」

シユンがフライゴンに頼むと上空高くシユン達を乗せて舞い上がる。

「それじゃあ行こう！ジヨウト地方のワカバタウンへ!!」

「はい!」

「ええ!」

「ミュウ!」

「フラ〜!」

こうしてシユン達はジヨウト地方のリーグへと挑戦するために長い修行をシロガネ  
山で行い、今日いよいよリーグ挑戦のためにワカバタウンへと旅立つのであった。

さて、何故シユンのボールの中にミュウが居るのかと言うと…その理由は時間を少し戻し…次の話しでわかります。

ジョウト地方編く新たなるはじまり！

## 第七話 ワカバタウンへ！はじまりの風

ジョウト地方のポケモンリーグに挑戦するためにシロガネ山で修行をしていたシユン。

いよいよジョウトリーグへ挑戦するために旅立つ。シユン達はシロガネ山を出発しジョウト地方にあるワカバタウンという町に向かっている。

その町は『新たな始まりの風が吹く町』と言われていて、そこにはウツギ博士と言うポケモン博士の研究所があり、オーキド博士に現在の成果を報告した時にウツギ博士の所でポケモン図鑑をカントー版から：ジョウト地方のポケモンのデータや新機能をアップデートしてもらえばいいと言われてオーキド博士がウツギ博士の方に連絡してくれると言うので、シユンはポケモン図鑑をバージョンアップさせるためにワカバタウンへとフライゴンに乗って向かっているのである。

「もう少しでワカバタウンに到着しますよマスター」

シユン達がリザードンに乗ってワカバタウンへと向かっているとメロエツタがジョ

ウト地方の地図が載ったガイドブックを見てもう少しでワカバタウンへと到着するとシユンに教える。

「そうか。それならもう少ししたらワカバタウンが見えて来るかな?」

メロエツタに教えられて:ワカバタウンがもう少しで見えて来るかな?と、遠くを見つめる。

それから少しの間ワカバタウンへと向かって飛んでいると――。

「見えましたわマスター。ワカバタウンですわ」

デイアンシーが見えて来たワカバタウンの町並みを指差し、ワカバタウンに到着したことを知らせる。

「あれがワカバタウン……ここからぼくの……いや……ぼく達の夢に向けての挑戦が始まるんだ」

シユンは見えて来たワカバタウンの町並みを見つめ……この場所から シユンの……目的であり……今ではシユンとポケモン達の夢となったポケモントレーナーとして頂点、『チャンピオン』になるための夢の挑戦が始まるのだと感じていた。

シユンはリザードンにワカバタウンの近くの森に降りてもらい、そこからワカバタウンへと歩く。

「……まで……苦労様。リザードン、ゆっくり休んでね」

「ウオウ！」

シユンはリザードンにご苦労様と言ってボールに戻す。

「マスター、わたしとディアンシーはボールの中に入ってますね」

「やっぱり人が多すぎる場所は苦手ですわ……」

「分かったよメロエッタ、ディアンシー」

メロエッタとディアンシーはいつものように町（街）など人が多いところではボールの中へと入る。メロエッタは基本シユン以外の人間は嫌いなので：通常は人目につかないように姿を消してシユンの側にいるが：必要が無い時はボールの中に入る。

ディアンシーも基本シユン以外の人間には慣れておらず：過去に人間に酷い目に遭わされた事があるので苦手としており：余り人が多すぎるところではボールの中へと避難する。

しかしシユンの側にいる必要のある時は：メロエッタの力で姿を消して側にいる。

そしてメロエッタとディアンシーはボールの中に入った。

「うん、それじゃあまずはウツギ博士の研究所に行こうかな」

シユン達は最初にウツギ博士のポケモン研究所に向かうことにして、ウツギ博士の研究所に向けて歩き出す。ウツギ博士は：主にポケモンのタマゴの研究で有名でワカバタウンで彼を知らない住人はいない。ワカバタウンの町の人に研究所の場所を尋ねる



と簡単に場所が分かった。そして今 ウツギ博士の研究所の前に到着する。

「ここがウツギ博士の研究所か……オーキド博士の研究所とは違うな……よし!」

シユンはウツギ博士の研究所の扉の前に来るとドアの横に付いている呼び鈴を押す。しばらくして呼び鈴から声が聞こえて来る。

「はい……どなたですか?」

「あの……オーキド博士の紹介で来たシユンと言う者ですが、ウツギ博士はいらっしゃいますでしょうか?」

シユンはオーキド博士に紹介されて来た……ウツギ博士はご在宅かと呼び鈴の相手に聞く。

「やあ!キミがシユン君か。話しはオーキド博士から聞いているよ。ちよつと待っていてね。すぐに開けるよ!」

呼び鈴に出ている声の人は相手がシユンだと分かると、ドタドタとドアの奥から走る音が聞こえて来てドアが開く。

「やお待たせ!キミがシユンくんだね。待っていたよ!さあ中に入つて」

研究所から出て来た眼鏡をかけた若い白衣を着た男の人がシユンを待っていたと言つて、シユンの中に入るように言う。

「はい、それじゃお邪魔します!」

シユンは白衣の男性に言われて研究所の中に入る。そして研究所の入口から入り、パソコンやポケモンの資料などがある研究室らしき部屋へと通される。

「ようこそ僕の研究所へ！僕がウツギだよ。シユンくん。君の事はオーキド博士から聞いているよ！よく来てくれたね」

白衣の男性が自分がウツギだと自己紹介し、シユンによく来たねと歓迎してくれる。

「あなたがウツギ博士……。改めまして、ぼくはシユンと言います。今日はウツギ博士にポケモン図鑑のアップデートをお願いしに来ました」

シユンはその男性がウツギ博士だと分かると、ポケモン図鑑のアップデートをウツギ博士にお願いする。

「うん、オーキド博士から話しは聞いてるよ。ポケモン図鑑をアップデートすればジョウト地方のポケモンのデータや新たに開発された新機能も使えるようになるよ！」

ウツギ博士はオーキド博士から既に聞いており、現在シユンの持つポケモン図鑑は初期型のカントー版の図鑑でカントー地方に生息するポケモンしか認識せず、機能も余り多くない。

ポケモン図鑑をアップデートすれば……ジョウト地方のポケモンを認識してデータが見れるようになり、新たに開発された新機能も使えるようになる。

「それじゃ早速始めようか。ポケモン図鑑を貸してくれるかい？」

「はいーよろしくお願いします、ウツギ博士」

ポケモン図鑑のアップデートのためにシユンはウツギ博士にポケモン図鑑を渡す。

ウツギ博士はシユンから図鑑を受け取ると、パソコンのドライブ部分にポケモン図鑑を入れてポケモン図鑑に新しいデータをダウンロードしていく。そして、数分後——ポケモン図鑑のバージョンアップが完了し図鑑が出てくる。

「はい シユンくん。ポケモン図鑑のアップデートが完了したよ。これで新たなポケモンのデータも見れるようになってるし、ポケモン図鑑の色んな機能も更新されているよ」

ウツギ博士はパソコンからポケモン図鑑を取り出し、アップデートの内容を説明してくれて、シユンにポケモン図鑑を手渡す。

「ありがとうございますウツギ博士」

シユンはウツギ博士からポケモン図鑑を受け取ってポケットへしまふ。

「ところでシユンくん。オーキド博士から聞いたけど……君はポケモンを育てるのが上手らしいね。良かったら君のポケモンを見せてくれないかい？」

ウツギ博士はオーキド博士からシユンがポケモンを育てるのが上手い事を聞いていて、シユンにポケモンを見せてくれるように頼む。

「いいですよ。出て来てみんなー！」

シユンはウツギ博士のお願いを聞いて、ポケットから三つのボールを取り出してボールを投げポケモン達を出す。

「ゼー！」

「ウオウ！」

「ソウソウ……」

シユンが投げた3つのボールからゼニガメ、フシギソウ、リザードンが出て来る。

「おお……これが君のポケモン達か。カントーの最初に貰える三体を持つてるなんて凄いいね。しかも見たところよく育てられている。」

しかし君のポケモンはこの三体だけなのかい？」

ウツギ博士はシユンのポケモン達を見て、目を輝かせながらリザードン達を観察し、よく育てられていると褒めてくれる。

しかしシユンのポケモンがこの三体だけなのかと思ひ尋ねる。通常トレーナーの持てる手持ちポケモンは六体、三体しか出さない事から気になったようだ。

「ありがとうございます。他のポケモンは今オーキド博士に預けています。」

ジョウト地方で新しいポケモンをゲットして育てたいと思つて手持ちを空けたいんです」

他のポケモン達はオーキド博士に預けていて、ジョウト地方で新しいポケモンをゲッ

トして育てたいと思ひ手持ちを空けといたのである

「そうか……それは良い考えだね!。このジョウト地方にはカントー地方には生息していない

ポケモンもいる。そのポケモン達をゲットして育てるのは良い事だよ!」

ウツギ博士はシユンの考えに感心し賛成する。そうしてシユンとウツギ博士が話しているとは部屋の扉の向こうから何かの鳴き声が聞こえてくる。

「チコ!」

「ん?」

「ソウ?」

「ゼニ?」

「ウオウ?」

シユン達が鳴き声が聞こえてきた方に顔を向ける……そこには頭から葉っぱの生えた小さくて可愛いポケモンがシユン達の前へと歩いてくる。

「えつと……このポケモンは確か……」

シユンは突然 自分達の前に来たポケモンを見て……その見覚えのある姿に頭の中の知識を探り思ひ出そうとする。

「この子はチコリータと言つてジョウト地方で新人トレーナーが最初に貰えるポケモン

の1匹だよ。詳しいことはアップデートした図鑑で調べてごらん」

ウツギ博士は目の前にいるポケモンはチコリータだと教えてくれた。そして

バージョンアップしたポケモン図鑑で調べてごらんと言う。シユンはウツギ博士に言われた通りにチコリータにポケモン図鑑を向ける。

「チコリータ——はっぱポケモン。頭の葉っぱから ほのかに甘い香りが漂う。大人しくて日差しを浴びるのが大好き——」

ポケモン図鑑にチコリータのデータが表示されて説明がされる。

「チコリータか……くさタイプなんですわ……」

「その通り！チコリータは くさタイプで最近、三人の新人トレーナーが僕の所から新人用のポケモンを貰って旅立ったばかりだね。次の新人トレーナー用に頼んだ三体のポケモンの一匹なんだ」

ウツギ博士は最近、自分の所から新人トレーナーが3人旅立ったため……次の新人トレーナー用にチコリータを含めた新人用のポケモンを頼み送られてきた一匹だと言う。シユンがウツギ博士の話を聞いていると……チコリータがシユンの足元まで寄って来る。

「チコー！」

「チコリータか……うん！可愛いね♪」

シユンは自分の方に寄って来たチコリータの頭を優しく撫でる。

「チコリ〜〜♪」

チコリータは気持ち良さそうにシユンの手にすり寄る。

「そのチコリータはとても人懐っこくてね。どうやらシユンくんのが気に入ったみたいだね」

ウツギ博士が言うには このチコリータはとても人懐っこいようで：シユンの事を気にいったらしい。

優しく頭を撫でてくれたシユンの事を気にいって、シユンの手に嬉しそうにすり寄っているチコリータをウツギ博士は微笑ましく感じている。

「ところでシユンくんはジョウトリーグに挑戦するのかい？」

「はい。カントーのリーグには挑戦しないでポケモンを育てていたので、その成果を試すためにジョウトリーグに挑戦するつもりです」

シユンはポケモン達を育てた成果を試したくてジョウトリーグに挑戦する。

「そうか。ジョウトリーグへの参加登録はポケモンセンターで出来るからそこですると良い」

ウツギ博士はシユンにポケモンセンターでジョウトリーグへの参加登録が出来るからそこで登録すれば良いと教えてくれる。

「はい、ポケモンセンターで参加登録をしてバッジを集める旅に出ます。それでは失礼します。ポケモン図鑑のアップデート ありがとうございます」

シユンはポケモンセンターでジョウトリーグへの参加登録をしてジムバッジを集めるためにジムを巡るとウツギ博士に伝え、ゼニガメ達をボールへと戻す。

「もう行くのかい？。道中気をつけてね」

ウツギ博士はシユンを玄関前まで送る。

「はい！ウツギ博士、それではまた！」

シユンが別れの言葉を言つて出発しようとするのと玄関前まで着いて来たチコリータが寂しそうにシユンを見ていた

「…チコ〜……」

チコリータは…シユンが行つてしまう事が分かるのと…寂しそうに目をうるうる（涙）とさせて見つめる。どうやら余程シユンと別れるのが惜しいのだろう。

この短い間にチコリータはシユンに魅かれていて…シユンは幼い頃よりポケモンに好かれやすくあつという間にポケモンと仲良くなれた。

そんなシユンの不思議な雰囲気やチコリータも感じており…シユンの優しい心も伝わつてきて…：普段は人懐っこいチコリータではあるが…一人の人間に対してここまですてきな名残惜しいと思えるのは初めてだった。



「じゃあねチコリータ。きみもいつか優しいトレーナーに出会って旅に出た時にまたどこかで会えることを楽しみにしているよ。またね!」

シユンは最後にチコリータの頭を優しく撫でると…別れの挨拶をしてポケモンセンターへと向かった。

そしてシユンは研究所から少し歩いてポケモンセンターに到着すると受付のジョーイさんに

ジョウトリーグへの参加登録をお願いする。

ジョーイさんにポケモン図鑑を渡してシユンのデータをジョウトリーグの協会本部に登録する。そして参加登録が完了し、ポケモン図鑑を受け取りポケモンセンターを出る。

「さてと……ポケモン図鑑のアップデートとジョウトリーグへの参加登録の申請も出来たし、ポケモンジムのある町に行こうか!」

「(このワカバタウンから一番近いジムのある町はキキョウシティですね)」

シユンはワカバタウンでの用事が全て終わったので…次はジムのある町を目指す事を決める。メロエッタはワカバタウンから一番近いジムのある町はキキョウシティだと教える。

「そっか。それじゃあ行こうメロエッタ、ディアンシー」

シユンは次の目的地を：ワカバタウンから一番近いジムのある町：キキヨウシティに決めて、

ワカバタウンを出発しようとしたその時――。

「チコリ〜〜！」

後ろから聞いたことのある鳴き声が聞こえて来る。

「ん？この声ってもしかして……」

シユンは後ろから聞こえて来る鳴き声に聞き覚えがあり……思わず後ろに振り向く……するとそこには……。

「チコリ〜〜」

「チコリーター！」

そこには先程 ウツギ博士の研究所で会った……研究所のチコリーターが自分目掛けて向かって来ている見て驚く。

チコリーターもシユンを見つけると喜んでシユンに向かって笑顔で飛び込んで来る。シユンもしゃがんでチコリーターを受け止める。

「チコ〜チコリ〜♪」

チコリーターはまたシユンに会えて嬉しそうにシユンにすり寄る。

「きみはウツギ博士の研究にいたチコリーターだよね？どうしてここにいるの？」

自分にすり寄っているチコリータ……ウツギ博士の所のチコリータだと思う? シュンはチコリータにどうしてここにいるのか尋ねる。するとチコリータが走って来た方からウツギ博士が走ってくる。

「お〜い!チコリータ!」

ウツギ博士はチコリータをずっと追いついて疲れているのかシュン達の所に来ると、息を荒げて膝に手をつけて激しく深呼吸する。

「…ハア…ハア……やっと追いついた……」

ウツギ博士はずっとチコリータを追いついて走っていたからか疲れて息を整えている。

「あの……大丈夫ですか?ウツギ博士」

シュンはハアハア…と疲れて息を乱しているウツギ博士を心配して大丈夫かと聞く。

「ああ大丈夫だよシュンくん。研究所からここまでずっとチコリータを追いついて来たから息が上がってしまったてね…」

ずっとチコリータを追いついてたため……息が上がってしまったウツギ博士。普段…研究に没頭してばかりで運動不足なため…体力がないウツギ博士にはキツイ運動だったようだ。

「ところで…どうしてチコリータとウツギ博士はここまで来たんですか?」

シユンは何でウツギ博士とチコリータがワカバタウンの出口近くまで追い掛けている事になってここまで来たのか尋ねるとウツギ博士は息を落ち着かせてゆっくりと話します。

「いや実はね……チコリータはシユンくんを相当気に入ったみたいだね。

君が行ってしまった後も何だか元気がない様子でね……それでチコリータからちよつと目を離れた隙に研究所から飛び出してしまつて、慌てて追い掛けて来たんだよ。どうやらシユンくんの元に行くために研究所を飛び出したようだね……」

どうやらチコリータはシユンを相当気に入つたようで、シユンを探しに研究所を飛び出してしまいうツギ博士は慌てて追い掛けて来たようだ。最初、ウツギ博士はチコリータが飛び出した理由が分からなかつたが……嬉しそうにシユンにすり寄るチコリータを見てその理由が分かつた。

「そうだったんだ。駄目だよチコリータ……勝手に研究所を飛び出しちゃー!」

「チコ……」

シユンはウツギ博士にここまで来た理由を聞いて、チコリータを注意するとチコリータはシユンに怒られてしよんぼりとする。

「さあチコリータ。研究所に帰るんだよ!」

「チコ……!」

シユンはチコリータに研究所に帰るよう言つてチコリータを掴んでウツギ博士に渡そうとするが……チコリータはシユンと離れたくないのか嫌がつて必死にシユンの服を掴んで離れないようにする。その様子を見てウツギ博士は笑顔でシユンにあるお願いをする。

「シユンくん。良かったらチコリータと一緒に連れて行つてくれないかい?」

「えっ!」

ウツギ博士はチコリータがシユンから離れたくない様子を見て、シユンにチコリータと一緒に連れて行つてくれないかとお願ひし、シユンはウツギ博士の言葉に驚く。

「チコリータはシユンくんにとても懐いているようだからね。良ければそのままチコリータと一緒に連れて行つてもらえるかな?」

ウツギ博士はチコリータがシユンにとても懐いている様子を見て、そのまま一緒に連れて行つてもらえるかとお願ひする。

「えっ!でもこのチコリータは新人トレーナー用に頼んだポケモンなんじゃ……」

シユンはチコリータは新人トレーナー用に頼んだポケモンなのに大丈夫なのかと心配する。

「大丈夫だよ。次に新人トレーナーがこの町から旅立つのはまだだいぶ先だしね。また新人トレーナー用に頼むから心配ないよ!」

心配するシユンにウツギ博士は次に新人トレーナーが旅立つのはだいたいぶ先だし、また新人用に送ってもらおうように頼めるので…心配ないと言うウツギ博士の言葉を聞いて…シユンはチコリータの方を向く。

「チコリータ…：ぼくと一緒に来るかい？」

シユンはチコリータと一緒に来てくれるか聞く。

「チコ！チコリ〜♪」

チコリータはシユンと一緒にいくかと聞かれて、チコリータは嬉しそうに笑顔で頷いてシユンに飛び付く。

「おっとーうん、これからよろしくねチコリータ♪」

「チコ♪」

シユンは一緒に来てくれるチコリータにこれからよろしくと笑みを浮かべると…チコリータも笑顔で頷く。

「良かったねチコリータ。はい、シユンくん。これがチコリータのモンスターボールだよ。後良かったらこれも貰ってくれるかい」

ウツギ博士はチコリータに良かったねと笑顔で言い、シユンにチコリータのモンスターボールと小型の受話器のような物を渡す。

「これはもしかしてポケギアですか？…」

シユンはチコリータのモンスターボールと一緒に渡された小型の機械が：ジョウト地方を中心に使われている小型の携帯通信機器である事に気づく。

「その通り。よく知ってるねシユン君。ポケギアはジョウト地方ではメジャーなアイテムだね。小型の携帯通信機器で電話や時計、地図の機能が着いているんだ：」

ウツギ博士はポケギアについて説明してくれた。ポケギアはジョウト地方ではメジャーな物だが：他の地方では余り利用する者がおらず知名度も低い。シユンも名称は知っていたが：詳しい機能までは知らなかった。

ポケギアは小型の携帯機器で電話登録機能：登録した相手との電話が可能になり、他にも時計や地図の機能も着いている。

「他にも：拡張カードを使う事で機能を増やす事も出来るんだ。色々と連絡するのに便利だからね」

「そんな：：：チコリータまで譲って貰ったのに：更にポケギアまで頂くんなんて悪いですよ：」

「遠慮しないで大丈夫だよ。チコリータを連れて行ってくれるお礼だし、僕は新しいポケギアに変えたからね！」

遠慮するシユンにウツギ博士は笑ってそう言い、自分はこの前にポケギアの新しい機種に変えたから遠慮せず大丈夫と言う。

「新しい機種にして古い方は必要ないからね……僕の古い物で良かったら貰ってくれるかな？」

「…そういう事ならありがたく貰います。ありがとうございますウツギ博士！」

「うん！何かあったら気軽に連絡してくれて良いからね。僕の番号はもう登録してあるからね」

「はい！それではそろそろ行きますね。色々ありがとうございます。さっ、チコリータもウツギ博士に最後に挨拶して」

「チコリー！」

色々と気遣ってくれたウツギ博士に再度お礼を言って…そろそろ出発しようとチコリータと一緒に別れの挨拶をする。

「うん 気をつけてねシュンくん。チコリータのことをよろしく頼むよ！」

「はい。それではお元気で！」

「チッコ！」

ウツギ博士と別れたシュンはワカバタウンを旅立ち、ジョウトリーグの出場資格を得るためにジムバッジを集める旅に出る。最初のジムのある街 キキョウシティへと向けて旅立つ。

「(ジョウト地方に最初に訪れた町で早速ジョウト地方のポケモンをゲット出来るとは



幸先が良いですね…」

「(新しい仲間が増えて嬉しいですわ♪)」

ボールの中で新しい仲間が増えて幸先の良い旅の始めに喜ぶメロエッタとディアンシー。

こうしてシユンのジヨウトリーグに向けての旅が始まるのだった――。

# 第八話 突然の出会い！新人アイドルトレーナー マリナ

シユンはワカバタウンでウツギ博士にポケモン図鑑をバージョンアップしてもらい、ポケモンセンターでジョウトリーグへの参加登録をする。

さらにウツギ博士からジョウト地方で新人トレーナーが最初に貰えるポケモン。チコリータを譲り受けて、ワカバタウンから最初のジムのある町“キキョウシティ”を指して旅立つのだった。

最初のジムのある町：キキョウシティを目指してワカバタウンを出発したシユン達は：その途中の道で休憩を取りチコリータをみんなに紹介する事にした。

ちなみにチコリータも居るので歩いて旅をする事を決めて、事情を言ってカントーのタمامシシティのジムリーダーエリカにフライゴンを預かってもらうようお願いするとエリカは心良く引き受けてくれた。そのため現在のシユンの手持ちはメロエッタとデイアンシーを外すとリザードン達とチコリータの4体である。

「チコリータのことをみんなに紹介しないとね。出て来てみんな！」

シユンはチコリータのことをみんなに紹介しようとボールを投げてみんなを出す。

「ゼニ!」

「ソウ!」

「ウオウ!」

「チコ!」

みんなは元気よくモンスターボールからシユンの前に出て来る。

「ゼニ?」

ゼニガメ達はウツギ博士の研究所に居たチコリータが此処に居ることに不思議そうにチコリータを見る。

「ああ、みんなに紹介するね。一緒に行くことになったチコリータだよ。みんなも仲良くしてね」

「チコ!」

シユンはチコリータのことをみんなに紹介し、チコリータもよろしくと笑顔でゼニガメ達に鳴き、ゼニガメ達も笑顔で頷きあつという間に仲良くなる事が出来たようだ。

「じゃあ、この2人のことも紹介するね!」

「チコ?」

シユンが2人のことを紹介すると言うとチコリータはリザードン達以外居ないのに

紹介すると言うシユンに不思議そうな顔をする。

「紹介するねチコリータ！メロエツタとディアンシーだよ！」

シユンがメロエツタとディアンシーの名前を言うと2人はチコリータの前に姿を現す。チコリータは突然自分の前に現れた不思議な存在に驚いてシユンの後ろに隠れる。

「はじめましてですわね。わたくしはディアンシーと言います。よろしくお願いしますわ♪チコリータ」

「わたしはメロエツタ。これからよろしくお願いしますチコリータ！」

ディアンシーとメロエツタは笑顔でチコリータにこれからよろしくと挨拶する。

「チコ……チコ♪」

チコリータはメロエツタとディアンシーが優しくよろしくと挨拶すると、チコリータも安心したのかシユンの後ろから出て来てメロエツタとディアンシーによりしくと笑顔で挨拶を交わす：どうやら女の子同士で気が合うようだ。

「さてと、チコリータのことをみんなに紹介出来たし、キキヨウシテイを目指して出発しようか？戻ってみんな！」

シユンはチコリータのことをみんなに紹介し終わると、キキヨウシテイを目指して出発しようとメロエツタとディアンシー以外をモンスターボールに戻す。

「それじゃあチコリータ！キミも戻って！」

シユンはリザードン達をボールに戻すとチコリータのボールを取り出してモンスターボールに戻そうとする。しかし……

「チコ!」

チコリータはボールの光を避けてボールに戻るのを嫌がる。

「チコリータ駄目だよ! 避けないで大人しくボールに戻って!」

「チコリ〜」

シユンがチコリータに駄目だよと言って大人しく戻るように言うと、チコリータはイヤヤと顔を振ってシユンに甘えるようにすり寄る。

「マスター! どうやらチコリータはマスターと一緒に居たいようです」

メロエツタがチコリータの言っていることをシユンに説明する。

「そうなのかいチコリータ?」

「チコリ!」

シユンがチコリータにそうなのかと聞くと、チコリータは笑顔で頷く。

「しょうがないな! それじゃあチコリータ、疲れたら無理せずに言うんだよ!」

「チコリ!」

シユンはしょうがないと言ってチコリータに疲れたら無理せずに言うんだよと言うと、チコリータも笑顔で応える。

「よし、それじゃあ行くか。みんな！」

「はい！」

「ええ！」

「チコ！」

シユンがみんなに出発しようと言いメロエッタ達も返事をしてキキヨウシテイを指して出発しようとする、シユン達の前にある草むらがガサガサと揺れる。

「ん？」

「何でしょう？」

シユンとメロエッタ達が自分達の前で揺れる草むらを不思議そうに見ていると、そこからシユン達の前にピンク色の体のプリンが出て来る。

「何だと思ったら野生のプリンか！気にせずに行くか？」

シユンは自分達の目の前の草むらから出て来たプリンを気にせずに行く、するとプリンが出て来た草むらがまたガサガサと揺れてそこからまた何かが飛び出す。

「まあてえ〜!!!逃がさないわよプリン！いけえ〜ワニワニ！」

「ワニヤ〜！」

プリンが出て来た草むらから出て来たのは濃い水色の髪をツインテールにしたシユンと同じ年位の女の子と、ウツギ博士にチコリータとは別に写真で見せてもらったジョ

ウト地方の最初に貰える初心者用のポケモンであるワニノコがプリンの前に出て来る。どうやらプリンをゲットしようとする追いついて来たようだ。

「また、だれか出て来た……取りあえず邪魔にならないように移動しとこ……それであれがワニノコか……」

シユンは関わりと面倒くさそうな人が出て来たと思ひ、取りあえず邪魔にならないように下がる……そして初めて見るワニノコにポケモン図鑑を向ける。

「ワニノコ……おおあごポケモン。小さいながらも暴れん坊。目の前で動くものがあればとにかく噛み付いて来る……」

バージヨンアップしたポケモン図鑑からワニノコのデータが表示される。

「あれがワニノコかあ。チコリータと同じで新人トレーナー用のポケモン……みずタイプみたいだね」

シユンはポケモン図鑑から流れるワニノコのデータを見て、チコリータと同じ新人用のポケモンかと目の前のワニノコを見る。そして、シユンはこれから始まるうとしていゝるワニノコとプリンのバトルに目を向ける。

「絶対にプリンをゲットするわよ……ワニワニ、みずでつぼう……よ……」

「ワニヤ……!」

水色の髪の女の子がプリンを絶対にゲットすると言つて、ワニノコに「みずでつぼう

“を撃つように指示を出す。どうやらワニワニと言うのはあのワニノコのニツクネー  
ムのようなだ。”

「プリー！」

プリンは素早い動きで“みずでつぼう”を交わすと、素早くワニノコに接近してワニ  
ノコをはたいた。

「ワニヤ〜」

「ワニワニ！」

ワニノコはプリン“はたく”を受けて吹っ飛ぶ。

「ワニワニ大丈夫！」

「ワニヤ〜」

ワニノコのトレーナーはワニノコに大丈夫かと聞くと、ワニノコはトレーナーの方を  
向いて大丈夫だと頷く。

「よしワニワニ、今度はプリンに“ひっかく”攻撃よ！」

「ワニ！ワニヤ〜」

ワニノコのトレーナーはワニノコに“ひっかく”攻撃を指示し、ワニノコはプリンに  
“ひっかく”を当てようと向かって行く。

「プリー！プリー〜」



プリンは自分に向かって来るワニノコの“ひっかく”攻撃を息を吸って体を膨らませて、ワニノコの“ひっかく”攻撃を弾く。

「ワニヤ!」

「ウソオ!」

ワニノコの“ひっかく”攻撃が防がれたことにワニノコとトレーナーが驚く。

「プリ! プリリュリュ! プリ!」

ワニノコの攻撃を防いだ後にプリンは空気を抜いて元の大きさに戻ると、ワニノコに“うたう”を放つ。

「ワニヤ! ワニヤ! ……ワニツ! ……」

ワニノコはプリンの“うたう”を聞いてしまい、目をウトウトとさせ眠りそうになる。

「ワニワニしっかりして、眠っちゃダメ! プリンの歌を聞かないで!」

ワニノコのトレーナーはプリンの“うたう”を聞いて眠りそうになっているワニノコにプリンの“うたう”を聞かないように言うが、ワニノコはプリンの“うたう”を聞いて目をウトウトとさせ眠りそうになりフラフラとしている。

「プリユ! プリプリプリ!!」

プリンは“うたう”を止めると、眠りそうになっているワニノコに接近して“おうふ

くビンタ”を放つ。そして……

「プリユ〜！」

「ワニヤ〜！」

「ワニワニ〜！」

「ワニヤ〜……」

ワニノコはプリンの“おうふくビンタ”を受けて戦闘不能になり、トレーナーは急いでワニノコに駆け寄る。その間にプリンは草むらの中へと逃げてしまった。

「ワニワニしっかりして、うわあ〜ん!!また負けちゃったよお〜！」

戦闘不能になったワニノコを抱き上げてプリンをゲット出来なかったことを悔しがる。

何回もプリンゲットに挑んでいたのだろう……またプリンゲットに失敗してしまったことに落ち込んでいる。

「どうしよう……ここら辺にはポケモンセンターなんてないし……ワニワニを回復出来ないよお……」

どうやらワニノコのトレーナーはワニノコを回復させたいようだが、近くにポケモンセンターが無くて困っているようだ。

「どうやらあのプリンをゲットしようとしたようですが失敗したみたいですね。それ

に、ワニノコの体力を回復させたいみたいですがポケモンセンターが無くて困っているみたいですね。どうしますかマスター?」

メロエツタが目の前で起こっている状況をシユンに言い、どうするのかと聞く。

「どうしようもなにもほつとくわけにもいかないよ、メロエツタ」

シユンはメロエツタにどうするかと聞かれると、シユンはほつとくわけにはいかないと言つてそのトレーナーの方に向かう。

「大丈夫ですか?」

「えっ?」

シユンがワニノコを抱えて困っているトレーナーに大丈夫かと声を掛けると、そのトレーナーの女の子はシユンが居ることに気づいていなかったのか声を掛けられて驚きの声上がる。

「えっと……あなたは?」

戦闘不能のワニノコを抱えた女の子はプリンとのバトルに夢中でシユンが居ることに気づいていなかったのか、突然自分に声を掛けて来たシユンにあなたは?と訪ねる。

「ぼくはさつきそこで旅の休憩をしてただけど……君はプリンのゲットに夢中で気づかなかつたみたいだね?まあそんなことよりそのワニノコを早く回復させてあげないと!」

シユンはそう言つてリュックを下ろして、その横のポケットから黄色の小さな物を取り出す。

「それつて何？」

ワニノコを抱えている女の子が、シユンに取り出した物が何なのかを聞く。

「これは、げんきのかけらつて言つてね。戦闘不能になつたポケモンの体力を少し回復させてくれるんだ」

シユンは女の子に持つてる物の名前を教え、戦闘不能になつたワニノコに持たせる。するとげんきのかけらが光つてワニノコの体力を回復させる。

「ワニヤ？ワニヤ〜！」

ワニノコはげんきのかけらを使ったおかげで体力を回復させる。

「ワニワニ！良かったあ〜ワニワニ元気になつたんだね！」

女の子はワニノコが回復したことに喜びワニノコを抱き締める。

「後はこの体力を回復させる木の実を食べれば大丈夫だよ。さあワニノコ、口を開けて！」

シユンは後は体力を回復させる木の実を食べれば大丈夫だと言つてワニノコに口を開けるように言い、ワニノコの口に木の実を入れるとワニノコの体力がさらに回復しワニノコが元気になる。

「ワニヤ〜!」

シユンがあげた木の实のおかげでワニノコはプリンにやられた体力を回復させて元気に動き回る。

「これで体力的には大丈夫だと思うけど、一応ポケモンセンターに行ったらジョーイさんに見てもらった方がいいね」

シユンはこれで大丈夫だと女の子に言うが、ポケモンセンターに行ったら一応ジョーイさんに見てもらった方がいいと言う。

「どうもありがとう!あなたのおかげでワニワニが元気になったわ!わたしはマリナって言うの!あなたは?」

ワニノコのトレーナーの女の子はマリナと自分の名前を教え、シユンに名を訪ねる。

「ぼくはシユンって言うんだ。よろしく!ワニノコが元気になって良かったよ!」

シユンはワニノコのトレーナーのマリナに自己紹介しワニノコが元気になって良かったねと言う。

「そうかあ、シユンくんって言うんだ。ワニワニが元気になったのはシユンくんのおかげだよ!本当にありがとう!」

「どういたしまして!マリナさん」

マリナとシユンがお互いに自己紹介をしてマリナがシユンに改めてお礼を言ってい

ると……

グウウウウウ

ワニノコとチコリータからお腹のすいた音が鳴る。

「ワニヤ〜！」

「チョコ〜！」

ワニノコとチコリータはお腹がすいたと言った表情でそれぞれの自分のトレーナーの方を向く。

「ワニワニ…お腹すいたの？ちよつと待ってね！」

「ワニヤ〜！」

「そういえば、さつきはみんなにチコリータを紹介していて食べてなかったからね：ちよつと待っててねチコリータ」

「チョコ！」

シユンとマリナはバッグとリュックからポケモンフーズを出してチコリータとワニノコの口元に差し出す。

「はい、ワニワニ！ポケモンフーズだよ！」

「ワニヤワニヤ〜！」

「お待たせチコリータ！ゆっくり食べるんだよ！」

「チコリ〜!」

シユンとマリナがポケモンフーズを取り出すと、チコリータとワニノコは嬉しそうにシユンとマリナの手の上のポケモンフーズを食べる。

「ねえ、ちようどいいからわたし達もお昼にしない?せっかくだし一緒に食べようよ!」  
マリナがワニノコ達がご飯を食べているからちようどいいからわたし達もお昼にしようと言って、せっかくだから一緒にお昼を食べよう!と提案する。

「そうだね。そろそろお昼の時間だし、せっかくだから一緒にさせてもらおうよ!」

シユンはその提案に賛成し、シユンとマリナは簡単なお昼ご飯の準備をしてお互いのことについて話す。

「シユンくん、もしかしてそのチコリータってウツギ博士から貰ったの?」

マリナはシユンの隣で美味しそうにポケモンフーズを食べているチコリータを見て、ウツギ博士から貰ったのかと聞く。

「そうだよ。ウツギ博士から譲り受けたんだ。マリナさんってもしかしてウツギ博士が言ってた最近旅立ったって言う3人の新人トレーナーの1人だよね?」

シユンはマリナの質問に応え、マリナの隣に居るワニノコを見てウツギ博士が言っていた最近旅立った3人の新人トレーナーの1人だと思ってマリナに聞く。

「うんそうだよ。ワニワニはウツギ博士から貰ったの!後の2人は幼なじみで、わたし

達3人は同じ日にウツギ博士からポケモンとポケモン図鑑を貰ってワカバタウンを旅だつて別々の道に行ったの！シユンくんもワカバタウンから旅だったの？わたしワカバタウンでシユンくんを見たことないけど？」

マリナはウツギ博士からワニノコを貰って幼なじみの2人と同じ日にワカバタウンを旅立つたと言ひ、シユンにワカバタウンから旅だったのかと聞く。

「いいや、ぼくはカントーのマサラタウンから出発したんだ。オーキド博士からポケモンと図鑑を貰つてジョウト地方のポケモンリーグに挑戦するためにジョウト地方に来たんだ」

シユンはマリナに自分はカントー地方のマサラタウンから旅立ち、ジョウト地方のポケモンリーグに挑戦するために来たと言ひ説明する。

「シユンくんつてカントー地方から来たんだ！カントー地方を旅してた時はやっぱりジム巡りの旅をしてたの？」

マリナはシユンにカントー地方ではジム巡りの旅をしたのかと聞く。

「いくつかのジムには挑戦したけどね。その後はポケモンを強くするために特訓してたから全てのジムには挑戦してないよ」

シユンは数カ所のジムに挑戦し、後はジョウトリーグに挑戦するためにポケモンを育てていたと言ひ。



「へえ、そうなんだ。そうだ! シュンくんは目指してる夢ってある? わたしはアイドルトレーナーを目指してるの!」

マリナはシュンに目指してることはあるかと聞き、自分はアイドルトレーナーになることを目指していると言う。

「アイドルトレーナー? マリナさん、アイドルトレーナーって?」

シュンはアイドルトレーナーを知らなかったのか、マリナにアイドルトレーナーとは何かと聞く。

「アイドルトレーナーって言うのはね! 歌って踊れるアイドルみたいにバトルをするトレーナーの事なの。ポケモンと一緒に振り付けをしたりしてね。わたしはポケモン達と一緒に歌って踊れるアイドルトレーナーになるの! シュンくんは何か目指してる事ってある?」

マリナはシュンにアイドルトレーナーについて説明し、シュンに目指していることはあるかと聞き返す。

「ぼくはチャンピオンになるのが目標なんだ。そのためにカントーではポケモンを育てるのに集中して、ジョウトリーグでその成果を試すためにジョウト地方に来たんだ」

シュンは自分の夢であるチャンピオンになると言う目標をマリナに教える。そのためにポケモン達と一緒に頑張っていたのだと。



の初めてで中々ゲット出来ないの。シユンくん：もし良かったらプリンをゲットするの手伝ってもらえないかな?お願い!」

マリナはワカバタウンから此処まで来る途中でプリンに会ってプリンをゲットしようとしたが失敗し、さつきシユンが見たので3回目らしく、マリナはトレーナーになつたばかりでポケモンをゲットが難しく、シユンにプリンのゲットを手伝ってほしいとお願いする。

「うん、いいよ!ぼくで良かったら」プリン「ゲットに協力するよ!」

シユンはマリナのお願いを聞いて「プリン」ゲットに協力すると言う。

「ありがとうシユンくん!」

マリナは「プリン」ゲットに協力してくれるシユンにお礼を言い、シユンとマリナはお昼の片付けをしてさつきプリンが逃げた方に向かい、シユンとマリナ、チコリータとワニノコでプリンを探す。

「プリン居ないなあ〜!もう遠くに逃げちゃったのかなあ:」

マリナはさつきからプリンが逃げて行った方を歩いているが、一向にプリンの姿が見えてこないため:もうプリンが遠くに逃げてしまったのかと不安になる。

「いや、たぶんまだそんなに遠くには行っていないと思うよ!さつきマリナさんのワニノコとバトルしたから、体力も使ってお腹もすいてるはずだから:もしかしたらこちら

辺にある木の実の生えた木の下に居るかもしれない：」

シユンは不安になるマリナにまだこの辺に居るかもしれないと言う。

シユンとマリナ達は引き続きプリンを探して森の中を探す。そして、探すこと数分

…

「なかなか見つからないなあ、プリン：」

「シツ！マリナさん：ほら見て！」

なかなかプリンが見つからないため疲れが出ていたマリナの前に何か居ることに気づいたシユンが静かにするように言い、前を見るように言う。そこには……。

「プリー！プリー！」

美味しそうに木の実を食べているプリンをシユンが見つける。

「居たあゝ！プリン、今度こそゲットよ。行くわよワニワニ！」

「ワニヤ〜！」

マリナとワニノコがプリンを見つけると今度こそゲットしてみせると言つてプリンの前に飛び出す。

「ちよつと待つてマリナさん！」

「チコ！」

シユンとチコリータは慌ててマリナとワニノコの後を追い掛ける。

「プリン、もう一度勝負よ!今度こそあなたをゲットするんだから!」

「ワニヤ〜!」

マリナとワニノコが今度こそプリンをゲットすると気合を入れる。

「プリユ!プリユ〜!!」

プリンは食事の邪魔をされたからか怒って体を膨らませる。

「ちよつとマリナさん!」

「シュンくんはわたし達がピンチになったら手伝ってね。それじゃあ行くわよワニワニ!」

「ワニヤ〜!」

マリナはシュンにピンチになったら手伝ってくれるように言い、ワニノコに行くように言う。

「ワニワニ!」みずでっぼう」よ!」

「ワニヤ〜!」

ワニノコはプリンに”みずでっぼう”を放つ。

「プリッ!!」

プリンはまたもやワニノコの”みずでっぼう”を交わして、ワニノコに迫る。

「マリナさん!プリンの攻撃が来るよ!」

「うん、分かってるわ！ワニワニ、交わして〃ひっかく〃よ！」

マリナはシュンのアドバイスを聞いて、ワニノコに迫るプリンのはたく〃攻撃を交わし、ワニノコに〃ひっかく〃を指示しプリンに〃ひっかく〃を命中させる。

「プリン〜」

プリンはワニノコの〃ひっかく〃を受けて吹っ飛ぶが、体制をすぐに立て直す。

「よし、この調子でいくわよ！ワニワニ、〃みずでっぼう〃！」

「ワニヤ〜！」

プリンに〃ひっかく〃攻撃が命中したのを見て、続けて〃みずでっぼう〃をワニノコに指示する。

「プリン！」

しかしプリンは簡単にワニノコの〃みずでっぼう〃を交わして、ワニノコに接近する。

「プリプリン！プリユ！」

「ワニヤ！ワニヤ〜」

プリンはワニノコに〃おうふくビンタ〃を繰り返し、ワニノコにくらわせる。

「ワニワニ！大丈夫！」

「ワニヤ〜！」

マリナは「おうふくビンタ」を受けたワニノコに大丈夫かと言い、ワニノコは大丈夫だと言うように応える。

「プリユ・プ〜プリユリユ〜プ〜!!」

プリンは「うたう」を繰り返してワニノコを眠らせようとする。

「今だよマリナさん!」

「うん!ワニワニ、”みずでっぼうよ”!」

「ワニヤ〜!」

シュンが「うたう」を繰り返して隙が出来たとマリナに知らせ、マリナはシュンのアドバイスを見逃さずにワニノコに「みずでっぼう」を指示してプリンに「みずでっぼう」が迫る。

「プリユ!プリユ〜!!プリユ……」

「うたう」をしていて隙だらけとなっていたプリンに「みずでっぼう」が命中しプリンを吹っ飛ばし木に衝突しひんし手前まで追い詰める。

「マリナさん、今がチャンスだよ!」

「うん!いつけえ〜モンスターボール!」

シュンは今がチャンスだと言い、マリナは倒れているプリンにモンスターボールを投げ

プリンにモンスターボールが当たり、プリンがモンスターボールの中に吸い込まれるとボールが数回揺れてポンつと言う音が鳴り、プリンをゲット出来たことを知らせる。

「やったあ！」プリン「ゲット出来たあ〜！」

「ワニヤ〜！」

マリナとワニノコはプリンをゲット出来たことに飛び上がって喜ぶ。

「良かったねマリナさん！ぼくが手伝わなくてもしつかりゲット出来たじゃないか！」

「ううん・シユンくんがアドバイスしてくれたおかげだよ。プリンも一緒に探してくれまし！それにワニワニの体力も回復してくれたおかげもん！本当にありがとう！」

マリナはシユンがアドバイスしてくれたおかげでプリンをゲット出来たと言い、プリンを一緒に探してくれたワニノコの体力を回復させてくれたお礼を言う。

マリナがプリンをゲットするとシユン達は森を進み、キキョウシティに行く道の途中で別れ道に差し掛かる。キキョウシティに行く道とその途中にある町に行く道で分かれている。

「それじゃあわたしはワニワニとプリンをポケモンセンターに連れて行きたいからこの近くの町にあるポケモンセンターに行くわ。シユンくんは？」

マリナはワニノコとプリンをポケモンセンターに連れて行くためにポケモンセンターのある近くの町に行ける右の道に行くと言う。



「ぼくはこのままキキョウジムに向かうよ。キキョウジムに挑戦するためにね」

シユンはキキョウジムに挑戦するためにこのままキキョウシテイに向かうと言う。

「そっか!それじゃあシユンくんとは此処でお別れだね。そうだシユンくん!良かったらポケギアの番号教えてよ!また会いたい時とかに連絡したいから!」

「分かった、いいよ!」

シユンとマリナはお互いのポケギアの番号を登録しあう。

「それじゃあシユンくんまたねえ!」

「うん!マリナさんまた!」

シユンとマリナは分かれ道で別々の道を進み、マリナはワニノコとプリンを回復させるために近くのポケモンセンターのある町に行く道へ!シユンはキキョウシテイに行く道で分かれる。

「変な人でしたねマスター!」

マリナが居たために今まで姿を消していたメロエツタが姿を現して、マリナを変な人だったと言う。

「うん!確かにちよつとよく分からない子だったかな?」

「でも、面白い人でしたわ!」

シユンは確かによく分からない子だったと言い、デイアンシーは面白い人だったと言

う。

「さてと……それじゃキキヨウシティに向かおうかみんな！」

「はい！」

「ええ！」

「チコリ！」

シユン達は突然の出会いに驚きながらもキキヨウシティを目指して旅を続けるのだった。

## 第九話 VSハヤト…てんくうのバトル!

シユンはキキョウシティに向かう途中でウツギ博士から聞いていた最近ワカバタウを旅立った3人の新人トレーナーの1人、マリナと出会い：プリンのゲットに協力し、マリナと別れキキョウシティへと向かう。

その途中で野生のポケモンと出くわしチコリータでの初バトルが始まろうとしていた。

シユン達がキキョウシティを目指して旅をしていると、草むらから野生のポケモンが飛び出して来る。

「レディー！」

そのポケモンは大きい目に6本の手足を持った紅色をしている。

「このポケモンは？」

シユンは初めて見るポケモンにポケモン図鑑を向けるとそのポケモンのデータが表示される。

「レディバ…：…いつつぼしポケモン。寒くなるとあちこちからレディバがたくさん集まって来て、寄り添い合いながら暖め合う…：…」

ポケモン図鑑からそのポケモン：レディバのデータが表示される。

レディバは草むらから出て来て花にある蜜を吸っている。

「レディバって言うのか！見た目的にむしタイプだね。どうしようかな？」

「チコ！チコリ！」

シユンがレディバをむしタイプだと予想しようかと考えていると、チコリータが自分がバトルしたいと言うようにシユンのズボンの裾を引っ張る。

「んっ！チコリータ、キミがバトルしたいの？」

「チコリ！」

シユンはチコリータがバトルしたいと言うとシユンはどうしようかと考える。

「でも、レディバはむし・ひこうタイプだからチコリーター！キミとは相性が良くないよ」

「チコリ！チコリ」

シユンはレディバはチコリータにとって、相性が良くないと言うがチコリータはそれでもバトルしたいと言うようにシユンにお願いする。

「良いではありませんかマスター、危なくなったらわたし達が助ければ良いのですし、やらせてみてはどうでしょうか」

メロエツタがチコリータにバトルさせようか考えているシユンにバトルさせてあげれば良いと言う。

「メロエツタ…：そうだね、とりあえずバトルしてみようかチョコリーター！」

「チョコ！」

シユンはメロエツタの言う通りにとりあえずチョコリーターでレディバとバトルをすることにしてチョコリーターは前に出る。

「レディ？」

花の蜜を吸っていたレディバは突然自分の前に来たチョコリーターを不思議そうに見ている。

「よし、いくよチョコリーター！」 はっぱカッターだ」

「チョコ〜！」

シユンはチョコリーターに”はっぱカッター”を指示しレディバに向かって”はっぱカッター”を撃つ。

「レディ？レディ〜」

レディバはチョコリーターの突然の”はっぱカッター”を避けられずに吹っ飛ばす。

「レディ〜?!レディ!!」

レディバはいきなり攻撃されたことに怒って反撃でチョコリーターに向かって”たいあたり”する。シユンはチョコリーターに避けるように指示しチョコリーターは素早くレディバの”たいあたり”を交わす。

レディバはチコリータに”たいあたりを交わされるが羽を羽ばたかせ反転しチコリータに連続で”たいあたり”を繰り出す。

「チコリータ! つるのムチ”でレディバを掴まえるんだ!」

「チコ!」

チコリータはシユンの指示で”つるのムチを伸ばしレディバを捕らえようとする。

しかし”レディバは素早い動きで飛び回りチコリータの”つるのムチを交わしていく。

そして、つるのムチを交わしてレディバはチコリータを”たいあたりで吹っ飛ばす。

「レディ!」

「チコ〜!?!」

チコリータはレディバの”たいあたりを受けてシユンの所まで下がる。

「大丈夫かいチコリータ?」

「チコリ!」

シユンはレディバの”たいあたりを受けてダメージを受けたチコリータに大丈夫かと聞くとチコリータは大丈夫だと言うように頷く。

「レディ〜!」

レディバはチコリータにさらなるダメージを喰らわせようと”たいあたりで迫る。

「チコリータ、ギリギリまでレディバを引きつけるんだ!」

「チコ!」

シユンはギリギリまでレディバを引きつけてから反撃をしようとチコリータにギリギリまで攻撃せずに引きつけるように指示し、チコリータもシユンのことを信頼しているから迷わずに頷く。

レディバの“たいあたりがチコリータに当たるギリギリの距離まで迫る：そしてチコリータにレディバの”たいあたりが迫る：その時!!!

「今だチコリータ!はっばカッターだ!!」

「チコリ〜!!」

ギリギリの距離までレディバを引きつけるとシユンはチコリータに今だと合図し、チコリータはシユンの合図で目の前に迫るレディバを“はっばカッターで吹っ飛ばす。

「レディ〜…!?!」

レディバはチコリータの“はっばカッターを至近距離で直撃。くさタイプのはレディバにとっては効果はいまひとつでも至近距離で受けたためかなりのダメージを受けて吹っ飛んで、ひんし寸前となる。

「レディ〜…!」

「よし、レディバは今ののでかなりのダメージを受けたはず!今がチャンスだ：いけ、モン

スターボール!!」

シユンはダメージを受けてひんし寸前となっているレディバに向かってモンスターボールを投げる。ボールがレディバに当たるとレディバをボールの中に吸い込みボールが数回揺れるとポンつと鳴つて光りレディバをゲット出来たことを知らせる。

「よし!レディバをゲットだ。よく頑張ったねチコリーター!」

「チコリ〜!!」

シユンはレディバをゲットに成功し、チコリータをよく頑張ったねと頭を撫でてチコリータを誉めると:チコリータもシユンの手に気持ち良さそうにしてシユンにすり寄る。

「よく頑張りましたねチコリーター!」

「素晴らしいバトルでしたわ!」

シユンの後ろに居たメロエツタとテイアンシーが初めてのバトルで頑張ったチコリータを誉める。

シユンとチコリータがレディバをゲットすると、レディバをいいキズぐすりで回復させてそのまま最初のジムがあるキキョウシティへと向かう。

途中で野生のポケモンやトレーナーとチコリータやゲットしたレディバで相手をしながら、だんだんとチコリータとレディバにバトルの経験を積みせレベルを少しずつ上



げていく、もちろんリザードン達の技の特訓もしながらキキョウシティを目指して旅をすること数日：：：シユン達はいよいよ最初のジム：キキョウジムのある町、キキョウシティへと到着する。

シユンはキキョウシティへと到着するとポケモンセンターへと向かいポケモン達を回復させると、キキョウジムを探してそして高い塔のような建物のキキョウジムへと到着する。

「ここがキキョウジムか：：：高い建物だな：」

シユンは塔のような形をしていて上が広がっているキキョウジムを見上げる。

「マスター：キキョウジムはどうやらひこうタイプのポケモンを使うジムのようです。このジョウト地方ガイドブックに書いてあります」

メロエツタはシユンの肩に座りながらジョウト地方のことについて書いてあるガイドブックを見てキキョウジムのジムリーダーはひこうタイプの使い手だとシユンに教える。

「そうなんだ。ひこうタイプが相手ならゼニガメにあの技を覚えさせたのは正解だったね！それじゃあ早速ジム戦を申し込もうか！」

「頑張つて下さいねマスター！」

「応援していますわ!」

メロエツタとディアンシーはシユンに声援を送るとボールの中に入る。

これは事前に決めていた事だが：メロエツタ達からジム戦のアドバイスは受けず：あくまで自分のバトルの状況を見抜く判断力と、学んで来たポケモンに関する知識、そして自分のポケモン達を信じてジム戦に挑む事を約束していたのである。

シユンはジム戦をお願いしにキキョウジムの入口へと向かい中に入る。

「すみません!どなたいらっしやいますか?」

シユンは入口からキキョウジムの中に入りジム戦をお願いするためにジムの人を呼ぶ。

「どうしました。何か御用ですか?」

ジムの奥から柔道着を来た集団がシユンの声を聞いてシユンの前に出て何か御用かと訪ねる。

「はい!ジム戦をしたくて来ました。ジム戦をお願いします!」

シユンがジムの人達にジム戦をお願いすると、柔道着を来たジムの人達は困ったような表情をしてシユンに申し訳ないように言う。

「申し訳ない：：ジムリーダーのハヤトは今ジムを留守にしている居ないんだ」

ジムの人がジムリーダーは今ジムを留守にしている居ないとシユンに言う。

「そうですか…どれくらいでジムリーダーの人は帰ってきますか?」

「たぶん…もう少ししたら帰ってくると思うのですが…」

シユンがジムの人にジムリーダーはどれくらいで帰ってくるかと訪ねると、ジムの人がたぶんもう少しで帰ってくるにあやふやな返事をする。

シユンがジムリーダーが居ないために出直してジムリーダーが帰ってくるのをポケモンセンターで待とうと思ったその時…!

「あつ! 帰って来ました。みんな、ハヤトさんが帰って来ましたよ!」

ジムの入口の近くに居た人が外を見てジムリーダーのハヤトさんが帰って来たとき、みんなに知らせる。ジムの人達は出迎えるためにみんなジムから出て入口に一列に並び、ハヤトを出迎える。

シユンもジムの人達について行って外に出ると、そこには空高くハングライダーで飛んでいる青年と一匹のとりポケモンがジム目掛けて飛んでいる。

そして、ハングライダーを器用に操作しジムの前へと降りて来る。

「二「お帰りなさいハヤトさん!!!」二」

ジムの人達はハヤトが降りて来ると、ハヤトにお帰りなさいと挨拶をする。

「ただいまみんな! いやあ今日も良い飛行(フライト)だったよ!」

「ホ〜!」

ハヤトはみんなにただいまと言うと、今日も良いフライトだったと嬉しそうに言う。  
「ん、キミはっ？」

ハヤトはジムのみんなと一緒に居るシユンに気づいて誰なのかと訪ねる。

「この方はジム戦の挑戦者ですよハヤトさん！」

「シユンと言います。ジム戦をお願いしたくて来ました」

シユンは帰って来たキキョウジムのジムリーダーのハヤトにジム戦を申し込む。

「そうか、チャレンジャーか！それは待たせてすまなかった。それじゃあ早速ジム戦をしようか！バトルフィールドはこっちだ。付いて来てくれ！」

ハヤトはシユンに待たせてすまなかったと謝罪し、早速ジム戦をしようと言ってシユンをバトルフィールドへと案内する。

ハヤトとシユン：それにジムの人達は大きいエレベーターに乗り上へと上がって行く。エレベーターで上へと上がっている途中でハヤトはシユンにあることを訪ねる。

「ところでシユンくん・キミはキキョウジムがひこうタイプのポケモンのジムだと知っているかい？」

「はい！ハヤトさんはとりポケモンの使い手だと聞いています」

ハヤトはシユンにキキョウジムがひこうタイプのジムだと知っているかと訪ねると、シユンはハヤトさんはとりポケモンの使い手だと聞いていと応える。

「その通り！おれはとりポケモンが大好きでとりポケモン達のことを愛している！」

「ホー！」

ハヤトはとりポケモンのことを愛していると云って肩に止まっているホーホーを優しく撫でる。

ホーホーを愛しそうに撫でていたハヤトが突然険しい顔付きになる。

「だからこそおれは許せないことがある・それは」とりポケモンはでんき技で一撃だなどとと言われることが多いがおれはそれが許せない!!だからおれはそんな奴らに」とりポケモンの強さを見せるために」とりポケモンと気持ちを一体にしようとしたのがあのハンググライダーなんだ」

ハヤトはとりポケモンに対しての並々ならぬ思いをシユンに話す。そして、とりポケモンと気持ちを一体にするためにハンググライダーと一緒に飛んでいるのだと説明する。

「そうなんですか…確かにひこうタイプはでんきタイプと相性が悪いですけど、相性だけでバトルが決まるわけではないですしね：自分の好きなポケモン達がバカにされたら悔しいですよね！」

シユンは確かに”ひこうタイプはでんきタイプとは相性が悪いがバトルは相性だけで決まるわけではない”と言い、自分の好きなタイプのポケモンが馬鹿にされたら悔しい

からと：ハヤトのひこうタイプへの思いに共感する。

「そうか・シユンくん。キミは良い奴だな。そうだ、ポケモンバトルは相性だけで決まるわけではない!!おれはそれと」とりポケモンの強さをチャレンジャー達にジム戦で教えているんだ。大好きなとりポケモンと一緒にね!!」

自分の思いに共感してくれたシユンを良い奴だと言い、ポケモンバトルは相性だけで決まるわけではないと、そしてとりポケモンの強さをチャレンジャー達にジム戦で教えているのだとシユンに説明する。

そうして、ハヤトがシユンにとりポケモンの並々ならぬ思いについて話しているとエレベーターがバトルフィールドのある階へと到着する。シユンとハヤト達はバトルフィールドの方へと向かう。

「それでは只今より、キキョウジムのジムリーダー”ハヤト”とチャレンジャー”シユン”によるジム戦を開始いたします。

使用ポケモンは3体! 3体全てのポケモンが戦闘不能となった場合、試合終了となります。なお、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます」

審判が審判台へと立つと、ジム戦の開始の宣言をしジム戦のルールをシユンに説明する。

「よし、シユンくん!おれの1体目はコイツだ!いけっホーホー!」

「ホ〜!」

ハヤトが最初に出すポケモンは肩に止まっていたホーホーに行くように言うと、ホーは翼を羽ばたかせてバトルフィールドへと向かって行く。

「あれがホーホーか…」

シユンはハヤトの1体目のポケモン：ホーホーにポケモン図鑑を向ける。

【ホーホー…：ふくろうポケモン。いつも一本足で立っている。足を入れ替える瞬間は素早くて中々見られない…。】

「ノーマル・ひこうタイプか…ちよつと賭けだけど、頼むよチコリータ!」

「チコ!」

シユンは最初の1体目をチコリータに決めてボールを投げてチコリータがバトルフィールドに勢いよく出て来る。

「なに!!」

ハヤトはシユンがひこうタイプと相性の悪いくさタイプのチコリータを出したために目を鋭くさせて驚く。

「えっ!」

「何だって!!」

バトルフィールドよりだいぶ離れた端に居るジムの人達もシユンがチコリータを出

したことに驚き、ガヤガヤと騒いでいる。

「頼んだよチコリータ!」

「チコリー!」

シユンがチコリータに頼んだよと言いチコリータも任せてと言うように頷く。

シユンとチコリータが意気込むのを見てハヤトが呆れたような様子でシユンに言う。

「シユンくん・チコリータはくさタイプのポケモンだ。くさタイプはひこうタイプのポケモンとは相性が悪いのは知っているはずだ：どういうつもりなんだい?」

ハヤトはシユンがチコリータを出したことがっかりとした様子でシユンにどういうつもりだと問い掛ける。そんなハヤトに向かってシユンは……

「ハヤトさん……あなたさつきと言っていることが矛盾していますよ」

「なに?」

シユンはハヤトにさつきと言っていることが矛盾していると言い、ハヤトはシユンのその言葉に不思議そうに聞き返す。

「あなたはさつきひこうタイプのポケモンがでんきタイプの攻撃で一撃だと言われるのが許せないと言っていましたよね!」

「それがどうしたんだ?」

シユンはさつきハヤトがひこうタイプがでんきタイプの技で一撃だと言われるのが



許せないと言っていましたねと言い、ハヤトもそれがどうしたと言り返す。

「それにバトルは相性だけではありません・ぼくはチコリータを信じています。タイプ相性の不利を覆してくれるとね！」

「チコリー！」

シユンはバトルは相性だけではないと言って、シユンはチコリータがタイプ相性を覆して勝つことを信じていると言ってハヤトの目を強く見て宣言する。

「……そうだな・これではおれも鳥ポケモンを馬鹿にする連中と一緒にだな……すまなかつたなシユンくん。それでは見せてもらおうか!!キミとチコリータの強さを！」

ハヤトはシユンの発言を聞いてこれでは自分も”とりポケモンを馬鹿にする連中と一緒にだなと苦笑し、シユンとチコリータの強さを見せてもらおうと言う。

「それでは試合始め!!」

そして今、審判から試合開始の宣言がされバトルがスタートする。

「よし、行くぞホーホー!チコリータに”つつく”攻撃だ！」

「ホー！」

試合が開始されるとハヤトは素早くホーホーに”つつく”攻撃を指示し、ホーホーは素早い動きでチコリータに迫る。

「チコリータ、交わして”はっぱカッター”だ！」

「チコリ！」

シユンはチコリータに交わして”はっぱカッターを指示する。

ホーホーはチコリータに”つつく”攻撃をするが、チコリータはホーホーの”つつく”を交わしてホーホーに”はっぱカッター”を放つ。

「ホ〜!!」

ホーホーはチコリータの”はっぱカッター”を受けて少し後退するも：効果はいまひとつなのでそこまでのダメージはなく、直ぐに体制を立て直す。

「大丈夫かホーホー！」

「ホ〜！」

ハヤトはホーホーに大丈夫かと確認するとホーホーは大丈夫だと言うように頷く。

「よし、ホーホー：”ねんりき”を使い！」

「ホ〜！」

ハヤトがホーホーに”ねんりき”を指示すると：ホーホーは両目を光らせてチコリータに”ねんりき”を放つ。

「チコリ？」

チコリータはホーホーの”ねんりき”を受けて動けなくなる。

「そのままチコリータを”ねんりき”で吹っ飛ばせ!!」

「ホ〜!!」

ハヤトは「ホーホーに」ねんりき”でチコリータをそのまま吹っ飛ばすように指示し  
ホーホーは”ねんりき”でチコリータを吹っ飛ばす。

「チコ〜」

「チコリータ!!」

チコリータは「ホーホーの”ねんりき”でシユンの足元近くまで吹っ飛ばす。

「チコリータ大丈夫かい!」

「チコリ!」

シユンはチコリータに大丈夫かと聞くと、チコリータは頭を振って大丈夫だと頷く。

「どンドン行かせてもらおうよ!ホーホー、チコリータに”たいあたり”だ!!」

「ホ〜!」

ハヤトは一気に畳みかけようと「ホーホーに”たいあたり”を指示しホーホーはチコ  
リータに向かって行く。

「チコリータ!こっちも”たいあたり”だ!」

「チコ!」

シユンもチコリータに”たいあたり”を指示し迫り来るホーホーへと向かって行く。  
そしてバトルフィールドの中央で:チコリータとホーホーの”たいあたり”がぶつか

り合う。

チコリータとホーホーは“たいあたり”でぶつかると相手を押しつけようとお互いを押し合う。しばらく拮抗していたがチコリータが力を入れてホーホーを吹っ飛ばす。

「チコ〜!!」

「ホ〜!」

チコリータが力を入れてホーホーを押しつけるとホーホーを吹っ飛ばす。

「今だチコリータ!はっばカッター”だ!」

「チコリ〜!」

シユンはチコリータに”はっばカッター”を指示し、吹っ飛ばしたホーホーに追撃する。

「ホ〜」

「ああ!ホーホー!!」

ホーホーは”はっばカッター”を受けて吹っ飛び、地面へと落ちて戦闘不能になる。ハヤトがホーホーへと駆け寄る。

「ホーホー戦闘不能!チコリータの勝ち!」

審判によってチコリータの勝利が宣言される。くさタイプのチコリータが相性の悪いはずのひこうタイプのホーホーに勝ったことに周りに居たジムの人達は驚く。

「ホーホー…よくやってくれた。ゆつくり休んでくれ：凄いなシユンくん。本当に相性の悪いはずのチコリータで勝ってしまうなんてな！だが、次はこうは行かないぜ！次はこいつだ。いけっドードリオ!!」

ハヤトはホーホーによく頑張ったと言って戦闘不能になったホーホーをボールに戻し、相性の悪いはずのチコリータでホーホーに勝つことに驚きつつも次はこうは行かないと意気込み、ハヤトは2体目のポケモン”ドードリオ”を繰り出す。

「アッツツ!!」

ドードリオはボールからバトルフィールドに出て来ると3つの頭が高らかに鳴き声を上げる。

「ぼくはこのままチコリータで行きます」

「(コクツ) それではバトル開始!!」

シユンはこのままチコリータで行くと言い、審判は頷くとバトルの再会を宣言する。

「シユンくん…オレのドードリオはな、飛ぶことが出来るんだぜ!! いけえドードリオ!!」

「アッ!」

ハヤトが自分のドードリオは飛ぶことが出来ると言うと、ドードリオはとてつもない速さでチコリータへと向かって来る。

「ドードリオは空を飛べないはずだけど?…今はそれどころじゃないか・チコリータ  
!”はっばカッター”だ」

「チコリータ!」

シユンはドードリオが飛べるはずがないと考えるが…ドードリオが凄いスピードで迫つて来ている事に危機感を感じて一旦思案するのを止めて・返り討ちにしよう、チコリータに”はっばカッター”を指示しチコリータは迫るドードリオに放つ。

「よしドードリオ!跳べ!」

「ア〜!」

ハヤトがドードリオに飛ぶように指示するとドードリオは強靱な足から繰り出されるジャンプ力で空高く飛び上がりチコリータの”はっばカッター”を交わす。

「なっ!」

「チコ!」

シユンとチコリータはドードリオが空高く飛び上がったことに驚く。

「よしドードリオ!”ドリルくちばし”だ!」

「ア〜!」

「チコ〜」

「チコリータ!!」

シュンとチコリータが驚いて動きが止まっている隙にドードリオのくさタイプのチコリータに効果ばつぐんの「ドリルクちばし」が直撃し、チコリータを吹っ飛ばす。

そして……

「チコ〜〜:」

「チコリータ戦闘不能!!ドードリオの勝ち!」

チコリータはドードリオの「ドリルクちばし」を受けて戦闘不能となり、審判からチコリータの戦闘不能が宣言される。

「チコリータ!!」

シュンはチコリータのもとへと行き戦闘不能となったチコリータを抱きかかえる。

「大丈夫かいチコリータ!」

「チコ〜」

シュンはチコリータに大丈夫かと聞くとチコリータは体をぐったりとして、負けてしょんぼりとした様子で鳴く。

「チコリータよく頑張ったね! ゆっくり休んでね」

シュンはチコリータによく頑張ったと言ってボールに戻す。

「ドードリオが跳ぶって言うのはこういうことだったのか……あのジャンプ力に気をつ

けないと：次はキミだよ。頼んだよゼニガメ!!」  
「ゼニ〜!」

シユンはドードリオのあのジャンプ力に気をつけるようにして、シユンは2体目のポケモンゼニガメを繰り出す。

「それでは、始め!!」

「シユンくんの2体目のポケモンはゼニガメか!面白い!ドードリオ、ゼニガメに接近しろー!」

「ア〜ツツ!」

ハヤトはドードリオにゼニガメに接近するように指示しドードリオはものすごい足の速さでゼニガメへと接近する。

「来るよゼニガメ!」みずでっぼう」だ!」

「ゼニユ!ゼニユ〜!」

シユンはゼニガメに”みずでっぼう”を指示し、迫るドードリオに”みずでっぼう”を放つ。

「跳べドードリオ!」

「ア〜ツツ!」

ハヤトはまたドードリオに跳ぶように指示し、ドードリオはまた空高く飛び上がり”



みずでっぼう”を交わす。

「ドードリオ、”トライアタック”だ！」

「ア〜ツツ!ア〜!!」

ドードリオは3つの口からほのお・こおり・かみなりの三位一体の攻撃”トライアタック”をゼニガメへと向けて放つ。

「ゼニガメ!下に向かって”みずでっぼう”だ！」

「ゼニユ〜!」

シユンはゼニガメの下に向かって”みずでっぼう”を指示し、ゼニガメは地面へと”みずでっぼう”を撃つてドードリオより高く舞い上がりドードリオの”トライアタック”を交わす。

「なに!」

「ア〜!」

ハヤトとドードリオはゼニガメがドードリオよりも高く舞い上がって”トライアタック”を交わしたことに驚く。

「ゼニガメ!”れいとうビーム”だ！」

「ゼニユ〜!」

「ア~~~~」

「ドードリオ!!」

シユンがゼニガメに覚えさせていた“れいとうビーム”がドードリオに直撃し、ドードリオに大きいダメージを与える。ドードリオに効果ばつぐんの“れいとうビーム”が直撃し、大きなダメージをおって地面へと落下する。

「今だゼニガメー!! ロケットずつき”だ!」

「ゼニゼニ!!ゼニユ~~~~!」

ゼニガメは地面へと素早く着地すると、落下して来るドードリオ目掛けて勢いよく突っ込む頭突き”ロケットずつき”でドードリオを吹っ飛ばす。

「ア~~~~」

「ああ!」

ドードリオはゼニガメの“れいとうビーム”と“ロケットずつき”の連続攻撃で大ダメージを受けて倒れる。

「ドードリオ!立て!ドードリオ!ド根性だ!」

ゼニガメの連続攻撃を受けてドードリオは大ダメージを受けて倒れているドードリオにハヤトは根性で立つように言い声援を送る。するとジムの人達も立ち上がりドードリオを応援する。

「ド根性! ド根性! ド根性!」

ジムの人達もド根性と言ってドードリオを応援する。

それを聞いてドードリオはダメージをおった体に必死に力を入れて立ち上がろうとする。

しかし……

「ア……」

ドードリオは立ち上がれずに倒れて戦闘不能になる。

「ドードリオ戦闘不能! ゼニガメの勝ち!」

審判によってドードリオの戦闘不能が宣言される。

「よくやったねゼニガメ! れいとうビーム」を覚えさせておいて良かったよ!

「ゼニ!!!」

シユンはゼニガメを誉めるとゼニガメは自信満々に胸を張る。

ハヤトは戦闘不能となったドードリオをボールに戻す。

「よくやったなドードリオ・ゆつくり休んでくれ！さすがだなシユンくん：まさかそのゼニガメが”れいとうビーム”を使えるとは驚いたよ：その後の連続攻撃も見事だった！ここまで手応えのあるバトルは久しぶりだよ。でもシユンくん：こいつに勝つことが出来るかな？いけえピジヨット！」

「ピジヨットオ〜！！！」

ハヤトの最後のポケモンは伝説を除く：鳥ポケモンの中でも素早く大きい鳥ポケモンの戦士ピジヨットがハヤトが投げたボールから勇猛果敢に飛び出し美しい翼を広げ絨毛無人に大空を飛び回るとハヤトの前へと降りて来る。

「さあシユンくん：こいつがオレの最後の一匹だ！オレは大好きな鳥ポケモン達の中でもピジヨットが一番好きだね……オレの最強のポケモンでもある！このピジヨットにはそう簡単には勝てないぞ！」

ハヤトはシユンに大好きな鳥ポケモン達の中でもピジヨットが一番だと言って、ピジヨットはハヤトのポケモン達の中でも最強のポケモンだと自信満々な様子で：そう簡単には勝てないぞとシユンに告げる。

「確かにとても強そうですね。だけどぼくはポケモン達を信じて必ず勝ってみせます！行くよゼニガメ！」

「ゼニユー！」

シユンは確かにハヤトのピジヨットから感じる強さに警戒するが：それでも自分のポケモン達を信じてハヤトとピジヨットに勝つてみせるとハヤト達に宣言する。

「それでいい：全力で来い!!オレとピジヨットも本気で迎え撃つ！」

「ピジヨットオ!!!」

シユン達の宣言を聞いたハヤトはシユンの闘志を感じ取り笑みを浮かべると：自身も持てる力を全て引き出し、全力でシユン達を迎え撃つとピジヨットと共に宣言する。

「それではバトル始め!!」

審判がバトル開始の宣言をしてバトルがスタートする。

「ゼニガメ！一気に行くよ!れいとうビームだ！」

「ゼニユ〜！」

シユンは一気に決めようと先程のようにひこうタイプに効果ばつぐんのおりタイプの技「れいとうビーム」をゼニガメに指示し、ゼニガメはピジヨットへと「れいとうビーム」を放つ。

ゼニガメから放たれた「れいとうビーム」がピジヨットへと一直線に向かって行くが、このまま簡単に攻撃が当たるほどハヤトとピジヨットは甘くない：。

「交わせピジヨット！」

「ピジヨットオ！」

ピジヨットは大きな両翼を羽ばたかせ、ゼニガメの“れいとうビーム”を交わして空へと飛び上がる。

「ピジヨット、そのまま”つばさでうつ”だ!!」

「ピジヨット!!」

ピジヨットは空で旋回すると、ゼニガメへと向かって大きな翼で攻撃する。

「ゼニ〜」

「ゼニガメ!!」

ピジヨットは素早い動きでゼニガメへと接近し、“つばさをうつ”でゼニガメを吹っ飛ばす。ゼニガメはピジヨットの素早さの前に避けることが出来ずに直撃する。

「ゼニガメ！大丈夫かい？」

「ゼニ！」

ゼニガメは吹っ飛びながらも体制を立て直し、シユンに大丈夫だと言うように頷く。

「よしゼニガメ、“れいとうビーム”でピジヨットを撃ち落とすんだ！」

「甘いぞシユンくん！ピジヨット、急旋回して”たいあたり”だ」

シユンはゼニガメに“れいとうビーム”で上空に居るピジヨットを撃ち落とすよう

に指示し、ゼニガメはピジヨットに“れいとうビーム”を放つ。

しかし、空にいるピジヨットは素早い動きで“れいとうビームを交わし、空中旋回して”ゼニガメを“たいあたりで吹っ飛ばす。

「ゼニ〜」

「ゼニガメ!!」

ゼニガメはピジヨットの両翼の羽ばたきで生まれるスピードから繰り出される“たいあたり”で吹っ飛ばされて、そしてゼニガメはその一撃で倒れ戦闘不能となる。

「ゼニガメ戦闘不能!ピジヨットの勝ち!!」

審判によつてゼニガメの戦闘不能が宣言される。

「よく頑張ったね。ゆっくり休んでねゼニガメ。」

シユンは戦闘不能になったゼニガメを頑張ったねと労つてモンスターボールに戻す。

「さあ、どうするシユンくん!これでキミの残りのポケモンは1体のみ。俺とピジヨットに勝てるかい!」

「ピジヨット〜!!!」

ハヤトは残りのポケモンが1体となったシユンに、自信満々に自分とピジヨットに勝てるかと言う。

「もちろんです。絶対に勝つて見せます、頼んだよりザードン!!」

「ウオオウウ!!」

シユンはハヤト達に絶対に勝つてみせると宣言すると最後の1体であるリザードンをボールから出して、リザードンもボールから勢いよく飛び出し高らかに叫ぶ。

「リザードンか：手強そうな奴が出て来たな。だが相手にとって不足はない!!」

「ピジヨット〜!」

「リザードン頼むよ。ハヤトさん達に勝つて、絶対にバッジをゲットするんだ」

「ウオオウ!!」

ハヤトはシユンがリザードンを出したのを見て、手強いのが出て来たかと警戒し、ピジヨットと共に戦闘態勢に入る、シユンもリザードンと一緒に絶対に勝つてバッジを手に入れると決意し意気込む。

「それでは、バトル開始!!」

そして今、審判によってリザードンとピジヨットのバトルの開始が宣言される。

「リザードン、”かえんほうしや”だ!」

「ウオウ〜!」

リザードンの”かえんほうしや”が”ピジヨットへと迫る。



「ピジヨット飛べ!!」

「ピジヨット~~~~!!」

ハヤトはピジヨットに飛ぶように指示すると・ピジヨットは大きい両翼を羽ばたかせて飛び上がり、リザードンの”かえんほうしゃ”を交わす。

「リザードン、ピジヨットを追うんだ!!」

「ウオウ!」

リザードンも翼を羽ばたかせてピジヨットを追い掛ける。

「リザードン、”かえんほうしゃ”だ」

「ウオウ!」

「あまい!ピジヨット交わして”でんこうせっか”だ!」

「ピジヨ~~~~!」

リザードンもピジヨットを追い掛けて飛び、”かえんほうしゃ”を放つ・しかし、ピジヨットは急旋回で交わしてリザードンを”でんこうせっか”で攻撃する。

「ウオウ~~~~」

「リザードン!!」

ピジヨットの急スピードから繰り出される”でんこうせっか”でリザードンは地面へと叩きつけられる。

「リザードン、大丈夫かい？」

「ウオウ！」

シユンはリザードンに大丈夫か聞くと、リザードンは平気な様子で立ち上がりピジョットを鋭い目で睨む。

「よし、ピジョットのあのスピードに気をつけてリザードン：今度は”ドラゴンクロー”だ！」

「ウオウ！」

シユンはピジョットのスピードに気をつけるように忠告し、今度は”ドラゴンクロー”を指示し、リザードンは両爪に竜のエネルギーの爪を出してピジョットへと向かって行く。

「ほう・遠距離では通用しないと見て今度は接近して攻撃か！ならばこっちも真つ向勝負だ！ピジョット”つばさでうつ”で迎え撃て！」

「ピジョット〜!!」

ハヤトはリザードンが”ドラゴンクロー”で攻撃して来るのを見て、ハヤトもピジョットに”つばさでうつ”を指示して真つ向勝負で迎え撃つ。

「ウオウウ〜!!!」

「ピジョット〜!!」

リザードンの”ドラゴンクロウ”とピジヨットの”つばさでうつ”が何度もぶつかり合い、リザードンとピジヨットとの激しい攻防が続き、そして……

「ウオウ〜！」

「ピジヨ〜」

リザードンの”ドラゴンクロウ”が打ち勝ち、ピジヨットを吹っ飛ばす。

「やった！良いぞリザードン！」

「くっ！だが、ただやられるわけには行かない！ピジヨット”かぜおこし”だ」

「ピジヨッ〜!!!」

ピジヨットはリザードンの攻撃を受けて吹っ飛びながらもピジヨットは大きな翼から繰り出される強力な”かぜおこし”でリザードンを吹き飛ばす。

「ウオウ〜」

リザードンはピジヨットの”かぜおこし”を受けてまた地面へと叩きつけられる。

「リザードン!!」

シユンは叩きつけられたリザードンを心配するが、リザードンは力をいれてゆっくりではあるが立ち上がった。

「ウオウ!!」

「リザードン……よし、行くよ、”かえんほうしゃ”だ！」

「ウオウ〜」

リザードンはシユンに大丈夫だと言うように振り向き、シユンはそれを見て安心し、リザードンに“かえんほうしや”を指示しリザードンは飛び上がってピジヨットに“かえんほうしや”を放つ。

「無駄だ！ピジヨットのスピードのまえではそんな攻撃は当たらない！ピジヨット、交わして”つばさでうつ”だ!!」

「ピジヨット〜!!」

ピジヨットは“かえんほうしや”を周りながら交わしてリザードンに接近して、リザードンに“つばさでうつ”を放つ。

「リザードン、受け止めるんだ！」

「ウオウ！」

シユンはとっさにリザードンにピジヨットの“つばさでうつ”を受け止めるように指示し、リザードンは両腕でピジヨットの攻撃を受け止める。

「なに!?!」

「ピジヨット!!」

ハヤトとピジヨットは攻撃が受け止められたことに驚き、一瞬動きを止める。

「今だリザードン!かみなりパンチ”だ!”」

「ウオウー！」

ピジョットの攻撃を受け止めたりザードンは手に雷のエネルギーを纏わせてピジョットに攻撃する。

「ピジョ〜〜〜」

「ああ!!ピジョット!!」

ピジョットに効果ばつぐんである”かみなりパンチ”が決まり、ピジョットに大ダメージを与えて地面に落ちる。ハヤトは効果ばつぐんの技を受けたピジョットに心配の声を上げる。

「立て！立つんだピジョット！ド根性だ!!!」

「!!!ド根性!!ド根性!!ド根性!!」

ハヤトがピジョットにド根性で立つように声援を送り、ジムの人達も先ほどのようにド根性と掛け声を上げてピジョットを応援する。

「ピジョ〜〜〜ピジョット〜!!!」

ピジョットはふらふらとしながらもハヤト達の声援を受けて立ち上がり、翼を大きく広げて高らかに叫ぶ。

「よし、良いぞピジョット!!よく立ち上がった」

「…すごいな、さすがハヤトさんの最強のポケモンだ。効果ばつぐんのでんき技を受け

て立ち上がって来るなんて……」

ハヤトはピジヨットが立ち上がった事に喜び、シユンは効果ばつぐんの技を受けて立ち上がった事に驚く。

「シユンくん！バトルはまだまだこれからだ！ピジヨット”でんこうせつか”だ！」

「ピジヨット……!!」

ピジヨットは翼を広げて飛び上がり、すごいスピードで一瞬姿が消えると”でんこうせつか”でリザードンを吹っ飛ばす。

「ウオウ……」

「リザードン！”かえんほうしや”だ」

「ウオウ……」

シユンは”でんこうせつか”を受けて吹っ飛びリザードンに”かえんほうしや”を指示し、リザードンはピジヨットに向けて”かえんほうしや”を放つ。

「ピジヨット！交わして、もう一度”でんこうせつか”だ！」

「ピジヨット……」

ピジヨットは”かえんほうしや”を交わすと、再び”でんこうせつか”でリザードンに攻撃する。

「何度もくればその技のタイミングは分かる！リザードン、受け流すように受け止めてから」ちきゆうなげだ!!」

「ウオウ！」

「ピジヨツ！ピジヨツト〜」

「ピジヨツト!!」

シユンはピジヨツトが”でんこうせつか”で攻撃するタイミングとスピードを見切り、リザードンにピジヨツトの”でんこうせつか”を受け流してから”ちきゆうなげ”をするように指示すると、リザードンは迫るピジヨツトの攻撃を受け流すように体を捻って交わり、ピジヨツトを両腕で抱えると空高く上昇して行く。そして空中で円を描くように回転し急降下して来る。

「いっけえ〜!!」

「ウオウ〜!!」

普段から冷静でクールなシユンとは打って違い、興奮し熱くなり闘志を燃え上がらせて叫ぶ：リザードンはピジヨツトを”ちきゆうなげ”で地面へと思いつき叩きつける。

「ピジヨ〜!!」

「ピジヨツト!!」

ピジヨットは地面へと叩きつけられ、ハヤトは叩きつけられたピジヨットを見て心配気な声をあげる：そして”ちきゆうなげ”でピジヨットが叩きつけられた衝撃で土煙がフィールドを包み込み：そして……。

「ウオウ!!」

「ピジヨット~~~~!!」

土煙が晴れるとリザードンとピジヨットの両方が立っている。

「リザードン!」

「ピジヨット!」

シユンとハヤトが自分のポケモンをそれぞれ呼び、一瞬の静寂：そして……

「ピジヨット~~~~……」

ピジヨットがその体を地面へと向かってゆっくりと倒れる。

「ああ、ピジヨットオ!」

「ピジヨット戦闘不能!!リザードンの勝ち!!よって勝者マサラタウンのシユン」

審判によってピジヨットは戦闘不能と判断され、そしてシユンとリザードンの勝利が宣言される。

「やった・勝った!ぼく達の勝ちだ・よく頑張ったねリザードン!」

「ウオウ!!」



シユンとリザードンは勝利したことに嬉しくなり笑顔で喜ぶ。

ハヤトは戦闘不能となったピジヨットをボールに戻す。

「よくやったなピジヨット・ゆつくり休んでくれ……」

ハヤトはピジヨットによくやったと言ってピジヨットをボールに戻すとシユン達のもとへと歩いて来る。

「おめでとうシユンくん。キミとポケモン達の強さには完敗だよ……さあシユンくん、これがキキョウジムを制した証：ウイングバッジだ！受け取ってくれ！」

ハヤトはシユン達の勝利を称えて、自分に勝利した証であるポケモンリーグ公認、キキョウジムのジムバッジ『ウイングバッジ』をシユンに渡す。

「ありがとうございますハヤトさん……それじゃ僕はこれで失礼します……」

「うん、シユンくん……キミ達のこれからの旅を応援してるよ！」

シユンはハヤトからウイングバッジを受け取ると、シユンとハヤトはキキョウジムの入口前まで来ると、別れの挨拶をしハヤトはシユンのこれからの旅路を応援していると言う。

「はい！ありがとうございます。ハヤトさん！皆さん！それでは」

「またなあ……シユンくん！」

シユンがキキョウジムから出発するとハヤトとジムの人達がシユンに手を振って見

送る。

こうして、シユン達はジヨウト地方での最初のジム戦でキキヨウジムのハヤトに勝利し、最初のバッジ『ウイニングバッジ』を手に入れた。

そしてシユン達はポケモンセンターでリザードン達を回復させると、次のジムのある街へ向けて旅立つのであった。

## 第十話 リザードンのたに!いちじのわかれ

キキョウシティへと到着したシユンはキキョウジムのジムリーダーであるハヤトとバツジをかけてジム戦を挑むのだった。ハヤトの縦横無尽にフィールドをかける”とリポケモン達に苦戦しながらも、シユンはリザードン達を信じて冷静なバトルをしてハヤトの最強のポケモン”ピジョットを倒し、見事ジョウト地方最初のバツジ”ウイングバツジをゲットしたのだった。そして、シユンは次のジムのある街”ヒワダタウンを指して旅立つ。

シユン達はヒワダタウンへと向かって険しい岩山の道を進んでいた。

「けっこう険しい岩山だなあ…少し疲れてきちゃったよ…ハア…」

「頑張つて下さいマスター!ヒワダタウンへと行くにはこの山を通る必要があるんですから」

「そうです。ファイトですわマスター♪」

シユンはヒワダタウンへと向かうために険しい岩山を歩いていた。しかし、険しい岩

山を歩き続けていると：マサラタウンの森に毎日のように行って体力のあるシユンでも、さすがに少しずつ疲れの色が見え始めていた。メロエツタとディアンシーはそんなシユンを励まして頑張つてと応援する。

「ありがとう、2人とも！それにしてもけっこう高い所まで来たなあ……」

シユンはメロエツタとディアンシーに励まされて再び険しい岩山を歩くと、ふと横を見るとそこには高くそびえ立つ岩山と広大な景色を眺める。

そしてシユンはその景色を見ると再びヒワダタウンへ向けて岩山を進んで行く。

すると……シユンの目の前の岩山の道が崩れていて崖となっており通ることが出来なくなっていた。

「道が無くなってる……これじゃ通れないな……仕方ない。出て来て！リザードン！」

「ウオウ!!」

シユンは道が無くなっているためボールからリザードンを出す。

「道が無くなっている通れないんだ。リザードン！ぼくを乗せて向こうまで飛んでくれるかな？」

「ウオウ!!」

シユンはボールから出て来たリザードンに自分を乗せて向こうに飛んでくれるように頼むとリザードンは了解というように頷き、シユンを背中に乗せて向こうの道まで

飛ぶ。向こうの道まで来るとシユンはリザードンの背中から降りてリザードンを撫でる。

「ありがとうリザードン!おかげでこっちの道に渡れたよ」

「ウオウ〜!」

シユンがリザードンのおかげで道を渡ることが出来たので、よくやったと誉めていると……突然……。

ガラガラガラ：ガン、ガン!!! シユンとリザードンの頭上から岩が転がって来てシユン達の方に迫って来る。

「岩が!!危ないですわマスター!」

ディアンシーが自分達に迫る落石に気づき、シユン達に岩が落ちて来ることを知らせる。

「リザードン!かえんほうしや」で岩を破壊するんだ!」

「ウオウ!ウオウ〜!!」

シユンはリザードンに迫る岩を「かえんほうしやで破壊するように指示し、リザードンは「かえんほうしやを放って迫る岩を粉碎する。メロエツタは「サイコキネシスでリザードンが破壊しきれなかった岩を砕いて崖の下へと落とす。シユン達が自分達目掛けて落ちて来る落石を全て破壊して安心したその時……。

「へえ、あなた！ずいぶんと強そうなりザードンを持つてるのね！」

「えっ?」

「ウオウ?」

シユンとリザードンは声の聞こえて来た方に視線を向けると、そこには緑色の髪をした女性がシユンとリザードンのことを楽しげに見ていた。メロエツタとディアンシーはその人の気配がした瞬間に見えないように姿を消す。

「えっと、あなたは…?」

シユンは自分達に声を掛けて来た女性に誰なのかと訪ねる。

「わたし?わたしはリザードン使いのジーク!この谷にあるリザフィックバレーの管理者よ」

「リザードン使いのジークさん?それにリザフィックバレーって…」

女性は自分をリザードン使いのジークと名乗り、この谷にあるリザフィックバレーの管理者だと言う。シユンは初めて聞くリザフィックバレーという言葉が気になるとジョウト地方のガイドブックをリュックから出してリザフィックバレーの項目を開いてそのページに書いてある説明を見る。

『リザフィックバレー』……キキョウシティ郊外の谷にある自然公園で有名な野生のリザードンの生息地。ここでは野生のリザードン達が切磋琢磨しお互いの力を高め合っている。一般の人間は立ち入ることを禁止されている。

「野生のリザードンが生息する有名な自然公園か……」

「そうよ!わたしはそのリザフィックバレーに居るリザードン達を密猟者達などから守るのが仕事なのよ。それで少年くん、あなたの名前もそろそろ教えてもらえないかしら?」

「ぼくの名前はシュンと言います。それでリザフィックバレーの管理者であるジークさんがぼくに何かご用ですか?」

シュンはガイドブックでリザフィックバレーがどういう場所なのかを理解し、リザフィックバレーの管理者であるジークは野生のリザードン達を密猟者達から守るのが仕事だとシュンに説明した後、シュンに名前を訪ねる。シュンは自分の名前を言い、ジークに自分に何か用があるのかと聞く。

「シュンくんって言うのね。うん、間違いないわね。わたしねキキョウジムを通過したトレーナーがリザードンを持っていて聞いて楽しみに待っていたの!」

リザフィックバレーを管理している女性、ジークはキキョウジムを通過したトレー

ナーであるシユンがリザードンを持っていると聞いてこの谷でシユン達が来るのを待っていたのだと言う。

「ぼくとリザードンをですか？」

「ええ。でも待ったかいがあつたわ!!だつてこんなに良いリザードンに会えたんですもの!あなたのリザードンとてもよく育てられているのね!!」

「ウオウ……」

ジークはシユンのリザードンを見て瞳を輝かせて喜び、良いリザードンだと言つて嬉しそうにシユンのリザードンを見つめる。ジークのその興奮を抑えきれない様子にシユンのリザードンは困った様子でジークを見て狼狽えている。

「シユンくん!ぜひそのリザードンと一緒にリザフィックバレーに来てちょうだい!」

ジークはシユンのリザードンを見て、シユン達にぜひ一緒にリザフィックバレーに来てほしいとお願いする。

「ハア……えくと……」

シユンがジークにリザフィックバレーに来てほしいとお願いされてどうしようかと考えているとリザードンがシユンに近づく。

「どうしたのリザードン?」

「ウオウ!!」



「もしかしてリザフィックバレーに行きたいのリザードン?」

「ウオウ!!」

シユンはリザードンが近づいて何か言いたいように鳴いているのに気づき、もしかしてリザフィックバレーに行きたいのかと聞くとリザードンはそうだと言うように頷く。「そっか：リザードンが行きたいなら行こう。ぼくも野生のリザードンを見たいし」

シユンはリザードンが行きたがっているのを見て、シユンもリザフィックバレーにいる野生のリザードンを見てみたいと思う。

「決まりね。それじゃ行きましょうか：よし、わたしのリサちゃん!来て〜!」

「ウオウ〜!!」

シユンがリザフィックバレーに行く事を決めるとジークは笑顔になり持っているステッキを回して呼ぶと、崖の上から気球を引いている頭にピンクのリボンをしたリザードンがジークの前へと降りて来る。

「これがわたしのリザードン!名前はリサちゃん。さっ!それじゃ行きましょうシユンくん」

「ウオウ!」

ジークはシユン達に自分のリザードンの紹介をすると、リザードンに乗って行きま

しようとしてシユンに言う。

「分かりました。リザードン、リザフィックバレーまで飛んでくれるかい！」

「ウオウ!!」

シユンはリザードンに自分を乗せてリザフィックバレーまで飛んでほしいと頼むと、リザードンは頷いて首をシユンが乗りやすいように低くする。

「ありがとうリザードン！ジークさん準備出来ました」

「よし！それじゃリサちゃんお願い!!」

「ウオウ!!」

シユンが準備が出来たのを確認したジークはそう言うとき、リザードンは翼を羽ばたかせてリザフィックバレーを目指して飛び立つ。シユンのリザードンもジークのリザードンを追い掛けて翼を羽ばたかせて飛び立つ。

ジークのリザードンは翼を大きく羽ばたかせて気球を引いているとは思えないくらいスピードで飛んでいる。しかし、シユンのリザードンも負けてはおらず翼を羽ばたかせてジークのリザードンに合わせて飛ぶ。

「やっぱリキミのリザードンはよく育てられているわね。わたしのリサちゃんに着いてこられるなんて!!」

「そうですか?ありがとうございます」

ジークは自分のリザードンに離れることなく着いてこられるシユンのリザードンをよく育てられていると誉める。シユンはジークに誉めてくれたお礼を言う。

そしてその後もジークとシユンは互いのリザードンに乗ってリザフィックバレーを目指して岩山を越えて湖を飛んでいる。湖にはリザードンを象った石像が並ぶ。そしてシユン達の前に階段とその上に2体のリザードンの形をした岩が力比べをしているように両手を合わせていてその真ん中に大きな鉄の扉があった。

「ようこそ!此処が野生のリザードン達が生息する自然公園:リザフィックバレーよ!」

「此所が世界的にも珍しい野生のリザードンの生息地ですか!」

「ウオウ……」

ジークがそこへ降りるとシユン達にリザフィックバレーにようこそと言ひ、シユンとリザードンは大きな扉とリザードンの形をした岩に驚いていた。

「シユンくん……この辺りではね。リザードンはおめでたい守り神としてとてもありがたいポケモンとされているのよ。特に天然熟成……つまり野生の強いリザードンは誰からも尊敬されるのよ」

「天然熟成……ですか?」

「そう！此処のリザードンは人間の力を借りず強くなつていく。そしてその強さを高めるために互いに競い合っている。リザフィックバレーは最強のリザードンを目指すリザードン達が切磋琢磨し自主トレーニングをしている谷なのよ」

「なるほど、仲間同士でお互いの力を高め合い強くなつていくということなんだ」

ジークはシユンにリザフィックバレーの事を説明し、シユンは話しを聞いて：リザードン達が仲間同士で戦い：お互いの力を高め合い強くなつていくのだと理解する。

「そう言うこと？どう？シユンくん。キミのリザードンをこころざフィックバレーのリザードン達と戦わせてみない？あなたのリザードンがどれくらい強いのかわたし見てみたいのよ。ねっ！リサちゃん♪」

「ウオウ!!」

ジークはシユンにシユンのリザードンがどれくらい強いのか見てみたいからとリザフィックバレーに居るリザードンと戦ってみないかと言い、ジークのリザードンもその通りと言うようにジークに頷く。

「え〜と…どうする？リザードン」

「ウオウ…ウオウ…」

シユンとリザードンはいきなりそんなことを言われてどうしようかと迷ってしまう。

「あら？もしかして強さに自信がないのかしら？」

迷っているシユンとリザードンにジークがそう言つて2人を挑発する。

「ッ!!」

「ウオウ!!」

シユンとリザードンはジークの挑発に少しだけ怒りの感情を表に出して目付きを変  
える。

「分かりました。そこまで言うのならやります。ねっ、リザードン!」

「ウオウ!!ウオウ~~~~!!」

シユンはそこまで言われたらやるしかないとリザフィックバレーのリザードン達に  
自分のリザードンで挑む事を決めて、リザードンはシユンに了解の返事をする  
と雄叫びを上げる。

普段、怒りの感情を出すことが余らない：シユンだが自分が馬鹿にされるのは構わな  
いが自分の大切な家族であるポケモンの事を馬鹿にされるのは我慢出来ず、シユンのリ  
ザードンや他のポケモン達も大切なマスターであり家族でもあるシユンを馬鹿にされ  
るのは許せないなのである。

「ウオウ~~~~!!」

「ウオウ~~~~!!」

「ウオウ~~~~!!」

すると、シユンのリザードンの雄叫びに触発されてか：リザフィックバレーの門の奥からリザードン達の雄叫びが聞こえて来る。

「うん。そうこなくっちゃ!!今の雄叫びを聞いてリザフィックバレーのリザードン達もやる気になつてみたいだし!今、門を開けるわ!!」

ジークがそう言つてポケットから門を開ける機械を取り出してボタンを押すと門が分かれて左右に開いていく。門が開くとそこには……たくさんのリザードン達が力比べをしていたり寝ていたりとしていた。シユンのリザードンよりも小さいリザードンもいれば同じ位の大きさのリザードンもいて、そして何匹かシユンのリザードンよりも大きいリザードンもいた。

門が開いてシユンとリザードンが入ると、何体かのリザードンが入つて来た”シユンとリザードンを鋭い目で睨み付ける。

「うわあ……すごいな・野生のリザードンがこんなに……」

「ウオウ……」

「その通りよ。あの子達はみんな野生のリザードンよ!」

ジークがシユンにそこにいる”リザードンがみんな野生のリザードンだと説明していると、シユンとリザードンの近くに同じ位の大きさの野生のリザードンが近づいてくる。

「ウオウ!!」

そのリザードンはシュンとリザードンの前に来るとシュンのリザードンに対して鋭い目で睨みつけ威嚇する。

「あつ!!この子なんかどう?ちょうどこの子もやる気になってるみたいだし、この子に勝てたらリザフィックバレーでもそこそこ暮らせるかも!」

「それじゃあやってみる?リザードン!」

「ウオウ!!」

シュンが自分のリザードンを威嚇しているリザードンを見てやってみるかと思うとリザードンは頷く。

「よし!頑張れリザードン!キミの強さをを見せてやるんだ!」

「ウオウ~~~~!!」

シュンがリザードンに強さを見せるように言い応援し、リザードンは了解と言うように雄叫びを上げてそのリザードンの前へと来る。

「ウオウ~~~~!!」

野生のリザードンがシュンのリザードンに“かえんほうしや”を放ち、シュンのリザードンに“かえんほうしや”が直撃する。

「ハア~~~~:~:~:~:どうやら買いかぶり過ぎてたみたいね~:~:その程度なんて~:~:」

シユンのリザードンが為すすべもなく”かえんほうしやが直撃したのを見てジークはその程度かと思ひ、買いかぶり過ぎていたとため息をつく。

「その程度だと判断するのはまだ早いですよジークさん」

「えっ!」

シユンがその程度だとはっきりするジークに判断するのはまだ早いと言うと、ジークは驚いてシユンのリザードンを見る。

「ウオウ!!ウオウ!!」

「ウオウ!?ウオウウウオオ……」

シユンのリザードンは”かえんほうしや”を受けたにも関わらずダメージのない様子で”かえんほうしや”を振り払うとシユンのリザードンはお返し”かえんほうしや”を放つ。野生のリザードンは驚き、そして”かえんほうしや”が直撃すると体を黒焦げにして倒れる。

「やったねリザードン!」

「ウオウ!!」

シユンは勝つたりザードンを誉めるとリザードンも笑顔で喜ぶ。



「ウオウ……ウオウ……」

倒れた野生のリザードンが起き上がると先程とは違い少し怯えた様子で頭を低くする。

「驚いたわ!あの子はこの谷では強い方なのに一撃で倒しちゃうなんて!あなたのリザードンは想像以上に強いみたいね」

ジークはリザフィックバレーの中でも強い方であるリザードンの攻撃を受けてもやられずに、逆に一撃で倒したのを見てシユンのリザードンの強さに驚く。

因みに先程ジークはこのリザードンに勝てればリザフィックバレーでもそこそこ勝らせると言ったが:それは一般のトレーナーが育てたリザードンと比べたらの話で:シユンのリザードンと比べれば大きな差があり、シユンのリザードンの実力は充分にリザフィックバレーで暮らしていける。

リザフィックバレー以外の一般のリザードンではジークの言っていたリザードンには勝てず:確かに勝てればそこそこ暮らしていけるといえるのは間違いではない。

「ありがとうございます。ジークさん!」

「ウオウ!!」

シユンは自分のリザードンを誉めてくれたジークにお礼を言う。

「あらあら：この谷でも強い方のあの子が負けたから他の子達はやる気が無くなっちゃったみたいね」

「えっ?」

ジークがそう言うのを聞いたシユンが周りを見てみると先ほど自分のリザードンに戦いを挑んだリザードンだけでなく他のリザードン達もシユンのリザードンよりも首を低くしてシユンのリザードンよりも下であることを示している。

先程シユンのリザードンに挑んだ”リザードンは確かにリザフィックバレーのリザードン達の中では強い方だが：同じ位の強さのリザードンや他にも少し弱い位のリザードンやそれよりも強いリザードンも当然いる：しかしそのどのリザードンもシユンのリザードンのようにシユンのリザードンに挑んだ”リザードンを一撃で倒す事は無理で、そのせいでシユンのリザードンとの実力差を感じて怯えているのである。

言わずもがな：シユンのリザードンに挑んだリザードンよりも大きく下回る弱いリザードン達の怯えようは尋常ではない……。

シユンとリザードンがその様子に驚いていると、谷の奥の方から他のリザードン達よりも大きく、片目の方に古傷がある、ここにいる”リザードン達とは雰囲気の違いたりザードンがシユン達の前へと下りて来る。

「ウオウ~~~~~!!!」

そのリザードンはシユンとリザードンの前に降りて来て高らかに雄叫びを上げる。

「すごい鳴き声だな・それに・さっきのリザードン達とは何か雰囲気が違うな・」

「ウオウ!!」

「あの子はこの谷のリザードン達のボスよ。大きさだけじゃなく強さも一番よ!シユンくんキミのリザードンがいくら強くてもあの子には適わないわ!止めておきなさい・」

シユンが自分達の前に来た”リザードンの雰囲気の違いに驚いていると、ジークがシユン達にあのリザードンはこの谷のリザードン達のボスで一番の強さだと説明し、いくらシユンのリザードンが強くてもこの谷のボスであるリザードンには適わないと言つて、止める。

「そう言われても・:・向こうの方がやる気みたいですよ・」

ジークが止めるように言うのを聞いてもシユンはボスのリザードンが鋭い目付きをして自分のリザードンを睨み、唸り声を上げているのを見て、向こうはやる気みたいだとシユンはジークに言う。

「だからシユンくん!あなたのリザードンに頭を低くするように指示して!そうすればあの子は自分よりも下だと判断して戦わないはずよ!」

ジークはシユンのリザードンに頭を低くするように指示するように言う、そうすれば

自分よりも下だと：自分のボスの立場を脅かす事のないと判断し戦わない筈だと言う。  
「：それはちよつと嫌ですね。戦ってもみないで負けを認めるなんて：そうだよねり  
ザードン！」

「ウオウ~~~~!!」

シユンはジークの提案に反対し、リザードンにそうだよねと聞くとリザードンもそう  
だと言うように高らかに雄叫びを上げる。

「ちよつと！ホントにどうなつても知らないわよ!!」

シユンがそう言うのとジークは慌てた様子でどうなつても知らないと言う。

シユンのリザードンはボスのリザードンの前へと進み、シユンのリザードンとボスの  
リザードンが睨み合う。

「ウオウ~~~~!!」

「ウオウ~~~~!!」

そして、同時に「かえんほうしや」を放つ。しばらく拮抗していたが威力は互角らし  
く威力の同じ「かえんほうしや」がぶつかり合い爆発する。

「ウオウ!!」

「ウオウ!!」

「かえんほうしや」の威力が互角だったのを見てシユンのリザードンとボスのリ

ザードンは走りお互いの体をぶつけ合った後に腕をがっぷりと合わせて押し合う。力も拮抗しているのか、両者ともその場から動かない。周りのリザードン達はその2体のリザードンの戦いを固唾を飲んで見守る。

「驚いたわ……この谷にいる野生のリザードン達のボスのあの子とあそこまで互角に戦うなんて! シュンくん、キミのリザードンはとんでもない強さみたいね」

「ウオウ!!」

「そうですか? …あのボスのリザードンもすごい強いみたいですね。今のところ互角みたいですし……どうなるかな……」

その後もシュンのリザードンとボスのリザードンは力を入れて互いを押しつけようとするが力が拮抗しているため両者とも動かない。するとボスのリザードンが力も互角だと判断し、力比べを止めてシュンのリザードンを殴りつける。するとシュンのリザードンもお返しだと言うようにボスのリザードンを殴り返す。そして、しばらく両者の殴り合いが続き、お互いにダメージを受ける。

「ウオウ!!」

「ウオウ!!」

ボスのリザードンとシュンのリザードンは後ろを向いて勢いよく振り向いて尻尾を振り回して叩きつける。シュンのリザードンとボスのリザードンの尻尾がぶつかり合

いその威力でお互いをその場から後退させる。

「ウオウ……ウオウ……ウオウ」

「ウオウ……ウオウ……ウオウ」

シユンのリザードンとボスのリザードンはこれまでの攻撃でお互いにダメージを受けて体力を減らし息を上げる。シユンとジークも何も言わずに2体のリザードンの戦いを見守る。

「ウオウ……!!」

「ウオウ……!!」

シユンのリザードンとボスのリザードンは走って勢いを付けるとお互いの頭をぶつけ合い、そして……

「ウオウ……!!」

「ウオウ……!!」

お互いの拳が顔面へと炸裂する……そしてしばらくの静寂……シユンとジーク……リザフィックバレーのリザードン達が固唾をのんで見守り……そして……

「……ウオウ……」

この谷のボスであるリザードンがゆっくりと崩れ落ちてその体を地面へと倒れる。

その瞬間!!

「やった!!リザードンが勝った!!!」

「信じられない!まさかボスのあの子にまで勝っちゃうなんて・」

「!!!「ウオウウウ!!!」!!!」

シユンはリザードンが勝ったことに喜び、ジークがその事実信じられないと呆然とし、谷のリザードン達が自分達のボスを倒したシユンのリザードンに新しいボスの誕生に喜びの雄叫びを上げる。

「よく頑張ったねリザードン!やっぱりキミはぼくにとって最高のリザードンだよ!」

「ウオウウ!!!」

シユンはこの谷のボスであるリザードンを倒したりザードンを最高のリザードンだと笑顔で言い、リザードンも笑顔でシユンに頷く。

「ホントに凄いわね。未だに信じられないわ!まさかボスのあの子に勝つなんて!!シユンくんのリザードン。ホントに凄いわ!!」

「ウオウ!!!」

ジークはボスのリザードンをキズぐすりで手当をしながらシユンのリザードンを本

当に凄いと誉める。シユンもキズぐすりでもリザードンを回復させる。

「ありがとうございますございますジークさん。それじゃあぼく達はそろそろ行きますね、それではまた！それじゃあ行こうかりザードン」

「ウオウ！」

シユンはジークにそろそろ出発すると言い、ジークに別れの挨拶をするとリザードンに行くように言い、リザードンと一緒にリザフィックバレーから出発しようとする……

「ちよつと待つてシユンくん。お願いがあるの！」

ジークは出発しようとしたシユンに待つように言いお願いがあると言う。

「お願いですか？何でしょう？」

「うん！シユンくん、お願い！キミのリザードンをわたしに預けてもらえないかしら」

シユンはジークにお願いが何なのかと聞くとジークはシユンのリザードンを自分に預けてもらえないかとお願する。

「えっ！どう言うことですか？」

「キミのリザードンがボスのあの子に勝っちゃったからこの谷のリザードン達はシユンくんのリザードンを新しいボスだと認めているのよ。ほら見て！キミのリザードンが行ってしまうのが分かって残念そうにしてるでしょう」



シユンのリザードンがボスのリザードンに勝利してしまつたため、この谷のリザードン達がシユンのリザードンを新たなボスと認めたのだと言う。そしてシユンのリザードンが行つてしまうのだと分かつて残念そうにしていると言う。そう言われてシユンが谷のリザードン達を見ると、確かに谷のリザードン達はしよんぼりとして残念そうな表情をしていた。

シユンのリザードンに倒されたボスだつたりザードンも自分が負けたがその結果に満足しており、シユンのリザードンを次のボスだと認めているのかジークの言う通りだと頷いている。

「そう言うことだから、お願いシユンくん!ここの”リザードン達のためにもあなたのリザードンをわたしに預けてちょうだい。責任を持つて面倒を見るし、あなたがリザードンが必要な時はすぐにあなたの元に送るようになるから:ねっ!お願いシユンくん!!」

ジークは此処のリザードン達のためにも自分にリザードンを預けてほしいと言い、責任を持つて面倒を見る事を約束し、必要な時はすぐにシユンの元に送ると言つて両手を合わせてシユンにお願いする。

ジークはリザフィックバレーの管理者としてこの谷に住むリザードン達を管理し守る義務があるジークは谷のリザードン達がボスのいない状況では群れの統率が取れず

に混乱してしまう可能性があるからと必死にシユンにお願いし、リサちゃんも並んで頭を下げている。

「……リザードン：キミはどうしたい？」

シユンはジークのお願いを聞いて、しばらく何も話せずに：リザードンにどうしたいかと聞く。

「……ウオウ……ウオウ!!」

シユンにそう聞かれるとリザードンは：リザフィックバレーのリザードン達を見る。リザフィックバレーのリザードン達はシユンのリザードンを期待しているような眼差いで見つめていた。中にはシユンのリザードンにお願いするように鳴き声を上げているリザードンもいる：シユンのリザードンはそんな谷のリザードン達を見ると、決心したような目をしてシユンを見る。

「ウオウ！ウオウ!!」

「そっか……リザードン：キミは此処に残ることに決めたんだね……」

「ウオウ……!!」

シユンがリザードンの目を見て、ここに残ることを決めたのだと分かり、リザードンもそれにゆつくりと頷く。

「キミが決めたなら何も言わないよりリザードン：これがさよならというわけではないし

ね」

「ウオウ!!」

シユンはリザードンが決めたなら何も言わないと言い、これがさよならと言うわけでもないと言うとシユンとリザードンはお互いに笑顔で頷く。

「ジークさん!これがリザードンのボールです:リザードンのことをよろしくお願いしますます:」

「ありがとうシユンくん。心配しないで!キミのリザードンはわたしが責任を持って面倒を見るから!」

「よろしくお願いしますますジークさん!それじゃありザードン。さよならは言わないよ、またね:」

シユンはジークにリザードンのボールを渡し、ジークは責任を持って面倒を見ると言う、シユンはジークにお願いすると、リザードンにまたねと言ってリザフィックバレーの出口へと向けて歩き出す。

「(また会いましょうねリザードン!)」

「(元気でやるのですよ。また会える日を楽しみにしています)」

「ウオウ~~~~!!!」

メロエツタとディアンシーは姿を消しながらもリザードンにまた会いましょうと言

うと、リザードンもまたいつかと言うようにシユン達に雄叫びを上げてシユン達を送る。

「それじゃあねえ〜！また会いましょう〜!!!」

ジークもシユンに別れの挨拶をしシユン達を送り出す。

こうしてリザードンはリザフィックバレーへと残りシユン達と別れることになった。

しかし、永遠の別れではない。いつかまた会える時が来るのだから……しかし、それでも一時的に別れることになったシユンとリザードンの目には寂しさから静かに涙が流れるのであった。

そして、シユン達はヒワダタウンへと目指して旅立つ。リザードンとの再会を楽しみに思いながらシユン達は旅を続けるのだった。

## 第十一話 ヒノアラシ!ゲットだよ!

リザフィックバレーでリザードンと別れたシユン達は寂しい気持ちを一慢し、気を取り直して：次のジムのある街ヒワダタウンを指して旅をする途中：大きな森の中を歩いているのだった。

「はあ……」

シユンはヒワダタウンへと向かうために途中にある森の中で、時おり俯きたため息をしながら歩いていた。

「最近、元気がないみたいですが、大丈夫でしょうかマスター……」

「やっぱり……リザードンと別れることになったのが原因でしょうか?」

そんなシユンの様子を見てメロエツタとディアンシーがシユンに聞こえないように小声で、最近シユンがため息ばかりついて元気がないことを心配して、やはり”リザードンと別れたことが原因だろうと話している。

「大丈夫ですかマスター?……」

「やっぱり……リザードンのことですか……」

メロエツタとディアンシーはシユンに元気を出すように励まし、ディアンシーはシユンに元気がないのはリザードンと別れたことが原因なのかと訪ねる。

「ありがとうメロエツタ、ディアンシー：うん：リザードンはぼくが最初にもらったポケモンだからね：オーキド博士から譲り受けたあの日からずっと一緒だったからね：：やっぱ寂しいね：」

シユンは自分を励ましてくれたメロエツタとディアンシーにありがとうと言い、シユンがマサラタウンから旅立ったあの日にはオーキド博士から譲り受けた日から楽しい時も苦しい時もずっと一緒にポケモンバトルの修行やバトルでもみんなと一緒に頑張つてバトルやジム戦に勝利した時は共に喜びあっていたので、例え一時的な別れといえどシユンの心の中は寂しい思いが募るのであった。

「元気を出して下さいマスター！わたしとディアンシー：それにみんなもいます」

「そうですね。わたくしもリザードンが居なくなってしまったのは寂しいですわ：ですがわたくしはマスターが寂しそうにしているのを見てると悲しいですわ！だから元気を出して下さい：」

そんな元気のないシユンをメロエツタとディアンシーは自分達がそれにみんながいてと言つて励ます。そんなメロエツタとディアンシーの励ましを受けたシユンは、いつまでもこんなじゃないけないと思ひ、メロエツタやディアンシーそれにみんなに心配を

かけないように元気を出さなきゃと気持ちを切り替える。

「そうだよね……いつまでもこんなんじゃないよね。このまま落ち込んでたらチコリータ達にも心配かけちゃうし気持ちを切り替えて頑張らなくちゃ。メロエツタ! デイアンシー! もう大丈夫だよ。二人とも本当にありがとう!」

メロエツタ達に励まされたシユンはこのままではチコリータ達にも心配をかけてしまうと感じを切り替えて、リザードンと別れて元気のなかつた自分を一生懸命励ましてくれた二人に感謝の気持ちと一緒にいってくれて良かったと言う思いを込めて二人にありがとうと伝える。

「どういたしまして! マスターが元気になってくれたのなら何よりです」

「ええ、いつものマスターに戻ってくれて嬉しいですよ!」

メロエツタとデイアンシーはシユンが元気になってくれたことに安心し笑顔になる。

リザードンと別れて落ち込んでいたシユンはメロエツタとデイアンシーに励まされて落ち込んでいた気持ちを一転!いつもの自分に帰ると引き続きヒワダタウンを目指して森の中を歩いて行く。

すると……。

「おい!! そのオマエ!?! ちょっと待て!!」

シユンがヒワダタウンを目指して歩いていると、横の草むらから濃い緑色の髪をした

シユンと同一年ぐらいの目つきの悪い少年が出て来てシユンを呼び止める。メロエツタとディアンシーは透明になり自分達の姿を見えないようにする。

「この辺でヒノアラシを見なかったか？」

その少年は横の草むらから出て来るとシユンにそう訪ねる。

「ヒノアラシ？ いや・見ていないな・この辺にはヒノアラシが居るんだ。」

シユンは少年にそう聞かれるとヒノアラシを見ていないと答える。

「ちっ！ 見てないか！ … 噂ではここら辺でヒノアラシを見たって話を聞いてな。良いか！ ヒノアラシは俺の獲物だからな！ おまえはここでじっとしてろよ！」

少年はシユンが見ていないことを知ると、苛ついたように舌打ちをして横暴な態度でヒノアラシは自分の獲物だから手を出すなど言うと、シユンは少年の横暴な態度に怒りの感情が湧き上がるがあくまでも冷静に少年に言い返す。

「そんなこと知らないよ。ヒノアラシはキミのものって訳ではないだろ！ それにぼくはヒワダタウンと向かっている途中だ！ キミの勝手な言い分で時間を無駄にするわけには行かないんだ。ぼくは行くよ。キミも勝手にしたらいい！」

シユンは少年の横暴な態度に不機嫌になり、怒りのままに少年に自分の言いたいことを言うとそのまま少年の動くなどという言葉を無視して再びヒワダタウンへと向けて歩みを進める。



「ちっ!!まあいい!!良いか!ヒノアラシは俺がゲットするんだからな!絶対に手を出さ  
んじゃねえぞ!!」

少年は最後までシユンに横暴な態度で絶対に”ヒノアラシに手を出すなど言っ  
てヒノアラシを探すためにその場から歩いて行く。

「…ふう…なんだよあいつ…」

「まったくです!マスターに向かつてあんな失礼な態度で許せません」

「そうですね…あんな失礼なやつにゲットされたらヒノアラシが可哀想ですわ」

シユンは態度の悪い少年が去った後で疲れた様子でため息をつき、メロエツタと  
ディアンシーはその少年のシユンに対しての失礼な態度に怒りの感情を露わにする。

「こうなったらマスター!あいつをギャフンと言わせるために”ヒノアラシを  
ゲットしましょう!リザードンの抜けた”ほのおタイプの枠を埋めるにはピツタシ  
ですし、あんな最低な人間よりもマスターがゲットした方がヒノアラシも  
幸せです!」

「そうですねマスター。メロエツタの言う通りですわ!絶対にそうする  
べきですわ」  
姿を消して少年の横暴な態度を見ていたメロエツタはシユンにヒノアラシを  
ゲットしようとする提案し、ディアンシーもメロエツタの提案に賛成してシユンに  
そうすべきだと説得する。

「・確かにリザードンが抜けた穴を埋めるには：ほのおタイプのはひのアラシはぴったりだと思うけど、この広い森を態々探してゲットしようとは思わないなあ：それに、あいつの言うことを聞くわけじゃないけど：手を出すなども言つてたし：先を急ごうよ二人とも」

「まあマスターがそういうなら・・・」

「ええ・・・しかたないですわ・・・」

メロエツタとデイアンシーの提案にシユンは確かにヒノアラシはリザードンを抜けた穴を埋めるのにぴったりではあるが、今、シユンがいる森はかなりの広さのためヒノアラシを探するのは大変だと考えて先を急ごうと言つて歩き出す。メロエツタとデイアンシーもシユンがそういうなら仕方ないとシユンの後を追いかける。

そして、シユン達は失礼な少年の態度の悪さに気分を害されるも気持ちを切り替えてヒワダタウンを目指して森の中を歩いて行き、そしてシユン達がしばらく歩いていると森の開けたところに出てそこには大きい岩場があつた。

「あつ！マスター、あれ!!」

「えっ?」

メロエツタが岩場の方を見て何かに気づくとシユンに知らせ、シユンはメロエツタの

言う方に視線を向けると……

「(ゴシゴシ) ヒノ?」

岩場の途中にある穴のところまでヒノアラシが自分の頭をゴシゴシと掻いていた。

「ヒノアラシが居ましたよマスター!!」

「あれがヒノアラシ……?」

メロエツタはヒノアラシがいたことに喜び、シユンは初めて見るヒノアラシにポケモン図鑑を向ける。

「ヒノアラシ……ひねずみポケモン。いつもは背中を丸めている……怒った時、驚いた時……背中から炎が吹き出す……」

ポケモン図鑑にヒノアラシのデータが表示されヒノアラシについての情報が流れる。

「あれが……ジョウト地方で最初に貰える一体のヒノアラシか……初めて見たな」

「マスター!?!チャンスですわ!ヒノアラシをゲットしましょう」

「ディアンシーはシユンにチャンスだと言って」ヒノアラシをゲットするように言う。

「うくん……そうだな」

シユンがどうしようかと考えていると……先ほどの少年がシユンと少し離れたところの草むらから出て来る。

「ん?あいつはさっきの……あれは!!居たぜヒノアラシ、俺がゲットするんだ。いけ、サン

ドパン!!」

「サド!!」

その少年がシュンの見ている方を見ると岩場の上にヒノアラシが居ることに気づき、ボールからサンドパンを出す。

「ん・あいつは・・・・」

「(くっ!!またあいつか!!)」

シュンはさっきの少年がいることに気づき、メロエッタとディアンシーはせっかくのチャンスに邪魔が入ったことに怒りながら姿を消す。

「おいお前!!俺がヒノアラシをゲットするんだからな!邪魔するなよ!サンドパン、ヒノアラシを捕まえるんだ」

「サド!!」

少年はシュンに邪魔をしないように忠告するとサンドパンにヒノアラシを捕まえるように指示し、指示を受けてサンドパンは岩場を駆け上がりヒノアラシに向かって行く。

「ヒノ?」

「いけ、サンドパン!」きりさく」だ」

「サド!!」

ヒノアラシが向かって来るサンドパンに気づき、少年はサンドパンに「きりさく」を指示しヒノアラシに攻撃する。

「ヒノー!ヒノノ!!」

「サド〜」

「サンドパン!!」

ヒノアラシはサンドパンの「きりさく」を飛び上がったと交わすと、ヒノアラシはサンドパンの顔を蹴ってサンドパンを岩場から落とす。サンドパンはヒノアラシに蹴られて岩場から転げ落ちる。

「なにやってやがるサンドパン!!」

「サド!!」

しかし、少年は転げ落ちたサンドパンを心配するどころか、サンドパンをしつかりしろと言って怒る。

「あいつ!!」

シユンはその少年のサンドパンに対するあまりの態度に怒りを抱く。

サンドパンが転げ落ちたのを見たヒノアラシも岩場を滑ってこちらへと降りて来る。

「くそ!!サンドパン、”みだれひつかき”だ!!」

「サド!!サド!サド!サド!」

「ヒノ！ヒノ！ヒノ！」

サンドパンはヒノアラシに「みだれひつかき」で攻撃するが、ヒノアラシは素早い動きでサンドパンの攻撃を交わしていく。

「(マスター!!あのヒノアラシ、なかなか素早いですね)」

「(うん、そうだね。サンドパンの攻撃が全然当たってないしね)」

ヒノアラシが素早い動きでサンドパンの攻撃を連続で交わしているのを見たシユンとメロエツタは驚く。

「サド・サド・サドオ〜…」

サンドパンはヒノアラシに攻撃を当てようと攻め続けるがまったく命中せず、次第に攻め続けた反動で疲れて息切れを起こす。

「何をしてるサンドパン!!休まず攻撃しろ!!」

しかし少年はそんな「サンドパンを気にかけて休まず攻撃するように命令する。」

「あいつ!!また無茶なことを！」

またも少年のサンドパンに対するあまりの扱いを見たシユンはますます少年に対しての怒りを抱く。

「サド!!サド〜!!」

「ヒノ！ヒノ！」

サンドパンは少年の指示を受けてヒノアラシに“みだれひつかき”で攻撃するがヒノアラシはまたもや素早い動きで交わしていく。

「サド……!」

サンドパンは連続攻撃で体力を著しく消費し疲労で体制を崩す。

「ヒノノ……!!」

「サド……!!!!」

ヒノアラシはその隙を見逃さずに“スピードスター”を放ち“サンドパンを吹っ飛ばす。

「サドオ………」

サンドパンは岩場にぶつかるとそのまま倒れて戦闘不能になる。

「サンドパン!!なにをしている立て!!」

しかし、少年はそんなサンドパンに立って戦うように命令する。

「見て分からないの!!もうサンドパンは戦える状態じゃない!早くボールに戻すんだ」

「うるせえ!!!指図するんじゃないやねえ!?!ちっ!!戻れサンドパン!!!」

シユンがサンドパンをボールに戻すように言う少年は怒鳴りサンドパンをボールに戻す。

「ヒノヒノ(ゴシゴシ)ヒノ?」

「あのヒノアラシ、素早いだけでなく技も強いね」

「(そうみたいです。それでマスター!もういいんじゃないですか?)」

「(そうですわマスター!!あいつは負けましたし次はマスターの番ですわ!ヒノアラシをゲットしましょう)」

シユンがヒノアラシの技の威力に感心しているとメロエッタとディアンシーが今度はシユンの番だと言ってヒノアラシをゲットするように言う。

「ちっ!!役立たずが!!こうなったら・いけ、カイロス!!ベトベター!!ヒノアラシを捕まえるんだ!」

「キキツ!!」

「ベター!!」

少年はサンドパンを役立たずと罵ると、ポケットから二つのボールを取り出してボールからカイロスとベトベターを出す。

「なっ!!二対一なんて卑怯だよ!!」

「うるせえ!!勝てばいいんだよ。ヒノアラシを捕まえる!!」

「キキツ!!」

「ベター!!」

少年の指示を受けてカイロスとベトベターはヒノアラシに攻撃する。



「ベトベター!!」へドロぼくだん」だ」

「ベト〜!!」

「ヒノ!!」

ヒノアラシはベトベターの「へドロぼくだん」を交わす。

「今だカイロス!ヒノアラシを挟み込め!!」

「キキツ!!」

少年はヒノアラシが「へドロぼくだんを交わした隙についてカイロスにヒノアラシを挟むように指示しカイロスはヒノアラシを挟む。

「ヒノ!ヒノ〜!!」

ヒノアラシは「へドロぼくだん」を交わした直後でカイロスの攻撃を交わす事が出来ずにカイロスのはさみに捕らわれる。

「よし良いぞカイロス!!そのまま挟み込んで締めつける!!」

「キキツ!!」

「ヒノ〜〜!!」

ヒノアラシはじたばたともがいてカイロスのはさみから脱出しようとするが、がっかりと挟み込まれて脱出する事が出来ない:そしてカイロスはヒノアラシを挟み込んだままヒノアラシを強く締めつけて攻撃しヒノアラシは苦痛の声をあげる。

「よし!!その調子だカイロス!!そのまま締めつける」

カイロスは少年の指示を受けてヒノアラシにさらなるダメージを与えようとはさみを締めつけようとしたその時……

「ゼニユ~~~~!!」

「チ〜コ〜!!」

「キキツ!…」

「ベタ〜!…」

ゼニガメの「みずでつぼう」がカイロスに直撃しその衝撃で鉄みから「ヒノアラシ」が外れてヒノアラシが空中へと放り出され：チコリータの「はっぱカッター」がベトベターを吹っ飛ばし牽制する。

「ヒノ~~~~!」

「おっと!大丈夫かいヒノアラシ?」

「ヒノ?」

空中へと放り出されたヒノアラシをシュンがしっかりと受け止める。ヒノアラシは自分を受け止めたシュンを不思議そうに見る。

「カイロス!!テメエ!!どういふつもりだ!邪魔をするなど言っただはだぞ!!」

少年はヒノアラシのゲットの邪魔をされたことに怒り、シュンにどういふつもりだと

怒鳴る。

「どういうつもりと言うのはこっちのセリフだよ。一対一の正々堂々のバトルならばくも手を出さなかったけどね：二対のポケモンで同時に攻撃するなんて卑怯な事は許さないよ。大丈夫かいヒノアラシ!!」

「ヒノ!!」

シユンはヒノアラシ一体を相手に二体のポケモンで攻撃する少年に卑怯な事は許さないと怒りの眼差しを向ける：シユンは先程から自分のポケモンに対する少年の非道い扱いを見て怒りの感情でいっぱいだった。少年のために頑張つて戦ったサンドパンを役立たずなどと罵つたり、もう戦える状態でもないのに戦わせようとしたりなど自分のポケモンに対する態度とは思えない扱いを見ていて我慢の限界だった。

そして、今もヒノアラシを捕まえるために手段を選ばずに二体のポケモンでヒノアラシを痛めつけるのを見たシユンはとうとう我慢の限界を越えてゼニガメとチコリータをボールから出してヒノアラシを助ける。

シユンはカイロスに痛めつけられたヒノアラシに大丈夫かと聞くとヒノアラシは助けしてくれたシユンに笑みを浮かべて大丈夫だと言うように頷く。

「はっ!!卑怯もくそもあるか!!どんなことをしても目的を達成出来ればそれで良いんだよ!ヒノアラシをよこしやがれ!!そいつは俺の物だ!!」

少年はシユンの言葉を否定し、ヒノアラシをよこせと叫ぶ。

「ヒノヒノ（フルフル）!!」

「どうやらヒノアラシはキミにゲットされるのが嫌みたいだね：それに自分のポケモンに酷い扱いをするキミにヒノアラシは絶対に渡さない!!」

ヒノアラシは首を左右に振って嫌がるのを見たシユンは自分のポケモンに非道い扱いをする少年に絶対に渡さないと宣言する。

「うるせえ!!そいつが嫌がろうが関係ねえ。ポケモンは人間のために役立つのが当然なんだよ!!テメエがヒノアラシを渡さないなら無理矢理奪い取るまでだ!!いけっ!カイロス、ベトベター!!あいつからヒノアラシを奪い取れ!!」

「キキツ!!」

「ベター!!」

少年の命令を聞いたカイロスとベトベターは少年の発言を聞いて、一瞬怒りの感情が沸き上がるも命令に従いヒノアラシを奪おうとシユンに迫る。

「おまえはどこまで：もう許せない!!ゼニガメ!カイロスに”れいとうビーム、チコリーター!ベトベターに”はっばカッターだ!!」

「ゼニユ〜!!」

「チ〜コ〜!!」

少年の発言を聞いたシユンは怒りの感情を爆発させて迫り来るカイロスとベトベターにゼニガメの”れいとうビーム”とチコリータの”はっぱカッターが直撃しカイロスとベトベターを吹っ飛ばす。

「なっ!何してるカイロス!ベトベター!さっさと立て!ヒノアラシを捕まえろ!」

少年はまたもやゼニガメとチコリータの技でダメージを負ったカイロスとベトベターを気遣わずにさっさと立つように怒鳴る。

少年の指示を受けてカイロスとチコリータは力を入れて立ち上がろうとする……しかし……

「キキツ……」

「ベター……」

カイロスとベトベターは戦闘不能となり倒れる。

「なっ!!カイロス、ベトベター!!」

「どうする?カイロスとベトベターは戦闘不能のようだけど?」

少年はカイロスとベトベターをモンスターボールへと戻すと虫網を取り出す。

「こうなったら俺が直接捕まえてやる!!」

そう言う少年は虫編みを構えてヒノアラシを捕まえようとシユンに迫る。

「ヒノ!!ヒノ!!」

するとヒノアラシは抱えていたシユンの腕から飛び出して背中の中の炎を燃え上がらせて少年に「かえんほうしやを放つ。

「ケホツ……ウツ!!ウワア……ン!!覚えてろよ……!!」

少年はヒノアラシの「かえんほうしやを受けて少し黒焦げになり泣きべそをかきながら逃げて行つた。

「あはは！いい気味だね」

「ええ、胸がスツとしました」

「ふふ！あれで少しは反省するといいいですね♪」

「ゼニ!!」

「チコ!!」

シユン達は少年が泣きべそをかいて逃げていった少年を見て可笑しくていい気味だと言つて笑い合う。

「それにしてもすごい」かえんほうしや」だね、すごいよヒノアラシ!!」

「ヒノ!!」

少年を追い払つた「かえんほうしや」を見たシユンは凄いねとヒノアラシを誉めるとヒノアラシは笑みを浮かべて喜ぶ。

「ヒノ!!ヒノ」

ヒノアラシは笑みを浮かべるとシユンに飛びつく。

「どうしたのヒノアラシ?」

「ヒノ!ヒノヒノ!!」

シユンは自分の腕に飛び込んで来たヒノアラシに驚いてどうしたのかと聞くとヒノアラシはシユンに一生懸命何かを伝える。

「マスター。どうやらヒノアラシはマスターと一緒にいきたいようです」

「自分を助けてくれたからマスターのことを好きになっただけですわ」

メロエツタとデイアンシーはヒノアラシがシユンと共にいきたいと言っているとシユンに伝える。

「えっ! そうなのヒノアラシ?」

「ヒノ!!」

シユンは驚いてヒノアラシにそうなのかと聞くとヒノアラシはそうだと言うように頷く。

「うん、ヒノアラシ……ぼくと一緒に来るかい?」

「ヒノ!!」

シユンはヒノアラシが自分と一緒にいきたいことを知って嬉しくなり笑顔でヒノアラシと一緒にいくかと聞くと、それを聞いたヒノアラシも嬉しそうに笑顔で頷く。

「よし、ヒノアラシ：ゲットだよ！」

「ヒノ！」

「やりましたねマスター!!」

「新しい仲間が増えて嬉しいですわ♪」

「ゼニ!!」

「チコ!!」

こうしてシユンはポケモンを道具扱いする最低な少年からヒノアラシを守り抜き、ヒノアラシを新たに仲間にした。

シユン達は新たにヒノアラシを仲間に加えてヒワダタウンを目指して旅立つのであった。



## 第十二話 VSツクシ……むしタイプの底力!!

新たにヒノアラシを仲間にすることに成功したシユンはヒノアラシの事をみんなに紹介するとヒワダタウンを目指しながら野生のポケモン達とバトルをしてポケモン達を鍛えながら旅を続けていた。

ゲットしたばかりのヒノアラシはシユンの指示に反応するのが一歩遅く：最初はヒノアラシと一緒にバトルに慣れるための野生のポケモンとのバトルでは苦戦を強いられていたが、バトルを何回かしていくうちにシユンの指示にすぐに反応し、野生のポケモンとのバトルにも段々となれてきてヒワダタウン到着までもう少しのところまで来る頃にはシユンの指示に即座に反応出来るようになっていた。

そしてシユン達はもう少してヒワダタウンへと到着するところまで来ているのだつた。

「みんな・後もう少してヒワダタウンに到着するみたいだよ」

シユンはガイドブックにあるマップを見て、後少してヒワダタウンへと到着するはずだと二人に伝える。

「いよいよですねマスター」

「ジョウトでの2つ目のジムへの挑戦ですわ」

メロエツタとデイアンシーはヒワダタウンまで後少しで到着すると分かると、マスターであるシユンのジョウト地方での2つ目のジムへの挑戦にワクワクしている。

「うん！ヒノアラシと一緒にバトルするのもここに来るまでのバトルで慣れてきたし、ばっちりだよ。絶対に勝ってバッジをゲットするんだ！」

シユンはもうすぐ到着するヒワダタウンのジムの挑戦に意気込んでいると……

ガサガサツ……

「イト……」

道の横にある草むらが揺れてそこから黄緑色の体をし、背中に顔のような模様のあるポケモンが飛び出して来る。

「んっ？あれは……」

「マスター！あのポケモンはイトマルですわ」

シユンが草むらから飛び出して来たポケモンを見ると、デイアンシーがシユンに出て来たポケモンの名前をイトマルだと教える。

「あれが、イトマル……」

シユンはポケモン図鑑を出してイトマルに向ける。

「イトマル……いととはきポケモン。細くて丈夫な糸を張り巡らして罫を仕掛けると、獲物が掛かるのをひたすら待つ……」

「細くて丈夫な糸か……よし！イトマルをゲットしよう」

ポケモン図鑑から流れるイトマルのデータを聞いてシユンはイトマルをゲットすることを決める。

「それは良い考えですねマスター。どうやらヒワダジムのジムリーダーは”むしタイプ”のポケモンのエキスパートらしいです。ジム戦前の腕試しに丁度良いでしょう。ほのおタイプのヒノアラシならかなり有利ですね」

イトマルをゲットすると聞いて、メロエツタはジョウト地方のガイドブックにあるジムリーダーの項目を開いてヒワダタウンのジムリーダーがむしタイプのポケモンの使い手だとシユンに教え、ヒノアラシならかなり有利にバトルが出来るだろうと伝える。

「そうなんだ……ヒワダジムのジムリーダーはむしタイプのポケモンのジムなんだ……よし！出て来てヒノアラシ！」

「ヒノ!!」

シユンはモンスターボールからヒノアラシを出してイトマルをゲットするためにイトマルの前に出る。

「イト?」

「イトマル！勝負だよ。ヒノアラシ・かえんほうしゃ!!」  
「ヒノノッ!!」

ヒノアラシは背中の炎を燃え上がらせてイトマルに”かえんほうしゃを放つ。

「イト！イトッ!?!」

イトマルは迫り来る”かえんほうしゃを素早い動きで交わすと、シユン達を敵だと判断し口から糸をはいてヒノアラシに放つ。

「ヒノアラシ！交わして！」

「ヒノ！」

シユンはヒノアラシに迫る糸を交わすように指示し、ヒノアラシは飛び上がってイトマルのいとをはくを交わす。

「よし！ヒノアラシ・スピードスターだ」

「ヒノッ!!」

ヒノアラシはイトマルの攻撃を交わすと、すかさずイトマルに”スピードスターを放つ。

「イト！イトッ」

イトマルはヒノアラシの”スピードスターを受けて吹っ飛ぶも体制を立て直し、ヒノアラシに”どくばり”を放つ。

「気をつけてヒノアラシ！かえんほうしやで”どくばり”を相殺するんだ」

「ヒノ！ヒノ！！」

ヒノアラシは「かえんほうしやを放ち、どくばりを相殺するとそのままイトマルに”かえんほうしや”が直撃する。」

「イ・イト……」

バタツ……イトマルは効果抜群のヒノアラシの”かえんほうしや”が直撃すると体が黒焦げになり戦闘不能になる。

「今だ!!」

シユンは倒れたイトマルに向かってモンスターボールを投げる。

ボールがイトマルに当たるとボールがイトマルを吸い込み、そして数回揺れるとポーンとなつて輝き、イトマルがゲット出来た事を知らせる。

「よし！イトマル。ゲットだよ」

「ヒノ！」

シユンは「イトマルをゲット出来た事をヒノアラシと一緒に喜ぶ。」

「やりましたねマスター!!」

「ええ、これならジム戦もバッチリですわ♪」

「そうだね。この調子でバッジもゲットしよう！」

シユンはイトマルをゲットするとジム戦をするために到着までもうすぐのヒワダタウンを目指し歩き出した。

「ここがヒワダタウンか…ジムはどこだろう…」

シユン達は街の入口にある川に架かっている橋を渡ってヒワダタウンへと到着するとシユンはヒワダジムがどこにあるのか探す。

「マスター！ガイドブックによるとジムはもう少し先に行つた場所にあるみたいですよ」

メロエツタは街に入る前に透明になりデイアンシーと一緒に姿の見えないようにするとシユンにガイドブックを見てジムの場所を教える。

「そうなんだ…ありがとうメロエツタ。それにしてもさつきから道の端にヤドンがいっぱいいるけどなんでだろう？」

シユンはメロエツタからヒワダジムの場所を教えてもらうとジムを目指して歩く。

ジムを目指して歩いていると先ほどから道の端にヤドンが居ることに気づき、なぜだろうと考えていると…

「どうやらこの街ではヤドンを町の守り神として大切にしているみたいですね」

メロエツタがガイドブックを見て、道にヤドンが居る理由をシユンに説明する。

「そうなんだ…それでヤドンが町の中にこんなに居るんだね」

シユンはヤドンが町の中にいっぱい居る理由を知り、そのまま小声でメロエツタ達と話しながらヒワダジムを指指して歩いて行く。しばらく歩くとシユン達はヒワダタウンの端の方にある周りが木で囲まれたドーム型の建物であるヒワダジムへと到着する。

「ここがヒワダジムか…よし、行くぞ!!」

「(頑張つて下さいねマスター)」

「(応援していますわ)」

シユンはヒワダジムへと着くと早速ジム戦を申し込もうとジムの入口から中に入る。ヒワダジムの中に入るとそこは沢山の木が生い茂りまるで森のような景色が広がっていた。

「うわあ…すごいな。まるで森みたいだな」

シユンがヒワダジムの緑一色の景色に驚いていると……

「誰だい? ヒワダジムに何か用かい」

シユンの驚く声を聞いて木の奥からシユンより少し上くらいの薄紫色の髪をした少年が出て来る。

「えと…ぼくはシユンと言います。ヒワダジムに挑戦しに来ました」

シユンは出て来た少年にヒワダジムに挑戦しに来たとヒワダジムに来た理由を話す。

「なるほど、チャレンジャーだったのか! ぼくがヒワダジムのジムリーダー…むしポケ

モンを極め、歩く”むしポケモン大百科の異名を持つツクシだ!!”

シユンがジム戦のチャレンジャーだと知ると、少年は自分がヒワダジムのジムリーダーのツクシだと名乗る。

「あなたがジムリーダー……ツクシさん!ジム戦をお願いします」

「挑戦を受けよう。それがジムリーダーの務め!フィールドはこつちだ。付いて来てくれ」

ツクシはシユンのジム戦への挑戦を受けるとシユンをバトルフィールドまで案内する。

「それでは只今よりヒワダジムジムリーダー”ツクシとチャレンジャーシユンによるジム戦を開始します。使用ポケモンは3体の勝ち抜き戦!それではバトル開始!!”

審判によりジム戦の開始が宣言される。

「いくよシユンくん!ぼくの1体目はむしポケモンの静かなる戦士:いけ、イトマル!!」  
「イト!!」

「イトマルか……だったらこつちは頼むよ”レデイバ!!”

「レデイ!!」

ツクシの1体目はイトマル:シユンの1体目はレデイバをボールから出してバトルが始まる。



「レディバか…むしタイプを極めたぼくにむしタイプのポケモンを出すとは良い度胸だ！いくよ、イトマル！」いとをはく!!」

「イトゥ!!」

ツクシはイトマルにいとをはくを指示し、イトマルは口からレディバに向かって糸を吐く。

「レディバ!!こうそくいどうで交わすんだ」

「レディ!!」

レディバは「こうそくいどうでイトマルの糸を交わす。」

「逃がすな！イトマル！連続で」いとをはく!!」

「イト！イト！イト!!」

「レディバ、全て交わして”たいあたり”だ」

「レディ!!レディゥ」

ツクシはイトマルに逃がさないように連続で”いとをはく”を指示し、イトマルは連続で糸を吐いて攻撃する。レディバはシュンの指示通りにイトマルの”いとをはく”攻撃を全て交わすと、イトマルを”たいあたり”で攻撃する。

「イトゥ…」

「イトマル!!」

イトマルは「たいあたりで吹っ飛ぶもすぐに体制を立て直す。

「大丈夫かイトマル！」

「イト!!」

「よし、イトマル!どくばりだ」

「イト〜!」

ツクシはイトマルが大丈夫なのを見て”どくばり”を指示しレディバに放つ。

「レディバ!こうそくいどうで交わしてから、接近して”マツハパンチだ!”

「レディ!!」

”こうそくいどうで”どくばり”を交わすと、レディバはイトマルに素早く接近して”

マツハパンチでイトマルを攻撃する。

「レ〜ディ!!」

「イト〜」

イトマルはレディバの”マツハパンチが直撃し、そして……

「イト〜……」

「イトマル……」

「イトマル戦闘不能!!レディバの勝ち!!」

イトマルは戦闘不能となり審判によってレディバの勝利が宣言される。

「やったね、レディバ!!」

「レディ!レディ!!」

シユンとレディバは勝ったことを喜ぶ。

「まさかイトマルを倒すとはね…そのレディバはよく育てられているようだね。でも今度はそうはいかないよ!ぼくの2体目はむしポケモンの誇り高き戦士、いけっ!!」

「トラン…」

「トランセル?…まさかトランセルが出て来るなんて…」

「フッフッフ!シユンくん、ぼくのトランセルを侮っていると痛い目を見るよ」

シユンはてつきりバタフリーやスピアーのような最終進化系のむしポケモンが出て来るかと思っていたからか、まさかのトランセルが出て来たことに驚き、ツクシは驚いているシユンを見て自信満々な笑みを浮かべて自分のトランセルは強いと忠告する。

「それではバトル開始!!」

「よし、速攻で行くよ!レディバ、たいあたりだ!」

「レディ!!」

「来たな…トランセル」かたくなる”だ!!”

「トラン!!」

レディバがトランセルに向かって来ると、ツクシはトランセルに”かたくなる”を指

示しトランセルは一瞬体が光りその体を堅くさせ”ぼうぎよ”を大幅に上げる。

「レディ!!」

レディバの”たいあたりがトランセルに直撃しトランセルを吹っ飛ばす……しかし

……

「トラン!!」

トランセルは全くダメージのない様子で微動だにしていない。

「なっ！効いてない!？」

「レディ!!」

「どうだいシュンくん。ぼくのトランセルは防御を極限まで高めているんだ……さらに”かたくなる”を使えば、ちよつとやそつとじゃビクともしないのさ!!」

「それならレディバ！今度は”マツハパンチだ」

「レディ!!」

「無駄だよ！トランセル、もう一度”かたくなる”だ！」

「トラン……」

ツクシはトランセルにもう一度”かたくなる”を指示しさらに防御を上げる。

「レ〜ディ!!」

レディバの”マツハパンチ”がトランセルに直撃する……だが……

「レディ〜」

レディバの”マッハパンチはトランセルの堅くなつた体に弾かれる。

「そんな！攻撃が弾かれた!!」

「どうだいシユンくん！攻撃を弾き返すほどのトランセルの防御力！だけどそれだけじゃないよ…トランセル、たいあたりだ」

「トラン!!」

「レディ〜…」

「レディバ!!」

トランセルの”たいあたりが”レディバに直撃しレディバを吹っ飛ばし、レディバは地面に落ちて何回かバウンドし倒れる。

「レディバ戦闘不能!!トランセルの勝ち!!」

「レディバ大丈夫かい!!」

「レディ〜」

シユンはレディバを抱き上げて大丈夫かと聞くとレディバは元氣のない様子で鳴く。「お疲れ様、レディバ。ゆっくり休んでね」

シユンはレディバにゆっくり休むように言って、ボールに戻す。

「どうだいシユンくん、トランセルの堅い体は防御だけでなく強力な攻撃にもなるのさ!!」

「あの固い体は攻防一体のバトルが出来るってことか：それなら、頼むよゼニガメ!!」  
「ゼニ!!」

シユンはツクシとトランセルの攻防一体のバトルに対抗するために2体目のポケモンのゼニガメをボールから出す。

「シユンくんの2体目はゼニガメか：それじゃあ行くよ、トランセル」たいあたりだ  
「トラン!!」

「ゼニガメ」みずでっぼうだ」

「ゼニユ〜!!」

「交わすんだトランセル!!」

「トラン!!」

トランセルが「たいあたりで攻撃するのを見て、シユンはゼニガメに」みずでっぼうを指示しトランセルに放つ。それを見たツクシはトランセルに交わすように指示しトランセルは「たいあたりを止めて」みずでっぼうを交わす。

「なっ！速い!!」

「ゼニ!!」

「速さを身につけたむしポケモンは無敵なのさ!? トランセル」たいあたりだ」

「トラン!!」

トランセルはいきなり周りの木の上から現れてゼニガメに”たいあたりする。

「ゼニユ〜」

「ゼニガメ! 大丈夫!」

「ゼニユ!!」

ゼニガメはトランセルの”たいあたりを受けるもすぐに立ち上がり、シユンに大丈夫だと言うように頷く。

「トランセルの体の色と周りの景色が同化して消えたように見えたのか…」

「トランセル、たいあたりだ」

「トラン!!」

ツクシが指示すると、トランセルは別の木の方から姿を現してゼニガメに攻撃する。

「ゼニガメ! 交わすんだ!!」

「ゼニユ!!」

ゼニガメは飛び上がってトランセルの”たいあたりを交わす。

「トラン…!?!」

「トランセル!!」

トランセルはゼニガメに”たいあたりを交わされて地面へと落ち体制を崩す。

「今だゼニガメ！ロケットずつきだ!!」

「ゼニユ〜!!」

シユンはその隙を見逃さずゼニガメに指示し、ゼニガメはトランセルに”ロケットずつきで勢いよく突っ込んでいく。

「トラン〜」

「トランセル!!」

ゼニガメの”ロケットずつきが決まり、トランセルをぶっ飛ばす。

「負けるな！トランセル”たいあたりだ」

「トラン！」

「ゼニガメ！交わすんだ」

「ゼニユ!!」

トランセルが体制を立て直し、ゼニガメに”たいあたりで攻撃し、ゼニガメはトランセルのたいあたりを交わす。攻撃を交わされると”トランセルは連続でゼニガメに”たいあたりで攻撃し、ゼニガメはそれを必死で避ける。

「逃がすな、トランセル!!」



「トラン!!」

「今だゼニガメ、れいとうビームだ!!」

「ゼニユ〜!!」

迫るトランセルに焦る事なく、シユンはゼニガメに”れいとうビームを指示し、迫り来るトランセルに向けて”れいとうビームを放つ。

「トラン〜」

「トランセル!!!」

トランセルはゼニガメの”れいとうビームが直撃し凍りつく…そして…

「トラン…」

「トランセル戦闘不能!!ゼニガメの勝ち!!」

トランセルは”れいとうビームが直撃し、凍りついて戦闘不能になり審判によりゼニガメの勝ちが宣言される。

「よし、その調子だよゼニガメ!!」

「ゼニゼニ!!」

「お疲れ様トランセル・ゆつくり休んでくれ。やるねシユンくん!ぼくに3体目のポケモンを出させたトレーナーは本当に久しぶりだよ。ではいくよ!ぼくの3体目のポケ

モンは華麗なるむしポケモンの戦士……いけっ、ストライク!!」

「ストライク!!」

ツクシはトランセルをボールに戻し、久しぶりに自分の3体目のポケモンを出させたシユンを賞賛すると、ツクシの最後のポケモン”ストライクがボールからフィールドに飛び出す。

「ツクシさんの最後のポケモンはストライクか……油断せずに行くよゼニガメ!」

「ゼニ!!」

「それではバトル始め!!」

「ストライク! きりさく」 攻撃だ!!」

「ストライク!!」

「ゼニガメ! 交わして”れいとうビーム!!」

「ゼニユ! ゼニユ!」

審判から試合再開のコールが出されると、ツクシはストライクに指示し、ストライクは腕のその鋭いカマを光らせてゼニガメに”きりさく” 攻撃を繰り返す。シユンはゼニガメに交わすように指示し、ゼニガメは”きりさく”を交わすと”れいとうビームを放つ。

「ストライク！かげぶんしんだ」

「ストライク!!スト!!」

ストライクは「かげぶんしん」を使い、自分の幻を数体作りゼニガメの「れいとうビームを交わす。

「くっ・どれが本物なんだ・!」

「ゼニユ!ゼニユ!」

シユンとゼニガメはストライクの「かげぶんしんに翻弄され：どれが本物のストライクか見破ることが出来ない。

「今だストライク!れんぞくぎり”だ!!」

「ストライク!!ストく!!」

ツクシはシユンとゼニガメに隙が出来たのを見ると、ストライクに「れんぞくぎりを指示しストライクは「かげぶんしんを止めて一体に戻るとすかさず」ゼニガメに「れんぞくぎりを繰り返す。

「ゼニユくく」

「ゼニガメ!!」

「ストライク!れんぞくぎり”で攻め続けるんだ!」

「ストライク!」

ゼニガメはストライクの”れんぞくぎり”を受けて吹っ飛び、そのままツクシはストライクにれんぞくぎり”で攻め続けるように指示を出し、ストライクの”れんぞくぎりの怒濤の攻めがゼニガメを襲う。

「スト！スト！ストライク!!」

「ゼニユ！ゼニユ！ゼニユ〜」

ストライクの”れんぞくぎりの怒濤の攻めがゼニガメの体力を確実に削っていき、ダメージが蓄積していく。

「まずい！れんぞくぎり”は決まることに威力が上がっていく…このままじゃ…ゼニガメ！交わすんだ」

「ゼニユ!!」

ストライクの”れんぞくぎりを受けていた”ゼニガメがシュンの指示を聞いて目を見開き、ストライクの”れんぞくぎりの攻撃から抜け出す。

「よし!!ゼニガメ、れいとうビームだ!!」

「ゼニユ〜!!」

れんぞくぎりから抜け出たゼニガメはシュンの指示でストライクに”れいとうビームを放つ。

「あまいよシュンくん！ストライク、つるぎのまい”だ!!」

「ストライク!!」

ツクシはストライクに”つるぎのまい”を指示するとストライクはその場で高速で回転し、その回転によってゼニガメの”れいとうビームが弾かれてしまった。

「なっ!!」

「ゼニユ!!」

シユンとゼニガメはストライクの”つるぎのまい”による高速回転によって”れいとうビームが防がれたことに驚く。

「今だストライク!!いあいぎり”だ!!」

「ストライク!!ストゥ!!」

ツクシはシユンとゼニガメに出来た隙を見逃さずストライクに”いあいぎり”を指示し、指示を受けたストライクは回転するのを止めてゼニガメに急接近し”いあいぎり”を繰り出す。

「ゼニユゥゥ」

「ゼニガメ!!」

「ゼニユゥ…」

「ゼニガメ戦闘不能!!ストライクの勝ち!」

ストライクの”いあいぎり”を受けたゼニガメは戦闘不能となり、審判によってスト

ライクの勝ちが宣言される。

「ゼニガメ!!大丈夫かい!」

「ゼニユ〜…」

シユンは倒れた”ゼニガメの元まで行きゼニガメを抱き上げて大丈夫かと聞くと、ゼニガメは弱々しい声で大丈夫だと言うように鳴く。

「よくやったね”ゼニガメ。ゆつくり休んでね」

シユンは戦闘不能となった”ゼニガメをモンスターボールに戻す。

「どうだいシユンくん?ぼくは”むしタイプのパケモンにとつて弱点となる”ほのおタイプの技を防ぐためにこの防御法を編み出したんだ。そしてそれをさらに鍛えて他のタイプの技でも防げるようにしたのさ!シユンくん、この防御はそう簡単には破ることは出来ないよ!」

ツクシは”ほのおタイプの攻撃を防ぐためにこの防御法を編み出したのだと説明し、そう簡単にこの防御を破ることは出来ないと自信満々にシユンに宣言する。

「…なるほど、つるぎのまい”で攻撃力を上げながら高速回転することで技を防ぐことも出来るのか:確かに破ることは難しいかもしれない:だけど絶対に勝ってみせる!!頼むよヒノアラシ!!」

「ヒノ!!」

シユンはツクシの説明を聞いて、この防御をそう簡単に破ることは難しいと理解しながらも絶対に勝ってみせると決意し、シユンは最後のポケモンのヒノアラシをボールから出す。

「ヒノくく!!」

ボールから出て来たヒノアラシは背中の炎を燃え上がらせてやる気充分のようである。

「シユンくんの最後のポケモンはヒノアラシか：だけどいかにほのおタイプといえど、ぼくのストライクの炎封じの前では無力さ!!」

「ストライ!!」

「さあ、それはやってみないとわからないよ。いくよヒノアラシ!!」

「ヒノくく!!」

「試合開始!!」

「ヒノアラシ、かえんほうしゃだ!!」

「ヒくく!!」

「無駄だよ、ストライク”つるぎのまいだ”」

「ストライ!!」

シユンの指示を受けてヒノアラシはストライクに”かえんほうしやを放つが、ツクシはストライクに”つるぎのまいを指示し、先程のように高速回転し”かえんほうしやを吹き飛ばす。

「やっぱり真正面から攻撃してもあの回転で防がれてしまう……」

「ヒノ……」

「シユンくん。元々この防御法はほのお系の技を防ぐために編み出したんだ。そのまま”ほのお技を撃つても無駄だよ。ぼくのストライクの炎封じは完璧なのさ!!」

「ストライク!!」

ヒノアラシの”かえんほうしやがストライクの”つるぎのまい”による高速回転によつて防がれたのを見て、やはり真正面からの攻撃では通用しないと判断し、ツクシは自分の編み出したストライクの炎封じは完璧なのだと自信満々に笑みを浮かべる。

「シユンくん、今度はこつちからいくよ!ストライク、れんぞくぎり”だ!”

「ストライク」

ツクシは今度はこつちの番だと”ストライクに指示し、ストライクはヒノアラシに接近し”れんぞくぎりを放つ。

「なっ!ヒノアラシ、避けるんだ!」

「ヒノ!ヒノ!ヒノ!」



シユンの指示を受けてヒノアラシはストライクの”れんぞくぎり”を必死に素早い動きで交わしていく。

「良いよヒノアラシ、そのまま”スピードスターだ!!”

「ヒノッ!!」

「ストゥゥ」

「ストライク!!」

ストライクの”れんぞくぎり”を全て交わすとその隙についてヒノアラシはストライクに”スピードスター”を放つ。ストライクは避ける事が出来ずにそのまま”スピードスター”が直撃し吹っ飛ぶ。

「大丈夫かいストライク!!」

「ストライク!!」

「よし、ストライク!!かげぶんしん”だ!!”

「ストライク!!」

ツクシはストライクに”かげぶんしん”を指示しヒノアラシを翻弄しようと考え、ヒノアラシの周りを”かげぶんしん”で現れたストライクの分身を取り囲む。

「くっ!どれが本物なのか分からない…こうなったらヒノアラシ!かげぶんしん”全てに向かつて”かえんほうしやだ」

「ヒノ！ヒノ！！」

どれが本物のストライクなのか見分けることが出来ないシユンは「かげぶんしん」  
全てに”かえんほうしやを放つように指示し、ヒノアラシは風払うように”かえんほう  
しやを放つ。

「ストライク、交わして”いあいぎりだ!!」

「ストライ!!」

ストライクは隣の分身が消されて次に”かえんほうしやが放たれる前に急接近しヒ  
ノアラシに”いあいぎりを繰り出す。

「ヒノ~~~~:~:~:~」

「ヒノアラシ!!」

ストライクの”いあいぎりを受けてヒノアラシは吹っ飛ぶ。

「大丈夫かいヒノアラシ！」

「ヒノ!!」

シユンがヒノアラシに大丈夫かと言うと、ヒノアラシは立ち上がり大丈夫だと言うよ  
うに頷く。

「まだやれるんだねヒノアラシ：（けどヒノアラシのほのお技はストライクのあの回転  
に防がれてしまう：まるで独楽みたいに回転して防ぐ：独楽みたい：もしかしたら：

よし!!)」

「ヒノアラシ、かえんほうしやだ!」

「ヒノ~~~~!!」

シユンはストライクが”つるぎのまい”で回転してほのお技を防ぐのを見て、まるで独楽のようだと思っていると、ある考えが思い浮かび、それを試すためにヒノアラシに指示をして、ヒノアラシは”かえんほうしやを放つ。

「何度やつても無駄だよ、ぼくのストライクの炎封じは完璧さ!ストライク、つるぎのま  
いだ!!」

「ストライク!!スト~~~~!」

ツクシはまた”ストライクに”つるぎのまいを指示して、ストライクは高速回転してヒノアラシの”かえんほうしや”を吹き飛ばす。

「ヒノアラシ、そのまま”かえんほうしや”を続けながら”ストライクに接近するんだ  
!」

「ヒノ~~~~!!」

シユンはヒノアラシにそう指示するとヒノアラシは”かえんほうしやをしながら高  
速回転するストライクに急接近する。

「何を!!そうか、至近距離で攻撃して威力を上げて破る気だな。無駄だよ、例え至近距離

で放とうと破れはしない!! ストライク、そのまま回転を続けて全て吹き飛ばすんだ!」  
「ストライ!! スト〜!!」

ツクシはシユンが至近距離ではのお技を放てば威力が下がらずにストライクの炎封じを破れると判断したのだと見破り、いくら至近距離で撃つても無駄だと言って、ストライクにそのまま回転を続けて全て吹き飛ばすように指示し、ストライクは高速回転する。

「今だヒノアラシ、そのままストライクの足元に」たいあたりだ!!」

「ヒノヒノヒノ!! ヒノ〜!!」

「ストライ!!」

「えっ!!」

シユンはヒノアラシにストライクの足元に”たいあたりをするように指示を出し、ヒノアラシはストライクの足元に”たいあたり”すると、ストライクは回転は止まらなかつたが少しバランスを崩し斜めに回転する。

「よし、ヒノアラシ! もう一度”たいあたりだ」

「ヒノ!! ヒノヒノ〜!!」

シユンはヒノアラシにもう一度”たいあたりを指示し、ヒノアラシは少しバランスを崩し斜めに回転しているストライクの足元に”たいあたりする。

「スト！ストライ〜！！」

「ああ、ストライク……」

最初の”たいあたりを受けて、バランスを崩して斜め回転になっているところに二度めの”たいあたりが決まり、ストライクは完全にバランスを崩して回転が止まってしま

う。

「今だヒノアラシ、最大パワーで”かえんほうしやだ!!”

「ヒ〜ノ〜!!」

「スト〜〜」

「ストライク!!」

バランスを崩して回転の止まったところにシユンはヒノアラシに最大パワーで”かえんほうしやを放つように指示。ヒノアラシは全力で”かえんほうしやを放ち、バランスを崩して、つるぎのまい”で回転することの出来ないストライクに直撃しストライクを吹っ飛ばす…かえんほうしや”を受けて吹っ飛んだストライクはそのまま木へと激突し、そして……。

「ストライ〜イ……」

「ストライク戦闘不能!!ヒノアラシの勝ち！よって勝者、マサラタウンのシユン!!」

ストライクは戦闘不能となり、審判によってシユンとヒノアラシの勝利が宣言される。

「やった、勝ったんだヒノアラシ!!」

「ヒノ〜!!」

審判によって自分の勝利を宣言されたのを聞いたシユンは勝ったことに喜び、ヒノアラシはシユンに向かって飛びつき抱きつく。

「よく頑張ったねヒノアラシ。勝てたのはキミのおかげだよ」

「ヒノ〜」

シユンはヒノアラシを抱きながらよく頑張ったと誉め、ヒノアラシの頭を撫でるとヒノアラシは気持ち良さそうにすり寄る。

「ありがとうストライク。よく頑張ってくれたな」

ツクシは戦闘不能となったストライクによく頑張ってくれたと言ってボールに戻す。

「シユンくん。あのストライクの炎封じにはかなり自信があっただけど：：まさかあんな方法で破られるとはね」

「ええ、ストライクが回転しているのを見てまるで独楽が回転しているように見えたんです。それで、独楽の下部分を触るとバランスが崩れて回転が止まるのでもしかしたらと思って試してみました」

ツクシは自分の編み出した炎封じにかなりの自信を持つていたが、まさかあんな方法で破られたことに驚き、シユンは自分の思いついた考えをツクシに説明する。

「なるほど……ぼくの完敗だよ。さあ、このインセクトバッジはキミの物だ!!」

「ありがとうございますツクシさん」

ツクシはヒワダジムを勝ち抜いた証であるインセクトバッジを渡し、シユンはツクシに礼を言つてバッジを受け取る。

「シユンくん!! またいつかぼくが育てたむしポケモンと勝負してくれるかい?」

「ええ、もちろんです。ツクシさん、その時までお元気で!!」

「ああ、またねシユンくん!! 道中気をつけて!!」

ツクシとシユンは握手をして、いつかまた再戦することを約束し別れの挨拶をする。

こうして、シユン達はジムリーダーのツクシを破り、インセクトバッジを手に入れたシユンは、ツクシとまたお互いにポケモンを強く育て再戦の約束をして握手を交わし、シユンはツクシに別れの挨拶をすると、ヒワダジムを後にするのだった。

## 第十三話 おてんばマリルとボングリの実！水辺の戦い

ジョウト地方2つ目のバッジを手に入れるためにシユンはヒワダジムジムリーダーのツクシとバッジをかけたジム戦に挑むのだった。

ツクシのむしポケモンのトリツキーな動きやストライクの炎封じの戦法に苦戦するもシユンの気転とヒノアラシの活躍によりツクシに勝利しインセクトバッジをゲットしたのだった。そして今、シユン達はポケモンセンターでポケモン達を回復させて次の街に向かおうと考えていると、ガイドブックを見ていたメロエツタがシユンにある提案をするのだった。

ポケモンセンターでヒノアラシ達を回復させたシユン達は「ジョーイさんから」ヒノアラシ達の入ったボールを受け取るとテーブルに座り、ポケモン達にご飯を食べさせていた。

そして、シユンも食事をしながらこの後どうするかをメロエツタ達と話し合っていた。

「さあ、みんなーご飯だよ。いっぱいお食べ」



「ゼニ!!」

「チョコ!!」

「ソウ!!」

「ヒノ!!」

「レディ!!」

「イト!!」

シユンがポケモンフーズをチコリータ達のお皿に出すと、みんな喜んでポケモンフーズを食べ始める。

「みんな、どう、美味しいかい？」

「チョコ!!」

「そう、よかったー」

シユンがみんなにポケモンフーズは美味しいかと聞くと、チコリータがみんなを代表するように美味しいと笑顔で応えてみんなもその通りだと言うように頷くと、それを見たシユンはみんなが喜んで食べてくれるのを見て嬉しくて笑顔になる。

「さて、みんなのご飯も用意したし、ぼく達も食事しながら次はどのジムのある街を目指そうか相談しようか」

シユンはチコリータ達のご飯の準備をすませると小声で自身の姿を消して、隣とテー

ブルの上に居るメロエツタとディアンシーにこれからどうするのかを話す。

「(そうですね、順当に進むとしたら、次はヒワダタウンの先にあるコガネシティに向かうのが良いと思います)」

メロエツタはシユンにヒワダタウンの先にあるコガネシティのジムに向かい挑戦してはどうかと提案する。

「(そうだね、マップを見るとヒワダタウンから近いみたいだし！よし、次に挑戦するのはコガネシティのジムにしよう：：)」

メロエツタの提案を聞いて、シユンは次はコガネシティのジムに挑戦するためにコガネシティに向かうことを決める。

「よし、そうと決まったらご飯を食べて、コガネシティに向けて出発しよう！」

そのように決まると、シユンはご飯を食べてコガネシティに向けて出発しようと決める。

「(マスター、ちょっとよろしいですか?)」

そんなシユンにディアンシーが、ちょっといいかと声を掛ける。

「(んっ? どうしたのディアンシー?)」

「(はい、このガイドブックによるとヒワダタウンにはボングリという木の実から特殊なボールを作るボール職人のガンテツという人が居るみたいです。コガネシティに行く

前にこのガントツという人の所に行つてボールを作つてもらうのはどうでしょうか?」

ディアンシーがヒワダタウンに住む有名なボール職人のガントツの所に行つて、ボングリから作られる特製のボールを作つてもらつてはどうかと提案する。

「そんな人がヒワダタウンに居るんだ。うん、確かにそれは良いかもね、それじゃそのガントツさんの所に行つてボングリの実でボールを作つてもらいに行こうか!」

「(そうですね)」

「(はい!)」

シユンはディアンシーの提案を聞いて、ヒワダタウンに住む有名なボール職人のガントツの所に行つてボングリのボールを作つてもらふことに決めたシユン達。

「えくと……ガイドブックによるとガントツさんの家はここら辺のはずなんだけど……どこだろう?」

シユン達は食事を終えるとみんなをボールに戻しポケモンセンターを出て、決めていた通りにガイドブックを頼りにガントツの家を探して歩き、扉が続いている家の近くまで来た所で迷っている。

「マスター、前から来るあの女の子に聞いてみてはどうでしょうか?」

肩に乗るメロエツタがシユンの前から買い物籠を持って歩いて来る女の子にガント

ツの家を聞いてみてはどうかと言う。

「そうだね、ちよつと聞いてみるよ」

シユンはメロエツタの言う通り、前から歩いて来る女の子にガンテツの家を訪ねる。

「ごめんね、ちよつといいかな？この辺でガンテツさんの家つてどこにあるか聞きたいんだけど・・・」

「んっ!!」

シユンがガンテツさんの家の場所を女の子に聞くと、女の子は横の塀を指差す。

「あつ、此処がガンテツさんの家だったんだ。ありがとう！」

女の子にガンテツの家を教えてもらおうとシユンは塀の先にある門の所に行く。

「うちに、なんかようか？」

シユンが門にあるインターホンを押そうとした時、先ほどの女の子がシユンに声を掛ける。

「えっ!?!もしかしてキミつてガンテツさんの家の子？」

「孫のチエや！おじいちゃんになにか用なんか？」

「ぼくはシユンつて言うんだ、ガンテツさんにお願いがあつて来たんだけど・・・」

シユンが女の子にガンテツさんの家の子かと聞くと、ガンテツさんの家の女の子チエちゃんはおじいちゃんに何かようかと聞き、シユンも自分の名前を言つてガンテツさん

にお願いがあつて来たのだと伝える。

「ああ、そういうことかいな!ほな付いて来てや、おじいちゃんの所に案内するで!!」

ガンテツさんをお願いがあつて来たと言うシユンに、チエはいつものことのようにシユンをガンテツの所に案内すると言って門の扉を開けて入って行く:チエちゃんの後にはシユンは付いて行くと、奥の方から、カン、カンと何かを叩く音が聞こえてくる。

「この奥におじいちゃんのボールを作るための工房があるんや、シユンさんのお願いちゅうのはおじいちゃんにボングリの実のボールを作つてほしいんやろ?」

チエはシユンに部屋の奥にガンテツのボールを作る工房があることを説明し、シユンのガンテツにお願いしたいことはボールを作つてほしいということだろうと聞く。

「えっ、どうして分かつたの?」

「そんなの簡単や!シユンさんみたいにおじいちゃんにボールを作つてほしいって言うトレーナーがぎょうさん来るからや!」

シユンがチエにどうして分かつたのかと訪ねると、シユンのようにガンテツさんにボールを作つてほしいとお願いしに来るトレーナーがたくさん来るからだと言明する。

「そつか:それじゃボールを作つてもらふのは無理かな?」

「大丈夫だと思ふで、今日は他のトレーナーからのボール作りの依頼もないみたいやしな」

シユンがそれではボールを作つて貰うのは無理かな？と聞くと、チエは今日は他のトレーナーのボール作りの依頼もないから大丈夫と言つてガントツの居る工房に入る。

「おじいちゃん！お客さんやでえ〜!!」

チエちゃんが工房に入り、ガントツさんにお客さんが来たことを知らせる。

「おう、待たせたようやな！ちょうど頼まれていた分のボールが出来上がったところや！わしがボール職人のガントツや！ほんでわしに何か用か？」

チエちゃんに続いて工房に入るとそこには元氣ハツラツなおじいちゃんという言葉が似合うおじいさんの”ガントツさんが居てシユンに何の用なのかと聞いてくる。

どうやら他に依頼されていた分のボールを作つていて今、出来上がったようだ。

「はい、実はガントツさんが有名なボール職人さんだと聞いてボール作りのお願ひに来たんですが……」

シユンはガントツにボールを作つてほしいとお願いする。

「なるほど、そういうことかあ〜しかし、困つたのう……」

ガントツはシユンのボールを作つてほしいと言う頼みを聞いて、頭に手を置いて困つた顔をする。

「あの・無理そうでしたら別に……」

シユンはガントツの様子を見て、無理そうなら結構ですとガントツに言う。

「いや、そう言うことやないんや。ボールを作るのは構わないんやけどな、ちよつと困ったことがあつてな。」

「困ったことですか?それつて。」

ガンテツはシユンにボールを作るのは全然かまわないのだが、ちよつと困ったことが起きているらしく、シユンはガンテツにその理由を訪ねる。

「うむ・実は、大手のボールショップからボングリの実のボールの注文を受け取るんやけどな・粗方のボールは出来上がったんやけど青ボングリの実から出来るルアーボールがまだ出来てへんのや」

「そうだったんですか……あれつ?でも、どうしてまだルアーボールだけが出来てないんですか?」

シユンがその理由を訪ねると、大手のボールショップからボングリの実のボールの注文が来ているのだと説明し、粗方のボングリの実のボールが出来ているのだが、青ボングリの実から作られるルアーボールがまだ出来ていないのだとシユンに説明する。

ガンテツの説明を聞いたシユンはなぜ、ルアーボールだけが出来ていないのかと訪ねる。

「実は、ルアーボールの素になる青ボングリの実がある所の近くに河原があつての：そこにメスのマリルが住み着いておつてな。余程縄張り意識が強いのか、青ボングリの

実を採ろうと河原に近づいただけで攻撃してくるから青ボングリの実が採れずにルアーボールが作れないんや」

ガンテツはルアーボールの出来ない理由を説明する。ルアーボールの素となる青ボングリの実の木が生えている場所に河原があり、そこにメスのマリルが住み、縄張り意識が強いからか青ボングリの実を採ろうと近づくと攻撃されるため実を採る事が出来ずにルアーボールが作れないのだと説明する。

「それでルアーボールだけが作れずに困ったんや……」

「なるほど・そうでしたか！良かったらその青ボングリの実をぼくが採って来ましょうか？」

青ボングリの実が採れずに困っているという話を聞いてシユンは自分が青ボングリの実を採って来ると提案する。

「ホンマか!!ホンマに青ボングリの実を採って来てくれるんか!!」

「えっ、ええ(汗)……」

シユンが青ボングリの実を採って来てくれると言うと、ガンテツはそれを聞いて思わずシユンに迫る勢いで本当かと聞き、シユンはそのガンテツの様子に汗を流しながらその通りだと答える。

「それじゃよろしく頼むわ!!お礼にボングリの実のボールを用意しとくからよろしく頼



むで!!」

「ほんならうちが青ボングリの木のある河原まで案内するわ!!それじゃおじいちゃん、行つて来るわ」

「おう、それじゃよろしく頼むでえ〜!!」

チエちゃんが青ボングリの木のある河原まで案内すると行ってシユンと一緒に門から出て青ボングリの木のある場所まで向かう。ガンテツはお礼のボングリの実のボールを用意しとくと言ってシユンによりしく頼むと言ってシユンとチエを送り出す。

シユンはチエちゃんの案内に従つて青ボングリの実の木のある河原まで歩いて行く。「シユンさん、ほんまにおおきにな!おじいちゃん、青ボングリの実が採れなくてルアーボールが作れずに困つとつたんや」

「うん、どういたしまして。ガンテツさんにはボールを作ってもらうんだもの、これくらいは当たり前だよ」

青ボングリの実を採つて来てくれるシユンにチエがお礼を言い、シユンはどういたしましてと言う。チエの案内に従つて青ボングリの木がある河原まで向かっていると途中で赤い実のある木と桃色の実がある木が見えてくる。

「シユンさん!あれが赤ボングリの実でな!赤ボングリの実からはレベルボールが出来るんや、レベルボールは弱いポケモンをゲットするのに最適なんや、それであつちは桃

ボングリの実や！桃ボングリの実からはラブラブボール：このボールは同じポケモンの性別の違うポケモンに有効なんや！」

「そうなんだ・実によって効果が違うんだね・」

そしてシユンとチエは青ボングリの木がある河原まで歩いて行く：河原を目指して歩いていると他の色のボングリの木があり、チエが他のボングリの実から出来るボールの説明もしてくれた。

緑ボングリの実から出来るのはフレンドボール、ゲットしたポケモンがすぐなくなつて効果がなくなる。

黒ボングリの実から出来るのはヘビーボール、体重の重いポケモンほど捕まえやすくなる。

白ボングリの実から出来るのがスピードボール、素早いポケモンを捕まえやすくなる。

黄ボングリの実から出来るのはムーンボール、つきのいしで進化するポケモンを捕まえやすくなるボール。

「そして、最後が今から行く河原の近くにある青ボングリの実から出来るルアーボールや、ルアーボールはみずタイプのポケモンを捕まえるのに適したボールなんや！」

「本当にいろんな効果のあるボールが出来るんだね、そんなボールを作れるなんてガン

テツさんは本当に凄いなだね。」

「そうや!おじいちゃんは凄いやで!!」

チエからボングリから出来るボールの効果聞いて、ガンテツさんは本当に凄いとシユンが言うのと、チエは嬉しそうに笑って喜ぶ。

しばらく歩いてみると、シユンとチエの前方にあまり大きくない河原がありその近くに青ボングリの木が生えているのが見えて来た。

「見えて来たで!あれが青ボングリの実の木や!」

「あれが青ボングリの実の木か、ガンテツさんの言ってたマリルはどこに居るのかな?」  
チエが見えて来た青ボングリの木を指差してシユンに教える、シユンはガンテツさんの言っていたマリルを探す。

「それなあ、おじいちゃんが青ボングリの実を採ろうとすると」マリルが出て来て採るのを邪魔してくるんや」

「そうだったのか・でも今はマリルは居ないみたいだし今の内に青ボングリの実を採ろう!チエちゃんは此処に居てね」

ガンテツが青ボングリの実を採ろうとすると攻撃してくると言う話をチエから聞いたシユンは辺りにマリルの居ないことを確かめるとチエちゃんに此処に居るようと言って、今の内に青ボングリの実を採ろうと青ボングリの木に慎重に近づく。

シユンが青ボングリの実を採ろうと河原の近くを通ろうとしたその時、河原の中から  
”みずでつぼう”が放たれてシユンに迫る。

「シユンさん！危ない!!」

「っ!？」

チエの声で自分に”みずでつぼう”が迫っている事に：マサラタウンの森にほぼ毎日  
行っていた事で鍛えられた身体能力で飛び上がって”みずでつぼう”を交わす。シユン  
が交わしたのに気づいたのか河原からマリルが飛び出して来る。

「リル!!」

「危なかった：あれがマリルか：：」

もう少して自分に”みずでつぼう”が当たりそうになっていたら冷や汗をかきなが  
ら河原から出て来たマリルにポケモン図鑑を向ける。

【マリル：：みずねずみポケモン。尻尾の先には水よりも軽い油が詰まっているから、  
溺れることなく川を進める：：】

「どうやらあのマリルがガンテツさんの言ってた”マリルで間違いないみたいだね：」

「そうや、おじいちゃんが青ボングリの実を採ろうと近づくといつも攻撃して来るんや」  
シユンは河原に近づこうとした自分に攻撃して来たのを見てガンテツさんの言っ

いたマリルで間違いないことを確信し、チエちゃんもその通りだと言うように頷く。

「シユンさん気を付けてや、あのマリルは手強いで!前に他のトレーナーにあのマリルをどうにかしてほしいって頼んだんやけど、手持ちのポケモンがみんなやられちゃったんや」

前に青ボングリの実を採るためにあのマリルをどうにかしてほしいと他のトレーナーに頼んだ事があり、その時は全てのポケモンをやられてしまったらしく、あのマリルは手強いから気を付けてほしいとチエに忠告される。

「なるほど、分かったよチエちゃん!気を付けて戦うよ。頼むよ、フシギソウ!!」  
「ソウ!!」

シユンはマリルと戦うためにボールからフシギソウを出す。

「いくよフシギソウ!はっばカッターだ!」

「ソウ!!」

シユンの指示でフシギソウはマリルに”はっばカッターを放つ。

「リル!リ〜ル〜!!」

マリルはフシギソウの”はっばカッターを交わすと、マリルはフシギソウに”みずでっぼうを放つ。

「速い!フシギソウ、交わして”つるのムチだ!」

「ソウ!!」

マリルの“みずでつぼうを交わすと、今度は” つるのムチでマリルを攻撃する。

「リル!リル!リル!」

フシギソウの“ つるのムチを尻尾で弾くと、地面へと着地し転がってフシギソウに迫る。

「ソウ〜」

マリルの“ ころがる” がフシギソウを吹っ飛ばす。

「フシギソウ!あのマリル!」ころがる” も使えるのか!フシギソウ、大丈夫かい」

「ソウ!!」

マリルの“ ころがる” を受けて吹っ飛ばされたフシギソウは直ぐに立ち上がり頭を振ってシユンに大丈夫だと言うように頷く。

「なるほど手強いな!」だったなら、フシギソウ” ねむりごな” だ!!」

「ソウ!ソウ〜」

シユンはフシギソウに“ ねむりごなを指示し、背中の蕾から” ねむりごなを出してマリルを眠らせようとする。

「リル!リル!」

マリルは“ ねむりごな” を空中で回りながら” みずでつぼう” を放つことできき消

すと、マリルはフシギソウに”れいとうビームを放つ。

「ソウ〜!!」

「フシギソウ!!」

フシギソウに効果ばつぐんのマリルの”れいとうビームが直撃しフシギソウが吹っ飛ばされる。

「フシギソウ!大丈夫かいフシギソウ!」

「ソウ〜…:…:」

マリルの”れいとうビームが直撃したことで大ダメージを受けて戦闘不能となり: シュンはフシギソウに大丈夫かと声をかけると、フシギソウは元気のない様子で応える。

「ご苦労様:ゆつくり休んで。あのマリル、れいとうビームまで使えるなんて:自分の弱点に対応出来る技を身につけてる:あのマリルを倒すのは難しいな:」

シュンはマリルが自分の弱点に対応する技を身につけていることに驚き、これは一筋縄ではいかないと焦りの表情を見せる。

「シュンさん:…大丈夫でえつか:」

チエがその様子を見てシュンに不安そうに見ている。

「大丈夫だよチエちゃん!絶対に青ボングリの実を採ってみせるから。次はキミだ!頼

んだよゼニガメ!!」

「ゼニユ!!」

シユンはチエちゃんに絶対に青ボングリの実を持って帰ると約束すると、次はゼニガメをボールから出す。

「気を付けてゼニガメ!あのマリルは手強いよ」

「ゼニユ!!」

シユンがあの手強いマリルは手強いとゼニガメに忠告し、ゼニガメは頷く。

「いくよゼニガメ!みずでつぼう」だ!

「ゼニユ!!」

「リル!!」

「ゼニガメの”みずでつぼう”とマリルの”みずでつぼう”がぶつかり合い相殺される。

「くつ、威力は互角か・だったらゼニガメ!れいとうビームだ!!」

「ゼニユ!!」

「リル!リル!!」

シユンは今度はゼニガメに”れいとうビームを指示し、ゼニガメが”れいとうビームを放つとマリルも”れいとうビームを放ち、お互いの技を相殺させる。



「くっ! れいとうビームも互角か…: やっぱ強い!」

「リル! リル!」

マリルがウインクをするとそこから、ハートが大量に飛び出しゼニガメの回りを包むとゼニガメが一瞬ピンクに輝く。

「ゼニユ! ゼニユ!」

するとゼニガメの目がハートになりマリルを見てフラフラとしている。

「これってまさか・メロメロ!! あのマリル、メロメロも使えるのか!」

「ゼニユ…:」

ゼニガメはマリルの”メロメロを受けてメロメロ状態となりマリルに攻撃出来なくなる。

「リル! リル!!」

マリルはメロメロ状態で攻撃出来ないゼニガメに”ころがる”で攻撃する。

「ゼニユ…:」

「ゼニガメ!」

マリルの攻撃を受けてゼニガメは吹っ飛ばが立ち上がる。

「ゼニユ」

「くっ! ゼニガメ、みずでっぼうだ!」

「ゼニユ〜」

シユンはゼニガメに”みずでつぼうを指示するが”メロメロがとけずマリルを攻撃出来ない。

「リル！リ〜ル〜!!」

メロメロ状態で攻撃しにくくなっているゼニガメにマリルは”ころがる”で攻撃する。

「ゼニユ〜」

ゼニガメはメロメロ状態で避ける事が出来ずにまともに攻撃をくらい吹っ飛ぶ。

「くっ！メロメロがこんな厄介だったなんて……」

シユンはゼニガメがマリルの”メロメロを受けたこと”メロメロ状態となりマリルに攻撃する事も出来ず、マリルの攻撃を防ぐことも出来ないのを見て”メロメロという技の厄介さに苦い表情になる。

「ゼニユ？ゼニゼニ!!」

マリルの”ころがる”を受けたゼニガメは立ち上がると”ころがる”を受けたダメージと反動からか”メロメロ”がとけたのだった。

「今の攻撃で”メロメロ”がとけたのか！よし、ここから反撃だよゼニガメ！」

「ゼニユ！ゼニユ〜!!」

メロメロがとけたのを見たシユンはゼニガメにこれから反撃すると叫ぶとゼニガメもシユンの想いに応えて高らかに叫ぶ・するとゼニガメの体が光り輝く。

「シユンさんのゼニガメが光って!？」

「リル!？」

「これってまさか!？」

ゼニガメの体が輝いたのを見てチエは驚き、マリルも驚いて動きを止める。シユンはその様子を見て自分の中に見覚えのある光景が浮かぶ。

「カメル!!」

ゼニガメの体が光り輝いてその姿を変えていきゼニガメからその姿を新たな姿に変えた。

「やった、ゼニガメがカメルに進化した!!」

シユンはゼニガメがカメルに進化したことを喜びカメルにポケモン図鑑を向ける。

【カメル・・・かめポケモン。長生きのシンボルとされている。甲羅に苔が付いているのは特に長生きのカメルである・・・】

「よし、ゼニガメ・・・ううん、いくよカメル!!」

「カメル!!」

シユンは進化したカメールと一緒にマリルを倒そうとやる気全快で向き直る。

「リル!!」

自分に対して戦う姿勢を見ていたマリルはシユン達に警戒を露わにする。

「いくよカメール!! れいとうビームだ!」

「カメ〜!!」

「リル〜!!」

カメールはシユンの指示を受けてマリルに”れいとうビームを放ち、マリルもそれに對抗しようと”れいとうビームを放つ。

「リル!?! リル!!」

しかし先程とは違い：進化して力が増したためカメールの”れいとうビームはマリルの”れいとうビームを相殺しマリルに迫るがマリルはギリギリで交わす。

「すごい、進化したことでパワーが格段に上がっている：それだけじゃない：新しい技も覚えてる!」

カメールの”れいとうビームがマリルの”れいとうビームを相殺したのを見て、進化したことで技の威力が上がったことにシユンは驚き、さらにポケモン図鑑にカメールが新しい技を覚えたことが表示されているのを見て喜ぶ。

「カメール！ハイドロポンプだ!!」

シユンは進化したことで新たに覚えた技を指示し、カメールはマリルに”ハイドロポンプを放つ。

「リ〜ル〜!!」

マリルはカメールの”ハイドロポンプに対抗しようと”みずでつぼうを放つ：しかしカメールの段違いの技の威力にマリルの”みずでつぼうを相殺しマリルを吹っ飛ばす。

「リル〜：」

「凄いでシユンはん!!あのマリルを押ししてるで!!」

マリルが吹っ飛んだのを見たチエは、手強かったマリルがやられていることに喜ぶ。

「よし、今だカメール!!ロケットずつきだ!!」

「カメ!!カメ〜!!」

シユンは吹っ飛んだマリルに追撃の”ロケットずつき”を指示し、カメールは凄い勢いでマリルに突っ込みマリルを吹っ飛ばす。

「リル〜?!」

マリルはカメールの”ロケットずつきが直撃し地面に叩きつけられる：そして：

「リル〜：：：」

マリルはダメージの連続にひんし寸前となり倒れる。

「今だ、頼むよ・モンスターボール!!」

シユンは倒れたマリルにモンスターボールを投げて、ボールはマリルに当たるとマリルを吸い込み、数回揺れると、カチツと言う音とともに光り、マリルのゲット成功を知らせる。

「よし!マリル、ゲットだ・」

シユンはマリルをゲット出来たことに喜び、マリルのボールを手取る。

「やったなシユンはん!!あのマリルをゲットするなんて本当に凄いわ!!」

「ありがとうチエちゃん。マリルをゲット出来たのもカメールのおかげだよ:ありがとうカメール」

「カメ!!」

マリルをシユンがゲットしたのを見たチエは驚きながらも喜び、シユンはカメールのおかげでゲット出来たと言ってカメールを誉める。

「カメール!!これからもよろしくね」

「カメ!!」

進化したカメールにシユンが笑顔でこれからもよろしくと言うとカメールも笑顔で頷く。

「よしチエちゃん!!マリルもゲットした事だし、青ボングリの実を採ってガンテツさん

の所に戻ろう」

「そうやな!!よし、ウチが採っても良い実を選ぶからシユンさん採ってえな!」

シユンはチエの選んだ採っても大丈夫な青ボングリの実を採ってチエが持つて来たカゴに入れると、2人は元来た道に戻ってガンテツのもとへと採った青ボングリの実を持って行く。

「ただいまおじいちゃん!!」

チエはガンテツさんの家の玄関の扉を開けてガンテツさんに青ボングリの実を採つて来たことを知らせる。

「おう!!おかえりやチエ!シユンくん!ホンで青ボングリの実を採つてこれたんか?」

チエの声を聞いて2人が帰つて来たことに気づいたガンテツは玄関まで歩いて来る……そして”シユン達に青ボングリの実を採つてこれたかを訪ねる。

「うん!シユンさんのおかげでな!!ほら、必要な分の青ボングリの実を採つて来たで!!」  
ガンテツにそう聞かれると、チエはカゴに入った青ボングリの実をガンテツに見せる。

「オオウ!!ほんまや、ほんまに青ボングリの実や!これで注文されたルアーボールが作れるで!ほんまに感謝や!ほなシユンくん、これがお礼のボールや!」

カゴに入った青ボングリの実を見たガンテツはこれで注文されていたルアーボール

を作る事が出来ると喜びシユンに礼を言ううと、そのお礼にガンテツはシユンにボールの入った袋を渡す。

「これって!?!」

シユンがガンテツに貰った袋の中身を見ると、そこにはルアーボール以外のボングリの実から作られるボールが入っていた。

「おう！それは予め作つといたボングリのボールや！」

「でも、これって注文されていた分のボールなんじゃ…」

ガンテツは予め注文されて作っていた分のルアーボール以外のボングリの実をボールを3つずつ渡す。シユンは貰った袋の中のボールを見て、もしかして注文されたボールの分何じゃないかとガンテツに訪ねる。

「なあに、心配しなくても大丈夫や、期日までにはまだ時間があるしの、ルアーボールを含めて新しく作る時間は充分にあるんや！だから気にすることはないで！青ボングリの実を採つて来てもらつてほんま助かつたしの!!」

心配するシユンにガンテツは期日までまだ時間があり新しく作るから心配ないと言ひ、青ボングリの実を採つて来てくれた事を改めてお礼を言う。

「それと…これも持つていきや！」

そしてガンテツはポケットからルアーボールを一つ取り出してシユンに手渡す。



「ルアーボールまで：本当に良いんですか？」

「ああ：シユンくんが帰ってくんのを工房で待ってたらまたまた一つ残ってるのを見つけたんや！遠慮せずに持っていきや!!」

シユン達が帰ってくんのを工房で待ってたらまたまた一つ残ってるのを見つけたから遠慮せずに持っていくように言って渡す。

「そう言うことなら：有り難くいただきます。ありがとうございます」

「なあに、お礼は言うのはこっちの方や!!ほんまに助かったで!」

「シユンはん!!ほんまにありがとうな!!」

ガンテツとチエはシユンに改めてお礼を言う。

「いえ、ぼくもガンテツさんにボールを貰えたので：！それではぼくはそろそろ行きます。ガンテツさんもお仕事頑張って下さい!!チエちゃんも元気でね」

「そうか！ほな、元気でやるんやで!!」

「シユンさん!!元気でな！またヒワダタウンに来たら寄ってえな!!」

シユンはガンテツの頼みを聞いて青ボングリの実を探りに行き、ゼニガメがカメールに進化した事でマリルのゲットに成功し、青ボングリの実を探る事に成功しガンテツに青ボングリの実を届ける事が出来た。ガンテツの頼みを叶えるとシユンはガンテツとチエに別れを言って次のジムがある街コガネシティを目指して旅立つのであった。

## 第十四話 ウパーがいつぱい！あばれんぼうのワニノコ

ヒワダタウンに住む有名なボール職人であるガンテツにボングリのボールを作ってもらえるようお願いに来たシユンは、ガンテツの頼みで青ボングリの実を採りに河原へと向かうとそこに生息する野生のマリルが飛び出して来てシユン達を襲う。

野生のマリルの思わぬ強さに苦戦するもゼニガメがカメールへと進化し、マリルをゲットする事が出来たのだった。無事に青ボングリの実をガンテツへと届けてお礼にボングリで作ったボールを貰って、ガンテツと孫のチエに別れの挨拶をして次のジムのあるコガネシティへ向けて旅立ったのであった。

次のジムのある街：コガネシティを目指してヒワダタウンを出発したシユン達は現在、その途中にある山道を歩いていた。

「マスター、どうやらコガネシティまではまだだいぶ距離があるようです」

メロエツタがシユンの肩の上でガイドブックを見ながら、まだコガネシティまではだいぶ距離があると説明する。

「そっか：コガネシティまでまだそんなにあるのか。だいぶ歩いたし少し休憩しよう

か、メロエツタ、ディアンシー」

「そうですね。まだ道は長いようですし…」

「ええ、それがよろしいですわ」

まだコガネシティまで道が長いこともあり、シユン達は道の横で座って体力を休める。

シユン達はそこで軽く食事をしながら体を休めていると…シユン達の前に…。

「ウパー！」

「ん？」

休憩しているシユン達の前に、水色の体をしていて顔にヒレのような物が付いている小さいポケモンがシユン達の前に出て来る。

「このポケモンは？」

シユンは突然自分達の目の前に現れたポケモンにポケモン図鑑を向ける。

「ウパー…みずうおポケモン。地上を歩き回る時は、ぬるぬるした毒の粘膜で体の表面を覆っている…」

ポケモン図鑑から目の前のポケモン：ウパーのデータが表示される。

「へえ、ウパーって言うんだ。みず・じめんタイプか：だけどこの辺りには水辺も無いのどこから来たんだろう？」

ポケモン図鑑に表示されるウパーの情報を見たシユンはみずタイプのウパーがこんな水も無い場所に居る事に疑問を抱く。

「ウパツウパツ」

ウパーはシユンに近くに歩いて来ると楽しそうに飛び回っている。

「人に対してあまり警戒してないな……もしかしてトレーナーが居るのかな？」

ウパーが自分に対してまったく警戒することなく近付いている様子を見て、トレーナーが居るのではないかと考える。

「どうやらそうみたいですわね。いくらなつきやすい性格だとしても野生のポケモンでしたらここまで全く警戒せずに接近しないでしょう。トレーナーが居て人に馴れているということでしょう」

メロエツタもシユンの考えを聞いて、ウパーが警戒せずにいる理由を簡単にシユンに説明する。

「あら……この子の胸の模様……ハートの形をしていますわね。可愛いですわ！」

ディアンシーが目の前のウパーの胸にあるハートマークの模様を見て可愛いと言う。

「ほんとだね。図鑑に載ってるのと模様の形が違う……珍しいね」

ディアンシーがそう言うと、シユンもウパーを見て、胸の模様が図鑑とは違うのに気付き珍しい模様をしていると思う。

「ウパツウパツ!」

シユン達がウパーの胸の模様の違いを見ているとウパーが突然、飛び上がりながらシユン達から離れて行く。

「あれっ!どこに行くのかな?」

「分かりませんが付いて行ってみましょう。もしかしたら自分のトレーナーを探していて迷ったのかもしれないし、そうじゃなければ珍しい模様の形をしているのでゲットしてもいいかもしれません」

ウパーが離れて行くのを見たシユンはメロエッタの言う通りにウパーの跡を追い掛けていく:しばらくウパーの跡を付いて行ってみると、ピンク色に染まる屋根のある建物が見えて来る。

「なんだろう?あの建物は……」

「さあ?ですが可愛らしい外見をした建物ですね」

シユン達が見えて来た建物についていろんなことを思っていると……

「ウパツウパツ!ウパー?」

飛び跳ねながら進んでいたウパーが足を滑らせて横の険しい坂から真つ逆様に落ちる。

「危ない!!」

「マスター！」

シユンは落ちるウパーを助けるためにウパーの後を追い掛けて落ちて行く：途中でウパーを抱きかかえて、ウパーが傷つかないように両腕で包む。

「ぐうう……!!」

ウパーを掴む事は出来たがシユンはそのまま険しい坂の堅い岩に体を打ちつけながら転がり落ちていく。そのたびにシユンの体に激痛がはしる。

そして、険しい坂の下にある建物では……。

「はあくいゝみんな！今日も一日元気でいきましょうね」

下では青色の髪をした女性が居て何かの面倒を見ていると……。

……ドオンン!!……

「グツ!!」

「ツン！何?！」

女性が凄い音がしたことに驚いて振り向くと……

「ぐつ！ツウ……」

「ウパ！」

シユンは坂を転がり落ちながらもウパーを傷つけないように庇ったために背中を地面に強く打ちつけてしまう。

シユンは激痛に歯を食いしばって耐えていると、シユンの手からウパーが出て来る。

「まあ大変!」

シユンが落ちてきて驚いていた女性はシユンの手からウパーが出て来た事にさらに驚いてシユンの元に向かう。

「あのう・・しつかりして下さい。大丈夫ですか?」

女性はウパーを抱きかかえて、シユンに大丈夫かと訪ねる。

「はいッ・・何とか・・!」

シユンは痛みを堪えながら女性に大丈夫だと応える。

「わたし・・サナエと言います。この子はわたしのウパーなんですけど、もしかしてこの子があなたに何かご迷惑でも・・:~?」

ウパーを両手で抱く女性は名前をサナエだと名乗り、シユンが助けたウパーは自分のポケモンだと言って、何か迷惑をかけてしまったのではないかと申し訳なさそうに訪ねる。

「あつ、その・・:~」

シユンがあなたのウパーのせいで怪我をしたとはつきりと言いにくくどうしようかと迷っていると……

「マスター……!!大丈夫ですかあ……」

坂の上からメロエツタがディアンシーを抱えながら、シユンの元まで飛んで来る。

「あつ!メロエツタ、ディアンシー……」

「マスター!大丈夫ですか?」

「お怪我はありませんか?」

メロエツタとディアンシーはシユンの元まで来ると怪我はないかと心配して近づく。

「見たことないポケモン……それに人間の言葉を喋ってる!!」

女性はいきなり上から見たことのないうえに人間の言葉を話すポケモンが来たことに驚いて呆然としている。

「マスター!!お怪我をしていますわ!!」

「ちよつと!……そのあなた!マスターはそのウパーが坂から落ちるのを庇って怪我をしたんですよ。ぼうつとしてないで早く手当てする準備をして下さい!!」

ディアンシーはシユンが怪我をしている事に気づき、メロエツタは呆然としている女性にシユンが怪我をした訳を話し、早く手当てするように言う。

「まあ、そうだったのですか。大変!今、手当てしますのでこちらに来て下さい」



女性はメロエツタに言われて、シユンが怪我をしているのに気づき、驚いている場合ではないと：手当てするためにメロエツタ達と一緒にシユンを支えながら建物の方に行き、女性は建物の中から救急箱を持ってくると、強く地面に打ちつけた背中に薬を塗ると上に包帯を巻いて手当てをする。

「本当に申し訳ありません：わたしのウパーを助けるためにこんな怪我をさせてしまつて」

ウパーのトレーナー：サナエは怪我をしてまで自分のウパーを助けてくれたシユンに心の底から申し訳なさそうにお礼を言う。

「いえ・気にしないで下さい。怪我もそこまで酷いわけじゃないですし」

怪我をさせてしまったことを申し訳なさそうに謝るサナエにシユンは怪我もそこまで酷かったわけではないから気にしなくていいと言う。

「ハア・：まったくマスターは人が良すぎです!」

「フフフ。それがマスターの良いところですよ♪」

あれだけの怪我をしたにも関わらず気にしなくていいと言うシユンにメロエツタは人が良すぎると呆れる。しかしディアンシーはそこがシユンの良いところだと微笑む。

「アハハ・：ところでサナエさん。此処はどういう場所なんですか?」

メロエツタがシユンの人の良さに呆れて、ディアンシーはシユンの人の良さに微笑ん

でいるの見て、シユンは困ったように苦笑いする。そして”シユンは此処がどういう場所なのか気がになりサナエに訪ねる。

「ここはウパー専門の保育園なのよ。あつちを見てみて」

シユンはサナエに言われた方向に目を向けると、そこには池がありたくさんのウパーが楽しそうに泳いでいる。

「凄いな・ウパーでいっぱいだ」

「ウパツ！ウパウパ」

「ウパ」

「ウパウパア！」

「この辺りは元々ウパーの人氣が高いんだけど……この池の水がとてもウパーにあつていてとてもよく育つと言うので、ウパー達を預かっている内に保育園みたいになつちやたのよ」

サナエは抱いていたウパーを池に放すとウパーは嬉しそうに池の中を泳ぎ、サナエはそれを見ながらウパーの保育園が出来た理由をシユン達に説明する。

「そうなんですか・なんで水気の無いあんな所に居るのかと思つたらこういうことだったんですね」

シユンはサナエの説明を聞いて、水気のない山道にウパーがいたことに納得する。

きつと、サナエさんの目を盗んで保育園から抜け出してしまったんだろうなと…そう  
思つて池に居るウパー達を見ると…。

「「ウパーア〜!!」」

ウパー達はこつちを見てにつこりと笑顔を向ける。

「はは」

「フフフ、可愛いですね♪」

そのウパーの無邪気な笑顔を見たシユンは何だか心が和やかになり、思わず笑みを浮かべ、ディアンシーもウパー達の可愛い笑顔に微笑む。

「ウパーを見てるとなんだか心が癒されるでしょう」

「ええ、そうですね。とても…」

ウパーのほんわかとした笑顔を見てると心が安らいでいく気分になる。

そして池の中を無邪気に泳いでいるウパーを見てると…。

「さあ、みんなお遊戯の時間よ!」

サナエはタンバリンを持つと、お遊戯の時間だと言つてリズムよく叩き始める。

「「「ウパーア♪ウパーア♪ウパーア♪」」」

ウパー達もサナエの叩くタンバリンのリズムにのつて声を合わせて歌い始める。

「まあ♪とても可愛らしいですわ」

「ええ、とつても心が和むようです」

「ほんとだね。とても微笑ましくなるよ…」

ウパー達のお遊戯を見てディアンシーは可愛らしいと微笑み、メロエツタもウパーの愛らしさに心が和み、シユンも背中中の怪我の痛みも何だか薄れていくように思えるほどに微笑ましくなる。

「ウパー達にもご飯をあげたし、私達もお茶にしましょう。シユンくん達もぜひ一緒に」

サナエはウパー達にご飯をあげると、シートに座ってカップに紅茶を注ぎながらお茶にしようと言つてシユン達も誘う。

「ありがとうございます！いただきます」

シユン達はサナエの好意に甘えてご馳走になりクツキーを手に取り口に入れる。

「あつ！でもクツキーはわたしのお手製だから味の保証はないわよ」

「そんなことないですよ。サナエさん」

「とつても美味しいですわ」

「本当ですね。」

味の保証は出来ないと言うサナエにシユン達はそんな事はないと言つて、とても美味しいと応える。

「フフフ。みんなありがとう。ところでさつきから聞きたかったんだけど……」

「ん?なんですかサナエさん」

シユン達がクツキーがとても美味しいと言うのを聞いたサナエは嬉しそうに微笑む。

そして”シユン達にさつきから聞きたい事があるとシユン達に言う。

「そのポケモン達は全く見たこともないし、どうして人間の言葉を話せるのかしら?」

サナエはさつきから全く見たこともないポケモンが人間の言葉を話しているのが気になりどうしてなのかシユンに訪ねる。

「えと……それはですね……」

「何てことはありません:わたし達は特別なだけです。それとわたしはメロエツタです」

「ワタクシ達はマスターの事が気に入って一緒にいるのですわ。ちなみにワタクシはディアンシーと言いますわ」

サナエの質問にシユンはどういう風に答えればいいのかと困っていると、メロエツタがどうという事はなく只、自分達が特別なポケモンであるだけだと言って自分の名前を言い、ディアンシーはシユンの事が気に入ったから一緒にいるのだと言って自分も自己紹介する。

「はあ……そうなのですか?あら?ちよつとごめんね。はい、もしもしサナエですけど……」

メロエツタ達からの回答に不思議そうにしながらも納得すると、その時サナエの携帯に着信が入り電話に出る。

「クッキーもそうだけど、紅茶も美味しいね」

「はい、温かくてホツとします」

「とても良い香りで美味しいですわ」

シユン達は引き続きサナエの手作りクッキーと紅茶の美味しさを味わっていると：

「えっ！ホント!!」

「「ん？」」

電話に出たサナエの驚いた声に思わずサナエに視線を向ける。

「うん：うん：それでどうなの？分かったわ。いい、絶対に動いちゃダメよ。うん、それは何とかするわ。だからじっとしてて、いい！無理しちゃ駄目よ！」

サナエは電話をした相手にそう言って電話の着信を切る。

「困ったなあ：」

「あのう：どうしたんですか？」

サナエの様子が気になり：シユンはどうしたのかと声を掛ける。

「えっ！ああ：実は隣町に住む母が転んでその拍子に腰を痛めてしまったらしいの

……」

シユンにどうしたのかと聞かれると、サナエは母親が転んで腰を痛めてしまったのだと説明する。

「ええ!それで大丈夫なんですか?」

サナエの母親が腰を痛めたのを聞いたシユンは大丈夫なのかと訪ねる。

「ええ・本人は大丈夫だつて言い張つているんだけど・・・病院嫌いの母の事だからきつと痩せ我慢してるんじゃないかと思うの・」

「そうなんですか・」

「ええ・近所に様子を見に行つてくれる人も居ないから・わたしが行くしかないのよお。だけど、預かつてるあのウパー達を放つて行く訳にもいかないし・・・」

サナエは今すぐにでも腰を痛めた母親の元に行きたいが預かつているウパー達をほつといて行くわけにもいかなかったため・どうしようかと悩んでしまう。

「まいったなあ・・・どうしよう・」

サナエはどうすればいいかと困り悩んでいると・・・

「あのう・それでしたらばく達がサナエさんが帰つて来るまでウパー達の面倒を見てみましょうか?」

腰を痛めてしまった母親の看病に行きたいのに預かつてるウパー達がいるため行けずに困つてしまつているサナエを見たシユンは、良ければ自分がウパー達の面倒を見る

と提案する。

「えっ、本当!!でも、悪いわ：シユンくんはわたしのウパーを助けて怪我をさせてしまったのにそんなことまで頼むなんて：」

自分のウパーを助けて怪我をさせてしまったシユンにそんな個人的な事まで頼むのは悪いと思い遠慮する。

「そんな事は気にしなくていいですよサナエさん。それより早くお母さんの所に行つてあげて下さい」

「ウパー達の事はわたし達に任せなさい」

「責任を持つてお世話致しますわ」

遠慮するサナエにシユンは気にせず母親の元に行くように言い、メロエツタもデイアンシーもウパー達は自分達に任せて責任持つてお世話する事を約束する。

「シユンくん：みんな：ありがとう！じゃあお願いするわ」

ウパー達の面倒を見るというシユン達の好意に甘えることにしたサナエはシユン達に感謝しウパー達の事をお願いすると急いで母親のもとに行くための準備をして、バイクに乗る。

「ウパー達の世話の仕方はその手帳にメモしてあるわ」

「分かりました。このメモに書いてある通りにすればいいんですね」



シユンはサナエからウパー達の世話の仕方について書かれた手帳を受け取る。

「それじゃよろしくお願ひね、シユンくん」

「はい!任せて下さい」

「出来るだけ早く帰ってくるわね〜!」

そうしてシユンにウパー達の事を頼むとサナエはバイクのエンジンをいれて、出来るだけ早く帰るように言って走り出す。

「さてと・それじゃサナエさんが帰って来るまでウパー達の世話をしないと・」

シユンはサナエを見送るとウパー達を世話するためにサナエから預かったウパーの世話について書かれたメモを開く。

「凄いな・サナエさんのメモ。ウパーの事について詳しく書いてある。世話の仕方についても分かりやすいように纏めてある・サナエさん凄いな」

シユンがウパーの事について書かれたメモを見ながら、サナエさんのウパーについて分かりやすく書かれたメモに感心していると……。

「マスター!大変ですう〜!!」

「速く来て下さい!!」

ウパー達のいる池の方からウパー達を見ていたメロエッタとディアンシーの何か慌てたような声が聞こえて来る。

「どうしたの2人とも？」

メロエツタとディアンシーの自分を呼ぶ声を聞いたシユンは急いで池の方に向かうとそこには池の中からウパー達が出てバラバラにどこかに行こうとするのをメロエツタ達が必至に止めていた。

「マスター！わたくし達だけではこれだけたくさんいるウパー達を押さえ切れませんわ」

「エスパー技を使えば押さえられますが、預かってるウパー達にそんなことは出来ないですし：どうしますかマスター？」

ウパー達が無邪気にはしやぎながらどこかに行こうとするのを必至に止めるも自分達だけでは止められないとディアンシーは言い、預かってるウパー達に技を使うわけにもいかなと言つて、シユンにどうするかと聞く。

「そうだね。よし、出て来てみんな！」

どうするかと聞かれたシユンはポケットからボールを出して上に投げる。

「ソウ！」

「カメ！」

「ヒノ！」

「チコ！」

「レディー!」

「イト!」

ボールからフシギソウ達が出て来てシユン達の前に着地する。

「みんな!事情があつて、このウパー達の世話をする事になったんだ。手伝つてほしい」  
「チコ!」

チコリータが代表するように頷き、それに続いてみんなも頷く。

「ありがとうみんな!それじゃぼくはこのメモに書いてある通りにウパー達のおやつ  
準備をするから、それまでみんなは手分けしてウパー達がどこかに行かないように見  
いてくれるかい?」

「分かりましたマスター!それじゃみんな手伝つて下さい」

シユンはウパー達のおやつを作っている間にウパー達を見ているようにみんなに頼  
むとメロエツタは了解し、みんなにも手伝うようにお願いし、チコリータ達も頷いてウ  
パー達が保育園の外に出ないように見張る。

メロエツタ達にウパー達を見てもらっている間にシユンは保育園のキッチンへと向  
かい、サナエのメモに書いてあるおやつレシピ通りにウパー達のおやつを作り、ウ  
パー達のおやつ準備を終えて、外にいるウパー達の元へと持つて行く。シユンが家の  
外に出ると……。

「ワニヤ！ワニヤ！！」

「「「ウパーア~~~~」」」

「チコ！チコ！！チコ~~~~！！」

チコリータ達が何か騒いでることに気づき、ウパー達のいる池の方に視線を向けてみると、ウパー達のいる池に混じってウパーと似た体の色をした者が池の中にいるウパーに乱暴をしていた。それを見たチコリータがワニノコに怒っていた。

「あれって・もしかしてワニノコ？何でこんな所に・何にしても止めないとー」

シユンは一端ウパー達のおやつに乗ったおぼんを置くとメロエツタ達の所へと向かう。

「メロエツタ、いったいどうしたんだい？何でこんな所にワニノコが・それにチコリータ達も何であんなに怒ってるの？」

「あつ、マスター。実はわたし達がウパー達が外に行かないように見張っていたら、突然どこからかあのワニノコが出て来て、乱暴にも池の中のウパー達を退かして我が物顔で泳いでいるんです。で、乱暴されたウパー達はすっかり怯えてしまつてチコリータ達の後ろに集まっています。でっ！ウパー達に乱暴したことにチコリータ達が怒っているんです」

メロエツタはシユンが来たことに気付くと、ワニノコがここにいる訳とチコリータ達

が怒っている理由を説明する。

「なるほどね…あのワニノコは野生かな?とりあえず、あのワニノコに何でこんなことするのかを聞いてみようかな…」

「そうですね」

メロエツタから説明を受けたシユンは納得すると、ワニノコに何故こんな乱暴をするのかを訪ねるために池に居るワニノコへと近付く…すると…。

「ワニヤ!ワニヤ!」

池の中を泳いでいたワニノコはシユン達が近付いて来るのに気付くと、ワニノコはシユン達に向かって”みずでつぼう”を放った。

「なっ!!」

「危ない!」

シユンとメロエツタは自分達に放たれた”みずでつぼう”を間一髪避ける。

「なっ!いきなり何をするのですか!!」

ワニノコの突然の攻撃にディアンシーは何をするのかと怒る。

「ワニヤ!ワニヤ!」

「ここはオレの縄張りだ。近付くんじゃねえ!と、言ってますね」

メロエツタはワニノコの言っていることをシユンに翻訳する。

「うくん・ダメだよワニノコ。ここはウパー達の保育園だからね。そんなことしちゃ」  
ワニノコの言ってる事を聞いたシユンはやんわりとした言葉で何とかワニノコを説得しようと話し掛ける。

「ワニヤ!ワニヤ!」

ワニノコはシユンの言う事に耳を貸さずに、またもやシユン達に”みずでつぼう”を放った。

「やっぱりダメか：：仕方ないな。チコリータ、はつぱカッター!!」

「チコ!」

予想していた通りに自分の説得を無視して攻撃して来たワニノコの”みずでつぼう”をチコリータに”はつぱカッター”を指示して防いだ。

「ウパー達に乱暴してたのもそうだけど随分と荒っぽい性格みたいだね。メロエツタやカメール達はウパー達を避難させて守っていて」

「分かりましたマスター!」

「さあ、みんなこつちへ来て下さい」

「カメール!」

「ヒノ!」

メロエツタ達はシユンに言われた通りにウパー達を避難させて、カメール達はシユン

に言われた通りにウパー達の前に出てウパー達を守る。

「よし、いくよチコリータ!ワニノコを追い払うか:もしくはゲットするか:とりあえずウパー達を守ろう」

「チコ!」

シユンはメロエツタ達に指示し終わると、チコリータと一緒にワニノコと戦う。

「ワニヤ!ワニヤ!!」

シユンとチコリータが自分に立ち向かう様子を見たワニノコはチコリータに”みずでっぽう”を放つ。

「チコリータ!はっばカッター」だ」

「チコ!チコリー!!」

ワニノコの”みずでっぽう”をチコリータの”はっばカッター”で相殺させる。

「チコリータ!つるのムチ”でワニノコに攻撃だ!」

「チコ!チコ!」

シユンはチコリータに”つるのムチ”を指示し、チコリータは”つるのムチで”ワニノコに攻撃する。

「ワニヤ!ワニヤ!!」

自分に向かって来ている”つるのムチ”をワニノコは両手から竜のエネルギーで出

来た爪を出して” つるのムチ”を弾く。

「なっ！あれって”ドラゴンクロー”……あのワニノコ、珍しい技を覚えてるんだな……」

シユンはワニノコが”ドラゴンクロー”を使ったことに驚く。

「ワニヤー！」

「チコ〜」

ワニノコは”つるのムチ”を防ぐと、そのまま素早くチコリータへと接近して”ドラゴンクロー”で吹っ飛ばす。

「チコリータ！大丈夫かい」

「チコ〜」

”ドラゴンクロー”を受けて少し後退したチコリータにシユンは大丈夫かと聞くと、チコリータは頭をフルフルと振った後にシユンに伝えるように頷く。

「よし、チコリータ！はっばカッター”だ」

「チコ！チ〜コ〜！」

チコリータが大丈夫なのを確認したシユンはチコリータに”はっばカッター”を指し、チコリータはワニノコに”はっばカッター”を放つ。

「ワニヤー！ワニヤー！ワニヤー！」



「またもやワニノコは迫り来る」はっぱカッター”を”ドラゴンクロ”で弾き飛ばし攻撃を防ぐ。

「そこだ。続けて”つるのムチ!”」

「チ〜コ!」

ワニノコが”ドラゴンクロ”で”はっぱカッター”を防いでいる隙に”つるのムチ”でワニノコに攻撃する。

「ワニヤ!ワニヤ〜」

チコリータの”はっぱカッター”を防いだけりだつたため、避けられずにチコリータの”つるのムチ”が直撃する。

「よし、たたみかけるよチコリータ!そのまま”たいあたり”だ!!」

「チコ!チ〜コ!」

そしてそのまま”つるのムチ”を受けて吹っ飛んだワニノコに追撃の”たいあたり”をくらわせる。

「ワニヤ〜」

ワニノコはチコリータの”たいあたり”で吹っ飛ばされて地面を転がる。

「ワニヤ〜…ワニヤ!」

ワニノコはゆつくりと立ち上がると、きびすを返して保育園の塀を飛び越えて逃げ出

す。

「チコー！チコー」

「しまった：逃げられたか：：まあ良いか、とりあえず追い払えたから」

チコリータはワニノコが逃げたことに怒り、シユンはワニノコが逃げたことに焦りながらも取り合えず追い払えたことに安心する。

「大丈夫でしたかマスター、チコリータ！」

ワニノコとのバトルの様子を後ろで見ていたメロエツタがシユン達に大丈夫かと確認しにシユン達の元に来る。

「ああ、大丈夫だよ。何とか追い払えたようだし、とりあえずウパー達の様子を見ようか」

「ええ、そうですね」

「チコー！」

シユンはメロエツタに大丈夫だと応えると、とりあえずワニノコに乱暴されたウパー達の様子を見るために移動する。

その後、シユン達はチコリータの受けたダメージをキズぐすりで回復させた後でワニノコに乱暴されたウパー達を軽く治療すると、さつき作っていたウパー達のおやつを持ってウパー達に与えた。

ウパー達はワニノコに乱暴されたためか、ずっと怯えたままゆっくりとおやつを食べた後は池には入らずに建物の側で震えている。

シユンはヒノアラシとイトマルにウパー達を見ているようにお願いすると、シユン達はサナエのメモに書かれていた通りの作業をこなして数時間後、メモに書いてある一通りの作業を終わらせることが出来た。

「はあ、やっと終わった。それにしても作業している間もずっとウパー達、震えてたな。」

「ええ、よつぽど怖かったのでしようね。」

そうしてシユン達が怯えているウパー達の様子を見てみると……

「シユンくん！みんなあゝ！お待ちませ。今、帰ったわく」

母親の怪我の様子を見に行っていたサナエが帰って来る。

「あつ、サナエさん、お帰りなさい」

「ただいまシユンくん。みんな、ごめんね、お母さんの様子を見に行ってる間、ウパー達のお世話をしてもらって！」

サナエがバイクから降りてヘルメットを取ると、シユン達に母親の怪我の様子を見に行ってる間、ウパー達の世話をしてくれた事に対してお礼を言う。

「いえ、どうってことないですよ。それよりサナエさんのお母さんは大丈夫でしたか？」  
「ええ、お医者さんに見てもらったら転んだ拍子に軽く腰を痛めた程度だからしばらく寝ていれば大丈夫だって言われたわ」

シユンはサナエの母親の具合はどうだったかと訪ねると、軽く腰を痛めた程度だからしばらく寝ていれば大丈夫だと医者に言われた事を説明する。

「そうですか・大した事なくて良かったですね。でも、良かったんですか、サナエさん。お母さんの看病をしないで・」

「ありがとうシユンくん。母の心配をしてくれて！でも大丈夫よ・母には大人しく寝ているように言ったから・それに母も自分の事は気にせずに早く戻るように言われたしね・だからどうしようもない事があつたらまた電話するように言つて帰つて来たわ」

自分の母の事を心配してくれるシユンに感謝し、心配しなくても大丈夫だとシユンに理由を説明する。

「そうでしたか・それなら大丈夫そうですね。あつ、サナエさん。メモに書いてある通りの作業は粗方終わらせときましたよ」

「ありがとうシユンくん！ウパー達のお世話だけじゃなくて、そんなことまでさせてしまつて本当にごめんさいね」

シユンはサナエのメモに書かれていた作業内容を一通り完了したことをサナエに伝

えると、サナエはお礼を言った後で、ウパー達の世話の他に保育園の作業までさせてしまったことにたいして申し訳なきように謝る。

「いえ、大丈夫ですよ。作業の仕方わかりやすく書いてあったからそれほど大変じゃありませんでしたよ」

「本当にありがとねシユンくん、みんな。それで”ウパー達の様子はどうか?わたしが留守の間何か変わった事とかはなかった?”」

作業の仕方メモに分かりやすく書いてあったため、それほど大変ではなかったと伝え、サナエは改めてシユン達にお礼を言うと言自分が留守の間にウパー達に何か変わった事はなかったかと訪ねる。

「それが……」

シユンはサナエに聞かれるとシユンは困ったようにウパー達がいる方に視線を向ける。

「?……えっ!!」

シユンにつられてウパー達の方に視線を向ける……すると建物の近くでウパー達が身を震わせて怯えている光景がサナエの目に入る。

「ウパー達が怯えてる!シユンくん、いったい何があったの!」

ウパー達が震えているのを見たサナエは驚いてシユンに慌てて何があったのか説明

を求める。

「実は……」

自分がウパー達のおやつを作り終えてウパー達に持って行こうとした時に、ウパー達の悲鳴が聞こえて来たため慌てて池の方に行くと、そこには野生のワニノコが現れてウパー達に乱暴をして池から追い出し、自分の縄張りだと言うワニノコを止めようとチコリータと一緒に戦ったが：以外に手強く何とか追い払う事が出来た。

しかし、ウパー達はワニノコに乱暴された事がよほど怖かったのか池にも入らず今もずっと怯えている事を説明する。

「そうだったの……あのワニノコ、また此処に来たのね……」

シユンの話しを聞いたサナエは納得したように困った表情をしてため息を吐く。

「えと・サナエさんはあのワニノコについてご存知なんですか？」

シユンはサナエの様子を見て、あのワニノコについて何か知っているのではないかと訪ねる。

「ええ、いつの間にかこの辺りに住み着いていた野生のワニノコなの……ここの池の水が良いからか何度も来てはウパー達に乱暴して池から追い出すの。わたしも自分のウパーで戦って追い払おうとしたんだけど、あのワニノコ強くて全然適わないのよ。それ

である程度この池で過ごす自分の住処に帰って行くのよ。それで何度も乱暴されてわたしのウパーや他のウパー達もすっかり怯えちゃって、どうすれば良いのか分からないのよ。」

サナエはシユンに自分が知っているワニノコの事を説明する：ウパー達に乱暴するワニノコを何とかしようとする自分のウパーで戦い追い払おうとしたが：ワニノコは手強くて全然適わずに、乱暴され続けてウパー達はすっかりワニノコに怯えてしまいうすれば良いのか：サナエ自身も困り果てているらしい。

サナエの困った様子を見たシユンは何とかしてあげたいと思い、サナエにある提案をしようとサナエに聞く。

「サナエさん：あのワニノコって野生のポケモンなんですよね。」

「えっ！ええそうよ。トレーナーがいるなんて話し聞いた事ないからあのワニノコが野生のポケモンなのは間違いないわ！」

シユンがあこのワニノコが野生のポケモンなのかと聞くと、サナエがあこのワニノコが野生のポケモンなのは間違いない事を説明する。

「それでしたら今度、ワニノコが来たらぼくがあこのワニノコをゲットします！」

「えっ！ほんとシユンくん!!」

「ええ、ぼくがワニノコをゲットしてもいいですか？」

シユンがサナエに自分がワニノコをゲットする事を伝えるとサナエは驚いて、思わず本当かどうかと聞くサナエにシユンは自分がワニノコをゲットしていいかと訪ねる。

「もちろんよシユンくん！ぜひお願いするわ！」

「ええ、任せて下さい！」

シユンはワニノコをゲットする事を決めるとワニノコが再び現れるまでサナエと色々な話しをしながら待つ。

シユンはサナエにこれまで自分が旅してきた時に起きた出来事について話していた。

サナエは怯えているウパー達を1人1人：撫でて落ち着かせながら楽しそうにシユンの話しを聞いている。

「へえ：シユンくんはカントーのマサラタウンからジョウトリーグに挑戦するためにジョウト地方に来たのね」

「はい、リーグに挑戦するためにジョウトのジムバッジを集める旅をしています」

シユンはサナエにカントーのマサラタウンからジョウト地方に来た事、ジョウトリーグに挑戦するためにジョウト地方のジムに挑戦しバッジを集める旅をしている事を説明する。

「それにしても凄いですねサナエさん：サナエさんが撫でるだけであんなに怯えていたウパー達の震えが止まって落ち着いてる：」



これまでずっと怯えていたウパー達がサナエが頭を撫でるだけで震えが止まって笑顔でサナエに嬉しそうにすり寄るウパー達を見たシユンは驚いて目を丸くする。

「どうって事ないわ。わたしはこの子達のお世話を始めてからこの子達と過ごした時間は長いからこの子達もわたしを信頼してくれてる。わたしに取ってこの子達は自分の子供のようなものなのよ。ねっ♪」

「「ウパーア~~~~♪」」

凄いと言うシユンに対してサナエはどうって事はなく、只ウパー達と過ごした時間が長いから信頼されていて、サナエにとってウパー達は自分の子供のようなものだどウパー達に微笑むと、ウパー達もその通りだと言うように笑顔で鳴く。

「そうですか：サナエさんにとってウパー達は自分の子供のようになんて大切なんですか……」

ウパー達を自分の子供のように大切な存在だと言うサナエにシユンは俯きながら心の中にある思いが募る。

「?そう言えばシユンくんって何か夢や目標とかってあるの?」

サナエはシユンの様子に少し不思議がりながらもシユンに何か夢や目標などがあるかどうかを訪ねる。

「ぼくの夢・というか目標はポケモンリーグで優勝しチャンピオンになることですな」

サナエに夢や目標などを聞かれたシユンは、ポケモンリーグで優勝しチャンピオンになる事だと夢とも目標とも言える言い回しで応える。

「そうなんだ！シユンくんはチャンピオンを目指してるのね。シユンくんはチャンピオンになりたいと思っただけとかけてかかってあるの？」

シユンがチャンピオンを目指している事を聞いたサナエはチャンピオンになりたいと思っただけとかけてかきつかけなどはあるかシユンに訪ねる。

「……ぼくがチャンピオンになりたいと思っただけ……チャンピオンになったら有名になるでしょう……」

「えっ！ええそうね。チャンピオンになれば全地方でも有名になるわね……」

シユンがチャンピオンになりたいと思っただけが有名になるからだと聞くと、サナエは先程会ったばかりだがシユンの性格や人となりを感じて……その予想外の返答に以外そうにしながら頷く。

「……そうすれば……ぼくの事を捨てた両親が会いに来てくれるかもしれないから……」  
「えっ！それって……」

シユンのチャンピオンになりたい理由を聞いて以外そうにしていたサナエはシユンの次に呟いた一言で絶句する。

「……はい……マサラタウンにいた頃……まだ幼かったぼくは両親に捨てられました……」

「…そう…そうだったの…」

シユンから幼い頃に両親から捨てられた話しを聞いたサナエは悲痛そうな表情になる。

「…それからぼくの日常から色が抜け落ちてしまった…そんな風に感じました…そして両親に捨てられてからは周りの人達に助けられながら日々を過ごしていた時に2人と出会ったんです。2人と出会ったおかげで色の無かったぼくの日常が変わったんです。2人に出会えて本当に良かったよ!」

「フフツ!それはワタクシ達もそうですわマスター!」

「マスターに出会えたから毎日が楽しいんです!」

両親に捨てられた事でシユンの日常から色が抜け落ちてしまった…周りの人に助けられながら日々を過ごしていた時にメロエツタ達と出会い、それまでの日常が変わった。2人に出会えて本当に良かったと言うシユンに、ディアンシーとメロエツタもシユンに出会えて良かったと笑顔で応える。

シユン達の話しをサナエは真剣な表情で黙って聞いていた。

「それで今まで旅をしてきて、大切なポケモン達と一緒に頂点に…チャンピオンになるのが夢になったんです…それにチャンピオンになればぼくの両親が会いに来てくれるかもしれない…だから聞いてみたいんです…どうしてぼくの事を捨てたのかを…」

そうして旅をしてきたシユンはいつからか自分のポケモン達と一緒に頂点：チャンピオンを目指すのが夢となり、シユンがポケモンリーグのチャンピオンに成れば思惑がどうであれ：自分に会いに来てくれるかもしれない事を期待して両親にどうして自分を捨てたのかを聞きたいと話す。

「・あつーすいませんサナエさん。長々と個人的な話しを聞かせてしまつて：：」

シユンはサナエに個人的な話しを長々と聞かせてしまつた事を謝る。

「ううん・そんな事ないわ。シユンくんのお話しを聞けて良かったわ：でもどうしてそんな辛い事をわたしに話してくれたの？」

謝るシユンにサナエはそんな事はないと首を左右に振り、話しが聞けて良かったと言ふと同時にどうして先程会つたばかりの自分にそんな辛い出来事を話してくれたのかと疑問に思いシユンに訪ねる。

「・その・変に思われるかもしれませんが：ウパー達を優しく撫でるサナエさんを見ていると：まるでウパー達のお母さんに見えたんです：：それにサナエさんに甘えるようにすり寄るウパー達を見て、何だか羨ましいって思つてしまつたんです：、自分は母親つてどういう者か知らないから：：だからあんな話しをしてしまつたのかもしれないせん：：」

サナエに訪ねられたシユンは理由を話す：：ウパー達を優しく撫でるサナエを見て

いるとまるでウパー達の母親のように見えたと：そして”サナエに甘えるようにすり寄るウパー達を見ていて、母親の愛情を知らないシユンはそれが羨ましく見えてしまったのだと：。

「…シユンくん…」

「えっ?…」

シユンから理由を聞いたサナエは静かな声でシユンを呼ぶと、そつとシユンを自分の胸に抱き寄せる。

「なっ!」

「まあ!」

メロエツタとディアンシーもサナエの突然の行動に驚く。

「あの…：えつと…：サナエさん?」

「何も言わなくていいわシユンくん…：シユンくんの話しを聞いてわたし自身がこうしたいと思ったの…：わたしはシユンくんのお母さんじゃないから母親の愛情を教える事には出来ないけど…：こうして抱きしめてあげる事は出来るわ…：」

突然、抱き寄せられたシユンはサナエを見ると、サナエはシユンに何も言わなくていいと言つて、シユンの話しを聞いてサナエ自身がそうしてあげたいと思ひしたことだと…：母親の愛情を教える事は出来ないが…：こうして抱きしめてあげる事は出来

るとシユンに優しい笑顔を浮かべながら言う。

「どうかしら？シユンくん・・」

「とても温かいです・・それに何だか・・とても安心します・・心が安らぐようです・・」

シユンを胸に抱きしめながら頭を撫でてくれるサナエの優しさが・・とても温かくて・・不思議に安心出来て、心が安らぐようだと応える。

「・・ぼくは母親がどういふものか分からないけど・・母親に抱きしめられるのってこんな感じなのかなって・・思えます・・」

「そう・・それなら良かったわ♪」

母親がどういふ物なのかを知らないシユンであるが・・サナエに抱きしめられて感じる温もりはまるで母親が子供を愛するように抱き締められているような感じであるのかなと思ひ・・サナエはそれを聞いて・・それなら良かったと微笑む。

「・・もう大丈夫ですサナエさん。ありがとうございました！おかげで母親の温もりってどういふものなのか感じる事が出来ました・・」

「フフフ・・これくらいおやすいごようよ♪」

シユンはもう大丈夫だと言ってサナエの胸から離れて、サナエのおかげで知ることの出来なかつた母親の温もりというものを少しだけでも感じる事が出来た事に対してお礼を言うと、サナエはおやすいごようよと笑顔で応える。

※「サナエの他にシユンに母親にの温もりという物を教えてくれたのは只一人だけだったので、明確に母親の温もりという物を感じた事は少ないのである」

シユンとサナエがそんな事を話していると……

「ワニヤ~~~~!!」

坂の方からワニノコが飛び出してシユン達の所に現れる。

「ワニノコが出ましたわマスター!」

「うん、長く待ってたかいがあつたね」

ディアンシーがワニノコが出た事をシユンに伝えると、シユンも長い時間待ったかいがあつたと頷く。

「ワニヤ~~~~」

ワニノコも自分を先ほど追い詰めたシユン達を見つけて目を鋭くさせて敵意を発しながらシユン達を睨みつける。

「「ウパー~~~~」」

ウパー達はワニノコが出て来たからか怯えてしまい、ウパー達は1つに固まって身を震わせている。

「大丈夫よ・シユンくんがきつとワニノコをゲットしてくれるからね!」

サナエは震えるウパー達を優しく撫でながら大丈夫だと言ってウパー達を落ち着かせようとする。

「よし、出て来てチコリータ！」

「チコ!!」

シユンはボールからチコリータを出し、出て来たチコリータもやる気全快でワニノコを睨みつける。

「いくよチコリータ、ワニノコに向かって”はっばカッター”！」

「チ〜コ〜！」

シユンに指示でチコリータはワニノコに”はっばカッター”を放つ。

「ワニヤ!ワニヤ〜!!」

ワニノコは両手に竜のエネルギーの爪”ドラゴンクロー”で”はっばカッター”を弾き飛ばす。

「くっ!それならチコリータ、”つるのムチ”だ!」

「チコ!チ〜コ!」

チコリータはワニノコに向かって”つるのムチ”を伸ばして攻撃する。

「ワニヤ!!ワニヤ〜!!」

ワニノコはチコリータの”つるのムチ”に気づくが、交わす事が出来ずに”つるのム



チ”が直撃し吹っ飛ぶ。

「ワニヤワニヤ：ワニヤ〜!!」

”つるのムチ”を受けたワニノコはダメージで頭をフラフラと左右に揺らすと、チコリータに”みずでつぼう”を放つ。

「チコリータ!交わして、もう一度”はつぱカッター”だ!」

「チ〜コ〜!」

チコリータはシユンの指示通りに”みずでつぼう”を交わすと、ワニノコに向けて”はつぱカッター”を放つ。

「ワニヤ!ワ〜ニヤ〜!」

「またもやワニノコは”はつぱカッター”を交わすと口を大きく開けてチコリータに迫る。」

「くっ!かみつく”攻撃か。迎え撃てチコリータ、”たいあたり”だ!!」

「チコ!チコ〜!」

ワニノコの”かみつく”攻撃に対抗し、シユンは真つ向勝負で迎え撃つためにチコリータに”たいあたり”を指示し、チコリータもワニノコに向かつて行く。

「ワニヤ〜!」

「チコ〜!」

ワニノコの”かみつく”攻撃とチコリータの”たいあたり”がぶつかり合う・そして……。

「ワニヤ〜〜〜」

「チコ〜〜〜」

パワーは互角なのか両方とも吹っ飛んで地面を転がる。

「チコ〜〜」

「大丈夫、チコリータ！」

「チコ！」

地面を転がったチコリータはゆっくりと立ち上がり、シユンが大丈夫かと聞くと、もちろんだと言うように力強く頷く。

「よし、一気にいくよチコリータ! はっぱカッター」だ

「チコ! チコ、チ〜コ〜!」

チコリータの力強く頷くのを見たシユンもチコリータの闘志の強さを感じて、一気に決めようとチコリータに指示を出す。

「ワニヤ〜〜…ワニヤ! ワニヤ〜〜〜」

ワニノコは先程受けた攻撃によるダメージですぐに立ち上がる事が出来ずに必至に立ち上がるうとしている時にチコリータの攻撃に気づいたが遅く… はっぱカッター

”が直撃してワニノコを吹っ飛ばす。

「よし、やった!」

「チコ!」

「ワニノコはみずタイプ。効果はばつぐんですわ!」

「ええ、これで決まりですね」

チコリータの”はつぱカッター”がワニノコに直撃し、みずタイプのワニノコにチコリータの”はつぱカッター”は効果ばつぐんのため、ワニノコに大きなダメージを与えた事にシユンとチコリータは喜び、デイアンシーとメロエツタもこれで決まったと安心する。

「…ワニヤ…ワニヤ!」

しかし立て続けに攻撃を受けた上に効果ばつぐんの”はつぱカッター”を受けて、かなりのダメージを負った筈のワニノコが大きなダメージを受けた体でフラフラとしており、息を荒くしながらも必至に力を入れて立ち上がった後に高らかに雄叫びを上げる。

「なっ!あれだけのダメージを受けて立ち上がってくるなんて!」

「チコ!」

あれだけのダメージを受けたワニノコが立ち上がった事にシユンは驚き、ワニノコの

上げた高らかな雄叫びにチコリータは一瞬ビクツと、見を震わせる。

「なるほど・どうやら普通のワニノコとは違うようですね・」

「フフフ♪よつぽど頑張りやさんなんですね」

その様子を見ていたメロエツタとディアンシーはそれぞれ、ワニノコに対して思った事を話す。

「ディアンシー・そういう事ではないと思いますよ・」

　　楽しそうに微笑むディアンシーにメロエツタは呆れたように呟く。

「いや・ディアンシーの言う通りかもしれない・こうやって見ていて感じるよ。ワニノコの負けたくないっていう強い想いを・」

　　必死になって立ち上がったワニノコを見て：負けたくないという強い想いをシユンは感じていた：：そして立ち上がったワニノコもダメージで体力が残り僅かにも関わらず、息を上げながらもギラギラと目付きを鋭くしながらシユン達を睨みつけている。

「すごいよワニノコ・そんなにフラフラになっても全然闘志が衰えないなんて：：最初はサナエさんとウパー達のためにキミをゲットしようと思っていたけど：キミのその姿を見て、心の底からキミをゲットしたいって思ったよ。だから全力でいくよチコリータ!!」

「チコ〜〜!!」

度重なるダメージを受けて、フラフラになりながらも立ち上がったワニノコの全く闘志が衰えない姿を見たシユンは：最初はサナエやウパー達のためにワニノコをゲットしようとしていたが、ワニノコの負けたくないという強い想いとギラギラとした燃える闘志を見せるその姿を見て：シユンは心の底からワニノコを欲しゲツトする事を決めるとチコリータに全力でいくと言い、チコリータもそのシユンの強い想いを感じて闘志を燃え上がらせる。

「チコリータ！全力の”はっばカッター”だ!!」

「チコ！チ〜コ〜!」

シユンはこれで決めようとチコリータに全力で”はっばカッター”を撃つように指示すると、チコリータもありつけたけの力を込めてワニノコに向けて”はっばカッター”を放つ。

「ワニヤ！ワニヤ〜!」

ワニノコは自分に迫る”はっばカッター”を防ごうと、また両手に出した”ドラゴンクロー”で”はっばカッター”を弾き飛ばそうとする。

「ワニヤ!!」

だが：先程のように”ドラゴンクロー”で”はっばカッター”を弾き飛ばそうとしたが、さっきのはっばカッターとは威力が段違いのため：弾き飛ばす事が出来ずにワニ



まれる。

ワニノコがボールの中に入るとボールのスイッチが点滅しながら左右に揺れる：そして2、3回ボールが揺れた後にポンツと言う音が鳴るとワニノコのゲットが成功した事を告げる。

「やった!!やったよ。ワニノコ!ゲットだよ!!」

「チコ〜〜!」

シユンはワニノコがゲット出来た事が分かるとワニノコのボールを手に取って、ワニノコがゲット出来た事を喜び笑顔になり、チコリータも笑顔になって喜ぶ。

今、シユンの手持ちは6匹のためワニノコの入ったボールは小さくなり開かなくなる。

「やりましたね。マスター!ワニノコゲットおめでとうございます!」

「チコリータもよく頑張りましたね」

「チコ!!」

シユンがワニノコの入ったボールを手に取るとメロエツタとデイアンシーがやってきて、ワニノコのゲット成功と一緒に喜び、チコリータをよく頑張ったと誉めて、デイアンシーに誉められてチコリータも嬉しそうにする。

「ほんとだね。ありがとうチコリータ!よく頑張ってくれたね」

「チコリ〜♪」

シユンはワニノコとのバトルでよく頑張ったチコリータを誉めて、チコリータの頭を優しく撫でると、チコリータも気持ちよさそうにして撫でるシユンの手にスリ寄る。

「フフ！ やっぱりチコリータは甘えん坊さんですね」

「まったく！ マスターもあんまりチコリータを甘やかさないで下さいね。」

その様子を見ていたディアンシーはチコリータの変わらずシユンに甘えている様子を見て微笑み、メロエツタはシユンにチコリータをあんまり甘やかさないように注意する。

「はは…ありがとうチコリータ。ゆっくり休んでね」

「チコー！」

メロエツタにあまりチコリータを甘やかさないように言われたシユンは自分でも甘やかしてる事を自覚しているのか苦笑いを浮かべながら、チコリータをゆっくり休むように言つてモンスターボールに戻す。

「よし、これからよろしくねワニノコ！」

シユンはサナエとウパー達のためにワニノコをゲットする事を決めたが：ワニノコをゲットするためにバトルをすると”ワニノコの負けず嫌い”で一生懸命に立ち上がる姿を見たシユンは心の底からワニノコをゲットしたくなり：ワニノコをゲットする事



が出来ると、これからよろしくと：ワニノコの入ったボールに微笑む。

「シユンくん!」

「サナエさん!」

シユンがワニノコの入ったボールを見つめていた時、サナエがシユンの所に歩いて来る。

「本当にありがとうシユンくん!これでウパー達も安心して生活出来るわ」

シユンがワニノコをゲットしたおかげで、これからウパー達が安心して生活出来るようになったため、笑顔を浮かべてシユンにお礼を言う。

「いえ・サナエさんにはお世話になりましたし、これでウパー達が安心して暮らせるなら良かったです」

サナエに礼を言われたシユンは、自分もサナエにお世話になったと言い、ウパー達のためになったのなら良かったと安心し、ウパー達の方に視線を向ける。

「「ウパー!」!」

「「ウパツ!ウパツ!」」

ウパー達はワニノコがゲットされて居なくなつた事が分かると、さつきまで脅えていたのが嘘みたいに池の中へと入り元気に笑顔ではしゃいで泳いでいる。

そのウパー達の元気な様子を見てシユン達とサナエも微笑む。

「フフフ：みんな楽しそうに遊んでいますね」

「ええ、そうですね」

メロエツタとディアンシーも楽しそうに遊ぶウパー達を見て微笑む。

「さてと、ワニノコもゲット出来たし。サナエさん、ぼく達そろそろ出発します」

シユンはワニノコもゲット出来たので、サナエにそろそろ出発することを告げる。

「そう・もう行くのね。シユンくん、みんな。今日は本当に色々とありがとうね。また、近くに来たら寄ってね。わたしやウパー達みんな歓迎するわ」

「『ウパーア~~~~』」

「はい、分かりました。それじゃ行こつか、メロエツタ、ディアンシー」

「はい」

メロエツタはシユンの肩へと乗り、ディアンシーはシユンの横へと並ぶ。

「シユンくん。あなたがチャンピオンになれるよう応援するわ。そして、あなたが両親に会えるよう心から願っているわ。」

サナエはシユンがチャンピオンになれるように応援すると共にシユンが本当の両親に会えるようにと心から願っている事を伝える。

「・ありがとうございますサナエさん。それではお元気で！」

「さようなら」

「またお会いしましょう」

シユンは自分にとって感じた事のない親の温もりというものを感じさせてくれたサナエとウパー達に別れを告げるとコガネシティへと向かい歩き出したのだった。

## 第十五話 新タイプはがね！もうこうエアームド

コガネシテイへと向かう道の途中でウパーとそのトレーナーサナエと出会ったシユンは色々な事情からウパー達の面倒を見る事になり、ウパー達のお世話をしていると突如として野生のワニノコが現れてシユン達に襲いかかる。

サナエとウパー達の為にワニノコをゲットする事を決めたシユンはチコリータと共にワニノコに挑み…苦戦を強いるもチコリータの頑張りによってワニノコをゲットすることが出来たシユン達はサナエ達に別れを告げると再びコガネシテイへと向けて旅立つのであった。

「「「クエ〜〜〜……」」」

「はあ…：ようやく追い払えた。みんなお疲れ様！」

「ふう…：かなりしつこかったですね」

「ええ…：とりあえず一安心ですね」

「チコ〜〜〜」

「ヒノ〜…」

「カメ〜…」

「ソウ…ソウ…」

「レディ…」

「イト…」

コガネシテイを目指して旅をしていたシユン達はその途中にある森を歩いていた時にオニスズメ達の縄張りである木の近くを知らずに通ってしまった…縄張りに侵入して来たシユン達にオニスズメの群れが襲い掛かってきたのである。

シユンは全ての手持ちのポケモンを出してオニスズメ達に対抗して何とか追い払う事に成功したのだった。

しかしかなりの数だったため追い払うのに結構な体力を使ってしまった、全員疲れて息を上げている。

「イト…イト…イト!?!」

シユンがみんなをボールに戻そうとしたその時!!体力を消耗し息を整えていたイトマルの体が突如として光り始める。

「つつ!これってもしかして…」

「ええ…どうやら進化が始まったようですね」

シユンはその事に驚いて息を飲み、メロエツタはその様子を見て進化が始まった事を告げる。

チコリータ達もイトマルの進化が始まった様子を見て驚いている。

そして段々とイトマルを包む光が強くなると徐々にその姿が変わり出す。体格も大きくなり進化の光が消えるとそこにはイトマルの進化して大きく変わった姿が存在していた。

「アリッ！」

「おめでとうございますマスター。イトマルは無事にアリアドスへと進化しましたよ」  
「ありがとうメロエツタ。これがイトマルの進化系か……」

シユンはイトマルが無事に進化した事を祝うメロエツタに礼を言い、進化したイトマルへと向けてポケモン図鑑を向ける……すると図鑑にデータが表示される。

【アリアドス……あしながポケモン。イトマルの進化系、お尻からだけでなく、口からも糸を吐くことが出来る。その糸は丈夫で並大抵の力では切れない——】

ポケモン図鑑からイトマルの進化系であるアリアドスのデータが表示される。

「アリアドスか……うん。進化して新しい技も覚えたみたいだね。おめでとうアリアドス！……これからもよろしくね」

「アリッ！」

「チコ〜!」

「ヒノ〜!」

ポケモン図鑑でアリアドスを見ると進化して新しい技を覚えている事に気づき、進化して姿や力が変わっただけでなく新しい技まで覚えた事に嬉しくなり笑顔でアリアドスにこれからもよろしくと言うと、アリアドスも笑顔で頷く。

チコリータ達も進化したアリアドスの元に集まって楽しそうに話している。チコリータ達もイトマルが進化した事を喜び、アリアドス自身も進化した事が嬉しいのかニコニコしながらチコリータ達と話している。

「よし!それじゃみんな戻って」

シユンは少しの時間——チコリータ達の楽しそうに話す様子を見ていたが、ここに来てまたオニスズメ達が戻って来て襲われてはたまらないと考えて取りあえずみんなをモンスターボールに戻す。

「さて…それじゃオニスズメ達が戻って来ないとも限らないし先を急ごつか」

「そうですね。ここは彼らの縄張りでしたし、もしかしたら取り返そうともっと仲間を引き連れて戻って来るかもしれません」

「ええ…長居は無用ですわ。早く行きましょう」

シユン達はオニスズメ達が縄張りを取り戻そうと（勿論シユン達は奪った自覚はな

い)戻って来る可能性があるため万が一にも戻ってこない内に急いでその場から離れるとコガネシティを目指して歩いて行く。

「ねえ二人とも。この辺りにポケモンセンターってあったかな？出来ればチコリータ達のダメージを回復させてあげたいんだけど…」

シユンは先程のオニスズメ達と戦った事によつて受けたチコリータ達のダメージを回復させるためにポケモンセンターに行こうと何処にあるかとメロエツタ達に尋ねる。

「そうですね。この道をもう少し行つた先にポケモンセンターがあるみたいですよ」

シユンの肩に乗つたメロエツタがガイドブックを見て、この道の先にポケモンセンターがあることを伝える。

「なるほど。それじゃこのままポケモンセンターまで行こうか2人共」

「ええ」

「はいですわ」

シユン達はオニスズメ達に受けたダメージを回復させるために、このまま通つて来た道を進みポケモンセンターへと向かうのだった。

ポケモンセンターを目指して道を歩いているとしばらく進んだ先にポケモンセンターがあり到着したシユンは早速、チコリータ達のダメージを回復させるためにジョー



いさんにポケモンを預ける。

。そしてポケモン達が回復するのをメロエツタ達と喋りながらしばらく待っている。

【テンテン♪テテテン♪】

シユンのポケモン達の回復が完了した事を告げるチャイムがなり、シユンは受付のところにいくとジョーイさんがシユンのポケモン達の入った六つのモンスターボールを持って来る。

「お待たせしました。お預かりしたポケモンはみんな元気になりましたよ♪」

「ラツキイ〜♪」

「ありがとうございますジョーイさん」

「いえ／＼／＼／…」

「？」

シユンが笑顔でお礼を言うとジョーイさんは顔を赤くしてボールを渡し、シユンはジョーイさんの様子に首を傾げながらジョーイさんからボールを受け取りテーブルへと戻る。

「ジョーイさん顔を赤くしてたけど……どうしたんだらう？」

「相変わらずですねマスターは……それに鈍いところも……チコリータ達の回復が終わったようですね」

「マスターは相変わらず女性に人気ですね。フフ♪でもこれでコガネシテイを目指して出発出来ますね」

シユンがボールを受け取りに行つた時にジョーイさんが顔を赤くしていた事に不思議そうにしていると……シユンの相変わらずの様子に姿を消してテーブルに座つて会話をしながら待つていたメロエツタは呆れる。デイアンシーはシユンが女性にモテている様子に微笑み、これでポケモン達の回復も終わつてコガネシテイへと出発出来ると微笑む。

「?……うんそうだね。でもその前にやつて起きたいことがあるんだ」

メロエツタ達の言葉に頭に?を浮かべてコガネシテイへ向けて出発しようと言うメロエツタ達にシユンはポケモンセンターでやつて起きたいことがあると言つて待つように言う。

「やつて起きたいことですか?それはいい」

シユンから出発する前にやつておきたい事があると聞くと、メロエツタは不思議そうにしなからそれはいいって何なのかと訪ねる。

「うん。イトマルもアリアドスに進化したしゲットしたきりになってるマリルやワニノコを手持ちに加えて育てたいと思ってるんだ」

ゲットしたまま預けているマリルとワニノコを手持ちに加えて育てたいと自分の考えていた事をメロエッタ達に伝える。

「まあ♪それは良い考えですわ。まだその子達にはワタクシも自己紹介出来てませんし、ぜひお会いしたいですわ」

シユンの考えを聞いたディアンシーもワニノコ達に自己紹介したいと微笑み、シユンにぜひひとお願いする。

「マスターの言う通りですね。そろそろゲットしたワニノコ達と顔を合わせといた方が良いでしょう」

メロエッタもシユンの考えに賛成し、ワニノコ達との顔合わせを望む。

「しかしマスター。ジョウトでゲットしたポケモンだけでなく他の預けているポケモン達も小まめに入れ替えてバランスよく育てないといけませんよ」

「分かってるよメロエッタ。よし、ワニノコとマリルを手持ちに加えて出発しよう」

「はい」

「ですわ」

メロエッタにジョウト地方で捕まえたポケモンだけでなく、現在預けているポケモン

達も小まめに手持ちと入れ替えて育てないといけないと注意され、シユンはメロエツタの忠告に分かっていると返事すると、ワニノコとマリルを手持ちに加えて出発すると言い、メロエツタ達も応えてテーブルから立つとワニノコ達を手持ちへと加えるためにパソコンの所へと向かった。

シユンはパソコンの中にあるテレビ電話でオーキド博士へと連絡し、ワニノコとマリルを手持ちのポケモンと入れ替えてもらうようお願いします。

オーキド博士はシユンの現状を聞いた後で快く承諾しワニノコとマリルの入ったボールを送り、シユンはアリアドスとカメールに一時的に預ける事を説明しカメール達も納得した上でボールに入れて送る――。無事にワニノコとマリルの入ったボールが送られて来る。

ワニノコ達を送ってもらった後でオーキド博士と軽く話しをしてオーキド博士への電話を切った後でポケモンセンターを出発し少し離れた辺りの森のところではチコリータ達をボールから出す。

「みんな。今からみんなに新しくゲットした仲間達を紹介するね」

「チコ！」

「ヒノ！」

「レディー!」

「ソウ!」

チコリータ達に新しくゲットした仲間を紹介すると言うと、チコリータ達も了解と言うように頷く。

「メロエッタとディアンシーもいいかい?」

「はいマスター」

「フフフ。楽しみですわ」

シユンはメロエッタとディアンシーにも了解を取ると、二つのモンスターボールを上に向かって投げる。

「出て来て…マリル、ワニノコ!」

「リル!」

「ワニヤ〜!」

ボールからマリルとワニノコが出てくるとマリルとワニノコはシユン達の前に着地する。

「リル?リル〜!」

「ワニヤ?ワニヤ…」

ボールから出て来たマリルはキョロキョロと辺りを見回した後でシユン達の方に視

線を向けると警戒するように唸り、ワニノコは自分を倒したシユン達が目の前にいることと一瞬驚くもすぐに落ち着きシユン達の次の行動を待つ。

「ぼくはシユンって言うんだ。これからよろしくね。マリル、ワニノコ」

警戒するマリルの様子を見て苦笑しながらもシユンは自分の名を言い、これからよろしくと言ってマリルとワニノコに近づく。

「リル〜〜!!」

シユンが段々と近づくとマリルはさらに警戒心をむき出しにして唸り、シユンを威嚇する。

「えつと…マリル…。そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。ぼくはキミのトレーナーだからね。これから一緒に頑張ろうね」

自分に敵意をむき出しにするマリルを見て苦笑しながらもマリルの警戒を解こうと笑顔でゆっくり近づいて、これから一緒に頑張ろうと言ってマリルの頭を優しく撫でる。

「!?…リル／＼／＼／＼リル!リル!」

警戒していたマリルはシユンに頭に手を置かれて一瞬ビクツとするも優しく撫でられて気持ち良くなり、シユンの手に擦り寄るが…しばらくしてハツとなりそっぽを向く。

「はは…。ワニノコもこれからよろしくね。一緒に頑張つて強くなろう!」

「……ワニヤ!」

マリルのその様子に苦笑しながらも、ワニノコにもよろしくと…一緒に頑張つて強くなろうと言ひ、ワニノコもしばらくシユンをジツと見た後で頷く。

「よろしくね二人とも。それと二人に紹介するね。みんな!」

「チョコ!」

「ヒノ!」

「ソウ!」

「レディ!」

シユンはマリルとワニノコにチョコリータ達を紹介しようと呼ぶとチョコリータ達がシユンの前に来る。

「マリル、ワニノコ。みんなと仲良くしてね。みんなも新しく仲間になった2人をよろしくね」

「ヒノ!」

「レディ!」

「ソウ!」

「…チョコ…!」

ヒノアラシ達はマリルとワニノコに元気よくこれからよろしくと挨拶するが…チコリータは保育園でウパー達に乱暴していた件を思いだし、マリルには普通に挨拶するがワニノコに対しては不機嫌そうにそっぽを向きながら言う。

「…リル／＼／＼／＼」

「…ワニヤー！」

みんなに挨拶されるとマリルはそっぽを向いて頬を少し赤くしながら不機嫌そうに返事する。しかし内心ではみんなに笑顔で受け入れられて嬉しいようだ…少し口元から笑みが漏れている…どうやらこのマリルは少し意地っぱりな性格のようだ。

そしてワニノコはチコリータの無愛想な態度も気にせず普通に挨拶し終える。

「うん！チコリータ達の自己紹介も終わったし、次はこの2人を紹介するね」

「リル？」

「ワニヤ？」

チコリータ達がワニノコ達に自己紹介し終えるのを見たシユンは次に2人の事をマリル達に紹介する。マリルとワニノコはチコリータ達以外なのにシユンが2人を紹介すると言ったため頭の上に？を浮かべる。

「はじめまして。わたしはメロエツタ。よろしく」

「フフフ♪わたくしはディアンシーです。2人ともこれからよろしくお願いしますわ」



シユンの肩ごしからメロエツタが……シユンの後ろからディアンシーが出てきてマリル達に自己紹介する。

「リル!!」

「ワニャ!!」

突然 シユンの後ろから姿を現したメロエツタとディアンシーに驚く。

「リル……リル!」

「ワニャ〜!」

驚いていたマリルとワニノコだったが……気を取り直してメロエツタとディアンシーにもよろしくと挨拶する。

「さてと……取り合えずこれで新たに入ったマリルとワニノコの自己紹介も終わったし……もうちよつとしたらコガネシティに向かうか。でもその前に」

みんなにマリルとワニノコの自己紹介し終わると、コガネシティへと向かう準備をする前にシユンはリュックからある物を取り出す。

「さつきポケモンセンターに寄った時にジョーイさんからクツキー貰ったからみんなで食べよつか!」

先程、ポケモンセンターにポケモンの回復と入れ替えのために寄った時にジョーイさんから貰ったクツキーの入った袋を取り出す。

「まあ〜！美味しそうですわね♪」

「フフフ…ぜひ いただきます」

「ヒノ!!」

「チコ!!」

「レディ!!」

「ソウ!!」

シユンがジョーイさんから貰ったクッキーを出すと、メロエツタ達は美味しそうなクッキーを見て喜ぶ。シユンは袋からクッキーを取り出して1枚ずつメロエツタ達に渡していく。

「はい。ワニノコ」

「…ワニヤ!」

シユンはワニノコにクッキーを渡し、ワニノコも少し口元に笑みを浮かべてクッキーを受け取る。

「はい。マリルも!」

「……リル!」

シユンはマリルにもクッキーを渡し、マリルもそっぽを向きながらも受け取る。どうやらまだシユン達の事を警戒しているようだ。

「あはは…それじゃクッキーを食べよっか!」

シユンがそう言うのとみんなは受け取ったクッキーを食べる。

「まあ…ちようど良い甘さでとても美味しいですわ」

「ええ…そうですね。香ばしくて美味しいです」

「ヒノ!」

「チコ!」

「レデイ!」

「ソウ!」

「そうだね。本当に美味しい!」

ジョーイさんから貰ったクッキーはとても美味しいためみんな喜んで食べている。

香ばしくほんのりと甘いためメロエツタとデイアンシーも笑顔で食べる。

実はシユン達が寄ったポケモンセンターに勤務するジョーイさんはお菓子作りを趣味としていてポケモンセンターに来るトレーナー達に作ったお菓子を配っているそうだ。そこでシユン達はちようどお菓子を作っていた日にポケモンセンターへと来たためシユンもクッキーを貰う事が出来たのだ。

「ワニヤ…ワニヤ!?!ワニヤワニヤ♪」

ワニノコもみんながクッキーを美味しくそうに食べる様子を見て、恐る恐るクッキーを

口に入れるとその美味しさに驚いて思わず飛び上がる。

「…リル…リル!?リルリル♪」

ワニノコはその様子を見たマリルもクッキーを一口かじるとその美味しさに驚いた後に勢いよく食べ始める。

「ワニヤ!!」

「リル!!」

そして最初に貰ったクッキーを食べ終えたワニノコとマリルはまたその美味しいクッキーを食べたいのか、勢いよくクッキーの入った袋を持つシユンの前へと来ておかわりをお願いして来る。

「ハハツ…。そんな慌てなくてもクッキーはまだあるよ。はい。ワニノコ、マリル」

ワニノコとマリルの様子に可笑しくて笑みを浮かべ、ワニノコとマリルに2枚目のクッキーを渡す。

「ワニヤ〜!」

「リル〜!」

シユンから2枚目のクッキーを貰ったワニノコとマリルは嬉しくて目をキラキラとさせながらワニノコはクッキーを食べる。

「リ〜ル〜!」

マリルも貰ったクッキーを食べようとしたその時――。

「エア~~~~ツツツ!」

「リル!リルウ~~~~」

クッキーを口に入れようとしていたマリルを吹き飛ばした者は、マリルからクッキーを奪い取るとそのまま飛んで行ってしまふ。

「リル!リル~~~~」

吹っ飛ばされたマリルは起き上がると、自分を吹っ飛ばしてクッキーを奪った事に怒りだしてそのまま飛んで行った者の後を追い掛けて行く。

「あつ!ちよつと待ってマリル!」

シユンの止める声も聞かずにマリルはあつという間にシユン達の前から消えるように先へと行ってしまった。

「行っちゃった…。急いで追いかけないと!みんな一端戻って!」

シユンはマリルを追いかけるためにチコリータ達を一端モンスターボールへと戻し、リュックを背負う。

「2人とも行くよ。マリルを追いかけるんだ」

「はい!行きましょう」

「ええ、そうですね(あれはもしかすると)」

シユンは2人に急いで追いかけるよと言うと2人も頷いてマリルの後を追い掛けて走り出す。マリルの後を追いながらメロエツタはマリルを吹き飛ばした者について心当たりがあるのか頭の中で考える。

シユン達がいざばらくマリルの後を追って走っていると前にマリルの姿が見えてくる。

「リ〜ル〜!!」

マリルは自分の前を飛ぶ者に向かって「みずでっぼう」を撃って攻撃するが…その者は素早く飛んでいるため全く当たっていない。

「リル〜・リル〜・リル〜!!」

自分の攻撃が全く当たらない様子にさらに怒ったマリルは連続で みずでっぼうを放つ。しかしまたもや素早い動きで交わされてしまう。

「やっど追い着いた。マリル!ちよつと待って!」

「リル!」

シユンはマリルとの距離を積めてマリルを止めようとするが マリルはシユンの手を弾くと再びその者の後を追い掛ける。

「マリル!まつたくしようがないな…」

「仕方ありません…。マリルに付いて行きましょう」

そうしてしばらく飛ぶ者の後をマリルと一緒に追い掛けていると…飛んでいた者は

シユン達の前方にある大きな木の枝に止まって羽をたたむ。

「リル〜!」

「やつと止まった…あれって確か……」

マリルは怒りを剥き出しにして唸り、シユンはマリルのクツキーを奪った者の姿を見てどこかで見たようなポケモン……まるで全身を鎧で包んでいるような感じで鋭く尖ったクチバシに鋭い目をしている。

シユンはポケモン図鑑を手に取ると前にいるポケモンへと向ける。

「エアームド……よろいどりポケモン。全身を鎧のような堅い体に覆われている。丈夫な羽は重そうだが骨の中は空洞で軽く、自由に大空を飛び回る事が出来る——」

ポケモン図鑑から目の前の木に止まっているポケモン：エアームドについてのデータが表示される。

「やっぱりエアームドか……最近発見されたっていう 新タイプの はがねタイプを持つポケモン……」

シユンは見覚えのあるそのポケモンがエアームドである事に気づく。前に呼んだポケモンの本で最近 発見された新タイプの はがねタイプについての考察が載っており……そこにエアームドの事も載っていたのである。

知識としては知っていたが 直接見るのは初めてのシユンはポケモン図鑑のエアームド

ムドのデータの項目を確認する。

【エアームド…はがね・ひこうタイプ…】

ポケモン図鑑にはエアームドのタイプのデータが流れる。

「やはりマリルからクツキーを奪ったのはエアームドでしたか。あの鋼鉄で包んだような姿を見てもしやとは思っていましたが…」

エアームドのデータを見ているシユンの横にメロエツタが来て、最初にエアームドの姿を見た時にある程度予想していたらしくやはり自分の考えていた通りだと納得する。

「メロエツタはエアームドを見たことあるの？ ぼくは初めて見たよ」

「ええ。エアームドは人間の間では最近発見されたようですが…ポケモンであるわたし達に取ってはずっと前から知っています。」

はがねタイプの特徴は防御の高いポケモンが多く、いわ・こおりタイプに有効で、どくタイプの技は全く受け付けません。しかしその反面…ほのお・かくとう・じめんタイプとは相性が悪い。因みに はがねタイプの事もわたし達の間では昔から知っていますよ」

シユンがメロエツタにエアームドを見たことあるのか尋ねると…メロエツタは頷いた後でエアームドと新タイプの はがねタイプの事について詳しく説明してくれる。しかしポケモン達の間ではとつくに存在していたということも教えられる。



「そっか。はがねタイプのエアームド…ゲットしてみようかな」

メロエッタの話しを聞いてシユンはエアームドをゲットを考えていると――。

「エ〜アツ!」

「リル〜?!」

エアームドが口に咥えていたマリルから奪ったクツキーをパクツと一口で食べてしまった。それを見たマリルは自分のクツキーが食べられてしまった事にシヨックを受ける。

「エア〜〜!」

「リル〜!リル〜?!」

エアームドが美味しそうにクツキーを食べているのを見たマリルは怒りが頂点に達してエアームドに向かって”みずでっぼう”を放つ。

「エア!エア〜〜!」

エアームドは自分に向かって来る”みずでっぼう”に気づいて枝から飛び立って交わす。

「エア〜!!」

エアームドは自分に攻撃してきたマリルに怒り、敵意の眼差しで睨みつける。

「リ〜ル〜!!」

マリルも怒りの籠った眼差しでエアームドを睨みつけている。

「マリルもやる気みたいだし、マリルと一緒に初バトルも兼ねてエアームドをゲットしよう。メロエツタとディアンシーは下がって！」

「はい」

「わかりましたわ」

マリルがエアームドに敵意を剥き出しにしているのを見て、シユンは丁度良いからマリルとの初バトルも兼ねて、初めて出会ったエアームドもゲット出来るとメロエツタ達を下がらせてマリルと一緒にエアームドに視線を向ける。

「行くよマリル! みずでっぼう」

「リル…リル!」

シユンはマリルに”みずでっぼう”を指示するが、マリルは聞かずに”ころがる”攻撃でエアームドへと突っ込んで行く。

「ちよつとマリル!」

「マスターの指示を無視するなんて後で教育が必要ですね…」

「まあまあ…。落ち着いてくださいメロエツタ。マリルはマスターに会ったばかりでまだ慣れていないだけですわ…」

自分の指示を無視して攻撃するマリルにシユンは慌て、シユンの指示を無視するマリ

ルにメロエツタは怒り、そんなメロエツタをディアンシーが宥める。

「エア!エア!」

”ころがる”で向かって来るマリルにエアームドは翼を硬質化させて向かって来るマリルを弾き飛ばす。

「リル〜!」

「マリル!!」

シユンは弾き飛ばされたマリルをしつかりと受け止める。

「大丈夫…マリル?」

「リル…:…リル!リルリル!!」

「ちよ!落ち着いてマリル!あの技はもしかして…」

シユンはマリルに大丈夫かと聞くと、マリルは頭をフルフルと振った後でハツとすると、シユンの腕から抜け出してエアームドに向かおうとする。そんなマリルにシユンは落ち着くように言って、今エアームドが繰り出した技を見て思い当たる技の名が浮かぶ。

「あの技は“はがねのつばさ”ですね。はがねタイプの技でひこうタイプのポケモンなどが使う事が出来ず」

メロエツタからエアームドが繰り出した技“はがねのつばさ”について説明してく

れる。

「やっぱり…要注意だね…」

「リルリル！リル！」

メロエツタの言葉にシユンは「はがねのつばき」に注意しようと身構えた時に、シユンの腕の中にいたマリルが力を入れてシユンの腕からすぽと抜け出る。

「マリル！」

「リル〜！」

シユンの腕から抜け出したマリルはエアームドへと向かって「みずでつぼう」を放つ。

「エア〜！」

エアームドは素早い動きで飛び回り「みずでつぼう」を交わすと、空中で旋回してマリルへと急接近する。

「エア〜！エアエアエア！！」

「エアームドの”みだれづき”だ。マリル交わして」

「リル!?!リル〜」

マリルへと急接近したエアームドはマリルに連続で鋭いクチバシを突き出して攻撃する”みだれづき”を繰り返す。エアームドが攻撃するのを見たシユンはマリルに交

わすように指示し、マリルも必至に”みだれづき”を交わす。しかし……。

「リル〜!」

「マリル!」

「リ〜ル〜!」

「エア〜」

交わしきれずに”みだれづき”が命中する。しかし攻撃を受けながらもマリルは”みずでつぼう”を放ち、至近距離で”みずでつぼう”を受けたエアームドは吹っ飛びながらも何とか翼を羽ばたかせて空中で体制を立て直す。

「エア〜!」

エアームドはダメージを受けた事でさらに怒りを強くしてマリルとシユンを睨みつける。

「リル…リル〜!」

「落ち着いてマリル。ぼくの指示をちゃんと聞くんのだ」

マリルも負けずにエアームドを怒りの眼差しで睨みつけ…その様子を見たシユンは落ち着いてちゃんと自分の指示を聞くように言う。

「行くよマリル!”メロメロ”だ」

「…リル…リ〜ル♥!」

シユンが メロメロの指示を出すと、マリルは一瞬考えて渋々ながらシユンの指示通りエアームドに”メロメロ”を放つ。

「エア？ エアッ！ エア〜♥♥／／／／！」

マリルがパチツとウインクするとそこからハートがたくさん出てきてエアームドの周りを囲むとエアームドへ命中する。するとエアームドは目をハートにしてマリルへメロメロになり、メロメロ状態で攻撃しづらくなる。

「よし、成功だマリル。次は”みずでっぼう”で攻撃だ」

「リル…リ〜ル〜！」

”メロメロ”が効いたのを見たシユンはチャンスとばかりにマリルに次の指示を出し、マリルは取り合えずシユンの指示に従って”みずでっぼう”をエアームドへと放つ。

「エア〜」

エアームドは”みずでっぼう”が直撃し、”みずでっぼう”を受けながら後ろの木にぶつかって止まる。

「エア〜♥／／／／！」

”みずでっぼう”で吹っ飛ばされたエアームドは木に激突し大きなダメージを受けたが、まだメロメロ状態が続いているようだ。

「よし…そろそろ良いかな?」

シユンはエアームドの状態を見てそろそろゲット出来ると思いい、モンスターボールを手取る。シユンが倒れてるエアームドに向かってボールを投げようとしたその時!!

「ちよつと待つてえ〜〜!!!」

倒れているエアームドにボールを投げようとしたシユンの後ろからピンクで赤の横縞の入ったたれ耳帽子を被った緑色の髪をした女の人がやって来て、ボールを持っていくシユンの手の方に抱きついてボールを投げるのを止めさせる。

「えっ!ちよつと!?!」

「リル?」

シユンは突然女の人が自分の後ろから来て自分の腕に抱き着いてまでエアームドのゲットを止めてきた事に驚き、マリルも突然の事態に何がなんだか分からなくなり頭を傾けて不思議そうにしている。

ちなみにメロエツタとディアンシーはその女の人がこっちに向かって近づいている気配を感じて、一瞬で自分達の姿を消してシユン達以外に見えないようにする。

「お願い!!あのエアームドをゲットするのはちよつと待つて!」

ボールを持つシユンの右腕にしがみついた女の人はエアームドをゲットするのを

ちよつと待つてほしいとシユンにお願いする。

「えつと…どういふ事ですか？」

シユンがエアームドをゲットしようとするのを止める女の人に、どういふ事かと尋ねるシユンと女の人がそのようなやりとりをしていた時――。

「…エア…エア…」

ゲット寸前だったのを止められてから時間を掛けすぎてしまい、「メロメロ」が解けたエアームドは一度左右に頭を振ると翼を羽ばたかせて空を飛んでその場から逃げて行く。

「リル…!!?!」

「あつ、しまった！逃げられた…」

マリルはまだクツキーを食べられた怒りが収まっていないのか怒りだし、シユンは女の人の掴む腕を優しく離してエアームドが逃げようとするのに気づくも遅く、エアームドにまんまと飛んで逃げられてしまった。

「もう少しでエアームドをゲット出来るところでしたのに…何なんでしょうかあの方は」

「(そうですね。とんだ邪魔が入ったものです。マスターの邪魔をするとは許せません)」



姿を見えないようにしてシユンの近くにいたディアンシーとメロエツタは突然現れた女の人が邪魔をしたためにエアームドを逃がしてしまった事に対してそれぞれ思つた事を述べる。

「まあまあメロエツタ。そう怒らないで取り合えずあの女の人に何であんなことをしたのか聞いてみよう)」

シユンは怒っているメロエツタに落ち着くように言い：取り合えず女性に何故あんなことをしたのかを聞く事を提案する。

女の人はシユンがエアームドをゲットするのを腕にしがみついて止めたその後、シユンに優しく腕を放された後は少し離れたところで申し訳なさそうな目をしてシユンを見ていた。

「あの…ぼくはシユンと言います。あなたは？」

「わたしはミキ…それより…ごめんなさい!あなたの名を名乗り、女性に名を尋ねると女性は名

をミキと言つてエアームドのゲットを邪魔したことを頭を下げて謝る。

「いえ…もう良いですから。それよりミキさんはどうしてあんなことを？」

シユンはエアームドのゲットを邪魔したことを頭を下げて謝るミキにもう良いですと頭を上げさせて、どうしてあんな事をしたのかと尋ねる。

「実はわたし…ポケモンと一緒に強くなるために旅をしていて、強くなるために他のトレーナーとバトルしたりしたんだけどあんまり勝てなくてね…。ちよつと気落ちしながら旅を続けてた途中でここを通りかかって、あのエアームドを見つけたの。」

一目見た時からあのエアームドに夢中になったわ！勇ましく飛ぶ姿にわたしは目を奪われた…わたしはエアームドが欲しい。あのエアームドをどうしてもゲットしたいと思ったの」

シユンにどうしてあんなことをしたのか尋ねられたミキは恐る恐る話しだす。

ポケモンと一緒に強くなるために旅をしていたミキ。しかしあまり戦績は良くないらしくトレーナーとのバトルでも勝てない事が続いているようだ。

そのような事があり落ち込みながら旅を続けていると、その途中でこの場所を通った時にあのエアームドを見かけたらしくそれ以来、エアームドに夢中になりエアームドをゲットしたいと思っただけらしい。

「それでわたしはエアームドを見つけた日から山にある小屋を借りてエアームドのゲットにチャレンジしたんだけど…あのエアームド強くて何回もゲットするの失敗してるんだ。でも、それでもめげずにエアームドゲットを目指してポケモンを鍛えながら今日もエアームドをゲットしようとエアームドを山の中で探していたら…あなたがエアームドとバトルしているのを見かけてそれで…」

「そのエアームドがぼくにゲットされそうだったから思わずあんな事をしてしまったと？」

「ええ…本当にごめんなさい…」

エアームドを見つけた日からミキはエアームドをゲットするために山にある小屋を借りて、エアームドゲットにチャレンジするが、エアームドが手強くて何回も失敗している。

そしてエアームドをゲットするためにポケモンを鍛えながら今日もエアームドのゲットにチャレンジしようとしてエアームドを探していたら、シユン達がエアームドとバトルしているのを見つけたようにエアームドがゲットされそうになっているのを見たミキは、自分が心からゲットしたいと思っっているエアームドがゲットされそうになっているのを見て、思わずシユンの腕にしがみついてエアームドのゲットを邪魔してしまい…そのせいでエアームドに逃げられてしまい、ミキはその事についてシユンに改めて謝罪する。

「(マスターのゲットの邪魔をしたから余程の理由があるかと思えば…：そんな勝手な理由とは呆れました)」

「(ええ…そうですね。少々ご自分の都合が強いみたいですね)」

「(確かに…：…だけどそれだけあのエアームドが欲しいって事じゃないかな？そしてそ

のために一生懸命努力してるみたいだよ」

ミキからシユンのゲットの邪魔をした理由を聞くとメロエツタとディアンシーは自分の勝手な理由に呆れてしまい、シユンは同意しつつもそれだけミキがあのでアームドをゲットしたいと…そしてそのために一生懸命努力している事に感心する。

「お願い！勝手な事を言ってるのは分かってる…。でもわたしはあのでアームドをどうしてもゲットしたいの！アームドをわたしにゲットさせてほしいの…どうかお願いします！」

ミキはシユンにエアームドを自分にゲットさせてほしいとお願いし、シユンに向かって深々と頭を下げてください。

「(どうするんですかマスター)」

「(どうするも何もそんな勝手な願いなど聞く必要ありませんよマスター)」

ミキのシユンへのお願いを側で聞いていたディアンシーはシユンにどうするのかと尋ねる。

それに対してメロエツタはミキの勝手な願いなど聞く必要はないとシユンに言う。

ディアンシーとメロエツタのそれぞれの意見を聞いたシユンは少しの間だけ考える。

「…ぼくは別に構いませんよ。あなたがあのでアームドをそこまで欲しいと言うのならあなたがゲットして構いません」

「なっ!マスター!」

考えた結果——シユンはミキのお願いを聞いて、ミキのエアームドに対しての強い想いを感じてそこまでエアームドが欲しいならミキがエアームドをゲットしても構わないと応える。シユンのその発言を聞いたメロエツタは目を丸くして驚く。

「えっ、本当に!本当にわたしがあのエアームドをゲットして良いの?」

シユンからエアームドをゲットしても構わないと聞いて、ミキは一瞬驚いた後に改めてシユンに自分がエアームドをゲットして良いのかと尋ねる。

本来なら野生のポケモンをゲットする権利は全てのトレーナーに対して平等で、そのポケモンを見つけた者や早い者勝ちである。だから自分がゲットしたいから他の人にゲットしないようお願いするのは非常識で無茶な言い分である事をミキも自覚しており、そんな自覚があるからかシユンの発言を聞いて思わず聞き返してしまう。

「良いですよ。ぼくは別にそこまでエアームドをゲットしたいわけではないですし、それにエアームドをゲットするために山の小屋を借りてまで頑張るミキさんを応援したくなりました。だからあのエアームドはミキさんがゲットして下さい」

再度、本当に自分がゲットして良いのか聞き返してくるミキにシユンはミキがエアームドをゲットして良いと了承する。自分はそのままでエアームドをゲットしたい訳でもなくそれならエアームドをゲットするために山の小屋を借りて、エアームドのゲットの

ために頑張るミキを応援したくなったと：だからエアームドはミキがゲットするべきだと言う。

「ありがとうシユンくん。わたし絶対あのエアームドをゲットしてみせるわ！」

シユンからそう言われたミキは嬉しそうに笑顔でお礼を言った後にシユンのその期待に応えるためにも拳を握り、気合い全開にエアームドをゲットしてみせると宣言する。

「はい。それじゃここでミキさんに出会ったのも何かの縁ですし：良ければエアームドのゲットを手伝いましょうか？」

シユンはここで自分達が会ったのも何かの縁だろうと思い、ミキにエアームドのゲットを良かったらと手伝いを申し出る。

「本当！ぜひお願いするわ。何から何まで本当にありがとう。シユンくんが手伝ってくればエアームドをきつとゲット出来るわ！」

シユンからのエアームドゲットの手伝いの申し出に：ミキは『渡りに船』だとすぐに嬉しそうに了承して、これできつとエアームドをゲット出来ると喜びを露にする。

「(ちよつとマスター！エアームドのゲットを譲るだけでもあれなのに、ゲットも手伝うなんていくら何でもお人好しが過ぎます)」

エアームドのゲットを手伝うというシユンの申し出を聞いていたメロエツタは、エ

「アームドのゲットを譲るだけでなく……ゲットも手伝うと言ひ出したシユンに対してお人好しが過ぎると注意する。」

「でもメロエツタ……。ミキさんはエアームドをゲットするためには一生懸命なんだし、少しくらい応援したつて良いんじゃないかな?」

「お人好しが過ぎると怒るメロエツタにシユンはエアームドをゲットするためには一生懸命頑張るミキを少し応援したつて良いんじゃないかとやんわりな感じで説得する。」

「(ですが!)」

「まあ良いではないですかメロエツタ。マスターは困つてる方や一生懸命頑張る方をほうつておく事は出来ない優しい人ですわ。そんな心の優しい人ですからわたくし達も一緒に行く事を決めたのでしよう)」

シユンの説得に、それでも納得しきれない様子のメロエツタに、ディアンシーは心の優しいシユンは困つてる者や一生懸命頑張る者をほうつておく事が出来ない優しい人だと言つて、そしてそんなシユンだからこそ自分達は着いて行こうと決めたのだらうと、メロエツタを説得する。

「(それは……:そうですね。そんなマスターをわたし達は好きになつたんです。分かりました……:マスターの気が済むようにして下さい)」

ディアンシーの発言にメロエツタは一度反論しようとするも、そんなシユンだからこ

そ自分達は好きになったのだと納得し、シユンの底抜けのお人好しに：何を言っても無駄だと諦めたメロエツタはシユンの気の済むようにすればいいと言ってくれた。

「(ありがたいメロエツタ、デイアンシー。ぼくも二人のこと大好きだよ!)」

「(ツツ／＼／＼!)」

自分の我が儘を許してくれたメロエツタとデイアンシーにお礼を言い、シユンも二人の事を大好きだと言つて微笑み、メロエツタとデイアンシーはそのシユンの微笑みと大好きと言われた嬉しさと頬を赤くしてしまふ。

「(ありがたいございます。わたくしも大好きですわマスター／＼／＼)」

「(わたしもマスターのことは大好きです／＼／＼)」

シユンに大好きだと言われた2人は自分達もシユンの事を大好きだと言つてシユンに擦り寄る。

「(ふふっ。ありがたい2人とも。心配しなくても少し手伝うだけだよ。ちよつとゲットしやすいうちにサポートするだけだから大丈夫)」

「ミキさん…。手伝うとは言いましたが、あくまでエアームドが逃げないようにゲットしやすくなるようにサポートするだけで、ゲット出来るかどうかはミキさんの頑張り次第です。それでも良いですか?」

自分の事を大好きだと言う二人に改めてお礼を言い、自分はゲットしやすいうちにサ



ポートをするだけでゲット出来るかどうかはミキの頑張り次第。何もかも自分がしてしまえばミキの為にもならず…ゲットしたエアームドもミキの事をトレーナーとして認めないだろうと思いい。あくまでエアームドが逃げないようにサポートしたりするだけだと…それでも良いかと尋ねる。

「ええ、もちろんよ。全部シユンくんに頼る訳には行かないもの…。シユンくんがサポートしてくれるだけで一人でゲットに挑む時よりも心強いわ!」

「それなら大丈夫ですね。それじゃエアームドを探しに行きましょうかミキさん」

「そうね。それじゃよろしくお願いするわねシユンくん!」

「はい、それじゃ行きましょう」

シユンとミキは会話もそこそこにエアームドを探して森の中を歩いて行く…:エームドを探しながら二人はお互いの事について話しながら歩く。

「へえ…シユンくんはカントー地方からジョウト地方に来たのね」

「はい。ジョウトリーグに出場するために各地のジムを巡る旅をしています」

シユンはカントー地方からジョウトリーグに挑戦するためにジョウトの各地のジムを巡る旅をしている事をミキに話す。

「そうなんだ…。シユンくんにはジョウトリーグに挑戦するっていう目標があるんだね。わたしは只ポケモンと一緒に強くなりたくて旅に出ただけだから明確な目標のあ

るシユンくんが羨ましいわ…」

シユンの話しを聞いていたミキは、ポケモンと只一緒に強くなりたくて旅に出た自分とは違い明確な目標のあるシユンが羨ましく思えた。

「良いんじゃないんですか？」

「えっ？」

シユンの突然のその言葉にミキは思わず驚いて聞き返す。

「これから旅をしている内にミキさんも目標が見つかるかもしれないし…そんなに焦る必要はないと思います。それにポケモンと一緒に強くなりたいていうのも立派な目標だとぼくは思いますよ」

自分に明確な目標と呼べる者が無い事に気落ちするミキに…これから旅をしているうちに見つかるかもしれない。だから焦る必要はないと言って気落ちするミキを励ます。

「……………」

「あつ！すいません、何だか偉そうな事を言ってしまったて…」

呆然とした表情をしているミキの様子を見て、自分が偉そうな事を言ってしまったとシユンは慌ててミキに謝罪する。

「フフ…。謝る事はないわ。そうよね…目標なんてこれから見つけていけば良いのよね

「!焦る必要なんて全然ないんだわ。ありがとうシユンくん」

偉そうな事を言つてしまつたと謝るシユンに対してミキは謝る事はないと言つて、シユンの言つた通りこれから目標を見つければ良いと…焦る必要はないと納得し、自分を励ましてくれたシユンにお礼を言う。

「いえ…別にお礼を言われるほどのことではないですよ」

「そんなことはないわ。シユンくんのおかげで気が楽になつたもの!」

シユンはお礼を言われるほどの事ではないと言うが、ミキはそんな事はないと…シユンのおかげで気が楽になつたと言う。

二人がそんな会話をしながらエアームドを探して森の中を進んでいると――。

「ツツ!ミキさん止まつて…」

「えっ?」

ミキの前を歩いていたシユンは何かに気付いて、後ろにいるミキを止める。

「どうしたのシユンくん?」

「シツ!ミキさん静かに…あそこを見て」

いきなり歩みを止めたシユンを見て、どうしたのかと尋ねるミキに静かにするように言つてから指を差してある場所を見るように言う。

「エアアア…zzzz…」

そこには…シユン達の前方にある大木の枝に止まって寝ているエアームドがいた。どうやら先程のマリルとのバトルで負ったダメージを回復させるために眠って休んでいるようだ。

「いましたミキさん。エアームドです。どうやら眠ってるみたいですね」

「そうみたいね…でもこれは都合だわ。絶好のゲットチャンスよ！」

そう言っつてミキはエアームドの寝ている大木へと近づいて行く…シユンもミキの後ろからゆっくりと付いて行く。

「Zzzz…Zzzz…エア？」

その時…自分に近づいて来る者の気配を感じたからかエアームドは目を覚ましてゆっくりとその瞳を開く。

「エア!! エアア~~~~!!」

そして自分に近づいて来るシユン達に気付くと敵意を剥き出しにして威嚇する。

「あつ! 起きちゃった…」

「近づいて来るぼく達の気配を感じて目を覚ましたみたいですね…」

エアームドはシユン達へ敵意を剥き出しにしながらも…様子を見ているのかその場から動かず翼を広げて威嚇している。

「ミキさん。もう真正面から行くしかありません…サポートしますから頑張ってください」

い」

「うん、ありがとうシユンくん。任せて!必ずゲットしてみせるわ。出て来て!」  
エアームドをゲットするためにミキはボールから自分のポケモンを出す。

「コ〜ン!」

ミキの投げたボールから出てきたのは9本の尻尾を靡かせる”きつねポケモン”  
キュウコンが出て来る。

「今度こそエアームドをゲットしてみせるわ。頼むわよキュウコン」

「コ〜ン!!」

今度こそエアームドをゲットしてみせると意気込み、そんなトレーナーの思いが伝  
わったのかキュウコンも前屈みになってエアームドに構える。

「ミキさんのポケモンはキュウコンか…相性では有利だな…出て来てマリル!」

「リル!」

ミキが自分のポケモンをボールから出したのを見て、シユンもミキのゲットのサポ  
トをするためにマリルをボールから出す。

「リル!リ〜ル〜!!」

「待つて!マリル!」

ボールから出て来たマリルはエアームドがいることに気付くと、先程の事もありマリ

ルは怒りエアームドの所に向かおうとするのをシユンは慌てて止める。

「リル！リ〜ル〜」

「落ち着いてマリル！落ち着くんだ」

シユンはマリルを両手で抱きしめて止めるも、マリルは暴れてシユンの手から抜け出すようにする。

「マリル！さっきの事で怒ってるのは分かるよ。でも今はミキさんがエアームドをゲット出来るようにサポートしたいんだ……お願いだよマリル！」

「リル!!リ〜ル〜」

シユンはマリルにゲットの手伝いをお願いをするが、マリルは首を横に振って拒否する。

「マリル！ちゃんとエアームドと戦わせてあげるから……このまま言うことを聞かないならボールに戻すよ。そしたらエアームドにさっきの仕返しが出来ないよ。良いの？」

「リル！リル〜……リル！」

シユンはこのまま自分の言うことを聞かないならボールに戻すと……そうしたらエアームドにさっきの仕返しが出来ないと柔らかい口調で脅すと……マリルは一瞬シユンを睨みながらも仕方ないと言った様子で渋々と分かったと頷く。

「よし、良い子だねマリル。頼りにしてるからね」

「リルくくく／＼／＼／リル!?リルく!!」

シユンはマリルが頷いたのを見ると…自分の指示を聞いてくれたマリルを良い子だと頭を撫でる。マリルはシユンに頭を撫でられて一瞬気持ちよさそうに擦り寄るも、マリルはすぐにハツとなり頬を赤らめてシユンの撫でる手を弾く。

「はは。よろしくねマリル。ミキさん!こっちは準備OKです…しっかりサポートするんで頑張ってください」

「ありがとうシユンくん!それじゃ行くわよ。キュウコン”かえんほうしゃ”よー!」

「コ〜ン!」

ミキはキュウコンに”かえんほうしゃ”を指示すると、キュウコンはエアームドに向かって”かえんほうしゃ”を放つ。

「エア〜!!エ〜ア〜」

エアームドは素早い動きで”かえんほうしゃ”を交わすと、両翼を硬質化させるはがねタイプの技…”はがねのつばき”を繰り出しキュウコンへと接近する。

「ミキさん。”はがねのつばき”が来ます。気をつけて!」

「ええ!キュウコン交わして!」

「コ〜ン!!」

エアームドが”はがねのつばき”を繰り出すのを見て、シユンはミキに気をつけるよ

うに言つて頷いたミキはキュウコンに交わすように指示し、キュウコンは指示通りにエアームドの攻撃を飛び上がつて交わす。

「よし、キュウコン！そのままかえんほうしや」よ！」

「コン！コン！！」

エアームドの攻撃を交わしたキュウコンは飛び上がったままかえんほうしや”を放つ。

「エア〜エアッツ!?」

エアームドは空中を旋回しながらかえんほうしや”を交わそうとするも、交わしきれずに右翼にかすり顔をしかめる。

「おいしい！もう少して当たったのに！」

「あのエアームド…やつぱり素早いな。攻撃を当てるにはあのスピードを何とかしないと。ミキさん！相手を状態異常にさせる技をキュウコンは持ってないんですか？」

かえんほうしやがエアームドの翼にかすつたのを見て、おいしいと言つて悔しがるミキ。

キュウコンの攻撃が中々当たらないのを見ていたシユンは 攻撃を当てるにはエアームドのスピードを何とかする方法を考えて…ミキに どくや まひ等の相手を状態異常にさせる技を持っていないのかを訪ねる。



どく(もうどく)、まひ、ねむり、やけど、こおり、こんらん、等のポケモンの状態異常がありどれも相手のポケモンをその状態にする事が出来ればバトルも有利になりポケモンをゲットする際も非常にゲットしやすくなるのである。

「えっ?あるけど…」

「それを使って下さい。状態異常にさせてエアームドの動きを鈍らせます!」

「分かったわ!キュウゴン、”おにび”よ!」

「ゴッソ!」

シユンに言われた通りにエアームドを状態異常にさせるために”おにび”を指示し、キュウゴンは九つの尻尾の先から青紫の炎の”おにび”がエアームドへと放たれる。

「エア!エア!エアッ!!」

エアームドは自分に向かって放たれる”おにび”を縦横無尽に飛び回って交わそうとするも、全ては避けきれずに幾つかの”おにび”が命中する。

「エア!エア!エア!エア!」

”おにび”を受けたエアームドが頭を振って気を取り直そうとしたその時、突如エアームドの体を炎が包む。

「えっ!これってもしかして?」

「そうですミキさん。”おにび”の効果でエアームドは火傷状態になっています。今

がチャンスです！」

エアームドが炎に包まれたのを見てミキは驚き、シユンは“おにび”の技の効果でエアームドが火傷状態になり、エアームドが炎に包まれてスピードを出せずに隙が出来てシユンはミキに絶好のチャンスだとアドバイスする。

「ええ、今よキュウコン！必殺の”だいもんじ”よ！」

「コオッソ！！」

ミキも絶好のチャンスを見逃さずにとりつけておきの必殺技”だいもんじ”を指示し、キュウコンは自身の持つ炎の力を最大限に込めて放つ。

大の字の形となったほのおタイプの中でも1、2の威力を持つ”だいもんじ”がエアームドへと向かって行く。

「エアッ…エアッ！！」

エアームドは自分に向かってくる”だいもんじ”を翼を飛ばたかせて避けようとする。

「エアアアアッ！！」

しかし、交わそうとしたエアームドの体を炎が包み…その動きを止められ状態異常の火傷でダメージを受けてスピードを出す事が出来ない。

「エア！エアアアアッ」

そして、火傷によって動けず逃げる事が出来ずにキュウコンの“だいもんじ”がエアームドに直撃する。

「やったわ!」

「コ〜ン!」

自分達の最大の攻撃が命中したことにミキとキュウコンは喜びの声を上げる。

「エア〜……」

効果抜群の技を受けた事でエアームドは大きなダメージを負って地面へと落下する。

「今ですミキさん……エアームドをゲットして下さい!」

「そうね……今が絶好のチャンスよね。今度こそエアームドをゲットよ!」

倒れたエアームドを見て、今がゲットのチャンスだとシユンのアドバイスを聞いたミキも、絶好のチャンス到来とばかりに今度こそエアームドをゲットしようとボールを投げようとしたその時——!!

「エア……エアアア〜!!!」

エアームドは大きなダメージの負った体を震わせて立ち上がると、最後の力を振り絞り翼を大きく羽ばたかせて砂を巻き上げて逃げようとする。

「くっ!これって”すなあらし”……まずいわ!また逃げられちゃう!!キュウコン!」

「コン!コオ〜ン!!」

ミキは前の時も今ののように”すなあらし”を使われた事で逃げられた事があるのか、焦りの色を浮かべて逃げられないようにキュウコンに指示する。指示を受けたキュウコンは”かえんほうしゃ”を放つも、”すなあらし”の前に弾かれてしまいエアームドまで届かない。

「やつぱり”すなあらし”にはほのお技が通じない……このままじゃまた逃げられちゃう。」

そんな……ここまで来てダメなの……あともう少しでゲット出来るところまで来たのに……シユンくんがわたしのために色々と手伝ってくれたのにつ……」

「コ……ン……」

エアームドの”すなあらし”の前にはほのお技が通じずエアームドが逃げるのを阻止する事もない出来ない事にミキは焦りの色を浮かべ……そしてやつとエアームドをゲット出来る寸前まで追いつめたのに、またも逃げられてしまいそうになりどうすることも出来ない事に、悔しきからか目に涙を浮かべて色々と手伝ってくれたシユンに対しても申し訳ない気持ちが入み上げて涙が溢れそうになる。

そんなトレーナーの気持ちが伝わってるのか、キュウコンも切ない気持ちになりミキを見上げる。

ミキが何も出来ずにエアームドが”すなあらし”に紛れて逃げようとしたその時!!

「諦めちゃダメですミキさん。マリル!空中に向かって”みずでっぼう!”」

「リル…リルウ…!!」

ミキに諦めちゃダメだと叫んだシユンはマリルに空中に向かって”みずでっぼう”を指示し、マリルは一瞬躊躇するもシユンの指示通りに空中へと向けて”みずでっぼう”を放つ。

すると空中へと放たれた”みずでっぼう”が雨のように降り注ぎ…”すなあらし”をかき消してエアームドの姿を露わにする。

「エアア〜!?!」

「すごい!みずでっぼう”を使って”すなあらし”を打ち消した!」

シユンとマリルが技を上手く使い”すなあらし”を打ち消した事にミキは驚く…しかし、驚いているのはミキだけでなく、自分の姿が露わになってしまった事に驚いたエアームドは思わず逃げようとしていたのも忘れて動きを止める。

「今ですミキさん!エアームドの動きが止まっている今がチャンスです!」

「うん!分かったわ。ありがとうシユンくん。キュウゴン!止めの”でんこうせつか”よ」

「コ〜ン!コン!コン!コンコン!コオ〜ン!!」

シユンのアドバイスを聞いたミキはキュウゴンに”でんこうせつか”を指示すると、

キュウコンは走り出し徐々にスピードを上げてものすごいスピードの”でんこうせっか”でエアームドへ向かって行き、エアームドにぶち当たる。

「エアアアアアアア!!」

エアームドはキュウコンのスピードも去る事ながら：先程の”だいもんじ”を受けた時などのダメージがあり、避ける事が出来ずに”でんこうせっか”が直撃し地面へと落下する。

「エアアアアア……」

そして、”でんこうせっか”がとどめとなったのか、先程のように”すなあらし”を出して逃げようとする事も出来ずに地面へと倒れ伏す。

「ミキさん！今です。ボールを投げてください」

「ええ、行くわよ！お願いモンスターボール！」

ミキは倒れているエアームドへと向かってボールを投げる――。ボールはエアームドへと当たりエアームドはボールへと吸い込まれる。

ボールが数回揺れた後、ボールがポンつと光り、エアームドがゲット出来た事を知らせる。

「……やった……やったあ……！エアームドをゲット出来たあ！」

「コオ……ン!!」

エアームドをゲット出来た事が分かると…ミキは喜びのあまりエアームドの入ったボールを持ってその場でピョンピョンと飛び上がって喜び、ミキの嬉しそうな様子にキュウコンも笑顔で喜ぶ。

「やりましたねミキさん。エアームドゲットおめでどうございます!」

「うん!ありがとうシユンくん…エアームドをゲット出来たのはあなたのおかげよ!」

シユンがミキにエアームドが出来た事を祝うとミキはお礼を言い、エアームドをゲット出来たのはシユンのおかげだと感謝する。

「どういたしまして。それじゃあ取りあえずポケモンセンターへと戻りましょう。キュウコンとエアームドを回復させてあげないと…」

「そうね。それじゃあ行きましようかシユンくん」

シユンはミキの感謝の言葉に頷いて、ポケモンセンターに行く事を提案し、ミキもそれに同意して2人はその場から山の入口の方にあるポケモンセンターへと向かう。

ポケモンセンターへと到着した二人はバトルでダメージを受けたキュウコンとエアームドをジョーイさんに預ける。しばらくするとエアームド達の回復が完了し、ミキはボールを受け取る。そして二人はポケモンセンターから出て歩いて吊り橋のある所まで行く。

「改めてエアームドのゲットおめでどうございます。それでミキさん。あなたはこれか

らどうするんですか?」

「ありがとうシユンくん。そうね……しばらくはこのエアームドと一緒にこの山で強くなるために特訓するつもりよ」

シユンにこれからどうするのかと聞かれたミキは、エアームドの入ったボールを持ちながらエアームドと一緒に強くなるためにこの山で特訓するつもりだと言う。

「そうですか。頑張ってくださいね!」

「ええ。それにしてもシユンくんには本当に色々とお世話になっちゃったわね……」

「いえ、そんな事ないですよ……」

ゲットしたエアームドと一緒に特訓すると言うミキをシユンは応援し、ミキはそんなシユンを見て本当に色々とお世話になってしまったと呟く。

ミキのそんな言葉を聞いたシユンはそんな事はないと否定する。

「ううん……そんな事はないわ。シユンくんのおかげでエアームドをゲットする事が出来たのよ。あなたが色々とおアドバイスをしてくれなきゃエアームドをゲット出来なかったし……それにあなたはわたしの勝手な言い分を聞いてエアームドをわたしにゲットさせてくれた。シユンくん……あなたには本当に感謝してるの!」

謙遜するシユンにミキは自分がどれだけシユンに感謝しているかを真剣に伝える。

自分の勝手なお願いを聞いてくれたばかりか……エアームドゲットも手伝ってくれ



て自分のためにいろいろと頑張ってくれたシユンの優しさを感じて胸の高鳴りを感じている。

——そして——。

「だからシユンくん……これはわたしからのせめてものお礼／＼……」  
そう言つてミキは頬を少し赤くしながらシユンへと近づく……そして——。

——チュツ／＼／＼／＼——

ミキは頬を赤くして、シユンの頬へ……チュツ／＼／＼／＼……と優しくキスをする。

「ツツ!!えっ……ちよ／＼／＼／＼!ミキさん／＼／＼!」

シユンはミキに突然……頬にキスされて顔を真っ赤にして慌てる。

「……／＼／＼／＼!……」

ミキは今さらながらに自分が大胆な事をしてしまったのを自覚したのか……恥ずかしくてその顔を真っ赤に染めてしまっている。

「(ツウウ!!あの女!勝手な事を言うばかりかわたし達のマスターになんて事を!)」

「(はあ……マスターったらまたもや女性を自分の虜にしてしまったようですわね……)」

ミキの突然の行動にメロエツタは怒りの感情を抱き、デイアンシーはまたもやシユン



「そつ…そつですか?」

ミキの慌てた様子にシユンは怪訝に思いながら…:…:そうかと納得する。

「(マスター!そろそろコガネシティへ向けて出発しましょう)」

「(そうですね。目的も果たした今…:…:ここにいる理由もありませんわ)」

シユンがミキと会話を続けていると…:…:メロエツタとディアンシーがそろそろ出発しようとシユンに声をかける。

「(そうだね) それじゃミキさん…:。ぼくはそろそろ行きます。エアームドとの特訓頑張ってください!」

「ええ…:本当にありがとうシユンくん。これからエアームドと一緒に頑張るわ!」

「それじゃミキさん。ぼくはそろそろ行きます。お元気で!」

そう言つてシユンは橋を渡つてコガネシティへと向けて歩き出す。

「ほんとくりにありがとうシユンくん…:!またね…:」

「はい!またいつか会いましょう!」

ミキは橋を渡つてコガネシティへと向かうシユンに手を大きく振つてまたねと言ひ、シユンもまたいつか会いましょうと言つて手を振り返す。

ミキは橋を渡つた後もシユンが見えなくなるまで手を振り続けた。

ミキと別れたシユンはしばらく歩いた後でシユンはメロエツタ達と話していた。

「まったく…無駄な時間を過ごしてしまいました！マスターもお人好しは程々にしても  
らわないと困ります！」

「まあ良いではないですか。お人好しなところもマスターの良いところですよ」

メロエツタは無駄な時間を過ごしたと言つてシユンにお人好しなのも程々にするよ  
うに注意し、デイアンシーはそんなメロエツタに落ち着くように言つてそれがシユンの  
良いところだとフォローする。

「はは……あつーそうだ…。出て来てマリル」

シユンはメロエツタ達の言い様に苦笑いを浮かべて、そして何かを思い出すとマリル  
の入ったボールを投げる。

「リル？」

マリルがボールから出て来ると耳をピクピクとさせる。

「マスター？」

「なぜマリルを出したのですか？」

メロエツタとデイアンシーはなぜマリルをボールから出したのかを不思議に思い尋  
ねる。

「いや…今日はマリルはいろいろと頑張ってくれたから改めてお礼を言おうと思つてね

「！」

シユンはそう言う。しやがんでマリルと目線を合わせる。

「リル！リル！リル！！」

マリルはまだシユンの事を警戒しているのかシユンが近づくと唸り声を上げて威嚇する。

「そんなに警戒しないでマリル……。お礼を言いたいただけだからね。マリル……。今日はいろいろとよく頑張ってくれたね。ありがとう」

「……リル……リル」

シユンがマリルをいろいろとよく頑張ってくれたと誉めると、そのシユンの笑顔に安心したのか警戒を少し解いてシユンに近づく。

「はは……。ありがとうマリル！これからもよろしくね」

シユンはそう言ってマリルへと向けてそっと手を差し出す。

「……リル……リル！！」

シユンがそう言って手を伸ばすと初めは警戒していたマリルも近づいてシユンの手を掴み、初めてシユンに笑顔を向けて頷く。

「それじゃあコガネシテイへと向けて行こう。みんな！」

「はい！」

「ええ！」

「リル！」

コガネシティへ向けて旅していた途中で最近発見された新しいタイプ……はかねタイプのポケモンのエアームドに初めて出会ったシユンはそれを追い求める1人のトレーナーミキと出会い、色々合つてミキのエアームドのゲットに協力し……無事にミキがエアームドをゲットする事が出来た。

そしてシユンはゲットしてから間もないマリルと少し距離を縮める事が出来た。

そしてシユン達はコガネシティを目指して旅立つのであった。

## 第十六話 コガネシティ大パニック!・R団強襲…前編!?

コガネシティへと向かう途中の山の近くで、ジョウト地方で新たに確認されたはがねタイプのポケモン”エアームド”と遭遇。

そのエアームドをゲットを狙うトレーナーのミキと出会い、成り行きからミキの”エアームド”ゲットを手伝う事になったシユンはゲットしたばかりでまだ自分を警戒しているマリルにサポートをお願いし、ミキのエアームドのゲットのサポートする：ミキはエアームドのゲットに苦戦するも：シユンのアドバイスのおかげでエアームドをゲットする事が出来たのだた：そしてミキに別れを告げてコガネシティへと向けて旅立つ。

そして”シユン達はコガネシティまでもう少しという所まで来た途中の道で：たんぱんこぞうの少年にバトルを挑まれていた。

「いけっニドリーノ！つのでつく」だ」

「ニドツ!!」

「ワニノコ、ドラゴンクローで迎え撃て!!」

「ワニャ!!」

ニドリーノの”つのでつく”とワニノコの”ドラゴンクローがぶつかり合う。

「ワニャ〜!」

「ニドツ!」

力比べはワニノコが勝り、ニドリーノを吹っ飛ばす。

「ニドリーノ!」

「ニドツ!」

たんぱんこぞうの近くまで吹っ飛ばされたニドリーノは体制を立て直すと頭を数回フルフルと揺らして大丈夫だと言うように鳴く。

「よし、ニドリーノ!どくばりだ」

「ニド〜ツ!!」

ニドリーノから”どくばり”が放たれてワニノコへと向かって行く。

「ワニノコ!みずでつぼうで弾き飛ばすんだ!」

「ワニャ!ワニャ〜」

迫り来る”どくばり”を”みずでつぼう”で全て弾き飛ばして防ぐ。

「なっ!!」

「ニドツ!!」



たんぱんこぞうとニドリーノは”どくばり”が全て防がれた事に驚いて硬直する。

「ワニノコ!ドラゴンクローだ!」

「ワニヤ〜!」

「ニド〜ツ!」

隙が出来たのをシユンは見逃さずにワニノコにすかさず指示し、ワニノコの”ドラゴンクロー”が”ニドリーノに直撃する。

「ニドリーノ!!」

「ニド〜ツ…」

ドラゴンクローを受けたダメージですぐに立ち上がる事が出来ずに必死に力を入れて立ち上がるとうとする。

「今だワニノコ!みずでっぼう”だ!」

「ワニヤ〜!」

「ニド〜ツ!」

そこにすかさず”みずでっぼうを放ち、ニドリーノを吹っ飛ばし”みずでっぼう”を受けてニドリーノはそのまま後ろにあった木へとぶつかる…そして…。

「ニドリーノ!」

「ニド〜…」

ニドリーノは戦闘不能となり、たんぱんこぞうの少年は慌ててニドリーノのところに向かいニドリーノを抱き抱える。

「ニドリーノは戦闘不能。ぼく達の勝ちだよね？」

「…ああ、ぼくの負けだ」

シユンがニドリーノの様子を見て、戦闘不能だと判断し勝利宣言をすると、たんぱんこぞうも潔く自分達の負けを認める。

「よく頑張ったね」ワニノコ！

「ワニヤワニヤ!!」

たんぱんこぞうが負けを認めたのを見て、シユンは頑張ってくれたワニノコを誉める。

ワニノコは自信満々に当然だと言うように得意げな表情を浮かべる。

「大丈夫か？ニドリーノ……」

「ニド……」

たんぱんこぞうの少年は倒れたニドリーノに駆け寄って大丈夫かと言って抱き起す。ニドリーノも大丈夫だと言うように鳴く。

「ニドリーノは大丈夫かい？良かったらこのキズぐすりを使って！」

シユンはたんぱんこぞうとニドリーノのいる方に歩いて行き、大丈夫かと心配し良け

れば使つてとキズぐすりを渡す。

「ありがとう!さあ、ニドリーノ!」

「ニド:ニドニド!!」

キズぐすりを受け取ったたんぱんこぞうはニドリーノにキズぐすりを使うと、ニドリーノはキズぐすりが傷に染みたのか一瞬痛がるもキズぐすりのおかげで完全とは言えないがダメージが回復して元気になる。

「良かった。大丈夫みたいだね」

「ああ!ありがとう。それにしてもキミのワニノコ強いね。よく育てられてるよ」

「そんな、キミのニドリーノだって強かったよ」

「ワニヤ!」

「ニド〜!」

ニドリーノが大丈夫なのを確認したシユンは良かったと安心し、たんぱんこぞうはキズぐすりをくれた礼をシユンに言った後で、ワニノコの強さを賞賛し、よく育てられると誉めるとシユンもニドリーノも強かったとお互いに健闘を称え合う。

トレーナー達のお互いを称えるその様子にポケモン達も笑顔でお互い笑いあう。

「俺、キキョウシティ出身のたんぱんこぞうのヨシロウ!俺がもつと特訓して強くなつたらまたバトルしてくれよ!」

「ぼくはカントーのマサラタウン出身のトレーナー」シユン！うん、その時はまたバトルをしよう！」

たんぱんこぞうのヨシロウが自己紹介をした後で特訓してまた強くなった時にまたバトルをしてほしいと頼み、シユンは自分も自己紹介した後でシユンも快く了承し、お互いに握手する。

「そうだ！キミのポケギアの番号教えてよ。バトルの申し込みや良い情報なんか合った時なんか連絡したいからさ？」

「良いよ！ちよつと待ってね」

こうして”シユンはコガネシテイ目前でバトルを挑んできた”たんぱんこぞうのヨシロウとポケギアの番号を登録すると、シユンはヨシロウと別れて目前まで来ているコガネシテイへと向けて歩みを進める。

たんぱんこぞうのヨシロウにバトルを挑まれた場所から少し歩いたところで、近くに誰も居ないのを確認すると、メロエツタとディアンシーがゆつくりと姿を現す。

「先程のバトルも絶好調でしたわねマスター！この調子でしたらコガネジムのジム戦も大丈夫ですわ！」

「うん、そうだね。ゲットしたばかりのワニノコと上手く息を合わせてバトル出来るか心配だったけど・ワニノコもちゃんと指示を聞いてくれたし大丈夫だったよ」

「どうやらワニノコは自分をゲットしたマスターの強さを認めてるようです。だから自分が従うに相応しいと思ってるからちゃんど指示を聞くようです。中々言うことを聞かないマリルよりも何倍も良いですね」

先程のトレーナーとのポケモンバトルでワニノコとの絶好調な様子のバトルを見たディアンシーはこの調子ならコガネジムへの挑戦も大丈夫だと笑顔で言い、シユンも最初はゲットしたばかりのワニノコと上手く呼吸を合わせてバトル出来るかと不安に思っていたが、そんな事はなくワニノコがしっかりと指示を聞いてくれたためワニノコとの初めてのバトルで勝利する事が出来た。

ワニノコは自分をゲットしたシユン達の強さを認めているため、シユンの指示を聞くのだとメロエツタは説明し、その後にはワニノコと違って：中々トレーナーであるシユンの言うことを聞かないマリルよりもまだとため息をつく。

「まあまあ…：仕方ないよメロエツタ！マリルはまだゲットしたばかりだし、まだぼく達に馴れてないんだよ…：ゆっくり接してあげれば段々とマリルも馴れてくれるって信じてるよ。いつか”マリルもちゃんと指示を聞いてくれるってね！”

ため息をつくメロエツタにシユンは落ち着くように言っ、ゲットしたばかりだから仕方ないと、いつかマリルも自分達に馴れてちゃんと指示を聞いてくれるようになるよと信じていると言っ、メロエツタを宥める。

「まあマスターがそういうなら今は納得しましょう……確かにポケモンをゲットしたら直ぐに言うことを聞くと勘違いしているトレーナーが多いみたいですし、それに比べてマスターのポケモンを思いやる気持ちは素晴らしいと思います」

「そうですね！マスターはわたし達の事を一番に考えてくれる優しいお方ですわ♪」

シユンの言い分を聞いたメロエツタは一応マリルの事については納得し、捕まえたばかりのマリルを気遣うシユンを見て、確かにシユン以外の一般のトレーナーの中で多くはポケモンをゲットしたら直ぐに言うことを利くと勘違いしている事実を話し、それに比べてポケモン自身の気持ちを思いやる事の出来るシユンを素晴らしいと思うと絶賛し「ディアンシーも自分達の事を一番に考えてくれる優しい方だと笑顔で誉める。

「二人とも言い過ぎだよ。ぼくはただポケモン自身の気持ちを一番に考えてるだけだよ」

そんな二人に言いすぎだと言って、自分は只ポケモン自身の気持ちを一番に考えてるだけだと微笑む。

シユンとメロエツタ達がそんな会話を続けながらコガネシティへと向けて山道を歩いていると前方にコガネシティの街並みが見えてきた。

「ああ、二人ともコガネシティが見えて来たよ」

シユンは前方へと見えたコガネシティの街並みにようやくコガネシティに到着出来

ると喜びの声を上げる。

山道から見えるコガネシティは海に面しており、シユンが今まで行った”キキョウシティ”やヒワダタウンよりも大きく、かつてシユンが数ヶ月過ごしていたカントーのタマムシティと同じくらい面積と大きなビルなどが立ち並ぶ大都会の街並みが広がっていた。

「マスター!あの街にはたくさんの方の心配を感じます:わたしたちは姿を消しますね。しかしお側にはいますのでご安心を!!」

「マスターのお側で応援していますので:ジム戦も頑張ってくださいね」

「うん、ありがとう二人とも!それじゃ行こっか!」

「ええ!」

「はい!」

シユン達はコガネシティの街並みが見える山道からコガネシティの入口へと向かいコガネシティへ入るとシユンの目に入って来た光景は:::人、人、人ばかりがたくさん歩いており、高層ビルが立ち並び、様々な店が並んでおり:まさに大都会と言うに相応しい街並みが広がっていた。

「すごいな:人がいっぱい。それに大きなビルばかり:さすがはジョウト地方でも、





「それじゃ、お腹もすいたし：何処かでご飯を食べてからコガネジムに行こうか？」

「そうですね。いつまでもこんな人が大勢いる場所にいたくありません」

「賛成ですわ。何処か落ち着ける場所に行きたいですわ」

シユンは周りの人達に独り言を言っていると不審に思われないうちに透明になって側にいるメロエツタ達に聞こえるぐらいの小声で食事を済ませてからコガネジムへと向かおうかと提案し、二人もいつまでも大勢の人が行き交うこの場所に居たくないと思える場所に行きたいと賛成する。

「よし、それじゃ何処かくつろげる場所で食事をとろう」

二人が賛成したのを聞いたシユンは、くつろぎながらゆっくりと食事をとれる場所を探して止まっていたその場所から歩き出す。

「うくん：何処か良いお店はないのかな？」

シユンは歩きながら良さそうなお店を探すが、コガネシティには初めて来たため何処が良い店なのか分からず、店の名前や看板を見て探すが：どこが飲食店でしかも良い店なのか分からずに迷っていた。

「うくん：中々良い感じのお店はないなあ。何処か落ち着ける場所がいんだけど…」

「何処も人がいっぱいですわ。これでは落ち着いて食事出来ませんわ…」

シユンとディアンシーは辺りに建つ飲食店のある場所を見るがどこも込んでいて落

ち着いてゆっくりと食事をしたい二人は込んでいるお店に入りたいとは思わず歩きながらお店を探す。

「(マスター！ガイドブックを見ましょう。これにコガネシティのページにいろいろと書いてあります。これを見ながら探しましょう！)」

メロエツタがシユンのリュックからジョウト地方のガイドブックを取り出すと、シユンの前に持つて来てコガネシティのページを見ながら探そうと言う。

なお、透明になっている状態のメロエツタが持った物は同じく透明になるため、周りに居た人は不審に思わずに歩いている。

「(そうだね：見ながら行った方が迷わずに済むね。おっと、ここからだとかポケモンセンターが近いのか：ちょうど良いから先にみんなを見てもらおうかな？二人とも良いかな？)」

「(ええ、良いですよ)」

「(わたしたちは大丈夫ですわ)」

ガイドブックを見ると、今シユン達のいる場所からだとかポケモンセンターが近い事に気づいたシユンはちょうど良いと思ひ：ポケモン達を万全に回復させようとポケモンセンターに行く事を決めて、メロエツタ達にも良いかなと確認すると「メロエツタ達も了承したのを聞くとシユン達はポケモンセンターへと向かって歩き始める。

「それにしても！街の中を進むに連れて人が多くなってるような気が：それに何だかポケモンと一緒に人が多いような？」

シユンがポケモンセンターへと向かって歩いていると段々と歩いている人が多くなり：その中でもポケモンを連れてくる人が多くなっている気がすると思う。

「ええ、そうですね。それにポケモンの方も何だか着飾った者が多いみたいです」  
「本当ですわね。いったい何なのでしょうね？」

シユンがそう思っていると「メロエツタとディアンシーもそう思うと言って何だか着飾ったポケモンが多い事に気づく。

シユン達がそんな話しをしながら道を進んでいたその時……

「ピィ〜〜〜」

突然、悲鳴らしき叫び声が横の建物の路地裏から聞こえてくる。

「今のって！」

「(その路地裏から聞こえてきたみたいだ)」

「(行ってみましょう!)」

シユンは歩いてきた直ぐ横にある建物の間の路地裏から悲鳴が聞こえてきた事に驚く。

どうやらその悲鳴は聞こえてきた路地裏のある建物の直ぐ横を歩いていたシユン達



ない。現在はカントー地方のおつきみやまでその姿を確認されている」

「やっぱり、こんな街中にピツピが居るわけない…って事は誰かのポケモンかな?」

シユンの思った通り”ピツピは滅多に見つからないポケモンで、こんな街中に野生のピツピが居るはずないと考え誰かのポケモンではないかと思う。

「(ええ、たぶんマスターの言う通りでしょう。そして”ピツピを襲ってるのはヤミカラスですね)」

「あのポケモンはヤミカラスって言うんだ：初めて見たな」

シユンは今度はピツピを襲っている数十羽のとりポケモンの方にポケモン図鑑を向ける。

「ヤミカラス…：くらやみポケモン。夜、姿を見かけると不吉なことが おきると信じられ忌み嫌われているポケモン。手癖が悪く光る物を好んで盗む：森の中や都会の路地裏などに生息している ジョウト地方で初めて確認されたあくタイプのポケモンである…：」

「なるほど…ヤミカラス…あくタイプか：初めて聞いたな」

シユンはポケモン図鑑に表示されるヤミカラスのデータの中に”あくタイプという初めて聞くタイプに不思議そうに呟く。

「(マスター!あくタイプというのはですね)」

メロエツタが”あくタイプ”について説明しようとしたその時!!

「(そんなことを話している場合ではありません!!早くピツピを助けないと!!)」

ディアンシーがそんな事を話している場合ではなく、早くピツピを助けないと二人に言い、ピツピは路地裏にあるゴミ箱の後ろに隠れてヤミカラス達の攻撃を何とか防いでいた。

「おっと!そうだね。ピツピを助けよう!出てきて」ヒノアラシ!ワニノコ!

「ヒノ!」

「ワニヤ!」

ディアンシーに言われて、シユンはピツピを助けるためにボールからヒノアラシとワニノコを出す。

「ヒノアラシ、ワニノコ!!ピツピを助けるんだ!」

「ヒノ!」

「ワニヤ!」

シユンがピツピを助けるように言うと、ヒノアラシ達は領いて襲われているピツピの所に向かって行く。

「ヒノアラシ、かえんほうしゃ!ワニノコ、みずでっぼう!」

「ピッピ!!」

「ワ〜ニヤ〜!!」

かえんほうしや”と”みずでつぼう”がヤミカラスに向かって放たれる。

「「ヤミイ〜〜」」

「「ヤミイ!」」

ピツピを襲っていたヤミカラス達は突然の攻撃に交わしきれずに数十羽に攻撃が直撃する。しかし何体かは攻撃が来るのを察知して素早い動きで交わす。

「「ヤミイ!!」」

「「ヤミイ〜〜!!」」

ヒノアラシ達の攻撃が直撃したヤミカラス達も体制を立て直すとは攻撃をしてきたシユン達を睨み、攻撃を交わしたヤミカラス達もシユン達を睨みつける。

「ヤミカラス達!ピツピを襲うのは止めるんだ!!止めてくれたらこつちもこれ以上攻撃しない」

「ヒノ!!」

「ワニヤ!!」

シユンはヤミカラス達にピツピを襲うのを止めるように説得し、止めてくれたらこつちも攻撃しないと最終警告のつもりで言う。

「「ヤミイ!!」」

「「ヤミイ〜!!」」

しかし”ヤミカラス達はシユンの説得を聞き入れずに、攻撃をしてきたシユン達に向かってくる。

「しかたないな・ヒノアラシ、かえんほうしゃ!ワニノコ、みずでっぼうだ!!」

「ヒ〜ノ〜!!」

「ワニヤ〜!!」

警告を無視して向かって来る”ヤミカラス達を見たシユンは仕方ないと思うと、ヒノアラシとワニノコに迎撃を指示し、ヒノアラシとワニノコは向かってくるヤミカラス達に攻撃を放つ。

「「ヤミイ〜」」

向かって来たヤミカラス達はヒノアラシ達の攻撃を受けて吹っ飛ぶ。

「…・…・パイ〜?」

ピツピは突然、ヤミカラス達の攻撃が来なくなった事に不思議がりこっそりとゴミ箱の後ろから覗くと”シユン達がヤミカラスと戦っている姿を目にする。

「「ヤミイ…!!」」

ヒノアラシ達の迎撃の技を受けても”ヤミカラス達はダメージを負ったが敵意を剥き出しにしてシユン達を睨みつける。



「ヤミカラス達……ぼく達はこれ以上……意味のない戦いはしたくない……ピツピを襲うのを止めてくれるだけでいいんだ……」

シュンはヤミカラス達にこれ以上意味のない戦いをしたくないと……ピツピを襲うのを止めてほしいと再度説得する。

しかし”シュンの再三の説得にも関わらずヤミカラス達は敵意を剥き出しにして睨みつけている。

「……もしこれ以上続けるって言うなら……ぼく達もここからは……本気でいくよ!!」

「ヒノ!!」

「ワニャ!!」

説得を続けても敵意を剥き続けるヤミカラス達にシュンはこれ以上続けるようならこちらも本気でいくとあってヤミカラス達を少し目を鋭くさせて睨みつける。

シュンのその言い様は優しいように聞こえるも込められた感情はそれを感じさせないほど冷え冷えとしている感じがしてそこはなとなく静かな迫力が込められていた。

トレーナーであるシュンのそんな感情を感じ取ってかヒノアラシとワニノコも目を鋭くさせてヤミカラス達を唸り威嚇する。

「……ヤミイ!!? ヤミイ……!!?」

ヤミカラス達はシュン達から感じる静かな怒りの気配に恐怖を感じたからかヤミカ

ラス達はピツピ達を襲っていた事や、シユン達に攻撃された事の怒りを忘れて一斉に飛んで逃げて行く。

「ふう：良かった：これ以上戦う事にならなくて」

「ヒノ：」

「ワニヤ〜」

シユンはヤミカラス達が逃げて行くのを見て：これ以上戦う事にならなくて良かったと安心し、そんなトレーナーであるシユンの様子を見てヒノアラシも安心し”ワニコはシユンの感情の高ぶっている姿を初めて見て以外だと言う目を向ける。

「(少々以外でした：まさかマスターがあのようにヤミカラス達との戦いを諫めるとは：)」

「(ええ：でもお互い大きな怪我がなくて良かったですわ！)」

驚いていたのはワニコだけではなく、メロエツタもまさかシユンがあのような感じでヤミカラス達との戦いを諫めた事に驚き、デイアンシーもシユン達や”ヤミカラス達の方にも大きなダメージや怪我がなく終わって良かったと微笑む。

「そうだね：何でヤミカラス達がピツピを襲っていたかは分からないけど：あれ以上ヤミカラス達を傷つけたくなかったし、とにかく良かったよ」

シユンはそう言ってゴミ箱の後ろに隠れているピツピの元へと歩いて行く。

「…ピイピイ…ピイ!？」

ピツピはまたもやゴミ箱の後ろから顔を覗かせると、シユン達がこちらに近づいて来るのを見て慌ててゴミ箱の後ろに隠れる。

「怖がらなくていいよ…ピツピ…ヤミカラス達も追い払ったし、ぼく達はキミを傷ついたりしないよ…だから怖がらずに出ておいで」

シユンは怖がつて隠れているピツピにヤミカラスも追い払ったし、自分達はキミを傷ついたりしないから安心して怖がらずに出て来るように優しく言う。

「ヒノヒノ!」

「ワニャー!」

ヒノアラシとワニノコモシユンの隣でピツピに安心するように言って説得する。

「…ピイ…ピツピ…」

シユン達にそう言われて、ピツピは恐る恐ると言った様子でゴミ箱の後ろからそつと出て来る。

「もう大丈夫だよピツピ…ヤミカラス達は追い払ったからね。もうキミを傷つける者はいないよ」

「ピツピ…ピツピピイ!!」

シユンがそう言う」と、ピツピは安心したのか、笑顔になって跳ねて喜ぶ。

「それにしても・何でキミはヤミカラス達に襲われていたんだい？」

シユンはピツピにどうしてヤミカラス達に襲われていたのかと聞く。

「ピッピイ？・ピイー・ピイピイ」

ピツピはシユンの問いに顔を傾けながら話しですが……しかし。

「えっとう？」

当然、ピツピの言っている事が分かるはずもなく、シユンは頭に？を浮かべる。

「(マスター：やはりこのピツピは野生ではなくトレーナーのポケモンらしいです)」

「(どうやらトレーナーとはぐれてしまい迷子になっていたところをヤミカラス達の縄張りに入ってしまったい襲われたようですわ)」

そうしていると、メロエツタとディアンシーからピツピが何を言っているか教えてくれる。

このピツピは野生のポケモンではなく、トレーナーのポケモンであり、トレーナーとはぐれて迷子になっていたところをヤミカラス達の縄張りに入ってしまったい襲われていたらしい。

「やっぱりトレーナーのポケモンか・そうだよね。野生のピツピがこんな大都會の中にいるはずないもんね」

メロエツタ達からピツピの言っている事を聞かされたシユンは、やはり野生のポケモンではなくトレーナーの手持ちのポケモンかと納得する。

「よし！それじゃピツピ。ぼく達がキミのトレーナーと一緒に探してあげる。」

「ピツピ!!ピイピピイ~~~~♪」

シユンがピツピのトレーナーと一緒に探してあげると言うのと、ピツピは嬉しいのか飛び上がって喜ぶ。

「（それが良いでしょう。こんな所でピツピ一人になったらヤミカラスだけでなくこの辺りを縄張りとしている他のポケモンにもまた襲われるかもしれません）」

「（ええ！一緒にピツピのトレーナーを探しましょう）」

メロエツタとディアンシーもこのままピツピを放って置けば最悪、ヤミカラスだけでなくこの辺りを縄張りとしている街の野生ポケモンにも襲われる可能性を示唆して、シユンの言う事に賛成し、一緒にピツピのトレーナーを探す事を決める。

「その前にその傷を治療しようか・ピツピ、ちよつと我慢してね」

「ピツピ・ピイ!!」

シユンは“ピツピのトレーナーを探しに行く前にヤミカラスに襲われて少ない傷を負ったピツピを先に治療しよう”とリュックからキズぐすりを出して“ピツピに少し我慢するように言って傷がある部分に振り掛ける。”

ピッピは少し怯えながらもシユンの言う通りにおとなしくしており”キズぐすりを振り掛けられて傷に染みた痛みで呻く。

「これでよし・よく我慢したね。ピッピ」

「ピッピイー！」

シユンがよく我慢したと誉めるとピッピは傷の痛みが消えた事とシユンに誉められた事で嬉しくなりハシヤぐ。

「それじゃあ”ピッピのトレーナーを探しに行こっか！」

「(ええー)」

「(はいー)」

「ピッピ♪」

「おっと・その前によくやってくれたね。ヒノアラシ、ワニノコ。ご苦労様・戻って！」

シユンはヒノアラシとワニノコをボールに戻して、ピッピのトレーナーを探すために路地裏から出る・なお、ピッピはシユンの両腕に抱かれている。

「さてと・そうは言ってもどうやってこの子のトレーナーを探そうかな？」

シユンは路地裏から出ると、周りを見渡しながらピッピのトレーナーをどうやって探そうかと考える。

路地裏から出て周りを見回してもそこは相変わらず大勢の人が歩いており：誰が”

ピツピのトレーナーが皆目見当もつかないのである。

「どうだいピツピ・キミのトレーナーの人はこの人達の中にいるかい?」

「ピィ〜?ピィ……」

シユンが今、歩いている人達の中にピツピのトレーナーが居るかと訪ねるとピツピはシユンにそう聞かれると目の前を歩く大勢の人達を目を凝らしてじい〜と見る。

「…ピィ〜……」

しかし居なかったのか”ピツピは首を横に振る。

「そうか…居ないか…それじゃ地道に探すしかないか…行こう」

「(ええ!)」

「(はい!)」

「ピィ!!」

シユンはやはり地道に歩いて探すしかないかと納得し、この場所から歩き出してピツピのトレーナーを探す。

シユン達はピツピを最初に見つけた路地裏からピツピのトレーナーを探して歩き出す。

ジョウトのガイドブックのコガネシティの欄を参考にしながらピツピのトレーナーを探して色々な場所を歩いて行く。

コガネシティにある様々なお店・コガネデパートの中・コガネジム（ジムは休業でジムリーダーは不在だった）

そして現在” シュン達はコガネシティのポケモンセンターで休憩ついでにポケモンを回復させてもらっていた。

「はい！お待たせ致しました。シュンさんのポケモンは全員元気になりましたよ」

「ラッキー!!」

「ありがとうございますジョーイさん」

シュンはジョーイさんからポケモンを受け取るとジョーイさんに抱いているピッピのトレーナーの事を訪ねる。

「えっ！このピッピのトレーナーを知らないかですって？」

「はい：色々な場所を探したんですが見つからなくて：何か心当たりはありませんか  
：」

シュンはジョーイさんに抱いているピッピを見せながら心当たりはないかと訪ねる。

「ウゥン：ゴメンなさいね。この街は広いし人も多いから：いくらピッピが珍しいと言っても、持つてる人も居ると思うし：ちよつと分からないわね」

「そうですか：ありがとうございます」

シュンはジョーイさんが知らない事が分かると、お礼を言って再びピッピのトレー



ナーを探すために歩き出す。

「あつ、そうだわ!コガネ公園に行ってみたらどうかしら?もしかしたらそのピッピのトレーナーもそこに来てるかもしれないわ」

ポケモンセンターを出ようとしたシユンに”ジョーイさんは思いついたようにコガネ公園に行ってみたら良いと教えてくれる。

「コガネ公園ですか?…どうしてそこにピッピのトレーナーがいるつて?」

「だって今日は年に一度のコガネフェスティバルの日だもの!」

「コガネフェスティバル…ですか?それっていったい?」

シユンが何でコガネ公園にピッピのトレーナーがいると思つたのかを聞くと、ジョーイさんは今日はコガネフェスティバルのある日だと教えてくれた…シユンはコガネフェスティバルとは何かジョーイさんに訪ねる。

「コガネフェスティバルって言うのはね…コガネシティで年に一度開かれるイベントなのよ。トレーナー達の自慢するポケモン達で競う大会で、自分のポケモンを綺麗に着飾ったりしてその年一番の綺麗で美しく、そして強いポケモンを決めるのよ。そして優勝者には優勝トロフィーと、その年の街一番のポケモンとトレーナーの称号と、コガネシティの飲食店無料パス。そしてその他の賞品が授与されるのよ」

「はあ…そうなんですか」

ジョーイさんがテンションを上げてコガネフェスティバルの事を説明する様子にシユンは呆気に取られながらも相槌を打って聞いている。

「はっ！ごっ／／／ごめんなさい／／／！！私つたらしい興奮しちゃって／／／／とにかく、そのコガネフェスティバルは毎年大人気だから、もしかしたらそのピッピのトレーナーも見に行っているかもしれないわ」

「なるほど・その途中でトレーナーとはぐれてしまったかもしれないですね：分かりました。その場所に行ってみます：ジョーイさんありがとうございました！」

シユンはコガネフェスティバルの事を教えてくれたジョーイさんにお礼を言うとそのイベントが開かれているコガネ公園へと向かう。

シユンはジョーイさんに教えてもらった通りにコガネフェスティバルが開催されているコガネ公園へと行くと、そこは色々とコガネフェスティバルの飾りでいっぱいだった。

入口にはコガネフェスティバルの会場の看板があり、そこから入ると色々と綺麗な装飾がされており：その道中には色々と屋台が並んでおり奥の方に行くとき：そこには煌びやかなステージがあり、その横には審査員席らしき物もあり周りには観客席もありそこにはもう既に大勢の観客達が座っており、参加者達の控え室の入口には警備員もおり参加者以外入れないようにしている。

まだ大会は始まっておらず色々このイベントのスタッフらしき人達が準備に走っており、入口でもらったパンフレットを見ると…コガネフェスティバルが開催されるまでまだ少し時間があるようだ。

「凄いな・ジョーイさんから年に一度の人気イベントだと聞いていたけど…ここまで凄いなとは思わなかったな」

シユンはコガネフェスティバルの会場の設備の凄さと参加者の多さ、それと観客や見物客の多さに正直ここまで大きなイベントで街の人達にも人気だとは思っていなかったため思わず驚いてしまう。

メロエツタとディアンシーは大勢の人数の気配と騒音、会場に流れる音楽の煩ささに参ってしまいシユンに一言言った後でボールの中へと入ってしまった。

「さてと…この中にキミのトレーナーはいるかな?」

「ピー?ピー…」

シユンは腕に抱くピツピを見ながら会場内にピツピのトレーナーが居るのか探し、ピツピも会場内にいる人達を見渡し探す。

会場に続く道にある屋台による人達。観客席で大会を見学する人達。大会の準備をするスタッフの人達とポケモンのコンディションや衣装合わせなど大会参加の準備をする人達。審査員席の調子を確認するスタッフと審査員らしき人達。

色々と辺りの人達を見回しており、審査員の人達を目にしていたその時。

「ピッピイ!!ピイ!ピイ~~~~!!」

ピッピが審査員の人達の中にいる一人の女の人の目をにした時にシユンの腕の中で手を必死に振って何かを伝えようとする。

「どうしたのピッピ?」

「ピイ!!」

シユンはこれまでと違った様子のピッピにどうしたのかと訪ねると、ピッピは必死に手を伸ばしてある所に指を差す。

ピッピの指を差す方を見るとそこには桃色の髪を二つに結んだ髪型して服装も可愛い感じの上下白い服にピンクのラインの入った服のシユンよりも五つばかり上のスタイル抜群の可愛い女の人が審査員席に座っていた。しかしその様子は何だかソワソワとして落ち着きがなく表情も何だか不安な感じに見える。

まるで、何か気がかりな事があつて不安で不安で仕方なく今直ぐにでもその場から動き出してその不安のもとを解消したいと言った様子に思えた。

「もしかして…あの女の人がピッピのトレーナーなの?」

「ピイ!!」

シユンはピッピのその様子を見て審査員席に座るあの女の人が「ピッピのトレー

ナーなのか聞くとピツピは嬉しそうに笑顔で頷く。

ピツピが頷いたのを見たシユンは審査員席に座るピツピのトレーナーのもとへと向かって歩いて行く：シユンが女の人の元へと近づいて行くと：女の人がこちらの方に顔を向けると驚いた表情をした後に思わず立ち上がる：そして。

「ピツピ!!」

「ピイツピー」

ピツピのトレーナーの女の人がピツピを呼ぶとピツピもシユンの両手から飛び出して嬉しそうに笑顔でその女の人に抱きつく。

「もう～～ピツピィ～～!!何処に行つとんたんや～～：あれはどうちから離れちゃアカンて言うたやんかあ!!」

「ピピィ～～」

女の人は抱きついてきたピツピを優しく受け止めると、あれほど注意したにも関わらず自分から離れて迷子になったピツピを優しく叱る。

ピツピもヤミカラスに襲われるという怖い目にあつたからか自分のトレーナーにあえて安心したのかトレーナーの女の人にしがみついて泣きつく。

「まったく…しゃあないなあ～～！でもホンマ無事で安心したわあ：」

「ピィ～～」

女の方はピッピのその様子にしようがないなど呆れるも無事で本当に良かったとピッピを強く抱きしめて”ピッピも気持ち良さそうに女の人に抱きつく。

そのトレーナーに会えて喜ぶピッピをシユンは笑顔で見つめていた。

「良かったねピッピ。」

シユンがそう思っているとピッピを伴ってトレーナーの女の方がシユンの元に来る。

「あんさんがうちのピッピを探して連れて来てくれたんやな、ホンマにありがとう。うちアカネって言います」

「ぼくはシユンです。そんなお礼を言われるほど大した事はしてませんよ。」

ピッピのトレーナーの女の方は自分の名「アカネ」を名乗ると、シユンにピッピを探して連れて来てくれた事にお礼を言う。シユンも自分の名を言うと言った事はしていないと言う。

「そんなことないで・キミのおかげでピッピも無事だったんや！感謝してもしたりないぐらいやで」

謙遜するシユンにアカネはシユンのおかげでピッピも無事でいられたんだと感謝でいっぱいと言う。

「そうですか・道を歩いていたら路地裏の方でヤミカラスに襲われてるピッピを見つけましたよ。怪我もしてたんで軽く治療もしてきましたよ」

「ホンマにありがとうな。うちもここに来る途中でピツピが居なくなったことに気づいて探しとったんやけど……うちはコガネフェスティバルの審査員やねん。そんで始まるギリギリまでピツピを探しとったんやけど、見つからないうちに時間になつてもうて”ピツピを探すのは友達に任せたんや・」

シユンがピツピを見つけた時の状況をアカネに説明すると、アカネは改めてシユンにお礼を言う：自分もピツピが居なくなっている事に気づいて探すも見つからず：アカネはコガネフェスティバルの審査員に選ばれており、開催の時間ギリギリまでピツピを探していたが等々開始まで後僅かの時刻になつてしまったため仕方なく友達にピツピ搜索を任せて、アカネはコガネ公園にあるコガネフェスティバルの会場に向かい、審査員席で開始の準備が終わるのを待つていたところにピツピを抱いたシユンがやつて来たというところである。

「けど・ウチな……ここで待つてる間もずっと不安だったんや：友達が探してくれてるのは分かつとったけど……ピツピが危ない目に合つて取り返しのつかないことになつてもうたらどうしようつて……」

アカネはフェスティバル会場の審査員席で待つてる間もピツピが危ない目に合つていないかと、もしも取り返しのつかないことになつたらと不安な気持ちが駆け巡つていた。

友達がピツピを探してくれているとはいえ不安な気持ちは消えなかった。

「そしたら・案の定や!!ピツピは危ない目に合つとつた・こんなことならフェスティバルのスタッフさん達には悪いけど・出れないって謝つて探しに行けば良かったわ・:」

そして” シュンからピツピを見つけた時の状況を聞き・案の定、はぐれてしまったピツピが危ない目に合つていた事が分かり、こんな事ならコガネフェスティバルのスタッフの人達や主催者達には急で悪いが・審査員を辞退して自分で探しに行けば良かったと後悔の念に包まれる。

「・幸いシュンくんのおかげでピツピも大した事にならずにすんだけど・:これじゃトレーナー失格やな・自分のポケモンの事を後回しにしとつたんやからな・:ゴメンなピツピ・:」

「・ピィ?」

アカネはピツピをギュツと抱きしめて” シュンのおかげで大事にならずにすんだが、一歩間違えればどうなっていたか分からない・それなのにフェスティバルの審査員の任されていたとはいえ自分のポケモンの事を後回しにしてしまった事実には・これではポケモントレーナー失格だと・情けなさ”ピツピに対する申し訳なさでその目に涙を浮かべてピツピを強く抱きしめる・ピツピはアカネを不思議そうに見上げながら今にも目からこぼれそうな涙の滴を小さい指でそつと拭う。



「アカネさんはとてもポケモンの事を大切に想っているんですね。ぼくが言うのも何ですがそれだけでアカネさんは立派なポケモントレーナーだと思いますよ。そうだね。ピッピ」

「ピッピ!!」

アカネのその様子を見たシユンはアカネがそれだけポケモンの事を大切に想っているのだと強く感じ、自分が言うのも何だけど、それだけでアカネが立派なポケモントレーナーだと思うと言い、ピッピにもそうだねと聞くと、ピッピもその通りと言うように笑顔で頷く。

「…ピッピ…シユンくん…ありがとうございます…うち、元気でたわ!!」

シユンとピッピが自分を励ましてくれた事に嬉しくなり「アカネはピッピに対する罪悪感で落ち込んでいたが、元気が出てきたと指で涙をすくって笑顔でお礼を言う。

「いえ、アカネさんが元気が出たみたいで良かったです!それじゃあぼくはこれで…」

シユンは気落ちしていたアカネが少し元気になったのを見て良かったと思い、迷子のピッピを無事にアカネに届けられたため、それではと言ってアカネとピッピに別れの挨拶をしてその場から去ろうとする。

「あつ!ちよつと待ってシユンくん!!シユンくんはこの後何か予定とかある?」

去ろうとするシユンにアカネがちよつと待ってと呼び止め、シユンに何かこの後に予

定があるかと訪ねる。

「いえ・実はコガネジムに挑戦しようとして来たんですが、探す途中にコガネジムに行ってみたら」コガネジムが休業になっていたので：今日はポケモンセンターでポケモン達のコンデイションを見ながらジム戦に備えるつもりです」

アカネの質問にシユンはコガネジムに挑戦するためにコガネシティに来たのだが：ピツピを探す途中でコガネジムの方に行った時にジムが休業だと言うことを知り、今日はポケモンセンターで休みながらポケモン達のコンデイションを見ながらジム戦に備えるつもりだと応える。

「そうやったんか：ふふ、シユンくん。そんならピツピを探してくれたお礼もしたいくら、悪いんやけど大会が終わるまでちよつと待つといてもらえんかな？ 終わったらうちがコガネシティのいろんな場所を案内したるわ！」

シユンがコガネジムに挑戦すると聞くとアカネはそうだったのかと意味深に笑みを浮かべて、ピツピを探してくれた御礼にコガネシティの色々な場所を案内したいから悪いけど、ちよつと待つてもらえるようお願いする。

「いえそんな：御礼をもらうほどの事はしていませんし：それに気持ちは嬉しいんですが明日のジム戦にも備えておきたいんで、あまり長い時間かかるのはちよつと

……」

礼をしたいから待つというアカネにシユンは御礼をしてもらおう程の事はして  
いないと言い、その気持ちは嬉しいが明日のジム戦にも備えておきたいからと長い時間  
かかるのはちよつととやんわりと遠慮する。

「そんな事言わずにお願いやシユンくん!それにジムは明日も休みやで」

「えっ!明日もジムは休みですか!!」

遠慮するシユンにアカネは再度、御礼をさせてほしいとお願ひし”シユンに明日もコ  
ガネジムは休みだと教えると、ジムが明日も休みだと聞いてシユンは驚いて思わず聞き  
返す。

「そうなんや!コガネフェスティバルの開催日は毎年ジムは休みになるんや。ジムの人  
達も開催の準備の手伝いとかなないとせえへんからな:ジムリーダーもその日は毎回  
大忙しなんや!」

「そうなんですか:あれっ?でもコガネフェスティバルって今日ですよね:それなら  
何で明日もコガネジムは休みなんですか?」

アカネはコガネフェスティバルの開催日にはジムリーダーやジムの人達は開催の準  
備の手伝いなどで忙しいため毎年コガネフェスティバルの開催日にはコガネジムは休  
業になっている事を教えてくれる。

アカネからジムの休みの理由を教えてもらっていたシユンは聞いていて疑問が浮か

ぶ：コガネフェスティバルの開催日は今日なのに何故明日もジムが休みになるのかと思いいアカネに訪ねる。

「それはな！コガネフェスティバルは2日間開催されんねん。一日目は予選でな：ポケモンの美しさや育て具合なんかを審査すんねん：それで予選を勝ち抜いた：まあ参加人数にもよるんやけどだいたい十六人位やな。その勝ち残った十六人が二日目の本戦に勧めるんや！

本戦はポケモンの強さやトレーナーのバトルの腕なんかを評価を審査して、優勝者を決めるんや！大会の審査員とバトルしてな！ただバトルで勝ってもトレーナーの評価しだけで失格になるんや！」

アカネはコガネフェスティバルが予選と本戦が二日に分けて開催される事を説明する。

一日目は予選が行われて、ポケモンの美しさや育て具合などを審査し、その年の参加人数にもよるがだいたい十六人が勝ち抜いて二日目の本戦へと勧める。

そして二日目はポケモンの強さやトレーナーとしての能力を審査する。

大会の審査員とバトルをしてその審査員が評価する：ただしバトルに勝てたとしてもトレーナーのポケモンの指示が悪かったりすると、失格になる場合もあると教えてくれる。

「で、そういうわけで明日もコガネフェスティバルの準備の手伝いがあるからコガネジムは休みなんや!」

「そうだったんですか…明日も休みか…どうしようかな…」

「やからシユンくん!!お願いや!このままお礼も出来へんかったらうちの気がすまへん。予選は午後中に終わるからそれまで待つててくれへんか?」

「…分かりました。それじゃあお言葉に甘えさせてもらいます…」

シユンが明日もジムが休みだと教えてもらい、これからどうしようかと考えていると改めてアカネがお礼に街を案内したいから待つていてほしいとお願ひし、アカネのその一生懸命にお願ひする様子を見たシユンは今日と明日の二日間ジムが休みだと言うこともあり甘んじてアカネのお礼を受ける事に決めた。

「良かったわ!ありがとうなシユンくん。ほんなら悪いけど、あそこで待つててや!スタッフにはうちから言つとくから、あつ!ピツピが見つかった事みんなに伝えんとアカンな」

アカネはシユンにお礼を言うのと審査員席の裏にあるテーブルに座つて待つてるようにお願ひしフェスティバルのスタッフには自分が許可を取つておくと言う。

そして今思い出したと言うようにピツピが見つかった事を友達に知らせようとポケギアで連絡する…その時”アカネの後ろからスタッフがフェスティバルの始まる時間

だと言うことを知らせにくる。

「あつ！もう始まるみたいやな・それじゃシユンくん。終わったらすぐに街を案内するから待つててな！」

アカネはシユンに待つてるようにお願いしピツピを抱えて審査員席へと向かい座る。

「はあ・まさかジムが二日連続で休みだなんて……仕方ないからアカネさんを待とう」

シユンはジムが二日間休みな事もあり：言われたとおりにテーブルで座つて予選が終わつてアカネが来るのを待つ事に決める。

ただ座つて待つているのも退屈なので、どうせ待つならフェスティバルの予選を見て待とうとステージの方に目を向ける。

どうやら準備も終わったようでコガネフェスティバルの開会式をやっているようで、進行役の人がコガネフェスティバルについての説明をした後でコガネシティの市長らしき人の手短な挨拶の後にルール説明や審査員の人達の紹介：そしてアカネさんも紹介される。

進行役の人がアカネさんを紹介する時にコガネシティではお馴染みと言っていたが、どういふことだろう？とシユンは疑問に思う。

シユンは市長の挨拶やフェスティバルの説明の間にお店で飲み物と軽く食べ物を買、元いたテーブルへと戻るとどうやら開会式が終わり予選が始まったようだ。

今年のコガネフェスティバルの参加人数は200数人：予選は一回に四人のトレーナーがポケモンを出して美しさや育て具合などを対象に最も優れた一人が勝ち上がる形式らしい。

そして四人のトレーナーがそれぞれ自分が綺麗に着飾ったポケモンを連れてステージへと上がって来る：ステージをトレーナーとポケモンが一緒に歩いた後にしばらく止まる：審査員達が参加者達のポケモンを見て色々とチェックし評価していく。

そして進行役の人が審査終了を知らせると一組目の四人がステージから降りて二組目がステージへと上がって来て再び審査していく。

そんな感じで一組四人ずつの審査が繰り返されていく：シユンはそんな様子をテールからジツと見る。

「すごいな：みんな自分のポケモンを綺麗に着飾ったりしてそのポケモンの持つ魅力を引き出してる……」

フェスティバルの参加者と共にステージに立つ各々のトレーナーによって綺麗に着飾られたポケモン達。

トレーナーによって本来そのポケモンの持つ魅力などが引き出されている事にシユンは驚くと同時にステージを歩く美しく着飾られたポケモン達に魅了された。

そうしてどんどんとフェスティバルが進行し参加者達が美しく綺麗に着飾った自慢のポケモン達を審査員達がじつくりと観察し評価を付けていく。

そのように審査員が一組に四人とそのポケモンを評価していき最も評価が高かった一人にチェックを入れていく。

それから数時間が立ち次々と審査していき残り数十名の参加者を審査すれば予選が終了し後はフェスティバルの言葉通り祭りだけとなる。

それからどんどんと審査が進んでいき：もう少して予選が終わろうとしたその時!!

ドォォン!!ドォォン!!

「なんだ?」

「突如、ステージの方で爆発が起こり」シユンはその大きな音に驚いて思わず立ち上がりステージを見る。

すると突然：ステージに煙幕が巻かれてステージ裏からバズーカ砲か何かで穴を開けてそこから黒服に黒帽子、胸にRのマークのある集団がどんどん出てきてステージと観客席の回りを取り囲む。

シユンはとっさにステージ裏の茂みへと隠れる。

「なんなんだね!君達は!!」

突如、ステージ裏を破壊して自分達を取り囲む黒服の集団に審査員が何なんだと怒っ



たように訪ねる。

「我々は悪の秘密結社R団!!この会場は我々が占拠した。おまえたちのポケモンは全て我々R団が頂く。」

「コガネフェスティバルに出てるポケモンは美しくレベルも高いからな!俺たちが使うもよし!売るもよしで俺達には得しかねえぜ!!」

黒服の集団は自分達をR団と名乗り、会場にいるポケモンを全て頂くと宣言する。

突如現れた黒服の集団がR団だと分かると会場の人達や観客がパニックになり騒ぎ出す。

「静かにしろ!さあ、大人しく我々にポケモンを差し出せ!!」

「なんやて!だれがあんたらなんかウチの大事なポケモンを渡すか!」

先程の桃色の髪の少女がアカネがR団に恐れず強気な様子で自分達のポケモンは渡さないとピッピを抱きしめながら懐のモンスターボールに手を伸ばす。

「おっと!抵抗をするなよ。抵抗したら観客のヤツらがどうなっても知らないぜ?」

「くっ!」

R団は「アカネのその様子を見て観客を人質に取り抵抗するな」と言い、観客席を取り囲む団員に合図を送るとボールからポケモン、ズバットやドガースを出して観客の人達に向けさせ脅すと」アカネは悔しそうにしながらボールから手を離す。

「あれが：カントーやジョウトでポケモンを使って悪事を働くって言うR団：：まさかコガネフェスティバルが占拠されるなんて：観客も人質にされてるし迂闊に動けない：いったいどうしたら：）」

シユンはステージ裏の茂みからステージの様子を見ながらどうすればいいかと必死に考える。

コガネシテイへと到着したシユンは早速、コガネジムに挑戦しようとジムへと向かう途中に路地裏でヤミカラス達に襲われているピツピを見つけ助ける。

珍しいピツピが街中にいる事を疑問に思ったシユンはこのピツピがトレーナーのポケモンだと思い、ピツピのトレーナー探しに色々な場所を周り”コガネ公園で開催されているコガネフェスティバルの会場へとたどり着くと、そこではポケモン達の品評会のような事が行われていた。すると審査員席に座る少女”アカネがピツピのトレーナーだと分かり、アカネはピツピを届けてくれたシユンにお礼をしたいからと：今日のフェスティバルの予選が終わった後にお礼に街を案内してくれると言って”シユンは会場の裏の机で待つ事になった。

そこにR団がコガネフェスティバルの会場へと強襲してくるのだった。

ステージにいる市長やアカネや他の審査員達：そして観客達を人質に取られ抵抗も出来ずにいた。

フェスティバルの参加者のポケモンや観客のポケモン達を寄越すよう要求するR団  
：人質も取られて抵抗も出来ずに八方塞がりの中……ステージの裏の茂みに隠れた  
シユンは：どうすればと迷う。

果たして、シユンはこのピンチを切り抜けR団の魔の手からアカネや街の人達を救え  
るのだろうか!!

# 第十七話　コガネシティ大パニック！R団強襲：後編！！

前回のあらすじ

コガネシティに到着したシユン達は：ジムに挑戦するためにコガネジムへと向かう。

その途中の道の路地裏から悲鳴が聞こえて、シユン達は慌てて向かうとそこには：ヤミカラス達に襲われているピツピが居た。

シユン達はピツピを助けるとピツピは野生ではなくトレーナーのポケモンであることが分かり、シユン達はコガネシティの様々な所を巡り、ピツピのトレーナーを探しているとポケモンセンターのジョーイさんに今日はコガネフェスティバルというポケモンの品評会のような大会が開催されているという話しを聞いて：会場であるコガネ公園へと向かうとそこには参加者や観客の人達でいっぱいだった。

そして会場のステージ近くまで来ると：ピツピが審査員席に座っている桃色の髪の少女を目にするとピツピはシユンの抱く手から飛び出してその少女の元へと行き、少女も気づいて笑顔でピツピを抱き抱える。

少女は自分の名をアカネと名乗り：ここに来る途中にピツピとはぐれてしまい：不

安に思っていたところにシユンがピツピを連れて来てくれたので安心する事が出来た。

お礼にフェスティバルの審査が全て終わったらコガネシティを案内してくれるという申し出を、シユンはジムに挑戦しようと思っていたこともあり一度は断るが：コガネフェスティバル開催中の間の2日間はコガネジムは休業だとアカネから聞かされて、そしてどうしてもお礼をしないと気が済まないというアカネの気持ちを聞いてお言葉に甘えて案内してもらうことになった。

今日のコガネフェスティバルの審査が終わるまでシユンは会場のステージの裏で待つことになり裏にあるテーブルに座って待っていると、大会が始まり、次々と参加者が自分の自慢のポケモン達をアピールしていきアカネを含む審査員達が次々に審査していたその時!!

突如、ステージの方で爆発が起こり煙幕の中から黒服に胸にRマークの付いた集団が出て来てステージと観客席の周りを取り囲んだ。

シユンは咄嗟にステージ裏の茂みに隠れて様子を見る。

そして黒服の集団は自分達を悪の秘密結社R団と名乗り：コガネフェスティバルに出ているポケモンや観客席に居る人達のポケモンを全て頂くと宣言するのだった。

ステージにいたアカネはボールを出して抵抗しようとするが：観客の人達が人質に取られて手を出すことができずにいた。他の人達も人質を取られて動くに動けない。

今、自由に動けるのはステージ裏の茂みに隠れているシユンだけだった。

コガネシティのコガネ公園で開催されたコガネフェスティバルにR団が強襲するのだった。

「我々は悪の秘密結社R団！この会場はすでに我々が占拠した！」

コガネシティのコガネ公園で開催されていたコガネフェスティバルの会場：そのステージの上で数十人の黒服の集団の中に1人だけ白い上着を羽織った部隊のリーダーらしき男性がすでに会場を占拠したと会場に居る人達：全員に聞こえるように高らかに叫ぶ。

リーダーの言う通り会場の入り口には数人のR団員が配置されそこからグルリと取り囲むように会場の周りに立ち観客席にも数十人の隊員が配置され、ステージには部隊のリーダーの男とその後ろに率いるように2人のR団員が立っていた。

「抵抗はするな！貴様らのポケモン達は我々が頂く。大人しくポケモンを差し出せ！」  
そして部隊のリーダーの男は会場に居る人達のポケモンを差し出すように言う。

「何言ってるねん！ウチらの大事なポケモンをアンタらなんかに渡せるか！」

「そうだそうだ！」

「渡すわけないだろう！」

審査員席に立つアカネが自分達の大切なポケモンをR団などに渡せるか!と反発し、それを皮切りにフェスティバルの参加者や審査員達もその通りだと・渡すわけないだろうと同意していき、R団を倒そうと自分のポケモンの入ったボールを構える。

「おっと! いいのか? 抵抗すれば客席に居る奴らがどうなっても知らんぞ?」

アカネ達が反抗的な態度を取っているの見て部隊のリーダーの男は後ろの隊員に指示し、隊員はポケギアで客席に居るR団隊員に連絡し、客席の人達を人質に取らせる。

「キャア!」

「ウエーン(泣)」

ステージから少し離れた客席の方に配置するR団が部隊のリーダーの男の指示を聞いて、脅しの意味でボールからドガスとゴルバットを出して観客席の人達を取り囲み、いつでも技を放てる体勢で威嚇すると・客席に居る女性の1人が悲鳴を上げ子供達は恐怖で泣き出してしまう。

「くっ! 卑怯や! 人質を取るなんて!!」

「フフフ。卑怯で結構! 悪の組織である我々には誉め言葉だ」

それを見たアカネは苦悶の表情になり、部隊のリーダーの男に人質を取るなんて卑怯だと言うが、男は卑怯で結構と嘲笑い、悪の組織の我々には誉め言葉だと愉快そうに笑う。

「さあ、人質を傷つけられたくなかったら早くおまえ達のポケモンの入ったモンスターボールをこの袋に詰めるんだ！」

リーダー格の男がそう言うと、横に待機するR団の隊員が大きい白い袋をアカネ達の前に投げ渡してそこにアカネ達のポケモンの入ったモンスターボールを入れるように言う。

アカネ達は悔しそうな表情で歯を噛みしめながらお互いに見つめ合い、何かR団を撃退出来る方法はないかと考えていると……。

「言っておくが……時間を稼いでジュンサー達が気づいて此処に来るのを待つつもりなんだろうが……無駄だ」

すると……アカネ達が見つめ合いR団を撃退出来る方法を考えているのを部隊のリーダーの男が何やら勘違いしたらしく……アカネ達がジュンサーがこの事態に気づいて此処に来るまで時間稼ぎしていると思い、無駄だと応える。

「どうやらコガネ公園の外に居た奴らがこの事態に気づいて通報したようだが……中までは入ってこられん……我々の仲間が入口に居て人質を使ってるからな！流石のジュンサーも人質が居ては手出しできんだろうからな……ハハハ!!」

先程からコガネ公園の外から聞こえて来るサイレンの音に気づいた部隊のリーダーの男は、コガネ公園で起きている事態に気づいたコガネ公園の外に居た通行人の誰かが



ジュンサーに通報した事に気づき、入口には他のR団員が配置しており、人質を使ってジュンサー達に手出しさせないようにしているからか愉快そうに笑みを浮かべてアカネ達に告げる。

「なんやって!!」

「そんな!」

「くそっ!」

その事実にはアカネは驚き、コガネシティの市長も落胆の表情になり、他の審査員の人들도どうすることも出来ずに悔しがる。

「さあ、早くおまえ達のポケモンを渡してもらおうか!」

「コガネフェスティバルに出場するトレーナーのポケモンはみんな良いポケモンだからな!高く売れるぜ!」

部隊のリーダー男の後ろに待機するR団員が早くポケモン達を渡すように言い、もう片方のR団員が愉快そうに笑みを浮かべて、コガネフェスティバルのポケモン達は強く綺麗でよく育てられているから高く売れるぜと憎たらしい笑みを浮かべる。

コガネフェスティバルの会場ではR団に襲撃され観客席の人達も人質に取られているため抵抗もできずにいた。

一方、シユンはR団がコガネフェスティバルを襲撃して来てから現在までの現状をス

ステージ裏にある茂みに隠れてその様子を見ていた。

「あれは……カントーとジョウト地方で暗躍しているポケモンを使って悪事を働くつて言うR団：まさかコガネフェスティバルを襲撃して来るなんて：あいつらの狙いは参加者のポケモン達みたいだな」

シユンは見つからないように隠れながらステージの様子を見ており、コガネフェスティバルを襲撃したのがカントー地方やジョウト地方で暗躍しているポケモンを使い悪事を働く悪の秘密結社R団である事に気づく。

まさかR団がコガネフェスティバルに襲撃して来るとは思わずに驚いており：コガネフェスティバルを襲撃するR団の部隊のリーダーらしき男とアカネとの会話を聞いてR団の狙いがコガネフェスティバルに参加しているトレーナーのポケモン達だという事が分かった。

「でも客席の人達を人質に取られてるみたいだし、迂闊に手出しできない：どうすればいい」

R段が客席の人達を人質に取っているため、迂闊に手出しもできずにどうすればいいのかと考えていると……

「マスター……ここはわたしにお任せ下さい！」

「メロエツタ？何か考えでもあるのかい」

R団に人質を取られてどうすることもできずにどうすればいいのかと悩んでいると：メロエツタがボールから出てきてシユンに自分に任せてもらおうように言い、それを聞いたシユンはメロエツタに何か考えが有るのかと訪ねる。

「はい！わたしがレポートでこっそり客席の方へ移動して、そこに居るR団達を倒します」

メロエツタは自分の力で客席にこっそりとレポートで移動して客席の人達を人質にしているR団員を倒すと説明する。

「そうか！メロエツタのレポートならR団達に気づかれずに移動して客席の人達を助けられるね！」

「その通りですマスター！それでは客席の方にレポートする前にヒノアラシとワニコを出して下さい」

メロエツタの説明を聞いて納得したシユンにメロエツタは客席の方にレポートで移動する前にヒノアラシとワニコをボールから出してほしいとお願いする。

「えっ？ヒノアラシとワニコをかい？」

「はい。流石にワタシでも人質を傷つけずに素早くあの人数とポケモン達を倒して人質を助けるのは厳しいです。そこでまずはヒノアラシの“えんまく”で目眩まします。

そしてR団がパニックになつてる間にワタシの力で倒し人質を助けます：だからマ

スター達はステージに上がってR団達を指揮してる奴の気を惹いて下さい！その間にわたし達が人質を助けます！」

ヒノアラシとワニノコをボールから出すように言うメロエツタにシユンはどうしてかを訪ねると、メロエツタは流石に自分でも人質を一切傷つけずに即座にあの人数のR団とそのポケモン達を倒し人質を無事に助けるのは厳しい、まずはヒノアラシの”えんまく”でR団達を目眩ましして相手がパニックになってる隙にメロエツタの力で人質を助けると言う。

そしてシユン達にはステージに上がってR団達を指揮してる奴の気を惹くように頼み、気を惹いているうちにメロエツタ達が客席の人達を人質にしているR団とポケモン達を倒す。

「なるほど！分かったよ。出て来てヒノアラシ、ワニノコ」

「ヒノー！」

「ワニヤー！」

メロエツタの作戦を聞いて納得したシユンはポケットからボールを2つ投げてヒノアラシとワニノコを出す。

「ヒノアラシ、ワニノコ。今ここにR団っていう悪い人達が来て会場みんなを人質にしてみんなのポケモンを奪おうとしてる：2人にはメロエツタの指示に従って一緒に

客席の人達をR団から助けてほしいんだ。良いかい？」

「ヒノ！」

「ワニヤ！」

シユンがメロエッタの言う通りにボールからヒノアラシとワニノコを出すと2人に現在の状況を説明し、メロエッタの指示に従ってR団の人質になっている観客の人達を助けるようお願いすると、ヒノアラシとワニノコは了解と言うように一度領いた。

「よし！じゃあ頼むよメロエッタ、2人とも」

「はい！任せて下さいマスター。それじゃあ行きますよヒノアラシ、ワニノコ」

「ヒノ！」

「ワニヤ！」

2人の了解の返事を聞いたシユンはメロエッタに観客の人達の救出を頼むと、メロエッタは任せて下さいと頷きヒノアラシ達に行きますよと声を掛け、ヒノアラシ達も頷く。

「それではマスター！わたし達が観客の人達を救出する間、ステージに居るR団の気を引いて下さいね」

「うん、分かっているよ！メロエッタ」

「では、行ってきます」

メロエツタは再度、シユンに自分達が観客の人達をR団達から助けている間ステージに居るR団達を指揮するリーダー達の気を引くように頼み、シユンも了解と頷くとメロエツタは一言、行つてきますと言つてヒノアラシとワニノコの手を握り客席の近くへとレポートで移動していった。

「さてと・それじゃあぼく達もステージに居るアカネさん達を助けに行かないとー」

メロエツタ達が客席の人達を助けに向かったのを確認したシユンはステージに居るアカネやフェスティバルの参加者や審査員の人達を助けに行こうとステージに向かうとしたその時

「お待ち下さいマスター！」

ボールからディアンシーが出て来てステージに向かおうとするシユンに待つように言う。

「えっ！どうしたんだいディアンシー？早くしないとメロエツタが客席の人達をR団から助けに行つたからステージに居るR団達のリーダーが気づかないように気を引かないといけないんだ・それにアカネさん達も助けないといけないし」

ステージに向かうのを待つように言うディアンシーにシユンは、早く行かないとメロエツタ達が客席の人達をR団から助けるのをステージに居るコガネフェスティバルを襲撃したR団の部隊を指揮するリーダーの注意をメロエツタ達から反らし・そしてア

カネ達を助け早く助けるためにステージに向かわないといけないと自分を止めるディアンシーに言う。

「分かっておりますわマスター・ボールの中からメロエツタとの会話は全て聞いていましたわ。そしてわたくしもマスターのお手伝いを致しますわ!」

シユンにそう言われたディアンシーは、ボールの中からシユンとメロエツタの話しを聞いており自分もシユンのお手伝いをすると言う。

「手伝うって・何を?」

「はい!マスターがあゝの悪者達から皆さんを助けるお手伝いをいたしますわ!」

シユンの手伝いをすると言うディアンシーにシユンは何を手伝うのか訪ね、ディアンシーはシユン達がR団達からアカネ達を助けるお手伝いをすると言う。

「えっ!ぼくがR団からアカネさん達や客席の人達を助ける手伝いをするってどうするのディアンシー?」

「はい。先程の舞台に居る者達がこの場所の入口の場所で悪者達が人質を取って助けに来た者達が入れないようにしているという話を聞きましたわ!」

でしたら入口に居る悪者を倒し人質を助ければその入口から悪者に人質にされた者達を助けに来た者達が入って来て悪者達を捕らえてくれますわ!」

シユンの手伝いをするというディアンシーにどうするのかと訪ねると、ディアンシー

は舞台に居るR団の部隊のリーダーとアカネとの会話をボールの中から聞いており、コガネ公園の入口でR団の隊員が人質を取ってR団に占拠された会場の人達を助けに動してきたジュンサー達が入れないようにしているR団を倒して人質を解放すればそこからジュンサー達が突入してR団達を捕まえてくれると説明する。

「確かにそうだけど・・もしかしてディアンシー・キミだけで入口にいるR団達を倒すつもりなの？」

「はい！わたくしもマスターのために役に立ちたいですわ！」

シユンはディアンシーの説明を聞いて納得するも、1人で入口に居るR団を倒すつもりなのかと訪ねるとディアンシーは、はいと頷いて自分もシユンのために役に立ちたいと決意した表情で言う。

「分かった・ディアンシーの決意は伝わったよ！でもキミ1人だけで行かせるのは危険だからフシギソウとマリルにも手伝ってもらおうよ。出て来て2人とも！」

「ソウ！」

「リル！」

ディアンシーの決意が伝わったシユンは入口に居るR団達を倒して人質を助ける役目を任せるが、ディアンシーだけでは危険だからとフシギソウとマリルをボールから出すとフシギソウ達が勢いよく出て来る。



「フシギソウ、マリル。ディアンシーと一緒に公園の入口に居る悪者を倒すのに協力してほしいんだ。頼めるかな?」

「ソウ!」

ボールから出て来たフシギソウとマリルにシユンは簡潔に現在の状況を教えてディアンシーと一緒に協力してほしいとお願いするとフシギソウは快く聞き入れてくれて笑顔で頷く。

「リル〜」

しかし、マリルはシユンのその指示に不満があるのか：シユンを睨みつける。

「マリル：そんな顔しないでお願い出来ないかな? R団からみんなを助けるにはマリルの力が必要なんだ! 頼むよマリル」

「リル〜：：：」

シユンは不満そうにするマリルにシユンは自分の言う事を聞かないマリルを怒ることとせずに優しい声でマリルにR団からみんなを助けるためにディアンシー達と一緒に力を貸してほしいとお願いするが、まだマリルは不満そうにして頬を膨らませる。

「お願いだよマリル：ねっ!」

「リル〜／／／：：：リル〜!!：：：リルッ」

シユンは頬を膨らませているマリルの頭を優しく撫でながらお願いする：マリルは

シユンの手に心地良さそうにすり寄っていると、少ししてハツとなりシユンに怒った後に仕方ないと言った様子で一回ため息をつくと言ふと了解と言ふように頷く。

「ふふ。ありがとうマリル！それじゃディアンシー頼んだよ。フシギソウとマリルを連れてコガネ公園の入口で人質を取ってジュンサーさん達が突入出来ないようにしているR団達の隙を作ってジュンサーさん達が突入出来るようにしてほしい。」

でも、無理はしないで危ないと思つたら構わず逃げてね：分かつたね？」

「分かつておりますわマスター！お任せ下さい。それでは行つて参りますわ。行きましょうマリル、フシギソウ！」

「ソウ！」

「リル……」

シユンはマリルにお礼を言つてディアンシーにフシギソウとマリルを連れてコガネ公園の入口で出勤して来たジュンサー達が入れないように人質を取っているR団に隙を作り、どうにかジュンサー達が突入出来るようにしてほしいとお願いする。

でも無理はせずに危なければ構わず逃げるように忠告すると、ディアンシーはシユンの忠告を聞いて分かつていると答えると任せて下さいと：シユンに行つて来ることを伝えてフシギソウとマリルに行きましようと言ふとフシギソウは頷き、マリルは一瞬渋るも素直に従つてディアンシーの後を付いて行きコガネ公園の入口へと向かつて行つ

た。

「よし、向こうの人質の事はメロエッタとディアンシー達に任せておく達はステージに居るアカネさん達を助けに行こう」

そうしてメロエッタとディアンシーがそれぞれの場所に向かったのを確認したシユンは、ステージに居るアカネと審査員や参加者達を助けるために茂みの影に隠れながら周りのR団に見つからないようにステージへと向かった。

そしてシユンは慎重に進みながらステージの近くに辿り着くと、物陰に隠れてステージの上に居るアカネ達とR団達の様子を除き見る：するとそこには今にもアカネ達のポケモンの入ったモンスターボールを奪おうとしているR団達の姿が目に入った。

シユンは急いでチコリータとレディバをボールから出してアカネ達を助けに走って行った。

そして場面が変わりステージでは：アカネ達がいままで自分達のポケモンを渡さないことに苛つき始め、そしてとうとう部隊のリーダーの男は痺れを切らしていた。

「どうやら痛い目を見ないと自分達の状況が理解できないようだな：出て来い！」

「ヘルウー！」

部隊のリーダーの男は苛つくようにそう言う懐からボールを取り出してボールからポケモンを出す：ボールから黒く角のある大型犬位の大きさのポケモンが出て来る。

「あれは：ダークポケモンのヘルガー」

アカネがR団を指揮する男性の出した黒い大型犬のようなポケモンの名前を呟く。

「多少痛い目に合わせれば自分達の置かれている状況を理解してポケモンを渡すだろう？」

「ヘルウー！」

「なんやて！みんなに手を出したら承知せえへんからな！ウチがやつつけたるわ!!」

部隊のリーダーの男が自分達にポケモンを渡そうとしないアカネ達に多少痛い目に合わせれば自分達の置かれている状況を理解してポケモンを渡すだろうと笑い、それに同調するように隣に居るヘルガーも唸り声を上げて、それを聞いたアカネは怒りみんなに手を出したら承知しないと：自分が倒すと意気込み自分のポケモンの入ったボールを取り出してR団達に立ち向かおうとする。

「おっと、いいのか？お前が抵抗すれば人質の観客達がどうなっても知らないぞ。ふはは」

「くっ!!この卑怯者」

アカネが抵抗しようとするのを見て部隊のリーダーの男がゲビた笑みを浮かべて人質の観客がどうなっても知らないぞとアカネを脅し、アカネは観客が人質になつてのを改めて確認し手に持つボールを下げてR団を指揮する男性を卑怯者だと罵る。

「ふはは。卑怯で結構！それは我らには誉め言葉だ。だがその生意気な態度は気に食わん。ヘルガー！その女を見せしめに”かみつく”で痛め付けろ」

「ヘルウ!!」

アカネに卑怯と言われた部隊のリーダーの男は自分達には誉め言葉だと嘲笑うと、アカネの生意気な態度は気に食わないとヘルガーに見せしめに”かみつく”で痛め付けるように命令しヘルガーは指示に従いアカネに向かって行く。

「グガア~~~~!!!」

「キャアアア~~~~!!!」

ヘルガーが歯を剥き出しにしてアカネへと襲いかかり、アカネは迫り来るヘルガーに恐怖して腕で顔を覆い迫る痛みにも目を瞑り悲鳴を上げる。

「チコリータ、”はっばカッター”!!」

「チコ~~~~!!」

ヘルガーの”かみつく”攻撃がアカネへと迫る直前！アカネ達の後方からそんな声が聞こえて来ると後ろから飛んで来た数十枚の”はっばカッター”が飛んで来てヘルガーを吹き飛ばす。

「ヘルウ~~~~!」

「ヘルガー!」

「ん！なんや？」

”はつぱカッター”を受けたヘルガーは、アカネへの”かみつく”を阻止されて吹っ飛ぶ。

突然の奇襲に部隊のリーダーの男が驚き、アカネは自分に迫っていた攻撃が来ないことを不思議に思いゆつくり腕をといて目を開き、”はつぱカッター”の飛んで来た方に目を向ける。

アカネへの攻撃を阻止され吹っ飛んだヘルガーだったが、ほのおタイプのヘルガーにくさタイプの技は効果がいまひとつだったためあまりダメージを受けずに体制を建て直してトレーナーのR団の部隊のリーダーの男の近くに着地する。

「ヘルー！」

「くっ！誰だ。出て来い！」

見せしめのためにアカネを痛め付けようとした自分の思惑が邪魔されたことに苛立ちを見せて、”はつぱカッター”の飛んで来た方を睨み付けて出て来いと叫ぶ。

するとアカネ達の居るステージの中央より後ろ……”はつぱカッター”の飛んで来た方を見るとステージの影からシユンと”はつぱカッター”でヘルガーを攻撃したチコリータが鋭くヘルガーとR団達を睨み付けて姿を現した。

「なっ！シユンくん!!」

アカネは迷子になっていた自分のピツピを連れて来てくれたシュンが、お礼にコガネシティを案内するからと大会が終わるまでステージ近くのテーブルで待つてもらっていたはずなのに：この危険なステージ現れたことに驚いてシュンの名前を大声で叫ぶ。

「ふっ。この俺の邪魔をした奴がどんな奴だと思っただけだ。ただのガキじゃないか？」

「ハッハッハ！」

「ハハハ！」

部隊のリーダーの男は自分の邪魔をしたのが、見た目が完全に子供のシュンだった事に気付いて愉快そうに笑みを浮かべてR団員達も可笑しそうに笑う。

「シュンくん何で来たんや!!危ないから早く此処から逃げるんや!!」

「大丈夫ですアカネさん。ぼくに任せて」

アカネはシュンに何で来たのかと怒って、危ないから早く逃げるように言うが：シュンは大丈夫だと言って自分に任せてと微笑む。

「シュンくん？」

アカネは不安そうな表情で：このR団達に囲まれた状況で自分よりも年下の少年であるシュンが恐れもせず、この状況に真っ直ぐに向いているのを不思議な眼差しで見つめていた。

そしてシュンは心配するアカネに大丈夫だと言って落ち着かせると視線を部隊の

リーダーの男に向ける。

「ふっ！おまえみたいながキがこの俺の邪魔をするとはな：いったいどういふつもりだ？」

部隊のリーダーの男は口元に笑みを浮かべながら少年であるシユンを馬鹿にした様子で、どういふつもりだと問いかける。

「どういふつもりもなにも：あなた達を倒してアカネさん達を助けに来たんですよ」

どういふつもりだと訪ねる部隊のリーダーの男にシユンはアカネやステージに居る人達を助けに来たのだと応える。

「クククっ……ハア〜ハハハハハハ!!!」

「「ハハハハハハ!!」」

それを聞いたステージに居る7人のR団達全員がとても可笑しそうに大声で笑い声を上げる。

「ツツ!!何が可笑しいねん!!」

シユンの発言を聞いて大声で笑うR団達に、自分達を助けに来てくれたシユンを馬鹿にするように大声で笑うR団達に、アカネは何が可笑しいのかと怒る。

「これが笑わずにいられるか！こんなガキが俺達を倒すなんて言う馬鹿なことをほざいたんだからなあ？」



部隊のリーダーの男は少年のシユンが自分達を倒してアカネ達を助けるなどと馬鹿な発言をしたことを嘲笑う。

そしてしばらくR団達が笑っていると……笑い終わった部隊のリーダーの男……。

「さて・俺達に対して随分愉快なことを言っていたが、この俺に対して生意気なことをほざいた報いを受けさせないとな?」

「ヘルウ!!」

そして自分に対して生意気な事を言ったシユンに報いを受けさせないとな!と怪しい笑みを浮かべて男のヘルガーも歯を剥き出しにしてシユンに唸る。

「一応言っておくが先程のようにヘルガーの攻撃を防いだらどうなるかは分かるな?」

「……」

そして付け加えるように先程・アカネがヘルガーに攻撃されるのを阻止したようにもう一度ヘルガーの攻撃を防いだら分かるなど脅し、シユンはそれをジツと静かに聞いていた。

「万が一抵抗すれば人質の安全は保証されんぞ。ヘルガー、”かみつく”だ」

「ヘルウ!!」

そうしてR団を指揮する男が人質を盾に抵抗させないようにした後にヘルガーに指示し、ヘルガーがシユンに向かって”かみつく”で迫る。

「シユンくん!!」

ヘルガーの鋭い牙の”かみつく”が迫り、そのシユンの危機的状況を見たアカネは悲鳴のように大声を上げてシユンの名を叫ぶ。

そうしてヘルガーの牙が迫ろうとしたその瞬間!!!

「チコリータ、はっばカッター!!」

「チ〜コ〜!!」

シユンはチコリータに迎撃の指示を出し、チコリータは迫るヘルガーを”はっばカッター”で吹っ飛ばす。

「ヘルウ〜ツツ」

「なっ!!」

はっばカッターを受けたヘルガーは吹っ飛び、忠告をしたのにも関わらずヘルガーに反撃したシユンに部隊のリーダーの男は驚きを露にする。

「シユン・・くん・」

アカネもシユンが反撃したのを見て予想外な表情で見つめる……（勿論、シユンが攻撃を受けて傷つくのが平気な訳ではないが：シユンが反撃すれば人質の安全は保証されないと聞いていたので、シユンも反撃はせずにせめて避ける位だと思っていたのだが、人質が居るにも関わらず躊躇なく反撃したことに驚いていた）

アカネの近くにいた他の審査員達やフェスティバルの参加者達も驚きの表情で見つめていた。

「ヘルウー！」

「貴様！正気か!!散々忠告してやったにも関わらずヘルガーを攻撃するなど!!」

「……………」

ヘルガーにとっては効果はいまひとつの技だったため大したダメージを受けずに着地し、部隊のリーダーの男は散々人質の事を忠告したにも関わらずに反撃したシュンに怒りの声を上げるが：シュンは部隊のリーダーの男の怒りの声を静かに見つめていた。

「いいだろう：貴様がその気なら：おい!!客席に居る団員に連絡しろ。人質を少し痛め付けてやれ！」

「はっ！」

そして部隊のリーダーの男はシュンがその気ならと客席の方に居る団員達に連絡をして客席の人質を少し痛め付けるように命令し、近くに居る団員がポケギアで客席の方で待機する団員に連絡する。

それを周りで聞いていたアカネや市長、審査員や参加者達は人質である観客達の身の安全が危険なことに危機感を抱き、どうにも出来ずににり始める。

「くく：今更後悔しても遅いぞ！貴様の愚かな行動のせいで人質が傷つくんだからなあ

!!

「……………」

アカネ達の反応を見て部隊のリーダーの男は愉快そうに笑い、シユンに憎たらしい笑みを向けて：シユンは只静かに焦る事もなくR団を指揮する男性を見つめていた。

そのシユンの様子を見ていたアカネやステージ上にいる人達は不思議に思っていた：シユンが完全に悪いとは言えないがシユンが反撃したために人質が危険となつているのに焦ることもなく平然としているからである。

「人質の泣きわめく声を聞いたら貴様ももう抵抗する気も失せるだろう！そうしたらおまえのその済ました生意気な面をぶん殴つてやるから覚悟しておくんだな。ハアハハハハ」

そして部隊のリーダーの男は周りの反応を聞いて笑みを浮かべて、人質が傷つけられる泣き声を聞いたら、流石にもう抵抗は出来ないだろうと言い、自分に対して生意気な行動をするシユンの面をぶん殴つてやると脅し愉快そうに笑う。

部隊のリーダーの男にそう脅されてもシユンは全く動じずに表情も変えることなく部隊のリーダーの男を哀れそうに見つめていた。

そのシユンの脅されても微動だにせず冷静な様子を見たアカネや他の人達は不思議そうに見つめていた。

そしてR団の隊員が指示を受けてポケギアで客席の方で観客達を人質にしている隊員に連絡をしているが、一向にポケギアに出る気配がない。

「おいどうした?早く客席に居る隊員に連絡しろ」

「それが…先程からポケギアで連絡しているのですが…全く応答がありません」

「何だ?!ええ〜い!あいつら一体何をしてやがるんだ!」

先程客席に居るR団隊員に連絡するように指示をしてから…だいぶ経つても連絡に出ないことに気づいた部隊のリーダーの男はポケギアを持つ隊員に早く連絡するよう言うが、隊員は先程からポケギアで連絡しているが全然、応答がないと困った感じで伝えて、それを聞いた部隊のリーダーの男は驚き、その後には苛ついた感じで応答しない客席の方に居る隊員達に怒り声を上げる。

その一部始終を見ていたアカネ達は…何がどうなってるのか分からずに不思議そうにR団達を見つめており、シユンも只、じっと眺めていると…。

ドガアアアアア〜ン!!!!

と、爆発し大きな音が観客席の方で鳴り響いた。

「ツツ!!何だ!!何だ今のは?!いったい何が起こった!」

部隊のリーダーは突然、観客席の方から爆発と共に大きな音が鳴り響いたことに驚い

てそちらを向くと観客席の方を黒煙が立ち込めて：そこからR団隊員とポケモン達が吹っ飛び倒れて来た。

「なっ!!お前達!どうした!!人質はどうなった!?!」

部隊のリーダーの男は客席で観客を人質に取っていたはずの隊員達が黒煙から出て来て倒れて来るのを見て驚愕を露にしていた。

「……(ニヤリ!)……」

シユンは部隊のリーダーの男の慌てふためく様子にシユンは静かに口元に笑みを浮かべる。

そして黒煙の向こう側から近づいて来る影があり：黒煙から出て来たのは……。

「ヒノ!」

「ワニヤ!」

シユンのポケモンのヒノアラシとワニノコが出て来る。

「なっ!!ヒノアラシにワニノコだと!!まさかあいつらが!!」

部隊のリーダーの男は隊員達が倒れて来た黒煙から出て来たヒノアラシとワニノコに驚き、まさか奴らにR団隊員達が倒されたのかと驚愕を露にする。

黒煙から出て来たヒノアラシとワニノコはステージの上に居るシユンを見つけて近づく。

「ヒノアラシ、ワニノコありがとう。よくやってくれたね!」

「ヒノ!」

「ワニヤ!」

シユンは近づいて来たヒノアラシとワニノコが：客席にいるR団達を倒して人質を助けてくれた事をよくやってくれたねと誉めると2匹は笑顔で頷く。

「なっ!!あいつらは貴様のポケモンか!!」ということとはこれは貴様の仕業か!!」

シユンとヒノアラシ達の話しが聞こえた部隊のリーダーの男はあの2体が観客席にいた部下達を倒し、人質達を解放させたのはシユンの指示だったことに気づいて怒りの声を上げる。

「(マスター!)」

「メロエツタ?!」

部隊のリーダーの男に怒りの感情を向けられていたシユンの肩に透明になったメロエツタが現れてシユンに声を掛ける。

「(客席に居た隊員達はポケモンも含めて全員倒しました。ヒノアラシの”えんまく”で目眩まして、奴らがパニックになっている隙にわたしが”サイコネシス”で隊員達を、ヒノアラシとワニノコが隊員のポケモン達を倒して客席の人質は全員解放しました。」

煙の中で今のうちに逃げるように言っておいたので今頃全員逃げているでしょう」「（ありがたいよメロエツタ！助かったよ）」

メロエツタ達が作戦通りに人質になつていた観客の人達を全員無事に解放できた事を知り、メロエツタに助かったとお礼を言う。

「答えろ！これは貴様の仕業か！俺の部下達を倒し人質達を逃がしたのは」

「そうですよ。ここに来る前に予めヒノアラシとワニノコに頼んだんです。こつそりと客席の方に回つて観客を人質に取つているR団を倒して人質達を解放してもらうようにね。（本当はメロエツタにも頼んでいたけどね）」

姿を消してシユンの隣にいるメロエツタに礼を言っていると、部隊のリーダーの男がシユンに答えると怒鳴り散らし、これは貴様の仕業かと怒りを剥き出しにし、シユンはその通りだと応えて予め頼んだいと応える。（そしてボソツと小声でメロエツタにも頼んだと呟く）

「すごいでシユンくん！これで何の気兼ねもなくこいつらをやつつけられるわ！さあ、あんたら覚悟しいや!!」

アカネはシユンのポケモン達を使った奇策で客席にいたR団隊員達を全員倒し、人質の観客達を全員解放できたことに悦び、これで人質も解放されたから何の気兼ねもなくR団達を倒せるとモンスターボールを手に持ち、R団達に覚悟するように言つて怒りの



表情で睨む。

先程まで人質が居たために絶対的に優勢だったのがシユンの作戦で無事に人質を解放された為、一気に窮地に陥ったためにアカネの怒り凄む様子にビビり後ろに下がる。

「みんなは下がってや。R団はうちがやつつけるで!!」

「ぼくも手伝いますアカネさん。ヒノアラシ、ワニノコお疲れ様。後は任せて休んでて  
!」

アカネはステージにいるコガネシティ市長や参加者や審査員達の方を向いて、R団達は自分が倒すから下がっているように言い、シユンはアカネに自分も手伝うとアカネの隣に立ち、客席の方にいるR団とポケモンを倒し人質の観客を無事に助けるのに協力し頑張つて体力を消耗したヒノアラシとワニノコにお礼を言い、後は自分達に任せて休むように言つてボールへと戻すとR団達へと向き直る。

「チコ〜!!」

「レディ〜!!」

R団に向き直るシユンに続いて、チコリータとレディバもR団達に闘争心を剥き出しにして睨みつける。

「ウウツ…」

「ひいひい!」

一気に不利な状況になり、アカネやシユンの怒りの眼差しに部隊のリーダーの男の後ろに待機していた2人のR団隊員がビビり後ろに後ずさる。

「リッリーダー!!不味いですよ……人質も居なくなつて、俺達このままだ!!」

「狼狽えるんじゃねえ!!客席の人質は解放されたが、こつちにはまだ入口で人質を取つてジュンサー達を足止めしてる隊員達がいることを忘れたか?」

部隊のリーダーの男の後ろの隊員が先程と違い……すっかり怯えた様子で客席の人質も解放されて、このままでは自分達は全員捕まつてしまうと狼狽えていると隊員の情けない様子に怒つたリーダーは後ろの隊員2人に、まだ自分達にはコガネ公園の入口で人質を取つてジュンサーさん達が突入できないようにしているのを忘れたか?とニヤける。

「そうでした!!俺達にはまだ入口で人質を取つてる仲間が居るんでした!」

「その人質を使えば一気に形勢逆転すねリーダー!!」

「そうだ!さつさと入口に居る奴らに連絡して、何人か人質を連れてこつちに来させろ」  
それを聞いた隊員の2人はコガネ公園の入口で人質を取つてジュンサー達が突入できないようにしている仲間がまだ居ることを思い出し、その人質を使えば一気にこの状況を覆せると喜び、部隊のリーダーの男は隊員2人にさつさと入口に居る奴らに連絡して何人か人質を連れてこつちに来させるように命令する。

「なんやて!そんなことさせるかいな。今のうちにあんたらを倒したる!いくでシュンくん」

「はい!アカネさん!」

R団達の会話を聞いていたアカネはそんなことはさせないと言い、入口に居る隊員達  
が人質を連れて来ないうちに3人を倒してやると言ってシュンも一緒に戦う。

「おっと!俺達に手を出さない方がいいぜ。たつた今ポケギアでメールして入口に居る  
隊員達に指示を伝えたから直にこつちに来るだろう。俺達に何かあつた時は人質に手  
を出すように言つてあるからな!」

ステージに襲撃した部隊のリーダーの男は癪に触る笑みを浮かべながら、ポケギアで  
入口にいる隊員達にメールで先程の指示を出し、こつちに来るように伝えた:そして自  
分達に何かあつた時は人質に手を出すように指示をしたため自分達に危害を加えない  
方が良いぜと嘲笑う。

「そんな!」

「くっ!」

「何てことだ!」

R団の発言を聞いていたステージに居た参加者や審査員、市長は客席の人質も解放さ  
れて、後はR団達を倒せば助かると思つていたのに、また不利な状況になつたことに落

胆の表情を見せ声を上げる。

「くっ!!それじゃあ手を出すことが出来ない!」

「せっかくシユンくんのおかげで人質になってた観客を解放できたっちゆうのに、どうすればいいんや……」

部隊のリーダーの男の発言を聞いて、シユンはこれでは手を出す事ができないと焦り、アカネはシユンの作戦のおかげで客席の人質を解放できたのにどうすればいいのかと焦る。

「くっ!（入口のR団を倒しに行ったディアンシー達はどうしたんだろう……もしかして失敗して捕まったのかな……だとしたら早く助けないと）」

シユンもせっかく有利になったのにまたも手を出せない状況に陥いつたことに焦り、ジユンサー達が突入できるように入口で人質を取ってるR団を倒しに行ったディアンシー達はどうしたんだろう?と心配し、もしかして失敗してR団に捕まったのではないかと思ひ、だとしたら早く助け出さないと焦りを募らせていく。

シユンの中で次第に焦りの感情が大きくなってきていると……

「(心配いりませんよマスター)」

「(メロエツタ?)」

焦りを募らせているシユンに先程から姿を消してどこかへと行っていたメロエツタ

が心配ないと言う。

「メロエツタ：ヒノアラシ達と一緒に戻って来てから少しして姿が見えなかったけど、どこに行ってたんだい？それに心配ないってどう言うこと？」

シユンはメロエツタに今までどこに行っていたのかと訪ね、そして心配ないとはどう言うことなのかと訪ねる。

「はい：少々ディアンシー達のが心配でしたので様子も見てきました。そしてマスターに状況を伝えるために戻って来ました」

メロエツタはディアンシー達の事が少々心配だったため、様子を見に行き状況をシユンに知らせるために戻って来たのだと言う。

「(なんだって！それでメロエツタ。ディアンシー達をはどうなったの！無事なのかい)」

シユンは出来るだけ小声で話し、驚いた後に緊迫した様子でメロエツタにディアンシー達は無事なのかと訪ねる。

「(落ち着いて下さいマスター。心配ありません。たぶんもうすぐ…)」

ディアンシー達の安否を必死に気遣うシユンにメロエツタは落ち着くように言った後に心配ないと言って意味深に言葉を切り：そして…。

「ふはは!!もうそろそろあいつらが人質を連れて到着するだろう。そうすれば全て俺達

の思うままだ」

「へへへ!!」

「ははは!!」

部隊のリーダーの男はもうそろそろコガネ公園の入口でジュンサー達が突入出来ないように人質を取っていた隊員達が人質を数人連れてやって来ると、そうすれば全て自分達の思うままだとゲビた笑みを浮かべ隊員2人も愉快そうに笑う。

そうしてR団達が笑っていると、入口の方から大勢の人が歩いて来る足音が聞こえて来る。

部隊のリーダーの男は隊員が来たかと思いきや笑みを浮かべてそちらを見て：予想外な光景に目を丸くする。

「そこまでよR団!!大人しくしなさい。あなた達は完全に包囲されているわ!」

「なっ!!なんだとっ!!」

入口でR団に足止めをくらい突入できずにいるはずのジュンサー達がコガネ公園へと突入して会場の回りを包囲していることに部隊のリーダーの男は驚愕を露にしていた。

ジュンサーの後ろには他の隊員に捕らえられているR団の隊員達が目に入った。

「馬鹿な!!どうなってる!?!おまえ達は俺の部下達が入口で人質を取って突入できないよ

うにしていたはずだ!!なぜ此所にこれた。どうやって俺の部下達を!!」

R団の部隊のリーダーの男はジュンサー達が会場まで来たことを信じられないと言った様子で驚き、部下達が入口で人質を取っていたにも関わらず人質を助けて部下達を捕まえてステージ会場に来れたのかと怒り応えるように怒鳴る。

「ふふふ。それはね…この子達のおかげよ!」

「ソウ!!」

「リル…」

部隊のリーダーの男の問いにジュンサーは笑みを浮かべ『この子達のおかげよ』と言って応えるとジュンサーの後ろからフシギソウとマリルが出て来る。

「フシギソウ、マリル。良かった!!無事だったんだね」

「ソウ!!ソウ」

「リル…リル…」

ジュンサーの後ろから出て来たフシギソウとマリルを見たシユンはマリル達が無事で良かったと安心し微笑み、フシギソウとマリルも少々息を上げながらシユンに微笑み返す。

フシギソウとマリルの体は所々傷ついていてダメージを受けているようだ。

「この子達はあなたのポケモンね?この子達が後ろから人質を取ってR団を攻撃して

くれたのよ。そして突然の攻撃にR団達が慌てたその隙にフシギソウが人質を助けてくれたおかげで私達は突入できたのよ。そして入口に居たR団達を逮捕して此所に来たってわけよ」

ジュンサーはフシギソウとマリルがシユンのポケモンであることに気付き、フシギソウとマリルが後ろから人質を取っていたR団へと攻撃し、R団が突然の奇襲にパニックになっている間にフシギソウが”つるのムチ”で人質達を掴みR団達から助け出した。

そのおかげで入口にいたR団達を逮捕できて此所に来ることが出来たのだと教えてくれた。

「あなた達のおかげで人質の人達も傷一つなく助ける事が出来たわ。本当にありがとう」

「ほんまにすごいで!!シユンくんもシユンくんのポケモンも最高や!!」

ジュンサーはシユンの指示とポケモン達のおかげでコガネ公園に突入出来て、人質達に傷一つ負わせる事なく助ける事が出来たとお礼を言い、それを聞いたアカネはR団が襲撃したこの危機的状况でポケモンに指示を出して観客の人質を解放しただけでなく、入口のR団を攻撃して人質を助けてジュンサー達がコガネ公園に突入させる手助けをしていた事に本当に凄いと誉めて、シユンとシユンのポケモン達を最高やと大絶賛する。



「あはは…：誉めすぎですよアカネさん。マリルとフシギソウもよく頑張ってくれたね」

「ソウ！」

「リル！」

アカネへの自分への大絶賛に苦笑いを浮かべるシユンは：ジュンサーの話しを聞いてフシギソウとマリルが本当に良く頑張ってくれたねと褒める。

シユンはマリルとフシギソウを良く頑張ったと誉めていると…：

「(マスター！ただいま戻りましたわ！)」

「(ディアンシー!!良かった：キミも無事だったんだね)」

メロエツタに連れられる形でディアンシーが戻って来たのを見たシユンはディアンシーが無事だったことに心から安心する。

「(はい！わたくしもフシギソウ達と一緒に最初に攻撃して、その後はフシギソウ達に任せて他の者達に見つからないように隠れているところをメロエツタに迎えに来てもらったのですわ！)」

「(先程、フシギソウ達の様子を見に行った時にディアンシーを見かけなかったのでもしかしたらと思い再度入口の周辺の森を探したらディアンシーを見つけたので連れて来ました)」

ディアンシーは最初だけフシギソウ達と一緒にR団達を後ろから攻撃して、後はフシギソウ達に任せて自分は他の人間達に見つかると面倒なので公園の森の奥へと隠れていると：先程フシギソウ達の様子を見に行つた時にディアンシーが居ないのを不思議に思つたメロエツタが探しに来て、合流したディアンシーはメロエツタの力で姿を消してシユンの所に戻つて来たのである。

「(そうだったんだ。ありがとうディアンシー！本当に助かったよ)」

「(いえいえ。マスターのためならこれくらいどうつてことありませんわ！)」

ディアンシーとメロエツタの説明を聞いたシユンはディアンシーにお礼を言うと、ディアンシーはシユンのためならこれくらいどうつてことはないと微笑む。

「(メロエツタもありがとう。後はぼく達に任せて)」

「(チコ!!)」

「(レディ!!)」

「(分かりました。後はお任せします。でもマスターが危なくなつたら助けますので)」

「(わたくしもお助けしますわ)」

「(うん！ありがとう。メロエツタ、ディアンシー)」

頑張つてくれたメロエツタとディアンシーには後は自分達に任せてと言い、チコリータ達もそうだと言うように頷く。シユン達の意志を聞いた2人は了解するがシユンが危

なくなったら助けると言ってボールへと戻る。

「ソウ…ソウ…」

「リル…リル…」

そうしてシユンがメロエツタ達と話していると：ジュンサー達の近くにいるフシギソウとマリルが息づかいが荒くなっている。

「あなたはシユンくんだったわね？この子達は入口でR団とバトルした時のダメージで体力をだいぶ消耗しているわ！この子達はもう充分頑張ってくれたし休ませてあげて！」

「そうですね。フシギソウ、マリル 良く頑張ったね！後はぼく達に任せてゆっくり休んでね！」

ジュンサーに入口でのR団とのバトルでフシギソウとマリルはダメージを負い体力をだいぶ消耗しており、2人は充分頑張ってくれたから休ませるように言われて”シユンもその通りだと納得してフシギソウとマリルを良く頑張ったと褒めて、ゆっくり休むように言ってボールへと戻す。

「さっきから聞いてりやこれも貴様の仕業か!!ことごとく俺の邪魔をしやがって!!」

すると：ジュンサーとシユンの会話を聞いていた部隊のリーダーの男は客席のR団を倒して人質を解放しただけでなく、入口でジュンサー達が突入できないようにしてい

たR団も倒したのもシユンが自分のポケモン達に指示していたことだと知ると、これも貴様の仕業かと怒り、悉く自分の邪魔をしゃがつてと憎々しげにシユンを睨みつける。

「そんなの邪魔するに決まつてる・ポケモンを金儲けの道具としか思っていないような奴らの思い通りになんかさせない!!」

「シユンくんの言う通りや。ポケモン使つて悪いことをするR団なんかの思い通りにさせるかい!!」

部隊のリーダーの男の睨みにも怯まずに、シユンはポケモンを金儲けの道具としか思っていないR団の思い通りにはさせないと強い眼差しで言い、アカネもその通りだと言つてポケモンを使い悪いことをするR団なんか思い通りにさせないと同意する。

「ハン!!所詮ポケモンは人間の道具に過ぎないんだよ!!」

「なんやと!!」

部隊のリーダーの男はそう言うと、その許せない発言を聞いたアカネは怒りを露にする。

「それにここに居る奴らもこんな大会なんかに出て自分のポケモンを着飾つて見せ物にしてるじゃねえか!俺達と何が違うって言うんだ?ポケモンを道具みたいに扱つてるじゃねえか」

部隊のリーダーの男はステージにいる参加者達に向かつて、こんな大会に出てポケモ

ンを見世物にして道具のように扱ってるだろうと罵る。

部隊のリーダーの男に言われたフェスティバルの主権者の市長や審査員、参加者の人は反論しようとするが：その直前で言葉を無くす。

もしかしたらあいつの言う通りかも知れないと言う心の迷いがあつたからである。

自分達に取っては自分の持つポケモンを強く綺麗に育て、ポケモンと一緒に成長して行く。

コガネフェスティバルに参加しているトレーナー達はその成果を試したり、この大会を目指してポケモンと一緒に頑張つて来たトレーナー達も参加しており、ポケモンと共に優勝の栄冠を得ようと努力をしているが：そう思っているのは自分達だけではないかと：ポケモンの方はトレーナーのそんな思いに嫌々従っているのではないかと：。

自分達はそんなポケモンの想いを無視して自分の想いを押し付けているのではないかと：そう思うとR団の言う通りポケモンを道具のように扱っているのではないかと：そんな思いがあり反論出来ずにいた。

「みんな!!何で反論しないんや!あいつに言わたままでいいんかい」

ステージにいるみんなが部隊のリーダーの男の暴言に反論せずに只、言い用に言われていることに言わたままでいいのかと怒り声を上げる。

しかし、アカネのそんな言葉を聞いてもステージにいるみんなは反応せずに俯いてい

る。

「…みんな…」

「ハッ!!内心では否定しても…いざそう言われたら反論できないってか!?ははあく!!」

そのみんなの様子を見たアカネは意気消沈し、部隊のリーダーの男は愉快そうに笑みを浮かべて、全員が内心で否定していても…いざ言われるとハッキリと反論できずにいる事に憎たらしく笑みを浮かべて嘲笑う。

「やっぱりポケモンは人間の道具に過ぎないんだよお!!ハハハハア!!!」

そして再度ポケモンは人間の道具に過ぎないと呟き、高らかに笑い続ける。

アカネやステージにいるみんなは悔しそうに表情を歪ませて聞いていると…。

「…違う…」

「ああ?」

シュンが小声で一言そう呟いて、部隊のリーダーの男はその呟きが聞こえて反応する。

「ポケモンは人間の道具なんかじゃない!!」

そしてシュンはステージ全体に響き渡る程の声で叫び、R団達はその声とシュンから漂う気迫のような物を感じ、内心で恐れを感じたのか思わず半歩後ろへと後ずさる。

「ポケモンはぼく達と同じ…この星に生きているんだ…自然の中でのびのび暮らした

り、人間と一緒に歩んだりしている：」

ポケモンは人間と同じでこの星に生きている生き物であり、自然の中でのびのびと仲間と一緒に暮らしたり、人間と共に歩んだりしている。

「そしてポケモンとの関係は人によって変わる：友達・仲間・相棒・家族といういろいろあるけど：僕にとっては大切な家族かな？」

シユンに取ってポケモンとの関係は大切な家族。一緒に楽しい時を過ごしたり笑ったり、共に力を合わせたり、互いの意志を一つにしてバトルしたり、辛い時は支え合いどんな困難も共に乗り越えて行く：そして共に夢のために頑張ってくれる：シユンもそしてポケモン達もお互いのことが大好きであり硬い絆で結ばれた存在である。

「勿論最初からそんな関係なわけじゃない：最初は仲良くなるのに時間も掛かったりするけど：共に過ごして様々な困難を一緒に乗り越えていくたびに人とポケモンの絆が出来ていくんだ」

人間とポケモンの関係は個人によって様々であり、友達・仲間・相棒・家族：とあり、シユンにとっては自分のポケモンは大切な家族の一員である。

そしてポケモンと共に過ごしたりバトルしたり困難を乗り越えていくたびに人間とポケモンの絆が出来ていく。

アカネやステージにいる人達はシユンのその言葉を只静かに聞いていた：。

そして思い出していた……自分が持つポケモン達に出会った時の事を……そのポケモン達と一緒にの時を過ごし、初めてバトルをしたり色々な体験をしてたくさんのおい出を作り、そして段々と絆を深めて友達や相棒、家族と呼べる存在になっていったのである。

「そして一度結ばれた絆はそう簡単には切れはしない!!例え喧嘩をしたとしても最後には仲直りできる。そして更に絆を深めていくんだ。そしてぼく達は一緒にどこまでも強く成長していくんだ!!」

「チコオ!!」

「レディ!!」

シユンとポケモン達のその力強く自信に溢れたポケモンとの絆の強さと深さを感じさせる言葉に：R団に自分達もポケモンを道具のように扱っていると言われ、自分達がポケモンにしていることを思い出し反論も出来ずにポケモンとの関係に迷いを生じていたステージに居た人達も、段々とその迷いが無くなりポケモンとの関係に不安を抱いていたその心に少しずつ自信を取り戻していく。

「そうや!シユンくんの言う通りや!ポケモンは道具なんかやない!わたしの大切な友達や!」

「その通りね。ポケモンはわたしに取っていつも一緒の大切なパートナーよ。決して道



具なんかじゃないわ!」

シユンの言う通りだとポケモンは人間の道具ではないと・アカネは大切な友達とジュンサーは大切なパートナーだと応える。

「はっ!!黙って聞いてれば好き放題言いやがって!!貴様らが例えそうでも他の奴らはそう思っただよ!さつき俺にそう言われて反論しなかつたんだからなあ!!」

すると部隊のリーダーの男は黙って聞いてれば好き放題言うシユン達に怒り、シユン達がそれでもステージに居る人達は先程、自分にそう言われても反論しなかつたのだと罵る

その言葉を聞いたシユン達以外のステージにいる人達は苦い表情になる:しかし。

「それは違う:此所にいる人達はポケモンを道具だなんて思っていない。さつき答えられなかったのは、おまえ達R団の悪名に恐れてまともに考えられずにポケモンとの関係に迷いが出来てしまったから:決してポケモンを道具だなんて思っていない」

R団の発言にそれは違うと反論するシユン。先程答えることが出来なかつたのはR団にその悪名に恐れてまともに考えることが出来ずにポケモンとの関係に迷いが生じたからであり、決してポケモンを道具と思っただけではないと断言する。

そのシユンの言葉を聞いたステージにいる人達は迷いを断ちきり、一度は失い掛けた自身のポケモン達との絆を思い出しその表情に自信を取り戻していった。

「だからてめえが今さら何を言っただって無駄だって言っただけだ！」

「そうだ！その子の言う通りだ!!」

「あつ？」

シユンの再度、ステージにいる人達をフオローする発言を聞いた部隊のリーダーの男はシユンに今さら何を言っただって無駄だと罵る途中に：ステージにいるフェスティバル参加者がシユンの言う通りだと眩き、それを聞いた部隊のリーダーの男は反応する。

「俺達は何を迷ってたんだ！俺に取ってポケモンは大事な相棒だ。決して道具なんかじゃない！」

「そうよ！この子はわたしに取って掛けがないの家族よ」

「そうだ。さつきはR団にびびって答えられなかったがポケモンは道具だなんて俺達は決して思っていない！」

「そうだ。その子のおかげで勇気が出た。今なら自信を持って言える：：ポケモンは僕の大切な友達だ！」

シユンの言葉を聞いて勇気が湧いたステージにいる参加者のトレーナー達は迷いを完全に断ちきり、次々に自身のポケモンへの想いを叫び、決してポケモンを道具だと思っていないと強くR団達へと言い放つ。

そしてその数人の発言を皮切りに次々とR団へと向けて『そうだ（よ）』と同意の声が

上がり恐れは完全に無くなり立ち向かう姿勢を見せる。

その姿を見たアカネやジュンサーは微笑む。先程R団の言葉に打ちのめされてポケモンとの関係に迷いが生じて意気消沈していたトレーナー達がシユンのポケモンとの強い絆を感じさせる発言を聞いて自分達とポケモンとの絆を取り戻してR団へと恐れずに立ち向かおうとしているからだ：自身の大切なポケモンの入ったボールを手に持ち共に戦うために。

「どうやらあなたの思惑は完全に崩れたみたいですね。人質を使ってポケモンを奪う事も出来ずに苦し紛れの発言も効果なし……もうここにポケモンを道具だなんて思っている人は一人も居ない!もうこれで終わりです」

シユンが部隊のリーダーの男に人質を使ってポケモンを奪う作戦も苦し紛れの発言も失敗に終わり、もうこの場所にポケモンを道具だと思ってる人は一人もいないと強く言い放ち、これで終わりだと告げる。

その発言を聞いたR団達はおどおどと動揺し追い詰められた様子でどうしようかと焦り、部隊のリーダー男はフルフルと体を震わせており：そして：

「ふざけんじやねえクソガキがあ!!よくもこのR団最強幹部ブルボオ様の完璧な計画を潰しやがって!貴様さえいなければ俺の作戦は成功してたんだ!」

部隊のリーダーの男は自身をR団最強の幹部ブルボオと名乗り、自分の完璧な計画を

潰したシユンに怒り、シユンさえいなければ自分の作戦は成功してたんだと怒りを露にして鋭い剣幕でシユンに怒鳴り付ける。

「こうなつたらためえだけでもぶつ倒さなきや気がすまねえ!! いくぜためえら!!」

「はい!」

「了解したぜリーダー!」

そしてシユンだけでもぶつ倒さないと気が済まないと自分の後ろにいるR団の隊員2人に命令すると隊員の2人はそれぞれボールからドガース2匹とズバットとアーボを出す。

「いけ! ヘルガー! ヤツをぶつ飛ばせ!」

「ヘルウ!」

そして”ブルボオはヘルガーにシユンを襲うように指示し、命令通りヘルガーはシユンへと向かい襲いかかる。

「チィ〜コオ〜!!」

「レデイ〜!」

シユンに迫るヘルガーに、チコリータとレデイバが攻撃してシユンを守りヘルガーを吹っ飛ばす。

「ありがとうチコリータ、レデイバ!!」

「チコー!」

「レディ!」

自分を守ってくれたチコリータ達に礼を言いチコリータとレディバは微笑む。

それを見たジュンサーやステージの人達がシュンを助けようとすると…。

「R団達はぼくに任せてください!ジュンサーさんは皆さんの非難をお願いします。他の皆さんもぼくに任せて非難して下さい!」

シュンはR団は自分に任せてジュンサーに他の人達の非難を頼みステージにいる人達にも非難するようにお願いする。

「そんな!きみ一人にR団の相手をさせるわけにはいかないわ。わたしも一緒に!」

「そうだ俺達も…」

それを聞いたジュンサーやステージに居る人達はシュン一人にR団の相手をさせるわけにはいかない自分達も一緒に戦うと言ってボールからポケモンを出そうとしたその時!!

「大丈夫や!わたしもシュンくんと一緒に戦うで!」

すると審査員の一人のアカネがシュンの隣りへと並び一緒に戦うと言う。

「アカネさん!」

「シュンくん!わたしも手伝うで!一緒にあいつらを倒すで!」

「でも危険ですアカネさん。ここは僕に任せて…」

「なにいつてんねん！ シュンくん！ 人置いて逃げれるわけないやろ！ それにな！」

「…？」

自分と一緒に戦うと言うアカネに危険だから自分に任せてというシュンにアカネは一人だけ置いて逃げれるわけないと言った後に言葉を止めたアカネにシュンは頭に？を浮かべる。

「わたしもポケモンを道具にするあいつらを許せんのや！一緒に戦わせてや！」

そして自分もポケモンを道具にするR団を許せないから一緒に戦わせてとシュンにお願いする。

「…アカネさん…分かりました。一緒にR団と戦いましょう」

「うん！」

シュンはアカネの目を見てその決意が揺らがないと思ったシュンは一緒にR団と戦うことを決めてアカネと共にR団と戦おうと言うとアカネは笑顔で微笑む。

「ジュンサーさん、ステージに居る皆さんもぼくとアカネさんであいつらを倒します。だからさつき言ったとおり…」

「わかったわ。アカネさんが一緒なら大丈夫ね。みんな！ここに居る人達を避難させるわよ。あなた達は逮捕したR団達を連れて行って」

「はっ！了解しました！」

シユンはアカネと一緒にR団と戦う事になり、先程言った通りにみんなの避難をお願いしようとした時、シユンが最後まで言い終わる前にジュンサーはアカネがいるなら大丈夫だと安心してここにいる人達を避難させるように指示し、数人の隊員に逮捕したR団を連れて行くように指示を出して此所にいる人達を避難させていく。

その様子を見ていたシユンは少し疑問に思った：先程自分一人でR団と戦おうとした時にはジュンサーはシユン一人だけで戦わせる訳にはいかないと言っていたのに：アカネと一緒に戦うと言った途端にあつさりと認めたからである。

確かに自分のような子供が一人でR団のような巨悪に立ち向かう事に大人なら躊躇して止めるのは当たり前だが：自分と2つか3つぐらいしか年の違わないはずのアカネと一緒に戦うと言っただけでジュンサー達やステージの人達が納得してR団達を任せただけである。

「けっ！てめえらみてえなガキ2人が俺達に勝てるわけねえだろ！お前達はその女をやれ！俺はこの生意気なクソガキをぶっ潰す！」

「はい！！」

「分かったぜリーダー！」

R団を指揮する男はシユンを、したつばの2人はアカネの相手をするという事になり

R団とのバトルが始まる。

「来ますよアカネさん。大丈夫ですか？」

「大丈夫や！こいつらはわたしに任せてシユンくんはそいつを倒してや！」

R団達が襲いかかりシユンはアカネを氣遣うが、アカネは大丈夫だと言つてしたつば達は自分に任せてシユンはリーダーを倒すように言う。

そしてR団達とシユンとアカネとのポケモンバトルが始まった。

「いけ！ヘルガー」かみつく」だ！」

「ヘルウ！」

「チコリータ、レディバ交わすんだ！」

「チコ！」

「レディ！」

ヘルガーの”かみつく”攻撃がチコリータとレディバに迫り、2体はシユンの指示通りにヘルガーの攻撃を交わす。

「チコリータ！はつぱカッター」だ！」

「チ〜コ〜！」

すかさずチコリータに”はつぱカッター”を指示し、チコリータは”はつぱカッター”を放つ。



「ヘルウ〜」

「チ〜! 怯むなヘルガー! かえんほうしや」だ!

「ヘルウ! ガア〜!」

「チコ〜」

「チコリーター!」

はつぱカッターはヘルガーに直撃するが、くさタイプの技はほのおタイプのヘルガーには効果はいまひとつだったため大したダメージも受けずに即座に反撃の”かえんほうしや”がチコリーターに直撃し、チコリーターを吹っ飛ばす。

「チコリーター! 大丈夫!!」

「チコ〜」

シユンはチコリーターに駆け寄り大丈夫かと聞くが、効果ばつぐんの技を受けたチコリーターは必死に立ち上がろうとするも大きなダメージでプルプルと震えており立ち上がる事も出来ずにいる。

「チコ〜」

「ありがとうチコリーター! もう充分だよゆっくり休んで!」

「チコ〜」

こうかばつぐんの技を受けたチコリータは大きなダメージを受けて立ち上がれずにいたのをシユンはチコリータにお礼を言い、ゆっくり休むように言つてチコリータを抱き締め抱える。

「チコリータ戻つて！ ゆっくり休んでね！」

そしてシユンはチコリータをボールに戻した。

「ハハハ!! ざまあみやがれ、この調子でためえもぶつ潰してやる!!」

「ヘルウ!!」

「くっ!」（ヒノアラシ達は人質を助けるためにR団と戦つて体力を使い果たして……こんなところでメロエツタやディアンシーを出すわけにはいかないし……）レディバ：今頼れるのはきみしかない……頑張つて!」

「レディ!!」

チコリータが戦闘不能になり、ブルボオは愉快そうに笑いシユンも倒してやると息巻く。

シユンは苦い表情でチコリータが戦闘不能になり、ヒノアラシ達は人質を救出するためにR団達と戦い体力を消耗しており、避難はまだ完全に終わつておらず人目もある中でメロエツタやディアンシーのような珍しいポケモンを出すわけにも行かず今、出ているレディバに頼るしかなく……シユンはレディバに頑張るようお願いするとレディバ

は任せろと言うように強い意思の感じる決意の目で頷く。

「ぼく達は絶対に負けない。行くよレディバ!」

「レディバ!」

そしてシユンとレディバはお互いに絶対にR団に勝つと決意し、R団達に立ち向かう。

「(そういえば：アカネさんの方はどうなってるのかな?)」

そしてアカネの方は大丈夫かと思つたシユンはアカネとしたつぱ達がバトルしている方に目を向けるとそちらでもバトルが始まろうとしていた。

「へっ!女のおまえなんか俺達の敵じゃないぜ。いけ!ドガース、アーボ。」

「ドガース!」

「アーボ!」

「その通り!ドガース、ズバット!やれえ!」

「ドガース!」

「キキヤ!」

R団のしたつぱの2人は自分達のポケモンに命令しアカネへと襲いかかる。

「ウチをあまく見るんじゃないで!いくんやミルタンク!」

「ミルミルウ!!」

アカネはR団達を倒すために自分のポケモンを出す・アカネの投げたボールから大きい体をした全体的に桃色の多い小さい角の生えた牛のようなポケモンが出てくる。

「あのポケモンは？」

シユンはアカネがボールから出した見たことのないポケモンにポケモン図鑑を向ける。

「ミルタンク……ちちうしポケモン。ミルタンクから出るミルクは栄養満点。子供からお年寄りにまで人気で病気の人の人にとっても最高の飲み物である……」

ポケモン図鑑からミルタンクのデータが表示され、そのデータを見たシユンは何とも言えないような感じになった。

「ミルクが栄養満点って……大丈夫かなあ……バトルには向きそうにないけど……」

シユンはミルタンクのそのデータを見てもバトル向きではなさそうで大丈夫かと心配になる。

「心配ないでシユンくん！ミルタンクはバトルも強いんやで！いくでミルタンク！」

「ミル！」

アカネはシユンに心配ないと言った後にミルタンクはバトルも強いと意気込みしただけに挑む。

「へっ！そんなポケモンで何が出来るドガース」たいあたり！「アーボ」かみつくだ

！」

「おまえ達もだ。いけっ!ドガース、ズバット」

「ドガア~~~~!!」

「ア〜ボ!」

「キキャツ!」

したっぱの命令でドガース達が一斉にアカネとミルタンクに襲いかかる。

「いくでミルタンク!!」ころがる”や!!」

「ミルミルウ~~~~!!」

アカネはミルタンクに”ころがる”を指示し、ミルタンクは体を丸めて勢いよく転がりドガース達へと向かっていく。

「ミルウ~~~~!!!」

「ドガア~~~~」

「アボオ~~~~」

「ズバア~~~~」

ミルタンクの強烈な”ころがる”の一撃が4体の攻撃をもともせず、ドガース達を吹っ飛ばす。

「何い~~~~!!!」

ドガース達が纏めて吹っ飛ばされた事にしたつば達は目が飛び出す程仰天する。

「4体のポケモンの攻撃を纏めて弾き飛ばすなんて・アカネさんのミルタンクすごいパワーだ！」

シユンはR団のポケモン達を纏めて吹っ飛ばしたミルタンクの“ころがる”のパワーに驚く。

「しつかりしやがれおまえ達！もう一度だ。いけえ〜!!」

「ドガア〜!!」

「アポー！」

「キキヤー！」

したつばが怯まずにいくようにドガース達に命令し、ドガース達もダメージを受けているが怯まずにアカネとミルタンクに襲いかかる。

「負けへんで！ミルタンク、もう一度”ころがる”や！」

「ミルミルウ〜!!」

ミルタンクは“ころがる”の回転をしたまま再度ドガース達へと“ころがる”で向かっていく。

「ミルウ〜!!」

「ドガア〜」

「アボ〜」

「キキヤ〜」

そしてまたもやドガース達をその圧倒的なパワーで吹っ飛ばした。

「“ころがる”は技を続けるごとに回転数が増え、その威力も強くなる……だけど2回目でこれほどのパワーなんて・アカネさんのミルタンク：本当に強い」

シユンはレディバにヘルガーの攻撃の回避の指示を出しながらアカネとミルタンクがしたつば達とバトルしているのを見て：“ころがる”という技が使うごとに回転数が増え、威力が増えることは知っていたが、2回目でここまでの威力になるのかと：アカネのミルタンクの強さに驚く。

そして……

「ドガア〜……」

「アボ〜……」

「キシヤ〜……」

そんなミルタンクの強烈な“ころがる”を受けたドガース達は力尽きてその場に積み重なるように戦闘不能になる。

「なっ！俺のポケモン達が・そんな馬鹿な!!」

「やべえぞ！速く逃げろ!!」

したつばの2人は自分のポケモンがやられて戦闘不能になったのを見ると慌てて自分達のポケモンを見捨てて逃げ出す。

「おい！てめえら!!何勝手に逃げてんだ！戻ってこい!!」

ブルボオがリーダーの自分を置いて勝手に逃げようとしているしたつば達に怒りの声をあげて戻って来るように言うが：したつば達はそんなブルボオの言うことも無視して全力疾走でこの場所から逃げ出そうと一目散に走っている。

「ポケモンを見捨てて！自分達だけ逃げようなんて絶対許さへん！ミルタンク!」のしかかり” や!!”

「ミルミルウ〜!!」

トレーナーのために戦ったポケモンを見捨てて自分達だけ逃げようとしたしたつば達を絶対に許さないと怒り、逃げていたつば達に向かってミルタンクに”のしかかり”を指示しミルタンクは飛び上がる。

「ぎややあああああ〜〜〜」

したつば達は自分達に迫るミルタンクに恐怖の悲鳴を上げる……そして……。

「グエエエエツエ〜〜」

したつば達の上にミルタンクの”のしかかり”が決まると、したつば達はミルタンクの重さに苦しげな悲鳴を上げた後に：ガクツと意識を失った。



「よしーよくやったでミルタンク!!」

「ミルミルウ〜!」

アカネはミルタンクを良くやったと褒めて頭を優しく撫でるとミルタンクは嬉しそうにアカネに擦り寄る。

「シユンくん!こっちはやつつけたで!!後はそいっただけや!!頑張つてシユンくん!」

「はい!アカネさん。任せてください」

したつぱ達を倒したアカネはシユンに後はコガネフェスティバルを襲撃した強襲部隊のリーダーのブルボオー人だけだと言つてシユンに頑張れと応援し、シユンも任せてと応える。

「チツ・あのカスどもが・あんなガキにやられたばかりか俺を置いて逃げ出して無様にやられやがって!」

リーダーは気絶しているしたつぱ達を見て、アカネのような少女に多数で挑んで負けたりばかりか部隊のリーダーでR団の幹部である自分を置いて逃げ出そうとして無様にやられた事に怒りと侮蔑の視線を向けて罵る:そしてシユンとアカネ:ステージの回りを見回す。

「どうやらジュンサー達は俺達を完全にお前達2人に任せようだな:::全員、客の避難と逮捕した俺の部下を連行するためにここから居なくなつてる:チツ:俺もナメラ

れたもんだな！」

ブルボオはジュンサー達が完全にR団の自分達をアカネとシユンに任せただと気づく。

その証拠にジュンサー達は全員ステージの回りから居なくなっていた：どうやら客の避難と逮捕したR団達の連行に全員が向かったようだ：その事にリーダーはこんなガキ2人に自分が負けると思われた事に自分もナメられた者だと怒りの感情が沸き上がる。

「だが：これはチャンスだな！こいつらさえ倒せば、ジュンサー達も居ないし、何とか俺だけでも逃げ出せるぜ！」

そして一瞬で冷静になるとシユン達さえ倒せばジュンサー達も居ないし、自分だけでも逃げる事ができると笑みを浮かべる。

「そうはさせない！おまえはぼく達が倒す!!いくよレディバ！」

「レディ！」

「ハッ！てめえみたいなガキに負けるか！ヘルガー！かえんほうしゃだ！」

「ヘルウ!!」

ヘルガーの“かえんほうしゃ”がレディバに迫る。

「レディバ！こうそくいどう”で交わすんだ」

「レディー!」

シユンはレディバに指示し、レディバは“こうそくいどう”で素早さが上がり、“かえんほうしゃ”を交わす。

“マツハパンチ”だ!レディバ!

「レディー!レディ〜!」

「ヘルウ〜!」

そしてヘルガーの“かえんほうしゃ”を交わすと、すかさずヘルガーに接近して“マツハパンチ”でヘルガーを吹っ飛ばす。

「よっし!効果ばつぐんや!」

「チツ!しつかりしやがれヘルガー!」だましうち”だ!

「ヘルウ!ヘル!ヘルウ〜!」

「レディ〜」

「レディバ!」

しかし相手も手強く怯まずにすかさず反撃し、“だましうち”で攻撃する…一度、尻尾で攻撃すると見せかけて頭でレディバに攻撃する。

「大丈夫かいレディバ?」

「レディー!」

”だましうち”を受けてレディバは吹っ飛ぶが体勢を立て直しシユンの近くへと来る。

「よし！レディバ”たいあたり”だ！」

「レディ！レディ！！」

シユンはレディバに”たいあたり”を指示し、レディバはヘルガーへと向かつて”たいあたり”を繰り出す。

「馬鹿め！ヘルガー！”ほのおのうず”だ！」

「ヘル！ガア〜〜！」

突っ込んで来るレディバに好都合だとばかりにブルボオはヘルガーに”ほのおのうず”を指示し、”ほのおのうず”を放つ。

「レディ〜〜」

「しまった!!」

”ほのおのうず”がレディバへと直撃し、シユンは己の失敗に気づくがすでに手遅れでレディバは炎に包まれる。

「アカン！むしタイプのレディバにほのおタイプの技は効果ばつぐんや！」

むしタイプのレディバにほのおタイプの技”ほのおのうず”が命中し、効果ばつぐんなため大ダメージだとアカネは危機感を抱く。

「はははーこの俺相手に良くやったと言ったところだが…これで終わりだ。後はそのガキを倒せば逃げる。ヘルガー! そのまま、ほのおのうず”を続ける!”」

ブルボオはもう勝利を確信したのかニヤリと笑みを浮かべ、自分相手に良くやったと誉めつつも終わりだと言った後はアカネ達を倒して逃げ出すだけだ…そのためレディバを早く倒すためにヘルガーに”ほのおのうず”を継続させる。

「レディバ〜〜!」

レディバは”ほのおのうず”の中に捕らわれてダメージを受け続ける…灼熱の炎の中でダメージに必死に耐える。

「レディバ…そうだ! レディバ。渦の上に向かって飛んで脱出するんだ!」

「レディバ! レディバ!!」

シユンはレディバが”ほのおのうず”で苦しむ姿を辛そうに見つめて…そして”ほのおのうず”を見てレディバの脱出方法を思いつき指示すると…レディバは小さく頷き懸命に羽根を飛ばたかせて渦の上に向かう。

「はっ! そうはさせねえ!! ヘルガー!」

「ヘルウ!!」

レディバが渦から脱出しようとしているのを阻止しようとブルボオはヘルガーに指示し、ヘルガーは炎の力を強める。

「レディ〜・イイツ」

「レディバ!!」

もう少しで渦から脱出する事が出来るというところで”ほのおのうず”の力が強まり動きを止める。

「そいつを倒せばおまえに戦えるポケモンは居ない!逃げる前に生意気なてめえをぶっ潰してやるぜ!」

「くっ!」

レディバを倒されれば、シユンにもう戦えるポケモンは居ないと笑みを浮かべ：逃げる前に生意気なシユンをぶっ潰すと意気込む。

そのリーダーの高笑いを聞いたシユンは苦いしを噛み潰した表情になる。

「・レディ〜・」

ブルボオの言葉を聞いたレディバはシユンが危険だと気づき、シユンを守るために”ほのおのうず”から脱出しようと力をいれるが、その威力に押されて：そこから動く事も出来ない。

「そうはさせへんで!シユンくんのレディバがやられてもシユンくんはうちが守る!!」

「ミル!!」

アカネもレディバがやられてしまったら自分達もシユンを守ると言う。

「ありがとうございますアカネさん…でも…。」

アカネにお礼を言うシユン…でも…。

「レディバはぼくの大切な家族だ!これ以上苦しんでるのを見てられない…レディバ、今助けるよ!!」

「シユンくん!!」

シユンはこれ以上、自分の大切な家族であるレディバが苦しんでるのを黙ってられないとレディバを助けようと駆け出す…アカネはシユンの突然の行動に驚く。

「チツ!邪魔すんじゃねえよ!これでもくらえ!」

シユンが向かって来る事に気づいたブルボオは近くにあった壊れた案内用の小さい看板を投げつける。

「なっ!ガツ!!」

「シユンくん!!」

「レディ!!」

シユンは全力疾走で向かっていったため避ける事も出来ずに頭に看板の角が当たり転び、それを見たアカネとレディバが悲鳴を上げる。

「グツ!!」

「大丈夫シユンくん!しっかりしてや!」

シユンは額に傷がつきそこから血が垂れてきてシユンは腕で傷口を押さえる……アカネは心配してシユンに駆け寄る。

「シユンくん！血が出てるやないか!? あんた、良くもシユンくんを!!」

シユンが額から血を流しているのを見てアカネは激昂し、シユンを傷つけたR団の強襲部隊のリーダーブルボオに向かおうとする。

「待つて！アカネさん。危険ですから下がって下さい」

「でもシユンくん!!」

ブルボオに向かおうとするアカネをシユンは止める：ブルボオが何をするか分からないためアカネに危険だから下がるように言う。アカネはシユンを傷つけたブルボオが許せないのか止めるシユンに渋る。

「ぼくは大丈夫だから！下がって下さい」

シユンはそう言つて力を入れてゆっくりと立ち上がった。

「レデイ……!!」

レデイバはシユンが傷つけられたのを見て大好きなトレーナーであり家族のシユンが傷つけられた事に怒り、必死に力を入れて脱出しようとするも後一步及ばない。

「見てやシユンくん……シユンくんのレデイバ……シユンくんを助けるために脱出しようとして必死に頑張つてるで!!」



「…レディバ…」

レディバの様子を見たアカネはシユンにレディバがシユンを助けるために脱出しようと必死に頑張っていると伝える：シユンはレディバの必死に頑張る様子を見て辛い表情で見つめる：レディバは今にも倒れてしまいそうで：そして…。

「…頑張れ…」

「…レディ…?…」

シユンは小さく呟き：レディバは今にも”ほのおのうず”のダメージで倒れそうな状態でボヤけた視界で声の聞こえた方に反応し目を向ける。

「レディバ…きみならそんな炎くらい破れる!!ぼくはきみを信じてる!!」

シユンはレディバなら”ほのおのうず”も破れると、自分はレディバを信じてると心の底からの想いを叫ぶ。

「頑張れえ〜レディバ〜!!!」

「レディツツ…ツツ…レディ〜!!!」

シユンはレディバに向かって心からの想いを叫ぶ：頑張れ：信じてると…。

シユンの想いを聞いたレディバの脳裏にシユンと出会ってから今日まで過ごした思い出が過る…：楽しかった時、一緒に強くなるうと特訓したり、バトルをして勝った時は良く頑張ったねと頭を撫でて誉めてくれた：それがとても嬉しかった…。

たまに負けてしまう時もあったけどその時も良く頑張ったねと励ましてくれた：そして一緒に強くなろうと言ってくれた：そんなシユンの事が大好きだった。シユンとこれからも一緒にいたいと：シユンと仲間達と一緒に……。

”ほのおのうず”のダメージで体力の限界だったレディバの両目が強く見開く。懸命に力を振り絞り高らかに叫ぶ：シユンを助けたい：シユンの期待に応えたい：そんな心からの強い思いがレディバを新たな姿へと導く。

「なんだ？何が起こってる!!」

「これってもしかして：レディバ!」

突然のレディバの変化にブルボオは驚き、シユンはこの現象に心当たりがあり、もしかしてとレディバを見つめる。

そして：レディバは輝きと共に炎の中で姿が変わっていき：そして最後に光が強くなったかと思うと両翼の羽ばたきで炎を吹き飛ばしてその新たな姿をシユン達へと刮目させる。

「レディレディレディアン!!」

レディバは姿が変わりそこには：すつきりとした赤色の体に四本の腕に青い目をしたポケモン：レディバがシユンの想いに応えてレディアンへと進化を果たしたのだっ

た。

「シユンくんのレディバがレディアンに進化した!!」

「レディアン：あれが…」

アカネの言葉を聞いたシユンは進化したレディアンに向かって図鑑を向ける。

「レディアン：…いつつぼしポケモン。背中の星の模様は、夜空の星に反応して大きくなったり小さくなる…」

「進化したんだ：すごいよレディバ！いや：レディアン!!」

「レディアン!!」

シユンはレディアンに進化した事が嬉しくて喜び、レディアンもシユンが喜んでいるのを見て笑顔で頷く。

「はっ！進化したから何だって言うんだよ！俺に勝てるわけねえだろ!!」

「ヘルウ!!」

ブルボオは進化したから何だと言って、再びシユン達に襲いかかる。

「いくよレディアン!!進化したきみの力を見せてやるんだ」

「レディ!!」

シユンも進化したレディアンと一緒に立ち向かう。

「ヘルガー!!かえんほうしや”だ!!」

「ヘルウ!!」

「レディアン交わすんだ!!」

「レディ!!」

ヘルガーの“かえんほうしや”をレディアンは進化してアップした素早さで交わす。

「さつきより速くなってる!進化して素早さも上がったんだ!レディアン!”マツハパンチ”だ」

「レディ!レディ!」

シユンはレディアンが進化した事でスピードが格段に上がった事に気づいて喜び、その勢いに乗せてレディアンに”マツハパンチ”を指示し、レディアンは羽根を羽ばたかせてヘルガーに向かっていく。

「させるか!ヘルガー”かえんほうしや”で迎撃しろ!!」

「ヘルウ!!」

「危ないレディアン!交わして!!」

「レディ!!アン!!」

向かって来るレディアンを迎撃しようとヘルガーが”かえんほうしや”を放ち、シユンはギリギリで気づきレディアンに指示し、レディアンも”マツハパンチ”を中斷し交わす。

「ハハハ！進化してもおまえのレディアンの攻撃は物理技しかないのは分かっただよ  
!!そんなの接近させなきゃわけねえぜ！」

「くっ！確かにその通りだ・どうすれば……」

ブルボオの発言にシユンは確かにその通りだと悔しげに顔を歪ませて・どうすれば  
・と頭を悩ませる。

「止めだ!!ヘルガー!”かえんほうしや”だ!!」

「ヘルウ!!」

そこにヘルガーのとどめの”かえんほうしや”が放たれる。

「レディアン!!」

レディアンに”かえんほうしや”が迫り直撃しようとした、その時!!!

「レディゝツ!!レディゝゝ!!」

レディアンが幾つもの星形の光線を発射して”かえんほうしや”を相殺する。

「なっ!!何だと!!」

「ヘルウ!?!」

ヘルガーの”かえんほうしや”が相殺された事に驚愕を露にしていた。

「今の技は”スピードスター”!!進化して新しい技を覚えたんだねレディアン」

「レディゝ!!」

シユンはレディアンが進化して新しい技を覚えた事を喜び、レディアンも笑顔で頷く。

「はっ！ だったらどうした！ 遠距離で使える技を覚えたからって俺には勝てるか！！ ヘルガー」 かえんほうしや」だ」

「ヘルウ〜！！」

レディアンが遠距離で使える技を覚えたから何だ？ とばかりにヘルガーに”かえんほうしや”を指示し、レディアンへと放つ。

「レディアン！ ”こうそくいどう” で交わすんだ！！」

「レディ！！」

レディアンは”こうそくいどう” でヘルガーの”かえんほうしや” を交わす。

「なっ！！ さつきより速いだと！！」

「進化した事で”こうそくいどう” のスピードも上がったんや！！」

ブルボオは先程のレディバの時よりも”こうそくいどう” の素早さも上がっている事に驚き、アカネはレディアンに進化した事で”こうそくいどう” の素早さも格段にアップしている事に気づいて喜ぶ。

「チツ！！ ヘルガー良く狙って撃て！！ かえんほうしや”だ！」

「ヘルウ！！」

ブルボオは良く狙って撃つように指示しヘルガーは連続で“かえんほうしや”を放つが、レディアンのアップした素早さの前には無力であり、交わしながらヘルガーへと接近する。

「くそがくく!!!何で当たらねえ!!ヘルガー”ほのおのうず”でレディアンを囲め!!」  
「ヘルウ!!」

攻撃が次々と交わされた事にキレたブルボオはヘルガーに”ほのおのうず”でレディアンを囲んで逃げられないように指示し、ヘルガーは”こうそくいどう”で素早くなったレディアンに狙いを定めて放とうとする。

「そうはさせないレディアン!!スピードスター”だ!!」

「レディ!!レディくく!!」

「ヘルウくく」

シユンはそれを阻止するためにレディアンに指示し、レディアンの放った”スピードスター”が”ほのおのうず”を放とうとしたヘルガーに直撃し、”ほのおのうず”が不発に終わる。

「何をやってる!!しつかりしやがれ!!」

ブルボオはヘルガーが攻撃を阻止された事に怒りの声を上げる。

「今だよ!レディアン!”れんぞくパンチ”だ!!」

「レディ!!レディレディレディレディ!!」

「ヘルウ~~~~ヘルウ」

そしてヘルガーが怯んだその隙をシユンは見逃さずに指示し、素早くヘルガーへと接近したレディアンは「れんぞくパンチ」を放ち素早さだけでなく進化した事で上がった攻撃での鋭いパンチのラツシユでヘルガーを殴り付けて大きなダメージを与えていく。

「レディ〜レディ〜アン!!」

「ヘルウ~~~~!!」

そして最後の一撃が決まり、ヘルガーを吹っ飛ばした。

「ヘルウ~~~~:~:~」

レディアンの「れんぞくパンチ」で大きなダメージを負ったヘルガーはダメージによつて今にも倒れそうな程フラフラとしている。

「何やつてる役立たずが!!さつきとそいつを倒せ!!俺が逃げられねえだろうが!!」

自分のポケモンが今にも倒れそうな程ダメージを負っているにも関わらず、自分の事しか考えずに自分のポケモンを役立たずと罵るR団の幹部ブルボオにシユンやアカネは怒りを抱く。

「あんた!なんやその言いぐさは!!ヘルガーはあんたのために戦つてるのに:~:なのに自



分のポケモンを気遣わずにそんな酷い事を言うやなんて!!あんたそれでもトレーナーやの!!」

アカネはブルボオに怒りの声を上げる：ヘルガーはブルボオを守るために必死に戦っているのにブルボオはヘルガーがダメージで今にも倒れてしまいそうなのも気にせず酷い事を言った事に、それでもポケモントレーナーかと怒りを露にしてブルボオを睨む。

「はっ!!知ったことか!!さつきも言ったがポケモンなんて人間の道具に過ぎねえんだよ!!こいつだつてそうさ、それを気遣う必要がどこにある?こいつはただ俺の言う通りにしてれば良いんだよ!!」

だが、ブルボオはそんなアカネの言葉を気にする事もなく、先程の通りにポケモンを道具だと言つて自分のポケモンであるヘルガーもそうだと：ただ自分の言う通りに戦えば言いと怒鳴り声で叫ぶ。

「あんた!!(怒)」

「……………」

ブルボオの言葉を聞いたアカネはさらに怒りを募らせシユンも表情には出さないがその内には怒りの感情が沸き上がり、静かに怒りの炎を燃やしてブルボオを睨んでいる。

「もういい!! 貴方のような最低の人間は絶対に許さない。ぼくとレディアンが倒します!」

「レディアン!!」

そしてシユンはブルボオの発言を聞いて何を言っても無駄だと思い：ブルボオのよ  
うな最低の人間は許さないと自分とレディアンが絶対に倒すと宣言し、レディアンも力  
強く頷く。

「何だと!! 生意気なクソガキがあ!! この俺に何度も嘗めた口を聞きやがって!! ヘルガー  
さっさとそいつをぶっ倒せ!!」

「ヘルウ〜」

何度も自分に対して生意気な事をほざくシユンにブルボオは激怒しヘルガーにぶっ  
倒すように言うが、ヘルガーはまだダメージが残ってるのか頭をフラフラと揺らしてい  
る。

「これでとどめだ!! レディアン!! マツハパンチ”だ!!」

「レディ!! レディ〜アン!!」

シユンはこれで終わらせるとレディアンに”マツハパンチ”を指示し、レディアンは  
頷くと拳を突き出して鋭い一撃をお見舞いしようとヘルガーへと向かっていく。

「へっ! 馬鹿め!! また突っ込んで来やがった!! 格好の的だ!! ヘルガー”かえんほうしや

”で返り討ちだ。やれえ〜!!!”

「ヘルウ〜!!!」

レディアンが先程のように向かってきたのを見てまた迎撃してやろうとヘルガーに指示し、ヘルガーは“かえんほうしや”を向かって来るレディアンへと放つ。

向かって来るレディアンに向かって真っ直ぐ放たれた“かえんほうしや”がレディアンへと直撃しレディアンを包む。

「はっはあ!!直撃だあ〜!!ザマアみやがれ馬鹿があ!!」

それを見たブルボオは憎たらしい笑みを浮かべてシユンを罵る。

「レディ〜!!!」

「負けるなレディアン!!頑張れ!!」

レディアンの“マツハパンチ”が“かえんほうしや”とぶつかり合い：攻めぎ合っており、レディアンは必死に力を入れて“かえんほうしや”を突き破ろうとしており、シユンはレディアンを負けるなど応援する。

「レディ〜!!!レディアン〜!!!」

シユンの頑張れという応援にレディアンは目一杯の力を振り絞り“かえんほうしや”を上回り炎を裂きながらヘルガー目掛けて進んでいく。

「ナニ〜!!!」

「ヘルウ〜!!!」

その事態にブルボオとヘルガーは驚きその動きを止める。

「レディ〜〜〜!!!」

「ヘルウ〜〜」

そしてレディアンの“マツハパンチ”がヘルガーへと決まり、効果ばつぐんの技を受けたヘルガーは大きなダメージを受けながら吹っ飛ぶ。

「こっつ、こっつちに来るなあ〜グワアアア〜」

ヘルガーがこっちに吹っ飛んで来るのを見て恐怖を露にしてこっちに来るなあと呼ぶが逃げる間もなくヘルガーがブルボオへと直撃しそのままステージの壁へと直撃する。

「:ガハア: :ばか: :な: :ガクツ: :」

ブルボオはヘルガーの体重の乗ったまま壁に強く衝突した衝撃で、自分が負けた事を納得出来ないままそのまま気を失った。

「やった! シュンくんの勝ちや!!」

「ふう: お疲れ様レディアン。良く頑張ったね」

「レディレディ!!」

アカネはシュンとレディアンが勝った事に喜び、シュンは勝った事で一安心して緊張

が解けて一息つくくとレディアンの頭を撫でて良く頑張ったねと誉め、レディアンは嬉しそうにシユンの手に擦り寄る。

「改めて、進化おめでどうレディアン。これからもよろしくね」

「レディアン!!」

そして改めて、レディアンが進化した事を喜び、祝う：そしてこれからもよろしくねと言うとレディアンも笑顔で頷く。

「すごかったで!!シユンくん」とレディアン!!息もぴったしで良く育てられてるやん!」

「ミルミル!!」

シユンとレディアンにアカネとミルタンクが近づき、アカネがシユンとレディアンの息がピッタリと合っており良く育てられていると誉める。

「ありがとうございませアカネさん。アカネさんのミルタンクもとても強いんですね!」  
「ここがる」の威力にはびっくりしました」

シユンは誉めてくれた礼をアカネに言う、アカネのミルタンクもとても強いと誉め、”ここがる”の威力に驚いたと伝える。

「それほどでもないで!!誉めすぎやシユンくん!!」

アカネはシユンに誉められて嬉しくなり誉めすぎだと言ってテレる。

「さて、お疲れさんミルタンク!!戻ってや!!」

そしてアカネはミルタンクをボールへと戻す。

「それじゃあ、ジュンサーさん達が来るまでこいつら逃げないように一ヶ所にまとめとこかシユンくん!!」

「そうですねアカネさん!!その方が安心でしょう」

アカネがそう提案するとシユンも同意してステージ壁側で気絶しているブルボオを倒れている二人の隊員のところに運ぼうと近づくと。

シユンとアカネはまずリーダーに覆い被さるように倒れているヘルガーを運ぼうと近づこうとしたその時!!閉じていたヘルガーの目が開いたのにシユンは気づきアカネへと駆け寄る。

「アカネさん危ない!!」

「えっ?きやつ!!」

「ヘルウ!!」

近づいていたアカネに目覚めたヘルガーが”かみつく”で迫るが、いち早く気づいたシユンがアカネを抱いて間一髪で交わす事が出来た。

「助かったで!ありがとうシユンくん!!」

「いえ、大丈夫ですよアカネさん・」

助けてくれたシユンにアカネは礼を言い、シユンは返事をしながら立ち上がったヘル

ガーを見つめる。

「ヘルウ〜ツ……」

ヘルガーは今にも倒れそうにふらつきながら主人であるブルボオを庇うように立って唸りシユンやアカネを睨み付けている。

「ヘルガー：君はそんなダメージを負った体で：君の事をただの道具だなんて酷いことを言った：その人を守るなんて」

シユンはヘルガーが体をふらつかせ今にも倒れそうな状態なのに、しかも自分をただの道具扱いした酷い主人を必死に守ろうとしているヘルガーを見て：驚いたと共にそんな主人を思うヘルガーを哀れみの視線で見つめる。

「もういいんやヘルガー：そんなやつのためにあんたがこれ以上傷つくことないんや！さあ、そこをどいてヘルガー：あんたの手当てもしないと：」

アカネは自分を只の道具としか思っていない主人を必死に守ろうとしているヘルガーを見て、その主人を守るヘルガーの想いもブルボオには届かない事を悲しく思いながら：もうこれ以上ヘルガーがこんな酷い奴のために傷つく必要はないとヘルガーに退くように説得してダメージを負ったヘルガーの手当てをしようと歩み寄る。

「ウウウ〜!!ガア〜!!!」

近づいて来るアカネを見て主人に危害を加えられると思ったのかヘルガーは残った

体力を使い牙を剥き出しにしてアカネへと飛び掛かる。

「アカネさん!!!」

「ツツ!!きやあああああ~~~~!!!」

それに気づいたシユンは慌ててアカネへと駆け寄り、アカネは悲鳴をあげて迫る痛み  
に恐怖して思わず目を閉じる。

しばらくして、痛みがこない事を疑問に思ったアカネはふと目を開くと：そこには

……!!!

「シユンくん!!!」

「ぐっ!!!」

シユンがアカネを庇うように前へ出て、ヘルガーの“かみつく”から守り、右腕に噛  
みつかれその鋭い牙が腕へと食い込み血が流れている。

「シユンくん!血が・そんなうちを庇って……」

ヘルガーの牙がシユンの腕に食い込み：血が流れているのを見て、アカネは顔を青く  
して両手で口元を覆い：自分を庇って酷い傷を負ったシユンを見てシヨックを受けて  
自責の念に刈られている。

「大丈夫ですよアカネさん……」

自責の念に刈られシヨックを受けているアカネの方を向いてシユンはにこやかに苦



笑を浮かべて大丈夫だと言った後に自分の腕に噛みつくヘルガーへと向き直り優しい笑みを浮かべてヘルガーの頭に手を置いて。

「ガルウウ〜!!!!」

「もう良いんだよヘルガー：きみは充分頑張ったよ：その人のために必死に戦って：そして今もぼく達からその人を守ろうとしている：：きみをただの道具だと酷い事を言われたのに：それでもきみはその人の事が大好きなんだね：」

シユンはヘルガーの頭を優しく撫でながらヘルガーに良く頑張ったと：主人のために必死に戦い今も自分達から主人を守ろうとしている：自分の事を只の道具だと酷い事を言ったにも関わらず、それでも守ろうとするほど主人の事が大好きなんだと：：。

「：シユンくん／／／／」

腕を噛まれて激痛が襲っているにも関わらず：そんなヘルガーに優しい笑みで語りかけるシユンを見てアカネは先程自分を庇ってくれた勇敢で強い目をしたシユンの姿、そして今の温かな笑みを浮かべてヘルガーを撫でる優しい目をしたシユンを見つめていると：胸の鼓動が高鳴り顔を赤らめてうっとりとした視線で見惚れている。

「：ヘルガー：ぼく達は決してその人を傷つけたりしないよ：約束する：だからもう良いんだよヘルガー：ねっ!!」

「ウウウウ〜：：：：クウン：：」

そしてシユンはヘルガーに自分達は決してその人を傷つけたりしないと約束し、だからもう良いんだよ!と再度優しい表情でヘルガーに言う。シユンの右腕から口を放し右腕の傷口を拭うように舐めて噛んでしまった事をすまなそうな表情でシユンを見つめる。

「ふふっ。良いんだよヘルガー。主人を守るためにしたことなんだから。ぼくは大丈夫!」

「…クウン…」

シユンは微笑みながら良いんだと主人を守るためにしたことだからとヘルガーを許し頭を撫でる。ヘルガーはおとなしくシユンに撫でられていた。

「よしよし! ツツ・グツ!!」

「シユンくん!! 早く腕の傷を手当てしないと!!」

シユンがヘルガーの頭を撫でていた時、右腕の噛み傷に痛みが走り、アカネは慌てて駆け寄り早く傷の手当てをしないとと言う。

こうしてシユンとアカネはコガネフェスティバルを襲撃してきたR団の部隊のリーダーを倒し無事に参加者や、そのポケモンを守り、客席の人質達を救出する事に成功したのだった。

その後の事を説明しよう：シユン達がR団の幹部ブルボオを倒し、ヘルガーを説得してから少しして：逮捕したR団の隊員を連行して人質になっていた人達の避難させてステージに戻って来たジュンサー達はステージ状の現状を見てシユン達が、ブルボオ達を倒した事を理解し部下に命令して気絶しているR団の隊員二人とブルボオを連行して、R団のポケモン達を運んでいく。

ヘルガーもおとなしく連れられていく：アカネはジュンサーにシユンが怪我した事を伝えて手当てするためには救急箱を貰いシユンの右腕の傷を手当てしていく：傷口を綺麗な水で洗い綿で血を拭き取り消毒液で傷口を消毒したあとガーゼで完全に傷口を塞がないくらいに貼ってその上から包帯を巻いていく。

「手当てありがとうございませうアカネさん……」

「ええんや！シユンくんがこんな酷い怪我をしたのもあたしを庇ったせいなんやからっ……ツツ……」

シユンは右腕を包帯を巻きやすいように上げて、手当てをしてくれたアカネに御礼を言い：アカネはシユンがこんな酷い怪我を負ったのは自分を庇ったせいなのだから礼はいらないと言った後に言葉を無くし：顔を俯かせる。

「アカネさん？」

シユンはアカネが顔を俯かせて包帯を巻く手が止まった事を不思議がりアカネの名

を呼ぶと：アカネは体を震わせていた。

「……めんな……めんな(泣)：シユンくん：うちのせいでそんな酷い怪我して：うち：シユンくんに迷惑かけてばっかりや……」

アカネの俯かせた顔：目からはポタポタと涙を流して地面を濡らしていく……：自分のせいでシユンが酷い怪我をしてしまったり、何度もR団から助けてもらったり、迷子のピツピを連れて来てもらったりとシユンに迷惑を掛けてばかりだと落ち込み、情けなくて、申し訳なくて：そう思うと涙を流すのを止められなかった。

「：アカネさん……そんな事ありませんよ：アカネさんに怪我がなくて本当に良かった……」

「：シユンくん……でも……うちが不用意にヘルガーに近づいたから……」

シユンは涙を流すアカネの涙を指で拭い、迷惑を掛けてばかりだと落ち込み、悲しむアカネにそんな事はないと、アカネに怪我が無くて本当に良かったと微笑む：しかしアカネは自分がヘルガーに不用意に近づいたからこんな事になったのだと言う。

「それも今にも倒れそうなヘルガーを気遣つての事でしょう？ピツピの事も心配していたし、アカネさんはポケモンを思いやる心の優しい人だっつね」

「シユンくん……／＼／＼／＼／＼／＼／＼」

アカネが不用意に近づいたのも……ダメージで今にも倒れそうなヘルガーを気遣つて

手当てをしようと思いついたからであり、そして自分のポケモンのピッピが迷子になった時も心配して審査員なのにピッピを探しに行こうとしていた程：アカネはポケモンの事を第一に思いやる事の出来る心の優しい人だと優しい表情を浮かべて安心させるように言うとかアカネも安心したのか：シユンの笑顔に見惚れて顔を赤くしてシユンに慰めてくれた事や色々を含めてのお礼を言う。

腕の包帯を巻き終えた後に、右腕の怪我よりは軽いが頭の傷も消毒し終えて包帯を巻いていく。

そうしてシユンとアカネが話していると：逮捕したR団達の連行や観客達の避難を部下に任せてきたのかジユンサーがこちらに向かって来てシユン達に向かって敬礼し話しかける。

「ご協力感謝します!!お二人のおかげで人質を傷つける事なくR団達を全員逮捕する事が出来ました」

「うちはほとんど何もしてへんて、人質を助けられたのもR団を倒せたのもシユンくんのおかげや!!」

「そんな！ぼく自身は何も：ポケモン達が頑張ってくれたからですよ：それにアカネさんが協力してくれたおかげですし、アカネさんのミルタンクもとても強かったですし：」

ジュンサーの感謝の敬礼にアカネは自分は殆ど何もしていないと、人質を助けたのもR団を倒せたのもシユンのおかげだと、それを聞いたシユンは自分は何もしていないと：ポケモン達が頑張ってくれたからだと：そしてアカネが協力してくれたおかげでアカネのミルタンクもとても強かったと誉めると：それを聞いたジュンサーが：

「それは当然よ！だってアカネさんは我がコガネシティが誇る：ダイナマイトプリティギャルこと：コガネジムのジムリーダーなんですもの!!」

それは当然だとジュンサーはアカネはコガネシティが誇る『ダイナマイトプリティギャル』の異名を持つ、コガネシティジムのジムリーダーである事を聞き、それを聞いたシユンは驚いて目を丸くする。

「えっ!!アカネさんってコガネジムのジムリーダーだったんですか!!!」

「あはは：実はそうなんや。うち、コガネジムのジムリーダーやねん!」

シユンはアカネがコガネシティのジムリーダーであった事に驚き、アカネは実はそのなのやと後ろ手に頭を撫でて、照れ笑いをして自分はコガネジムのジムリーダーだと教える。

「ジムリーダー：だったたらあんなに強いのも分かります。アカネさんのミルタンク、すごいパワーでした。」

「はは：それほどでもないで：それよりもジュンサーさん。コガネフェスティバルはど

うなりますか?再開出来るそうですか?」

シユンはアカネがジムリーダーだと分かるとその強さに納得し、アカネは謙遜した後：ジュンサーにR団が襲撃したため中断された：コガネフェスティバルはどうなるか、再開出来るかと訊ねる。

「いえ・それが：R団に襲撃されたせいで会場は所々壊れてて、しかも観客だった街の人達も人質になったりして怖い体験をしたばかりだから再開は難しいって市長は言っていたわ。フェスティバルのイベント関係者とも相談して決めるらしいけど、おそらく今年のフェスティバルは中止になるでしょうね。残念だけど：」

アカネにフェスティバルの再開の事について聞かれたジュンサーは説明する：R団が襲撃したせいでフェスティバルの会場はステージや客席含めて所々壊れており、大規模な修理が必要な事と、観客だった街の人達は人質にされたりと怖い体験をして心に傷を負ったりしていて再開は難しいかもしれないとコガネシティの市長が言っていた事を話し、フェスティバルイベントの関係者とも相談して決めるらしいが、恐らく今年のフェスティバルは残念ながら中止になるだろうと溜め息をつく。

「そっか：残念やなあ：街のみんなは年に一度のこの大会を目指してポケモンと一緒に頑張ってるのに：もう!!これもR団のせいや!!絶体に許さへん!!」

「まあまあ!アカネさん落ち着いて!!」

フェスティバルが中止になりそうなのを知ったアカネは残念がって、コガネシテイの人達は年に一度のこの大会を目指してポケモンと一緒に頑張ってるのにR団のせいで中止になってしまうことに怒り、そんなアカネをシユンは落ち着かせようとする。

「フェスティバルについての連絡はこれくらいね。では、私は連行したR団達の事情聴取がありますのでこれで失礼します。今回のご協力本来にありがとうございます。では!!」

ジユンサーはフェスティバルの連絡事項を伝えると、逮捕したR団の事情聴取があるからこれで失礼しますと言って、今回の事態の協力のお礼を改めて言うとして一度敬礼してその場を離れたのであった。

「フウ…この分だとフェスティバルは中止になるやろうなあ…ほんまに残念やわあく…」

先程までR団に怒りを向けていたアカネはシユンのおかげで何とか落ち着き、フェスティバルが中止になることに残念がり溜め息をはく。

「あの…アカネさん!!こんな時に言うのもなんですが…!ぼくはコガネジムに挑戦しにコガネシテイに来ました。僕とジム戦してください!」

シユンはこんな時に言うのも何だがと言って、コガネジムリーダーのアカネにジムの挑戦をお願いする。



「…そっか! シュンくんはコガネジムに挑戦しに来たって言うてたもんね。フェスティバルは中止になりそうやからコガネジムを開けてジム戦しても良いんやけど…」

「本当ですか!! ぜひお願いします!!」

アカネはシュンがコガネジムに挑戦しにコガネシティへと来たと言っていた事を思いだし、フェスティバルも中止になりそうだからとジム戦しても良いと言い、それを聞いたシュンは本当ですか!! と喜び、ぜひお願いしますと頼み込む。

「勿論、R団を倒して何度もウチを助けてくれたシュンくんの頼みは断るわけないやん!! ジム戦は受けるで」

「ありがとうございますアカネさん!!」

フェスティバルを襲撃したR団を倒して何度も自分を助けてくれたシュンの頼みを断るわけないとアカネは言つて快くジム戦の挑戦を受けて、シュンはアカネにお礼を言う。

「でも、そのまえに〜!!」

「?」

だが、ジム戦を受けたアカネが笑みを浮かべて楽しそうな表情で眩き、シュンはアカネを不思議そうな表情で見つめる。

「何度もウチを助けてくれたり、色々なお礼もかねてウチがコガネの街を案内するで!!」

だからシユンくん!!明日はウチとデートや!!」

「ええええ〜!!!」

何度も自分を助けてくれたりと色々なお礼もかねて、自分がコガネシテイを案内すると言つて：シユンに明日は自分とデートだと片目でウインクして誰もが見惚れる可愛い笑みを浮かべて言い、シユンは突然のアカネの言葉に驚きの声を響かせるのだった。

こうして：突如としてコガネフェスティバルを襲撃したR団を様々な苦難に陥りながらもピンチになったシユンを助けるためにシユンの想いに応えたレディバがレディアンへと進化して見事にR団達を倒したのだった。

そしてシユンとアカネは襲撃された会場の状況確認をジュンサー達やイベント関係者の人達に任せて、シユンの腕の怪我の本格的な治療のために病院へと向かった：。

ヘルガーに嘯まれて深い傷を負ったがきちんとした治療を受けて傷口をしっかりと消毒し傷薬を塗ってしっかりと包帯を巻いて治療が完了し、数日は右腕を激しく動かしたりせずおとなしくしていれば良くなるとの診断を受けた。

その後、ポケモンセンターに泊まろうと思っていたシユンはアカネにコガネジムに泊まるように誘われて最初は遠慮したシユンだが、アカネに説得されてお世話になった。そしてその夜はコガネジムでアカネやジムトレーナーや審判、職員の女性や女の子達と楽しく過ごした：：フェスティバルが襲撃された事を連絡で知り、自分達のリーダーで

あるアカネを助けてくれた恩人のシユンを歓迎し、そしてシユン自身が中性的でイケメンと呼べる顔立ちとシユンの女性慣れしていない照れた様子にコガネジムの女性や女の子達の心を掴み、その夜はシユンに体をふざけて擦り寄せてくる女性や女の子達に照れて顔を赤くしながら慌て、それを見たアカネが不機嫌そうに頬を膨らませてシユンや女性達に顔を真っ赤にして怒り、シユンは何故：アカネが怒っているのか分からず不思議そうに首をかしげ、女の子達はアカネのその様子をニヤニヤと笑みを浮かべ可笑しそうに見ている。

そうしてシユンとアカネ達がコガネジムの奥の部屋で楽しい時を過ごしていると：ジムの電話が鳴り、ジムトレーナーの一人の女性が出るとコガネフェスティバルのイベント関係者の人からであり、R団襲撃の影響で破損した会場やステージの損傷が酷く、観客だったコガネシティの人達も人質にされて怖い体験をしたため、コガネシティの殆どの住人がフェスティバルの延期を希望したため今年のフェスティバルは中止になることが決まったという連絡が来たのであった。

住人の一部や参加者達がその判断に反対するも、延期の希望者の方が圧倒的に多く：検討むなく中止という事で決まってしまうフェスティバルを楽しむにしていた人達は残念な気持ちでいっぱいだった。

フェスティバル中止の連絡を聞いたアカネも毎年のフェスティバル開催を楽しみに

しており残念そうにしていたが：すぐに態度を変えて、これで気兼ねなく自分を助けてくれたシユンにお礼として街の案内を兼ねたデートが出来ると嬉しそうに喜んでいた。

アカネのその様子にシユンは困ったように笑い、ジムの人達はそんなアカネを微笑ましそうに見つめていた。

そしてしばらくアカネやジムに勤める女性や女の子達と楽しく話していると：もう夜も遅くなりフェスティバルにR団が襲撃するなど大変だった事もあり、流石にシユンやアカネ達も疲れたのか：明日のアカネとのデートに備えて今日はもうこれくらいで終わりにして休もうと言う事になり、ジムの人達はジムにあるそれぞれの部屋へと入っていった。

シユンはアカネに案内されて自分が休ませてもらう部屋へと歩いていきその部屋の扉の前に到着する。

「それじゃシユンくんはこの部屋を使ってや。部屋は普段使ってへんけどしつかり掃除してるから綺麗やで！」

「はい・ありがとうございますアカネさん」

「ふふ。どういたしましてや。それじゃシユンくんおやすみ、明日のデート楽しみにしとるでー！」

「はは・はいアカネさん・おやすみなさい」

アカネに今日、自分が休む部屋まで案内されると”アカネから短い部屋の説明を聞く”とシユンはお礼を言い：アカネは返事をしておやすみと挨拶した後、明日のデートを楽しみにしていると笑顔で吹き、シユンは小さく笑い自分もおやすみと返す。

そしてアカネは自分も休むために自分の部屋へと向かっていった。

「さて、ぼくも休もう。もうこんな遅い時間だし……」

シユンは案内された部屋のドアを開けて部屋に入ると、カーテンの掛かった窓に端にベッドが置かれて最低限の物のある部屋でシユンは荷物を床に置くと力を抜いてベッドへと座る。

「はあ……今日は色々な事が合って疲れたな……まさかR団と戦うことになるなんて思わなかった……」

ベッドに座ったシユンは途端に疲れがドツと出てきて深く息をはく：今日コガネシティに到着したばかりで色々な出来事に遭遇したからである。

ヤミカラスに襲われていた迷子のピツピを助けてアカネへと送り届け、成り行きでフェスティバルを見学することになった直後にR団が襲撃してきて戦うことになるなどシユンは到底思いもせずに行ったため終わった後に体力の限界を越えてしまったのである：治療をしたが頭の傷や腕の怪我の痛みもまだあり疲労感も残っているためそのまま寝転がる。

R団から人質の観客を助けるために頑張ってくれたヒノアラシ達、R団幹部と戦い頑張ってくれたチコリータと進化して”ブルボオを倒すのを最大限に頑張ってくれたレディアン。

シユンが怪我の手当てを済ませた後に、ダメージで体力のないレディアン達を元気全快に回復するためにアカネと一緒にポケモンセンターへと向かう。そして到着するとジョーイさんにポケモン達の回復をお願いしてレディアン達の入ったボールを渡すと、ジョーイさんはシユン達がコガネフェスティバルに襲撃したR団達を倒し、人質の観客や参加者のポケモンを守ってくれた事を知っていたのか快く引き受けてくれて、張り切った様子で任せてと言ってくれた。

R団がフェスティバルを襲撃した影響で、参加者のトレーナー達が自分のポケモンのコンディション調整のためにジョーイさんにポケモンを預けていたり、R団のポケモン達だった”ヘルガー達の手当てなど：色々と急がしい筈なのに自分のポケモンの治療を引き受けてくれた事を感謝すると、ジョーイさんは誰もが見惚れる程の笑顔を浮かべて、コガネステイの人達が開催を毎年楽しみにしているコガネフェスティバルと参加者のポケモン達、人質になつていた観客達をR団から救ってくれたシユンとポケモン達に感謝しており、こちらこそ感謝の気持ちでいっぱいだと言つて御礼もかねて一生懸命シユンのポケモンの治療をしようと云つてくれた：他にポケモンの治療を頼んでいた卜

レーナー達もR団を倒してくれたシユン達に感謝しており、自分達のポケモンは大したダメージを負っていないからとシユンのポケモンの回復を最優先にしてくれるように言ってくれた：シユンは自分のポケモンを優先させてくれた人達に感謝して御礼を言う。

こうしてレディアン達をジョーイさんに見てもらおうとレディアン達のダメージも大した事なく、ゆつくり休めば明日の昼頃にはダメージも癒えて体力も全回復して元気になると言うことでレディアン達はジョーイさんに任せポケモンセンターから出る前にレディアン達に会いゆつくり休むように言い、ヒノアラシ、ワニノコ、フシギソウ、レディアンは素直に頷き、マリルはそっぽを向いているが一応頷いていた：：大変だったのはチコリータだった。

シユンの事が大好きなチコリータは片時もシユンから離れるのを嫌がり、ポケモンセンターから出ようとするシユンに必死にしがみついて行かせないようにしている：シユンはチコリータに離すように優しく言うがチコリータは涙目でイヤイヤと言うことを聞かず：レディアン達もチコリータを引っ張るが必死にしがみついて離れない。

その様子を見たフシギソウはタメ息をついてチコリータに“ねむりごな”を使いチコリータを眠らせる。

フシギソウは今のうちに行くように入口に顔を向けて、シユンはフシギソウに一言お

礼を言った後に、改めてみんなにゆっくり休むように言っただけでポケモンセンターを出てアカネと一緒にコガネジムへと向かったのだった。

「フウ・チコリータも甘えてくれるのは嬉しいんだけど…甘えすぎなのは問題かな？」

チコリータが自分に甘えてくれるのは嬉しいが、あまりにも甘えすぎなのは問題かな？と考えているとヘルガーに噛まれた右腕に鈍い痛みが走り顔を歪ませる。

「マスター!!!」

すると、ボールの中でシユンの痛みで苦しげの感情を感じたのか…これまで人目にくくということとでボールの中に入っていたメロエツタとディアンシーが出てきてシユンの左右に心配するように近寄る。

「マスター!!大丈夫ですか!傷が痛むのですか!!」

ディアンシーは痛みの走るシユンの右腕を優しく擦り、心配している。

「まったく!!マスターはまた無茶をして、人を庇って自分が大怪我してどうするんですか!!あまり心配させないで下さい!」

「そうですわ!マスターが人を庇って自分が傷つくのを目にするたびに心が痛みましたわ!」

メロエツタはシユンがまた無茶をした事を怒り、ディアンシーもシユンが他人を庇って傷つくたびに心が痛み…ボールの中からその光景を見るたびに…何度人目も気にせ



ずボールから飛び出そうになったかと涙目で告げる

「はは…心配させてごめんねメロエツタ、ディアンシー…でも誰も怪我しなかったから良かったよ…」

シユンは心配させてしまったメロエツタとディアンシーに謝り、誰も怪我しなかったから良かったと苦笑いを浮かべる。

「何を言ってるんですか!!マスターが大怪我をしてるじゃないですか!」

「もつと自分の事を大切にしてほしいですわ!!」

シユンのその発言を聞いたメロエツタはシユンが大怪我をしていると怒り、ディアンシーももつと自分の身を大切にしてくださいとシユンに怒り、そして怒りながら2人もシユンに抱きつく。

「ほんとうに…ご無事で良かったですマスター(涙)……」

「もう…あんまり無茶をしないでくださいね(涙)……」

「うん…ごめんね2人とも…心配してくれてありがとう…」

メロエツタは涙目になりシユンが無事で本当に良かったと言って強く抱きつき、ディアンシーもシユンにもうあまり無茶をしないでくださいねと言って抱きつき、シユンも2人に心配させてしまった事を謝り2人を強く抱き締める。

「ふう…でもマスターの怪我がそこまで酷いものではなくて良かったです」

「そうですわね。それにレディアンも進化しましたし、本当に良かったですわ」  
「うん、そうだね：ふわあ〜：」

そしてしばらくしてメロエツタが一息ついてシユンの怪我がそこまで酷いものではないことに安心し、ディアンシーも領いた後にレディバがレディアンに進化したことを本当に良かったと言い、シユンは同意した後今日疲れが出たのか眠気が襲ってきたのか小さく欠伸をする。

「ふふ！今日はいろんな事がありましたものね：疲れたのですねマスター」

「明日もあることですし：もう寝ましょうかマスター：」

「そうだね：今日はもう疲れたし休もうか：」

今日はいろんな事があつて疲れたからもう休むことにしたシユン達はもうベッドに横になって眠ることにして休む。

シユンを真ん中にしてメロエツタがシユンの怪我した右腕を傷つけないようにして右側で眠り、ディアンシーは左側で眠る。

そしてシユン達は疲れた体を休ませるように3人仲良く寄り添い就寝するのだった。

こうしてアカネも明日のシユンとのデートを楽しみに思いながらシユンやジムの人達と一緒に楽しい時を過ごした後、アカネも自分の部屋で眠り：今日の騒がしかった一日が静かに終わりを迎えたのだった。

くくくヒユウウウくくく

ここはコガネシティ構外……森の奥にある険しい崖の上には黒色に赤く大きなRの文字が刻まれたヘリが止まり、その近くで2人の男性が崖から見えるコガネシティを見つめていた。

「どうやら・ヤツは失敗したようですね……任務が完了したら部隊を連れてこの崖に集合するという事でしたのにこんな時間まで待つても来る気配はない……任務を失敗してジュンサー達に捕まったと考えるのが妥当でしょう……」

双眼鏡で森やコガネシティを見回しながらそう呟くのは冷たい目をして銀髪の長髪で所々尖った髪型で冷静沈着という言葉が似合うクールな雰囲気の男性がそう冷静に状況を判断していた。

「はっ!!あれだけ自分がR団幹部の中で一番強いだとかほざいてたくせに:与えられた任務も真つ当出来ず、挙げ句に部隊ごと自分自身も捕まるなんざ……お笑いだけ」

その隣でフェスティバルを襲撃したR団幹部ブルボオを馬鹿にしているのは大柄で筋肉質な体に金髪にサングラスをしたワイルドな感じの男性で、部隊ごと自分自身もジュンサーに逮捕されたブルボオを嘲笑う。

「R団の戦力増強や、資金力を向上させるためにフェスティバル参加の鍛えられたポケモン達を奪う役目を与えられたと言うのに：任務失敗とは呆れて物も言えませんね……」

銀髪の男性はフェスティバル参加者達の鍛えられたポケモンを奪ってR団の戦力アップや資金の向上を目的とした役目を与えられていたのに任務を失敗した事に呆れて何も言えなくなる。

「ああそうだな：だが少し妙だな。調子に乗ってたとはいえ奴もR団の幹部の1人：：その辺の奴に負ける程弱くないはずだが：：：どういうことだ？」

金髪の男も同意しつつも、疑問を浮かべる：：フェスティバルのポケモンを奪う任務を与えられたR団幹部のブルボオは調子に乗っていたとはいえR団幹部の1人であり、その辺のトレーナーやジュンサー達に負ける程弱くはないはずだと妙に思い、ということだと疑問に思っていると銀髪の男の無線に連絡が入った。

「今、コガネシティに極秘に潜入させた隊員から連絡が入りました。どうやら奴はこのコガネシティのジムリーダー“アカネ”と偶然会場に居たトレーナーの1人にやられてジュンサー達に捕まったようです」

「コガネのジムリーダーと一般トレーナーにか？いくらジムリーダーとはいえ、あいつの率いていた部隊にはしたつぽも10人以上居たし：奴自身もそれなりの強さ。とて

もジムリーダーとトレーナー人だけで何とかなるとは思えねえんだが…?」

「その一般のトレーナーがジムリーダーに近い実力だったんでしよう。ジムリーダークラスが2人居たなら部隊を率いていたとはいえ奴が倒されるのは納得出来ます。これ以上の詮索は時間の無駄です：奴が任務を失敗した以上ここに止まる必要はありません。引き上げますよブソン」

「分かったぜバシヨウ。チツ!散々待たせてこのザマか!!ざまあねえぜ」

コガネシティのジムリーダーとジムリーダーに近いトレーナーにやられたのだと納得し、これ以上の詮索は無用だと話しを終わらせてブルボオが失敗した以上、ここに止まる必要はないと、相手の金髪の男を呼び引き上げるためにすぐそこに停めてあるヘリに乗り込み、したっぱに命令しヘリを操縦させそこから飛び立つ。

「けっ!!とんだ無駄な時間だったぜ。おいバシヨウ：次の任務は何だ?速く暴れてえぜ」

「そう急ぐことはありませんブソン。任務の連絡はもう来ています。以前から進めていた奴を捕らえるためのプロジェクトのシステムの開発完了が近いと先程連絡がありました。先程、隠しエージェントにあるシラヌイ博士の研究所に来るようにとの事です」

「おっ!そうか。いよいよかあ!!腕がなるぜ!!」

銀髪の男からそう聞いた金髪の男はやる気をみなぎらせて片方の手にもう片方の手

を拳にしてぶつけて腕がなると言う。

そうして金髪の男がやる気を全快にして笑みを浮かべていると、銀髪の男は何かを考えていた。

「(しかし、ジムリーダーと一緒に奴を倒したというトレーナー：あれだけいたしたつばの部隊を倒し、奴をも倒した実力。少々気になりますね：我々R団の脅威になるかもしれません：)」

シユン達がコガネフェスティバルに襲撃してきたR団幹部としたつばの部隊を倒し、フェスティバル参加者のポケモンとコガネシティの人達を守ったのも束の間……また、新たな悪の計画が始まろうとしていた。

そして、そのR団達の悪の計画にシユンは立ち向かう事になる。

かつて出会った天真爛漫でアイドルトレーナーを目指す少女との再会、その少女の幼馴染みで相棒と一緒に強くなるうとする元気全快の少年と幼馴染みの少女に恋するお気楽でお調子者の少年と出会い、共に巨悪と戦う。

そして遠い昔の愚かなる行いで、人間との絆を完全に断ち切った伝説のポケモンを守り、人間を信じてもらうために……。

## 第十八話 プリティギャルアカネ!ダイナミックパワー

ジョウト地方、3番目のジムのある街：コガネシティにやって来たシユンはコガネジムに向かおうとした途中に迷子のピツピを見つけて助けると、ピツピのトレーナーを探しにコガネシティの人達に話しを聞いてコガネ公園へとやって来た。

そこではコガネシティで年に一度開催されるポケモンの品評会、コガネフェスティバルが開催されていた。そこで審査員をしていたピツピのトレーナーのアカネと出会う。

アカネも迷子のピツピを心配していて、ピツピを連れてきてくれたシユンにお礼がしたいと言うので、大会が終わるのをアカネの恩人ということで特別に用意してもらった特等席で待っているとそこに悪の秘密結社R団が襲撃してくる。コガネフェスティバルの参加者のポケモンを奪いに来たR団達に立ち向かうシユンとアカネ。最初、人質を取られたりと抵抗出来ずにいたがシユンとポケモンの奇策で人質の開放に成功、そのままR団達を倒そうとアカネと2人で立ち向かう。

ポケモンを道具扱いするR団幹部『ブルボオ』に怒りを抱き戦うシユンとポケモン達、思わぬ苦戦を強いられるもシユンの想いに応えたレイバがレイディアンへと進化して

R団を見事撃破するのだった。

そしてR団を倒した後に、シユンに色々と自分のせいで迷惑をかけてしまったと目を潤ませて落ち込むアカネをシユンは優しく慰める：そしてシユンは先程のR団のしたつぱ達を倒したアカネのポケモンの強さに驚いていると：ジユンサーさんからアカネがコガネシティが誇るコガネジムのジムリーダーであることを告げられ驚くシユン。シユンはアカネにジム戦を申し込むと、アカネは快く引き受けてくれたがその前に、と笑顔で明日はデートやと伝えられたシユンは驚いてしまうのだった。

その翌日、コガネシティの案内を兼ねてのデートだったがアカネはジムで働く女の子達に色々と言われて只の街の案内のつもりだったのに、妙にシユンを意識してしまうようになった。昨日のコガネフェスティバルの事件での事もあり尚更シユンを変に意識してしまう。

そして昨日のデートでシユンは予想外な体験をしたが楽しいデートが出来て今日はいよいよシユンが待ちに待ったコガネジムへの挑戦が始まるのであった。

「よし！準備万端、ポケモンのコンディションもばっちりだー！」

昨日、アカネとのデートが終わった後にシユンは明日のアカネとのジム戦に備えてポケモンのコンディションの確認や、どのポケモンをジム戦に使うかを考えるために今日



はポケモンセンターに泊まるとアカネに伝えると、アカネは了承してジム戦の日時を伝えるとシユンは頷いてポケモンセンターへと向かった。

ポケモンセンターに到着したシユンはまずポケモン達の回復をジョーイさんにお願いした後にポケモンセンターの食堂で夕食を食べながらアカネのあの強力なパワーを持つミルタンクをどうやって攻略しようかと考えていた。色々と思いついてより良い方法を自分の宛がわれた部屋に戻った後にメロエツタとディアンシーとも相談し、しばらく相談しあつた後に明日に備えて就寝しそして今、シユンは起きて朝食を済ませた後にジョーイさんからポケモン達を受け取りそしていよいよコガネジムにジム戦に挑戦する。

「(頑張つて下さいねマスター!!)」

「(わたくし達は影ながら応援しておりますわ♪)」

「うんありがとう2人とも!それじゃあ行くう」

シユンの両隣で姿を消していたメロエツタとディアンシーは頑張つてと応援し、応援してくれる2人にお礼を言うのとシユンは気合いをいれてコガネジムへと向かう。

コガネジムへと向かい歩いている途中でもシユンは緊張と武者震いとも言える感情でいっぱいだった: : :それでも自分とポケモン達を信じるだけだと思いいコガネジムへと歩いて行く。

ポケモンセンターからコガネジムとの距離はそう遠くはない：シユンがしばらく歩いているとコガネジムが見えてくる：ふとコガネジムの入口に目を向けるとそこには……。

「待つとつたで!!シユンくん!!」

コガネジムのジムリーダーでアカネとコガネジムに勤めるジムトレーナーや職員の女性や女の子達がいてアカネはシユンが来たことに気づくと待っていたと交戦的な笑みを浮かべている。

「おはようございますアカネさん！今日のジム戦、よろしくお願いしますー!」

「おはようシユンくん！もちろんや。シユンくんには色々とお世話になったけど：ジム戦では手加減なしや!」

「はい！全力で挑ませてもらいます!!」

シユンはアカネに挨拶した後今日のジム戦ではよろしく願います！と頭を軽く下げ、アカネも挨拶を返した後に勿論だと頷き シユンには色々とお世話になったがジム戦では手加減なしだと笑みを浮かべて言い、シユンも全力で挑ませてもらうと強く意気込む。

「フフ！さすがシユンくんや！今からジム戦が楽しみや！ほなバトルフィールドに案内するで！こつちやシユンくん」

シユンのその強い闘志を感じたアカネは笑みを浮かべて 今からジム戦が楽しみだと言つてシユンをコガネジムのバトルフィールドに案内する。

アカネとジムトレーナーや職員の女性や女の子達に付いて行くシユン。その途中に女の子達から：「シユンくん!アカネちゃんは強いわよ!頑張つてね♪」とエールを贈られたり、「アカネちゃんは今日のシユンくんとのジム戦を楽しみにしていたのよ」と教えられたり、「わたし達もアカネちゃんとシユンくんのジム戦を楽しみにしていたのよ!良いバトルを期待してるわ♪」と言われたりとその他にも色々とジムの女性や女の子達と話しをしながら歩いていると……。

「着いたでシユンくん!此所がコガネジムのバトルフィールドや!!」

アカネにそう言われてシユンはバトルフィールドを見るとそこは回りを観客席に囲まれたどこにでもある地面のバトルフィールドだった。

「さあ、ジム戦を始めるでシユンくん!」

「はい!よろしくお願いしますアカネさん!!」

そうして2人はバトルフィールドのトレーナーボックスに入りジム戦が始まる。

「これからマサラタウンのシユン対コガネジムジムリーダーアカネのジムバッジをかけたポケモン勝負を始めます…」

そして審判の場に審判の制服を着て旗を持った緑色の髪の毛のツインテールをモジャッ

とさせた女性がそう宣言して、いよいよジム戦が始まる。観客席にはジムトレーナーや職員の女性や女の子達が座って観戦している。

「使用ポケモンは3体！いいですね！」

「シユンくん！キミには一昨日のあの日から本当に世話になって：シユンくんには色々大切な事を教えてもらったわ！そんな感謝も込めて！今日のジム戦、本気でいかせてもらおうでシユンくん!!」

「はい！ぼくとポケモン達の持てる全ての力を出してアカネさんに挑みます」

「では、試合開始!!」

そして審判からバトルのルール説明が終えると2人に確認する：そしてアカネは一昨日のあの日からシユンに色々世話になり、そして色々大切な事を教えてもらったわと微笑んだ後にそんな感謝も込めて本気でいかせてもらおうと笑みを浮かべて言い、シユンも頷いて自分と自分のポケモン達の持てる全ての力を出して挑むと強い決意の表情でアカネを見る。

そしてお互いに準備万端であることを確信した審判から試合開始が宣言される。

「いくでシユンくん！シユンくんが強いことはあの時のバトルで充分知つとる！だから今回のジム戦はうちも普段と違うポケモンでやらせてもらおうで!!いくんやプリン!!」

「プリユ~~~~!!」

アカネはシユンのコガネフェスティバルでのR団とのバトルを見てシユンとポケモン達が強いことは理解しており、だから今回のジム戦はいつもアカネが使うジム戦用のポケモン達ではなくアカネが持つポケモンの中でもとりわけ強いメンバーで挑むと言つてボールを投げるとそこからプリンが出てきて地面へと着地する。

アカネがプリンを出すと観客席で観戦しているジムトレーナーや職員の女性達が……。

「アカネちゃんの一番手はプリンね。アカネちゃんのプリン曲者なのよね。」

「そうそう!色々と癖のあるあのプリンをシユンくんがどう攻略するのか楽しみだわ。」

と……アカネの一番手のプリンの事についての感想を述べているがシユンと観客席の距離は空いているので聞こえていない。

「アカネさんの1体目はプリンか……だったらこっちは頼むよマリル!!」

「リル〜〜!!」

シユンはアカネがプリンを出すとこっちはマリルをボールから出す。

「いくでシユンくん!プリン、”おうふくビンタ”や!!」

「プリユ!プリユ!!」

最初はアカネが仕掛ける「プリンに」おうふくビンタ”を指示し、プリンはマリルに

向かって接近する。

「来るよマリル！交わして！」

「リル：リル〜」

シユンが交わすように指示するとマリルは、一瞬シユンにジト目を向けた後にシユンの指示に従い、プリンのおうふくビンタ”を交わす。

「プリユプリユプリユ!!!」

「リルリルリル!!」

プリンのおうふくビンタ”を素早い身のこなしで交わしていくマリルだが：プリンの攻撃も思ったよりも速く、最後のビンタを避けようとした時：それよりも早くビンタが当たりマリルを吹っ飛ばす。

「プリユ〜」

「リル〜」

プリンの渾身のビンタがマリルに決まり、マリルを吹っ飛ばす。

「マリル!!」

「リル：」

シユンは吹っ飛ばされたマリルを心配するがマリルはすぐに立ち上がる。

「大丈夫かいマリル？」

「リル!!」

シユンはマリルに大丈夫かと聞くとマリルは当たり前だと言うように頷く。

「よし!それじゃいくよマリル!プリンに”みずでっぼう”だ!!」

「リル!!リル〜」

「プリン!膨らんで交わすんや!」

「プリ!プリユ〜」

マリルの反撃の”みずでっぼう”をアカネはプリンに膨らんで交わすように指示し、  
 プリンは息を吸い込んで体を膨らませて浮かび上がり”みずでっぼう”を交わす。

「だったらマリル!れいとうビーム”だ!”」

「リル〜」

シユンはすかさずマリルに指示し、マリルは空中のプリンに”れいとうビーム”を放つ。

「プリユ〜…:…プウ〜」

「プリン!!」

空中で漂うプリンはジムの中で風もないため大きく交わすことも出来ずに”れいとうビーム”がプリンに直撃し:…プリンは苦悶の声を上げた後に”れいとうビーム”をくらいつつつけたために体から空気が抜けて吹っ飛び、アカネはプリンの名を呼ぶとプリ

ンは吹つ飛びながらも身を翻して着地する。

「プリン大丈夫かいな！」

「プリユ！」

「よし！プリン、”うたう”でマリルを眠らせるんや！」

「プリユ！プ〜プリユプリユプ〜プリ〜」

プリンが大丈夫なのを確認したアカネはプリンに”うたう”を指示してプリンは頷いた後に歌い始める。プリンの歌声から出る音符がマリルへと迫る。

「マリル！上を向いて回転しながら”みずでつぼう”だ！」

「リル！リ〜ル！！」

”うたう”の音符が迫るのを見たシユンはマリルにそう指示をすると、言う通りに上に”みずでつぼう”を放ち回転すると”みずでつぼう”がマリルを覆うように広がり音符と歌声を防ぐ。

「なんやて！！」

「プリユ！！」

「アカネちゃんのプリンの”うたう”をあんな方法で防ぐなんて……」

「やるわねシユンくん……」

アカネとプリンはシユンとプリンがあのような方法で自分達の技を防いだのに驚き、



観戦しているジムの女性や女の子達も驚きやるわね!とシュン達を称賛している。

「まさか…あんな方法でプリンの”うたう”を防ぐなんてびっくりしたわ…さすがはシュンくん…」

「すごいアカネさんのプリン…基礎能力は高いし…それにあの”うたう”も厄介だ…」

アカネとシュンはお互いに相手を称賛して誉めあっており、シュンは”うたう”も厄介だと呟く。

「そうだ!!マリル!プリんに”メロメロ!!”」

「リル!リル?」

シュンはマリルに”メロメロ”を指示しマリルは頷くと、片目を可愛くパチツとウィンクするとそこからハートの形のエネルギーが出てきてプリンに向かっていく。

「(マリルの”メロメロ”でプリンをメロメロ状態にすれば隙が出来る!これで…)」

マリルの”メロメロ”がプリンへと向かっていくプリンの回りを囲み、そしてプリンはメロメロに…。

「プリユ…」

なった様子は全くなく平然としており…メロメロ…つまり攻撃らしき物を受けて何ともないことにプリン自身も困惑し身体中を見回している。

「メロメロになってない…ということとはアカネさんのプリンは…」

「残念やったなシユンくん!!うちのプリンはメスや。そしてシユンくんのマリルも同じメスやから”メロメロ”は通用せえへんで!!」

プリンがメロメロの状態になっていない事に気づいたシユンはその原因を理解する。  
:

それはアカネのプリンがメスだったため”メロメロ”という技は同性のポケモンには効果がないため、プリンと同じメスのマリルの”メロメロ”が通じなかったのである。

「プリンの”うたう”を封じるために”メロメロ”にして動きを止めようと考えとったんやろうけど:そうはいかへんで!!(せやけど、”メロメロ”が効かへんと言ってもプリンの”うたう”はさつきみたいに防がれてまう:::だつたらー!」

「プリン、”シャドーボール”で攻撃や!!」

「プリー!プリー〜」

シユンの考えを読むアカネだが、内心ではあまり状況は変わっておらず”うたう”を使つても先程のようにマリルの”みずでっぼう”の水の壁に防がれてしまうと、プリンにシャドーボールの攻撃を指示してプリンは口にゴーストのエネルギーを弾にして打ち出す。

「マリル!れいとうビーム”で打ち落とすんだ!!」

「リル!リル!」

プリン“シャドーボール”をシユンはマリルに“れいとうビーム”を指示して打ち落とす。威力は互角でお互いに相殺される。

「くっ!これも互角か:だったら力押しやプリン!ころがる”や!”

「プリユ!プリユ!」

「ならこつちも:マリル!ころがる”だ!!」

「リル!リル!」

技の威力も互角だったためアカネは力押しで攻めようとプリンに“ころがる”を指示してプリンは体を丸くして回転して向かってくる:シユンも対抗してマリルに“ころがる”を指示して向かって行く。

「プリユ!」

「リル!」

そしてお互いに転がりながら向かって行き中央でお互いにぶつかり合う。

「いけ!押しきるんやプリン!!」

「プリユ!」

「負けるなマリル!頑張るんだ!!」

「リル!」

お互いに”ころがる”で攻撃し中央でぶつかり合うマリルとプリン：お互いにぶつかりながら力を込めて相手を弾き飛ばそうとしており、そんな自分のポケモン達にシユンとアカネはエールを贈っている。

「プリユ〜〜」

「リル〜〜」

お互いに自分のトレーナーからの応援を聞いた2体は期待に込めようとさらに力を振り絞り相手を吹き飛ばそうと強く回転する。

「リル!!リル〜〜」

「プリ!?プリ〜〜：：：」

マリルがさらに力を込めると段々とプリンを押し始める：プリンは押され始めた事に焦り押し返そうと力を込める。

「プリン：負けちゃあかんで!!押し返すんや!」

「良いぞマリル!!そのままいけえ〜!!」

その様子を見たアカネは焦りながらも押し返すんやと励ましのエールを贈り、シユンもマリルに激励のエールを贈る。

「リル：リル〜〜!!!」

「プリユ：プリ〜〜!!!」

シユンのエールを受けたマリルはラストスパートとばかりにありったけの力を振り絞り、威力の上があった”ころがる”がプリンの”ころがる”の威力を上回りプリンを吹っ飛ばした。

「ああ!!プリン!」

「良いよマリル!すかさず”みずでっぼう”だ!!」

「リル〜」

吹っ飛ばされたプリンを見て声を上げるアカネ：その隙を見逃さずにシユンはマリルに追撃の”みずでっぼう”を指示しマリルも指示を聞いてすかさず”みずでっぼう”を放つ。

「プリユ〜」

「めげるんやないでプリン!!シャドーボール”で反撃や!!」

「プリユ!プリユ〜」

吹っ飛ぶプリンに”みずでっぼう”が直撃するが：アカネはプリンにめげるんやないでと言つて反撃の”シャドーボール”を指示し、プリンはマリルに”シャドーボール”を放つ。

「マリル!交わして”ころがる”で決めるんだ!!」

「リルリル!リル〜」

「プリンの迫る」シャドーボール」を指示通り交わしたマリルは、その勢いのままころがる」でプリンへと向かって行く。

「プリン〜」

「プリン!!」

「プリんに」ころがる」が直撃して吹っ飛ばし、地面を転がる：そして…。

「：プリユ〜：」

「プリン戦闘不能!!マリルの勝ち!!」

「プリンは目を回して倒れて、審判から戦闘不能の宣言が言い渡される。

「よし!やったねマリル!」

「リル!!」

「シユンは勝ったマリルを誉めてマリルも当然だと言った様子で笑みを浮かべる。

「お疲れさんプリン：あんたはよう頑張ったで!ゆっくり休みや:」

「アカネは戦闘不能になったプリンをボールに戻して良く頑張ったと誉めた後にゆっくり休むように言っつてボールをしまう。

「アカネちゃんが先に一敗するなんて:」

「やっぱり強いわねシユンくん!」

「話しを聞いただけじゃ実感出来なかったけど:あんなに強いんならR団を倒せたのも

納得だわ!」

観戦していたジムで働く女性達もアカネが先に一敗した事に驚き、改めてシユンとポケモン達の強さに感心して、話しを聞いただけでは実感出来ていなかったが今のバトルを見て紛れもなくR団の幹部を倒したシユンの実力は本物だと感じていた。

「さて・さすががやなシユンくん!やつぱり強いなあ:ポケモンも良く育てられとる。でもこの子はそう簡単には倒せへんで!!いくんやピクシー!!」

「ピクシー!!」

プリンを戻したアカネはシユンとマリルの強さを賞賛した後に笑みを浮かべて、それでもアカネが次に出す2番手のポケモンにはそう簡単には倒せないと言ってボールを投げるとそこから勢いよくピクシーが飛び出してくる。

「アカネさんの2番手はピクシーか:」

「ピクシー:~:ようせいポケモン。どんなに遠くの物音も聞き分けられるほど耳が良く、そのため騒がしい場所には寄りつかず静かな所を好む。宇宙から来たと言われている珍しいポケモン:~:」

アカネの2番手はピクシーだった:~:シユンはポケモン図鑑でピクシーのデータを見る。

「出た!アカネちゃんのピクシーよ」

「あのピクシーはとつても強いのよね・」

「ええ・アカネちゃんの本当の手持ちの1体で普段のジム戦では絶対に使わないわ。わたしもあのピクシーがジム戦に出てるのを見るのはこれが初めてよ・」

観戦しているジムの女性達からもアカネの2番手のピクシーの事について話している・アカネがジム戦用に育てたポケモンではなく、アカネが持つ本来の手持ちの1体で、普段のジム戦では絶対に使わないほど強いらしい・ピクシーがジム戦に出るのを見るのはみんな初めてらしい。

「バトル開始!!」

「それじゃあいくで!!ピクシー!サイコキネシス”や!!」

「ピク!!ピク〜」

「リル!リル〜・」

審判によつてバトルの再開されるとアカネはピクシーに”サイコキネシス”を指示し、ピクシーは念の力で目を青く輝かせてマリルに攻撃するとマリルは浮かび上がり苦しげな声を上げる。

”サイコキネシス”・かくとうタイプ対策か・マリル!ピクシーに向かって”れいとうビーム”!」

「リル〜」



「そうはさせへんで!!ピクシーそのままマリルを吹っ飛ばすんや!!」

「ピクシー!!」

「リル〜」

「マリル!!」

アカネはかくとうタイプ対策に”サイコキネシス”を覚えさせており、”サイコキネシス”から脱出させようと”れいとうビーム”を指示するが、アカネはそうはさせないと”サイコキネシス”でマリルを吹っ飛ばす。

吹っ飛ばされたマリルの”れいとうビーム”は外れてしまい地面へと叩きつけられる。

「くっ!それなら…マリル、”ころがる”攻撃だ!!」

「リル!リル〜!!」

シユンの指示を受けて、体勢を立て直したマリルは”ころがる”でピクシーに向かって行く。

「やったら…迎え撃つんやピクシー!!メガトンパンチ!!」

「ピク〜!!シ〜!!」

”ころがる”で迫るマリルにピクシーが物凄い力を込めた拳”メガトンパンチ”で迎え撃つ!!

「リル〜〜!!」

「ピクシ〜〜!!」

そして先程のようにマリルの“ころがる”とピクシーの“メガトンパンチ”がぶつかり合う。

「リル〜〜」

「ピク〜〜」

しばらくお互いのパワーが拮抗しあっていたが、徐々にマリルが押され始める。

「ピク〜〜シ〜〜!!」

「リル：リル〜〜」

ピクシーがさらに力を込めるとそのままマリルを吹っ飛ばす。

「マリル!! くっ!! みずでっぼう!!」

「リル〜〜!!」

マリルが力負けた事に驚きながらも反撃の指示を出し、マリルは吹っ飛びながら「みずでっぼう」を放つ。

「させへんで! ピクシー、”10まんボルト”や!!」

「ピクツ：シ〜〜!」

ピクシーは電気を纏いマリルに向けて放つ。

「リル：リル〜」

容易くマリルの”みずでつぼう”を撃ち破り、”10まんボルト”が直撃する。

「マリル!!」

「リル〜：〜」

みずタイプのマリルに効果ばつぐんの”10まんボルト”が直撃したためダメージを受けたマリル：ダメージで体がふらふらで今にも倒れそうである。

「よし！これでトドめや!!ピクシー、”メガトンパンチ”!!」

「ピク〜：〜!!」

ひんし寸前のマリルにトドめをさそうとアカネはピクシーに指示し、ピクシーは”メガトンパンチ”を繰り出しながら迫る。

「まずい！マリル、”れいとうビーム”で迎え撃つんだ！」

「リル：〜：リル〜、リル！」

ピクシーの攻撃が迫ってる事に気づいたシユンは迎撃の”れいとうビーム”を指示し、マリルは”れいとうビーム”を放とうとするが途中で体に電流が走り動きを止める。

「どうしたのマリル！はっ、まさか：さっきの”10まんボルト”で：」

マリルがどうして”れいとうビーム”を撃たないのか疑問に思ったシユンは、マリル

の様子を見てその訳に気づく：先程の”10まんボルト”の追加効果で麻痺状態になつてしまい、攻撃出来なかつたのである。

「リル〜」

まひ状態で体が痺れて動けないマリルに……。

「ピックシ〜〜!!!」

「リル〜〜〜〜」

「マリル!!!」

ピクシーの”メガトンパンチ”がクリーンヒットしてマリルを吹っ飛ばす：吹っ飛ばされたマリルを心配するシユン：地面を数回転がるマリル：そして。

「リル〜〜……」

「マリル戦闘不能!!ピクシーの勝ち!!」

マリルは戦闘不能になり、審判からピクシーの勝利が宣言される。

「よし！よくやったでピクシー!!」

「ピクシー!!」

アカネはピクシーをよくやったと誉める。

「大丈夫かい：マリル：」

「リル〜〜……」

シユンはバトルフィールドに入り戦闘不能になったマリルを抱き抱えて大丈夫なのか確認すると、マリルはダメージで体力もないため弱々しい声で応える。

「まさかあのピクシーが”10まんボルト”を使えるなんて思わなかった：ごめんねマリル。ぼくの計算ミスで、ゆっくり休んで：」

「リル〜：：：」

シユンはアカネのピクシーが”10まんボルト”を覚えているとは全く思わず自分の計算ミスでやられてしまったとマリルに謝ると、ゆっくり休むように言ってマリルをボールに戻す。

「さすがはアカネさんのピクシー！とても強いし技の威力も高い：」

「さあシユンくん！次はどのポケモンで来るんや!!」

「ピクシー!!」

シユンがアカネのピクシーの能力の高さを感じてる向こうで、アカネは腕を組ながらピクシーと立ちシユンの2番手が出るのを待ち構えている。

「あのピクシーはパワーも強くて技も多才：：：だったら：頼んだよレディアン!!」

「レディ〜!!」

アカネのピクシーの強いパワー、技の多才さによるどのタイプのポケモンにも対応出来るバランスに焦りを覚えながらも：自分のために頑張ってくれたマリルに報いる意

味でも2番手のレディアンに期待し、レディアンもシユンのその想いに応えるように勢いよくボールから出て来る。

「シユンくんの2番手はレディアンか！シユンくんのレディアンが強いのはよおわかってる・ピクシー!!油断せずいくで!!」

「ピクシー!!」

シユンの2番手はレディアン：アカネは一昨日のR団の襲撃の時に見たレディアンの強さを思いだし、その強さは充分分かつているからピクシーに油断せずに行くと行ってピクシーも頷く。

「それではバトル開始!!」

「いくよレディアン!!スピードスター!!」

「レディ!!レディ」

「あまいでシユンくん!!ピクシー、”サイコキネシス”!!」

「ピクシ〜!!」

シユンはレディアンに”スピードスター”を指示して先制攻撃を仕掛けるが、アカネは冷静にピクシーに”サイコキネシス”を指示してピクシーは”サイコキネシス”で”スピードスター”を止める。

「なっ!!」

「レディ!!」

「いいで!そのままレディアンに跳ね返すんや!!」

「ピクシ〜!!」

”スピードスター”が止められた事に驚くシユンとレディアン:そしてアカネはピクシーにすかさず指示し、受け止めた”スピードスター”をレディアンに向けて跳ね返す。

「レディアン、”こうそくいどう”で交わすんだ!!」

「レディ!!レディ〜」

レディアンは”こうそくいどう”で自身の素早さを大きく上げて、跳ね返って来た”スピードスター”を交わす。

「クツ!：そんならピクシー、”10まんボルト”や!!」

「ピクシー!!」

「交わすんだレディアン!!」

「レディ!!レディ!」

レディアンが”スピードスター”を交わしたのを見たアカネはすぐに技を変えて”10まんボルト”を指示した。ピクシーの”10まんボルト”がレディアンに向かつて行くが:シユンの指示を聞いたレディアンは素早い動きで楽々と”10まんボルト

”を交わす。

「まだまだや!!ピクシー、連続で”10まんボルト”や!!」

「ピックシ〜〜!!」

「レディー!」

アカネのその指示にピクシーは体に電気を纏わせ連続で”10まんボルト”を放つがレディアンはその連続攻撃を次々と交わす。

「ピックシ〜〜!!」

「レディ〜〜!」

ピクシーもよく狙いを振り絞って放つが、レディアンの素早さの前には全く通じずに次々と交わされる。

「くっ!!なんちゆう速さや!こっちの攻撃が全然当たらん!」

「ピク〜:パイ:」

レディアンのその素早さの前にかっちの攻撃が全然当たらないことにアカネは危機感を抱き、ピクシーも連続の攻撃で体力を使い息を上げている。

「:ピクシーは連続攻撃で体力を消耗してる:今がチャンスだ!レディアン、”スピードスター”!」

「レディ〜〜!!」



「ピクシーが攻撃の連続で体力を消耗してるところにすかさず”スピードスター”を放つ。」

「ピクシー、”サイコキネシス”で受け止めるんや!!」

「ピクシィィ!!」

しかし・ピクシーは消耗していても、すかさずアカネの指示に伝えて、”サイコキネシス”で”スピードスター”を受け止める。

「シユンくん!そんな単純な攻撃じゃあ、ウチのピクシーは倒せへんで!!」

「ピクシー!!」

「ツツ・やつぱりただ”スピードスター”を撃つただけじゃ全て止められる・直接ピクシーに”スピードスター”を撃つても同じ事の繰り返しだ・・・どうすれば・・・」

アカネの発言を聞いたシユンは確かにその通りだと苦い表情で納得した後には「また”スピードスター”で攻撃しても同じ事の繰り返しだと焦り・・・どうすればと悩むシユン。」

「直接・・・そうか!!レディアン!!”こうそくいどう”でピクシーに接近するんだ!!」

「レディ!!レディィィ」

そしてある策が頭に浮かんで、シユンはすかさずレディアンに指示し、レディアンは”こうそくいどう”をしながらピクシーへと接近する。

「なんや分かんけど思い通りにはさせへんで!!ピクシー、”サイコキネシス”でレディアンを止めるんや!!」

「ピクシー!!」

ピクシーは”サイコキネシス”を放ち、接近するレディアンを捕らえようとするが”こうそくいどう”によりさらに素早さの上がったレディアンを止める事が出来ずにピクシーの真上から少し離れたところまで接近を許してしまう。

「いいよ!レディアン。そのまま距離を保って”こうそくいどう”をしながらピクシーの周りを回るんだ!」

「レディ〜〜!!」

そしてそのままピクシーとの近距離を保ちつつピクシーの周りを”こうそくいどう”で飛ぶように指示し、レディアンは凄く素早さで飛び回る。

「なんてスピードや・速すぎて”サイコキネシス”じゃ捕らえられへん:だったら撃ち落としたる!ピクシー!”10まんボルト”や!!」

「ピクシー!!」

レディアンの”こうそくいどう”の超スピードにピクシーの”サイコキネシス”では捕らえる事が出来ずに接近を許し、レディアンのスピードに”サイコキネシス”は通じないからと”10まんボルト”で撃ち落とそうとするが素早すぎて攻撃が当たらな

い。

「まだまだやピクシー!!連続で”10まんボルト”や!!」

「ピクシー!!」

しかしアカネはそんな事では怯まずにピクシーに連続の”10まんボルト”を指示してレディアンへと放つが：やはり”こうそくいどう”で素早さを最大限に上げたレディアンには掠りもしなかった。

次々とピクシーの連続の攻撃を交わしていき、そしてピクシーが体力を消耗させながらも再び”10まんボルト”を放とうとしたその瞬間に……。

「今だレディアン!!そのまま回りながらピクシーに”スピードスター”!!」

「レディ!レディ!」

ピクシーの周りを旋回しながらレディアンは”スピードスター”を放つと、レディアンがピクシーの周りを飛びながら放つたため：ピクシーの四方八方から”スピードスター”が迫る。

「ツ!!あかん!ピクシー”サイコキネシス”で受け止めるんや!!」

「ピイ!!ピイ!ピイ!」

「ピクシー!!」

四方八方から迫る”スピードスター”に焦ったアカネは慌ててピクシーに”サイコ

キネシス”で受け止めるように指示し、ピクシーは慌てて”サイコキネシス”を使うも防ぎきれずに四方八方から”スピードスター”がピクシーに直撃する。

「今だよレディアン!!れんぞくパンチ”だ」

「レディアン!!」

「ペイ!ペイ!ペイ!」

そこにすかさずシユンはレディアンに指示し、レディアンは素早くピクシーに接近して”れんぞくパンチ”で攻撃していく：1回、2回、3回と”れんぞくパンチ”が決まる。

そして4回目のパンチが決まろうとしたその時……。

「ピクシー!!メガトンパンチ”で反撃や!!」

「ピクシ〜〜!!」

レディアンの”れんぞくパンチ”が決まる瞬間にピクシーは”メガトンパンチ”がぶつかり合う。

「レディ〜〜」

「ピクシ〜〜」

そしてお互いに拳に力を込めて相手を吹っ飛ばそうと押し合っていると……。

「ピクシ〜〜!!」

「レディ〜」

しかしパワーも技の威力もピクシーの方が上だったためピクシーがレディアンを吹っ飛ばした。

「レディアン!!」

「あはは!!スピードはシュンくんのレディアンが上やけど、パワーはピクシーの方が上のような!!」

「確かにそうみたいです。大丈夫レディアン?」

「レディ!!」

ピクシーがレディアンを吹っ飛ばしたのを見てアカネは自分のピクシーはスピードは劣るがパワーは自分のピクシーの方が上だと笑みを浮かべ、シュンは確かにそうだと認めた後にレディアンに大丈夫かと聞くとレディアンは大丈夫だと言うように頷く。

「(とはいえ:あのレディアンはスピードにピクシーの技は全て交わされてしまう:こ  
うなつたら:~) 一か八かや!!ピクシー” ゆびをふる!!”」

「ピクシー!!ピク、ピク、ピク、ピク!」

レディアンのスピードの前にピクシーの技は全て交わされてしまう:その為アカネはピクシーに一か八かでピクシーの最後の技” ゆびをふる”を指示し、ピクシーは文字通り指を振る。

”ゆびをふる” だって!!どんな技が出るか分からないランダムな技!!レディアン!用心するんだ・どんな強力な技が出るか分からない!!」

「レディー!」

”ゆびをふる” という色々な技がランダムで発動する何が出るか分からない技の発動にシユンは警戒し、レディアンもどんな技が来ても良いように構える。

「ピツピツピツ・ピクシー!!」

ピクシーは何回か指を振るとそして最後に振った後にピクシーの立てた指と目が輝き技が発動する。

「レディ〜」

「レディアン!!」

ピクシーの後方から強い風が吹いてレディアンは避けられずに吹っ飛ばされる。

「やった!!かぜおこし」が出たで!!効果ばつぐんや!!」

「ピクシー!!」

よりにもよって・むしタイプの子レディアンに効果ばつぐんのひこうタイプの技、”かぜおこし”が出てしまいアカネとピクシーは喜ぶ。

「まだまだよレディアン!!体勢を立て直すんだ!!急旋回!!」

「レディ!!レディ〜」

シユンの指示を聞いたレディアンは吹っ飛ぶ体に翼をはためかせ踏ん張ると、体勢を立て直すために急旋回する。

「そのままピクシーに向かって”マツハパンチ”だ!!」

「レディ〜!!」

「迎え撃つんやピクシー!!”メガトンパンチ”や!!」

「ピクシー!!」

ピクシーに向かって”マツハパンチ”を繰り出しながら迫るレディアンを迎え撃とうとピクシーは、”メガトンパンチ”をいつでも繰り出せるように待ち構える。

「レディ〜」

「ピクシー〜」

そしてレディアンの”マツハパンチ”とピクシーの”メガトンパンチ”がぶつかり合う寸前まで迫る。

「ピクシー!!」

ピクシーは迫るレディアンを撃ち落とそうと”メガトンパンチ”を繰り出す。

レディアンに”メガトンパンチ”が直撃しようとしたその時!!!

「今だレディアン!!」

「レディ!!」

シュンの合図とともにピクシーの目の前から消える。

「なっ!!消えっ……」

「ピクツ!!」

いきなりレディアンが目の前から消えた事に驚くアカネとピクシー……。

「いけえ〜レディアン!!」

「レディ〜〜!!」

「ドゴオオ〜〜!!!!」

「ピッ!ピクシ〜〜」

「ピクシー!!」

そしてレディアンが地面すれすれを飛んで一気に懐に入り込み、ピクシーの体に”マツハパンチ”を叩き込む:ピクシーも急に現れて懐に入られたため”メガトンパンチ”で反撃も出来ずに”マツハパンチ”の直撃をくらいアカネは悲鳴を上げる。

「:ピク〜……」

「ピクシー:戦闘不能!!レディアンの勝ち!!」

ピクシーに効果ばつぐんの”マツハパンチ”が直撃して、うつ伏せで倒れて目を回して戦闘不能になり審判からレディアンの勝利が宣言される。

「やった!!よくやったよレディアン!!」



「レディレディ!!」

シユンはレディアンが勝った事に喜び、レディアンを誉めるとレディアンも笑顔を浮かべ喜ぶ。

「戻ってやピクシー・お疲れ様・あんたは充分頑張ったで・ゆつくり休みや!」

アカネは戦闘不能になったピクシーをボールに戻し、充分に頑張ったからゆつくり休むように言う。

「信じられないわ・まさかアカネちゃんのピクシーが負けるなんて・」

「ジムトレーナーのわたし達でも勝った事ないのに・」

「シユンくん達・本当にすごい・」

観客席で、アカネとシユンのジム戦を見学していたコガネジムに勤める女性達は：アカネの本当の手持ちの1体であるピクシーが負けた事に驚き、ジムトレーナーの自分達ですらあのピクシーには勝てた事のないピクシーを倒したシユン達を本当に凄いと賞賛している。

「でも・シユンくんの快進撃もここまでよ!!」

「ええ・なんとたつてアカネちゃんの最後の1体はあの子なんだから!」

しかしジムトレーナーの女性や女の子達が驚く中：ジムのスタッフの女性や女の子達が不適な笑みも浮かべてシユンの快進撃もここまでだと微笑み、なぜならアカネの最

後の1体のポケモンは……。

「やっぱり凄いでシユンくん：レディアンって言うポケモンにピツタシの理想的なバトルやったで！あのスピードにはしてやられてしまったわ!!」

「ありがとうございます！アカネさんのピクシーには技のパワーでは絶対に勝てないと思っただのでレディアンの得意なスピードで攻めさせてもらいました。ねっ！レディアン」

「レディレディ〜♪」

アカネにレディアンというポケモンにピツタシの理想的なバトルスタイルだったと誉められると、シユンは御礼を言っただけでレディアンの頭を撫でるとレディアンも気持ち良さそうに擦り寄る。

「フフフ。仲良しやね！やけどこの子には勝てへんで!!いけえ〜ミルタンク!!」

「ミルミル!!」

アカネはシユンとレディアンの仲の良い様子を見て微笑みつつも、アカネの最後に出すポケモンには勝てないと言ってアカネの最後の手持ち”ミルタンクを出して、勢いよくボールからミルタンクが飛び出して来る。

「やっぱりアカネさんの3体目はミルタンクか：一昨日の時のあのミルタンクは凄いパワーだった：気をつけて、レディアン！」

「レディ!!」

シュンの予想通り：アカネの3体目はミルタンクだった：一昨日のR団の襲撃の時に見たミルタンクの凄いパワーを思い出してレディアンに気を付けるように言い、レディアンも真剣な表情で頷く。

「それでは……バトル開始!!」

そして審判によつてバトル開始が宣言された。

「いくでミルタンク!」ころがる”や!!」

「ミルミル・ミル〜!!」

アカネはミルタンクに”ころがる”を指示すると、ミルタンクはどすどすと足を大きく踏み鳴らして走り出すと体を丸めて勢いよく転がって行く。

「レディアン：交わして”スピードスター”!!」

「レディ!レディ〜!!」

レディアンはミルタンクの”ころがる”攻撃を交わすと”スピードスター”を放つ  
：しかし：。

「なっ!!”スピードスター”が弾かれて：」

「レディ!!」

そのミルタンクの高速回転しての”ころがる”に”スピードスター”は弾かれてし

まい通用しない。

交わされたミルタンクは転がったまま方向転換してまたレディアン目掛けて転がってくる。

「レディアン!!交わして!」

「レディ!!」

レディアンはミルタンクの連続の”ころがる”攻撃を交わす：しかしレディアンが交わしても交わしてもミルタンクは器用に転がったまま方向転換してレディアン目掛けて転がってくる。

そしてレディアンが交わす度にミルタンクの”ころがる”の威力とスピードが上がりに段々と避けにくくなってくる。

「ツツ：”ころがる”は繰り返し使う事で回転数上がり：技の威力とスピードも上がっていく……」

「その通りやシユンくん!よう知つとるな。生半可な攻撃じゃミルタンクには通用せえへんで!」

その現状を見たシユンはミルタンクの”ころがる”が繰り返し使う事で技の威力とスピードも上がっていき段々レディアンのスピードでも避けにくくなってきている事にシユンは危機感を抱く。

「レディ〜」

「レディアン!!」

そしてとうとうミルタンクの“ころがる”が交わしきれなかったレディアンに掠り、少ないダメージを与える。

「レディアン!一端”ころそくいどう”で上空に回避するんだ」

「レディ!レディ」

レディアンは体勢を立て直して:「またもや迫りくるミルタンクの”ころがる”を”ころそくいどう”で交わして上空に回避する。」

「レディアン!!スピードスター”で攻撃しながらミルタンクに接近するんだ!」

「レディ!レディ」

そしてレディアンは転がってくるミルタンクに”スピードスター”で攻撃しながら向かって行く。

「無駄や!そんな攻撃じゃあミルタンクの”ころがる”は止まらへん!!」

しかしアカネの言う通りで、先程のように”ころがる”の激しい回転に”スピードスター”は弾かれてしまう。

「確かにミルタンクのその激しい回転に生半可な攻撃は効かない:「だけど、その攻撃で少しでも回転の速度を落とせば充分!!レディアン!!最大パワーで”マツハパンチ!!」

「レディ〜〜！！」

シユンはミルタンクにダメージを与えるためにレディアンに“スピードスター”を指示したわけではなく、ミルタンクの“ころがる”の激しい回転速度を少しでも落とす事が目的でありそこに渾身の“マツハパンチ”をミルタンクに叩き込む。

「ミルウ……！」

「ミルタンク！！」

レディアンの“スピードスター”で少しでもミルタンクの“ころがる”の回転が落ちていたのか：レディアンの渾身の力を込めた“マツハパンチ”の威力にドゴオと音と共にミルタンクの体にめり込み、ミルタンクの“ころがる”の回転を止めてミルタンクは苦痛の声を上げる。

レディアンの通常のパワーの“マツハパンチ”ではミルタンクの回転速度の上があった“ころがる”を止める事が出来ないが：接近しながらの“スピードスター”で多少ミルタンクの回転速度が減速して、そこにレディアンの“ころそくいどう”で上がったスピード+重力+“マツハパンチ”の威力でミルタンクの威力の上があった“ころがる”を上回り、ミルタンクの“ころがる”を止めたのである……しかし……。

「レディツ……！」

「レディアン……！」

「マツハパンチ」で攻撃したレディアンもミルトンクの高速回転した体に拳で攻撃したため、レディアンの拳にも少なくないダメージを負ってしまっていた。

「頑張るんだレディアン!! 一気に止めをさすよ」マツハパンチ!!」

「レディウウ!!」

「させへんで! ミルトンク! 怯んじやあかん。」ころがる」で弾き飛ばすんや!!」

「ミルミル! ミルウウ!!」

レディアンは痛む右拳を堪えて、左拳で一気に止めをさそうと「マツハパンチ」を叩き込もうとした時、ミルトンクは効果ばつぐんの「マツハパンチ」を受けたにも関わらずまた凄いパワーの”ころがる”で回転し始める。

「レディ!」

「ミルウウ!」

「レディウウ」

「レディアン!」

ミルトンクの再びの”ころがる”がレディアンの左拳を弾き、そしてさらにミルトンクが回転速度を上げた”ころがる”でレディアンを吹っ飛ばした。

「今や、ミルトンク!!」

「ミルウウ!!」

アカネはすかさずミルタンクに指示し、ミルタンクは“ころがる”の状態で飛び上がると吹っ飛んでいるレディアンに向かって行き、レディアンに直撃する。

「レディ〜」

「レディアン！」

レディアンに効果ばつぐんの“ころがる”攻撃が直撃し吹っ飛び地面を転がる：そして…。

「…レディ…」

「レディアン戦闘不能!!ミルタンクの勝ち!!」

「大丈夫かいレディアン?」

「レディ〜」

レディアンは戦闘不能になり、審判によりレディアンの負けが宣言される：シユンはバトルフィールドに入ってレディアンを抱えて大丈夫かと聞くとレディアンは弱々しく鳴いていた。

「よく頑張ったね：ゆっくり休んでね」

そしてシユンはレディアンをボールに戻した。

「さすがはアカネさんのミルタンク：…とんでもないパワーだ：」

「さあシユンくん!!泣いても笑っても最後の勝負や!!」



「ミルミルウ!!」

シユンはアカネのミルタンクの物凄いパワーに驚いており、アカネはシユンの最後のポケモンを出すのを好戦的な表情で待っており、ミルタンクもドスドスと激しく足踏みしていた。

「……(アカネさんのミルタンクのパワーに対抗出来るポケモンは今のぼくの手持ちには居ない……)」

シユンは最後のポケモンはどうするかを少し考えていた……アカネのミルタンクのあの物凄いパワーに対抗出来るポケモンが今、シユンの手持ちにはいない……。

ヒノアラシのほのおタイプの技もあの回転に弾かれて通じないし、単純な力では絶対に敵わない……ワニノコも同様、チコリータもフシギソウもパワー不足……。

しかし、マリルもレディアンもやられた今、頑張ってくれた2体のためにもこの最後の勝負を任せられるのは……。

「……きみで最後だ……頼んだよフシギソウ!」

「ソウソウ!!」

アカネのミルタンクのパワーに対抗出来るポケモンがシユンの手持ちにいない今……頼りに出来るのは現在のシユンの手持ちの中で最もシユンと付き合いが長く、お互いに信頼の深いフシギソウしか居ないのである。(別にチコリータ達が信頼出来ないという

わけではなく：お互いに信頼もしているが：チコリータ達よりもフシギソウと早く出会い、長く過ごし、その分信頼も深いというだけである)

「シユンくんの最後の1体はフシギソウか：」

「ええ：ぼくの今の手持ちの中で一番付き合いの長いポケモンです」

アカネがそう言うのとシユンは自分の今の手持ちの中で最も付き合いの長いポケモンだと説明する。

「それでは：バトル開始!!」

「：気を付けるんだフシギソウ：アカネさんのミルタンクは凄いいパワーだから：」

「ソウソウ!!」

「こないならこつちからいくで！ミルタンク”ころがる”や!!」

「ミルミル！ミルウ〜!!」

審判によつて最後のバトルの試合開始が宣言される：シユンはフシギソウにアカネのミルタンクは物凄いいパワーだから気を付けるように言いフシギソウも頷く。

アカネは来ないならこちらからとミルタンクに”ころがる”を指示し、ミルタンクは転がるとフシギソウに向かって行く。

「フシギソウ!”はっばカッター”だ!!」

「ソウソウ！ソウ〜〜！」

フシギソウは「はっばカッター」をミルタンクに放つが：ミルタンクの「ころがる」の前に弾かれてしまう。

「ミルミルウ〜!!」

「ツツ!フシギソウ交わすんだ!!」

「ソウ!!」

フシギソウの攻撃もお構い無く突き進むミルタンクの「ころがる」攻撃を見て、フシギソウに交わすように指示しフシギソウは横に飛び上がってミルタンクの「ころがる」を交わす。

「ミルミルウ!!」

ミルタンクは方向転換して再びフシギソウに迫る。

「フシギソウ、”はっばカッター”をしながら”とっしん!!”」

「ソウ!ソウソウソウ!!」

フシギソウは指示通り「はっばカッター」をしながら”とっしん”でミルタンクに向かって行く。

「ミルウ〜」

「ソウ〜」

「ミルタンク!」

「フシギソウ！」

「ミルタンクの”ころがる”とフシギソウの”とっしん”がぶつかり合い：パワーは互角だったのかお互いに吹っ飛ぶ。本来ならミルタンクのパワーの方が上なのでフシギソウが打ち負けてしまうのだが、接近しながらの”はっぱカッター”がミルタンクの高速回転に阻まれてしまったものの多少”ころがる”の威力を落とせたため相討ちとなったのである。

「ミルタンクとフシギソウはお互いに弾かれて地面を転がる：そしてその隙を見逃すシユンではない。」

「今だよフシギソウ!!”つるのムチ”でミルタンクの体を縛るんだ!!」

「ソウソウ!!ソウ〜」

「ミルタンクの”ころがる”の厄介な高速回転が止まった隙を見逃さず、すかさずフシギソウに”つるのムチ”を指示し、フシギソウもシユンに伝えて体勢を立て直して”つるのムチ”を伸ばしてミルタンクの体を縛り付ける。」

「しもうた!!」

「ミル!?!」

「これでミルタンクの”ころがる”は封じたも同然ですな」

「ソウソウ」

「ミルタンクが”つるのムチ”で縛られてしまいアカネはしまった!と驚き、シユンはこれで取りあえずミルタンクが再度転がるのを封じることが出来て笑みを浮かべるシユン。

「これくらいなんやねん!気張るんやミルタンク!!”ころがる”や!!」

「ミルウゝ!!」

「フシギソウ!!蔓を力いっばい引っ張るんだ!!絶対に”ころがる”をさせちや駄目だ!!」

「ソウ!!ソウゝゝ!!」

「ミルウゝゝ」

「ああ!!」

アカネはこれくらい何だと言つてミルタンクに”つるのムチ”が巻きついていても構わず:再び”ころがる”を指示し、ミルタンクは飛び上がり転がろうとするのをシユンの指示通りにフシギソウがつるを思いきり引っ張る事でミルタンクはバランスを崩し体の前面から地面に打ち付ける。

「無駄ですよアカネさん!絶対に”ころがる”はさせません」

「ソウ!!」

「クツ!!」

シユンのその発言にアカネは苦い表情を浮かべる。

「これでアカネちゃんは迂闊に”ころがる”を指示出来ないわね」

「ええそうね・ミルタンクが転がろうとしたら巻き付いた蔓を引つ張られて体勢を崩されてしまうわ」

観客席でジム戦を観戦しているジムトレーナーの女性達がシユンとアカネの現在のバトルの状況を話しており、シユンとアカネの一進一退の攻防に緊迫した様子で見つめていた。

「アカネちゃんのミルタンクの”ころがる”は超強力なのにそれを封じられたのは辛いわね」

「大丈夫よ。アカネちゃんのミルタンクはそれ以外の技も強いんだから!!」

ミルタンクの”ころがる”が封じられた事に技の一つが封じられた事に対して辛いわねと話しており、アカネのミルタンクはそれ以外の技も強いから大丈夫だと言っている。

「そんなら・ミルタンク!!蔓を掴んで思いつきり引つ張るんや!!」

「ミルミルウ〜!!」

「ソウソウ〜!!」

「フシギソウ!!」

ミルタンクが体に巻き付いた蔓を思いつきり引つ張り自分の方に手繰り寄せる：引つ張られたフシギソウは体勢を崩し前につんのめる。

「耐えるんだフシギソウ!!力を入れて!!」

「ソウソウ!ソウ〜」

「ミルウ〜」

「ソウ〜」

起き上がったフシギソウは力を入れてミルタンクに引つ張られないように力を入れて綱引きのようにお互いに力を入れて自分の方に引き寄せようとする。

「無駄やでシュンくん!!パワーはミルタンクの方が上や!!ミルタンク!一気に引き寄せらんや!!」

「ミルミルウ!!ミルウ〜」

「ソウ〜」

「フシギソウ!!」

しかし・純粋な力はミルタンクの方が上であり、ミルタンクが一気に力を入れて引つ張るとフシギソウは勢いよく引つ張られてミルタンクの方に飛んで行く。

「良いでミルタンク!!ほんでそのままフシギソウに”ばくれつパンチ”や!!」

「ミルミルウ〜!!」

「くっ!!フシギソウ…」どくどく!!」

「ソウ!ソウ」

「ミルウ」

「ソウ」!!」

ミルタンクは片手で蔓を引っ張って引き寄せたフシギソウに向かって”ばくれつパンチ”を繰り出し、シユンはただ受ける訳には行かないとフシギソウに”どくどく”を指示し、フシギソウは背中の蕾から猛毒を放つ。

フシギソウに”ばくれつパンチ”が決まり、その衝撃でミルタンクに巻き付いた”つるのムチ”が外れて吹っ飛ぶが、ミルタンクの顔にも”どくどく”が決まる。

「ソウ!!ソウ!ソウ!」

「大丈夫フシギソウ?」

「ソウ」…ソウ!!」

”ばくれつパンチ”が決まり地面を転がるフシギソウにシユンは大丈夫と聞くと：フシギソウはダメージでふらつきながらも立ち上がり大丈夫だと言うように頷く。

”ばくれつパンチ”は命中率が低くクリーンヒットすれば相手を必ず混乱の状態になるが、フシギソウの”どくどく”が邪魔をして直撃せずにするため、混乱せずにするんだのである。



「ミルタンク!!大丈夫か?」

「ミル!!ツ:ミルウ〜!!」

「ミルタンク!!」

アカネはミルタンクに大丈夫かと訪ねミルタンクは頷いた直後にミルタンクに紫電が走り、もう毒でじわじわとダメージを受けてしまう。

「これでミルタンクは猛毒状態:一気に決めるよ!!フシギソウ”はっばカッター!!”」

「ソウ〜!!」

「ミルタンク!交わすんや!!」

「ミルミル!!」

ミルタンクを猛毒状態にした事で一気に決めようと追撃の”はっばカッター”を放つが、ミルタンクに交わされてしまう。

「ミルミルウ〜!!」

「ミルタンク:”いやしのすず”で回復するんや!!」

「ミルウ〜!!」

「なっ!!」

攻撃を交わした後にまたもミルタンクを猛毒のダメージが襲い:アカネはミルタンクに”いやしのすず”を指示し、ミルタンクは心地よい鈴の音がなると癒しのオーラに

包まれ状態異常を回復する。

「まさか・； いやしのすず」が使えるなんて・；」

「うちが状態異常の対策をしてないと思ったか？ ミルタンクのパワーに状態異常で攻めるチャレンジャーも居たわ!! 対策はバッチシやで!! ミルタンク」ころがる” や!!」

「ミルミルウゝ!!」

シユンは状態異常を回復させる” いやしのすず”をミルタンクが使えた事に啞然としており、アカネはミルタンクに状態異常への対策として覚えさせており、対策はバッチシだと言つてミルタンクに”ころがる”を指示し、ミルタンクは”ころがる”で向かって来る。

「くっ・フシギソウ!! とっしん!!」

「ソウ! ソウソウソウ!!」

シユンは毒状態をあつさり回復されて力で勝るミルタンクへの突破口を破られてしまい少々冷静さを失つてしまい愚直の真つ向勝負を仕掛けてしまう。

「ミルウゝ!!」

「ソウゝゝ」

「フシギソウ!!」

先程と違い”はっぱカッター”で”ころがる”の威力を落とした訳でもなく、ミルタ

ンクの”ころがる”を受けて吹っ飛んで地面を転がるフシギソウ……。

「…フシギソウ…」

「ソウ…ソウ…ソウ…」

フシギソウはダメージを受けた体に力を入れて必死に立ち上がり、シユンはそんなフシギソウをせつない表情で見つめる。

「もう限界なんやないか…」

そんなフシギソウの様子を見てアカネはシユンにそう言う。

「シユンくんのフシギソウは充分よくやったで！自分のポケモンの限界を見極めるのも優れたトレーナーの証や!!」

「……………」

「自分のポケモンのために負けを認めるのはなんの恥でもないでシユンくん！むしろ：自分のポケモンのダメージも見切れずに無茶させて大怪我させる事こそトレーナーの恥や!!」

アカネはシユンにそう言うて問いかける自分のポケモンに対するトレーナーとしての責任：トレーナーの証：その言葉を聞いたシユンは呆然として息の荒いフシギソウを見つめる。

「…ぼくは…」

シユンは大きなダメージを受けて体力の限界に近いフシギソウを心配し負けを認めようとしたその時!!

「ソウ!!!」

「!!フシギソウ!」

「ソウ・ソウ・ソウ!!」

そんなシユンにフシギソウは大声で一喝しその声を聞いてシユンはフシギソウを見つめると、フシギソウは体力を消耗して息を荒げているがシユンを見つめる瞳には強い思いが込もっていた……まるで自分を言い訳に諦めてしまいそうになっているシユンを咎めるように……。

「……そうだね・フシギソウ・ここで諦める訳にはいかないよね」

「ソウ!!」

「・ぼくはきみを信じてる!!フシギソウ・ぼく達の力でアカネさんに勝とう!!」

「ソウ~~~~!!!」

フシギソウの自分を見つめる強い目にシユンは諦めようとしていた自分を恥じる：そしてフシギソウもその通りだと言うように頷く。

シユンはフシギソウを信じ、フシギソウもシユンを信じている……2人の力でアカネとミルタンクに勝とうと強く決意しフシギソウは高らかに叫ぶ。

すると……フシギソウの様子が……。

「これって……まさか!!」

「……えっ!!」

「ミル!？」

フシギソウの体が光り輝き、その姿を大きく変えていく……体は倍以上に大きくなりその蕾が大きく花開く。

「バアナア〜!!」

「……フシギソウが……フシギバナに進化した……」

シユンの想いに応えるようにフシギソウはフシギバナに進化した。

「嘘でしょ!!こんな土壇場で進化するなんて!!」

「いくら何でもタイミングが良すぎよ!!まさかシユンくんはフシギソウの進化を待っていたの?」

観客席ではジムトレーナーの女性がフシギソウがフシギバナに進化した事に驚いており、ピンチの時にタイミング良く進化した事にシユンがフシギソウの進化を待っていたのではないかと疑問に思う。

「いえ……シユンくんはここでフシギソウが進化するなんて分かってなかったはずよ……」

「そうね……シユンくんの信頼にフシギソウが進化して応えたのよ!!」

「ええ・今まで戦ってくれたみんなのためにも負ける訳にはいかない・そんな強い決意が進化に繋がったのね。シユンくん達・本当に凄いわ!!」

「ええ!!」

「うん!!」

疑問に思う女性に別の女性が否定して、隣の女性も同意しシユンの信頼にフシギソウが進化する事で応えたのだと・今まで戦ってくれた・マリルとレディアンのためにも負けられないとその強い決意が進化に繋がったのだと・シユン達を本当に凄いと賞賛し回りのジムトレーナーやジムに勤める女性や少女達も同意し頷く。

くくバトル挿入歌 『OK!』くく

「良いで・やつぱりシユンくん達は凄いで!!面白くなってきたで、ミルタンク!」ころがる」や!!」

「ミルミルウ!ミルウ!!」

シユンとポケモン達の信頼と絆による奇跡にアカネは気持ちを高揚させてミルタンクに「ころがる」を指示しミルタンクが転がって来る。

「バアナア!!」

「うん・そうだね・迎え撃つよフシギソウ・うん・フシギバナ!」とっしん!!」

「バアナア!!」

「ミルタンクが”ころがる”で攻撃してくるのを見て、シユンは”はっばカッター”を指示しようとしたが：フシギバナはシユンを意味深な目で見つめ：フシギバナのそんな感情を読み取り真つ向から迎え撃とうとフシギバナに”とっしん”を指示し、フシギバナは重くなった体でどすどすとミルタンクに突進する。

「ミルウゝ!!」

「バアナア!!」

「ミルタンクの”ころがる”とフシギバナの”とっしん”がぶつかり合う。

「ミルウゝゝ!!」

「ミルタンク!!」

ぶつかり合いに勝利したのはフシギバナ：進化した事で体も大きくなり体重も重くなりパワーも上がってそれら全てがミルタンクを上回り、ミルタンクのパワーを越えて吹っ飛ばせたのである。

「凄い：進化した事でパワーも上がってる：凄いよフシギバナ!!」

「バアナ!!」

シユンは進化した事で大きく上がったフシギバナのパワーに喜び、フシギバナも笑顔で頷く。

「ミルウゝ：：：」

「大丈夫かミルタンク？」

「ミルウ〜!!」

「よし!ほんならミルタンク!ばくれつパンチ” や!!」

「ミルウ〜!!」

吹っ飛ばされたミルタンクはゆっくり起き上がり、アカネはミルタンクに大丈夫かと聞くとミルタンクは頷く:アカネはミルタンクが大丈夫だと判断し”ころがる”が負けたため今度は”ばくれつパンチ”を指示し、ミルタンクは強烈な”ばくれつパンチ”でフシギバナに迫る。

「フシギバナ!!つるのムチ”で受け止めるんだ!!」

「バアナア!!」

「なっ!!」

「ミルウ!!」

フシギバナは進化して太くなった”つるのムチ”でミルタンクの強烈な”ばくれつパンチ”を受け止める。

”ばくれつパンチ”が受け止められた事にアカネとミルタンクは目を大きくして驚く。

「そのまま投げ飛ばすんだ!!」



「バアナアア〜!!」

「ミル!ミルウ〜!!」

シュンの指示通りにフシギバナは蔓を思いつきり引つ張つてミルタンクを投げ飛ばす。

ミルタンクは投げ飛ばされて地面を数回転がる。

「バアナアア〜!!」

「ん・あれは・」

フシギバナは投げ飛ばしたミルタンクを闘志を剥き出しにして睨むフシギバナの大きく咲いた花へと小さな光が集まっている事に気づく。

「:そうか:フシギバナ!新しい技を覚えたんだね!!」

「バアナアア!!」

シュンはその現象を見て、フシギバナが自分の考えている技を新しく覚えた事に喜び、フシギバナも笑みを浮かべて頷く。

「よし!フシギバナ!!光の力を集中させるんだ!!」

「バアナ!バアナアア〜!!」

シュンのその指示にフシギバナは待つていたとばかりに背中 of 大きな花に光の力を集中させて光のエネルギーがどんどんと花へと集まっていく。

「アカン!!そうはさせへんで!ミルタンク、”ころがる”や!!」  
「ミルミルウ〜!!」

アカネはシユンの指示とフシギバナの動作を見て、フシギバナの次の技に気づいてそれを阻止しようとミルタンクに”ころがる”を指示してフシギバナに向かう。

「バアナア〜」

ミルタンクの”ころがる”が直撃してフシギバナはその威力に後ずさる。

「大丈夫かい・フシギバナ・」

「バアナア!!」

「頑張つてフシギバナ!もう少しだ・」

技の準備中のために他の技で防げずにダメージを受けたフシギバナを心配するシユンにフシギバナは頷き、シユンは後もう少しだから頑張つてとフシギバナを応援する。

「まだまだや!!ミルタンク!連続で”ころがる”や!!」

「ミルウ〜!!」

「バアナア〜」

フシギバナがまだまだ平気な様子でいるのに気づいたアカネはミルタンクに連続で”ころがる”を指示して、ミルタンクはフシギバナの体に連続で”ころがる”で攻撃する。

先程と違い直撃させるのではなくギリギリ体にぶつけさせるように攻撃しジワジワとダメージを与えている：“ころがる”は使うたびに威力が増すためフシギバナに大きなダメージを与える。

「フシギバナ!!」

「バアナア……」

動けないフシギバナを襲う連続攻撃にシユンは不安な表情で叫ぶ：フシギバナもこれまでのダメージと今受けている連続攻撃のダメージで体がフラフラとなり今にも倒れてしまいそうになる。

しかし、フシギバナは体をふらつかせながらも決して倒れはしなかった：今まで戦ってくれた仲間のためにも倒れるわけにはいかない：フシギバナはボールの中から見ている：傷つきながらも戦い、ここまでバトンを繋げてくれたマリルとレディアン  
の闘志を：みんなで力を合わせて勝利を勝ち取りたい：そんな強い思いが沸き上がりフシギバナの今にも倒れそうな体に力がみなぎってくるのを感じていた。

「：頑張れ：フシギバナ：後少し：」

「バアナア……」

フシギバナはミルトンクの攻撃を受け続けながらも背中の花へと光のエネルギーを集中させていく。

「これで止めや!!ミルタンク!最大パワーで”のしかかり”や!!」  
「ミル!ミルウ!」

アカネはこれで終わりにしようと最大パワーでの”のしかかり”を指示し、ミルタンクは勢いよく走ると大きくジャンプしてフシギバナへと目掛けて落ちて来る。

段々とミルタンクとフシギバナの距離が近づき後少しで”のしかかり”が決まろうとしたその時!!

「バアナア!!」

フシギバナの背中の花に光のエネルギーが溜まり、いつでも発射出来ると：フシギバナはシュンのある指示を待っており：シュンに大声で叫ぶ。

「よし!!いけフシギバナ!!全ての力を込めて”ソーラービーム”!!」

「バアナア!」

シュンの指示にフシギバナは背中の花に溜めていた太陽の光のエネルギー：”ソーラービーム”を全力の力で解き放った。

「ミル!?!ミルウ!」

「ミルタンク!」

ミルタンクは目映いほどの太陽のエネルギーの光線が襲い、ミルタンクは光線へと包まれて吹っ飛ばす：”ソーラービーム”が直撃してしまいアカネは悲鳴を上げる。

そしてフシギバナは背中の花に溜めた太陽のエネルギー光線、”ソーラービーム”を全て打ち出すとミルタンクは地面へとドオン!!と背中から落ちて来る。

…そして…

「…ミルウく…」

「ミルタンク! 戦闘不能!! フシギバナの勝ち! よってコガネジム戦、勝者はマサラタウンのシュン!!」

ミルタンクは目を回して倒れ：審判によつてミルタンクの戦闘不能の判断と共に、シュンのコガネジム戦の勝利が宣言される。

「やった：やったよフシギバナ!! ぼく達が勝ったんだ!!」

「バアナバアナ!!」

シュンはアカネとのジム戦に勝てた事を喜びフィールドに入り、進化して大きくなつたフシギバナに抱きつきフシギバナも笑顔で頷いて喜ぶ。

「…お疲れ様ミルタンク：よう頑張つたで…」

アカネは戦闘不能になつたミルタンクをボールに戻してお疲れ様と言って良く頑張つたと誉める。

「本当にアカネちゃんに勝つちやうなんて…」

「シュンくん：本当にすごいわ…」

観客席でジムトレーナーの女性達も：アカネが負けた事に驚き、アカネに勝利したシユンを称賛していた。

「：ふう：負けたでシユンくん：うちの完敗や、まさかあそこでフシギソウが進化するなんて思わなかったわ：」

「みんなが頑張ってくれたおかげでアカネさんに勝つことが出来ましたし、フシギバナがぼくの期待に応えてくれたからです：ねっ！フシギバナ!!」

「バアアア！」

一息ついた後にアカネは自分の完敗だと言って、まさかあの土壇場でフシギソウがフシギバナに進化したのは予想外だったと話す。

それにシユンはマリル、レディアン、フシギバナのみんなが頑張ってくれたおかげでアカネに勝利出来たと、フシギバナが自分の期待に応えてくれたからだと言ってフシギバナに呼び掛けフシギバナも笑顔で頷く。

「フフフ♪シユンくんとポケモンの絆の強さ：ジム戦中もビシビシ感じたで!!そんなシユンくんはうちを倒した証！このレギュラーバッジを受けとるのに相応しいトレーナーや！さっ、取つとき！」

「ありがとうございませアカネさん!!」

シユンとポケモンとの絆の強さをジム戦中もアカネはビシビシと感じており、そんな

シユンには自分を倒した証であり、コガネジムを勝ち抜いた証『レギュラーバッジ』を受け取るのに相応しいトレーナーだと言って受けとるように言い、シユンはお礼を言いながらレギュラーバッジを受け取る。

シユンの受け取ったレギュラーバッジは菱形の形に外側は銀色に覆われ中は黄色の装飾をしていた。そしてシユンはフシギバナをゆっくり休むように言ってボールへと戻した。

「おめでどうシユンくん!!」

「2人とも良いバトルだったわよ!!」

「ありがとうございます皆さん!」

シユンがアカネからバッジを受け取っていると、観客席からフィールドに下りてきたジムトレーナーの女性や女の子、ジムスタッフの女性や女の子達がアカネに勝利したシユンに拍手を送り、みんなも2人とも良いバトルだったと褒め称えシユンはみんなにお礼を言う。

「…えつと…ではアカネさん・皆さん・ぼくは…そろそろ行きます…」

「ツツ!!…」

そしてみんなが拍手している中でシユンはアカネやみんなにそろそろ行くことを告げると、アカネは悲しげな表情を一瞬浮かべ、みんなも拍手している手を止める。

「そっか：これでシユンくんとはお別れなんだね：」

「あくあつ！残念！シユンくん今でも充分イケメンなのに成長したらもつと良い男になるのにもうお別れなんて：」

「あなた本当にそればかりね：でもシユンくんとお別れするのは本当に残念だわ：」

「皆さん……」

シユンがもう行ってしまいこれでお別れしてしまう事にジムの女性達は残念な様子であり、ジムトレーナーの女性の呟いた一言に他の女性が相変わずだと呆れた後にはりシユンとお別れするのは残念だと言い、自分との別れを惜しんでくれるみんなにシユンも複雑な感情になる。

「みんな！そんなに言ったらアカンで！！シユンくんが行きにくくなるやろ！！ここは元気良く送り出してあげるんや！」

そんなみんなにアカネは何か堪えた様子で、そんなに言ったらシユンが行きにくくなるから元気良く送り出してあげようと言う。

「そうね！アカネちゃんの言う通りよ。みんなでシユンくんを元気に送り出しましょう！！」

ジムトレーナーの女性の1人がアカネの言うことに同意してシユンを元気に送り出そうと言うと、みんなも頷いてシユンを送り出すためにジムの入口へと向かう。



「ほなシユンくん!この後はどうするんや?」

「はい:一度ポケモンセンターによってポケモンを回復させてから次のジムのある街に向かいます」

「そうか!この街からジムのある街で一番近いのはエンジュシテイやで!」

「ありがとうございます!アカネさん!ポケモンを回復しだいエンジュシテイに向かおうと思います!」

アカネにこの後の行動を聞かれたシユンは一旦、ポケモンセンターでポケモンを回復させてから次のジムのある街に向かう事を伝えると、アカネは親切にこの街から一番近いジムのある街はエンジュシテイだと教えてくれた:シユンは親切に教えてくれたアカネにお礼を言う。

「それじゃあ:アカネさん:皆さん:お元気で:」

シユンはアカネとジムみんなに別れの挨拶をすると:ポケモンセンターへと向けて走り出す。

「さよならシユンくん!!」

「元気でね!!」

「また遊びに来てねえ!!」

ジムに勤める女性や女の子達もシユンに別れの挨拶をしてバイバイと手を振ってい

る：そんな中でアカネは……。

「……ツツ……」

シユンとの別れが辛いのか顔を俯かせて何かを堪えるように体をブルブルと震わせている：そんなアカネの隣にジムトレーナーの中でも一番歳上でアカネの姉がわりとも言える女性が来てアカネに。

「良いのアカネちゃん？シユンくん行っちゃうわよ？」

「……」

俯くアカネにそう言うがアカネは俯いたままである。

「伝えたい事は言わなきゃ後できっと後悔しちゃうわよ！」

「ツツ!!シユンくん!!」

そう言われたアカネは顔を上げて、急いでシユンの後を追いかける。

「それで良いのよアカネちゃん♪」

ジムトレーナーのお姉さんもみんなもそんなアカネを笑顔で見つめていた。

「シユンくん!!」

「アカネさん？」

後ろから走って来たアカネにシユンは不思議そうな表情でアカネを見つめる。

「どうしたんですかアカネさん？」

「シユンくん!最初に出会った時から今日まで色々♪ありがとう♪ほんとにシユンくんには色々♪と学ばせてもらったわ!」

「いえ!自分こそアカネさんや皆さんに色々お世話になりました!今日まで本当に楽しかったです!!」

「ツツ!!ウチも・楽しかったで・シユンくん・」

アカネはシユンに最初に出会った日から今日まで色々♪と学ばせてもらいお礼を言い、シユンも自分こそ世話になったと今日まで本当に楽しかったと笑顔で言うシユンにアカネは拭き上がるある感情と共に目の奥から流れようとするものを必死に押さえて自分も楽しかったと言う。

「……それじゃあアカネさん・お元気で・」

そしてシユンはアカネに別れを告げて歩き出す:アカネはシユンとの別れが辛く体をふるふると震わせて涙を必死に堪えていた:もし涙を流してしまえばシユンに余計な気をかけて迷惑をかけてしまうと思っただからだ::シユンもアカネのそんな気を感じて複雑な様子で歩いて行く。

そうして立ち去ろうとするシユンにアカネは走り寄る:そして::

「シユンくん!!」

「えっ!!」

…：チュツ／／／！！…

そしてアカネはシユンの近くに来るとシユンのほっぺにチュツ！とキスをする。

「えっ／／／！！アカネさん／／／」

「うちの本当の気持ちや／／／」

シユンは突然、アカネに頬にキスをされて顔を真つ赤にしてアカネの名を呼び、そんなシユンにアカネは頬を赤くして照れながらも自分の本当の気持ちだと伝える。

「：アカネさん…」

「別に今答えんでも良いで！シユンくんにも旅の目的もあるやろうし：旅が終わってまたコガネシテイに来た時：答えを聞かせてくれへんか／／／！！」

アカネのその想いをシユンは分かっていたが：シユンには旅で成し遂げなければならぬ目的があり：今、その想いに応える事は出来ず：申し訳なさそうな表情でいると：アカネはシユンのそんな気持ちを感じており、今答えなくて良いと：旅が終わりまたコガネシテイに来たときに答えを聞かせてくれへんかと顔を真つ赤にしながら自分の想いを伝える。

「：はい：必ず！それではアカネさんお元気で！！また会いましょう！！」

「またなあゝ！！シユンくんゝゝ！！」

今度こそシユンはアカネに別れを告げてポケモンセンターへと向かい、アカネも大き

く手を振ってシュンが見えなくなるまで手を振って見送った。

「……ツツ……ウウ……(涙)……」

シュンが見えなくなった後にアカネは我慢していた涙が堪えきれずにジワ〜と目に涙を浮かべる。

本来、彼女は意外と泣き虫な性格で自分に取ってある想いを抱く男の子のシュンと別れるのを悲しくて涙を流しそうになるのをこれまで堪えられたのが不思議なくらいだったのである。

「アカネちゃん?」

そこにアカネの様子を見に来た一番歳上のジムトレーナーのお姉さんが来てアカネに声をかける。

「ウウ……(涙)」

アカネはすでに涙腺が崩壊してシュンとの別れが悲しくて涙を流していた。

「……そう……シュンくん行っちゃったのね……てことはアカネちゃん最後まで我慢したのね……偉いわアカネちゃん……」

アカネの涙を流しているのを見て、お姉さんはシュンがもう行った事に気づいた:そしてアカネがシュンが行く最後まで涙を堪えた事を……もしシュンが行く前にアカネが泣いてしまったら、あの優しい男の子のシュンが涙を流すアカネをほっといて行って

しまう訳がないと核心していたからである。

「……良く頑張ったわねアカネちゃん。でももう我慢しなくていいのよ。泣きたいなら泣きなさい。私が胸を貸して上げるから。ねっ!」

「ウウ~~~~ウエエエエ~~~~ンンン（涙）!!!」

そしてお姉さんの優しい言葉に我慢していたアカネはお姉さんに抱きついて思いきり泣きわめく。シユンとの別れが悲しくて。辛くて。本当は一緒に居てほしい。でも自分の我が儘でシユンの道を邪魔するわけにはいかないと。必死にその想いを押さえ。て……。我慢した……。しかしもう限界だった……。

アカネは溢れ出す悲しい感情を爆発させるようにお姉さんの胸で思いきり泣くのだった。

そんなアカネをお姉さんと様子を見に来たジムのみんなで励ますのであった。

こうしてシユンは、アカネのダイナミックなパワーを誇るポケモン達に苦戦しながらも、フシギソウがフシギバナに進化を果たし見事、3つ目のバッジ”レギュラーバッジ”をゲットすることが出来たのであった。

そしてシユンは一人の女の子の想いに今、答える事が出来ずに旅が終わったらコガネシテイへと行きアカネとの約束を果たす事を胸に誓うのだった。

そしてシユンはポケモンセンターでポケモン達を回復させてゆっくり休むとコガネシティを旅立ち次のジムのある街エンジュシティへと向かうのであった。

「シユンくん／＼／またいつか会おうな／＼／うち：いつまでも待つとるからな／＼」

そんなシユンの後ろで隠れながら、アカネはシユンをただ静かに見送るのであった。いつか自分への想いの答えを聞かせてくれるシユンとの再会の時をいつまでも楽しみに待ちながら：。

一方：シユンがアカネと別れを済ませてポケモンセンターにへと向かっている途中：ボールの中では：：：：。

「(まったく!!マスターはまた無自覚に女性を虜にして!!これで何度目ですか!!)」

「(まあまあメロエツタ：落ち着いてください。女の方がマスターにあのような感情を抱くのもひとえにマスターが素敵だからですわ!)」

「(：：：まあ：それは否定しませんが：)」

ボールの中ではメロエツタがシユンがまたも無自覚に女性(アカネ)を虜にした事によって何度目だと怒る中で、デイアンシーはメロエツタに落ち着くように言って女の子や女性がシユンにあのような感情を抱くのも単純にシユンが素敵だからだと笑顔で応

えるとそう指摘されたメロエツタも唸りながらもそこは否定しなかった。

「(それにしても今回のジム戦でフシギソウがフシギバナに進化しましたわね)」

「(ええ：まさかこの短い間に続けて進化するとは思いませんでした。でもそのおかげでジム戦では勝てたようですし、良かった)」

「(ええそうですね！みんな良く頑張りましたわね♪)」

そしてアカネとのジム戦でフシギソウがフシギバナに進化した事に：まさかこの短い間にレディアンに続いてフシギソウも進化するとは思っていなくて驚いているが：でもそのおかげでジム戦に勝てたから良かったと微笑む。

ディアンシーもそれに同意して微笑むのであった。

そんな話しをボールの中でメロエツタとディアンシーが話しているのにシユンは気づくことなくポケモンセンターにへと歩いて行くのだった。



## 歌姫と宝石の姫く番外編く ミュウツーの逆襲

シユン達がジョウト地方へと旅立つ日の2カ月ほど前……シユン達はジョウトリーグに向けての修行の日々を送っていた。

今日は久しぶりにシログアネやまを離れてトレーナーとのバトルによる特訓をしようと考えて草原まで来たところでお腹がなったため昼食の準備をしている。

「みんなーもう少し待っててね。もう少しで出来るからね！お皿とかを並べといてくれるかな」

シユンはみんなの昼食の準備をしながら、みんなにもう少しで出来るからね！と言つて、待つように言う。

「はい！楽しみにしていますねマスター！さあ、みんな手伝ってください」

「ええ！わかりましたわ！お皿を並べて待っていますね」

「フライ！」

「レディ！！」

「ウオオ〜!!」

「デイン!!」

「パール!!」

「リリン!!」

フライゴン達もメロエッタ達を手伝いながらご飯が出来るのを待っている。

シユンの現在の手持ちのポケモンはフライゴン、ドレディア、リザードン、パールシエン、フリーデイン、ポリゴン”となっている。

シロガネやまの岩場が特訓による攻撃で偶然崩れた時に出てきた進化の石の成分を含む鉱石を発見する：シユンのシエルダーが触れたところ”パールシエンへと進化したのだった。

そして、タママシのゲームコーナーの景品でもらったポリゴンである。

人からもらったポケモンは懐くまでに時間がかかると言われており：最初はポリゴンもシユンの言う事を全く聞かずにシユンも困っていたのだが、段々と”ポリゴンと一緒にバトルをしていくうちに少しずつ言うことを聞いてくれるようになり今では：ちゃんとシユンの言うことを聞いてくれるようになり、すっかりシユンに懐いている。

シユンは昼食の準備を済ませると、ポケモン達の食事の準備をして昼食を食べ始める

：みんな美味しそうに自分の作ったご飯を食べてくれている様子にシユンは笑顔になる。

そして楽しそうに食事が続けていたシユン達の前に突然……。

「You! そのボーイ! 食事中に失礼するぜ! Youはポケモントレーナーかな?」

食事中のシユン達にギタリストの格好をした人がシユンにポケモントレーナーかどうかと訪ねる。

「ええ・そうですね・何かご用ですか?」

シユンはトレーナーだと言うと、何か用が有るのかと聞く。

「OK! それならポケモンバトル! 受けてもらうぜ!」

ギタリストのトレーナーはモンスターボールを手に持ち、シユンにポケモンバトルを申し込む。

「ええと・今食事中何ですけど・まあ良いか! トレーナーとバトルするため来たんだし・わかりました。そのバトル受けます」

シユンはそう言ってイスから立ち上がり、ギタリストのトレーナーと向き合う。

「マスター! 頑張ってください!」

「マスターを応援していますわ! みんなも頑張ってください!」

机に座っているメロエッタとディアンシーがシユンとみんなのことを応援する。

「うん！それじゃあ行くよ！」

シユンも構えるとシユンとギタリストのポケモンバトルがスタートする。

♪BGM めざせポケモンマスター！♪

「テンション上げて行くぜえ！行けえエレブー！」

「エレブー！」

ギタリストはボールを投げるとでんきタイプのエレブーが出てくる。

「頼んだよ！フリーデイン！」

「デイン！」

シユンがフリーデインに行くように言うとフリーデインはテレポートでシユンの前へと出る。

「行くぜ！エレブー かみなりパンチだ！」

「レブー！」

エレブーは手にかみなりを纏ってフリーデインに攻撃する。

「フリーデイン！交わすんだ！」

「デイン！」

シユンはフリーデインに交わすように指示しフリーデインは連続で打ってくるかみなりパンチを全て交わして行く。

「フリーデイン！サイケこうせんだ！」

「フゥーデイン！」

フリーデインは両手に持つスプーンをクロスさせてそこから「サイケこうせん」をエレブーに放つ。

「レブー！レブゥ……レ……ブ……」

「オゥウー！エレブゥ……!!」

フリーデインの“サイケこうせん”を喰らって、エレブーは戦闘不能になり：トレーナーはその事実に関頭を抱える。

「よくやったね！フリーデイン！」

「デイン！」

シユンはバトルに勝ったフリーデインをよくやったと言って誉めるとフリーデインも喜ぶ。

「シット！まだまだ行くぜ！GO，フォレストス！」

「フオゥ!!」

ギターリストのトレーナーが次に出したのはジョウト地方に生息するポケモン、フォレ

トスを出す。

「はじめてみるポケモンだ……けど、頼んだよ！パルシエン！」

「パッ！」

シユンは初めて見るポケモンに驚きながらも、臆せずにパルシエンを呼ぶ、シユンに呼ばれたパルシエンはシユンの前へと来る。

「オウ・行くぜ！フォレトス、こうそくスピンだ！」

「フォ〜！」

「ギタリストが」フォレトスに指示すると「フォレトスは高速回転して」パルシエンに迫る。

「パルシエン！こっちも」こうそくスピン！」

「パル！」

シユンも「パルシエンに」こうそくスピンを指示すると、パルシエンも高速回転して「フォレトスに向かっていく。

「フォ〜!!」

「パル!!」

フォレトスとパルシエンは何度も「こうそくスピンでぶつかり合いお互いを弾きあう。

シユン達がバトルをしている上空では：一匹のカメラを付けた”オニドリルがシユンと”パルシエンのバトルの様子を映している。

オニドリルの付けたカメラから送られてくるシユン達のバトルの映像を何者かが品定めをするように見ている：：だが、シユン達はそんなこと知るよしもない：シユンとポケモン達の姿をズームで映している。

フォレトスとパルシエンの”こうそくスピン”が何度もぶつかり合うとフォレトスがパルシエンを上空に吹っ飛ばす：しかし”シユンは冷静にパルシエンに指示を出す。

「パルシエン！オーロラビームだ！」

「パ〜ル！」

パルシエンは角からオーロラビームをフォレトスに放つ。

「フォ〜：：：フォ：：：：：」

「ウオオ〜!!何だど〜：俺のフォレトスまでえ!!」

フォレトスはパルシエンのオーロラビームが直撃し、こおり状態となり：氷の中で戦闘不能になる：ギタリストのトレーナーはフォレトスが負けたことが信じられないのか頭を強く抱えながら怒りを露わにする。

「よくやったね！パルシエン！」

「パッ！」

シユンは頑張ったパールシエンの角を優しく撫でる……パールシエンもシユンに誉められて嬉しそうに喜ぶ。

「チキシヨクガア〜！調子に乗るんじゃねえ!!それならこれでどうだあ〜!!」

ギターリストのトレーナーは自分のポケモンが二連敗したことに怒り、自棄になったのか両手に四つのモンスターボールを持つと一斉に投げる。

「スピ!!」

「サドパン!」

「ウリキイ!!」

「マタドガア〜ス!」

四つのボールからスピアー、サンドパン、オコリザル、マタドガス”が出てくる。

「なっ!四体も一度に出すなんてルール違反だよ!!」

シユンは四体のポケモンを出したギターリストのトレーナーにルール違反だと抗議する。

「ハッ!!卑怯もクソもあるか!勝てば良いんだよ!いけえ!」

「スピ!!」

「サンドパ!!」

「ウリツキイ!!」



「マア〜タドガア!!」

ギタリストのトレーナーは勝てば良いんだと開き直ると：ポケモン達に行くように言うと：「トレーナーの指示を受けて」スピアー達は一斉にシユン達に向かって襲いかかる。

「ハア〜：ルールも守れないなんて：仕方ない。行くよ！リザードン！ポリゴン！」

「ウオオ〜!!」

「リリン!!」

シユンはルールを平気で破る相手に呆れながら：リザードンとポリゴンに行くように指示し、二体が前に出る。

「リザードン！かえんほうしや！ポリゴン！トライアタック！」

「ウオウ！ウオウ!!」

「リリリリ〜!!」

シユンはリザードンとポリゴンに指示すると、リザードンとポリゴンはこっちに迫ってくる四体にかえんほうしやとトライアタックを放つ、二体の技は四体に直撃しかえんほうしやの炎が消えると四体は目を回して戦闘不能になっている。

「スピ〜・・・」

「サドゥ……」

「ウリ……」

「ドガア……」

「オオウ〜マイ……ゴ〜ツド!!!こんな馬鹿なあ〜!!」

ギタリストのトレーナーは四体のポケモンが一撃で全員やられたことに頭を抱えて信じられないと叫ぶ。

「よくやったね!リザードン!ポリゴン!!」

「ウオウ!!」

「リリ!!」

シユンはリザードンとポリゴンを頑張ったねと言って誉めるとリザードンとポリゴンは嬉しそうに喜ぶ。

ギタリストのトレーナーは戦闘不能になった四体をモンスターボールに戻すと、覚えてろよおと捨てゼリフを残して物凄い逃げ足で去っていった。

「お疲れ様でしたわ!マスター」

「楽勝でしたね!トレーナーのレベルも低いからか、ポケモンも育てが全くと言っていいほど足りていませんでした」

メロエツタとディアンシーがシユン達にお疲れ様と言う。

「何の経験にも成らないバトルだったよ……トレーナーも最低だし、ポケモンも弱すぎたしね」

シユンは相手が弱すぎたために、何の経験にも成らないバトルだったと言つてため息をつく。

「それじゃあみんな！昼食の続きにしようか？」

「はい！」

「ええ！」

「フライ！！」

「レディ！！」

「ウオウ！！」

「パル！！」

「デイン！！」

「リリン！！」

シユンはみんなと昼食の続きに戻り“メロエッタ達もテーブルへと戻る……それぞれ食事を再開し、そして”シユン達が昼食を食べている上空では……！！

「アア……！！」

首にカメラを取り付けた一匹のオニドリルが食事をするシユン達を映している。

そして、ここから遠く離れた場所にある島、そこには巨大な城が存在し、その城の中の一室でオニドリルの着けているカメラからさっきのバトルから昼食を食べているシユン達を映した映像を何者かが観賞している。すると、その横にいる女性が映像を見ている者に声をかける。

「ご主人様……この方にも招待状を……」

女性がそう言つて映像を見ている者に訪ねると……。

「かしこまりました……」

女性は映像を見ている者の指示を聞いて、かしこまりましたと了解し準備を始める。すると風車のある城の部分の窓が開きそこからカパンを持ったポケモンが飛び立つ。

そしてもの凄い早さで昼食を食べているシユン達のもとへと向かってくる。

そして：シユン達のいる場所に大量の砂煙を発生させながら着陸する：シユン達は何かが来ることに気づいた。メロエツタがエスパーの力でバリアーを張ってくれたためテーブルもご飯もシユン達も吹っ飛ばされずにすんだのである。

「びつくりした……このポケモンってカイリユー？……でもどうしてここに……」

シユンは突然の砂煙と衝撃に驚き、砂煙が晴れるとそこに「カイリユーがいてさらに驚く。

「バウ!!」

カイリユースは持っているバッグの中から何かを出すとシユンに渡す。

「この手紙を僕に……何これ？」

シユンは突然渡された手紙を受け取り開くと中には何か入っており不思議そうにそれを見ていると、真ん中の水晶の物が光出して女性の映像を映し出す。女性はお辞儀をすると悠然と要件を話し出す。

「突然のお手紙をお許しください！」

シユン達は話しを聞こうと集中する。

「あなたを前途有望なポケモントレーナーと見込んで：最強のポケモントレーナーであるご主人様のパーティーにご招待します」

女性はシユンを最強のポケモントレーナーである女性の主人が開くパーティーに招待すると言う。すると映像が切り替わり：島のような映像が浮かび上がる。

「場所はニューアイランド、ポケモン城……おいでになるかならないか：返信用ハガキにチェックをお願いします」

浮かび上がった場所の映像に行き先の案内の矢印が浮かび、行くか行かないかは封筒の中にある返信用ハガキにチェックして欲しいとお願いされる。

「最強のポケモントレーナーの招きをぜひお受けください……」

女性は最後にぜひお招きくださいと言うとお辞儀して映像が消える。

「なるほどどうしようかな？」

シユンは話を聞いた後に行くか行かないかどうしようかと悩む。

「参加しましょう！マスター！パーティーですからご馳走もありますし、おそらくです  
がいろんなトレーナーも来ると思いますしいい経験になると思いますよ！」

メロエツタはパーティーに参加しようとシユンに言い、いろんなトレーナーも来るだ  
ろうから言い経験になるだろうとシユンに言う。

「そうですわ！マスター！せっかくご招待いただけたのですから参加致しましょう！」

ディアンシーもせっかくご招待してもらったのだから参加しようとシユンに言う。

「んくく…それもそうだね…せっかくだし参加しようかな？それじゃあ返信用ハガキの  
行く方にチェックつと！はい」

シユンはパーティーに行くことを決めると返信用ハガキの行く方にチェックしカイ  
リユースに渡す。

「バウ、バウ〜!!」

シユンから返信用ハガキを受け取るとカイリユースは翼を羽ばたかせ空高くへと飛ん  
でいった。

その後シユン達は昼食を食べ終わるとテーブルや食器を全て片して：フライゴン以  
外のポケモン達をボールにしまう。ここに行く途中でポケモンを捕まえても言いよう

にドレディアを事情を言つてエリカに連絡して預かってもらうように頼む。

ドレディアはカントー地方にいないためオーキド博士のもとに預けてはいろいろと面倒なためである。メロエッタのレポートでエリカのもとに送ってもらう。

「それじゃあドレディアも送つたしこれ以上やることもないし：遅れるよりは早い方がいいし行こうか、みんな！」

「そうですね！」

「はい！」

メロエッタとディアンシーも今からニューアイランド島に向かうことに賛成する。シユンはメロエッタを肩に乗せてディアンシーを両手に抱いてフライゴンにまたがって乗る。

「それじゃあ頼むよ！フライゴン」

「フラ〜!!」

シユンはフライゴンに言うのとフライゴンは了解と言うように頷き、翼を羽ばたかせてシユンに乗せてニューアイランド島へと向かつて飛び立つのだった。

シユン達のいた場所からニューアイランド島まではそう遠くなくパーティーが始まる時間よりだいぶ前にニューアイランド島にそびえ立つポケモン城が目に見えるところまで来てしまったのだ。そのため今はフライゴンにゆっくりと飛んでもらっている。

「思ったよりも早く見えて来ちゃったけど、まあいいか！それにしても風が気持ちいいね！みんな！」

「そうですね！とても心地よい風ですわ！」

「はい！とても気持ちの良い風です」

シユンは飛んでいる自分たちにふんわりと吹いている風を気持ちいいと言うとメロエッタとディアンシーも風が心地よいと吹く風を気持ち良さそうにリラックスする。

「それに辺りも静かで海も太陽の光で綺麗に輝いてるし：こうしていると何だか弾きたくなってくるね！」

シユンはそう言つてポケットからハーモニカを取り出す。そしてシユンはハーモニカを吹き出す。

フツルフル：フフフ~~~~：フフフ~~~~：：：♪

「マスターのハーモニカを聞いていると歌いたくなってきました：」

メロエッタはシユンのハーモニカで吹く曲を聞いて思わず歌いたくなると言い、その綺麗な歌声で曲に合わせて歌い出す。

「ラツララ：ラララ~~~~♪」

「フツフフ：フフフ~~~~♪」

「フツララ：フララ~~~~♪」



「ミュミュミュ・・・ミュミュミュ〜♪」

メロエツタ達がシユンのハーモニカから吹かれる楽しい曲のリズムに合わせて歌い出す：メロエツタとディアンシー：フライゴンが楽しそうに歌う声にもう一つ楽しそうに歌う声が聞こえてくる。

「んっ？」

「えっ？」

「はい？」

「フラ？」

シユン達の一つ多い歌声が聞こえて来たことに驚いて歌声が聞こえた方を向くとシユンの膝の上にいるディアンシーの隣に白い姿をした小さいポケモンがシユンのハーモニカの曲を聞いて楽しそうに歌っていたのだ。

「えと？キミはポケモン？いつの間にかいたの？」

「ミュ？・ミュミュ」

シユンはいつの間にか自分の膝の上にした者にいつの間にかいたのかと聞くが、白いポケモンはシユンの問いに何が？と言った様子でそれよりさっきの楽しそうな曲は弾かないのかと言うように聞く。

「このポケモンはミュウですね！世界で最も珍しいポケモンと言われています。それで

あなたは一体なぜマスターの膝の上にいるのですか？」

メロエツタはシュンにこのポケモンはミュウと言う名前だと言い、世界で最も珍しいポケモンだと説明すると、ミュウにどうしてシュンの膝の上について一緒に歌っているのかと聞く。

「ミュウ？ミュウミュウ！ミュウウ!!」

ミュウは楽しそうに口を手を当てて笑いながら何かを言う。

「それより楽しいからもっと聞かせてほしいですって！ちゃんとわたしの言ったことに応えなさい！」

メロエツタはミュウが言ったことに応えずに楽しいからもっと聞かせてほしいと言ったことに怒りちゃんと応えるようにミュウに言う。

「まあまあ・メロエツタ落ち着いてください！」

ディアンシーは怒るメロエツタに落ち着くように言う。

「それでミュウはどうして僕の膝の上にいるの？」

シュンは改めてミュウに何故自分の膝の上にしたのかを聞く。

「ミュウミュウ？ミュウウミュウ！」

ミュウはシュンに聞かれると今度は手を振ってちゃんと応える。

「なるほど・どうやらミュウは空を自由に飛び回っているとマスターの楽しそう

なメロディーが聞こえてきてメロディーが聞こえてきた方に行くと、楽しそうにみんなで歌っているわたし達を見てミュウも一緒に歌いたくなり思わずマスターの膝の上にレポートで移動しみんなと一緒に楽しく歌ったそうです」

メロエツタがミュウの言ったことをシユンに説明する。

「そうだったんだ！ だけど何でミュウはこんなところにいたんだろう？ 世界に一匹なんでしょ？」

シユンは世界で最も珍しいポケモンと言われているミュウがこんなところにいるのかと不思議そうに聞く。

「マスター・ミュウは確かに珍しいポケモンですが世界に一匹というわけではありませんよ!!」

ミュウが何故こんなところにいるんだと考えるシユンにメロエツタがミュウは一匹しかないわけではないと応える。

「えっ！ そうなの？」

シユンはその事実驚いてメロエツタに聞く。

「はい！ ミュウが最も珍しいポケモンと言われているのは極端に目撃例が少ないからです。人を寄せ付けない密林の奥深くにある遺跡にいたり、深海の海底にいたり人間が到底行くことの出来ない場所にいます。人間がいる場所に現れるは極めて稀のため目

撃例の少ないミュウは世界で一番珍しいポケモンと言われているのです」

メロエツタがシユンにミュウが世界で一番珍しいポケモンと言われている理由を説明する。

「そうなんだ……!」

「ミュ・・ミュミュウ!」

シユンはメロエツタの説明に納得しながら膝に座っているミュウを撫でる：ミュウはシユンの撫でる手に気持ち良さそうにすり寄る。そして：ミュウと出会ってから少ししてニューアイランド島のポケモン城へと到着する。シユンはフライゴンに風車がある塔の穴へとフライゴンに着陸するように言う。

「ご苦労様、フライゴン!えと・思ったよりも早く着いちゃったね!」

シユンはフライゴンをボールに戻すと、思っていたより早く着いてしまったと言う。

「そうですね!ですけど早く着いて良かったかもしれないかもしれません：さっき空を見ましたが雲行きが怪しくなっていました。おそらくですが激しい嵐が来るでしょう：その前に着けて良かったです。(ですけど・この嵐は：?)」

メロエツタはここに来る途中で空を見ていたが雲行きが怪しくなっていることに気づき、嵐が来る前にここに着けて良かったと言う。

「そうだね・確かに嵐になりそうだし早く着けて良かったけど……パーティーがはじま

るまで、まだだいたい時間もあるし……ちよつと疲れたから時間まで昼寝しようかな……ふあ……あ……」

シユンは早く着けて良かったと言うが、パーティーがはじまるまでまだだいたい時間があるので疲れたのではじまるまで昼寝をしようと思おうにあくびをしながらリュックから毛布と枕を出して寝転がる。

「フア……ア……それじゃ僕は少し寝るからね……おやすみ……」

シユンはメロエツタ達にそう言うて毛布をかけて寝る体勢にはいる。

「わたくしも眠くなって参りましたしおやすみさせていただきますわ……」  
「わたしも眠たいので一眠りします」

メロエツタとディアンシーもシユンが寝るのを見て、二人も眠気がして眠ろうとシユンのリュックから自分たちのボールを取り出す。自分たちのボールを取り出したためリュックから数個のボールが転がり出る。

「ミュウ？……ミュウ……」

ミュウはメロエツタとディアンシーが持っているモンスターボールが何なのかと気になり興味深そうに見ている。

「それじゃあわたくしもおやすみいたしますわ……それでは……」

ディアンシーはボールのスイッチを手で押してボールの中へと入る。

「ミュウ！ミュウミュウ〜!!」

ミュウはディアンシーがボールの中に吸い込まれたことに驚き、すごいと楽しそうに笑う。

「何をそんなに驚いているのですか？わたしも一眠りしますのであなたは好きにしてください……では……」

メロエツタもミュウにそう言うのとボールのスイッチを押してボールの中へと入り眠る。

「ミュウ……ミュウミュウ？」

ミュウはメロエツタがモンスターボールの中に入るのを見ると：面白そうにリュックから転がっているボールを手を持ち遊んでいる……そしてミュウは面白そうに遊びながらスイッチを押した……。

「ウ……ン……フワア……！よく寝たなあ！ン……ン……！」

シユン達が寝た時間から数時間後……シユンは目を覚まし、両手を上に伸ばして起き上がる。見ると辺りはすっかり暗くなっておりパーティーのはじまる時間まで後少しの時間となっていた。

「ウ……ン……すっかり暗くなってる……そろそろはじまるかな……」

シユンは辺りが暗くなっていることに気づき、そろそろパーティーがはじまるかなと考えていると・2つのモンスターボールが開き中から眠っていたメロエツタとディアンシーが出てくる。

「フワア・おはようございます。マスター・」

「ンンウ・よく眠れましたわあ」

メロエツタとディアンシーがボールから出てきてよく眠れたと言ってシユンに言う。

「おはようメロエツタ、ディアンシー・さて二人も起きたところでそろそろ行こうか!」

「ええ!」

「はい!」

シユン達はそう言うのと奥にあつた階段を降りて真ん中にある一番大きい城の入口へと向かう。

「そういえばミュウがないね?」

シユンが階段を降りている途中でミュウがないことに気づく。

「わたし達が寝ている間にどこかに行ったのでしょうか?気にせず行きましょう!」

メロエツタは寝ている間にどこかに行ったのだろうと言って気にしないで行きましようと言ひ、シユン達が長い階段を降りると中央の塔の入口へと向かう・するとそこには……。

「よくおいでくださいました・招待状をお見せください！」

手紙と一緒に入っていた招待状に映っていた人が手に灯りを持ち、招待状を見せてほしいと言う。シユンが招待状を出して見せると招待状から女性の姿が映り出される。

「この方は確かにお招きした方です・」

招待状の姿が映り確かに招待者だと言う。

「確かに・さつ・こちらへどうぞ・他の招待客の皆様は既にお揃いです・」

そう言つてシユンについて来るように言いシユン達を案内する。シユン達は女性の後を着いて行くと階段を登り大きな扉の前へと来ると扉が開きシユン達は中へと入つて行く。そこは広々とした大広間の部屋があり、そこに三人のトレーナーと思われる人達が座つてポケモンと一緒に待つていた。

「あちらにいらつしやるのが既にお着きのトレーナーの皆さんです・」

女性がそう言つた方を見ると三人のトレーナーが大きい机に沢山並べられたイスの一つに座り、はじまるのを待つていた。

「なるほど・僕が寝ている間に来た人たちか・」

シユンは自分が一眠りしている間にあの嵐を越えて来た人たちかと気づく。

「あなたは嵐が来る前に一番にここに着いていたようですね・嵐が来ることを見越して早くここに向かおうとしたその判断・見事だと、ご主人様が言つておられました・」



女性はシユンが最も早くここに来て、ここに女性の主人が気づいていると言いつつ、嵐が来る前に向かおうとしたその冷静な判断を見事だと言っていたとシユンに言う。

「言え！ そんな大したことじゃないですよ・（本当はやることもなくて退屈だから早く来ただけなんで）」

シユンはそんな大したことはないと言いつつ、心の中で本当のことを言う。

「どうやら・・・また、もう一方達が来たようですのでわたしはお迎えに行きます：ですからあなた方はモンスターボールからポケモンを出してお待ちください：。あなたは選ばれたポケモントレーナーです：」

女性はまた招待客が来たことに気づき、迎えに行くからとシユンにモンスターボールからポケモンを出して座って待つように言う。女性はそう言いつつ扉から出て行つてたつた今、到着したという招待客を迎えに行つた：そして後ろの扉は閉まる。

シユンはここにおいても仕方ないと机に向かい端にあるイスに座る。三人いるトレーナーはポケモンを出しているようだがシユンは何となく出さないうことにする。シユンが座つてはじまるのを待っていると・

「やあ！ キミもあの嵐を越えてきたのかい？ 僕は空を飛んで来たんだ：」

赤い服を来たトレーナーがピジョットを撫でながらシユンに声をかける。

「いいえ・僕は嵐が来る前にここに来ました：」

シユンは赤い服の男性の問いに自分は嵐が来る前にここに来たと言う。

「嵐が来る前に！それじゃあキミが一番早くきたのか！でもだつたらどうしてこんなに遅くなったんだい？」

赤い服の男性がシユンが一番早く到着していたことに驚き、だが、どうしてこんなに遅くに来たのかとシユンに聞く。

「ちよつと早く来すぎちゃったからね・はじまるまで端にある風車の中で寝て待つてたんだ！」

シユンは早く着きすぎてしまったから眠って待つていたと言う。

「眠って待つていた・ハハツ！キミは面白いな！ところでキミはポケモンを出さないのかい！出して待つているように言われたはずだけど！」

赤い服の男性はシユンの行動を面白がり、シユンにポケモンを出さないのかと聞く。

「最強のポケモントレーナーというのが現れたら出しますよ！」

シユンはそう言つて、最強のポケモントレーナーが現れたら出すと言う。シユンと赤い服の男性がそうやって話していると扉が開き先ほどの女性が三人の人を連れて戻つて来る・三人にも先ほどの説明をしているのだろう！ここからじゃ遠くてよく見えないうが真ん中にいるピカチュウを連れた帽子を被つたトレーナーには何となく見覚えがあるような気がする・説明が終わつたのかその女性と一緒に三人はポケモンを出して

こちらに歩いてくる。段々、こちらに近づいて来ることによってその姿がはつきりとしてくる。そして三人の内の帽子を被ったピカチュウを連れたトレーナーがシユンの方を見ると驚いた様子でこちらに向かつて走って来る。シユンも自分に向かつて来る人が誰なのか気づいて、驚く。そしてお互いの顔がはつきりと見える距離まで来ると二人同時に名前を言う。

「シユン！」

「サトシ！」

それは同じマサラタウンに住んでいる幼なじみにして、あの日同じ日にオーキド博士からポケモンを貰ってマサラタウンを旅立ったシユンとサトシの久しぶりの幼なじみ同士の再会である。

「久しぶりだなあ、シユン！挨拶もなしにあの日マサラタウンを旅立ったってシゲルから聞いてたからどうしてるのかなと思ってたんだ。オーキド博士から聞いていたのはしばらくポケモンを充分に育てることに集中したいからって聞いてたけどこんなところであうなんてな！」

サトシはシユンに久しぶりに会えたことに喜ぶ。

「僕もこんなところでサトシに会えるなんて驚いたよ！そう言えばサトシ：オーキド博士から遅刻して一番最後に来たって聞いたけど：ちゃんとオーキド博士からポケモン

はもらえたのかい？」

シユンもサトシにこんなところで再会したことに驚き、遅刻をしたサトシはちゃんとオーキド博士からポケモンを貰えたのかと聞く。

「ああ・寝坊しちゃったけどオーキド博士からちゃんとポケモンはもらったぜ！来い、ピカチュウ！」

サトシは寝坊したけどオーキド博士からちゃんとポケモンがもらえたと言うと、ピカチュウを呼ぶ、すると後ろにいたピカチュウがサトシの体を上り肩に乗る。

「俺がオーキド博士から最初に貰ったポケモンがこのピカチュウなんだ！俺の一番の相棒なんだ。」

「ピカピ！」

サトシがピカチュウをオーキド博士から貰ったと言い、一番の相棒だと言う。

「なるほど、ピカチュウか！可愛いね・」

シユンはそう言つてピカチュウの頭を優しく撫でる。

「チャ〜!!」

ピカチュウは気持ち良さそうにシユンに撫でられている。

シユンとサトシが久しぶりの再会を喜び話しているところに……。

「ちよつとサトシ!!二人で楽しそうに話してないでわたし達にも紹介してよ！」

サトシと一緒に来ていた同い年ぐらいの女の子がシユンと話しているサトシにシユンのことを紹介するように言う。

「ああ、そうだった：紹介するよ！こいつはシユン：シゲルと同じで俺の幼なじみで、小さい時によく一緒に遊んだんだ！」

サトシはシユンのことを一緒に来ていた二人に紹介する。

「わたしはカスミよ！よろしく」

「おれはタケシ！よろしくな」

二人もシユンに名前を言い自己紹介をする。

「シユンです。こちらこそよろしく」

シユンとサトシ達が互いの自己紹介をしていると……。

「あなたがマスターの幼なじみですか……」

シユンの肩に乗っているメロエツタが姿をサトシ達の前に現す。

「なっ！」

サトシ達は突然シユンの肩から現れたポケモンらしき者に驚く。

「ああ、紹介するよサトシ！この子はメロエツタって言うんだ」

シユンはサトシ達メロエツタのことを紹介する。

「わあ！可愛い〜！」

「初めて見るポケモンだな…」

カスミはメロエツタを見て可愛いと言い、タケシは初めて見るポケモンだから興味深そうにメロエツタを見る。

「メロエツタね…」

サトシはポケモンずかんをポケットから出すと、メロエツタに向ける。

【データなし…この世界にはまだ知られざるポケモンが多い…】

ポケモンずかんからはメロエツタについての情報は出てこずデータなしと表示される。

「あれ？データなしだって、どういうことだ？」

サトシはポケモンずかんでデータが出ないことに不思議そうにする。

「えっ！本当！」

「ポケモンずかんにデータがないなんて新種のポケモンなのか？」

ポケモンずかんにデータが出ないことにカスミとタケシも驚く。

「まあ、そんなことは良いじゃないか！それよりそろそろはじまるんじゃない？」

シユンがそう言うときサトシはまあ良いかと言った様子で他にいるトレーナー達のポケモンを見ており、そのトレーナー達と話をする：青い袖のないシャツを来た男の人、さつきシユンに話しかけてきた赤い服の男の人、そしてそして髪が左右にピンと

なっている紺と白色の混じった服を着る女の人が互いのポケモンのことについて紹介している……

「皆様……お待たせ致しました。最強のポケモントレーナーであるご主人様がおいでになります」

女の人がみんなに最強のポケモントレーナーがおいでになると言うのと、螺旋状になっている階段のような物の真ん中を通り、ゆっくりとシユン達の前に降りてくる。ポケモン達はそのままだならぬ気配に警戒と怯えたりと反応を見せる。

「あれって？ポケモン！」

最強のポケモントレーナーがお出でになると言うていたのに現れたのが正体不明のポケモンらしき姿をした存在が出てきたため驚きの声上がる。

「そう……この御方は最強のポケモントレーナーであり最強のポケモンでも有らせられるミュウツウ様です」

女性はそう言うてシユン達の前に現れた存在の説明をする。

「ポケモンがポケモントレーナー！バカな!!」

青い半袖のシャツを来た少年がポケモンであるミュウツウがポケモントレーナーと言うことをそんな馬鹿など言うて否定する。

「いけないか？：わたしのルールはわたしが決める……」

女性とミュウツーが同時に喋り、シユン達は驚く。

「テレパシーですね。ある程度力のあるポケモン達はわりと使えますよ！」

メロエツタがテレパシーで伝えているとシユンに教え、伝説と呼ばれる存在ならばわりと使うことの出来ると言う。サトシ達がミュウツーがテレパシーを使ったことに驚いていると、ミュウツーは片手を上げる。すると、青いシャツの男の人を青白い光は包み男は苦しげな声を上げながら浮かび上がり、そしてミュウツーが片手を動かすと青色のシャツを来た男は自分のポケモン達の水槽まで吹っ飛ばす。そして、水から浮かび上がるギャラドスにはかいこうせんを撃つように言い、ギャラドスはミュウツーにはかいこうせんを放つ。しかし、ミュウツーが片手を上げるとはかいこうせんが跳ね返りギャラドスを吹っ飛ばす。

「サイコキネシスですね。わたしもよく使います。並のポケモンよりは強いようですがわたしほどではありませんね！」

メロエツタがミュウツーがどうやって跳ね返したのかを説明する。

「たわいもない……お前にもう用はない！」

ミュウツーが片手を振ると、女性の目の色が変わり、倒れそうになるのをタケシが受け止める。



目を覚ましたジョーイはなぜこんなところにいるのかと考えていると、ミュウツウが自分の世話をさせるためにポケモンセンターから連れてきたと説明する。ポケモンの体について詳しい医者者は便利だと随分役にたったと：お前は何も覚えたいないだろうがなど、そして人間など自分の力をもってすればどうにでも操れると嘲笑う。

「酷いことを!!」

「ピカア!」

ミュウツウの酷い発言にサトシやカスミ、ピカチュウも怒りの感情を抱く。

「わたしは一度は人間と一緒にやろうと思った……だが：わたしは失望した：人間はポケモンにも劣る最低の生き物だ：人間のように弱くて酷い生き物が支配してはこの星は駄目になる……」

ミュウツウは一度は人間と共に歩もうとしたと言う。しかし、人間のあまりの愚かさに見望したと言い、このままではこの星は駄目になってしまおうと言う。

「じゃあ：お前のようなポケモンがこの星を支配するって言うのか?」

ミュウツウの発言にタケシは、それじゃあお前のようなポケモンがこの星を支配するのかと聞く。するとミュウツウは顔を左右に揺らし……

「ポケモンも駄目だ……なぜなら……この星は人間に支配されてしまった：人間のために生きているポケモンさえいる……」

ミュウツーは人間に支配されてしまったために人間のために生きているポケモンが多くなってしまったと言い、ポケモンも駄目だと言う。するとミュウツーの物言いにサトシの肩からピカチュウが下りてミュウツーに言う。

「ピカ！ピカピカ！」

「何だと・良いなりになんてなっていない・好きでそのトレーナーと一緒にいる・…」

「ピカ！」

ピカチュウはミュウツーに好きでサトシと一緒にいるんだと言う。

「一緒にいること自体が間違っている・…」

ミュウツーはピカチュウの発言に対して一緒にいること自体間違っていると行って先ほどのようにピカチュウをサイコキネシスで吹っ飛ばす。

「ピカ！ピく・…」

「くっ！」

吹っ飛ばされるピカチュウにサトシは飛びついてピカチュウを受け止める。

「チャ・・ピカピ！」

「ピカチュウ！」

ピカチュウはサトシのことを心配し、サトシもピカチュウに大丈夫と言ったような笑顔を向ける。

「弱いポケモンは人にすり寄る…」

ミュウツウはそう言つてサトシ達をあざ笑ひ、カスミやサトシのポケモン達はサトシを心配し駆け寄る。サトシは大丈夫だと言つて、ピカチュウを吹っ飛ばしたミュウツウに怒りの表情を向ける。

「どんなポケモンだつて！ポケモンならゲット出来ないはずはない！いけ！ぼくのサイホーン！」

「グオオ〜!!」

赤色の服を来たトレーナーがポケモンならゲット出来ないはずはないと言つてサイホーンに行くように言い、サイホーンはうなり声を上げてミュウツウに突つ込む。しかし、ミュウツウは難なくエスパーの力で軽々とサイホーンを受け止める。サイホーンはジタバタともがくが空中で動けない。

「はあ…あ…あ…」

赤色の服のトレーナーは自分のポケモンの攻撃が簡単に止められたことに呆然とする。そしてミュウツウが手を前に押し出すとサイホーンをテーブルの上を滑りながら吹き飛ばす。

「サイホーン！」

赤色の服の男はサイホーンに駆け寄る。

「情けない…あの程度の攻撃でやられるなんて、育てがたりていませんね…弱すぎです…」

メロエツタはミュウツウの攻撃によつて簡単にやられた他のトレーナー達のポケモンを見て弱すぎると馬鹿にする。

「聞き捨てならんな…」

メロエツタの発言にミュウツウが反応しシユンの前に浮かぶメロエツタに手を向ける。

「わたしの力をあの程度などと…ならば今度はお前が受けてみるがいい…」

ミュウツウは自分の力を馬鹿にしたメロエツタに怒りの表情を向けて、先ほどのようにメロエツタをサイコキネシスで吹き飛ばそうとする。

「その程度でわたしをどうにか出来るなどと思つているのですか!」

メロエツタも手を前にかざしサイコキネシスでミュウツウに対抗する。メロエツタとミュウツウの技がぶつかり合うもメロエツタの力が上回り、ミュウツウのサイコキネシスを突き破りミュウツウを後退させる。

「馬鹿な!わたしの攻撃が撃ち負けるなど…あるはずがない!」

ミュウツウは自分の攻撃が力負けしたことに信じられずに驚きの表情をする。シユンや他の者達も初めて見るメロエツタの姿と見た目の可愛らしさからは想像出来ない

ほどの強い力に驚く。

「どうと言うことはありません……この星が誕生し陸や海が出来てから数千年……様々な物が誕生し滅びては栄えていきました……あなたよりも強い生物も存在します。あなたがどんな人間達を見てきたのかはわかりませんが……あなたが見てきた人間達は人間の歴史のほんの一部に過ぎません……」

メロエツタはミュウツアにどうということはないと言い、この星が誕生してから数千年……陸や海が誕生しそして様々な生き物が栄えては滅んでいったと言い、ミュウツアが見てきた人間達も人間の歴史のほんの一部だと言う。シユン達はメロエツタの壮大な話に呆然として何も言うことが出来ずに静かに話を聞いている。

「……おまえの言っていることはわからない……」

「生まれてきたばかりのあなたには分かりませんよ！陸や海が出来たのを見ていない……そして、この星が誕生してから起こった様々な奇跡を見たことはあるはずがないです……」

ミュウツアがメロエツタの言っていることがわからないと言うと、メロエツタは生ま

れてきたばかりのミュウツーにはわからないと言う。陸や海が出来たのを見たことがないミュウツーには・この星が誕生してから起こった様々な奇跡を見たこともないミュウツーにはわからないと言う。

「わたしは確かに生まれてきて間がないがこの世界の人間を見てきたつもりだ！ゆえにわたし以上に強いポケモンなど存在するはずがない！わたしはこの星の如何なるポケモンよりも強く生まれてきたのだ・」

ミュウツーは確かに生まれてきたばかりだが、この世界の人間達を見てきたと言い、ゆえに自分よりも強いポケモンはいるはずがないと自分はこの星に存在する如何なるポケモンよりも強く生まれてきたとメロエツタに言う。

「そんなことやって見なきゃわかんないだろう!!」

ミュウツーの自分が一番強いと言う言葉にミュウツーとメロエツタの会話を黙って聞いていたサトシがやってみなければわからないだろうと否定の言葉を言う。

「やってみるか?」

ミュウツーのやってみるかと言う言葉にサトシが望むところだと言うと、ミュウツーが目を光らせる。するとしばらくして床に穴が空き、そこからポケモントレーナーが最初にもうひとカゲ・ゼニガメ・フシギダネの最終進化系である三体が現れる。ミュウツーはその三体を自分が作ったコピーだと言い、その事実そこにいる者達は驚く。そ

して突然聞こえて来た騒音にシユン達とポケモン達が驚き、辺りを見回す。すると目の前のガラス張りが開きライトがつくとステージが現れる。

「競技場！ポケモンバトルをしようと言うのか!!」

タケシはステージが現れたことに驚き、バトルをするのかと言う。

「ぼくにはフシギバナのバーナードがいる!」

「バア〜ナ〜!」

赤い服のトレーナーは自分にはフシギバナがいると言う。

「わたしにはカメックスのクスクスがいるわ!」

「ガメ〜!」

青と白の服の女のトレーナーは自分にはカメックスがいると言う。

「俺にだってリザードンがいる!リザードン:キミに決めた!」

サトシは自分にはリザードンがいると言ってボールを投げるとそこからリザードンが出てくる。

「ボホオ!ブオウ〜!」

リザードンが出てきてやる気のなさそうに火を吹くもミュウツーのただならぬ気配を感じミュウツーに向かっていきなりかえんほうしやを繰り出す。サトシはいきなりリザードンがかえんほうしやを撃つことに驚く。しかし、ミュウツーはなんなく片手

を上げてかえんほうしやを打ち消す。

「随分しつけの悪いリザードンだな…」

ミュウツウは攻撃を防いだ後で随分しつけの悪いと言う。サトシはそれを聞いてミュウツウを睨みつける。

「マスターもリザードンがいますのになぜ、出さないんですの?」

ディアンシーはシユンに、シユンもリザードンを持っているのに何で出さないのかと聞く。

「んっ!だってめんどろじやないか!修行の疲れを癒すために気晴らしで来て見たけど:何だかよくわからないことになってるし:興ざめだよ!適当なところで帰ろうと思つてたし:サトシがやってくれるならそれはそれで良いしね!」

シユンはディアンシーに聞かれると、面倒だからと言い、サトシがやってくれるなら面倒じゃなく楽で言いと理由を小声で話す。

「お前の相手は後回しだ!まずは奴らから相手をしてやる:最初の相手は誰かな!」

ミュウツウはメロエツタにお前の相手は後だと言って、まずはサトシ達の相手をすると言い最初は誰が来るかと聞く。

「バア〜ナ〜!」

「さつきは油断したけど今度はそうは行かないぞ!」



フシギバナがフィールドの中へと進み、赤い服のトレーナーがさつきは油断したが今度はそうは行かないと言う。ミュウツターが顔を前に動かすとコピーのフシギバナもフィールドへと進む。そして試合が始める。

赤い服のトレーナーはフシギバナにはっぱカッターを指示しフシギバナはコピーのフシギバナにはっぱカッターが迫る。ミュウツターはつるのムチをコピーのフシギバナに指示しつるのムチではっぱカッターを全て弾き落とす。そして、フシギバナはつるのムチで掴み、遠くまで投げ飛ばす。赤い服のトレーナーは投げ飛ばされたフシギバナのもとに向かう。

次は青と白の服の女のトレーナーがカメックスに行くように言うと、カメックスがフィールドへと走っていく。ミュウツターもコピーのカメックスをフィールドへと向かわせる。青と白の服の女のトレーナーがカメックスにハイドロポンプを指示しコピーのカメックスに放つのもコピーのカメックスはこうそくスピードでハイドロポンプを弾きながら進み、カメックスをそのまま吹っ飛ばしカメックスは壁に叩きつけられる。

「マスター！ちなみにただ威力の高い技を選ぶのは良くありません。威力の低い技でもトレーナーの腕しだいで強くなります。あの人達はトレーナーとしてのレベルが低いですね」

「うん、そうだね：たった一撃でやられちゃったしポケモン達のレベルも低いみたいだね！」

シユンとメロエツタは小さな声で今バトルしているトレーナーとポケモンについて話す。聞こえてしまうと面倒なので小声で話すが念のためメロエツタが薄い結果を張って聞こえないようにしている。

最後はサトシとリザードンのバトルになり、サトシはリザードンにスピードで行くように言うもリザードンはサトシの言うことを全く聞かず、かえんほうしやを連続で撃ちまくるも、ことごとく交わされて攻撃を受けている。そのコピートのリザードンの素早い動きにサトシのリザードンは全然着いていけずに攻撃を食らう。そして空高く上空へと上がり、コピートのリザードンがサトシのリザードンを羽交い締めにし急降下してくる。ミュウツーはコピートのリザードンにちきゆうなげを指示しサトシのリザードンを地面へと叩きつける。リザードンは一回立ち上がるもその体を地面へと横たえる。サトシは倒れたリザードンのもとに向かい大丈夫かと言う。

「スピードもパワーも不足している」

そう言つてミュウツーが両手を広げるとそこから3つのモンスターボールらしき物が出てくる。そしてリザードン・フシギバナ・カメックスをボールへと吸い込む。

「人のポケモンを盗る気なの!!」

その光景を見ていたカスミはミュウツウに人のポケモンを盗る気なのかと文句を言う。

「盗る？ いや・お前達が自慢するポケモンよりさらに強いコピーを作る・わたしに相應して…」

ミュウツウはサトシ達のポケモンよりもさらに強いコピーを作ると言つて、さらに黒いボールを大量に出す。

「コピーだと……！」

タケシはミュウツウのコピーを作ると言う発言に驚き、言葉を失う。

「やめろお！ そんなの反則だ！」

サトシはミュウツウにそんなのは反則だと怒りの声を上げる。

「わたしに指図をするな！」

ミュウツウはサトシをサイキネシスで吹っ飛ばしタケシとぶつかって倒れる。

「わたしのルールはわたしが決める!!」

ミュウツウはそう言うのと黒いボールをポケモン達に向かって放つ。

「来るぞ！」

「みんな！ 逃げろ！」

黒いボールが来たのを見ると、サトシはみんなに逃げるように言う。

黒いボールがポケモン達を次々と捕らえて行く。トレーナー達も必死で自分のポケモンを守ろうとするが、次々にボールの中へと吸い込まれて行く。サトシは自分のモンスターボールにゼニガメとフシギダネを戻すがその黒いボールはモンスターボールごと中へと吸い込む。ポケモン達を捕らえたボールは次々と柱が上に上がり下へと吸い込まれて行く。

「さっきから何ですかね？これ！」

メロエツタはさっきから自分の周りを飛ぶ黒いボールを指さす。黒いボールもメロエツタを捕らえようとするも吸い込むことが出来ずにメロエツタの力の強さに壊れる。そして、自分の周りを回っているボールに鬱陶しくなったメロエツタはサイコキネシスで全て破壊する。

「何故だ！わたしの作ったモンスターボールに不可能は無いはず！なのに何故お前は捕まらない！」

ミュウツーは自分の作ったモンスターボールがメロエツタを捕まえることが出来ずに破壊されたことに驚き、メロエツタに聞く。

「あなたの力がわたしよりも弱いからですよ……この程度でわたしを捕らえることなんて出来ません！」

メロエツタはミュウツーが自分よりも弱いからだと言い、この程度の物では自分を捕

まえることは出来ないと言う。

「おのれ！まあいい・他の奴らは捕らえられているようだからな！貴様は後でわたしが倒した後で捕らえてやる」

ミュウツアは後で自分が倒してから捕らえてやると言う。

サトシのピカチュウは最後まで逃げ回っていたが等々黒いボールに捕まってしまい、サトシはそれを追って螺旋階段の上から飛び降りて水の中へと落ちる。そして、ピカチュウの入ったモンスターボールを追って柱の下の穴の中へと入っていった。

そして、サトシがピカチュウを追ってからしばらくして……

「さあ、お前とそのトレーナー以外の人間達よ！命までは盗ろうとは言わない！さっさと帰るがいい！」

ミュウツアはメロエッタとシユン以外の者達にさっさと帰るように言い、両手をかざすと両側の大きい扉が開く。シユンとメロエッタはミュウツアが簡単に帰してくれないことのために息をついて、タケシ達から離れたところまで歩く。

「最もこの嵐の中を帰ればな！」

ミュウツアはポケモンを失って嵐の中を帰ることの出来ないシユン以外のトレーナー達を笑いながら見つめる。それをみんなは悔しそうにミュウツアを睨む。すると……

ドゴオ〜ン!!!

ミュウツウの後ろの方で爆発が起こり、そこからコピーであろうポケモン達がたくさん出てきてミュウツウの近くへと来る。そして、その後からサトシと捕らえられたであろうポケモン達が次々と出てくる。サトシはミュウツウに怒りの感情を向ける。

「お前が逃げたのか？」

「おれはおれのポケモンを！仲間を守る!!」

サトシはそう言ってミュウツウに向かって走りミュウツウに殴りかかる。だが、ミュウツウのエスパーの力に弾かれる。それでも殴ろうとするサトシをミュウツウはサイコネシスで客席の方に吹っ飛ばす。サトシが壁に激突しそうになる瞬間！シユンのポケットの中にあるモンスターボールが開き、そこから出たミュウがサトシを不思議な球体を作り受け止める。

「何？」

ミュウツウはいきなり現れた球体に驚く。

ミュウはシユンの周りを楽しそうに周り、手をパチツとやるとサトシを受け止めた球

体が消える。ミュウは可笑しそうに笑っている。

「お前は……」

ミュウツウは突然現れたミュウの存在に驚く。

「いつの間にボールの中に入ったの？」

「ミュウ？ミュウミュウ!!」

シユンはミュウにいつボールの中に入っていたのかを聞くがミュウは楽しそうに笑っている。すると、そこへミュウツウが放ったエネルギー球がシユン達に迫る。それをメロエツタは手に力を集めて観客席の方へと弾き飛ばす。

「あなたは何をやっているのですか！側にいるならマスターをお守りしなさい！」

「ミュウ……！ミュウ……!!」

メロエツタはミュウに側にいるならシユンを守れと言って怒りながらミュウの両頬を引っ張る：ミュウは痛そうに両手をジタバタとさせ暴れる。

「ミュウ……!!」

ミュウはシユンに：えくん（涙）慰めて：と言わんばかりにシユンの胸へと泣きながら飛びつく。すると、またもやシユンとミュウに向かってミュウツウがエネルギー球を放つ。

ミュウは今度は言われた通りにシユンに迫るエネルギー球を自分の念の力で弾き飛

ばす。そして、サトシ達は突然シユンのモンスターボールの中から現れた見たこともないポケモンの存在に驚き声を失う。口々に何だあれは：ポケモン：と呟く。

「ミュウ：：世界で一番珍しいと言われるポケモン：：」

ミュウツウがミュウのことについて話す。世界で一番珍しいと言われるポケモンだと：：サトシ達も初めて聞く名前に疑問を浮かべる。しかし、それを聞いてメロエツタは疑問に思った：確かにミュウは個体数が以上に少なく滅多に姿を見ることもない珍しいポケモンだが、世界に一匹と言うわけではなく：人間がいけないところにいることのあるポケモンなので一番と呼べるほど珍しいポケモンなのかと：：：！

「ミュウ！」

「確かにわたしはお前から作られた：しかし強いのはこのわたしだ！本物はこのわたしだ！」

ミュウツウは力強い言葉でミュウに言う。強いのは自分だと：本物はこのわたしだと：。

「ミュウ？」

ミュウはそれをジツと聞いている。

「ミュウとミュウツウ：」

「ミュウからミュウツウが作られた？」



トレーナーやポケモン達も二体の話をただ呆然と聞いている。

「生き残るのはわたしだけだ！」

「ミュウ！」

ミュウツウが生き残るのはわたしだと言うと、ミュウを目掛けて飛びエネルギー球を打ち出す。ミュウは素早く交わし逃げる。ミュウツウも素早く追いかけてエネルギー球を放つ。

「何故、戦わん！戦いを避けるのはわたししが怖いからか!!」

ミュウツウが戦わないミュウに苛立ち、なぜ戦わないのかと聞くと、ミュウはフィールドの方へと飛んでいく。ミュウツウはそれを追いかけてエネルギー球を放つ。ミュウにエネルギー球が当たりミュウを上空へと吹っ飛ばす。するとミュウも即座に反撃し同じエネルギー球でミュウツウを吹っ飛ばす。ミュウツウは即座に浮かび上がり、ミュウとミュウツウはフィールドの上へと浮かぶ。

「少しは手応えのある相手と言うわけだな！どちらが本物か決めるのはこれからだ。ミュウとわたしのどちらが強いかな！元のお前達とわたし達のどちらが強いかな！」

ミュウツウのその言葉にポケモン達も様々な反応を見せる。

「本物より我々は強くなるよう作られている」

「ミュウ！ミュウミュウミュウ！ミュウ！ミュウ！ミュウ！ミュウ！！」

ミュウはミュウツウの発言に何か言っているメロエツタがそれをシユンに分かるように伝える。

「なるほど！こう言ってますね。本物は本物だ、技など使わず体と体でぶつかれば本物はコピーに負けない！とっ：言っていますね！」

メロエツタがミュウの言葉を訳す、シユン達はメロエツタが訳してくれたミュウの言葉を黙って聞いている。

「本物は本物だ・だと！」

ミュウツウはミュウのその言い分に怒り、ミュウにエネルギー球を放つ。ミュウはそれを難なく交わすが、そのエネルギー球はサトシのいる客席の像の前へと直撃するが、サトシはそれを交わす。そして、大爆発が起きる。

「良いだろう：：どちらが本物か技無しでも決めてやる：強いのはお前達だ！いけ！」

ミュウツウが強いのは自分達だと言うと、コピーのポケモン達に行くように言い、コピーのポケモン達はピカチュウ達に向かって行く。

本物であるポケモン達も迎え撃とうと続々と自分達のコピーへと向かって行く。

こうして、本物とコピー：どちらが本物でどちらが強いのかと決めるための技無しでの体と体のぶつかり合いの戦いが始まる：ポケモン達も自分の持つ爪や牙など武器で戦う。

「何だろう……この大戦争……!」

シユンは突然として起こったポケモン達による大戦争のようなバトルに呆れと驚きの感情をして目の前の本物とコピーによる戦いを見ている。

「生き物は自分が生きるために弱い者を糧にし自分の力とします。そして自分の住処を守るためには同じ生き物で有ろうと命を奪ってでもその場所を守ります。それが生き物と言う存在なのです。」

メロエツタは生き物のことについてシユンに言う。生き物は自分が生きるために生き物を殺し糧とし住処を守るために命を奪ってでもその場所を守ると説明する。

こうしている間にも本物とコピーの生き残りをかけてお互いを傷つけあう。それをサトシ達も悲しそうにその戦いを見つめている。この戦いを止めたいがミュウとミュウツウが戦いを止めない限り、みんなも戦いを止めない。その事実に関心のない無さを悔しがらる。

「何だか嫌だな……こんなの……」

シユンは本物とコピーのポケモンによる戦いを見ていてシユンは嫌な気持ちになりボールからフライゴンを出して乗る。

「シユン……そのポケモンは!!」

サトシや他の者達はいきなりここにいない見たこともない別のポケモンを出したこ

とに驚く。

「ちよつと戦いを止めてくるよ！フライゴン飛んで！」

「フラ〜！」

シユンはサトシ達に戦いを止めると言うと言うとフライゴンに飛ぶように言い、フライゴンは上空高くにシユンを乗せて飛び立ち、ミュウとミュウツ―達が戦っている空高くへと行く。

「綺麗な満月だなあ…それじゃあやろうか！頼むよメロエツタ〜！」

「はい！わかりましたマスター〜！」

シユンはポケットからハーモニカを取り出し口に加えて曲を吹き、メロエツタもそれに合わせて歌い始める。

く B G M 空の軌跡（星の在り処）く

シユンの吹くハーモニカから流れる音楽が戦っているポケモン達へと聞こえてきて戦う手を止める。シユンの奏でる音色とメロエツタの美しい歌声が響く。その美しい音色に争っていたポケモン達の心が癒やされていく。激しい闘いを繰り広げていたミュウとミュウツ―も闘いの手を止めてシユン達がいる方まで飛んでくる。ミュウは

嬉しそうにその音色を聞き、ミュウツアも先ほどの怒りが嘘のように静かにその音を聞いている。そして、シユンが曲を終えるとミュウツアが静かにこちらへと来る。

「何だこの音色は：怒りと憎しみに満ちていたのがこの音を聞いていると消えてゆく……」

ミュウツアはシユン達の奏でる音色を聞いていると怒りと憎しみに満ちていた自分の心が消えていくのを感じていた。

「ミュウツアもみんなも：こんな綺麗な月夜に戦いなんて似合わないよ：本物とかコピーとかなんてどうでも良いじゃないか！だって、キミはいまこの世界に生きてる、生き物なんだから……」

シユンはミュウツアに言う。こんな綺麗な月が出ている夜に戦いは似合わない……この世界で今を生きている同じ生き物なのだから本物もコピーも関係ないのだと……

「……そうかもしれないな……わたしは自分がコピーであることにこだわり過ぎていたのかもしれない……わたしもお前も……そしてお前達もこの星に住む同じ生き物……」  
ミュウツアはそう言うのと両目が光、コピーのポケモン達の方を自分の力で浮かび上げらせるとシユン達の前まで来る。

「どっか行くの？」

シユンは自分達の前に浮かんでいるミュウツーとコピーのポケモン達にどこに行くのかと聞く。

「わからない……我々が安全に暮らすことの出来る場所を探しに行く……だが、その前に今日のことは忘れたほうが良いだろう……」

ミュウツーは自分達が安全に暮らすことの出来る場所を探しにいくと言い、両手を広げて今日のことは忘れた方が良くと言ってその力を使う。

「さあ……この者達を除くすべての者達よ！忘れるのだ……」

ミュウツーはそう言ってシユン達を除く全ての者達の今日起こったことの記憶を消す……

そして、青い光が辺りを包んでいった。

ここは港の波止場町、そこにあるポケモンセンターではたくさんのトレーナー達が次の町に行くための船を待っていた。

「まだ、次の町へと船は出ないの！」

「いつまで待たなくちゃ行けないんだ！」

次の町への船を待っているトレーナー達がいつ船が出るのかとジュンサーさんのこの波止場町の港の管理をしている女性ボイジャーに訪ねる。

「みなさん落ち着いて！落ち着いてください。今、ボイジャーさんから説明があります」

ジュンサーがみんなに落ち着くように言う。ト洛伊ジャーから説明が有るとみんなに言い、ト洛伊ジャーは前に出る。

「みなさん落ち着いて、先ほどまで起きていた激しい嵐が信じられないことに無くなっています。これなら次の町へと向かう船を出すことができます。みなさんもう少しお待ちください。船はもうじき出航します」

ト洛伊ジャーはそう言ってみんなに船は無事に発航することを説明する。トレーナーのみんなはそれを聞いて安心して笑顔になり喜ぶ。一緒に聞いていたサトシ達も安心した様子でポケモンセンターを出て晴れた外を歩く。

「良かったわねみんな！無事に次の町へ向かう船が出ることになって！」

カスミは無事に船が出ることになったねとみんなに言う。

「ああ、これで後は船が発航する時間まで待つだけだな！それまでどうしようか？」

タケシも後は船が発航する時間まで待つだけだと言い、それまでどうしようかと言いながら歩く。みんなが歩く中、ふとサトシがその足を止める。

「どうしたのサトシ？」

「どうかしたのかサトシ？」

「ピカ？」

カスミとタケシ：ピカチュウは突然止まったサトシにどうかしたのかと聞く。

「いや……この晴れた空を見てたらあいつのことを思い出してたんだけ！」

「あいつ？あいつって誰のこと？」

カスミはサトシが誰のことを思い出していたのかと聞く。

「同じ日に旅立った俺の大切なもう一人の幼なじみ……そう……シユンのことをさ……」

サトシはすっかりと晴れた空を見て思い出していた……あの時の記憶はすっかりと無くなっていったが、大切なもう一人の幼なじみであるシユンのことを思い出していた……

「今……何をしてるんだろう……」

今……何をしてるんだろうと思いつながら……このよく晴れた空をピカチュウとカスミとタケシと一緒に見つめていた。

「結局ついて来ちゃったんだ……」

「ミュミュミュウ!!」

その時、シユンは今、ジョウト地方のシロガネやまへ向けて、フライゴンで上空を飛びながら、いつの間にか自分のボールに入っていたミュウが結局そのまま着いてきたことに驚く。ミュウは嬉しそうにシユンにすり寄っている。

「まったくなんでこうなるのか……」

「まあ良いではないですか！新しい仲間も増えたのですから！」



メロエツタはなんでこうなるのかと呆れ、ディアンシーは新しい仲間も増えたのだから良いではないかとメロエツタに言う。

「そうだね！ 妙な体験をしたけど……いよいよジョウトリーグに挑戦するんだ！ これからもよろしくね。みんな！」

「ええ！」

「はい！」

「ミュウ！」

「フラ〜！」

こうしてシユン達は新たにミュウを仲間にして、いよいよジョウト地方へと挑戦するためにジョウト地方へと向かったのだった。

## ミュウツアの逆襲 バージョン2

シユン達がジョウト地方へと旅立つ日の2カ月程前……シユン達はジョウトリーグに向けて修行の日々を送っていた。

今日は久しぶりにシロガネやまを離れてトレーナーとのバトルによる特訓をしようと考えて草原まで来たところでお腹がなったため昼食の準備をしている。

「みんな！もう少し待っててね。もう少しで出来るからね！お皿とかを並べといてくれるかな？」

シユンはみんなの昼食の準備をしながら、みんなにもう少しで出来るからねと言ってお皿など食器をテーブルに並べといてくれるようにお願いする。

「ウオオ〜!!」

「デイン!!」

「パール!!」

「リリン!!」

「レブ!!」

「リュウ!!」

シユンの現在の手持ちのポケモンは：リザードン、パルシエン、フーディン、ポリゴン、エレブー、ミニリュウとなっている。

シロガネやまの岩場が特訓による攻撃で偶然崩れた時に出てきた進化の石の成分を含む鉱石

：それに”シエルダーが触れたところ”パルシエンへと進化したのだった。

そしてタママシのゲームコーナーの景品でもらったポリゴンである：人からもらったポケモンは懐くまでに時間がかかると言われており、最初はポリゴンもシユンの言う事を全く聞かずにシユンも困っていたのだが、段々とポリゴンと一緒にバトルをしてくうちに少しずつ言う事を聞いてくれるようになり今ではちゃんと”シユンの言う事を聞いてくれるようになり：すっかりシユンに懐いている。

そしてシロガネ山での修行中に湖で出会った通常”ミニリュウもゲットしたその日から双子の妹”色違いミニリュウと一緒にバトルの特訓を始めて少しずつ強くなっている。

そして現在：色違いのミニリュウはタママシシテイのジムリーダー”エリカの元で預かってもらっている。

シユンは昼食の準備を済ませると、ポケモン達の食事の準備をして昼食を食べ始める

：みんな美味しそうに自分の作ったご飯を食べてくれている様子にシユンは笑顔になる。

楽しそうに食事をしていたそんなシユン達の前に突然……

「y o u！ そのボーイ！ 食事中に失礼するぜ！ y o uはポケモントレーナーかな？」

食事中のシユン達にギタリストの格好をした人がシユンにポケモントレーナーかどうかと訪ねる。

「ええ・そうですね・何かご用ですか？」

シユンはトレーナーだと頷いて、何か用が有るのかと聞く。

「O K！ それならポケモンバトル！ 受けてもらうぜ！」

ギタリストのトレーナーはモンスターボールを手に持ち、シユンにポケモンバトルを申し込む。

「ええと・今食事中なんですけど・まあ良いか！ トレーナーとバトルするため来たんだし・わかりました。そのバトル受けます！」

シユンはそう言っつてイスから立ち上がりギタリストのトレーナーと向き合う。

「マスター！ 頑張ってください」

「マスターを応援していますわ！ みんなも頑張ってください」

机に座っているメロエッタとデイアンシーがシユンとみんなのことを応援する。

「うん、それじゃあ行くよ！」

シユンも構えるとシユンとギタリストのポケモンバトルがスタートする。

BGM 『めざせポケモンマスター！』

「テンション上げて行くぜえ！行けえゴリキー！」

「ゴリキー！」

ギタリストはボールを投げると”かくとうタイプの”ゴリキーが出てくる。

「頼んだよ！フーデイン！」

「デイン！」

シユンは先鋒をフーデインに決めて、フーデインは”テレポートでシユンの前へと出る。

「行くぜ！ゴリキー、からてチョップだ！」

「ゴリツキ〜！」

ゴリキーは”からてチョップで”フーデインに攻撃する。

「フーデイン！交わすんだ」

「デイン！」

シユンはフリーデインに交わすように指示しフリーデインは連続で撃ってくる”からて  
チョップを全て交わして行く。

「フリーデイン！サイケこうせんだ！」

「フゥーデイン！」

フリーデインは両手に持つスプーンをクロスさせて：そこから”サイケこうせんを”

ゴリキキーに放つ。

「ゴリ〜〜！ゴリ：：ゴ：リ：」

「オ〜ウー！ゴリキキー!!」

フリーデインの”サイケこうせんが直撃：効果はばつぐんな事もあり”ゴリキキーは  
戦闘不能になり、ギタリストはその事実に関頭を抱える。

「よくやったね！フリーデイン」

「デイン！」

シユンはバトルに勝った”フリーデインをよくやったと言って誉めるとフリーデインも  
喜ぶ。

「シット！まだまだ行くぜ！GO、フォレトス！」

「フォ〜!!」

ギタリストのトレーナーが次に出したのは：ジョウト地方に生息するポケモン、フォ

レトスだった。

「初めて見るポケモンだ・けど、頼んだよ」 パルシエン！」

「パツ！」

シユンは初めて見るポケモンに驚きながらも、臆せずにパルシエンを呼ぶ・シユンに呼ばれたパルシエンはシユンの前へと来る。

「オウ・行くぜ！ フォレトス、こうそくスピンだ！」

「フォ〜！」

ギタリストがフォレトスに指示すると”フォレトスは高速回転してパルシエンに迫る。

「パルシエン！ こっちもこうそくスピン！」

「パル！」

シユンもパルシエンに”こうそくスピンを指示すると”パルシエンも高速回転して、フォレトスに向かっていく。

「フォ〜！！」

「パル！！」

フォレトスとパルシエンは何度も”こうそくスピンでぶつかり合いお互いを弾きあう。

シユン達がバトルをしている上空では一匹のカメラを付けた”オニドリルがシユンと”パルシエンのバトルの様子を映している……オニドリルの付けたカメラから送られてくるシユン達のバトルの映像を何者かが品定めをするように見ている。だが、シユン達はそんなこと知るよしもない。シユンとポケモン達の姿をズームで映している。

フォレトスとパルシエンの”こうそくスピルが何度もぶつかり合うとフォレトスがパルシエンを上空に吹っ飛ばす。しかしシユンは冷静にパルシエンに指示を出す。

「パルシエン！オーロラビームだ！」

「パ〜ル！」

パルシエンは角からオーロラビームをフォレトスに放つ。

「フォ〜：フォ……」

「ウオオ〜！何だど〜：俺のフォレトスまでえ!!」

フォレトスはパルシエンのオーロラビームが直撃し、こおり状態となり氷の中で戦闘不能になる。ギタリストのトレーナーはフォレトスが負けたことが信じられないのか頭を強く抱えながら怒りを露わにする。

「よくやったね！パルシエン！」

「パッ！」

シユンは頑張ったパルシエンの角を優しく撫でる……パルシエンはこの角の部分を



優しく撫でられるのが心地良いのである……パルシエンもシユンに誉められて嬉しそうに喜ぶ。

「チキシヨくガアく！調子に乗るんじゃねえ!!それならこれでどうだあく!!」

ギタリストは自分のポケモンが二連敗した事に怒り自暴自棄になったのか両手に四つのモンスターボールを持つと一斉に投げる。

「スピ!!」

「サドパン!」

「ウリキイ!!」

「マタドガアくス!」

四つのボールからスピアー、サンドパン、オコリザル、マタドガスが出てくる。

「なっ!四体も一遍に出すなんてルール違反だよ!!」

シユンは四体のポケモンを出したギタリストのトレーナーにルール違反だと抗議する。

「ハツ!!卑怯もクソもあるか!勝てば良いんだよ!勝てば!!」

「スピ!!」

「サンドパ!!」

「ウリツキイ!!」

「マア〜タドガア!!」

ギターリストは勝てば良いんだよ!と態度を開き直らせ：出てきた四体のポケモンは今にも” シュン達に襲いかかりそうな勢いである。

「リユリユウ!!」

「どうしたの” ミニリュウ?」

シュンは迫り来るギターリストのポケモン達を迎撃しようと：リザードンに指示しようとした時：：ミニリュウが出てきて” シュンに何かを訴える。

「マスター。ミニリュウは自分がやるって言ってますね」

「リユウ!」

メロエツタ” がミニリュウの言っている事を通訳し、ミニリュウはその通りだと強い眼差しで頷く。

「キミがやるのかい?でもキミはまだバトルはしたことないのに：大丈夫?」

「リユウ!」

ミニリュウはバトルの修行や技の特訓はしていたが：他のポケモンとのバトル自体は始めてのため” シュンは大丈夫かと心配するが：” ミニリュウは大丈夫だと言うように再度頷く。

「リユリユウ!リユウリユウ!!」

「マスター！ミニリュウは大丈夫だって言っていますわ！」

ミニリュウはシユンに大丈夫だと自信満々に言っていると・ディアンシーが通訳する。

「それに」ミニリュウはどうやら特訓で新しい技を覚えたみたいですわ」

「えっ！本当かい」ミニリュウ？」

「リュウ！」

「ディアンシーは」ミニリュウが新しい技を覚えた事を教えられたシユンは「ミニリュウに訪ねると」ミニリュウは力強く頷く。

「何をゴチャゴチャと言ってやがる！！いけええ！！オマエたち！！」

「スピツ〜！！」

「サンドツ！！」

「ウリツキイ！！」

「マアタドガア〜！！」

ギタリストは痺れを切らしたのかポケモン達に行くように指示し、シユンに一斉に襲いかかる。

「よし！分かった。ミニリュウ！！行くよ！！」

「リュウ！！」

ギタリストのポケモン達が迫って来るのを見た” シュンは” ミニリュウのやる気がかい” ミニリュウで迎え撃つ。

「ミニリュウ！ たつまき” だ!!」

「リュウ・！ リュウ〜!!」

シュンは” ミニリュウが特訓で新しく覚えた技を指示し、ミニリュウは両目を光らせて” たつまき” を発生させ、ギタリストのポケモン達を蹴散らして行く。

「” スピツ〜！ (サドパツ〜！) (ウリツキイ〜！) (マアタドガア〜!!) ”」

スピアー達四体は” たつまき” へと巻き込まれていく。

「リュウ・！」

「えっ?…もう一つ新しい技を覚えたのかい?」

「リュウ・！」

シュンは” ミニリュウがもう一つ新しい技を覚えた事を伝えられると…ミニリュウは勢いよく頷く。

「うん! いくよ” ミニリュウ! りゆうのいかりだ!!」

「リュウ・! リュウ〜…リュウ・！」

シュンはもう一つ覚えた新しい技” りゆうのいかり” を指示し、ミニリュウは額の小さなツノにドラゴンの力のエネルギーを溜め、光球…りゆうのいかりを放つ。

ドカアアア〜ン!!!

りゆうのいかり”が” たつまき”へと辺り巻き込まれたギタリストのポケモン達を巻き込み爆発する。

黒煙が収まると：そこには戦闘不能になったギタリストのポケモン四体が倒れていた。

「スピ〜…」

「サド〜…」

「ウリ〜…」

「ドガア…」

「オオウ〜マイ・ゴ〜ツド!!!こんな馬鹿なあ〜!!」

ギタリストは四体のポケモンが一撃で全員やられたことに頭を抱えて信じられないと叫ぶ。

「よくやったね”ミニリュウ!特訓で覚えた新しい技のおかげ!初めてのバトルは大勝利だったね」

「リュウ〜!」

シユンは初めてのバトルにも関わらず：特訓で覚えた新しい技を使い、大勝利出来た事を喜び”ミニリュウの頭を撫でると”ミニリュウは笑顔ですり寄り喜ぶ。

ギタリストのトレーナーは戦闘不能になった四体をモンスターボールに戻すと、覚えてろよおと捨てゼリフを残して物凄い逃げ足で去っていった。

「お疲れ様でしたわマスター！ミニリユウも始めてのバトルだったのによく頑張りましたわ」

「楽勝でしたね。トレーナーのレベルも低いからか：ポケモンも育てが全くと言って良いほど足りていませんでしたね。それに」ミニリユウもよく頑張りました」

メロエツタとディアンシーがシユン達にお疲れ様と言って誉め：始めてのバトルで大活躍だった”ミニリユウを誉める。

「何の経験にも成らないバトルだったよ……トレーナーも最低だったしね……」

シユンは相手のトレーナーのポケモンの育てが足りず、バトルでもがむしやらに攻めるばかりで戦略が全くなく：只の力攻め：終いには怒りでルールを無視してトレーナーとして最低の行いをしたギタリストとのポケモンバトルは何の経験にも成らないバトルだったと呟いてため息をはく。

「それに比べて、ミニリユウはよく頑張ったね。この調子で頑張ろうねミニリユウ」  
「リユウ〜！リユウ♪」

そしてシユンは始めてのバトルでよく頑張った”ミニリユウを誉めて、この調子で頑張ろうと言うと、ミニリユウは笑顔で頷いた後に”ミニリユウが光り輝き始める。

「えっ？ミニリュウ…」

「これはもしかして…」

「進化が始まったのですわ！」

シユンは、ミニリュウが突然 光輝き始めた事に驚き、メロエツタはその現象を見てもしかして？と思ひ：ディアンシーは進化が、ミニリュウの進化が始まった事を告げる。

そしてミニリュウの姿が変わっていき：その姿がどんどん長くなっていき、やがて光が収まっていき、ミニリュウの進化した姿が現れる。

「リュウ〜!!」

「ミニリュウが、ハクリューに進化しましたわ♪」

「これが：ハクリュー…」

シユンは、ミニリュウが進化した姿、ハクリューにポケモン図鑑を向ける。

【ハクリュー…：ドラゴンポケモン。水晶のような タマには天候を 自由に操る力がある 全身から出るオーラで 翼がなくても 空を自由に浮く事が出来る…：】

「やったね、ハクリュー！これからもよろしくね」

「リュウ〜!!」

シユンは進化した、ハクリューを撫でて進化した事を喜び、これからもよろしくと言

い、ハクリューも嬉しそうに” シュンにすり寄る。

こうしてシロガネ山からトレーナーとのバトルを目的で下りて出会ったトレーナーとバトルするが：それはお世辞にも良い物ではなく、何の経験にもならないバトルではあったが：：ミニリユウが始めてのバトルで新しく覚えた技で活躍し：そのバトルで” ミニリユウは” ハクリューへと進化したのだった。

「それじゃみんな。昼食の続きにしようか？」

「はい」

「ええ」

「ウオウ！」

「ティーン！」

「パール！」

「リリン！」

「レブツ！」

あのバトルの後：シュン達は気を取り直してみんなと昼食を取り、メロエツタ達もテーブルへと戻り：昼食を取りながら会話を楽しむ。

そして：シュン達が昼食を食べている上空では……。



「アア〜!!」

首にカメラを取り付けた一匹の”オニドリルが食事をするシユン達を映している。

そしてここから遠く離れた場所にある島、そこには巨大な城が存在し：その城の中の一室でオニドリルの着けているカメラからさっきのバトルから昼食を食べているシユン達を映した映像を何者かが観賞している。するとその横にいる女性が映像を見ている者に声をかける。

「ご主人様……この方にも招待状を……」

女性がそう言つて映像を見ている者に訪ねると……

「かしこまりました……」

女性は映像を見ている者の指示を聞いて、かしこまりましたと了解し準備を始める。

すると風車のある城の部分の窓が開き、そこからカバンを持ったポケモンが飛び立ち、そしてもの凄い早さで昼食を食べているシユン達の元へと向かってくる。

そして”シユン達のいる場所に大量の砂煙を発生させながら着陸する：シユン達は何かが来ることに気づいたメロエツタがエスパーの力でバリアーを張ってくれたためテールもご飯もシユン達も吹っ飛ばされずにすんだのである。

「びつくりした……このポケモンってカイリユー……でもどうしてここに？」

シユンは突然の砂煙と衝撃に驚き、砂煙が晴れるとそこにカイリユーがいてさらに驚

く。

「バウ!!」

カイリユーは持っているバッグの中から何かを出すとシユンに渡す。

「この手紙を僕に…何これ?」

シユンは突然渡された手紙を受け取り開くと中には何か入っており不思議そうにそれを見ていると、真ん中の水晶の物が光出して女性の映像を映し出す。女性はお辞儀をすると悠然と要件を話し出す。

「突然のお手紙をお許しください!」

シユン達は話しを聞こうと集中する。

「あなたを前途有望なポケモントレーナーと見込んで…最強のポケモントレーナーであるご主人様のパーティーにご招待します」

女性はシユンを最強のポケモントレーナーである女性の主人が開くパーティーに招待すると言う。すると映像が切り替わり…島のような映像が浮かび上がる。

「場所はニューアイルランド、ポケモン城…おいでになるかならないか：返信用ハガキにチェックをお願いします」

浮かび上がった場所の映像に行き先の案内の矢印が浮かび、行くか行かないかは封筒の中にある返信用ハガキにチェックして欲しいとお願いされる。

「最強のポケモントレーナーの招きをぜひお受けください……」

女性は最後にぜひお招きくださいと言うとお辞儀して映像が消える。

「なるほど……どうしようかな？」

シユンは話を聞いた後に行くか行かないかどうしようかと悩む。

「参加しましょうマスター！パーティーですからご馳走もありますし、おそらくですがいろんなトレーナーも来ると思いますし良い経験になると思いますよ」

メロエツタはパーティーに参加しようとしてシユンに提案し、いろんなトレーナーも来るだろうから良い経験になるだろうとシユンに言う。

「そうですねマスター！せっかくだから招待いただけただけからですから参加致しましょう」

ディアンシーもせっかくだから招待してもらったのだから参加しようとしてシユンに言う。

「ん……それもそうだね……せっかくだし参加しようかな？それじゃあ返信用ハガキの行く方にチェックつと！はい」

シユンはパーティーに行くことを決めると返信用ハガキの行く方にチェックしカイリユーに渡す。

「バウ、バウ……!!」

シユンから返信用ハガキを受け取るとカイリユーは翼を羽ばたかせ空高く飛んでいった。

その後：シユン達は昼食を食べ終わるとテーブルや食器を全て片してリザードン以外のポケモン達をボールにしまう。

「それじゃあ食器の片付けも終わったし：行こっか！みんな」

「ええ！行きましょうかマスター」

「パーティー楽しみですわ」

メロエツタとディアンシーも今からニューアイランド島に向かうことに賛成する。シユンはメロエツタを肩に乗せてディアンシーを両手に抱いてリザードンに股がり乗る。

「それじゃあ頼むよ！リザードン」

「ウオウ!!」

シユンは「リザードンに頼むと」リザードンは了解と言うように頷いて翼を羽ばたかせてシユンに乗せてニューアイランド島へと向かって飛び立とうとしたその時!!!

「!?これは……」

シユンの肩に乗ったメロエツタが遠くに何かを感じたのか：後ろを振り向き：そしてそちらをジッと見つめる。

「どうかした：メロエツタ?」

「シユンは突然、崖の向こうの青空の方を向いてジツと見つめる。メロエツタにどうかした?と訪ねる。」

「:マスター:申し訳ないのですがわたしは急用が来ました:::ニューアイランド島のパーティーにはマスターと”ディアンシー達で行ってください”」

メロエツタは突然、急用が出来たと言つてか『ニューアイランド島』のパーティーにはシユンや”ディアンシー達だけで行くように告げる。

「えっ!突然どうしたの”メロエツタ?それに急用つて?」

「そうですね。何かあったのですか”メロエツタ?」

シユンは突然:そんな事を言い出す”メロエツタに驚き、どうしたの?と訪ね”ディアンシーも何か有るのかを”メロエツタに訪ねる。

「いえ:::大した事ではないのですが:前に話しましたよね。わたしは太古の昔:::とある島で妹と一緒に島の人間達と一緒に暮らしていたと:」

「うん:::そうだったね。それで島の人間達が”メロエツタ達の力を利用して争いを起こしたから島を出て行ったんでしょ?」

メロエツタはシユンに前に話した自分の身の上話を説明し、シユンも前に聞いた”メロエツタの身の上話を思い出しながら聞き返す。

「その通りです!実は:妹の住む島の方で何やら良からぬ者が近づいている気配を感じ

たのです：」

「そういえば、メロエツタの妹はまだその島に住んでるんだったね：」

メロエツタは妹の住む島の方に何やら良からぬ者が近づいている気配を感じたのだと説明しそれを聞いたシユンはそう言えばメロエツタの妹はまだその島に住んでいた事を思い出す。

「ええ：：島の人間達はどうなつても構わないのですが：妹の様子が気になるので少し様子を見てきます」

「そうか：確かにそれなら妹が心配になるのも分かるね！でも大丈夫かい」メロエツタ「？」

「ええ、大丈夫ですマスター。ご心配なく：少し様子を見てきたら直ぐに戻つて来ますのでマスター達はパーティーへ行つてください」

妹の様子が気になるから一度、島の様子を見に行く事を決めた”メロエツタにシユンは確かにと納得した後”メロエツタに大丈夫かい？と心配するも”メロエツタはご心配ないと：少し様子を見たら戻つて来るからと言つてシユン達はパーティーに行つて来るように言う。

「うん！分かつたよ：。キミと一緒にいけない事は残念だけど仕方ないね：」

「そうですわね。メロエツタ：気をつけて行つて来てくださいね」

「ええ、分かっています。わたしがいない間マスターの事はよろしくお願いしますね」  
「ディアンシー！」

「分かりましたわ！お任せください。メロエッタ！」

シユンは、メロエッタと一緒にいけない事は残念だけど仕方ないと納得し、ディアンシーはメロエッタに気を付けて行って来るように言い：メロエッタは分かっていますと応え自分がない間はシユンの事をお願いし、ディアンシーは「任せてください」と応える。

「それじゃあ行って来ますねマスター！」

「うん、気を付けて行ってきてね」メロエッタ！

メロエッタは飛び立ち：妹の住む島へと向かおうとしシユンは気を付けてねと言つて”メロエッタを送り出す。

そうして”メロエッタが飛び上がり：妹の島のある地方へとテレポートしようとする直前!!

「ああ・そう言えばマスター！リザードンで飛んで行くのは近くの街までにしといた方が良さそうですよ」

「えっ！どうしてだい”メロエッタ？ リザードンに乗って一気に”ニューアイランド島まで飛んでもらった方が早いのに」

メロエツタがシユンにリザードンで飛んで行くのは近くの街までにしといた方が良さそうと忠告を受けて：シユンは「リザードンに乗って一気に『ニューアイランド島』に飛んで行った方が早いのにどうして？と聞き返す。

「どうやらもうすぐ嵐が来るみたいです：密かにそんな気配を感じました：」  
「えっ！嵐が：でもこんなに晴れてるのに？」

メロエツタは「嵐が来るから」と教え：シユンはこんなに晴れているのにと疑問に思う。

「確かですマスター！今すぐ向かえば嵐に合う事なく：近くのポケモンセンターまで行けるでしょう：」

「分かったよ。メロエツタが言うなら間違いないね。リザードン！近くのポケモンセンターまで頼むよ」

「ウオウ!!」

シユンは「メロエツタが言うなら間違いないと納得し、リザードンに近くのポケモンセンターにある街まで飛んで行ってもらうように頼み、リザードンは翼を羽ばたかせ飛び上がる。

「それじゃ」メロエツタ！ぼく達は行くよ。キミも気を付けてね」

「行ってきますわ。メロエツタ。それでは：」



「ええ、お気をつけて」

シユンは“メロエツタに気を付けて行くように言うと：近くの街のポケモンセンターまで”リザードンで飛んでいった。

「さて：マスター達も行ったことですし：わたしも行きますか！（でも、この嵐の気配：自然現象の物とは違うような：：それに感じる：：この妙な気配はいつたい：）」

そして“メロエツタと分かれて近くの街のポケモンセンターへと向かった”シユンはしばらくリザードンで飛んでいると：嵐が起こる前にポケモンセンターの前へと到着する。

「お疲れ様リザードン！ ゆっくり休んでね」

「ウオウ！」

「マスター メロエツタがいないのでわたくしは姿を消す事が出来ませんのでボールの中に入りますね」

「うん。分かったよディアンシー」

ポケモンセンターの前に到着すると“シユンはリザードンをボールに戻す：そして”ディアンシーはメロエツタがいないので姿を消す事が出来ないため“ディアンシーはボールの中へと入る：：シユンはそれを確認するとポケモンセンターの中へと入る。

そこには：シユンだけでなく既にたくさんの人とポケモンがいた。

「凄いたくさんの人とポケモンだな……もしかしてこの人達の中にもニューアイランド島に行くトレーナー達がいるのかな？」

シユンは周りにいる人やポケモンを見渡して……この中に”ニューアイランド島に招待されたトレーナーの人達もいるのかな？”と思う。

「それにしても”ニューアイランド島に行くためにここに来たけど……船が出るのはまだ少し先だな……仕方ない少しそこで休もう……」

実はこの港町の近くにあるポケモンセンター近くの港から”メロエツタに言われた通り……嵐の来る可能性を考えて船で行こうと此所に来たが出航まで少し早すぎたためか……シユンはベンチへと座り休む。

しかし……シユンは休んでいるうちに少し眠気に襲われながら休んでいると……。

ザアアア~~~~ゴオオオオン!!!

さつきまで清々しいほど晴れていた空が曇りだし雨が降り始め……やがて土砂降りになり……風も強くなり時々、雷も鳴り始め……海も風で大波が荒れ狂う程の嵐になった。

「メロエツタの言うとおりの嵐になったな……早く来たおかげで濡れずに済んだけどこの嵐で船が出るのかな？」

シユンがそう思っている間も嵐から避難してきたトレーナーやポケモン……ニュー

アイランド島に行くトレーナーでいっぱいになっていた。

そして” シュンはそのままポケモンセンターの端のベンチで休憩しながらニューアイルランド島行きの船を待っていて気が着かなかった：ピカチュウを連れた帽子を被った少年と” トゲピーを連れた少女：そして細目の青年が慌てて嵐から避難しようとポケモンセンターに入つて来た事に気づかなかった。

それからしばらくしてポケモンセンターにジュンサーさんと、この港の波止場を仕切っている青色の髪をした女性” ボイジャーさんからニューアイルランド島行きの渡し船が嵐によつて出航を中止になった事を知らされる。

口々に招待されたトレーナー達から：苦情の声が上がリ、次々に残念そうな声が出る。

ボイジャー曰く” 港町育ちの自分が今まで生きてきて経験した事のない程の” 嵐だと言う。しかもニューアイルランド島近辺の上空に有るため尚更危険だと、乗客の安全も考えて渡し船は中止だと言う。

「(やっぱりか：この嵐で船なんて出せるわけないよね)」

シュンがジュンサー達の話を聞いてやっぱりと思つていと……。

青色のベストのシャツを着た少年が自分のポケモンは水に強いから大丈夫だと言うが：それで許可などもらえはるはずもなく港の責任者である” ボイジャーが駄目だと

はつきり言う：そしてジュンサーさんから現在、ポケモンセンターの”ジョーイさんが行方不明のため現在、ポケモンが怪我をしたら治療出来ないと厳しく告げる。

「(ジョーイさんが行方不明なのか：それは大変だな。でもどうしようかな？この嵐で船は出ないって言うし：この大雨じゃ”リザードンに乗って飛んでけないし：どうしようかな？そこまで行きたいって訳でもないし：：行くのを止めようかな)」

シユンが心の中でそう思っていると：：。

「んっ？」

ハクリューの入ったボールが揺れている事に気づく。

「(ハクリュー：？何か言いたい事があるのかな？でもこんな人の多いところで”ハクリューを出す訳にも行かないし：仕方ない！濡れるけど：外に行くか！)」

ハクリューが何か言いたい事が有るのかと思つた”シユンはカントー地方では伝説扱いの”ハクリューをこんな人気のある場所です訳にも行かず：：仕方ないと濡れるのも構わず外に出る：シユンが外に出る時に”ボイジャーやジュンサーさんに気づかれぬようにこつそりと抜け出した三人のトレーナーがいた。

そしてシユンや三人がポケモンセンターから出た後にピカチュウを連れた少年とトゲピーを連れた少女と青年の三人がポケモンセンターから出てくる。

「(こ)まで来ればいいかな？出てきて、ハクリュー」

「リュウウ!!」

シユンは雨に濡れながら人気のない港の灯台の方に行くと、そこで”ハクリューを出す。

「どうしたんだい?ハクリュー」

「リュウウ!リュウウ!」

シユンは”ハクリューにどうしたのかと訪ねると:ハクリューは何かを”シユンに伝えようとする。

「えと?なんて言ってるの”ハクリュー?」

「リュウウ!」

シユンは”ハクリューになんて言ってるのか分からず聞いていると:::ボールから”ディアンシーが出てくる。

「ディアンシー出てきて大丈夫なのかい!キミは岩タイプだろう!」

シユンは”ディアンシーがボールから出てきた事に驚いた後に急いでリュックからレインコートを出しディアンシーに被せる。

「ありがとうごさいますマスター。どうやら”ハクリューは自分がマスターを乗せてニューアイランド島に飛んで行くと言っています」

「えっ!本当かい”ハクリュー!」

「リュウー！」

「ディアンシーはお礼を言うよ：シユンにハクリューの言う事を通訳し、それを聞いたシユンは」ハクリューに本当と確認すると：ハクリューは頷く。

「確かにポケモンずかんには：ハクリューは天候を自在に操れて空に浮く事も出来るつてあるけど：：：本当に大丈夫かい？」

「リュウー！」

シユンはポケモンずかんにある『ハクリューの情報』を思いだし、ハクリューに再度大丈夫かと確認すると”ハクリューは勿論だと言うように頷く。

「よし！それじゃあ頼むよ」ハクリュー：さっ！ディアンシー」

「はいー！」

「リュウー！」

シユンは”ディアンシーを抱き抱えて”ハクリューへと乗ると：ハクリューは不思議な力で宙へと浮かび上がり空を進んで行く。

「すごいよハクリューー！本当に浮かんでるよ」

「ええ！本当にすごいですわ”ハクリューー！」

「リュウー！！」

シユンとディアンシーは自分達を乗せて宙へと浮かび上がった”ハクリューを誉め

る。

「でも…それにしてもこの風と雨は何とかならないかな？」

「リュウウ？」

「そうですね。この雨と風は辛いですわ…」

シユンとディアンシーは飛びながらも自分達に降りかかる雨と風が襲うのに苦に思っている…。

「リュウウ〜！リュウウ〜！！」

ハクリューは体にある水晶を光らせると…ハクリューとシユン達のところの部分だけ風と雨が降り止む。

「すごい！ぼく達のところだけ風も雨も止んでる。ハクリューは天候を操れるって聞いたけど…すごいよ」ハクリュー！」

「リュウウ〜！！」

シユンはハクリューの体を優しく撫でると…ハクリューは気持ち良さそうにすり寄る。

「でも、どうしてぼく達のところだけ晴れてるんだろう？」

「リュウウリュウ！」

「どうやら何か得体の知れない物凄い力が働いて…ここまでしか天候を操れないよ

うですわマスター」

シユンがそう疑問に思っていると、ハクリューが説明し、ディアンシーがそれを通訳してシユンに教える。

「得体の知れない力？それっていったい……気になるけどこのままニューアイランド島に行こうか」

「はい！そうですわね」

「リユウー！」

シユンは気になりつつも：このままニューアイランド島に向かう事を決めて、ハクリューの力で嵐の影響を受ける事もなく空に浮かびながらニューアイランド島へと向かった。

シユンが「ハクリューでニューアイランド島へと向かった同じ頃：シユンと一緒にこっそりとポケモンセンターを出た三人のトレーナーがボイジャーやジュンサーさんが止めるのも聞かずに自分のポケモン達を出してニューアイランド島へと向かう。

赤い服の少年は「ピジョットに乗り空から。青色のベストの少年はギャラドスに乗り海を渡る。同じく青色と白色の模様の服の少女もジュゴンを出して海を渡って行く。

それを皮切りに：他にニューアイランド島に招待されたトレーナー達も自分達のポケモンを出して空や海を渡って行く。



ジュンサーは必死に止めるもみんなは聞かず風で帽子が飛んで行く……。

トレーナー達を見つめた”ボイジャーは諦めたように呟きながら：『彼らはポケモントレーナー：冒険者達』と呟き、言つて止めるようなら始めからここまでやって来ないと：：無事を祈りましょう：と悲哀そうな表情で呟く。

ジュンサーはそんなボイジャーを只静かに見つめているのだった。

しかし”ジュンサーや三人のトレーナー。他のトレーナー達：ボイジャーやジュンサーも気が着かなかつた。

ジュンサーや三人のトレーナーがポケモンセンターから出てニューアイランド島に向かつた後に：ピカチュウを連れたトレーナーの少年とトゲピーを連れた少女に青年の三人もポケモンセンターを出て港に行き：嵐を前にしながら自分達も何とか向かおうとするが自分達のポケモンでは海を超えられないためどうしようかと思つている時にバイキング時代の船乗りのような格好をした二人が来て三人は渡りに船とばかりに乗り込むが：嵐の前にそんな船でたどり着ける訳もなく大波に吞まれると彼らの変装がバレて：いつも”ピカチュウを狙っている悪者二人と一匹だとバレて戦闘になりかけるが：直後に大波が来て船が転覆……ピカチュウを連れたトレーナーと連れの二人は自分達の水ポケモンを出して：何とかニューアイランド島へと辿り着くのがつた。

そしてその後には：悪者二人と一匹も溺れてながらも何とか：マタドガスにしがみつ

き”ニューアイランド島へと辿り着いた。

港からニューアイランド島まではそう遠くなくパーティーが始まる時間より少し前にシユン達はニューアイランド島にそびえ立つポケモン城が目に見えるところまで来てしまい：そのため今はハクリューにゆつくりと飛んでもらっているうちにいつの間にか嵐もだいたい収まってきていた。

「思ったよりも早く見えて来ちゃったけど：まあいいか！それにしても風が気持ちいいね！ディアアンシー！ハクリュー！」

「そうですね。とても心地よい風ですわ♪」

「リユウ！」

シユンは飛んでいる自分達にふんわりと吹いている風を気持ちいいと言うと、ディアアンシーとハクリューも風が心地良いと吹く風を気持ち良さそうにリラックスする。

「それに辺りも静かで海も月の光で綺麗に輝いてるし：こうしていると何だか弾きたくなってくるね！」

シユンはそう言ってポケットからハーモニカを取り出す。そしてシユンはハーモニカを吹き出す。

フツルフルフ♪：フフフ~~~~♪：フフフ~~~~♪……

「マスターのハーモニカを聞いていると歌いたくなってきましたわ!:.:。」

ディアンシーはシュンのハーモニカで吹く曲を聞いて思わず歌いたくなってしまう静かな声でゆっくりと歌い出す。

「フツフフ・フフフ〜♪」

「リユリユリユ・リユウ〜♪」

「ミュミュミュ・・・ミュミュミュ〜♪」

ディアンシー達がシュンのハーモニカから吹かれる楽しい曲のリズムに合わせて歌い出すと・ディアンシー、ハクリューも楽しそうに歌う声にもう一つ楽しそうに歌う声が聞こえてくる。

「んっ?」

「はい?」

「リユウ?」

シュン達は一つ多い歌声が聞こえて来たことに驚いて歌声が聞こえた方を向くとシュンの膝の上にいるディアンシーの隣に白い姿をした小さいポケモンがシュンのハーモニカの曲を聞いて楽しそうに歌っていたのだ。

「えと?キミはポケモン?いつの間にかいたの?」

「ミュ?ミュミュ・・?」

シユンはいつの間にか自分の膝の上にいたポケモンにいつの間にか聞いたのかと聞くが、白いポケモンはシユンの問いに何が？と言った様子でそれよりさっきの楽しそうな曲は弾かないのかと言うように聞く。

「このポケモンはミュウですわね・世界で最も珍しいポケモンと言われていると言う話しを以前、メロエツタから聞いた事がありますわ！それであなたは一体なぜマスターの膝の上にいるのですか？」

「ディアンシーはシユンにこのポケモンは『ミュウ』と言う名前だと教え、世界で最も珍しいポケモンだと以前に”メロエツタから話しを聞いたと応える・そして”ミュウにどうしてシユンの膝の上について一緒に歌っているのかと聞く。

「ミュウ？ミュウミュウ！ミュウ!!」

ミュウは楽しそうに口を手を当てて笑いながら何かを言う。

「それより楽しいからもつと聞かせてほしいですつて？困りましたわ。わたくしのお話しをちゃんと聞いてもらえないと・」

「ディアンシーはミュウが言ったことに応えずに楽しいからともつと歌を聞かせてほしいと応え：それを聞いた”ディアンシーは困りましたわ：と呟き、ちゃんと自分の話しを聞くように”ミュウに注意する。

「それでミュウはどうしてぼくの膝の上にいるの？」

シユンは改めてミュウに何故自分の膝の上にいたのかを聞く。

「ミュウミュウ? ミュウミュウ!」

ミュウはシユンに聞かれると今度は手を振ってちゃんと応える。

「そう言う事でしたか……どうやら」 ミュウは空を自由に飛び回っているところにマスターとわたくし達の楽しそうな歌が聞こえてきて歌が聞こえてきた方に行くと、楽しそうにみんなで歌っているわたくし達を見て……ミュウも一緒に歌いたくなり思わずマスターの膝の上にテレポートで移動しわたくし達と一緒に楽しく歌ったそうですわ」

「ディアンシーがミュウの言ったことをシユンに説明する。

「そうだったんだ。だけど何でミュウはこんなところにいたんだろう? 世界に一匹何でしよ?」

シユンは世界で最も珍しいポケモンと言われているミュウがこんなところにいるのかと不思議そうに呟く。

「マスター……ミュウは確かに珍しいポケモンですが世界に一匹というわけではありませんわ」

ミュウが何故こんなところにいるんだと考えるシユンにディアンシーはミュウは世界に一匹しかいないわけではないと応える。

「えっ! そうなの!」

シユンはその事実には驚いて”ディアンシーに聞き返す。

「はい・ミュウが最も珍しいポケモンと言われているのは極端に目撃例が少ないからですわ。人間を寄せ付けない密林の奥深くにある遺跡にいたり、深海の海底にいたり人間が到底行くことの出来ない場所にいますわ。人間がいる場所に現れるのは極めて稀のため目撃例の少ないミュウは世界で一番珍しいポケモンと言われていると：以前”メロエツタから聞いた事がありますわ」

”ディアンシーがシユンにミュウが世界で一番珍しいポケモンと言われている理由を以前”メロエツタから聞いた話しをシユンに丁寧に説明していく。

「そうだったんだ……」

「ミュウ……ミュウミュウ！」

シユンは”ディアンシーの説明に納得しながら膝に座っているミュウを優しく撫でる：ミュウはシユンの撫でる手に気持ち良さそうにすり寄る。そして”ミュウと出会ってから少ししてニューアイランド島のポケモン城へと到着する。シユンは”ハクリューに風車がある塔の穴へと”ハクリューに下りるように頼む。

「ご苦労様。ハクリュー！えと：思ったよりも早く着いちゃったね」

シユンは”ハクリューをボールに戻すと、思っていたより早く着いてしまったと眩く。

「ええ・そうみたいですね。どうやらこのカードに書いてある時間よりも少し早く着いてしまったみたいですね」

「ディアンシーは」 シュンのリュックから招待状のカードを取り出して：カードを見ると：そこに記入されたパーティーの開始時刻より少々早く着いてしまったとシュンに言う。

「そうだね。嵐だったから」 ハクリューに急いでもらったけど：少し早く着き過ぎちゃったかな？ パーティーが始まるまで少し時間もあるし：ちよつと疲れたから時間まで少し休もうかな？ お昼に招待状を受け取ってからバタバタしていてあまり休めなかつたからなあ：フア〜ア〜：」

「シュンは嵐のため」 ハクリューに急いでもらったが：少し早く到着してしまつたため、パーティー開始まで少し時間があるので昼から色々と急いでいて疲れたので始まるまで少し体を休めようと：眠そうにあくびをしてけのびをしながらリュックから毛布と枕：そして目覚まし時計を出して寝転がる。

「フア〜：それじゃ僕は少し寝るからね：：おやすみ：」

「シュンは」 ディアンシー達にそう言つて毛布をかけて寝る体勢にはいり：目覚まし時計をセットしてゆつくりと眠る。

「わたくしも眠くなつて参りましたしおやすみさせていただきますわ：：」

「ディアンシーもシユンが寝るのを見て、自分も眠気が襲い：眠ろうと」シユンのリュックから自分のボールを取り出し：その時リュックから数個のボールが転がり出てしまう。

「ミュウ？ミュウミュウ！」

ミュウは「ディアンシーが持っているモンスターボールが何なのかと気になり興味深そうに見ている。」

「それじゃあわたくしもおやすみいたしますわ：それでは：ミュウ：お休みなさい。」  
ディアンシーはボールのスイッチを手で押してボールの中へと入る。

「ミュウ！ミュウミュウ！！」

ミュウはディアンシーがボールの中に吸い込まれたことに驚き、すごいと楽しそうに笑う。

「ミュウ…ミュウミュウ？」

ミュウは「ディアンシーがモンスターボールの中に入るのを見ると、面白そうにリュックから転がっているボールを手に持ち遊んでいる…：そしてミュウは面白そうに遊びながらスイッチを押した…。」

ピッピピッ！！！！ピッピピッ！！！！



パーティー開始よりも少し早く：ニューアイランド島へと到着した”シユンとデイアンシーはパーティーの開始時刻よりも少し早く到着した事もあり：風車のある塔のところで眠っていたが時間になり目覚ましが鳴り目を覚ます。

「ウ・ン・フワア〜よく寝たなあ!!ん〜」

シユン達が寝た時から数十分後：シユンは目を覚まし、両手を上に伸ばして起き上がる。

見ると辺りはすっかり真夜中になっており月明かりがさつきよりも輝いていた。そして時計を見ると：パーティー開始まで後少しの時間となっていた。

「：う〜ん・もう時間かあ・そろそろ始まるかな」

シユンは辺りが暗くなっている事に気づき、そろそろパーティーが始まるかなと思っていると、モンスターボールが開いて中から眠っていた”デイアンシーが出てくる。

「ンンウ・よく眠れましたわあ。おはようございますマスター」

デイアンシーがボールから出てきてよく眠れたと言ってシユンに目覚めの挨拶をする。

「おはよう”デイアンシー・：きて、起きたところでそろそろ始まる時間だし行くかうか。デイアンシーは一応バッグに入ってたね」

「はいー」

シユン達はそんな話しをした後に「ディアンシーを大きいバッグに入れて持つと：シユン達は奥にあった階段を降りて真ん中にある一番大きい城の入口へと向かう。

「そういうえばミュウがいらないね？」

シユンが階段を降りている途中で「ミュウがいなくなっていることに気づく。

「わたし達が寝ている間にどこかに行つたのでしょうか？ 気にせずに行きましょう」  
マスター」

ディアンシーは寝ている間にどこかに行つたのだらうと気にしないで行きましよう  
と言う。

シユン達が長い階段を降りると中央の塔の入口へと向かう：するとそこには……。

「よくおいでくださいました・招待状をお見せください」

手紙と一緒に入っていた招待状に映っていた人が手に灯りを持ち、シユン達がそこから来るのが分かつていたように入口の前に待機し招待状を見せてほしいと言う。シユンが招待状を出して見せると招待状から女性の姿のホログラムが映し出される。

「この方は確かにお招きした方です・」

招待状のホログラムの女性の姿が映り確かに招待者だと言う。

「確かに……さつ……こちらへどうぞ・他の招待客の皆様は既にお揃いです・」

そしてシユンを招待したトレーナーである事を確認すると、着いて来るように言って

シユン達を案内する。

シユン達は女性の後を着いて行くと階段を登り大きな扉の前へと来ると扉が開きシユン達は中へと入って行く。そこは広々とした大広間の部屋があり、そこに三人のトレーナーと思われる人達が座ってポケモンと一緒に待っていた。

「あちらにいらつしやるのが既にお着きのトレーナーの皆さんです。」

女性がそう言った方を見ると三人のトレーナーが大きい机に沢山並べられたイスの一つに座り、パーティーが開始されるのをポケモン達と一緒に待っていた。

「なるほど・僕が寝ている間に来た人たちか……」

シユンは自分が一眠りしている間にあの嵐を越えて来た人たちかと気づく。

「あなたは一番にここに着いていたようですね・あの激しい嵐にも関わらず：一番に：それも基準より早く到着したあなた達に：ご主人様は敬意を評しておられました：：」

女性はシユンがああ激しい嵐の中を最も早く到着し：しかも港からニューアイランド島まで基準よりも早く到着していた事に女性の主人が気づいており、シユン達に対して敬意を評していたおられていた：とシユンに告げる。

「いえ・そんなぼくは大した事は有りませんよ・早く到着出来たのも」ハクリューのおかげですし」

女性の主の”シユンへの誉め言葉に”シユンは自分は大した事ないと言って、早く到

着出来たのも”ハクリューのおかげだと言う。

「どうやら……また、もう一方の方達が来たようですのでわたしはお迎えに行きます：ですからあなた方はモンスターボールからポケモンを出してお待ちください：。あなたは選ばれたポケモントレーナーです：」

女性はまた招待客が来たことに気づき、迎えに行くからとシユンにモンスターボールからポケモンを出して座って待つように言う。女性はそう言つて扉から出て行つてたつた今、到着したという招待客を迎えに行つた：そして後ろの扉は閉まる。

シユンはここにも仕方ないと机に向かい端にあるイスに座る。三人のトレーナー達はポケモンを出している：シユンはリュックから4つのボールを取り出しポケモンを出そうとした時!!

「やあ!キミもあの嵐を越えてきたのかい?僕は空を飛んで来たんだ」

赤い服を来たトレーナーがピジョットを撫でながらシユンに声をかける。

「はい・ぼくも空を飛んでここに来ました」

シユンは赤い服の男性の問いに自分も空を飛んでここに来たと言う。

「やつぱりね!港でキミが”ハクリューを出して飛んでいくのを見たよ。それにあの嵐の中をぐんぐん進んでいたし：キミ達が一番に着いてたんだろう?どうしてこんなに遅くにここに来たんだい?」

赤い服の青年はシユンが「ハクリューを出してニューアイランド島に向かい飛ぶのを港で目にしており、嵐の中もぐんぐんと早く飛んでいたのを見て一番に到着していたんだろうと聞き、どうしてこんなに遅くにここに来たのかとシユンに訪ねる。

「少し早く到着したからね……お昼からバタバタとして少し疲れていたからパーティーが始まるまで端にある風車の中で寝て待つてたんだ……」

シユンは少し早く到着してしまつたから……疲れていた事もありパーティーが始まる時間まで少し眠つて待つていたのだと一番にニューアイランド島に到着したのになぜ？ここに來るのが遅くなつたのか理由を話す。

「眠つて待つていた!!……ハハッ！キミは面白いな。ところでキミはポケモンを出さないのかい？出して待つているように言われたはずだけど……」

赤い服の青年はシユンの突拍子な行動を面白がり、シユンにポケモンを出さないのかと訪ね、ポケモンを出して待つているように言われたはずだけど……と話す。

「今から出すところですよ……出てきて」みんな!!」

「デイン！」

「パール！」

「リリン！」

「レブウ〜！」

「リユウ！」

そう言つてシユンは五つのボールを投げて自分のポケモンを出す：シユンは最初、ハクリューを出すつもりは無かつたが見られてしまつては仕方がないと諦めて”ハクリューもボールから出す。

「これがキミのポケモン達か：すごいなどれも良く育てられてるじゃないか！」

赤い服の青年は”シユンが出したポケモン達を見てどれも良く育てられているじゃないかと感心する。

「それにさつきも港で見たけど：これが”ハクリューか：すごいな！本物を見るのはこれが始めてだよ！」

赤い服の青年はシユンのポケモンを見回した後に最後にハクリューを目にして『すごいな』と”ハクリューを賞賛した後に『ポケモンずかん』等でしか見たことのない伝説のポケモンと言われている”ハクリューを直にこの目で見れた事を感動する：：赤い服の青年がこう思うのも無理はなかつた：他の地方とは違い現在カントー地方では”ハクリューや”ミニリユウは極端に目撃例が少なく：最後の目撃例もサファリゾーンとなつている。

実際に、他の二人も新たに来たシユンがどんなポケモンを出すのか気になつてきたのか：シユンがポケモンを出そうとした時に視線をこちらに向けてボールから出てきた

シユンのポケモンを見る：そして出てきたシユンのポケモン達を見てその育て具合に感心した後にはクリューの姿を見て驚愕を露わにしていた。

「今度はぼくのポケモン達を紹介する番だね！みんな！ご挨拶だ！」

「ピジヨットオ!!」

「バナア!!」

「サンドパ!!」

「サイヤツ!!」

「ストライ!!」

「ホッソ!!」

赤い服の青年は今度は自分の番だと言って自分のポケモン達を紹介し：ポケモン達に挨拶するように言うと：青年の手持ちポケモンの”ピジヨット・フシギバナ・サンドパン・サワムラー・ストライク・サイホーンが”シユンに挨拶する。

「おまえのパールシエン!!中々良い”みずポケモンだな!”

シユンが赤い服の青年のポケモン達を見てみると：シユン達よりも向こうに座っていた青色のベストの少年が”シユンのパールシエンを中々良い”みずポケモンだと誉める。

「どうも・あなたの手持ちは」みずタイプのポケモンが多いんですね」  
「おうよ！俺の自慢のポケモンだけ!!」

プールで泳ぐ青色のベストの少年のポケモン達を見て：シユンはみずタイプのポケモンが多いのだと聞くと、青色のベストの少年は自慢のポケモン達だと笑顔で言う。

シユンはプールで泳いでいる青色のベストの少年のポケモン達を見る：「ギャラドスに」ドククラゲ・ゴルダツクに」シャワーズ・シードラ：そして何故か」みずタイプの中に混じってニドクインがいる事にシユンは疑問に思いつつも余計な事だと思わないようにする。

「あのギャラドスで海を渡って来たんですか？」

「そうだ！あいつに乗って海を乗り切った！あの程度の波：俺のギャラドスには何て事ないぜ！」

シユンがあの”ギャラドスで海を渡って来たのか聞くと、青色ベストの少年はそうだ！と言って：あの程度の波は自分の”ギャラドスには何て事ないと自信満々に応える。

「なるほど：あの嵐で荒れ狂う海を渡って来たんですか：すごいですね」

「おまえこそその”ハクリューであの嵐を超えて来たんだろう？俺も”ハクリューを直に見たのはこれが始めてだぜ！」

シユンはあの嵐で荒れ狂う海を渡って来た”ギャラドスを凄いと誉めると：青色ベ



ストの少年もシユンの”ハクリューを見て、その”ハクリューで嵐を超えて来たんだらう？と聞きその後直で”ハクリューを見たのはこれが始めてだと驚いたように呟く。「それに聞いたぜ。おまえ その”ハクリューで一番にここに着いてたんだらう！おまえこそすげえじゃねえか!!」

そしてその後”シユンと赤い服の青年の会話を聞いていたのか：ハクリューで一番にここに着いていた事を凄いなと誉める。

「今度はわたしがポケモン達を紹介する番ね！」

すると：シユンと青色ベストの服の少年の会話が終わったのを見計らって、今度はわたしが自分のポケモン達を紹介する番ね！と青色ベストの少年の向かいの席に座っている：紺と白色の服を着た少女が話し始める。

「わたしのポケモンはこの子と：あのコ達よ！」

紺と白色の服の少女は：撫でてゐる”プクリンと、向かいにあるもう一つのプールの方に集まっているポケモン達の方に手を向ける。

そこには：少女が撫でる”プクリンの他にプールの方に集まっている……ジユゴン・キユウコン・ギャロップ・ラフレシア・カメックス：をシユン達に紹介する。

「どうも、今度はぼく達の番ですね。これがぼくのポケモン達です：みんな挨拶して！」  
「デイン！」

「パール！」

「リリン！」

「レブウ〜！」

「リュウ！」

紺と白色の服の少女からポケモン達を紹介されると：シユンも自分の番だと言つて、自分のポケモンの”フーデイン達を紹介する：そして”フーデイン達も言われて挨拶していく。

「へえ〜 あなたのポケモン達…どの子もステキね！」

紺と白色の少女は”シユンのポケモン達を見渡してどのポケモンもステキだと誉める。

「特にその”ハクリューが綺麗でステキよ。わたし”ハクリューって始めて見るの！」

その後特に”ハクリューが綺麗でステキ!!と誉めて、少女はハクリューを直に見るのは初めてらしく”ハクリューの綺麗さに見とれて、うっとりしている。

「はあ…ありがとうございます…」

「ところであなたに聞きたいんだけど…そのポケモンってなに？」

シユンは紺と白の服の少女のテンションに呆気にとられ戸惑いつつも自分のポケモンを褒めてくれた御礼を言う…するとその後少女は恐る恐る”シユンのポケモン

達の中の”ポリゴンを指さして何かと訪ねる。

「えっ？このポケモンは”ポリゴンって言います：ポケモンずかんで調べてもらえば詳しい事が分かると思いますよ」

少女にそう聞かれると”シユンはこのポケモンは”ポリゴンだと応えて：ポケモンずかんで調べれば詳しい事が載っていると教えると女性はポケモンずかんを出して”ポリゴンのデータを調べる。

そうしてシユンは嵐を自分のポケモンで超えてきた三人のトレーナー達と話している：

入口の扉が開いて：先程シユンをここへ案内した女性が新たにこの島に到着した三人のトレーナー達を連れて戻って来る。

新たに来た三人にも先程の説明をしているのだろう：ここからでは遠くてよく見えないが真ん中にいるピカチュウを連れた帽子を被ったトレーナーには何となく見覚えがあるような気がする：説明が終わったのか：その女性と一緒に三人はポケモンを出して歩いてくる。

段々と：こちらに近づいて来ることによってその姿がはつきりとしてくる：そして三人の内の帽子を被ったピカチュウを連れたトレーナーがシユンの方を見ると驚いた

様子でこちらに向かって走って来る：シユンも自分に向かって来る少年が誰なのか気づいて驚く。

そしてお互いの顔がはつきりと見える距離まで来ると二人同時に名前を言う。

「シユン!!」

「サトシ!!」

それは同じカントーのマサラタウン出身で幼なじみにして、あの同じ日にオーキド博士から始めてのポケモンを貰いマサラタウンを旅立ったシユンとサトシの久しぶりの幼なじみ同士の再会である。

「久しぶりだなシユン！何もなしにあの日：マサラタウンを旅立ったってシゲルから聞いたからどうしてるのかなと思ってたんだ。オーキド博士から聞いた話じゃ、しばらくポケモンを充分に育てることに集中したいからって聞いてたけど：こんなところで会うなんてな」

サトシは同じ『マサラタウン』出身で小さい頃から仲の良い幼なじみである”シユンに久しぶりに会えた事に喜ぶ。

「ぼくもこんなところでサトシに会えるなんて驚いたよ！そう言えばサトシ：：オーキド博士から遅刻して一番最後に来たって聞いたけど：：ちゃんとオーキド博士から始めてのポケモンは貰えたのかい？」

シユンもサトシにこんなところで再会したことに驚いた後に、オーキド博士からサトシが始めてのポケモンを貰い旅に出る最初の日に遅刻したという話しを聞いて：オーキド博士からちゃんと始めてのポケモンを貰えたのか聞く。

「ああ：寝坊しちゃったけど！オーキド博士からちゃんとポケモンはもらったぜ！来い、ピカチュウ!!」

「ピッカ!!」

サトシは寝坊したけどオーキド博士からちゃんとポケモンが貰えたと言ってピカチュウを呼ぶ。すると”サトシの後ろを歩いていたピカチュウが走って来てのサトシの体を上がり肩に乗った。

「オレがオーキド博士から最初に貰ったポケモンがこのピカチュウなんだ!!俺の一番の相棒なんだぜ」

「ピカピー!」

サトシはこの”ピカチュウをオーキド博士から貰ったとポケモンだとシユンに教え、自分の一番の相棒だと話す。

「なるほど、ピカチュウか!可愛いね!」

シユンはそう言つて微笑み、ピカチュウの頭を優しく撫でる。

「チャ〜〜♪」

ピカチュウは気持ち良さそうにシユンの手にスリより撫でられている。

シユンとサトシが久しぶりの再会を喜び合い話しをしていると……。

「ちよつとサトシ!!二人で楽しそうに話してないでわたし達にも紹介してよ!」

すると・サトシと一緒に来ていた同い年ぐらいの女の子がシユンと話しているサトシに”シユンの事を紹介するように言う。

「ああそうだった!紹介するよ。こいつは”シユン……シゲルと同じでおれの幼なじみで、小さい時によく一緒に遊んだんだ!」

サトシはシユンの事を一緒に来ている少女と青年の二人に自分の幼なじみ”シゲルと同じで小さい頃からよく一緒に遊んでいた幼なじみだと説明する。

「わたしはカスミよ!よろしく」

「おれはタケシ!よろしくな」

二人もシユンに自分の名前を言つて自己紹介する。

「ぼくはシユン。こちらこそよろしく……」

シユンとサトシ達がお互いについて自己紹介をしていると……。

「あなたがマスターの言つていた幼なじみの方ですか?」

シユンの持つバッグから”ディアンシーが顔を出して、マスターである”シユンの幼なじみのサトシ達を見る。

「なっ!!」

サトシ達は突然! シュンのバッグから顔を出して現れたポケモンらしき存在に驚く。

「ああ・紹介するよサトシ、二人とも。この子は、ディアンシーって言うんだ」

「ディアンシーと申します。よろしく、お願いいたしますわ!」

シュンはサトシ達にディアンシーの事を紹介し、紹介された“ディアンシーはぺこりと頭を下げて丁寧”にサトシ達に挨拶する。

「わあ! 可愛い〜!!」

「初めて見るポケモンだな・」

カスミは“ディアンシーを見て可愛いと叫び、タケシは初めて見たポケモンだからか興味深そうに”ディアンシーを見つめる。

「ディアンシーか・:」

サトシはポケモンずかんをポケットから出すと“ディアンシーに向ける。

【データなし・:この世界にはまだ知られざるポケモンが多い・:】

ポケモンずかんからは“ディアンシーについての情報は出ず、データなしと表示される。

「あれ? データなしだって、どういうことだ?」

サトシはポケモンずかんでデータが出ないことに不思議そうにする。

「えっ！本当！」

「ポケモンずかんにデータがないなんて新種のポケモンなのか？」

ポケモンずかんにデータが出ないことにカスミとタケシも驚く。

「まあ、そんなことは良いじゃないか」サトシ！それよりぼくの他の仲間を紹介するよ  
・これがぼくのポケモン達だよ！」

「ディーン！」

「パル！」

「リリン！」

「レブウ！」

「リュウ！」

シユンは、ディアンシーの事を何とか誤魔化して自分のポケモン達をサトシ達に紹介し、フリーディン達も挨拶する。

「これがシユンのポケモン達か：みんな凄い強そうだな！」

「いやあん！あのパルシエン凄いツヤが綺麗!!」

「どのポケモンも良く育てられている：それにまさか珍しいポケモンの”ポリゴンやエレブー：そして伝説のポケモンの”ハクリューまでいるとは：驚いたな：」

サトシは、シユンのポケモン達を見回して：みんな凄い強そうだとテンションが上



がり、みずタイプポケモンが大好きなカスミはシユンの”パルシエンの体のツヤの綺麗さに目を輝かせ、タケシはどのポケモンも良く育てられていると感心し、さらに珍しいポケモンであるポリゴンやエレブー：そしてカントーでは伝説のポケモン扱いの”ハクリューを持っている事に驚いている。

「ありがとう！サトシはピカチュウの他にどんなポケモンを持つてるの？」

「ああ、オレの他のポケモン達はこのフシギダネとゼニガメだ！」

「ダネダネ!!」

「ゼニ!!」

シユンはお礼を言った後に、サトシに他にどんなポケモンを持っているのかと聞くとサトシはシユンに自分の後ろにいる”フシギダネと”ゼニガメの事を紹介する。

「わたしのポケモンはこのトゲピーとコダックよ」

「おれのポケモンはこのロコンだ」

サトシが紹介した後にカスミとタケシも自分達のポケモンを紹介する。

シユンとサトシはそんな会話をした後シユンはサトシに開始までまだ時間も有る事から：他の三人のトレーナー達のポケモンも見てくるように勧め、サトシ達はシユンの言うとおりにトレーナー達のポケモンを見ていく。

そして先程シユンに話しかけてきた赤い服の青年、青色の袖無しベストの少年。そして髪が左右にピンとなっていて緋と白色の混じった服を着る少女が互いのポケモンのことについて紹介しあっていると……。

すると広場の明かりが消えて暗くなり螺旋状の階段の上から中央に青白い光が下りてくる。

「皆様……お待たせ致しました。最強のポケモントレーナーであるご主人様がおいでになります」

そして女性が振り向いて：シユン達に最強のポケモントレーナーがおいでになると知らせ、螺旋状の階段から真ん中を通り：ゆっくりとシユン達の前に降りてくる。ポケモン達はその只ならぬ気配に警戒したり怯えたりと言う反応を見せる。

「あれって？ポケモン！」

最強のポケモントレーナーがお出でになると言っていたのに現れたのが正体不明のポケモンらしき姿をした存在が現れた事に驚きの声上がる。

「そう……この御方は最強のポケモントレーナーであり最強のポケモンでも有らせられるミュウツー様です」

女性はそう言つてシユン達の前に現れた存在の説明をする。

「ポケモンがポケモントレーナー！バカな!!」

青い袖無しのレストランを着た少年がポケモンであるミュウツウがポケモントレーナーだと聞いて、そんな馬鹿な！と言ってその事を否定する。

「いけないか？：わたしのルールはわたしが決める……!!」

女性とミュウツウが同時に喋りだし、シユン達は驚く。

「テレパシーですわ!!ある程度の力のあるポケモン達は使う事が出来るとメロエツタから聞いた事がありますわ」

デイアンシーがテレパシーで伝えている事をシユンに教える、伝説と呼ばれるポケモン達ならば割りと使うことの出来ると言う話しを”メロエツタから聞いた事を伝える。

サトシ達が”ミュウツウがテレパシーを使ったことに驚いていると：ミュウツウは片手を上げる。すると、青いシャツの少年を青白い光が包み：少年は苦しげな声を上げながら浮かび上がり：そしてミュウツウは愉快そうに笑みを浮かべて：片手を動かすと青色のシャツの少年は自分のポケモン達のいるプールまで吹っ飛ぶ。

そして水から急いで上がると少年は怒り、ギャラドズに『はかいこうせん』を撃つように指示、ギャラドズはプールから出ると”ミュウツウに”はかいこうせんを放つ。しかし、ミュウツウが片手を上げると”はかいこうせんが跳ね返りギャラドズを吹っ飛ばす。トレーナーは跳ね返った”はかいこうせんに撃たれて傷ついたギャラドズに駆け寄る。

「サイコキネシスですわね。メロエツタが良く使っていますわ！かなり強いポケモンのようですよ！」

「ディアンシーは”ミュウツーがどうやって”はかいこうせん”跳ね返したのかを説明し：ミュウツーがかなり強いポケモンである事をシユンに伝える。

「たわいもない：：お前にもう用はない！」

「ミュウツーは呆気なく”ギャラドスがやられた事にたわいもないと：つまらなそうに呟いた後に片手を振ると女性の目の色が変わり、倒れそうになるのをタケシが受け止める。」

「女性が目を覚ますと帽子が取れてタケシはその女性が行方不明の”ジョーイである事に気づき、目が覚めたジョーイは自分がなぜ？こんなところにいるのかと考えていると：ミュウツーが自分の世話をさせるためにポケモンセンターから連れてきた事を説明する。」

「ポケモンの体について詳しい医者には便利だと言って、随分と役にたったと：ジョーイ自身は何も覚えてはいないだろうがなと：そして人間など自分の力をもってすればどうにでも操れると嘲笑う。」

「酷いことを！」

「ピカアー！」

ミュウツウの酷い発言にサトシやカスミ：ピカチュウも怒りの感情を抱く。

その頃：：ニユーアイランド城の通路を歩いている：三人の人影があった。

彼らは『ロケット団』のムサシ コジロウ そして人間の言葉を話す”ニャースの三人組でサトシのピカチュウを狙っている悪い奴らである：彼らも大波で船から投げ出された後、マタドガスに掴まって何とかたどり着き下水道から中に入ったのだった：：そして三人は通路を歩いて行くとある部屋の扉が開いて三人は中へと入る。

そこは異様な外観をした部屋だった：何だか分からない機械に水槽の中に浸かり眠っているリザードン・カメックス・フシギバナの三体を見て、三人は何だこの部屋？ と思いつつもその部屋を物色して歩き回る。

すると：ムサシがある機械のスイッチの上へと座り機械が作動すると電源が入りモーターが着いて：この機械について説明していく。

この機械はポケモンのコピーを作る機械である：と所々ノイズが走りながら音声が続く。

黙って説明を聞いていると：三人の後ろから機械のアームが伸びてニャースを掴むとベルトコンベアへと乗せる：するとコンベアが動き出し”ニャースを機械の方へと動かす：何とか二人が助けるが尻尾の毛が数本抜かれてしまった。

さらに機械についての説明が続き：元のポケモンの成分があればコピーを作れると：説明しモニターに三本の毛とニヤースのシルエットが移り：その瞬間、水槽と繋がる上の部分からニヤースのコピーが下りてくる。

そしてさらに説明が続いていく：その機械を使い：ジャングルの奥地で発見された伝説のポケモン“ミュウの化石化したまっげを見つけ：持ち帰りこの機械で”ミュウツウを作り出した：自分達の夢：最強のポケモンを作るといふ夢が叶ったと喜んで：だが：ミュウツウは計り知れない凶暴性を発揮：研究所が破壊されてしまう：と最後の手段でこの研究所を捨てて逃げるしかないと：：言ったところでモニターから映像が消えた。

ロケット団の三人は何が何だか？理解出来ずに頭を悩ませるのだった。

「わたしは一度は人間と一緒にやろうと思った：：だが：わたしは失望した：人間はポケモンにも劣る最低の生き物だ：人間のように弱くて酷い生き物が支配してはこの星は：駄目になる：」

そして場面は戻り：ミュウツウは一度は人間と共に歩もうとした事を告げる：：しかし、人間のあまりの愚かさに失望したと言って、このままではこの星は駄目になってしまうと言う。

「じゃあ…お前のような…！ポケモンがこの星を支配するって言うのか？」

ミュウツウの発言にタケシは、それじゃあお前のようなポケモンがこの星を支配するのかと訪ねる。するとミュウツウは顔を左右に揺らし…。

「ポケモンも駄目だ…なぜなら…この星は人間に支配されてしまった…人間のために生きているポケモンさえいる…」

ミュウツウはこの星は人間に支配されてしまったために人間のために生きているポケモンが多くなってしまったと話し、ポケモンも駄目だと言う。するとミュウツウの発言にサトシの肩からピカチュウが下りてミュウツウに言う。

「ピカ！ピカピカ！」

「何だと…：良いなりになんてなっていない…好きでそのトレーナーと一緒にいる…：…」

「ピカ！」

ピカチュウはミュウツウに好きでサトシと一緒にいるんだと言う。

「一緒にいること自体が間違っている…！！」

ミュウツウはピカチュウの発言に対して一緒にいること自体間違っているとやって先ほどのようにピカチュウをサイコキネシスで吹っ飛ばす。

「ピカ！ピカ…」

「くっ!」

吹っ飛ばされるピカチュウにサトシは飛びついてピカチュウを受け止める。

「チャ〜・ピカピー!」

「ピカチュウ!」

ピカチュウはサトシのことを心配し、サトシもピカチュウに大丈夫と言ったような笑顔を向ける。

「・弱いポケモンは人にすり寄る・」

ミュウツウはそう言ってサトシ達を嘲笑い、カスミやサトシのポケモン達はサトシを心配して駆け寄る：サトシは大丈夫だと言って、ピカチュウを吹っ飛ばしたミュウツウに怒りの表情を向ける。

「どんなポケモンだって!ポケモンならゲット出来ないはずはない!いけ!ぼくのサイホーン!」

「グオオ〜!!」

赤色の服を着たトレーナーがポケモンならゲット出来ないはずはないと言ってサイホーンに行くように指示する。

サイホーンはうなり声を上げてミュウツウに突っ込む。しかし、ミュウツウは難なくエスパーの力で軽々とサイホーンを受け止める。サイホーンはジタバタともがくが空



中で動けずにいた。

「はあ…あ…あ…」

赤色の服のトレーナーは自分のポケモンの攻撃が簡単に止められたことに呆然とする。そしてミュウツウが手を前に押し出すとサイホーンをテーブルの上を滑りながら吹き飛ばす。

「サイホーン!!」

赤色の服のトレーナーは吹っ飛ばされた”サイホーンに駆け寄る。

「なかなか…強いサイコキネシスみたいだけど…でも前に見た事のある”メロエッタの”サイコキネシスの方が威力が強かったし…」

シユンは”ミュウツウが”サイコキネシス”で”サイホーンを吹っ飛ばしたのを見て：中々強いサイコキネシスだと驚いた後に…：前に見た事のある”メロエッタの”サイコキネシスの方が威力が強かったと思っっていると…。

「…聞き捨てならんな…」

シユンのその発言が聞こえたのか”ミュウツウが反応し”シユンに向かって手を向ける。

「キサマがだれの事を言っているのかは知らんが!：ならば今度はお前が受けてみるがいい…」

ミュウツ―は自分の力よりもシユンが言った存在の方が強いという発言に怒りの表情を向けて、先程のようにシユンをサイコキネシスで吹っ飛ばそうとする。

しかし……バシユン!!

「なんだと……!!」

シユンを吹っ飛ばそうとしたミュウツ―のサイコキネシスが弾かれてしまい：ミュウツ―は驚く。

「これって！ いったい……どうしたんだろう？」

シユンは自分の体を見回して：ミュウツ―のサイコキネシスが弾かれた事を不思議そうにしていると……。

「マスター……これは」 メロエツタのおかげですわ。メロエツタが出かける前に念のためにと：マスターにエスパーのバリアをはっていたのですわ！ そのバリアが”サイコキネシスを弾いたのですわ!!」

ディアンシーがシユンに説明する：メロエツタが出かける前に嫌な予感もしていた事もあり：念のためにとシユンの体を守るように……エスパーのバリアをはって、そのバリアがミュウツ―のサイコキネシスを弾いたのでだと教える。

「そうだったんだ。メロエツタには後でお礼を言わないと……」

シユンはディアンシーから説明を聞くと納得し、後でメロエツタにお礼を言わないと

いけないなと思っていると……。

「馬鹿な!!わたしの力が撃ち負けるなど……あるはずがない!」

ミュウツウは自分の技が力負けしたことに信じられずに驚きの表情になり：サトシや他のトレーナーの人達もシユンが：ミュウツウの”サイコキネシスを弾いたのを見て、驚きの表情を浮かべている。

「驚いているところ悪いけど……ミュウツウって言ったね?：キミがその気ならばくも攻撃させてもらうよ! フーデイン! サイコキネシスだ!!」

「フーデイン!!」

ミュウツウが驚いているのにも構わず”シユンは：ミュウツウが自分達を害する気なら自分も攻撃させてもらうと、フーデインに”サイコキネシス”を指示し、フーデインは両手のスプーンを向けてミュウツウに”サイコキネシスを放つ。

「クツ!!」

フーデインの”サイコキネシスが”ミュウツウのはる念のバリアへと命中するが：その威力に少々顔をキツくさせてその場から後退する。

「凄い!：何てパワーの”サイコキネシスなんだ!」

「こんな強いフーデイン：初めて見た!」

タケシはフーデインのサイコキネシスのパワーに感心し、赤い服のトレーナーはこん

な強いフリーデインは始めて見たと驚く。

「確かに……中々強い力だが……無駄だ!!」

ミュウツーは二人が言うとおり確かに……フリーデインの力を中々強いと認めつつも……無駄だ!と言って力を入れて一気に押し返す。

「フ~~~~!!!」

「フ~~~~フリーデイン!!」

フ~~~~フリーデインは、ミュウツーの力に負けて吹っ飛ぶ。

「レブウ!!」

「デイン!!」

しかし……エレブーが吹っ飛んできた。フリーデインを受け止める。

「ありがとうエレブー、フリーデインを受け止めてくれて!」

「デイン!!」

「レブウ!!」

シユンは「フリーデインを受け止めてくれた」エレブーにお礼を言い、フリーデインもお礼を言つてエレブーも頷く。

「無駄だ!……確かにおまえのポケモンは強い……だが、わたしには適わない。わたしは

この星の如何なるポケモンよりも強く生まれてきたのだ…!!」

ミュウツウはシユンのポケモン達の強さを認めつつも……自分には適わないと宣言した後には自分はこの星に存在する如何なるポケモン達よりも強く生まれて来たのだと豪語する。

「そんなことやって見なきゃわかんないだろう!!」

ミュウツウの自分が一番強いと言う発言にミュウツウとシユン達のやり取りを黙って見ていた”サトシがやってみなければ分からないだろうと否定の言葉をあげる。

「やってみるか?」

ミュウツウのその言葉にサトシは望むところだと応えると、それを聞いた”ミュウツウが目を光らせる。

すると、研究所の方で機械に繋がる水槽の中にいる…フシギバナ、リザードン、カメツクスの三体が目覚めて水槽から出ると…歩き始めて研究所から出て行く。

そしてしばらくすると床に穴が空き、そこからポケモントレーナーが最初にもらうヒトカゲ・ゼニガメ・フシギダネの最終進化系である三体が現れる。ミュウツウはその三体を自分が作ったコピーである事を告げる。

その事実そこにいる者達は驚く。そして突然、聞こえて来た騒音にシユン達とポケ

モン達が驚いて辺りを見回す：すると目の前のガラス張りが開きライトが点灯するとステージが現れる。

「競技場！ポケモンバトルをしようと言うのか!!」

タケシはステージが現れたことに驚き、ポケモンバトルをしようと言うのかと困惑気味に呟く。

「ぼくにはフシギバナのバーナードがいる!」

「バア〜ナ〜!」

赤い服のトレーナーは自分には「フシギバナがいると応える。

「わたしにはカメックスのクスクスがいるわ!」

「ガメ〜!」

紺と白の服の女のトレーナーは自分にはカメックスがいると応える。

「俺だつてリザードンがいる!リザードン：キミに決めた!」

サトシは自分には「リザードンがいると言ってボールを投げるとそこからリザードンが出てくる。

「ボホオ!ブオウ〜!」

リザードンはボールから出てきてやる気のなさそうに火を吹く：そして「ミュウツウの只ならぬ気配を感じて」ミュウツウに向かっていきなり「かえんほうしゃ」を

繰り出す。サトシはいきなり“リザードンが“かえんほうしや”を撃つたことに驚く。しかし、ミュウツアはなんなく片手を上げて“かえんほうしやを打ち消した。

「随分・しつけの悪いリザードンだな・」

ミュウツアは攻撃を防いだ後で随分と躑の悪い“リザードンだな・と呆れた声で呟く。

リザードンは自分の攻撃が簡単に防がれた事にイラつき、サトシはその言葉を聞いて、ミュウツアを睨みつける。

「へえ・・・サトシは“リザードンも持ってたんだけ”」

シユンはサトシが“リザードンを持っていた事に驚いていると・・・。

「マスターもリザードンがいますのになぜ・出さないんですの？」

「ディアンシーは、シユンもリザードンを持っているのに何でボールから出さないのかと訪ねる。」

「まあ少し様子を見ようよ・・・せつかく“サトシがやる気全開でバトルをしようとするのに・邪魔はしたくないしね・・・。それにあの“リザードンで“サトシはどんな風にバトルをするのか見てみたいしね！」

シユンは“ディアンシーにそう聞かれると・少し様子を見ようと応えて、せつかく”

サトシがやる気全開でバトルを始めようとしているのに邪魔したくないからと・それ

とあの”リザードンで”サトシがどんな風にバトルをするのか見てみたいからだと言  
す。

「…お前達の相手は後回しだ…：まずは奴らから相手をしてやる…最初の相手は誰かな  
？」

ミュウツーは”シユンと”デイアンシーを睨み…シユンと相手するのは後回しだと  
言つて、まずはサトシ達の相手をする事にして…最初の相手はだれかな？と余裕そうな  
感じで呟く。

「バア〜ナ〜！」

「さっきは油断したけど今度はそうは行かないぞ!!」

すると”フシギバナがフィールドの中へと進み、赤い服のトレーナーがさっきは油断  
したが今度はそうは行かない!と気合い充分で挑む。ミュウツーが顔を前に動かすと  
コピーのフシギバナもフィールドへと進む。そして試合が始まる。

赤い服のトレーナーは”フシギバナに”はっぱカッターを指示し、フシギバナはコ  
ピーのフシギバナに”はっぱカッターが迫る。ミュウツーは”つるのムチをコピーの  
フシギバナに指示し、つるのムチで”はっぱカッターを全て弾き落とす。そして”フシ



ギバナを” つるのムチで掴んで遠くまで投げ飛ばし強く地面に叩きつけられた” フシギバナは戦闘不能になる。

赤い服のトレーナーは投げ飛ばされたフシギバナのもとに駆け寄る。

次は紺と白の服の女のトレーナーが” カメックスに行くように指示すると” カメックスがフィールドへと走っていく。ミュウツウもコピーのカメックスをフィールドへと向かわせる。紺と白の服の女のトレーナーが” カメックスにハイドロポンプを指示し、コピーのカメックスに放つもコピーのカメックスは ” ふうそくスピン ” で ” ハイドロポンプを弾きながら進み、カメックスをそのまま吹っ飛ばしカメックスは壁に叩きつけられて一撃で戦闘不能になり：紺と白の服の女トレーナーは慌てて駆け寄って行く。

「あの：コピーのフシギバナとカメックス強いね：：あの人達のポケモンもレベル的にも弱くないはずなのに：：相手よりも弱い技で強い技を相殺して：：しかも一撃で戦闘不能にするなんて：：」

「ええ：すごい強さですわ！それに” ミュウツウも的確で冷静な指示：最強のトレーナーを自称するだけありますわ！」

「うん：そうだね。さて：：サトシは” リザードンであの強いコピーのポケモン達とどう戦うのかな？：：」

シユンと”ディアンシーはトレーナー達と”ミュウツウのポケモンとのバトルを観戦して：ミュウツウが作ったというコピーのポケモン達の強さ：あの二人の”フシギバナや”カメックスもレベル的には弱くないはずなのに『コピー』の二体は相手の技をそれより弱い技で防ぎ一撃で戦闘不能にしたことに驚いている。

そしてシユンの話しを聞いていた”ディアンシーは”ミュウツウの的確で冷静な指示に最強のトレーナーを自称する事だけはあると呟く。そして”シユンは領いた後に”サトシと”リザードンはあの強いコピーのポケモン相手にどう戦うのかと：興味深そうにサトシ達のバトルを見つめる。

そして最後に：サトシとリザードン達とのバトルが始まる：。

サトシは”リザードンにパワーではなくスピードで勝負するように指示するも：リザードンはサトシの指示を全く聞かずに飛び上がり：かえんほうしゃを連続で放つも相手のスピードが速すぎるため悉く交わされ攻撃を受けてしまう：。そしてコピーのリザードンの素早い動きにサトシの”リザードンは全然着いていけずに攻撃を受けていく。

そして空高く上空へと上がっていき：コピーのリザードンがサトシのリザードンを羽交い締めにし急降下してくる。ミュウツウはコピーのリザードンに”ちきゆうなげ

を指示しサトシのリザードンを地面へと叩きつける。

サトシの”リザードンは一度立ち上がるがそのダメージで体を地面へと横たえる。サトシは倒れたりリザードンの元に向かい大丈夫かと駆け寄る。

「スピードもパワーも不足している……さて：次はキサマの番だ……」

ミュウツウがサトシのリザードンをスピードとパワーも不足していると嘲笑った後：「……どうということかな？：次はぼくの番だ」と告げる。

「……どうということかな？：次はぼくの番だ？」

シユンは何のことを言われているのか理解出来ずにどうということかな？と”ミュウツウに訪ねる。

「フツ……とぼけるつもりか……わたしの目を欺けると……思うな……!!」

ミュウツウは小さく笑みを浮かべた後に自分を欺けると思うなと怒りの声で呟く……：ミュウツウの発言を周りで聞いていたサトシ達は”ミュウツウがシユンに何を言っているのか分からず困惑している。

「……おまえのボールの中に……まだ一体いる事は分かっている……そのポケモンが何なのか……もな……さあ出せ！そしてわたしと勝負だ……!!」

ミュウツウはシユンがまだ持つボールの中にポケモンがいる事は分かっていると……そのポケモンが何なのかも分かっていると応え……出して自分と勝負するように言う。

「……はあ……仕方ないか……出てきて！」

「グオウ〜!!」

シユンはミュウツウの目を見て：何を言っても無駄だと思い：最後のモンスターボールからリザードンを出す……リザードンはボールから出てくると勢いよく雄叫びを上げる。

「リザードン!!シユンも」リザードンを持つてたのか!!」

「しかもサトシのリザードンよりもだいたい大きいわ!!」

「ああ……見たただけでもよくそだてられている事が分かる……」

シユンが「リザードンを出したのを見てサトシはシユンも」リザードンを持つていた事に驚き、カスミはシユンのリザードンがサトシのリザードンよりもだいたい大きいと言い、タケシは見たただけでもよく育てられている事が分かると呟く。

「リザードンって事は……シユンがオーキド博士から最初に貰ったのは」ヒトカゲだったのか!!」

「ああそうだよ。ぼくはオーキド博士から」ヒトカゲをもらって旅だったんだ」

サトシは「シユンが」リザードンを出した事から：シユンがオーキド博士から最初に貰ったポケモンは「ヒトカゲだったのかと気づき、シユンはその通りだと言って：ヒトカゲを貰って旅立ったんだと応える。

「だけど……さつきはどうして〃リザードンを出さなかったんだ？」

「サトシが先にリザードンを出したから……良いかなって思ったんだ……それでぼくの〃リザードンともバトルするのかい？さつきサトシのリザードンとバトルしたばかりなの……」

サトシはさつきはどうして〃リザードンを出さなかったのかと訪ねると……シユンは先にサトシがリザードンを出したから良いかなと思つたと言つて、ミュウツーに自分のリザードンともバトルするのかが聞いてさつき、サトシのリザードンとバトルしたばかりなのにと訪ねる。

「……当然だ……わたしの作ったポケモンとおまえ達のポケモン……どちらが強いのか……これで決まる！それに……先程の勝負は……あつという間に着いてしまったからな……緑にダメージも与えられずにな……！」

「くっ!!」

「ツツー！」

ミュウツーは当然だと言つて……自分の作ったコピーのポケモンとシユン達のポケモンとどちらが強いのかこれで決まると言う。それに先程のバトルはあつという間に着いてしまったと愉快そうに笑みを浮かべて緑にダメージも与えられずにな〃サトシ達を馬鹿にするように嘲笑うと……サトシ達は悔しげに歯を軋ませる。

「どうやらやるしかないみたいだね…いくよ」リザードン!!  
「ウオウ〜!!」

シユンはやるしかないみたいだねとリザードンと一緒にバトルゾーンへと移動する。

「では…いくぞ…リザードン：かえんほうしや…」

「ウオウ〜!!」

「リザードン！こつちも」かえんほうしやだ!!」

「ウオウ〜!!」

ミュウツーとシユンが「かえんほうしやを指示し二体の」リザードンの「かえんほうしやがぶつかり合いせめぎ合う…そして威力が互角だったのか爆発する。

「ウオウ〜!!」

「ウオウ〜!!」

そして黒煙を突き抜けて二体の「リザードンが空中に飛び上がってお互いの拳で殴り合う…そして何度も空中でぶつかり合う。

「すごい!!」シユンのリザードン：あの「リザードンと互角に戦ってる!」

「ああ!あのスピードにも負けてない!」

サトシとタケシが：シユンの「リザードンが相手のコピーの」リザードンと互角に戦っている事に驚く。

そうしてシユンのリザードンとコピーのリザードンがしばらくぶつかり合っている……。

「リザードン」 つばさでうつ・!!」

「グオウ！」

ミュウツウが指示すると・リザードンは「つばさでうつで迫る!!」

「リザードン!!受け止めるんだ！」

「グオウ!!」

「グオウ！」

「：なんだと・!」

シユンは「リザードンに受け止めるように指示し、リザードンは「つばさでうつを両手で受け止めると・ミュウツウとコピーのリザードンは驚いて動きを止める。」

「今だ!リザードン!」かみなりパンチだ!!」

「ウオウく!!」

「グオウくく」

シユンはリザードンに「かみなりパンチを指示・リザードンは「かみなりパンチでコピーのリザードンを吹っ飛ばす。」

「こうかばつぐん」の技を受けてコピーのリザードンは苦悶の表情を浮かべる。

「……かえんほうしや・!!」

「グオウ〜・!!」

ミュウツウは少し動揺した後：直ぐに冷静に反撃の指示を出して、コピーのリザードンは「かえんほうしやを放つ。」

「：リザードン！回転して」ドラゴンクロード!!」

「ウオウ!!」

シユンの指示でリザードンは両手に竜のエネルギーの爪を出現させて：回転しながら「かえんほうしやへと突っ込んでゆく。」

「突き破れ!!」

「ウオウ!!」

そしてシユンのリザードンは回転しながらコピーのリザードンの「かえんほうしやを突き破った!!」

「……バカな・!!」

「ウオウ!!」

「今だ！リザードン」ちきゆうなげ だ!!」

「ウオウ!!」

その隙について：シユンは「リザードンに」ちきゆうなげを指示：コピーの「リ



ザードンを掴まえて空高く上がり：そして急降下していく。

「……なにをしている・振り払え・!!」

「ウオウ〜」

ミュウツウはコピーの“リザードンにシユンのリザードンを振り払ように指示し：コピーのリザードンは”ちきゆうなげから逃れようと暴れ始める。

しかし”シユンのリザードンはガツチリとコピーのリザードンを掴み逃げられない……そしてどんだん地面が近くなってくる。

「ウオウ〜!!」

「グオウ!!」

そして”ちきゆうなげ”が決まり、コピーのリザードンを地面へと強く叩きつける。

そうして：シユンのリザードンが着地し：シユンやサトシ達が見守る中……コピーのリザードンはゆっくりと立ち上がり……しばらく時間が……立ち……そして……。

「…ウオウ……」

コピーのリザードンはゆっくりと地面へと倒れ伏した。

「…やった!!シユンが勝ったぞ!!」

「ああ……！上手く技を使った見事な勝利だ!!」

サトシは”シユンが勝った事を喜び、タケシも上手く技を使った見事な勝利と感心す

る。

「よくやったね。リザードン！」

「ウオウ！」

シユンは「リザードンをよく頑張ったねと誉める：そして」サトシや他のトレーナー達もシユンがコピーのリザードンを倒した事を喜んでいと……。

「……バカな……わたしの作ったコピー：が……負けただと……!!」

ミュウツーは自分の作ったコピーのポケモンが本物のポケモンに敗れたという事実  
に焦燥し：信じられないと言った表情をしていた。

「よく頑張ったね リザードン！ ゆっくり休んで！」

「ウオウ！」

シユンは「リザードンをボールに戻して：ゆっくり休むように言う。

「コピーとか本物とかは関係ない……どんなポケモンも共に歩み：絆を結んで、一緒に頑張つて鍛えればみんな強くなれるんだ！」

「その通りですわマスター！ マスターは」リザードンやみんなと一緒に今日まで旅をして一緒に強くなつていったのですわ！ いくらあなたが強いコピーのポケモンを作ったところで：苦難を共にしたマスターと」リザードンには勝てませんわ!!」

自分の作ったコピーのポケモンが負けた事で動揺している「ミュウツーにシユンは

：コピーや本物は関係ない！と言つて、どんなポケモンも共に歩んで絆を結び、一緒に頑張つて鍛えればみんな強くなれると、ディアンシーも同意し”シユンは今まで”リザードンやみんなと一緒に今日まで旅して一緒に強くなつていったと言う：そして幾らミュウツウが強いコピーのポケモンを作つたところで：苦難を共にし：一緒に強くなつた”シユンとリザードンに勝てませんわ！強い表情で宣言する。

「：：フザケるな：：わたしの作つた：コピーが：わたしが：キサマのような人間など：に劣るはず：がない!!」

シユンやディアンシーの発言を聞いたミュウツウは体を震わせて：怒りのこもつた声で自分が作つたコピーのポケモンが：そして自分自身が：シユンのような人間などに劣る筈ない！と認めず：”ミュウツウが両手を広げると：そこから3つのモンスターボールらしき物が出てくる。そしてサトシのリザードン・トレーナー達の”フシギバナ・カメックスをボールへと吸い込む。自分のポケモンを気遣つていた三人は突然ボールに自分のポケモンが吸い込まれた事に驚き：そのボールを掴もうとするが掴めずどこかへと飛んで行く。

「人のポケモンを盗る気なの!!」

その光景を見ていた“カスミはミュウツーに人のポケモンを盗る気なのかと文句を言う。

「盗る? いや・お前達が自慢するポケモンよりさらに強いコピーを作る: わたしに相応しい: そしてキサマのポケモンよりも強いコピーを作り: キサマを倒す:」

ミュウツーはサトシ達のポケモンよりもさらに強いコピーのポケモンを作ると言つて、さらに黒いボールを大量に出現させ: : :そして敵意のこもった目で“シユンを睨み: : :シユンのポケモン達よりも強いコピーのポケモンを作つてシユンを倒すと宣言する。

「コピーだと: : :!!」

タケシはミュウツーのコピーを作ると言う発言に驚き、言葉を失う。

「やめろお! そんなの反則だ!!」

サトシはミュウツーにそんなのは反則だと怒りの声を上げる。

「わたしに指図をするな・!!」

ミュウツーはサトシをサイコキネシスで吹っ飛ばしタケシとぶつかつて倒れる。

「わたしのルールはわたしが決める!!」

ミュウツーはそう宣言すると黒いボールをポケモン達に向かって放つ。

「来るぞ!」

「みんな！逃げろ！」

黒いボールが来たのを見ると、サトシはみんなに逃げるように言い：急いで黒いボールから逃れようと必死に走る。

黒いボールがトレーナー達のポケモン達を次々と捕らえて行く。トレーナー達も必死で自分のポケモンを守ろうとするが、次々にボールの中へと吸い込まれて行く。サトシは自分のモンスターボールにゼニガメとフシギダネを戻すがその黒いボールはモンスターボールごと中へと吸い込む。ポケモン達を捕らえたボールは次々と柱が上に入り下へと吸い込まれて行く。

そして黒いボールはシユンのポケモン達にも迫って来る。

「フーデイン！！ サイコキネシスでボールを止めるんだ！！」

「フーデイン！フー！」

シユンは「フーデインに」サイコキネシスを指示し、フーデインは「サイコキネシスで迫り来る黒いボールを止める。」

「パルシエン！ とげキヤノンでボールを破壊するんだ！！」

「パル！！パア~~~~！！」

そして止まった黒いボールを破壊するために「パルシエンに指示：パルシエンは」とげキヤノンで黒いボールを次々と破壊していく。

「エレブーは」かみなり!!ハクリューは」たつまき!!ポリゴンは」トライアタック!」

「レブツ〜!!」

「リュウ〜!!」

「リリン!!」

そして「エレブーは」かみなりで「ハクリューは」たつまき、ポリゴンは「トライアタックで迫り来る黒いボールを破壊していく。

「マスターと仲間達には指一本触れさせませんわ!ハア〜!!」

そして「デイアンシーも珍しく怒りの感情を出して……力を入れて「デイアンシーの固有技『ダイヤストーム』でシユン達に迫る最後の黒いボール達を破壊する。

「何故だ!!わたしの作ったモンスターボールに不可能は無いはず……なのに何故お前のポケモン達は捕まらない!」

ミュウツーは自分の作ったモンスターボールがシユン達のポケモン達に悉く破壊され:シユンのポケモン達を捕まえる事が出来ずに破壊されたことに驚き、ミュウツーはシユン達に怒りの眼差しを向ける。

「ぼくの大切なポケモンをキミに奪われるわけにはいかない……それにぼくのポケモン達は強く育ててるからそう簡単には捕まえられないよ。じゃ、戻ってみんな!」

シユンは「ミュウツーに自分の大切なポケモン達を」ミュウツーに奪われるわけに

は行かないと強い表情で言い：そして自分のポケモン達は強く育てているから簡単には捕まえられないと応える。そして”シユンはみんなをボールへと戻す。

「おのれ!!：：まあいい：：他の奴らのポケモンは捕らえているからな：おまえのポケモン達は：わたしが倒した後で捕らえてやる：」

ミュウツウは忌々しそうに”シユンを睨みながらも：後で自分自身が”シユンのポケモン達を倒した後で捕らえてやると決める。

そして”シユンとポケモン達が最後の黒いボールを全て破壊している間にサトシやトレーナー達のポケモンは次々と捕まっていき：最後に”サトシのピカチュウだけが残り必死に逃げ回っていたが逃げきれずにとうとう黒いボールに捕まってしまい、サトシはそれを追って螺旋階段の上から飛び降りて水の中へと落ちる。

そして”ピカチュウの入ったモンスターボールを追って柱の下の穴の中へと入っていった。

そして吸い込まれたポケモン達は先程、ロケット団のいる研究質の機械の中へと入り：どんどんそのポケモン達のコピーが作られて行き水槽の中へと入って行く。

そして”サトシも来て機械から必死に”ピカチュウの入った黒いボールを掴み離さず、そして取り返す事に成功する：しかし無理矢理機械から”ピカチュウを取り返した

ため機械が故障し：コピーのポケモン達が水槽から出てきてどこかへと向かって行く。そして機械が完全に壊れて捕まった本物のポケモン達も出てくる。

そしてサトシのポケモンの“ゼニガメと”フシギダネも取り戻し、サトシは喜んだ後に“ミュウツーに対して怒りの感情が湧き上がって来るのだった。

そして、サトシがピカチュウを追って柱の中へと入っていった時から時間がたち：こちらでは……。

「さあ……人間達よ……命までは盗ろうとは言わない！……さつきと帰るがいい……」

ミュウツーは“カスミ達や他のトレーナー達のポケモンを奪うと：もう用はないとばかりにさつきと帰るように言い放ち、両手をかざすと両側の大きい扉が開く。

「だが……キサマは帰らせん……キサマとキサマのポケモン達は：後でわたし自身が相手をし：捕らえる……そしてコピーを作る……あれだけの強さを持つポケモン達だ……わたしに相応しい：強いポケモンが：出来るだろうから……」

しかし“シユンとそのポケモン達は帰らせないように告げて……シユンのポケモン達は後で自分自身が相手をして捕らえると言う……あれだけの強さを持つ”シユンのポケモンをコピーし、さらに強いコピーのポケモンを作れば……最強の自分に相応しい強いポケモンが出来るだろうと愉快そうに笑う。



「さあ…キサマ達はさっさと立ち去れ…わたしはこいつの相手を…しなければならぬい…こいつのポケモンを捕らえるためにな…さあ、さっさと帰るがいい…」

そしてミュウツウはカスミ達に自分はシユンの相手をするから…さっさと帰るように言う。

「…最もこの嵐の中を…帰ればな…！」

ミュウツウはポケモンを失って嵐の中を帰ることの出来ない“シユン以外のトレナー達を笑みを浮かべ見つめる。

それをみんなは悔しそうにミュウツウを睨む。すると……。

ドゴオ~~~~ン  
!!!!

ミュウツウの後ろの方で爆発が起こり、そこからコピーであろうポケモン達がたくさん出てきて“ミュウツウの近くへと並ぶ。そしてその後からサトシと捕らえられた本物のポケモン達が次々と出てくる。

サトシはミュウツウに怒りの感情を向ける。

「…お前が逃がしたのか？」

「おれはおれのポケモンを！仲間を守る!!」

サトシは怒りの感情を向きだしにしてそう言い放つと“ミュウツーに向かって走り、ミュウツーに殴りかかる。

だが、ミュウツーのエスパーの力に弾かれる。それでも殴ろうとするサトシを“ミュウツーは“サイコキネシスで客席の方に吹っ飛ばす。サトシが壁に激突しそうになる瞬間!! シュンのポケットの中にあるモンスターボールが開いてそこから出た“ミュウがサトシを不思議な球体を作り受け止める。

「何?」

ミュウツーはいきなり現れた球体に驚く。

そして“ミュウはシュンの周りを楽しそうに周り、手をパチツとやるとサトシを受け止めた球体が消える。

ミュウはそれを見て楽しそうに笑っている。

「お前は……」

ミュウツーは突然現れた“ミュウの存在に驚きの表情を見せる。

「いつの間にボールの中に入ったの?」

「ミュウ? ミュウミュウ!!」

シュンは“ミュウにいつの間にもボールの中に入っていたのかを訪ねるが“ミュウは

楽しそうに笑っているだけで応えない。

すると：「そこへ」ミュウツウが放ったエネルギー球がシユン達に迫る。それをディアンシーがダイヤのエネルギーで防ぎ・観客席の方へと弾き飛ばす。

「あなたは何をやっているのですか！ マスターのお側にいるのならマスターをお守りするのですわ!!」

「ミュウ〜・ミュウ〜・!!」

ディアンシーは「ミュウに側にいるのならシユンを守れと珍しく怒り、ミュウの両頬を引っ張る。

ミュウは痛そうに両手をジタバタとさせて暴れる：（ディアンシーは普段：怒る事は滅多にないが：大好きなマスターである）シユンを傷つけられたり：馬鹿にされたり：仲間を傷つけられたりすると：怒りの感情を出す。）

「ミュウ〜（泣）!!」

ミュウは「シユンに：：エ〜ン〜（泣）なぐさめてえ〜（泣）!：：：と言わんばかりに」シユンの胸へと泣きながら抱きつく。すると：「またもや」シユンとミュウに向かつてミュウツウがエネルギー球を放つ。ミュウは今度は言われた通りにシユンに迫るエネルギー球を自分の念の力で弾き飛ばす。そして「サトシ達は突然シユンのモンスターボールの中から現れた見たこともないポケモンの存在に驚き声を失う。口々に

何だあれは：ポケモンなのか：と呟く。

「ミュウ：：世界で一番珍しいと言われるポケモン：：」

ミュウツウが「ミュウのことについて話す。世界で一番珍しいと言われるポケモンだと：：サトシ達も初めて聞く名前のポケモンに疑問の表情を浮かべる。しかし、それを聞いていたシユンは疑問に思った：確かに」ミュウは個体数が以上に少なく滅多に姿を見ることがもない珍しいポケモンだが、世界に一匹と言うわけではなく：人間がたどり着けないところにいることのあるポケモンなので一番と呼べるほど珍しいポケモンなのだろうかと：：。

シユンが他の者達と違い、そう思ったのは事前に「ディアンシーから」ミュウの事についての知識を教えられていたので疑問に思ったのである：。

ちなみにシユンの手持ちがミュウが入り：六体以上になったにも関わらず：オーキド博士の元へと転送されないのは：ミュウが自分自身の特殊な力で無効化しているためである：。

「ミュウ！」

「確かにわたしはお前から作られた：しかし強いのはこのわたしだ！本物はこのわたし

だ！」

ミュウツウは力強い言葉でミュウに言う。強いのは自分だと・本物はこのわたしだと・。

「ミュウ？」

ミュウはそれをジッと聞いている。

「ミュウとミュウツウ……」

「ミュウからミュウツウが作られた？」

トレーナー達やポケモン達も二体の話をただ呆然として聞いている。

「生き残るのはわたしだけだ！」

「ミュウ！」

ミュウツウが生き残るのは自分だけだと言うと……ミュウに目掛けて飛んで“エネルギー球を撃ち出す。

ミュウは素早く交わし逃げる。ミュウツウも素早く追いかけてエネルギー球を放つ。

「何故、戦わん！戦いを避けるのはわたしに怖いからか!!」

ミュウツウは自分と戦おうとしない“ミュウに苛立ちなぜ戦わないのかと聞くと、ミュウはフィールドの方へと飛んでいく。ミュウツウはそれを追いかけてエネルギー球を放つ。ミュウにエネルギー球が直撃し“ミュウを上空へと吹っ飛ばす。すると

ミュウも即座に反撃し同じエネルギー球でミュウツを吹っ飛ばす。ミュウツは即座に浮かび上がると、ミュウとミュウツはフィールドの上へと浮かぶ。

「少しは手応えのある相手と言うわけだな……！どちらが本物か決めるのはこれからだ：ミュウとわたしのどちらが強いか：元のお前達とわたし達のどちらが強いか……!!」

ミュウツのその力強く……そして……なにか怒りとは違う……別の感情の籠もった発言にポケモン達も様々な反応を見せる。

「本物より我々は強くなるよう作られている……」

「ミュウ！ミュウミュウミュウ！ミュウ！ミュウ！ミュウ！！」

ミュウは、ミュウツの発言に何か反論し、ディアンシーがそれをシユンに分かるように伝える。

「なるほど……こう言ってますわね。本物は本物だ！技など使わず体と体でぶつかれば本物はコピーには負けない！と……言っていますわね……」

ディアンシーは、ミュウの言葉を通訳する……シユン達は、ディアンシーが通訳してくれたミュウの言葉を黙って聞いている。

「本物は本物だ……だと……」

ミュウツは、ミュウのその言い分に怒りを露わにして、ミュウにエネルギー球を放つ。

ミュウはそれを難なく交わすが、そのエネルギー球は“サトシのいる客席の像の前へと直撃するが、サトシはそれを間一髪で交わすと客席へと当たり大爆発が起きる。

「良いだろう……どちらが本物か技無しでも決めてやる……強いのはお前達だ！ いけ！」

ミュウツウが強いのはコピーである自分達だと……本物は自分達だと言い放つと!! コピーのポケモン達に行くように命令し……コピーのポケモン達は本物である”ピカチュウ達に向かって行く。

本物であるポケモン達も迎え撃とうと続々と自分達のコピーへと向かって行く。

サトシのポケモンの”ピカチュウやゼニガメ・フシギダネ達はこの状況に困惑している。

こうして……本物とコピー……どちらが本物でどちらが強いのかと決めるための技無しでの体と体のぶつかり合いの戦いが始まる……ポケモン達も自分の持つ爪や牙などの武器で戦う。

「……なんなんだろう……この戦いは……何か意味が……あるのかな……」

シユンは突然として起こった本物とコピーのポケモン達による大戦争に驚きと複雑な感情が沸き上がり……目の前の本物とコピーによる戦いを……悲しげな瞳をして……ただ静かに見つめていた……

同じポケモン同士での体と体のぶつかり合い……殴ったり蹴ったり……ひっかいたり、噛

みついたり：自分達の体の特徴を存分に扱い：ぶつかり合う：本物とコピートのポケモン達はお互いの：何かをかけて必死に戦っていた。

カスミ達や：ジョーイ：トレーナー達は自分のポケモン達とそのコピート達の戦いを複雑な気持ちで眺めていた。

サトシは飛ばされた客席からその戦いを眺め：何とか客席を下りステージへと向かう。

そしてどうすればいいか：迷っていた“サトシのピカチュウもコピートのピカチュウと出会い：戦い始める：しかし”サトシのピカチュウは反撃せずにコピートのピカチュウの攻撃を喰らい吹っ飛ばす。

そして本物とコピートのポケモン達による戦いが続き：次々と本物とコピートの両方が：傷つき：倒れていく：攻めている方も防いでいる方も傷つけ合いどんどん疲労していきや：やがて両方とも重なり合うように体を倒れ伏した。

「：なんなの：この戦い：！本物やコピートだって：今は生きてる！！」  
「：みんな：生き物：」

その戦いをジッと見ていた“ジョーイが本物とコピートのポケモン達が傷つき倒れて行く様子に：悲しげな表情で本物やコピートだって今は生きてるのだと言い：紺と白の服の女のトレーナーも “みんな生き物だと呟く。



「作られたと言っても：みんなこの世に生きている：生き物：」

「：本物とコピー：でも：同じ生き物同士：勝ち負けがあるわけ！」

タケシやカスミもその戦いを見つめながらコピーのポケモンが作られたと言ってもみんな：この世に生きている生き物だと言い：カスミも本物とコピー：でも同じ生き物なのに勝ち負けがあるのかと疑問に思う。

そして次々に本物とコピーのポケモン達は傷つけ合い倒れていき：それをここに着いたロケット団が悲しそうな様子で眺めていた：。自分が自分を苛めているようで嫌な感じだと呟き：そして“ニャースは自分のコピーと出会い戦いになるかと思つたが：そうは成らずに：色々と会話した後空に輝く綺麗な満月を眺めていた。

そして空中では“ミュウと“ミュウツウのぶつかり合いが続いていた：。体中にエネルギーを纏い何度もぶつかり合いぶつかり合う事にその激しきを増して行く。

そしてその下では“サトシが壁を辿り必死に下に下りていた：そしてふと下を目にする：自分の相棒の“ピカチュウとコピーのピカチュウの戦っているのが目に入った！

コピーのピカチュウにやられて地面を転がる：コピーのピカチュウは攻撃し続け息切れしながら本物の“ピカチュウに戦うように言うが“ピカチュウはただ：悲しげな瞳で静かに首を横に振る。

しかし：コピーのピカチュウは聞き入れず、体当たりで、本物のピカチュウを吹っ飛ばす。

それを見た“サトシは急いで下に下りようとして：少々高いところから階段のところに落ちて：足に痛みが走る：。

そしてその間に”コピーのピカチュウが本物のピカチュウへと近づき、戦うように言うが：ピカチュウは首を横に振るだけ：：コピーのピカチュウは近づいて”本物のピカチュウへとビンタしていく：しかし：ビンタを繰り返しているうちに：ただ空しさだけ：が心の内に湧き上がっていくのを感じていた：：。

ピカチュウ同士の戦いをずっと見ていた”サトシは自分の”ピカチュウを呼び：：コピーのピカチュウが最後にビンタを繰り返す”本物のピカチュウは倒れるが：起き上がりコピーのピカチュウへと歩いて行く。

「もういい!!やめろ!ウワツ!!」

「サトシ!!」

サトシは止めさせようと客席から飛び降りるが：疲労が溜まっていたのか着地と同時に倒れ伏す：タケシとカスミは慌ててサトシへと駆け寄る。

「止めさせなきや…!」

「：駄目だ：ミュウとミュウツウが止めないかぎり：戦いは続く!!」

サトシが止めさせなきやと言うが：タケシは「ミュウとミュウツウが戦いを止めないかぎり：本物とコピー同士の戦いは続く」と：応える。

「くっ！ そうだ」 シュン！ ミュウはおまえのモンスターボールから出てきたんだろう!! だったらボールに「ミュウを戻せばこの戦いを止められるんじゃないのか!!」

「そうか：！ その手があつたか！」

サトシか悔しそうに歯を食いしばりつつ：ミュウがシュンのモンスターボールから出てきた事に気づいて、ボールに戻せばこの戦いを止められるんじゃないかと言い：タケシはその手があつたか！ と相槌をうつ。

「：シュン！ ミュウをモンスターボールに戻してくれ!!」

「：分かった：とりあえずやって見るよ：」

サトシに「ミュウを戻すように言われた」 シュンはミュウが出てきたボールを持って：ミュウをボールに向けて戻そうとするが：ボールの戻そうとする光が「ミュウのエネルギー球にかき消されて」 ミュウを戻す事が出来ない。

「：ダメだね：。あのエネルギー球が邪魔して」 ミュウを戻せない：：戦い自体を止めないと：ボールに戻す事なんてとても出来ないね：」

「：そんな：」

シユンがミュウの纏うエネルギー球に邪魔されて“ミュウをボールに戻す事が出来ない”と言うと：サトシはショックを受けた様子で顔を伏せる：期待していた“カスミ達やトレーナー達もショックを受ける。”

「：生き物は同じ種類の生き物に自分の縄張りを渡そうとはしません……」

「……そんな……」

みんなが一筋の希望が敗れてショックを受けていると：ジョーイが静かに：だけど悲しげな瞳で：そう呟くと：それを聞いた“カスミはその事実には：悲しげな思いを抱く。

「：相手を追い出すまで：戦います：それが生き物です……！」

「……生き物は自分が生きるために弱い者を糧にし自分の力とします……：そしてあなたの言うとおり：自分の住処を守るためには同じ生き物で有ろうと命を奪ってでもその場所を守ります……：そうやって生きとし生ける物達は：この星で：生命という名の輪を繋げてきたのですわ……」

ジョーイの発言に続けて“デイアンシーは生き物についての定義：この星が誕生し……：そして太古の昔から現代にかけて繰り返されて来た：生き物という名の循環とサイ

クルの和：：についてシユンに説明する：：。

生き物は自分が生きるために生き物を殺し糧とし：ジョーイの言うとおり生き物は住処を守るために同じ生き物であろうとその命を奪ってでもその場所を守るのだと説明する：それは太古の昔から：この星で繰り返し返されて来た生き物に取っては：ごく当たり前の事であり：そうして：生命という和は回っているのだと静かに瞳を閉じながら告げる。

みんなは“ディアンシーの話しに聞き入っていた：何かその言葉に不思議な説得力と：不思議な感情が沸き上がるのを感じていた。

「この星で繋がれてきた：生命という名の：輪：」

「そして：それが生き物：だけど：ミュウツウは人間が作った！」

「でも：今はもう生き物：」

「：今は生き物：：ミュウもミュウツウもピカチュウも：あのピカチュウも：：」

シユンは“ディアンシーの発言にある：この星で繋がれてきた：生命という名の輪：”という言葉を：目の前の戦いを見つめながら：：悲しみ：無力な自分に齒がゆい思いを抱いて：只そつと呟く。

そして、シユンのその発言に続くように“タケシが：そしてそれが生き物だと呟き、”だけどミュウツウは人間が作り出したと言って、カスミもでも：今はもう生き物だと：

静かにそして悲しげな視線で目の前の争いを見つめる。

そして三人の発言を聞いていた：サトシは悲哀そうな顔で：今は生き物だと呟く  
：：ミユウもミュウツーも：ピカチュウもコピートのピカチュウも：と目の前で二匹の  
”ピカチュウの戦いを見つめる。

そしてコピートのピカチュウは：悲しさ：虚しさ：色んな感情が：沸き上がり：ピン  
タをする手にも：力が入らず：ただそつと”ピカチュウへと寄り合い：ピカチュウも  
辛そうな表情で静かに受け止めた。

そして空中でぶつかり合いをしていた”ミユウとミュウツーが下りてきて：ぶつか  
り合いそのエネルギーが爆発して地上で戦っていたポケモン達を本物とコピートの両方  
を吹き飛ばし：シユン達も衝撃で発生した砂煙に顔を背ける。

そして二つの強大な力のぶつかり合いの余波でステージのライトが故障し明かりが  
消える。

そして”ミユウとミュウツーは纏っていたエネルギー球をエネルギー波に変えて撃  
ち出し：威力が互角のためお互いにその場から後退する。そして再び：体にエネル  
ギーを纏う。

サトシは襲われた衝撃から顔を上げてステージを見ると：そこには本物とコピートの  
ポケモンが傷つき寄り添い合うように倒れていた：：サトシはポケモン達が傷ついて

いる姿に胸を痛める。

そしてミュウとミュウツターの纏うエネルギーの量がどんどんと高まる……そして……。

「やめろ……！」

「サトシ」

サトシはミュウとミュウツターの戦いを止めようと走り出し……タケシとシユンが止めるのも構わず、ミュウ達のところへと走って行く。

「もうやめてくれ……!!!」

そして、ミュウとミュウツターのエネルギー波が発射された……。

「やめろお……!!!」

チュド……ンンン!!!

サトシは二つのエネルギー波が衝突する寸前に間へと入り……衝突の爆発に巻き込まれる。

「サトシ!!!」

「ピカピ!!!」

「サトシ!!!」

「なんていう無茶を……!!!」

爆発に巻き込まれた“サトシを見て：タケシとカスミは心配げな声を上げ：シユンもサトシの名を呼び：ディアンシーは”サトシの無茶な行動に驚く。

そして：二つのエネルギー波の衝突による爆発が止むと：サトシの体を紫色に光が覆いそしてゆつくりと地面へと倒れ伏した。

「バカな……人間が我々の・戦いを止めようとした……！」

「……ミユウ……？」

ミユウツウは人間である”サトシは自分達の戦いを止めようとした事に驚き、ミユウは何が何だか分からずに頭を捻らせていた。

「ピカピク……!!」

サトシの“ピカチュウが慌てて駆け寄って来る……ピカチュウはサトシへと声をかけるが：サトシはミユウとミユウツウの二つのエネルギー波の衝突によって発生した相乗効果で体が石化した。

そして：ピカチュウは一生懸命：サトシの体を揺すって起こそうとするが：当然：サトシは目を覚まさない……すると周りに倒れていた本物とコピーのポケモン達起き上がり：サトシを見て悲しげに鳴く。

そしてピカチュウは何度も”サトシに電撃を放ち：起こそうとするが：サトシが目を見つめ……周囲で倒れているポケモン達は静かにそれを見つめ……ピカ



チュウが一生懸命を“サトシの目を覚まさせようとしている姿を見て：カスミも思わず”ピカチュウの名を呼ぶ。

「チュウ・ピツカピ・」

そしてとうとう電気エネルギーがなくなり電撃が出せなくなる：だけど相変わらず  
“サトシは目を覚まさない。

「ピカピツ……」

サトシが：自分の大好きな人が：倒れ：目覚めない事にピカチュウは：悲しみで：  
目から涙が落ちる：。

「デイアンシー：サトシはいつたい：どうなってしまったんだい：？」

「詳しくは分からないですが：：：どうやら：：：二つのエネルギー波のぶつかり合いで生じた  
相乗効果で石化してしまわれたようですよ：：：あれでは：：：」

シユンは動かない”サトシと一生懸命 サトシを起こそうとする”ピカチュウを静  
かに見つめて：デイアンシーに”サトシはどうなってしまったのかと訪ねると”デイ  
アンシーは詳しい事が分からないが：どうやら”ミュウとミュウツウのエネルギー波  
の衝突による相乗効果で：石化してしまっただと：そして悲しげな様子で：あれで  
は：：と静かに呟く。

「…そんな……」

「……………」

シユンはその事実にはショックを受けて：「ディアンシーはただ静かに目を瞑る……。すると：周りで」サトシがミュウとミュウツウの戦いを止めるために：エネルギー波へと突っ込み：そして倒れ伏した」サトシを見ていた：本物とコピーのポケモン達は：「サトシがミュウとミュウツウ達の戦いを止めようとして：倒れた事に……悲しみの涙を流し：ただ静かに」サトシとピカチュウ達を見つめている……。

「……………（サトシ：自分の身を犠牲にして：戦いを止めようとするなんて……）」

シユンは「サトシが自分の身を犠牲にしてまで：ミュウとミュウツウの戦いを止めようとした事に驚く。」

「……………せめて：サトシの……ために……」

シユンは「ディアンシーに：もう打つ手が無いことを聞かされて：シユンは責めて」サトシのために：とポケットからハーモニカを取り出して：口元へと持っていく。

「……………綺麗な満月だなあ……それじゃ……やろうか……ディアンシー……」

「はい……わかりましたわマスター……！責めてやすらかに……」

シユンはハーモニカを吹くまえに：空に浮かぶ：綺麗に輝く満月を見つめたあと：ディアンシーにやろうかと言ひ：ディアンシーも返事し：石化して倒れたサトシを見

つめ：責めて：やすらかにと哀れみの視線で眩く。

そして：シユンは静かにハーモニカを口にくわえて：静かに曲を吹き始める…。

く B G M かぜといつしよに（ミュウツウの逆襲：主題歌） く

シユンの吹くハーモニカからながれる音楽が…：ニューアイランド島に響きわたる…。

突然に：シユンがハーモニカを吹き始めた事に：驚いた表情を向けていた”タケシ達だが：そのハーモニカからながれる静かなメロディーと”メロエツタまでとはいかないが：ディアンシーの静かで綺麗な歌声に只：聞きほれていた。

シユンの奏でる静かで穏やかな音色と”ディアンシーの綺麗で美しい歌声が響く。

その美しい音色を聞いていた：サトシの近くにいる”ピカチュウもシユンの方を涙目で見つめる。

本物とコピーのポケモン達も…：サトシが倒れた事に：静かに涙を流していたポケモン達は：音色と歌声に：刹那さを感じ：涙を流し続ける。

激しい闘いを繰り広げていた”ミュウとミュウツウは”サトシが飛び込んで戦いを

止めた事に驚いて・黙っていた” ミュウとミュウツーも静かに” シュンとディアンシーのハーモニカからながれる旋律を聞いていた。

ミュウは心地良さそうに：！ミュウツーは何を思っていたのか：静かにジツと聞いていた。

「：なんだ：この音は：怒りと憎しみに満ちていたのが：消えていく：」

ミュウツーは：：シュンとディアンシーによるハーモニカでの旋律を聞いていると：勝手に自分を生み出し：人間に：そして自分がこの世に生まれた意味も分からず：本物とコピーとの違い：に感じる怒りと憎しみに満ちていた心が静かに：消えていくのを感じていた：。

そしてしばらくシュンと”ディアンシーによるハーモニカの旋律がながれていると：：不思議な事が起きた：。

サトシが”ミュウとミュウツーの戦いを止めるために：決死の覚悟で飛び込み倒れ伏した事に涙していた本物とコピーのポケモン達の流れた涙が：石化した”サトシの元へと集まっていく。

すると：サトシの体が青く輝き始める：ピカチュウもカスミ達も静かに見つめていた：そして”ピカチュウの涙もサトシへと吸い込まれていき：さらに輝きが強くなる

：そして：空は嵐で曇っていたのが嘘のように晴れ始め：天から一筋の光が降り注いで：サトシとピカチュウを照らす。

「うっ：うん：」

「ピカッ!!」

「ピカチュウ!!」

「ピカピ!!」

すると奇跡が起きた：サトシの石化が解けて：サトシは目を覚まし：ピカチュウを呼ぶと”ピカチュウは嬉しそうにサトシへと飛びつく。

それを見たカスミ達は喜び、笑顔でサトシ達を見つめる：周りにいた：サトシのポケモン達：フシギダネ・ゼニガメ・リザードンも本物とコピーと共に喜ぶ。

三人のトレーナー達も笑顔を浮かべてお互いを見つめ笑顔になる。

周りの他のポケモン達も先程まで争っていたのが：嘘のように共に寄り添いあい：サトシが元に戻った事を喜び合っている。

「：良かった：！サトシが元に戻ったよ”ディアンシー：」

「ええ：何が起こったのかは分かりませんが：まさに奇跡ですわ!!」

シユンもハーモニカの演奏を吹き終わると：サトシが元に戻った事を喜び、ディアンシーも何が起こったのかは分からないが：まさに奇跡だと笑顔を浮かべる。

ミュウは闘いの手を止めてシユン達のいる方まで飛んでくる。

ミュウは嬉しそうに“シユンへとすり寄って来る。

ミュウツ―は上に浮かびながら：今起こった奇跡とそして喜ぶ本物とコピーのポケモン達を見た後：シユンにすり寄る”ミュウを見つめる：ミュウもミュウツ―が自分を見ている事に気づいて”ミュウツ―を見る。

「…確かに：おまえもわたしも：すでに存在している：ポケモン同士だ：」

「ミュウ！」

ミュウツ―は静かに：そう呟き：ミュウも静かに同意するように瞳を閉じる。

「…この出来事はだれも知らない方：が良いのかも：しれない：忘れた方が：良いのかもしれない：」

「ミュウ！」

そして”ミュウツ―がそう呟くと：ミュウも同意するように頷くと：サイコキネシスでコピーのポケモン達を浮かび上がらせていく：。

サトシ達はその様子を光の照らす中央へと集まり静かに眺めていた。

そしてコピーのピカチュウも”サトシのピカチュウに一度振り返ると静かに飛んで行く。

「…みんな…どこへ行くの…？」

サトシは空の向こうへと飛んで行く。ミュウツウとコピーのポケモン達を見て…どこに行くの？と聞く。

「…われわれは生まれた…生きる…生き続ける…この世界の…どこかで…！」

そう言う…ミュウツウはコピーのポケモンと一緒にどこかへと…飛んで行く…そして生き続けると…この世界の…どこかで…。

「…：ミュウツウ…：みんな…：またどこかで会おうね！この星のどこかで…！」

「（その時まで…：どうかお元気で…！」）

「（フツ…：！ああ…：また…：どこかで…！」）

シユンは去りゆく…ミュウツウ達に…この星のどこかでまた会おうねと心の中で呟き…「ディアンシーもどうかお元気でと別れを言うと…ミュウツウも感じとって…シユンと…ディアンシーに…また…どこかで…と微笑み空のかなたへと消えて行く…。

そして…シユン達がいる場所が白い光に包まれた…。

ここは港の波止場町、そこにあるポケモンセンターではたくさんのトレーナー達が次の町に行くための船を待っていた。

「嵐で船は出ません!!」

「ハリケーンが接近しています!避難してください!」

次の町への船を待っているトレーナー達がいつ船が出るのかとジュンサーさんとの波止場町の港の管理をしている女性ボイジャーに訪ねていると：ジュンサーは嵐で船は出ないと応え、ボイジャーはハリケーンが接近しているため避難するようにみんなに言う。それを聞いたみんなは不安そうな表情をしていると……。

「みなさん!ご心配なく!避難所としてポケモンセンターを解放します!利用する方はわたしに着いて来てください!」

後ろから来た”ジュンサーさんがそう行って、利用する人は自分に着いて来るように言うと：何人かの人達がついて行く。

「ジュンサーさん!ジュンサーさん!ボイジャーさん!みんな今日は雨に濡れてことのはか綺麗!!」

「でも：なんで俺たちこんなところにいるんだ?」

「さあ?いるんだからいるんでしょうねえ」



「ピカ！」

「トゲピィ〜！」

タケシが呑気にだらしない顔でそう呟いていると：サトシが何で自分達がこんなところにいるのかと：疑問に思うが：カスミはいるんだからいるんでしようと言う。

「まあ：いつか！」

「うん！」

「ピカピカ！」

サトシは疑問に思っていたが：まっいつかと納得し”カスミやピカチュウも頷く：そしてサトシがふと：外を見ると：。

サトシ達は建物から出て港の先の船の乗り場のところへと向かい海を見ると：。

先程の嵐が嘘のように雲が晴れており：海面も落ち着き：波も静かになっていた。

「こんなことって：：：」

「ハリケーンが：：：」

「嘘みたい：：：」

三人のトレーナー達やジュンサーやボイジャーも建物から外の様子を見て：外に出た実際に海の様子を見てボイジャーは啞然としていた：：先程までハリケーンが接近していたにも関わらず：現在は晴れて海面も穏やかになっている本来なら有り得ない

事態に遭遇したからである。ジュンサーと女トレーナーも信じられないと驚いている。「明日はきつと船が出せるわ!!」

だが、そのハリケーンが消えた空を見て明日はきつと船が出せるわ!と”ボイジャーは笑顔で呟く。

そうしてサトシ達も港の先で晴れた海の先の青空の向こうを眺めていると……。

「どうしたのサトシ?」

「どうかしたのかサトシ?」

「ピカ?」

カスミとタケシ・ピカチュウは突然止まったサトシにどうかしたのかと聞く。

「いや……この晴れた空を見てたらあいつのことを思い出してたんだ!」

「あいつ? あいつって誰のこと?」

カスミはサトシが誰のことを思い出していたのかと聞く。

「同じ日に旅立った俺のもう一人の幼なじみ……そう……シユンのことをさ……」

サトシはすっかりと晴れた空を見て思い出していた……あの時の記憶はすっかりと無くなっていたが、大切なもう一人の幼なじみであるシユンのことを思い出していた……。

「今……何をしてるんだろう……」

今：何をしてるんだろうと思いつながら…このよく晴れた空をピカチュウとカスミとタケシと一緒に見つめていた。

「結局ついて来ちゃったんだ…」

「ミュミュミュウ!!」

その時、シユンは今、ジョウト地方のシロガネやまへ向けて、リザードンで上空を飛びながらいつの間にか自分のボールに入っていたミュウが結局そのまま着いてきたことに驚く。

ミュウは嬉しそうにシユンにすり寄っている。

「まあ新しい仲間が増えてわたくしは嬉しいですわ!!」

デイアンシーは新しい仲間が増えて嬉しいですわ!と笑顔で言う。

そうして：シユン達がシロガネ山に向けて：リザードンで飛んでいると…!!

「ただいま帰りましたマスター!!」

「レポートして」シユンの肩へと下りたつた「メロエツタが現れた。

「お帰り」メロエツタ!用事は済んだのかい?」

「ええ…すべて済ましてきましたわ!!おや?」

「ミュウ?」

シユンが用事が済んだのかを訪ねると：メロエツタは全て済ましてきたと言った後に「シユンの胸に抱かれている」ミュウに気づき：ミュウもメロエツタを見る。

「マスター!ミュウをゲットしたのですか?」

「うん：ちよつと：ね：」

メロエツタがそう訪ねると「シユンは言葉を逃がして眩く。

「?：それでマスター!パーティーはどうでしたか?」

「ああ：うん：まあ：楽しかったよ：妙な事に巻き込まれたけどね：ねっ!ディアンシー」

「そうですね!不思議な体験でしたわ」

メロエツタがパーティーはどうだったかと聞くと：シユンは言葉を逃がしながら応え：ディアンシーに聞くと「ディアンシーも不思議な体験でしたわと応える。

「?まあ、楽しかったのなら良かったです!それじゃあ行きましょう」

「そうだね!妙な体験をしたけど：いよいよジョウトリーグに挑戦するんだ!これからもよろしくね。みんな!」

「ええ!!」

「はい!!」

「ミュウ!!」

「ウオウ!!」

こうしてシユン達は新たにミュウを仲間にして、いよいよジヨウト地方へと挑戦するためにジヨウト地方へと向かったのだった。

## 舞い降りる伝説！ファイヤー現る。

これはジョウトリーグに挑戦するためにポケモン達と共に特訓の日々を送っていたシユン達の前に突如として現れた・思わぬ存在との遭遇をはたした話である。

シユン達は今日もシログネ山にポケモンの修行のために簡単に作った拠点でポケモンのケアをしながらジョウトリーグに挑戦するためのトレーニングを行っていた。近くのポケモンセンターでポケモンを回復させたり、手持ちのポケモンを交換しながらシログネ山でトレーニングをする日々を送っていた。そんな、ある日……シユンは伝説と呼ばれる存在との邂逅を果たす。

今日もシユンはポケモン達と一緒にトレーニングを行っていた。ポケモンセンターでポケモンを入れ替えて、今はシログネ山の岩場で大きい岩を相手のポケモンに見立てて技の強化のトレーニングを行っていた。

「エレブー！ かみなりパンチ！ サイドン！ つのドリル！」

「エツレブ〜!」

「ド〜ン!」

シユンはエレブーとサイドンに技の指示をすると・エレブーは“かみなりパンチ”で、サイドンは“つのドリル”で目の前にある大岩を砕く。

「よし、いい調子だよ!エレブー、サイドン!」

「レブ〜!」

「ド〜ン!」

シユンが良い調子だと2体を誉めると、エレブーとサイドンは高らかに鳴いて喜ぶ。

「よし!次はキミ達だよ!リザードン、ゴーリキー!」

「ウオウ〜!」

「リキー!」

シユンが次はリザードンとゴーリキーの番だと言うと、エレブーとサイドンが下がり、リザードンとゴーリキーが前に出てくる。

「よし!行くよ!リザードン、かえんほうしゃ!“!ゴーリキー、クロスチョップ”!!」

「ウオウ!ウオウ〜!」

「リキー!ゴリイ!!」

シユンの指示を聞いたリザードンは離れた岩に“かえんほうしや”を放ち、その熱さで岩を溶かし、ゴリリキーは“グロスチョップ”で目の前の岩を粉碎する。

「よし、よくやったねリザードン、ゴリリキー！技の威力も上がってきてるし、いい調子だよ。」

「ウオウー！」

「リキー！」

リザードンとゴリリキーはシユンのその調子と言う言葉に頷いて特訓を続ける。

「最後はフライゴンとドレディアだねー！」

「フライ！！」

「フルウ！！」

最後にシユンが2体を呼ぶと、フライゴンとドレディアが了解と言った様子で前に出てくる。

「フライゴンは“りゅうのいぶき”！ドレディアは“はなびらのまい”！」

「フラ〜！」

「レディ〜！」

フライゴンは岩に“りゅうのいぶき”を放ち、ドレディアは“はなびらのまい”を放ち、岩を粉碎する。



「よし、みんな良い感じだよ!この調子で頑張っていこう!」

「フラ〜!」

「フルウ!」

「レブ!」

「ド〜ン!」

「ウオウ!」

「リキ!」

シユンがみんなにこの調子で行こうと言うと、みんなもシユンに応える。シユンがポケモン達のトレーニンングを行っていると……!

「マスター!お疲れさまですわ!」

「みんなも良い調子のようですね!」

ディアンシーとメロエッタがポケモン達のトレーニンングをしているシユン達のもとに来て、シユンはディアンシーから飲み物を、メロエッタは木の実を持って来てみんなに配る。

「ありがとう!ディアンシー、メロエッタ!それじゃあ少し休憩にしようか!」

シユンはディアンシーとメロエッタにお礼を言い、みんなもメロエッタ達にお礼を言う。シユンはちょうど良いから休憩をしようと言う。みんなは休憩と聞くと、座って木

の実を美味しくそうに食べている。

「だいぶみんなも良い感じに技の威力も上がってきたね！」

シユンはポケモン達がトレーニングをしていくうちに技の威力が上がってきたと言  
う。

「そうですねマスター、フライゴン達も強くなってきました。他のみんなもトレーニ  
ングでレベルも上がり進化もしています。この調子で育てていきましよう！」

メロエツタもフライゴン達がどんどん強くなっていると言い、レベルも上がっている  
ため他のポケモンも進化していると応える。

「マスターもみんなも頑張っているのですもの！強くなっているのは当然ですわ！」

ディアンシーはシユンとみんなが頑張つてトレーニングをしたから強くなっている  
のは当然だと言う。

「うん、ありがとう！メロエツタ、ディアンシー！」

シユンはメロエツタとディアンシーにお礼を言っていると、サイコソーダを飲みながらシロ  
ガネ山で採れた木の実を食べている。シユン達がトレーニングの休憩をしながら、みん  
なで楽しそうに話していると……。

「フオオ〜！！」

突然辺りに響く鳴き声にシユン達は驚く。そして、その鳴き声の正体がシユン達の上を飛んでいく。シユンやポケモン達の上を飛んでいったその鳴き声の正体は煌めく炎の翼を靡かせた美しい姿の伝説のポケモンが姿を現した。

「フオオ〜!!」

「あれってまさか!ファイヤー!!伝説の鳥ポケモン!!」

シユン達の前に現れたのはカントーに伝わる伝説の鳥ポケモンの1体、ファイヤーがシユン達の頭上を通り越してシロガネ山の山頂の方へと飛んでいく。シユンはポケモン図鑑を取り出してファイヤーに向ける。

「ファイヤー・・・かえんポケモン。羽ばたくたびに火の粉が煌めく。見た者の心をとろけさせる美しさを伝説のポケモン・・・」

ポケモン図鑑にファイヤーのデータが表示される。

「すごい、まさかこんなところでファイヤーに会えるなんて!!」

シユンはまさかシロガネ山でファイヤーに出会えたことに驚く。

「ファイヤーは準伝説ですね。世界に1匹と言うわけではありませんが、個体数が極端に少ないので伝説のポケモンと言われているようです。まあ、確かに滅多に出会えないポケモンですが・・・」

メロエツタはファイヤーは世界に1匹ではないが、個体数が極端に少ないため伝説のポケモンと言われているとシユンに説明する。

「なるほど！確かにファイヤーになんて滅多に出会えないからね！」

シユンはメロエツタの言葉を聞いて、なるほどと頷く。

「美しいですわ！マスター、こんなチャンスはありませんわ！ファイヤーは山頂の方に行ったようですし、まだ居るでしょう！ファイヤーをゲットしましょう！」

「ディアンシーはファイヤーの姿を見て美しいと言い、こんなチャンスはないと言って、シユンにファイヤーをゲットしようと言う。

「えっ！ファイヤーを!!」

シユンはディアンシーがファイヤーをゲットしようと言ったことに驚く。

「それは良い考えですね！リーグに挑戦するのなら伝説のポケモンであるファイヤーをゲットするのは良いでしょう！」

メロエツタもディアンシーの考えに賛成し、ファイヤーをゲットしようと言おう。シユンに言

「確かにファイヤーをゲット出来ればリーグでも有利になるからね！わかった、ファイヤーをゲットしに行こう！」

「はい！」

「ええー!」

シユンが2人に言われてファイヤーをゲットすることを決めると、メロエツタとディアンシーも返事をする。シユンはリザードンとエレブー、サイドンをボールに戻し、フライゴンに乗る。メロエツタとディアンシーも続いて乗った。

「ドレディアとゴリーキーはここを野生のポケモンが荒らさないように見張つて欲しいんだ!頼めるかな!」

シユンはファイヤーと相性の悪いドレディアとゴリーキーをこの場所を野生のポケモンが荒らさないように守ってほしいと2人に頼む。

「フルウー!」

「ゴリツキイ!」

2体はシユンに頼まれると、了解と言つて頷く。

「頼んだよ!それじゃあフライゴン!ファイヤーの飛んでいった方に行つて!」  
「フラウー!」

シユンはフライゴンにファイヤーが飛んでいった方に行つてほしいと頼むと、フライゴンは頷いて翼を羽ばたかせファイヤーの飛んでいった方に向かって飛ぶのだった。

シユンはフライゴンに乗つてファイヤーが飛んでいったと思えるシロガネ山の山頂

付近への1つへと向かう。フライゴンと共にその場所に向かうと、そこは火山地帯となっていて地熱で周りの気温も高温となっている。

「暑い・ファイヤーが飛んでいったのはこの火山地帯の方みたいだけど、どこだろう？」  
シユンは周りの気温の暑さで流れる額の汗を手で拭いて、ファイヤーはどこに居るかを探す。

「おそらくファイヤーは一時、羽を休めるためにこのシロガネ山に来たのでしよう！伝説のポケモン達は各地を回って飛んでいますが、体を休めるために人間にはわからない場所で寝たり、休憩を取ります。このシロガネ山はファイヤーが体を休める場所の1つなのですよ！」

メロエツタはファイヤーがここに来た理由は羽を休めるためだろうとシユンに説明する。伝説のポケモン達にはわからない場所で寝たり、休憩をしたりする場所があると言う。

「そうなんだ！確かにこんなところに人はめつたに来ないもんね！」

シユンはメロエツタの説明を聞いて確かにこんな高温の火山地帯に人はめつたに来ないからと納得する。

シユン達がそのまま火山地帯の上に向けて飛んでいると……！！

「マスター、居ましたわ。あそこです！」

ディアンシーがファイヤーを見つけてファイヤーが居る場所を指差す。シユンとメロエツタもその方向に目を向けると、シロガネ山の山頂の1つである火口の淵に足を置いてファイヤーは羽を休めていた。

「本当だ! あんなどころで休んでる… あんなどころまで行くのは危険だし… どうしようかな?」

シユンは火山の火口に止まって休んでいるファイヤーを見つけたが、火口の方まで行くのは危険と言いだしようかととりあえずファイヤーから少し離れた地点でフライゴンから降りて考える。

「それならここから攻撃してファイヤーの注意をこちらに向けましょう! そうすればファイヤーも気づいて反撃のためにバトルするでしょう!」

メロエツタは考えているシユンにここから攻撃してファイヤーの注意をこちらに向けようと提案する… そうすればファイヤーも反撃のためにこちらに来るだろうと言う。

「なるほど… そうだね、それは良い考えだ。出てきて! エレブー!」

「エレブー!」

シユンはメロエツタの考えに賛成し、ファイヤーと相性の良いエレブーを出す。シユンはエレブーに攻撃の指示を出そうとしたその時…

「フオオ〜!!」

火口に止まっていたファイヤーがシユン達の気配を感じ取り高らかに叫ぶと、シユン達の方に目を向ける。そして、ファイヤーは休んでいるのを邪魔されたからかシユン達に対して怒りを露わにし、シユン達の真上に飛んでくる。

「さすがはファイヤー！気配だけで僕達に気づいてすぐに戦闘体勢に入るなんて！でもちよūd良いや！ふいうちは好きじゃないんだ！ファイヤー！僕はキミのその美しさ、そしてその気高さに目を奪われた！どうか僕達とバトルをしてほしい!!!」

シユンは気配だけで自分達に気づいたファイヤーをさすがだと思い、そしてこちらに來たファイヤーにその美しさと気高さに目を奪われたと言って自分達とバトルをしてほしいと言う。

「……フオオ~~~~!!!」

ファイヤーはシユンがそう言うのと、シユンのことをじっと見た後、高らかに叫び戦闘体勢に入る。

「ありがとう！ファイヤー！メロエツタとディアンシーはそこで見てて、僕達でファイヤーをゲットして見せるよ！」

「レップ~~~~!!!」

シユンは自分達とバトルをしてくれるファイヤーにお礼を言い、エレブーと一緒に戦闘体勢に入る。



「いよいよ始まりますね。マスターとファイヤーとのバトルが!」

「はい!ですが、どうしてファイヤーはマスターとのバトルを受けたのでしょうか!私達と同じ伝説や幻のポケモンはわざわざ自分を捕まえようとする者を相手に全力を出してバトルしようとはしません。どうしてでしょうか?」

メロエツタがいよいよバトルが始まると言い、ディアンシーはファイヤーがどうしてシユンとのバトルをわざわざ受けたのかと考える。自分達と同じ伝説や幻と言われる存在のポケモンはわざわざ自分を捕まえようとする者と戦おうとせず、邪な考えを持つ者には圧倒的な力で簡単に倒して去って行くと言い。なんでだろうと考える。

「おそらくはファイヤーがマスターは悪い心の持ち主ではないと思っただけでしょう!伝説や幻と言われるポケモンは少なからず相手の心を感じることが出来ます。マスターのファイヤーに対する思いを感じ取り、少なくとも相手をする価値があると判断したのでしょうか。だからすぐには逃げずにバトルをしようとしているのです!さすがは私達のマスターです」

メロエツタはファイヤーがシユンの心を感じ、悪い人間ではないと感じ、自分に対する思いを感じ取り、すぐには逃げ出さずにバトルしようとしているのだと言う。

「それじゃあ行くよ!エレブー、かみなり!」

「レッツ〜!!」

シユンはエレブーに“かみなり”を指示し、エレブーはファイヤーに“かみなり”を放つ。

「フオウ！フオウ！！」

ファイヤーはエレブーの“かみなり”を交わすと、エレブーに向かって“かえんほうしゃ”を放つ。

「エレブー！“ひかりのかべ”だ！」

「エツレブ〜！」

シユンはエレブーに“ひかりのかべ”を指示すると、エレブーは“ひかりのかべ”でファイヤーの“かえんほうしゃ”の威力を半減させ受け止めようとする。しかし…！

「レブツ！レブ〜」

「エレブー！」

“ひかりのかべ”で威力が半減したにもかかわらず、ファイヤーの“かえんほうしゃ”を受けてエレブーは吹っ飛ぶ。

「大丈夫！エレブー！」

「レブツ！」

シユンが吹っ飛んだエレブーを心配し大丈夫かと聞くと、エレブーはゆっくりと立ち上がって大丈夫だと言う。しかし、シユンはエレブーの息が上がっていることに気づ

く。

「(「ひかりのかべ」で防御をしていたのにもかかわらずここまでのダメージが!さすがはファイヤー!けど...) 諦めない!エレブー!もう一度、**「かみなり」**だ!」

「レブツ!エツレブ〜!!」

シユンはファイヤーの強さに驚きながらも、諦めないと言ってエレブーにもう一度**「かみなり」**を撃つように言う。エレブーはもう一度ファイヤーに向かって**「かみなり」**を放つ。

「フオウ!フオオ〜!!」

ファイヤーはまたも素早い動きで**「かみなり」**を交わすと、エレブーに向かって**「かえんほうしゃ」**を放つ。

「エレブー交わすんだ!交わしてからの**「かみなりパンチ」**!」

「レブツ!エ〜レブ〜!!」

シユンはファイヤーの**「かえんほうしゃ」**を交わすようにエレブーに指示し、**「かみなりパンチ」**を撃つように言う。エレブーは**「かえんほうしゃ」**を交わすと、ファイヤーに**「かみなりパンチ」**を撃つ。

「フオウ!フオウ〜:~:~」

ファイヤーはか**「えんほうしゃ」**を撃った直後で交わすことが出来ずに**「かみなり**

パンチ”が直撃してファイヤーを吹っ飛ばす。効果抜群だ。  
「フォウ！」

しかし、ファイヤーは”かみなりパンチ”を受けた直後、すぐに体勢を立て直し上空に居るエレブーを”つばさでうつ”で地面に叩きつけた。

「レブ〜！」

「エレブー！」

ドゴツ!!……

エレブーは上空に居たため交わすことが出来ずに地面に叩きつけられる…そして……

「レブ〜……」

エレブーは”つばさでうつ”のダメージで戦闘不能になる。

「エレブー！大丈夫！」

「レブ〜……」

シユンは戦闘不能になったエレブーの所に行ってエレブーに大丈夫かと聞くと、エレブーは立ち上がれないまでも、ゆっくりとその体を起こす。シユンはエレブーが大丈夫なことにホツとする。

「エレブー…キミはよくやってくれたよ！ゆっくり休んで！次はキミだよ！頼むよサイ

ドンー!」

「ドゥーン!」

シユンはエレブーをよく頑張ったと言つてボールに戻すと、次はサイドンをボールから出す。

「頼むよサイドン! “いわなだれ” だ!」

「ドゥーン!」

サイドンは空中から岩を出現させファイヤーに落とす。

「フオウ! フオウ〜!!」

ファイヤーは “いわなだれ” を素早い速さで次々に交わすと、サイドンに “かえんほうしや” を放つ。

「ドオ〜ン!!」

ファイヤーの “かえんほうしや” をサイドンは腕をクロスさせて受け止める。サイドンには効果がいまひとつでありながら、その威力でサイドンを少しその場から後退させる。

「大丈夫かい! サイドン!!」

「ドゥーン!」

シユンはサイドンに大丈夫かを聞くと、サイドンは大丈夫だと言うように頷く。

「よし！サイドン、今度は“なみのり”だ！」

「ドオン！」

シュンはサイドンに“なみのり”を指示し、サイドンは津波を出現させファイヤーに迫る。

「フオウ！フオウ〜」

ファイヤーは交わそうとするも交わしきれずに“なみのり”をくろう。

「フオウ！フオウ〜!!」

ファイヤーはそのダメージを受けながらも、口元にエネルギーを集中させる。シュンはファイヤーが何の技を放とうとしているかを気づく。

「まさか！“ソーラービーム”！あんな技まで使えるのか！まずい：サイドン！こっちは“はかいこうせん”だ！」

「ド〜ン！ドオン！」

サイドンは“ソーラービーム”の準備に入っているファイヤーに“はかいこうせん”を放つ。

「フオウ！フオウ〜!!」

ファイヤーもエネルギーをためきつたソーラービームをサイドンに放つ。

サイドンの“はかいこうせん”とファイヤーの“ソーラービーム”がぶつかり合い、

爆発する。その爆風でファイヤーとサイドンを吹き飛ばす。

「フオウ〜」

「ドォ〜ン…」

「くっ!」

シュンも発生した爆風に目を瞑る。爆風で発生した煙が晴れていくと、そこにはファイヤーはダメージを受けているもすっかりと飛んでおり、サイドンは倒れ伏していた。

「サイドン!」

「ドォ〜ン…」

シュンは戦闘不能になったサイドンをボールに戻す。

サイドンにお疲れ様と言ってボールに戻し、リザードンをボールから出す。

「ウオオ〜!!!」

リザードンはボールから勢いよく飛び出す。目の前に居る強敵ファイヤーを威嚇する。

「ウオオ〜!!!」

「フオ〜!!!」

ファイヤーも、エレブーやサイドンよりも強いリザードンの力を感じ取り、高らかに雄叫びを上げる。

「行くよ！リザードン、＼かえんほうしや＼！」

「ウオオ〜！」

「フオ〜!!」

リザードンはシユンの指示を受けて、＼かえんほうしや＼を放ち、ファイヤーも、＼かえんほうしや＼を放つ。＼かえんほうしや＼同士がぶつかり合い、爆発する。

「リザードン！＼ドラゴンクロー＼だ！」

「ウオウ！」

リザードンは、＼ドラゴンクロー＼をファイヤーに当てようと向かっていく。ファイヤーも、＼つばさでうつ＼で対抗する。リザードンの、＼ドラゴンクロー＼とファイヤーの、＼つばさでうつ＼が何度もぶつかり合う。

「ウオウ！」

「フオウ！」

リザードンとファイヤーはお互いの技をぶつけ合い、お互いに距離をとる。

「威力は互角か！だったら…リザードン！＼かえんほうしや＼だ！」

「ウオウ〜!!」

シユンは、＼ドラゴンクロー＼と、＼つばさでうつ＼の力が互角なのを見て、リザードンに、＼かえんほうしや＼を指示する。



「フオウ!フオウ!!」

それを見て、ファイヤーも “かえんほうしゃ” で対抗する。お互いの “かえんほうしゃ” がぶつかり合い、相殺する。

「“かえんほうしゃ” の威力はやつぱり互角か!だったら、リザードン! “ドラゴンクロー”!」

「ウオウ!」

シユンはか “えんほうしゃ” が相殺されたのを見て、ぶつり技に切り替える。

「フオウ!フオウ!!」

「ウオウウウ!!」

ファイヤーは素早い動きでドラゴンクローを交わすと、リザードンを “つばさでうつ” で地面へと叩きつける。そしてだめ押しに “かえんほうしゃ” で追撃をする。

「リザードン!!」

ファイヤーの “かえんほうしゃ” がリザードンに直撃したのを見たシユンは驚いて声を上げる。

「ウオウウウ!!」

リザードンはシユンの呼びかけに伝えてファイヤーの “かえんほうしゃ” から勢いよく翼を羽ばたかせ飛び出す。しかし、立て続けに攻撃を受けたため、ダメージが酷く

息切れをしている。

「リザードン！ 畳みかけるよ。 “かえんほうしゃ”！」

「ウオウ〜！」

「フオウ〜〜！」

リザードンとファイヤーの “かえんほうしゃ” がぶつかり合い、お互いに打ち消し合  
い、爆風が起きる。

「今だリザードン！ ファイヤーを捕まえるんだ!!」

「ウオウ〜！」

シユンは “かえんほうしゃ” の衝突で発生した爆風を見て、リザードンにファイヤー  
を捕まえるように言う。

「ウオウ〜！」

「フオ〜！ フオ〜〜!!」

煙が晴れると、リザードンは見事にファイヤーを捕まえていた。ファイヤーは驚きな  
がらもリザードンを振り払おうとする。

「リザードン！ 絶対に離すな。そのまま “ちきゆうなげ” だ!!」

「ウオウ!!」

シユンはリザードンに “ちきゆうなげ” を指示すると、リザードンは空高くファイ

ヤーを抱えて上昇し、空中で地球に見立てて回転しながら降下する。

そして……

「ウオオ〜!!」

「フオ〜〜!!」

ファイヤーをそのまま地面へと叩きつけ、リザードンはシユンのすぐ前に下りてくる。そして、ファイヤーを叩きつけたことで発生した煙が晴れていく。

「フオ〜!!」

ファイヤーは“ちきゆうなげ”をまともに受けて倒れていた体でゆつくりと立ち上がる。しかし……。

「フオウ・フオオ〜……」

“ちきゆうなげ”を受けても立ち上がったファイヤーだったが、ダメージが大きかったためその体をゆつくりと地面に倒した。

「やった!今がチャンスだ。モンスターボール!!」

シユンは倒れたファイヤーに向かってモンスターボールを投げる。ボールがファイヤーに当たるとボールの中に吸い込まれてボールが数回揺れる。

そして……

ポンッ!!

モンスターボールのスイッチがシユンにファイヤーをゲットしたことを知らせる。

「やった！ヤッタア〜!!ファイヤーをゲット出来たあ!!」

シユンはファイヤーの入ったボールを持ってファイヤーがゲット出来たことに大喜びする。

「やりましたねマスター!!」

「すごいですわマスター!!」

「ウオウ!!」

ファイヤーをゲット出来たのを見て、メロエツタとディアンシーがシユンの所に来る。

「うん！リザードン達が頑張ってくれたおかげだよ!」

シユンはリザードン達が頑張ってくれたおかげでファイヤーをゲットすることが出来たと喜ぶ。

「よし、ファイヤーを回復させるために一度ポケモンセンターに行こう!」

「はい!」

「ええ!」

シユンはダメージを負っているファイヤーを回復させるためにドレディアとゴーリキーを回収してから、ポケモンセンターでファイヤーを回復させてもらった。騒ぎにな

るのは好きではないのでジョーイさんには内緒にしてもらった。そして、シユンはファイヤーを回復させた後にゴリキーを預けてシロガネ山に戻り、人気のない奥の方まで来るとモンスターボールからファイヤーを出す。

「出てきて!ファイヤー!」

「フオウ!」

シユンはボールを投げると、そこからファイヤーが勢いよく飛び出して来る。

「ファイヤー……」

シユンは出てきたファイヤーを見て、その美しく気高い姿に目を奪われる。

「フオウ?」

ファイヤーは自分を見ているシユンを次の行動を待つようにジツと見ている。

「あっ!ゴメンねファイヤー!キミのその美しい姿に見とれてしまった。ファイヤーこれからよろしくね!!」

「フオウ!!」

シユンはファイヤーに思わず見とれてしまったと謝ると、ファイヤーにこれからよろしくと言ってゆつくりと近づいてファイヤーの頬を優しく撫でる。

「フオウ!!」

ファイヤーは高らかに雄叫びを上げて了解と言うように頷く。

シユンはシロガネ山で思わぬ存在と遭遇する。伝説のポケモンファイヤーを苦戦しながらもゲットすることに成功したシユンはこれから一緒に頑張ろうとファイヤーに言い、ファイヤーもそれに頷くのだった。

## シロガネ山での出会い…!双子の小さな竜…。

これは：シユンとメロエツタ達がシロガネ山で修行を始めたばかりの頃の話しである。

リザードやビブラーバがシロガネ山で特訓を始めて数日でリザードンとフライゴンへと進化を果たし、ゼニガメと出会う前の事である……。シユンはシロガネ山の森の奥：森と岩場が隣接した場所：川も近くに流れているこの場所にベースキャンプを作り、そこを拠点にポケモン達の特訓を開始した。

その日、シユン達はシロガネ山で手持ちのポケモン達と技の特訓をしていた……。そしてシユンは現在、シロガネ山の岩場地帯で大岩を相手に見立てて技の特訓をしていた。

現在、フライゴンやドレディアはエリカのところを預けている：（現在、カントー地方ではフライゴンやドレディアは生息していないため下手にオーキド博士のところへ預ける訳にも行かずポケモンセンターから電話でタマムシジムジムリーダー”エリカ”をお願いし預かってもらっている。）

シユン「リザードン！ “かえんほうしゃ”！フリーデン！ “サイコキネシス”！」  
「ウオウ〜〜!!」

「デイン〜!!」

シユンが指示を出し、リザードンは「かえんほうしゃ」で大岩を粉碎し、フリーデインは「サイコキネシス」で大岩を砕いた。

「よし、リザードン、フリーデイン・2人ともその調子だよ!」

「ウオウ!」

「デイン!」

シユンはリザードンとフリーデインが良い調子だと褒める。

「次はキミ達だよ! フシギダネは「はっぱカッター」! パルシエンは「とげキャノン」!!」

「ダネ!」

「パル!」

フシギダネは「はっぱカッター」で大岩を切り裂き、パルシエンは「とげキャノン」で大岩を粉碎した。

「よし! 良いよ2人とも。最後に: ニドキング、「にどげり」! ゴローン、「すてみタックル」!」

「ニド!」

「ゴロ〜!」



ニドキングは“にどげり”で岩を粉碎し、ゴローンは“すてみタツクル”で大岩を木っ端微塵に粉碎する。

「よし!みんな良い調子だよ。この調子でどんどん技を鍛えていこう」

「ウオウ!」

「 Dein!」

「ダネダネ!」

「パル!」

「ニド!」

「ゴロ!」

シユンがそう言うトリザードン達は頷く。

「マスターとみんなの調子は良いみたいです」

「そうですね。特訓のおかげで技の威力も少しずつ上がってきていますね」

シユンとリザードン達の特訓の様子を向こう側で見ていたメロエツタとディアエツタも同意しみんなは特訓のおかげで技の威力も少しずつ上がっていると云った。

そして、しばらくシユンはポケモン達と一緒に技の特訓やバトルを想定した訓練を続

けていく：そしてそれから数時間が立つ。

「よし！みんなそろそろ休憩しようか。」

「ウオウ!!」

シユンが数時間特訓していた事もあり、みんなにそろそろ休憩しようかと言うと、リザードンが代表して応える。

そして、みんなは座って休んだりと様々な方法で休憩を取り始めた。

「マスター！リザードン達も順調に技の威力が上がってきていますわね」

「ええ。シロガネ山で特訓を始めてから数日：みんなのレベルも上がってきていますね」

「うん、そうだね。この調子でどんどんみんなを鍛えていこう！」

シユンとリザードン達の特訓の様子を見ていたディアンシーがリザードン達の技の威力が順調に上がってきていると言い、メロエツタも同意しシロガネ山で特訓を始めて数日：みんなのレベルが上がってきている事を確認し、シユンも2人の話を聞いて：この調子でどんどんみんなを鍛えていこうと決意を固める。

「よし！休憩終わり。みんな特訓の続きを始めるよ」

「ウオウ！」

「デインー!」

「ダネダネー!」

「パール!」

「ニド!」

「ゴロー!」

しばらく休憩していたシユン達はその後、特訓を再開し：シユン達は日が落ちるまで特訓を続けるのだった。

「よし、今日の特訓はここまで!みんな、ゆつくり休んでね」

「ウオウ〜:~!」

「ダネ〜:~!」

「ニド〜:~!」

「パツ〜:~!」

「デイン〜:~!」

「ゴロ〜:~!」

日が落ちて辺りが暗くなり始めたため：シユンはポケモン達の体力や健康も考慮して今日の特訓を終了させ、リザードン達にゆつくり休むように言い：それを聞いたリザードン達はそれぞれ座ったり、寝そべったり、木に寄っかかったりとそれぞれ違った

感じで特訓で消耗した体を休めている。

「みんな：お疲れのようですね。まあ、あれだけ特訓を頑張っていたんですものね」  
「そうですね。それではマスター！リザードン達を休ませている間に夕飯の準備をしましょう」

リザードン達の休む様子を見たディアンシーは、みんな疲れているのだと言って：あれだけ特訓を頑張っていたのだから疲れるのも当然だと納得し、メロエツタは同意した後、リザードン達を休憩させている間自分達は夕飯の準備を済ませようとシユンに話す。

「うん、そうだね！それじゃまずは近くの川から水を汲んでこようか！2人とも手伝ってくれる？」

「ええ！」

「はい！」

シユンは夕飯の準備などに必要な水を汲むためにバケツを持ち川に向かう。メロエツタとディアンシーの2人に手伝ってくれる？とお願いすると、2人とも心良く了承し水筒を手を持ちシユンと一緒に川へと歩いて行く。

そして川についたシユン達がバケツや水筒に水を汲んでいると：：川の向こう側か

ら…。

「んっ!なんだろう?あれ」

「えっ?」

「どうしました?」

川の向こう側から何かがちらに向かつて流れてきている事にシユンが気づき：何だろう?と目を細めて見る。

メロエツタとディアンシーもシユンの様子に気づいてシユンの目線の方に顔を向ける。

川から細長い薄紫色の物がプカプカと浮かび流れてくるのをシユンは恐る恐る手を伸ばして拾う。

「これって!ポケモン!!」

シユンが川から流れて来た物を拾うと、それがポケモンだった事に気づいて驚く。

「このポケモンはミニリユウですよマスター!」

「ミニリユウ!これが!」

メロエツタからこのポケモンがミニリユウというポケモンだと教えられると、シユンは今手に抱えているポケモンがミニリユウだと知り驚いた後：ポケモン図鑑で調べる。

「ミニリユウ…ドラゴンポケモン。脱皮を繰り返してどんどん大きくなる。生命力あ

ふれるポケモン……」

ポケモン図鑑からミニリユウについてのデータが表示される。

【個体数が極端に少なく、カントー地方では伝説のポケモンとして扱われているが、近年別の地方で目撃例が増え始め：伝説のポケモンとは呼ばれなくなっている……】

ポケモン図鑑にミニリユウの姿とデータが表示されていく。

「ミニリユウ……まさか！カントーでは伝説のポケモンとまで言われているミニリユウに  
出会えるなんて……！」

「しかもマスター……このミニリユウ……非常に珍しい色違いのポケモンですよ！」

シユンは自分の故郷のカントー地方では伝説のポケモンとまで言われるミニリユウ  
に出会えた事に呆然とし、さらにメロエツタはシユンが抱くミニリユウと図鑑に表示さ  
れるミニリユウを見て、このミニリユウが非常に珍しい色違いのポケモンだと気づき、  
驚く。

「ほんとだ……図鑑に載ってるミニリユウと色が違う……でも、色が違うポケモンってそん  
なに珍しいの？」

「はい！色違いのポケモンは文字通り通常のポケモンとは体の色が違い、非常に珍しく  
極希にしか生まれないため滅多に発見出来ません……そして色違いのポケモンは通常の色  
のポケモンよりも能力が高いとも言われています！」

シユンはメロエツタに言われて：凶鑑にあるミニリュウとは色が違う事に気づき、そしてメロエツタに色違いのポケモンがそんなに珍しいのかと訪ねると、メロエツタは色違いのポケモンの希少性についてシユンに説明していく。

「大変ですわマスター!このミニリュウ、体中が傷だらけですわ!」  
「本当だ!すごい怪我だ・急いで手当てをしないと!」

ディアンシーが川から流れて来たミニリュウの体が傷だらけな事に気づき、シユンも言われて気づき、凄く怪我をしているため急いで手当てをしないとミニリュウを抱き抱える。

「急いでリュックの置いてあるキャンプに戻らないと：メロエツタ、悪いけどバケツを持ってくれるかい」  
「もちろんです。急いで戻しましょう」

シユンは急いでリュックの置いてあるベースキャンプに戻ろうとミニリュウを抱き抱え、メロエツタに悪いけどバケツを持ってくれるようにお願いすると、メロエツタは勿論ですと同意し、"サイコネシス"でバケツを持ち上げ急いで戻ろうとシユンと一緒にベースキャンプの所へと急ぐ：ディアンシーもメロエツタの分の水筒を持ってあげる。

ベースキャンプまで走り、ベースキャンプに着いたシユン達はミニリュウをマットに

そつと下ろすとリュックからいいキズぐすりを取り出して：ミニリュウの体に吹きかけミニリュウの体に包帯を巻いていく。

「これでとりあえず大丈夫かな？」

「ええ、大丈夫でしょう！後はミニリュウが目を覚ますのを待ちましょう」

ミニリュウの手当てを終えたシユンはメロエツタ達と一緒にミニリュウが目覚ますのを待つ。

その間にシユンは自分やリザードン達の夕飯の準備を済ませ、シユンはリザードン達と一緒に夕飯を食べてミニリュウが目覚めるのをジツと待つ。リザードン達には先に休むように言い、シユンは只ジツと静かに眠るミニリュウを見守っていると：：：辺りがすつかり暗くなり焚き火の炎がキャンプの周りを明るく照らす。

メロエツタやディアンシーはシユンの左右に座りシユンに寄りかかりながら眠り、シユンはそんな2人に微笑み毛布をかける：そしてシユンは眠らずミニリュウが目覚めるのを待っていると：：：。

「リュウ：」

毛布をかけられ眠っていたミニリュウが目を開ける：。

「あつ！ミニリュウが目を覚ました」

「んっ！」



「あっ!」

シユンはミニリュウが目を覚ました事に気づき、メロエツタとディアンシーもその声で目を覚ます。

「リュウ・リュウ!」

ミニリュウは起きると恐る恐る辺りを見回し、シユンの姿が目に入ると警戒した様子でシユンを睨みつける。

「良かったミニリュウ…。目が覚めたんだね」

「リュウ〜!」

シユンはミニリュウが目を覚ました事に安心し、ミニリュウに近づこうとするとミニリュウはシユンに警戒し威嚇した様子で唸る。

「そんなに警戒しなくても大丈夫だよミニリュウ!ぼくはキミが川からキズだらけで流れてきたのを見つけて手当てをしたんだよ」

「リュウ〜…」

警戒するミニリュウにシユンは優しい声で大丈夫だよと安心するように言い、川から傷だらけで流れてきたミニリュウを見つけて手当てしたのだと説明し、ミニリュウはまだ少し警戒しながらシユンの話をジッと聞く。

「ぼくはシユンって言うんだ。よろしくねミニリュウ」

「わたしはメロエツタです！よろしく」

「わたくしはディアンシーですわ！よろしくお願いしますね」

シユン達はミニリュウに自己紹介をする。

「リュウ……」

ミニリュウはまだシユン達を警戒しているのか唸つて睨みつける。

「大丈夫だよ、ミニリュウ。ぼく達はキミの敵なんかじゃないよ、安心して！」

「リュウ……？」

「本当ですわ！あなたが大怪我してたのをマスターが手当てをしてくれたのですわ！」

「そうです。そのおかげであなたの体の怪我也良くなつたんですよ」

まだ警戒している様子のミニリュウにシユンは優しく自分達は敵じゃないと安心するように言う：するとミニリュウはシユンの優しい声と表情に少しばかり警戒心を解いてシユン達を見つめ：ディアンシーとメロエツタもミニリュウに警戒心を無くすように丁寧に説明し説得する。

「あとはこの体力の回復する木の実を食べれば大丈夫だよ。さあ、ミニリュウ食べて！」

シユンはミニリュウに体力の回復する木の実を差し出し、ミニリュウに食べるように言う。

「リュウ……」

ミニリュウは警戒しながらも恐る恐る木の実の持つ手に近づいて、口を近づけ木の実をパクつと食べる。

「リュウー!リュウリュウ!!」

ミニリュウは木の実を食べると、美味しかったのか一気に木の実を食べてしまった。

「ふふ!美味しかったかい。ミニリュウ」

「リュウ!!」

シユンはミニリュウの食べっぷりに嬉しくて微笑み、ミニリュウはシユンに対しての警戒が薄れたのか笑顔で頷く。

「どうやらマスターに対しての警戒心が薄れたようですね。それであなたはどのように傷だらけで川から流れてきたのですか?」

「リュウ?リュウリュウ!!」

メロエツタはシユンへの警戒心が薄れたのを見て、ミニリュウに傷だらけで川から流れてきた訳を訪ねるとミニリュウはキョトンとした後にゆっくりと説明し始める。

「ふむふむ・なるほど・そういうことでしたか・」

「どういうことメロエツタ?ミニリュウは何て言ってるの?」

メロエツタはミニリュウの話しを聞いてなるほどと納得し、シユンはメロエツタにミニリュウは何て言ってるの?かと訪ねる。

「それはですね・・・どうやらこのミニリュウ・この川の上流にある湖の岩場の割れ目に隠れた洞窟に住んでいるらしいのですが・・・どうやらこのミニリュウ・興味本意で洞窟から出てしまったところを人間に襲われてしまい・何とか逃げれたようですが・ダメージも負い体力も限界になり・そのまま川に流されて来たそうです」

このミニリュウは川の上流にある湖・・・そこにある岩場の割れ目に隠れた洞窟に住んでいたらしいのだが・ミニリュウは興味本位で外に出てしまい、そこを人間に見つかって襲われてしまい・何とかダメージを負いながら逃げれたのだが体力が限界になり、そのまま川を流されてきたのだとメロエツタがシユンに通訳する。

「そうだったのか・・・ただでさえミニリュウは希少・それにこのコは色違いだからな・トレーナーに狙われても無理はないけど・・・けど・」

メロエツタからミニリュウの傷だらけの理由を聞いたシユンはミニリュウは只でさえ希少でしかもこのミニリュウは色違いなため・トレーナーに見つかつたら狙われても無理はないと思う・しかし、シユンは拳をギュツと強く握りしめ心の中にある感情で支配されていた。

「( )までミニリュウを痛めつけることは無かつたじゃないか!!!」

その感情は怒りである・・・シユンは怒っていた・トレーナーがポケモンをゲットするためにある程度ポケモンを弱らせる必要が有るのは理解している・・・しかし、このミ

ニリユウはそのダメージの限度を超えて：後少し手当てが遅れていたら危なかったほどのダメージと大怪我を負っていたため：シユンはゲット出来る段階以上にミニリユウを痛めつけた人間に対して怒りを露わにするのだった。

「ええ・マスターの言う通りですわ！酷すぎます！」

ディアンシーも話しを聞いていてその人間に対して怒りを露わにする。

「ごめんねミニリユウ・キミをそんなに傷つけて！」

「リユウ……リユウ……!!」

シユンは申し訳なさそうにミニリユウの頭を優しく撫でながら謝り、ミニリユウはそんなシユンの純粋な気持ちに伝わったのかミニリユウは気持ち良さそうにシユンの手にすり寄る。

「そんな！マスターがミニリユウを傷つけた訳では……！」

「いえ・マスターは自分と同じ人間がミニリユウに酷い事をした事に対して謝っているんです……」

「マスター……何て誠実で立派な方なのでしょう……！」

「ええ・そうですね。さすがわたし達のマスターです……（しかし：ミニリユウを傷つけたのは本当にトレーナーなのでしょうか？それにしても：傷の後がどのポケモンの技とも一致してないような……もしかしたら……）」

シユンがミニリユウに謝るとディアンシーがシユンが傷つけた訳ではないと言うが、メロエツタがシユンは自分と同じ人間がミニリユウに酷い事をした事を謝罪しているのだと説明し、それを聞いたディアンシーはシユンを誠実で立派だとキラキラとした笑顔で褒め、メロエツタもさすが自分達のマスターだと褒めつつ：内心でミニリユウを傷つけたのは本当にトレーナーなのか？と疑問に想い：ミニリユウの傷後を見てどのポケモンの技の後とも一致しないようなと思ひ：もしかしたら！とメロエツタの頭の中にある予想が浮かぶ。

「ミニリユウ。明日になったらキミの住んでる洞窟に連れて行ってあげるからね」  
「リユウリユウ〜!!」

シユンがそう言うと、ミニリユウは笑顔になり喜ぶ。

「そうですね。それではタご飯の片付けをしたら今日はもう休みましょう!」  
「うん、そうだね。」

その後シユンはミニリユウをディアンシーに任せる：この時ミニリユウが中々シユンの側を離れようとせず苦勞する：どうやら手当てしてくれた事とシユンの純粋な優しい気持ちを感じシユンに懐いたようだ。

そして何とかメロエツタとリザードン達と一緒に夕飯の片付けを終わらせると就寝の準備に入り、ボールに入りたい者はボールへ：外で寝たい者へと別れる：そしてシユ

ンは寝袋へと入る：メロエッタとディアンシーは隣同士で布団に入り眠り：ミニリュウにも優しく毛布を被せる。

「おやすみメロエッタ！ディアンシー！みんな！」

「おやすみなさいマスター！」

「おやすみですわ！マスター！」

「ウオウ！」

「ディーン！」

「ダネ！」

「おやすみミニリュウ」

「リュウ：？！」

そして寝袋の中に入ると横になり：メロエッタやディアンシー達におやすみと言い、メロエッタ達もおやすみと返事し：横になり眠りに入る：ミニリュウにもおやすみと言ってみんなは眠りに入った。

そしてシュン達が就寝してから：しばらく時間が立ちみんなが眠ったころ…。

ゴソゴソ…。

「んっ？」

シュンの寝袋の中がゴソゴソと音がなり、その音にシュンが目を覚ますと：そこに

は。

「リュウ〜〜！」

「ミニリュウ：」

いつの間にかミニリュウがシュンの寝袋の中へと入り、シュンの胸にスリスリと体をすりあわせていた。

「どうしたのミニリュウ？眠れないのかい？」

「リュウリュウ〜〜！」

シュンがそう言つて頭を撫でるとミニリュウは気持ち良さそうにシュンの手にすり寄る：それを見たシュンは微笑む。

「ははっ！それじゃおやすみ！ミニリュウ」

「リュウ〜〜!!」

そうしてシュンとミニリュウも眠りに入るのだった。

そして翌朝：シュン達は目を覚ますと準備を済ませベースキャンプを荒らされないようにニドキングとゴローンを残し：ミニリュウと一緒に川を進み、ミニリュウの住む上流の湖にある岩場の洞窟へと向かっていた。

「リュウ〜リュウ〜!!」



「ミニリュウゝそんなすり寄り寄ったら歩きにくいよ!」

「あらあら!ミニリュウつたらすっかりマスターに懐いてしまいましたね」

「ええ・そうですね、見ていて微笑ましいですわ!」

シユンがミニリュウを抱いて歩いてみると、ミニリュウがシユンの顔にすり寄り：それを見たメロエツタとディアンシーは微笑ましくなった。

そして、そんなやり取りを続けながら川を登って進んでいると：やがて：：。

「見えて来ましたわマスター!湖ですわ!」

川を沿っていた森をぬけるとそこには一面太陽の光が反射してキラキラと輝く青々とした綺麗な湖が広がっているのだった。

「綺麗な湖ですわマスター!」

「そうだね：シロガネ山の中にこんな広い湖があつたなんて：今までシロガネ山で修行をしていたけど知らなかつたな：：。」

メロエツタが綺麗な湖だと言うとシユンも頷き、シロガネ山の中にこんな湖があるなんて知らなかつたな：と思いつつ広い湖を静かに見つめている：：。

「さてミニリュウ。キミの住んでる洞窟のある岩場はあそこかな?」

「リュウゝ：。」

シユンは湖を見回すと、湖の奥の方にシロガネ山の谷と隣接する岩場があるのを見つ

ける。

「さて：それじゃあ、あの岩場まで行こうか！ミニリュウ！2人とも！」

「リュウ！」

「ええ！」

「はい！」

シユン達が岩場の所に向かおうとしたその時！！

「マスター！危ない！」

「なっ！」

「リュウ！」

突如、湖から黄緑色の炎がシユンへと放たれる：シユンは間一髪メロエツタのおかげで交わす事が出来た。

「今のって、もしかして、りゅうのいぶき？：どうして？」

シユンが放たれた技の正体を考えていると……。

「リュウ~~~~!!!」

湖の中からミニリュウが顔つきを鋭くさせて唸り声を上げて出てきた。

「あれはミニリュウ！このコと違って通常のミニリュウみたいだけど……」

シユンは今、自分が抱いているミニリュウと同じミニリュウが湖から現れた事に驚

き、今自分が抱いている色違いのミニリュウとは違い通常の体色のミニリュウみたいだけども思っているよ……。

「マスター!もしかしたらこのミニリュウはその子の仲間ではないでしょうか」

「そうか!この子を探して洞窟から出てきたんだね:それで:」

「この子を抱いているマスターを見つけて、マスターをこの子を抱った敵だと思つているといふ事ですか:」

「ディアンシーがシユンにこのミニリュウはシユンが今抱いている色違いのミニリュウの仲間ではないかと言ひ、それを聞いたシユンはそれでこの子を探して洞窟から出てきたのだと納得し、そしてメロエツタはそれでこの色違いのミニリュウを抱いているシユンを見つけて、シユンを拐った敵だと思つて威嚇しているのだと確信する。

「そんな!誤解ですわ!マスターはこの子を送り届けようとしただけですのに!」

「良いんだよディアンシー!きちんと伝えれば分かつてくれるよ!ねえミニリュウ!安心して。ぼく達は怪我をしていたこの子を見つけて手当てして送り届けようとしただけなんだ:だからぼく達はキミの敵じゃないよ」

シユンを色違いのミニリュウを拐った敵だと思ひ警戒するミニリュウにディアンシーが反論するが、シユンは良いんだよとディアンシーを抑え、自分を敵視するミニリュウに自分達は敵じゃない事を丁寧に説明しながら近づく。

しかし……。

「リュウ……!!!」

ミニリュウは警戒を解かずに、近づいて来るシユンに「りゅうのいぶき」を放つ。

「マスター!」

「危ないですわ!」

シユンに放たれた「りゅうのいぶき」が迫ろうとしたその時!!!

「リュウ……!!」

シユンが抱えている色違いのミニリュウが同じく「りゅうのいぶき」を放ち、迫り来る「りゅうのいぶき」を防ぎシユンを守る。

「リュウ!!」

シユンに「りゅうのいぶき」を放ったミニリュウは仲間の色違いのミニリュウがシユンを守った事に驚く。

「ミニリュウ・ぼくを守ってくれたの?」

「リュウ!」

「ありがとうミニリュウ!」

「リュウ!リュウ!!」

シユンは自分を守ってくれた色違いのミニリュウにお礼を言うと、ミニリュウは笑顔

で頷いた後にシユンの腕から降りて湖に浮かぶミニリュウへと近づき、何やらミニリュウと話し始める。

「リュウー!リュウリュウ〜!」

「リュウリュウ!リュウ〜!」

通常の色の子のミニリュウが色違いのミニリュウに対して何か文句を言う風と言うと、色違いのミニリュウは何やら説得するように通常のミニリュウと会話をしている。

「どうやらこの子はこのミニリュウにわたし達が敵ではないと説得してくれているようです」

二二の通常と色違いのミニリュウの会話を聞いていたメロエツタが、色違いのミニリュウが通常のミニリュウをシユン達が敵では無いことを説得してくれているとシユンに教える：その中でも色違いのミニリュウは通常のミニリュウを説得する：：昨日シユンが人間に襲われて怪我をして倒れた自分を見つけて手当てしてくれた事を：そして自分が住んでいるこの湖まで連れて来てくれた事を話す。

「リュウ〜リュウ!!」

「リュウ〜リュウ!」

そしてしばらくそうしていた後、色違いのミニリュウの説得が通じたのか通常のミニリュウがシユンへと近づいて申し訳なきそうにしながら頭を下げる。

「どうやらこの子は分かってくれたようですね：今はマスターを攻撃した事を謝つていきます」

「そうなんだ！良いんだよ。ミニリュウ！分かってくればね」

メロエツタがシユンにミニリュウ達の会話を通訳すると、それを聞いたシユンは分かってくれば良いんだよと通常のミニリュウの頭を撫でる。

「リュウ〜〜!!」

通常のミニリュウもシユンの撫でる手が気持ち良いのかシユンの手にすり寄る。

「それじゃあ仲間が迎えに来たみたいだし：ここまで送れば大丈夫かな？そろそろお別れしようか！」

「いえ、マスター：念のため岩場の割れ目にある洞窟のところまで2人を送った方が良いでしょう！」

シユンは仲間のミニリュウが迎えに来たため、後はここまで送れば大丈夫かなと思いきろそろお別れしようかと言うと、メロエツタはシユンに念のため岩場の割れ目の洞窟の所まで送ろうと提案する。

「そうだね：その方がいいか！出てきてパルシエン！」

「パッ！」

シユンはメロエツタの提案に同意し、ボールからパルシエンを出す。

「：パルシエン！ぼく達を乗せてあの岩場の所まで泳いでくれるかな？」  
「パル！」

シユンはパルシエンにお願いすると、パルシエンは快く頷く。

そうしてシユンはパルシエンに器用に乗ると、パルシエンは岩場を目指して泳ぎ始める。ミニリュウはまだ完全に治っていないため、シユンが抱き抱えメロエツタはシユンの肩に座りディアンシーはシユンの背中に乗り、通常のミニリュウがついていける速度で岩場まで泳いで行く。

そしてしばらく岩場に向かって泳いで行くと……。

「あつ！岩場が見えて来ましたわマスター！」

「本当だ！もうすぐ仲間のところに帰れるよミニリュウ：きつとキミの仲間もキミの事を心配してるだろうからね」

「リュウ！」

「リュウリュウ!!」

ディアンシーが岩場が見えて来たと言うと、シユンも気づきミニリュウにもうすぐ仲間のところへ帰れると言い、ミニリュウの仲間も心配してるだろうからと言うと色違いのミニリュウは喜び、通常のミニリュウはその通りだと頷く。

「リュウ!!リュウ！」

「リユウ……」

そして通常のミニリユウが怒った感じで色違いのミニリユウに何かを言い、色違いのミニリユウは何かしよんぼりとしている。

「なんて言ってるの？ミニリユウ達」

「どうやらこのミニリユウ達は双子の兄妹らしいです：通常の方が兄で色違いの方が妹らしいですね。この子達が住む洞窟からは出ては行けないらしく、勝手に外に出た事を怒っているみたいです」

シユンがメロエツタにミニリユウ達が何て言っているの訪ねると、メロエツタが通訳する：このミニリユウ達は双子の兄妹で通常のミニリユウが兄で色違いのミニリユウが妹だと言う。

どうやらミニリユウ達の住む洞窟からは勝手に出ては行けないらしく：勝手に外に出て行った事を兄のミニリユウは怒っているのだと言う。

「そうだったのか、この子達仲間ってだけじゃなく兄妹だったのか：そうかこの子は外への好奇心で飛び出しちゃったんだね……」

メロエツタから聞いたシユンはそう納得した後色違いのミニリユウが洞窟の外への好奇心から外に飛び出してそこを人間に襲われた事を思い出す。

「：リユウ……」



「そんなしよんぼりしないでミニリュウ：外の世界が気になってつい外に出ちゃったんだよね」

しよんぼりしている色違いのミニリュウの頭をシユンは優しく撫でて励ます。

「でも・勝手に出て行ったらキミの仲間達も心配するから次からは洞窟を抜け出しちゃ行けないよ：いいね！」

「リュウ!!」

そしてシユンは、ミニリュウに次からはみんな心配するから勝手に洞窟を抜け出しちゃ行けないよと注意しながら頭を撫で、ミニリュウは笑顔で頷く。

そうしてシユンはミニリュウ達と楽しく会話しながら湖をパルシエンに乗って岩場の割れ目にある洞窟まで後少しの所まで来たその時!!

ブクブクブク!!!

「パルシエン!止まって!」

「パッ!」

突如、シユン達の前方の湖から激しく気泡が上がりだし、それに気づいたシユンがパルシエンに止まるように言うとパルシエンは止まり、隣を泳いでいた通常のミニリュウも止まる。

「いったい何ででしょうか?」

メロエツタが目の前で上がる気泡を見て、いったい何だろうと思つてゐると……。  
ドパアアア……ン

突如として巨大な水しぶきが天高く上がり：その水しぶきがシユン達の方に降りかかるうとするが、メロエツタが「サイコキネシス」で水しぶきを防ぐ。

「ありがとうメロエツタ！」

「いえ、これくらいどうつて事ないですわマスター」

「それにしてもいったい何が起こつたのでしよう？」

シユンがメロエツタにお礼を言い、メロエツタはこれくらいどうつて事ないと返事し、ディアンシーはいったい何が起こつたのだと思ひ水しぶきが上がった前方を見る。

そして水しぶきが収まると：そこには：巨大で黒くクレーン車みたいな形の2本のアームがついた機械が出てくる。

「これつてロボット？ いったい何だ？」

シユンが突然湖からロボットが出てきた事に驚き、いったい何だろうと思つてゐると……。

「やつと見つけたぜ！ 昨日の色違いのミニリュウ!!」

「あいつを見つけたこの湖で見張つてたかいあつたぜ！」

「待てば海路の日和ありですな親分！ 兄貴！」

すると、ロボットのの中から3人組が上がって来て、姿を現す。

「あなた達はいつたい…」

シユンは目を丸くしながら突然、湖の中から出てきたロボットに乗る3人組にいったい何者なのかと訪ねる。

「俺様は盗賊団リーダー”頭脳明晰”ガイ!!」

「俺は”武闘家サブリーダー”トクハ!!」

「俺は”歩く国語辞典”隊員のグルー!!」

そうして出てきた3人はそれぞれあだ名を言いながら名乗る…そして…。

「”俺達は泣く子も黙る!ポケモン盗賊団だ!!”」

そうして最後に全員でポケモン盗賊団と名乗った…しかし…。

「つて!おいグルー!その名乗りはダサイから変えろつて言っただろう!!」

「イテツ!!だけど親分…!俺この名乗り気に入ってんすよお〜」

そうして最後に全員でそう言っただ後にリーダーのガイがグルーの名乗りをダサイから変えろと言っただろと言っただけで殴り、グルーは殴られたが自分はこの名乗りを気に入っているとやんわりと言う。

「ポケモン盗賊団!もしかして密猟者!!」

「どうやらそのようですね…」

シユン達がポケモン盗賊団と名乗る人達が密猟者だと気づき、メロエツタも同意する。

「……リュウ〜」

「ミニリュウ大丈夫？」

その3人組を見た色違いのミニリュウは怯えてシユンにスリより、シユンはミニリュウを安心させるように頭を撫でる。

「つたく！おいガキ！その色違いのミニリュウをよこしな！そいつは俺達の獲物だ!!」

「このシロガネ山の湖にミニリュウが居る噂を聞いて捕まえに来たら、ミニリュウだけでも珍しいのにまさか色違いのミニリュウを見つけれられるとはな！それに通常のミニリュウも居るし、超ラッキーだぜ！」

「まさに一石二鳥ですね！親分！兄貴！」

「なっ！まさかミニリュウが昨日傷だらけで川から流れてきたのは！」

「ああ……湖で泳いでるミニリュウを見つけて捕まえようとしたが、昨日は逃げられちゃってな！まっ！見つけられたから良かったぜ!!そいつを捕まえて高く売って大儲けだ！」

盗賊団3人の言葉を聞いたシユンは色違いのミニリュウが昨日川から傷だらけで流れて来た理由に気づき、それを聞いたガイは馬鹿丁寧な昨日の出来事を説明し……そして

色違いのミニリュウを捕まえ高く売って大儲けだと顔をニヤけさせながら言う。

「やはりそうでしたか…ミニリュウの傷跡がわたしの知るどのポケモンとも一致していないからもしかしたら人間の手によって傷つけられたと思ってましたが…その通りでしたか!」

「ひどいですわ!ただ売ってお金を得るただけにミニリュウにあんなにひどい傷を負わせて捕まえようとするなんて…!」

メロエツタは話しを聞いて、ミニリュウの傷跡がメロエツタの知るどのポケモンの技とも一致しない事を疑問に思っており、もしかして人間によって傷つけられたのではないかと考えていたがやはりその通りだったと確信し、それを聞いたディアンシーは悲しげな様子でただ色違いのミニリュウを売って大儲けするためだけにミニリュウを傷つけ捕まえようとした事に静かに呟く。

「おっ!お前よく見れば見たことのないポケモン達を連れてるな!そいつらも頂くか!」

「さあ、そいつらとミニリュウ達をよこしなガキ!!」

「そいつらを全部売って!俺達一攫千金ですね。親分!兄貴!」

トクハがシユンの横に並ぶメロエツタとディアンシーを見つけ、見たこともないポケモン達を連れてる事に気づいて2体も頂くかと言い、ガイがメロエツタ達とミニリュウ

達を寄越すようにシユンに言う。そして最後にグルーが四字熟語で占める。

「……だまれ……!!」

盗賊団の自分勝手に酷い言葉を聞いていたシユンは顔を俯かせて：怒り心頭な様子で静かに呟く。

「あつ（怒）!! テメエ！今何だった!!」

ガイはその呟きが聞こえたのかキレる。

「だまれって言ったんだ!! ポケモンをただの金儲けのためだけに捕まえて売りさばく！お前達の身勝手な欲望でどれだけのポケモンを傷つけて来たんだ!!!」

シユンは怒りを露わにして、ポケモンをただの金儲けの為だけに捕まえ売りさばく盗賊団の身勝手さと、そのためだけにどれだけのポケモンを傷つけてきたんだと普段は出さないほどの大声で激情する。

「：マスター：」

メロエツタとディアンシーはあまり怒る事のないシユンがここまで怒りを露わにしている様子を見て呆然としている。

「ハン！馬鹿が……！ポケモンは所詮：金儲けの道具なんだよ！分かったらくだらねえ事言っつてねえで、そいつらとミニリユウ達を寄越しやがれ!!」

「だれが渡すもんか!!ミニリユウ達もメロエツタ達も絶対にお前達には渡さない!!」

ポケモンを所詮金儲けの道具だと言い、ミニリユウ達を超越するように言う盗賊団にシユンは絶対にミニリユウ達とメロエツタ達も絶対に渡さないと言う。

「はっ!だったら無理矢理奪い取ってやるぜ!トクハ!グルー!」

「よし!」

「了解です。」

そう言つて、盗賊団達はロボットのの中に入り操縦し、ロボットのアームを伸ばしてメロエツタ達とミニリユウ達を奪おうとする。

「金儲けのためだけにミニリユウを傷つけたお前達を絶対に許さない!!出てきてリザードン!!」

「ウオウ!!」

シユン達に迫り来るアームにシユンは冷静にそして色違いのミニリユウを金儲けのためだけに命の危険に関わる程の重傷を負わせた事に激怒し：絶対にミニリユウ達やメロエツタ達を渡さないと迫り来るアームを迎撃するためにボールからリザードンを出す。

「リザードン! かえんほうしゃ!!」

「グオウ〜!!」

リザードンの「かえんほうしゃ」が迫り来るアームの1つを破壊する。

「ちい！なにしておやがる！！あんなガキに良いようにやられてんじゃねえぞ！」

「はっ！はい！」

リルダー「ガイ」はシユンのリザードンにアームを破壊された事を怒り、トクハに命令しよう一本のアームの方で捕らえようとする。

「リザードン！「かみなりパンチ」！！」

「グオウ！グオウ！！」

シユンはまたも冷静にリザードンに指示し、リザードンは素早くアームの前に移動し「かみなりパンチ」でアームを粉碎する。

「このクソガキがあくく！！俺様に逆らうとどうなるか思い知らせてやるぜ！！おい電撃発射だあ！！」

「了解です親分！ポチツト！」

ガイは二度も邪魔された事に怒り、グルーに電撃を発射するように命令すると、グルーはボタンを押すと：ロボットのハッチが開いてそこから電撃が発射される。

「グオウ！！」

「リザードン！！」

電撃はリザードンへと命中する。



「リザードン!大丈夫かい!」

「グオウ〜!」

シユンはリザードンに大丈夫かと聞くが、かなり強い電撃だったのかりザードンは苦悶の表情を浮かべる。

「どうだ!対ポケモン用強力電撃の威力は!今度はその生意気なクソガキにお見舞いしてやれ!」

「ラジャー!!」

ガイが今度はシユン達を狙って電撃を撃つように指示し、電撃はシユンへと放たれる。

「くっ!」

「リュウ〜!」

リザードンはダメージと痺れで直ぐに動けず、電撃がシユン達へと迫り、シユンは自分の盾にするようにミニリュウを包み守る。

「マスターを傷つけさせはしません!ハア〜!!」

「マスターはわたし達がお守りしますわ!!」

すると、メロエツタは「サイコキネシス」で、ディアンシーは宝石を竜巻状に飛ばして電撃を防御する。

「ありがとう！メロエツタ、ディアンシー！」

シユンは電撃を防いでくれたメロエツタとディアンシーにお礼を言う。

「ちくしょう!!撃つて撃つて!撃ちまくれえ!!」

「はい!!」

またもや防がれた事に怒ったガイは電撃を撃ちまくるよう指示する。

「リザードンは “かえんほうしゃ”!!」

「パルシエンは “とげキャノン”!!」

シユンはリザードンとパルシエンに技を指示して：電撃を防いでいく。

「リユウ……」

色違いのミニリユウは電撃を見て、昨日盗賊団に傷つけられた恐怖を思い出したのかシユンにすり寄って震える。

「大丈夫だよミニリユウ・キミをあんなヤツらには絶対に渡さない!」

「リユウ……?」

シユンは震えるミニリユウを強く抱き締めて大丈夫だと言って、盗賊団には絶対に渡しはしないとと言うと……ミニリユウは不思議そうにシユンの顔を見上げる。

「キミは絶対に僕達が守ってみせる!!」

「リユウ……!!」

そしてシユンは優しい表情から決意の表情になってミニリュウの事を絶対に守ってみせると宣言する：それを聞いたミニリュウは嬉しさからか涙目になりシユンを見つめる。

「リュウ……」

色違いのミニリュウの兄である通常のミニリュウが自分の妹を守ってくれているシユンを見つめ、そして先ほどからシユンとシユンのポケモン達の強さを見て一種の憧れを抱いていた。

「くっそ……！何であんなガキ一人からポケモンを奪えねえ!! テメエら！電撃を全快にしろ!!」

「了解!!」

ガイがいつまでも、シユンからポケモンを奪えない事にイラつきが限度に達し、電撃の威力を最大にするように言う。

「リザードン！パルシエン！来るよ！頑張つて!!」

「グオウ……!!」

「ペア……!!」

シユンはそれを聞いてリザードンとパルシエンに頑張るように言うのと、リザードンは「かえんほうしゃ」を、パルシエンは「とげキャノン」の威力を上げて電撃を防いで行

く。

そして2体の技と電撃の威力が拮抗し、撃ち合いが続く。

「リュウ……」

「リュウ……」

そして色違いのミニリュウと通常のミニリュウはシン達のポケモンと盗賊団の技と電撃の撃ち合いをジツと見つめており：そして：目つきが変わり色違いのミニリュウは通常のミニリュウの方を向き、通常のミニリュウも色違いのミニリュウを見つめお互いに頷く：そして：。

「リュウ……!!」

「リュウ……!!」

2匹のミニリュウがロボットの電撃の発射口に向かって「りゅうのいぶき」を放つ。

ドカアアア……ン!!!

「なに!!」

「発射口が!!」

ロボットの電撃の発射口がミニリュウ達の「りゅうのいぶき」によって破壊され電撃が止まる。

「ミニリュウ達！すごいよ！良くやったね!!」

「リュウ〜!」

「リュウ!」

シユンはミニリュウ達が「りゅうのいぶき」でロボットの電撃の発射口を破壊した事に驚いた後に、2匹を良くやったと誉める。

「このやろう!!ふざけやがって!!おいテメエら!あれを使え!!」

「あれですか?あれつてまさか:あれの事ですか!!しかし、あれは威力が有りすぎてミニリュウ達もただではすみません!!」

「知った事か!!もうあんなポケモン達どうでもいい!!この俺に逆らったあの生意気なガキをぶつ飛ばさなければ気がすまねえ!!!いいからやりやがれ!!!」

「ツツ:了解!!」

ガイが電撃の発射口を壊された事で怒りが頂点に達し、トクハにあれを使うように命令し、それを聞いたトクハは一瞬あれと言われて理解出来ずにいたが:あれの正体が頭に浮かびまさか!と確認し、あれは威力が有りすぎてミニリュウ達も只ではすまない:と言うが、ガイがもうどうでもいいと言い:自分をコケにしたシユン達をぶつ飛ばさなければ気がすまないと言つて、やるように言うのと2人も言つてももう無駄だと感じたのか:あれの作動の準備に入る。

盗賊団が何やら操作するとロボットの真ん中の部分が開いて行き:そこから:!!

「なっ！あれってまさか!!」

「ミサイルですか!!」

そこにあつたのは木ぐらいの太さと長さのミサイルが装填されていた：それを見たシユンとメロエツタが驚く。

「そうだ!!対ジュンサー・警察・大型ポケモン用の大型戦闘ミサイルZだ!!その威力は戦車の装甲にすら風穴を開けるぜ！テメエらはここでくたばりやがれ!!やれえ！」

「了解！ミサイルZ・発射!!」

そうしてシユン達に向かってミサイルが放たれて向かって行く。盗賊団達はミサイルが発射されるシユン達から距離を取る。

「くっ！リザードン 〴〵かえんほうしや〴〵！パルシエン！ 〴〵どげキャノン〴〵!!」

「ウオウウ！」

「ペア〜！」

シユンは迫り来るミサイルをリザードンとパルシエンの技で迎撃しようとするが：勢いは止まらずにシユン達へと迫り来る。

「リュウウ〜…」

「リュウウ…」

2体のミニリユウはすっかり怯えてしまっている。

「…大丈夫だよ…ミニリユウ達。キミ達は絶対にぼくが守るから!!」

シユンはミニリユウ達に大丈夫だよと言い、色違いのミニリユウを撫でて絶対に守ると言つて安心させる。

「ハア!!」

メロエツタが迫り来るミサイルを“サイコキネシス”で止める。

「なあ!馬鹿な!!」

「よし!いいよメロエツタ!そのままミサイルを空高く上げて!」

「はい!」

ガイはミサイルを止められた事を驚き、シユンはメロエツタにミサイルを空高く上げるように指示し、メロエツタは“サイコキネシス”でミサイルを天高く上げていく。

「なめんじゃねえぞ!このミサイルはな!こういう場合も考えて遠隔操作で爆発させられるんだよ!やれえ!」

「はっ!了解!」

ガイがそういう命令すると、トクハはボタンを押してミサイルを爆発させようとする

…すると、ミサイルが赤く輝く。

「なっ！まずいメロエツタ！早く！」

「はっ！はい！」

ミサイルが爆発しそうになり、シユンは急いでミサイルを天高く上げるようにメロエツタに指示し、メロエツタは急いで「サイコキネシス」で上げようとするが、ミサイルの輝きは強くなっていく。

「だめです！もう間に合いません!!」

「リユウ〜!!」

ディアンシーが焦った様子でそう言い：ミニリュウ達もパニックになる：そして：。

ドカアアア〜〜ンンン!!!

間に合わずにミサイルが爆発しシユン達は爆発に巻き込まれる。

「だあくはっははは!!ザまあみやがれ!!クソガキ!このガイ様に逆らった報いだ!だあくはっははは!!」

ガイは爆発にシユン達が巻き込まれたのを見ると、愉快そうに笑い：シユンを馬鹿にしあざ笑う。

「しかしリーダー…あの色違いのミニリュウとあの珍しいポケモン達も一緒に吹っ飛んでしまいましたぜ。」



「なあゝに…。あのミニリュウを見つけたのはこの湖だし：さすがに色違いのミニリュウはもういねえかもしれねえが、探せば普通のミニリュウはいるかもしれねえ！そいつらを売って大儲けだ！もう邪魔者も居ねえしな」

「さすが親分！損して得とれ！ですね」

トクハが色違いミニリュウとメロエツタ達が吹っ飛んだ事に残念がっていると：ガイはあの色違いのミニリュウを見つけたこの湖で他のミニリュウを探し売って大儲けすればいいと言い、それを聞いた部下グルーは流石ですとことわざを言って尊敬する。

「さあ行くぞ！」

盗賊団達が機械を操作して他のミニリュウ達を探しに行こうとすると：

「うん？リーダー前方の様子が…」

「んっ！どうした？」

トクハがミサイルが爆発して黒煙がまっている前方の様子が可笑しい事に気づいてガイに報告すると：それを聞いたガイがどうした？と言われた方向を見るとそこには…。

「「リュウく!!!」」

数匹のハクリューがシユン達の前に現れていた。

「なんだと〜!」

ガイはシユン達が無事な事に驚愕の声を上げる。

「んっ? ぼく達は助かったのか?」

「ええそのようですマスター! どうやらこのミニリュウ達の仲間のハクリュー達が助けてくれたようです!」

シユンは恐る恐る目を開けて: 助かったのかと思っていると: メロエツタがシユンにハクリュー達が助けてくれた事を教える。

「ハクリュー達が!!」

シユンはハクリュー達が助けてくれた事に驚いた後にポケモン図鑑をハクリューに向ける。

【ハクリュー: : ドラゴンポケモン。水晶の様な玉には天候を操る力が秘められている: 全身から溢れるエネルギーを使い: 翼が無くても空中に浮く事が出来る: : :】

ポケモン図鑑からハクリューのデータが流れる。

「これが: ハクリュー! こんなにたくさん: そうかキミの事を探しに来たんだね」

「リュウ〜!」

シユンはハクリューがたくさん居る事に呆然とした後、色違いのミニリュウを探しに来たのだと思いい色違いのミニリュウも仲間が来てくれた事に喜ぶ。

「どうやらハクリュー達は『しんぴのまもり』で爆発を防いでくれたようです!おかげでわたし達も助かりました!」

メロエツタがハクリュー達が『しんぴのまもり』を使い、爆発からシユン達を助けてくれたのだと教える。

「そうか!ありがとうハクリュー達!!おかげで助かったよ」

「[[「リユウ!!」]]」

シユンはハクリュー達に御礼を言うと、ハクリュー達も笑顔で頷く。

「ざけんじゃねえぞ!クソガキがあ〜!」

「まさか…あのミサイルを防ぐとは…:リーダーどうしますか?」

「あつ!決まってるだろう!あのクソガキを始末してミニリユウやハクリュー達を捕らえるんだ。やれえ!!」

「了解です!」

ガイはまたもや自分の思い通りにならずシユン達が無事だった事に怒りを露わにしており、トクハはミサイルが防がれた事に呆然とした後にどうするかとガイに判断を仰ぎ:それを聞いたガイは怒り、シユンを始末した後にミニリユウやハクリュー達、メロエツタ達を捕らえるように命令しグルーは従い、ロボットを操作すると:ロボットから幾つものアームと様々な武器が飛び出す。

「いけえ！」

そして盗賊団達はシユン達が無事だった事にしばらく呆然とした後に激怒して、ミニリュウ達とメロエツタ達を捕まえようとシユン達に向かってくる。

「もう絶対に許さないぞお前達!!メロエツタは『サイコキネシス』!デアンシーは『ダイヤモンド』!リザードンは『かえんほうしゃ』!パルシエンは『オーロラビーム』!ミニリュウ達はダブル『りゅうのいぶき』!」

「はい!ハア!」

「分かりましたわ!ハア!」

「ウオウ!!」

「ペア!!」

「リュウ!!!」

「!!!リュウ!!!」

盗賊団の最後まで身勝手な態度と言動に等々堪忍袋の御が切れたシユンはメロエツタ達とミニリュウ達に技を指示し、メロエツタ達とリザードンは技を放ち、ミニリュウ達もシユンの指示を聞いて同時に『りゅうのいぶき』を放つ。

ハクリュー達も一斉に『はかいこうせん』を放つ。

ダアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

「ギャアアア~~~~!!」

シユンのポケモン達とミニリュウ達、そしてハクリュー達の一斉攻撃がロボットに命中し、大爆発する。

「やったねみんな!」

「はい!」

「ええ!」

「ウオウ!」

「パール!」

「リュウ~~~~!!」

シユンは盗賊団のロボットを撃破した事を喜び、メロエツタとディアンシー!リザードンとパールシユンも笑顔で喜び双子のミニリュウ達も笑顔で喜ぶ。

ロボットの黒煙が晴れるとそこにはロボットが大破してコックピットが丸見えになっており、盗賊団の3人が黒こげでボロボロになっている姿があった。

「げほ…バカ…な…」

「…がは…」

「…ぼふ…」

盗賊団達はギリギリ下の部分だけ残ってるロボットに乗り口から煙を吹いて自分達

がやられた事を納得出来ずにいると……。

グツグツグツ!!ボカアア~~~~ン!!!

「ウギヤアアア~~~~!!」

最後に乗っていた下の部分のロボットも爆発し、その爆風に巻き込まれてリーダーのガイとトクハの2人が湖の岸の方へと吹っ飛び、隊員グループは反対側の湖の岸の方まで吹っ飛んで見えなくなつた。

「ぐっ!くそお~~~~!!」

「ハラホレヒレ……」

岸へと吹っ飛んだガイは拳を強く握り悔しがり、トクハは頭から落ちたのか目を回して気絶している。

「いい気味だね。自分達の私利私欲のためだけにミニリユウ達を傷つけた酬いだよ!!」

シユンは吹っ飛んだ盗賊団達を追いかけてパルシエンに岸へと向かつてもらい、パルシエンから岸に降りて盗賊団の方を向き無表情でそう言い放つ。

「……ふざけんな!!俺様がテメエみてえなクソガキに……」

シユンの言葉を聞いたガイは怒りで体を振るわせながら静かに立ち上がり呟く:そして……。

「この盗賊団リーダー 〃ガイ〃様がテメエみてえなクソガキに負けるはずあるかあ~~~~」

!!

そうやってガイは激怒して自分をこんな目に逢わせたシユンへと向かって殴りかかる。

「マスターが危ないですわ!」

「大丈夫ですディアンシー!わたし達のマスターがあんなクズにやられるはずないです」

その光景を見たディアンシーはシユンの安否を心配するがメロエツタは大丈夫と言いい、自分達のマスターであるシユンがあんなポケモンを金儲けの道具にしか思っていない最低野郎にやられるはずないと言う。

そして：今にも殴りかかる寸前まで迫ったガイにシユンはあくまで冷静に対応：

「ふっ!」

「なっ!」

シユンはガイの拳を身を低くして交わし、ガイは交わされた事に驚き、シユンはその隙に!!

「ハア~~~~!!」

「がはあ~~~~!」

そしてシユンは飛び上がるとガイの顔面に跳び蹴りを放ち、ガイをぶっ飛ばす。

シユンは幼い頃に両親に捨てられた事もあり：マサラタウン近くの森を毎日探検してため体力も充分着いており、そして今までの冒険の間にもシユンはポケモン達に頼れないもしもの場合に合わせてメロエツタに自衛のための体術や武術をならつており：達人クラスとまではいれないが：簡単な体術なら出来るようになっていた。

(ちなみにメロエツタはディアンシーと一緒にいろんな地方を回つていた時に様々な人間の武術や体術を見ているため大体の事は教える事が出来るのである)

「ぐわあああゝゝ!!」

そしてシユンの跳び蹴りがガイの顔面に決まると：ガイは吹っ飛び地面へと背中から倒れる。

「：ば：：か：：な：：ガクっ：：」

盗賊団リーダー「ガイ」は最後まで自分がやられた事を認められないまま気を失うのだった。

「今までお前達に傷つけられたポケモン達の痛み：少しは思い知ればいいさ：!!」

シユンは気絶した盗賊団リーダー「ガイ」にそう掃き捨て振り返り、メロエツタ達の方に歩いていった。

「さすがですわマスター！見事な蹴りでしたわ！」

「お見事ですわ!!」



「それほどでもないよ。それよりあいっらどうしようか?」

「そうですね。縄で縛って警察のところにてレポートさせましょう!ポケモン盗賊団と名乗っていたくらいですから指名手配されているはずですし・そうした方が良いかと・」

「まあ!それは良い考えですわ!あら?そういえばもう1人居たような・?」

盗賊団のガイを蹴り倒したシユンをお見事ですとメロエツタとディアンシーは褒め、シユンはそれほどでもないと思え、そして盗賊団達をどうしようかとメロエツタ達に相談すると・メロエツタは縄で縛って警察のところにレポートさせようと提案し、ディアンシーは良い考えだと褒めた後、盗賊団が2人しか居ない事に気づき、もう1人居たようなと頭を傾ける。

「どうやら・最後にロボットが爆発した時に別の方に吹っ飛んだみたいだね。しようがないから残った2人を縛って警察のところに送ろう!メロエツタ頼むよ」

「分かりましたわ!マスター!」

シユンは最後の爆発で別の所に飛ばされた1人を気にしつつもしようがないと思い、残った2人を縛って警察に送るようにメロエツタに頼むとメロエツタは了解し、シユンはロープを取り出しメロエツタが「サイコネシス」で盗賊団を縛ると盗賊団達をシロガネ山近くにある警察所に2人を「レポート」させた。

「これでよし・それじゃあハクリュー達も待つてるしそろそろ行こうか。みんな！」

「はい！」

「そうですね」

「リユウ〜！」

盗賊団達を警察の所に “テレポート” させると、シユン達は湖で待つているハクリュー達の所に向かう……どうやらシユン達が盗賊団達を “テレポート” で送っている間に通常のミニリユウが説明してくれたのか、ハクリュー達はシユンを警戒する事なくスムーズにハクリューやミニリユウ達の住む岩場の割れ目の洞窟の所へと向かう。

シユン達はハクリューに乗せてもらった。

そしてシユン達は洞窟に通じる岩場の割れ目の前まで来ると、心配してたくさんのハクリューやミニリユウ達が出て来て、迷子の色違いのミニリユウと通常のミニリユウを出迎えていた。

すると出迎えている数匹のハクリュー達の中から2匹のハクリューが出てきて、シユンが抱く色違いのミニリユウとその隣で泳ぐ通常のミニリユウが目に入ると、驚いた後に喜んでミニリユウ達の所に泳いで来る。

「リユウ〜!!」

「リユウ!!」

2匹のハクリューがミニリユウへとすり寄りミニリユウ達も喜んですり寄る。

「あのハクリュー、よく見るとミニリユウと同じ色違いだね」

「ええそうですね。どうやらあの2匹はあの子達の親のようですね」

シユンは片方のハクリューがミニリユウと同じ色違いである事に気づき、メロエツタはあの2匹が外に出た兄妹のミニリユウの両親である事に気づく。

ハクリュー達はすり寄った後に勝手に洞窟を抜け出したミニリユウ達を怒り、怒られたミニリユウ達はしよんぼりとしており、そして怒った後にハクリューは無事で良かったと言うようにすり寄りミニリユウ達も甘えている。

するとハクリュー達の後ろから数匹のミニリユウ達が出てきて兄妹のミニリユウ達にすり寄る。

「あのミニリユウ達はあの双子の兄妹の兄や姉、弟と妹のようですね：後は他のハクリューの子供達の様です：みんな心配していたと言っていますね」

メロエツタがミニリユウ達の言っている事をシユンに通訳する。

「リユウリユウ!!」

「リユウ〜〜!」

すると、先ほどまで我が子である双子のミニリユウにすり寄っていたハクリュー達がすり寄るのを止めてシユン達の方を向いて頭を下げて何やら言っている。

「マスター。どうやらハクリュー達はミニリユウ達を助けてくれたマスターにお礼を言っているようです」

「そんな！お礼なんて言わなくていいよ。あんな最低な人達にミニリユウ達を渡したくなかったしね：」

メロエツタがハクリュー達がミニリユウ達を助けてくれたシユンにお礼を言っているとと言うと、シユンはお礼を言わなくていいと謙遜し、あんな最低な人達にミニリユウ達を渡したくなかったからだと応える。

「じゃあミニリユウ達！ハクリュー！ぼく達はそろそろ行くよ！それじゃあね。出てきてりザードン！」

「ウオウ!!」

シユンはそろそろ行くよと言い、ミニリユウ達やハクリュー達に別れを告げると：りザードンを出してハクリューから降りてりザードンに乗る。

「それじゃあミニリユウ達！またどこかで会おうね！」

「それじゃあまたどこかで！」

「またお会いしましょうね♪」

そうしてシユン達がりザードンに乗ってシロガネ山のベースキャンプに戻ろうとしていると……。

「リュウ〜（涙）…リュウ!!」

「おっと!ミニリュウ?」

色違いのミニリュウはシュンが行ってしまおうと分かると涙目になった後にジャンプしてリザードンに乗るシュンの元へと飛びつく。

「どうしたのミニリュウ?ほら仲間達の所に戻らないと…」

「リュウ〜リュウ〜」

シュンが色違いのミニリュウにどうしたの?と聞いた後に仲間のところに戻る言うが、ミニリュウは目をウルウルとさせてイヤイヤと首を振る。

「マスター!どうやらその子は自分を助けてくれたマスターのことを気に入ったようですわ!」

メロエツタが色違いのミニリュウの様子を見て、色違いのミニリュウは自分を助けてくれたシュンの事を気に入った事を教える。

「えっ!そうなのミニリュウ?」

「リュウ〜!!」

シュンが色違いのミニリュウを確認すると、ミニリュウはシュンの体にすり寄って笑顔で頷く。

シュンと色違いのミニリュウがそうしていると…兄の通常のミニリュウが何か決心

した様子で頷いた後にシユンの近くへと泳いで来る。

「リユリユリユウ！リユウ〜!!」

「えっ！きみまでどうしたの？」

色違いのミニリユウの兄である通常のミニリユウもシユンの近くに寄って来た事にどうしたの？と訪ねる。

「マスター！どうやらこのコもマスターと一緒にいきたいようですよ！マスターとポケモンの強さに憧れたみたいでマスターの元で強くなりたいたいようですよ！」

「ディアンシーが通常のミニリユウの言葉を通訳し、ミニリユウはシユンとポケモン達の強さに憧れてシユンの元で強くなりたいたいから一緒にいきたいと言ってるらしい。」

「そうなんだ。2体ともぼくと一緒にいきたいなんて：嬉しいけどきみ達の家族や仲間が：寂しがるんじゃないかな？」

シユンはミニリユウの兄妹が自分と一緒にいきたいと言ってくれた事に嬉しいと思いつつも、兄妹の家族のハクリューやミニリユウ：仲間達が寂しがるのではないかと気遣う。

すると、兄妹のミニリユウ達は家族と仲間に自分達がシユンと一緒に行く事を認めてもらうように説得している。

「リユウ！リユウリユウ!!」

「リユウ〜〜!」

「リユウ〜…:」

兄妹のミニリユウはそれぞれ理由は違うが：色違いのミニリユウは助けてくれたシユンを大好きになったから!兄の通常のミニリユウはシユンとポケモンの強さに憧れて自分もシユンの元で強くなりたいと思い、シユンと一緒に行く事を認めてもらうように両親のハクリユウと仲間に関心、我が子のミニリユウの話しを聞いたハクリユウ達は一瞬思案した後に関心で頷く。

「リユウ!!」

「リユウ〜!!」

兄妹のミニリユウは笑顔で喜び、ハクリユウ達も喜んでいる我が子達を見て微笑む。

「それでどうなったんだらう?」

「どうやらあの子達の両親もマスターと一緒に行く事を認めてくれたようですね。ミニリユウ達を守ってくれたマスターになら安心だと言っていますね」

シユンがどうなったのかと気になっていると：メロエツタがミニリユウ達とハクリユウ達の会話を通訳し、ハクリユウ達がミニリユウがシユンと一緒に行く事を認めてくれたのだと言う。

「そうか、よし!2人とも!ぼくと一緒に来るかい?」

「リユウ〜〜！」

「リユウ！」

メロエツタの通訳を聞いたシユンは2人のミニリユウに自分と一緒に来るかと思ねると色違いのミニリユウはシユンにすり寄り、通常のミニリユウは強い眼差しで頷く。

「それじゃいくよ2人とも！モンスターボール!!」

2人のミニリユウが頷いたのを見て、シユンはポケットから2つのボールを取り出してミニリユウ達に当てる。

「リユウ!!」

ミニリユウ達は自分からボールへと当たり、ボールの中へと入り数回揺れた後にカチッとゲット成功を知らせる。

「よし、ミニリユウ達ゲットだ！」

シユンはミニリユウ達を無事にゲット出来た事を喜ぶ。

そうして、シユンは現在ポケモンを6体持っているためトレーナーのシユンは6体しか持てずに2体のボールが送られようとしたその時!!

「はっ！」

メロエツタが特殊な力で送られようとしたミニリユウ達のボールのエネルギーを打ち破り、ミニリユウ達のボールは送られずにこの場に留まる。



「えっ！どうして…確か手持ちが六体以上になったらゲットしたポケモンはオーキド博士の所に送られるんじゃない？」

「ええ、そうです。普通はそうですが…ミニリュウはカントーでは伝説のポケモン扱いされているので…このまま送ってしまったら色々と研究されたりとしてしまいます。最悪、研究目的で連れて行かれる可能性も考えられます…」

「確かに！その可能性はあるね。メロエツタの言う通り送らない方がいいね」

メロエツタがミニリュウ達に起こりえる可能性を話すとシユンはその通りかもしれないと思ひ、その方が良いと頷きミニリュウ達の入ったボール持つ。

「よし、出てきて!!ミニリュウ達!!」

「リュウ〜！」

「リュウー！」

シユンはミニリュウ達をボールから出す。

「それじゃあ2人とも！家族や仲間達にお別れを言って!!」

「リュウー！リュウ〜！！」

「ミニリュウ〜！！！！」

「ミニリュウ達の事はぼくに任せてね。ハクリュー達！」

「リュウー!!」

ミニリュウ達は家族や仲間にお別れを言い、ハクリュー達もお別れを言う。

シユンはミニリュウ達の両親のハクリュー達にミニリュウ達の事を任せて！と言いつつハクリュー達もお願いしますと言うように頭を下げる。

「それじゃあみんな!!またね」

「それでは!!」

「お元気で!!」

「リュウ〜!!」

「ミニリュウ〜!!」

シユン達はハクリューやミニリュウ達に別れを告げるとベースキャンプへと戻ることになった。

シロガネ山での修行中に傷ついた色違いのミニリュウを助けたシユンは仲間の元へ送る途中でその兄のミニリュウと出会いそのまま湖にあるミニリュウやハクリュー達の住処である岩場の割れ目の洞窟に向かう途中にミニリュウを傷つけたポケモン盗賊団が襲いかかり、シユン達は何とかミニリュウ達を守り抜き仲間の元へと送り届けると、自分を守ってくれたシユンを色違いのミニリュウは大好きになり、通常のミニリュウはシユンの強さに憧れてシユン達と一緒に行く事を決める。こうしてシロガネ山での修行中に新たな仲間をゲットしシユン達はさらなる修行に勤しむのだった。

おまけ

突然、警察署の門の前にテレポルトされて来たポケモン盗賊団のリーダー“ガイ”とトクハの2人：：不思議に思いつつも：ジュンサー達は指名手配されている2人を逮捕する。

そうして数ヶ月に判決が決定し2人は有罪：ポケモン保護区での密猟に販売禁止のポケモンの密売：ポケモンへの虐待：公共施設への不法侵入に様々な犯罪によつてここ数十年は監獄から出て来れそうにないが自業自得で有る事は言うまでもない：。

そうして：もう1人：隊員のグループは何とか逃げて数年後に自分がリーダーとなり、新たな隊員2人を加えてポケモンハンターを結成する事となる。

そして数年後：：ここ同じシロガネ山でバンギラスと卵のヨーギラスを狙うが、ピカチュウを連れた熱く元気な少年達に阻止されて捕まる事になるとは：この時の彼は知る事はずもなかった。

# シユンもタジタジ!!アカネとドキドキデート!?

前回：コガネジムに挑戦するためにコガネシティへと訪れたシユンはジムへと向かう途中でヤミカラスに襲われている迷子のピツピを助ける：そしてトレーナーを探して色んな人に話しを聞き、ジョーイさんから：コガネシティで毎年行われている：ポケモンの品評会のような大会『コガネフェスティバル』がコガネ公園で開催されていると聞いて、もしかしたらそこにピツピのトレーナーも居るかもしれないと言われ、シユンはピツピと一緒にフェスティバルの開催されているコガネ公園の会場へと向かい、ここで審査員をしていたピツピのトレーナーの少女アカネと出会う。

ピツピを連れて来たシユンにお礼を言うアカネ：色々あつてフェスティバルの審査が終わるまでアカネを待っている、そこへR団達がフェスティバルの参加者のポケモンを奪うために襲撃して来たのだった。

R団幹部1人にしたつば数十人の部隊で観客を人質にとつて抵抗出来ないようにして、ジュンサー達を公園に入れないようにしていたが：シユンがヒノアラシ達に指示を出して、見事したつばを倒して無事に人質を解放することに成功。

そのままシユンは部隊を率いる幹部と戦い、ピンチに陥るもシユンの思いに応えたレ

デイバがレディアンへと進化を果たし、新しい技も覚えて見事、幹部のヘルガーを倒したのだった。

そしてジュンサー達がR団を連行し感謝されていると・実はアカネはコガネジムのジムリーダーである事が分かり、ジム戦を申し込むとアカネはその前に色々と今日はお世話になったからお礼も兼ねてコガネシティを自分が案内すると言って、明日はアカネと街をまわる事になった：アカネはデートだと笑顔で言ってシュンは驚いた。

そしてその後、アカネのご好意でコガネジムに泊まったシュンは数時間：アカネとジムの人達と楽しい時を過ごし、時間が遅くなる頃にシュンはアカネに案内されて部屋に入るとメロエツタとディアンシーと色々話し、1日の疲れを癒すために眠りについたのだった。

そして翌日：：ぐっすりと眠れたシュンはゆっくりと瞼を開き、窓の外に目を向けると日の光が照らしている。

「つ：ふわあ〜もう朝か：う〜ん良く眠れた：：ツツ：」

朝日に照らされシュンは目を覚ますと、大きくあくびをした後に窓から差す朝日に気づき：寝起きで固まった体をほぐすように腕を伸ばしたりしていると：昨日怪我をした右腕の傷に軽い痛みが走り顔を歪ませる。

「いたた・治療してもらったけどまだ完全には治っていないし気をつけなくちゃ・」

昨日アカネを庇い出来た怪我：治療をしたとはいえそれからまだあまり過ぎてないため完全に治っていないので、あまり無理に右腕を動かさないようにしないと痛む右腕を擦りながら呟く。

「ンツ・ンンンン！！良く寝ました！あつ、マスターおはようございます！」

「おはようメロエツタ!!」

するとシユンの隣で眠っていたメロエツタが目を覚ましてシユンに挨拶する。

「怪我の具合はどうですか？まだ痛みますか？」

「うん：まだ少し痛むけど治療してもらったし昨日より良くなってるよ」

「そうですか：それは何よりですが完全に怪我が治るまでは無理に動かしてはいけませんよ」

「んよ」

「うん、分かってるよメロエツタ」

右腕の怪我の具合を聞くメロエツタにシユンは少し痛むが昨日よりは良くなっていると伝えると、メロエツタはシユンの怪我が良くなってきたいて何よりだがそれでも完全に治るまで無理に動かさないように注意してシユンも分かっていると頷く。

「ウーン・あら？2人とももう起きていたのですね。おはようございますわマスター、

メロエツタ」

シュンとメロエツタが話していると、シュンの片方で寝ていたディアンシーが目覚まして起き上がると、シュン達が自分よりも先に起きていた事に気づいて2人に挨拶する。

「おはようございますディアンシー!」

「おはようディアンシー：昨日は良く眠れたかい?」

「はい!ぐつつりと眠れて昨日の疲れも取れましたわ♪マスターはどうですか?昨日は大変でしたから:」

「うん、そうだね。まさかあんな事になるなんて思わなかったし凄く疲れたけどぐつつり眠れたからだいぶ疲れも取れたよ。怪我の具合もだいぶ良くなったしね」

メロエツタとシュンがおはようと返事した後にシュンはディアンシーに昨日は良く眠れたか尋ねると、ディアンシーは良く眠れたため昨日の疲れも取れたと言った後にシュンはどうですか?と聞くと、シュン自身もまさかあんな出来事に遭遇するなんて思わなかったためすぐく疲れたがぐつつり眠れたためだいぶ疲れも取れたと答える。

「まあ♪良かったですわマスター!ゆっくり休めて怪我也良くなって何よりですわ♪」

ディアンシーはシュンがゆっくり休めて、疲れも取れて、怪我也良くなってきていると聞いて何よりだと微笑む。

「うん、心配してくれてありがとうディアンシー!」

「フフ♪マスターの事を心配するのは当然ですわ!」

シユンが心配してくれたディアンシーに御礼を言うと、ディアンシーは微笑んでシユンの事を心配するのは当然だと答える。

「マスター：時間は大丈夫ですか?：今日はあのコガネのジムリーダーとデートの約束があるのではなかったのですか?」

シユンとディアンシーが話していると、メロエツタがシユンに時間は大丈夫かと尋ね、今日はアカネとデートに行く約束をしていたのではなかったかと気のせいか不機嫌そうな感じで言う。

「まあ：そう言えばそうでしたね：マスター：早く準備した方が良いんじゃないですか?」

メロエツタのその言葉を聞いたディアンシーも何故だか?不機嫌な雰囲気ですユンに早く準備した方がいんじゃないかと言う。

「ああ：うん、そうだね。早く準備しないとアカネさんを待たせるわけにはいかないしね：でも：2人とも気のせいかも知れないけどなんか怒ってない?」

シユンはメロエツタ達の言うことに同意してアカネを待たせる訳には行かないから早く準備しようと立ち上がる：でもその前にメロエツタとディアンシーの雰囲気が気のせいか不機嫌になっているように感じて尋ねる。



「いえ・気のせいですわ♪マスター・ねっ!メロエツタ(ニコッ!)」

「ええ・そうですね・気のせいですマスター・: 決してマスターがわたし達をほつとい  
て女の子とデートに行く事を怒ってるのではありませんよ・:」

シュンに尋ねられると・ディアンシーはにっこりと笑顔で気のせいだと・そしてメ  
ロエツタも気のせいだと言った後にシュンが自分達をほつといてアカネと一緒にデー  
トに行くことを怒ってるのではないとわざとらしい様子で声に出す。

「・はは・ごめんねメロエツタ、ディアンシー。昨日アカネさんとデートに行く約束を  
したから行かなくちゃいけないんだ・。今度メロエツタとディアンシーとも出かける  
から今日は許してくれると嬉しいかな。ねっ!」

「もう・マスターは本当にずるいですわ!!そんな事言われたら許してしまいますわ♪」  
「まったくです!マスターは本当にずるいです。今度、わたし達ともデートする。約束  
ですよ!」

シュンは苦笑いを浮かべ2人に謝ると、昨日アカネとデートに行く約束をしたから行  
かないといけないため、今度・2人とも出かけると約束するから今日は許してくれると  
嬉しいと笑顔で言うのと、ディアンシーはシュンのその優しい笑顔に本当にずるいとそん  
な事を言われたら許してしまうと軽く怒った雰囲気の後には笑みを浮かべて呟く。

メロエツタも全くだと同意しシュンが言っていた、自分達とデートをする約束ですよ

♪と先程と違いご機嫌な様子で微笑む。

「うん！分かつてるよ2人ともありがとう。それじゃあ準備しないと：」

シユンはメロエツタ達が納得してくれたと分かるのと二人にお礼を言つてアカネとデートに行く準備を始める。

「それではマスター！わたし達はいつも通りボールの中に入りますので何かあつたら呼んで下さい」

「呼んで下さればいつでも出て来ますわ！それでは失礼しますわマスター♪」

メロエツタとディアンシーは人目につかないようにいつも通りボールの中へと入り、何かあれば呼んで下さいと言つてボールの中へと入つていった。

「ありがとう2人とも。よしっ!!」

シユンはボールの中に入ったメロエツタ達に再度、お礼を言つた後に準備を進めていき着替えも済ませて荷物を持つと：昨日アカネと約束した通り：コガネジムの入口の前で待ち合わせをする事になっており準備を済ませたシユンは急いで入口へと向かう。

入口へと向かう途中のジムの道でコガネジムの職員やジムトレーナーの女性や女の子達と会い、すれ違いざまにシユンに寄つてウキウキと楽しそうに『アカネちゃんをよろしく♪』とか『楽しんで来てね♪』や後で『アカネちゃんがデートの時どんな様子だったか教えてね♪』とニヤニヤと楽しみと言つた感じでその女性達の様子にシユンは苦笑

いを浮かべながら頷いた。

シュンが了承したのを確認したジムの女の子達は楽しげにしながらシュンを見送るのだった。

~~~~アカネ S I D E ~~~

ハア~~~~~~~~/~/~/~/~/~/~/~/~/~/!!!緊張するわあ~~~~~/~/~/~/~/!!!

ウチは昨日：フェスティバルを襲撃したR団からウチやみんなを助けてくれたシュンくんにお礼にコガネシティを案内してあげるといふ意味でデートの約束をしたつもりやったのに/~/~/シュンくんを泊まってもらう部屋に送った後に、ジムの女の子達が明日のシュンくんとのデートの事についての話しになり、ウチはお礼の意味を兼ねてのデートだとみんなに説明したんやけど：何人かはフェスティバルに居た人やジュンサーさん達から話しを聞いたのか、ウチが何度もシュンくんに助けられた事や、ウチがシュンくんのR団に立ち向かう姿に見惚れてた/~/~/と聞いた事を言われてウチは恥ずかしく/~/~/て顔を真っ赤にして否定してもみんなはニヤニヤと笑みを浮かべて『分かっている♪』と言ってウチに『明日のデート頑張つて!』や『アカネちゃん♪シュンくんとのデート楽しんで来てね♪』と言ったり、しまいにはジムトレーナーの中でも一番年上のお姉さんが：

『シユンくんはアカネちゃんよりも年下だけど可愛い顔立ちで成長したら絶対にイケメンになるわ！それに優しくして勇気もあつて強いなんて超お買い得よ!!ゲツトするなら今がチャンスよ♥』とウフフ♥と楽しそうにニヤつきながら言うもんやからウチはますます恥ずかしくつて／／／顔が赤くなつてしまうた：／／／

確かにシユンくんは迷子になつてたウチのピツピを届けてくれたり、落ち込んでた時も励ましてくれたりしてくれて優しく、R団に人質を取られてどうにも出来ずにいたあの状況でも勇気を出してR団に立ち向かつてウチらを助けてくれたし、それにR団を倒した強いシユンくん：自分が怪我するのも構わずにウチを助けてくれた優しいシユンくん／／／!!

ポケモンの事を第一に考えてポケモンに対して酷い扱いをするR団達に怯える事なく立ち向かい、ウチを庇つてシユンくんに酷い怪我をさせてしまつて情けなくて泣いてしまつた時もシユンくんは優しく笑顔でウチを励ましてくれた／／／。

昨日あつたばかりやけど：：シユンくんのあのウチを励ましてくれた時の優しい笑顔やR団に立ち向かつていた時の勇気ある真剣な表情を思い出すと：胸がドキドキ♥して顔が真っ赤になつてまう／／／みんなに言われた通りウチ：シユンくんの事が気になつてるみたいや／／／今日のデートも昨日のお礼に街を案内するだけのつもりやつたのに：みんなのせいで変に意識してしまふわあ／／／

もしも今日のデートでシュンくと……。

「アカネさん……」

「シュンくん／＼／＼」

コガネシティの夕日が照らす公園……ベンチに座る2人。周りには誰もおらずそこは2人だけの空間……。

そこで2人はお互いに見つめ合う……アカネは顔を真っ赤にしてドキドキと鼓動が強くなりそしてアカネは瞳を閉じる……そしてお互いに顔が近づいていき……やがて2人の影が一つに……。

「なあゝんてことになつたらどないしよう／＼／＼!!!ウチ困っちゃうわあ／＼／＼!!!」

「何が困るんですかアカネさん?」

「うわああああ!!!」

アカネがシュンとのデートを想像して恥ずかしさで体を揺らしていると、そこにシュンが来てアカネが困ると言う言葉を聞いて尋ねるとアカネはシュンが来ていた事にびっくりしてしまう。

「シュ、シュンくん／＼／＼いつから居たんや!!」

「ついさつき来たばかりですアカネさん。お待たせしてすみませんでした!」

アカネがシユンにいつから居たのかと尋ねると、シユンはついさつき来たばかりだと  
言つて待たせてしまつた事を謝る。

「大丈夫やでシユンくん！それなら行こつか！コガネシティを案内してあげるで！！」

「ありがとうございますアカネさん！それで：さつき困るつて言つてましたけど：」

「そつ！それは気にしなくて大丈夫や／／／！！さあ行くでシユンくん／／！！」

「はあ？分かりましたアカネさん：」

コガネジムの入口でシユンを待つている間に色々と妄想して照れていたアカネは  
シユンが来たことに気づくとコガネシティを案内するために歩いて行く：アカネは  
ふとジムの方を振り替えるとジムの影からジムトレーナーや職員の女の子達がニヤニ  
ヤとアカネとシユンを見ており、何人かはアカネに向かって頑張れとばかりにグーサイ  
ンでアカネを見送つていた。

「（みんな何やつとんねん／／！！）」

「どうかしましたかアカネさん？」

「えつ？なんでもないでシユンくん！それじゃ行こか！」

ジムのみんなが見ている事を気にしつつも：どうかしたのか？とシユンに聞かれる  
とアカネは慌てて何でもないと言つて誤魔化す。後でアカネは人の気も知らず自分達  
を樂しそうに見ているジムのみんなを叱ろうと内心で決めた。

そしてアカネとシュンはジムの女の子達に見送られながら歩いていった。

そしてシュンとアカネがコガネジムから歩いていった後にジムトレーナーの女性が今、思い出したように呟く。

「あつ! そういえば……」

「どうしたの?」

「アカネちゃんって方向音痴じゃなかったかしら: しかも極度の:」

「あつ!!」

「そうだったわね: アカネちゃん: この街に住んでるのが信じられないくらい方向音痴だったわね:」

「本当にね: 場所は分かっているはずなのになんで迷うのか不思議なのよね:」

アカネがコガネシティに長く住んでるのが信じられない位の極度の方向音痴である事を思い出し、他の女の子達もそうだったと気づき、そして建物等の場所は分かっているはずなのに: なぜ? 迷うのか分からないと不思議に思っていた。

「アカネちゃん大丈夫かしら? 案内出来ずにシュンくん迷惑をかけたといけど:」

「大丈夫じゃない? シュンくんがしっかりしてるからアカネちゃんの事をフォローして

くれるわよ」

アカネが極度の方向音痴だった事を思い出したジムトレーナーの女性達。アカネがシユンを案内出来ずに迷惑をかけるのを心配していると：ジムトレーナーの綺麗なお姉さんがシユンがすっかりしているからアカネのフォローをしてくれるから大丈夫だと応える。しかしそれでもアカネがちゃんとシユンを案内出来ると心配するみんなであった。

くくアカネ SIDE A U T くく

シユンは準備を済ませてコガネジムの入口に向かいそこで待っていたアカネと合流すると、早速コガネシティを案内してもらおうと歩き出す2人：シユンは様子の可笑しいアカネの事を気にしつつもアカネが大丈夫と言うのでそのまま歩き出す。

「さて、シユンくん。最初はどこに行きたいんや？もし行きたい場所とかあるなら言うてや！ウチが案内したるから」

アカネはシユンに最初はコガネシティの中でどこに行きたいのかを聞き、もしもシユンが行きたいと思ってる場所があるなら自分が案内するから言うてほしいとシユンに言う。

「ありがとうアカネさん！それではお言葉に甘えて：まずポケモンセンターに行きたい



です。昨日預けたポケモン達を受け取りに行きたいですね」

「そうやな。まずは自分のポケモンを受け取りに行かなきゃあかんな!よし、それじゃシュンくん!案内するから付いてきいや!」

シュンはアカネにお礼を言った後にお言葉に甘えて、ポケモンセンターに預けたポケモンを受け取りに行きたいと言うとアカネは快く同意して案内するから付いて来るように行って走り出す。

「あつ!!待って下さいアカネさん!!(あれ?ポケモンセンターに行く道ってこつちじゃないような気が:)」

シュンは走り出したアカネを急いで追い掛ける:内心でアカネが走って行った方向がポケモンセンターに行く道とは違う事に気づいて疑問に思いながらも付いて行く。

「あれ?この道を行けばポケモンセンターに着くはずなのに可笑しいなあ?」

しばらく道を真っ直ぐ走ったり、曲がったりと:アカネに付いて走ったが一向にポケモンセンターに辿り着けない。

「はあ:あの:アカネさん?」

「ハッ!心配しないでええでシュンくん!えーと思ひ出したで!こつちに行けば着くはずや!」

シュンは走りっぱなしで少し息を切らし深呼吸した後恐る恐る一向にポケモンセ

ンターに辿り着けない現状を尋ねると：アカネは指摘され焦り直ぐに心配しない言いと応えると：思い出したと言つて今度は別の道へと向かい走り出す。

シユンは心の内に何か引つ掛かる物を感じつつもアカネの後に付いて走り出す。

そしてまたアカネの案内でポケモンセンターを目指して道を曲がつたりしていたがやはりポケモンセンターに辿り着けない。

「ハア・ハア・なんでや？なんでポケモンセンターに行けへんねん！」

アカネはずつと走っていたからか息切れを起こし深呼吸しながら：何故、道を知つてのにポケモンセンターに辿り着けないのか分からず途方にくれる。

「あの・アカネさん・もしかしてポケモンセンターの場所・分からないんですか？」

「そつ！そんなことないでシユンくん!!場所は分かつとるんよ：ただ何でか、いつも迷つてしまうんよ！」

シユンはアカネに恐る恐るそう尋ねると、アカネは焦った様子で否定した後には：場所  
は分かるのに何故かいつも迷つてしまう事に不思議そうに頭を悩ませる。

「（：：：アカネさんつてもしかして：方向音痴なのかな？そしてその事を本人は自覚してないみたいだ：）」

シユンは自分を案内しようとして辿り着けない現状を見て、アカネが極度の方向音痴なのではないかと思ひ、しかも本人はその事を自覚していないように見えるためどうし

ようかと考えて：そして。

「あの：アカネさん：ポケモンセンターなら昨日行つたんで、大体の道は分かりますんでぼくが案内します：」

シュンは恐る恐る丁寧にアカネを傷つけないように言葉を選んで自分が案内する事を提案する。

「：ハア：ハア：あつあはは！：：：お願いするわシュンくん：」

アカネは息切れを深呼吸して整えると誤魔化すように笑つた後にしよんぼりとした様子でシュンに案内を任せる。

アカネから了承をもらったシュンは近くにあるコガネシティの案内板を見てポケモンセンターの場所を確認するとアカネを連れてポケモンセンターへと向かう。そして案内板通りの道を行つて歩いて行くとポケモンセンターが見えて来る。

アカネが案内した時は：アカネの方向音痴（本人自覚なし）のためあちこち迷い1時間近くたつても辿り着けずにいたが：シュンが昨日ポケモンセンターに行つていた事もあり、案内板を見て行くとほんの数分で目的地に到着した。

「着きましたねポケモンセンターに：意外とあの場所から近かつたみたいですね」

「：そっやねシュンくん：」

アカネの案内で1時間近く掛かつても辿り着けなかつたのに、ほんの数分で着いてし

まった事にシユンは気まづくなり、アカネも自分が自信満々にコガネシテイを案内すると言っていたのに：1カ所案内するだけで散々迷い1時間近くたつても辿り着けず：結局シユン本人に案内させてしまった事にガツクリと意気消沈している。

「…ごめんなシユンくん：ウチが案内してあげるはずなのに：結局シユンくんにさせてもうて…」

「気にしないで下さいアカネさん。これくらい何でもありませんよ！」

謝るアカネにシユンは気にしないでいい！と励ます。そして2人はポケモンセンタ―の中へと入り受付のジョーイさんの所へと向かい、ジョーイさんに話し掛ける。

「こんにちは！ジョーイさん」

「あら？こんにちはわ！アカネちゃん！隣の子はシユンくんで良かったわよね」

2人がジョーイさんに挨拶すると、ジョーイさんも2人に挨拶してアカネの隣に居るシユンの名を確認する。

「はい…あの？昨日寄っただけなのにぼくの事を覚えてくれてたんですか？」

「フフ。何を言ってるのかしら♪街の人達やポケモン達をR団から守ってくれたヒーローさんの名前を忘れるわけじゃないでしょう」

シユンがそう聞くと、ジョーイさんはニコニコと笑顔を浮かべながら、コガネフェスティバルを襲撃したR団達からコガネシテイの人達とポケモンを守り、R団を倒してく

れたヒーローであるシュンの名前を忘れるわけないでしょ♪とご機嫌な様子で言う。

「ヒーローって!!ぼくはそんな風に言われるほど大した事はしてませんよ!?ただR団が許せなかっただけで・!!」

「そんな謙遜することはないわ。あなたのおかげで街の人達もポケモンも無事だったんですもの!コガネシティのみんながあなたに感謝しているわ!」

「そうやで!シュンくんがいなかったらあの時R団に参加者のポケモンも全部奪われてしもうて、もしかしたら怪我人も出てしもうてコガネシティのみんなも毎年楽しみにしているコガネフェスティバルも二度と開催出来なくなってたかもしれない!シュンくんには本当に感謝や!!」

ヒーローと自分をそんな大それた感じで言われたシュンは慌てて否定し自分はR団が許せなかっただけで大した事はしてないと言うと、ジョーイさんは謙遜するシュンに微笑みシュンのおかげで街の人達も傷一つなくポケモンも奪われずにすんでみんなシュンに感謝していると誉める。

アカネもシュンがいなければあの時フェスティバルを襲撃して来たR団に参加者や観客のポケモンを全て奪われてしまい、もしかしたら怪我人も出てしまい:そのせいで最悪、毎年コガネシティの人達が開催を楽しみにしているコガネフェスティバルもR団襲撃という不祥事が原因で二度と開催出来ない事態になっていたかもしれないからと

：事態を被害がなく会場の少しの損傷だけで済んだ事にアカネは本当に感謝していた。

実際：今年のコガネフェスティバルは被害は比較的軽症だったが人質になっていた街の人達が怖い体験をしたこともあり、事件が解決したが：後日再開という事もなく中止という判断が下されてしまったためコガネシティの人達は残念な気持ちでいっぱいだが：来年には再び開催されるという事を聞いてコガネシティのみんなは喜び、事件を解決してくれたシユンにみんな感謝していた。

「そうなんですか・そんなにコガネシティのみなさんが楽しみにしているコガネフェスティバルを守れたんならぼくも嬉しいです」

ジョーイさんやアカネからコガネシティの人達がコガネフェスティバルを楽しみにしており、事件を解決してくれたシユンに感謝している事を聞かされたシユンは街の人達が毎年楽しみにしているコガネフェスティバルをR団から守れたのなら自分も嬉しいですと2人に言う。

「フフ。市長もあなたに感謝していたわ！我が街が誇る伝統のコガネフェスティバルをR団から守ってくれたあの少年に心からのお礼を言いたいってね」

「そうそう！そいえば市長さんだけでなくジュンサーさんもシユンくんを誉めとつたで♪勇気ある行動のおかげでR団を逮捕出来た勇敢な少年に感謝しますと言つとたで！！大絶賛やつたで！！」

「そんな!!ぼくは!!」

ジョーイさんやアカネから市長やジュンサーさんも感謝していたと聞かされて、シュンはまたも大絶賛に誉められて少し照れながら否定しようとするアカネが：。

「でも無茶すぎだつて怒つてもいたで!勇気があるのは認めるけど、それで大怪我してたら意味がないつて言つてたで!ウチもそう思うで!シュンくん!!もうちよつと自分の身を大切にしていや」

「あはは・はい、気をつけるようにします」

ジュンサーはシュンの無茶な行動にも怒つており勇気ある行動は評価出来るがそれで大怪我をしたら意味がないと言つてたと伝えアカネ自身もそう思うと言つて、後にシュンに自身の身も大切にするように言い：それを聞いたシュンは苦笑いを浮かべて気をつけるようにすると言う。

「フフ、2人とも仲が良いのね。それでご用はなんだつたかしら?」

「あつ!はい。昨日預けたぼくのポケモン達を引き取りに来たんですけど：ぼくのポケモン達は元気になりましたか?」

ジョーイさんに聞かれたシュンは昨日預けたポケモンを受け取りに来たと伝えてポケモン達が元気になったのかを尋ねる。

「はい!ちよつと待つてね。ラッキー!!」

「ラッキー!!」

それを聞いたジョーイさんはちよつと待つてるように言うと、ジョーイさんはポケモンセンターにお馴染みの助手のラッキーを呼ぶと、ラッキーは奥からシユンのポケモンの入った6つのモンスターボールをケースに入れて持つて来る。

「ラッキー!!」

「ありがとうラッキー! はい! お待たせしました。シユンくん、あなたのポケモンはみんな元気になりましたよ」

「ありがとうございますジョーイさん!」

ジョーイさんはラッキーからボールを受け取るとシユンにあなたのポケモンはみんな元気になった事を伝えてボールを渡し、シユンもお礼を言つて受け取る。

「よし、出て来てみんな!!」

「ヒノ!!」

「ワニャ!!」

「ソウ!!」

「レディ!!」

「リル!!」

「チコ!!」



ボールを受け取ったシュンは後ろで受付待ちをしている人が居るのでセンターの休憩スペースの所で、たった今受け取った自分のポケモンをボールから出すと、みんな元氣よく出て来る。

「チコリ!!チコリ!!」

「うわっ!!チコリータ!!」

ボールから出て来たチコリータはシュンの姿が目に入ると勢いよくシュンに向かって飛び込んで来たのでシュンは慌ててチコリータを受け止める。

「チコリ〜／＼／＼」

「まったく・チコリータ。きみは本当に甘えん坊なんだから・」

「チコ〜〜♪」

チコリータはシュンに会えて嬉しいという様子でシュンにスリスリと体をすり寄せて甘えており、シュンはチコリータの相変わらずの様子に少々呆れながらもチコリータの頭を優しく撫でてチコリータは気持ち良さそうにシュンの手にすり寄る。

ヒノアラシ達はチコリータの相変わらずの様子を少々呆れた様子で見つめていた。

「シュンくんのチコリータはシュンくんの事がとっても大好きみたいやね」

「ええ・なついてくれてるのは嬉しいんですけど・甘えん坊なのはちよつと困ってます」

近くでシユンとチコリータの触れ合いを見ていたアカネはチコリータがシユンに甘えているのを見て微笑み、チコリータはシユンの事がとても大好きみたいやねと言い、シユンもなついてくれるのは嬉しいが甘えすぎなものにはちよつと困つてると苦笑いを浮かべ言う。

「チコ〜」

「よしよしチコリータそれにみんなも昨日は本当によく頑張つてくれたね。ありがとう」

「ヒノ!!」

「ワニャ!!」

「レディ!!」

「ソウ!!」

「リル：」

シユンはチコリータを撫でながら昨日R団を撃退するために頑張つてくれたポケモン達を誉めてお礼を言うと、ヒノアラシ達は笑顔で頷くがマリルだけはそっぽを向く。「そうやな。シユンくんはもちろんやけど…この子達が頑張つてくれたおかげでR団からみんなを守れたんやね。ホンマありがとうな」

「ヒノヒノ／／／」

シュンが頑張ってくれたポケモン達を誉めていると：横に居たアカネもシュンは勿論だが、シュンの指示を聞いてそのおかげで誰も傷つく事なくR団からみんなを守る事が出来たんだとシュンのポケモン達にお礼を言っ、一番近くに居たヒノアラシを優しく撫でると気持ちいいのかヒノアラシはうっとりとしてアカネの手にすり寄る。

「よし！それじゃあ戻ってみんな!!」

シュンはポケモン達の様子を確認した後みんなをモンスタールへと戻した。

「さて：ポケモンも受け取りましたしそろそろ行きましようかアカネさん」

「せやなそうするか！シュンくん、どこに行きたい？今度こそウチがそこに案内したるで！」

「ええくと：自分はコガネシティに何がどこにあるのか分からないですし：アカネさんに任せていいですか？」

「分かったわ!!ウチに任しいく!!コガネはウチの庭や！ウチのオススメの場所に案内したるで!!」

「・・・あはは：はい：お願いしますアカネさん：」

シュンはコガネシティに何がどこにあるかも知らず：特に行きたい場所もないのでアカネのオススメの場所に案内してもらおうように頼み、アカネはまた自信満々にコガネは自分の庭だと言って自分のオススメの場所に案内すると意気込む：アカネのそんな

様子を見ていたシユンは先程のアカネの方向音痴ぶりを思い出して：苦笑いを浮かべながらよろしく願う。

「それじゃ、まずはコガネシティ名物のコガネデパートに行こうか！付いてきいやシユンくん！」

「はい！アカネさん！」

アカネはまずはコガネシティに建つ巨大なデパート：コガネデパートに行こうと決めてシユンも領いてポケモンセンターを出てコガネデパートへと向かう。

しかし：当然：アカネの方向音痴ぶりが発揮されて中々辿り着けずにおいて、普通にポケモンセンターから向かえば十数分で着けるのに30分近くも掛かってしまった。

「はあ：はあ：ようやく着いたで、何でこんな時間がかかってしまうたんや？」

「（それは道を迷ったからです：なんて言えない：）」

アカネのその疑問にシユンは内心でそう呟くのであった。

アカネとシユンは息を整えた後にデパートの中へと入って行くと、そこは広い空間に様々な店や商品が立ち並び中には客で溢れていた。

「さあ、シユンくん。此処がコガネデパートや。ジョウトでも一番のデパートなんやで！色んな物が揃ってんのや!!それでシユンくんは何か買いたい物とかあるか？」

「あつ：はい：ちよつとポケモンフーズやボールに食材も少し買つときたいですね」

「そっか!そんなら行くでシュンくん。売り場に案内したるわ!」

「……ちゃんと案内板を見て行きましようねアカネさん」

「ギクツ!!分かつてるわシュンくん!!ほな行くで!!」

そしてシュンはアカネと案内板を見て旅に必要な必需品で不足している物を買に行き、ポケモンフーズやボールに薬、日用品、食材等を買い揃えた。

ポケモンフーズや食材等は幾つかアカネのオススメの物を購入し買い物済ませた。

「買い物は済んだかシュンくん?」

「はい!アカネさんが案内してくれたので全部済みました」

そう訪ねるアカネにシュンはアカネのおかげで全部済んだと礼を言う。

旅に必要な買い物を済ませたシュンとアカネはコガネデパートの屋上に居た: :そこはちよつとした食べ物のお店と子供用の遊具や乗り物があったりベンチが置いてあったりちよつとした憩いの場となっていた。屋上にはシュン達以外にも家族ずれのお客が子供を遊ばせていたり、家族や恋人、友達の買い物を待っている客が居たり、出店で食べ物を買ってベンチやテーブルで仲良く食べている人も居る。

「それにしても: :すごいいっぱい人が居ますね。そんなに人気なのかな?此処は: :」

「そうやで!此処はデパートに来る客のちよつとした憩いの場所やねん!家族で来たり、1人で来たりした客が利用してるんやで!」

シユンとアカネは屋上にある出店のテーブルで軽い飲み物を購入し、しばし休憩を取りながら話しをしていた。

「シユンくん。ちよつとここちに来てくださいませんか？」

「えっ？はい・・・」

そして飲み物を飲み終わるとアカネに手招きされて屋上の鉄柵のフェンスの近くへと行く。

そこに手をつけてコガネデパートの屋上からその景色を見つめるアカネ。

「ウチ、此処からの眺めが好きなんや・コガネシティの街並みを一望できるし：その先の森や山も見える：ほら！シユンくんも見てみい」

「……………」

アカネはコガネデパートの屋上から見えるコガネシティの街並みとその先に映る景色の眺めが好きだと言ってシユンにも見るように言う。言われたシユンはフェンスに手を置いてそこに映る景色を眺める。

コガネシティはジョウトでも有名な大都会のため高いビルなどが多いが、コガネデパートもそのビル達に負けないほど大きいので遮られることなくコガネシティの街並みと景色を一望することが出来た。

そこはコガネのビルや建物：下を見ると凄く高さのため豆粒程に小さく見える往来

する人達：その高いビルの先に見える山々と青空の見える自然の景色が目に入りシュンはじつと眺めていた。

「凄いですね：此所からならコガネシティの街が見渡せます：」

「そやろ！此所からならウチの大好きな街を見渡せんねん！」

「ハハハ：アカネさんは本当にこの街が大好きなんですね」

「当然や！ウチは生まれた時からこの街に住んどる。小さい頃から色んなところで遊んだりしてたし、コガネはウチの庭みたいなものや!!」

シュンとアカネがそう言うて楽しそうに話していると……

「あつ!!アカネちゃんとわるいひとたちからぼくたちをたすけてくれたおにいちゃんだ!!」

「ん?」

「えっ?」

後ろの方から5、6歳位の男の子がジムリーダーのアカネとR団を倒して自分達を助けてくれたシュンに気づいて嬉しそうに近づいて来る。その後ろには男の子の母親も隣に居て歩いて来る。

「君はもしかして：R団に人質にされてた：」

「はい：R団に人質にされていたところをシュンさんに助けてもらった者です：あの時

は本当にありがとうございました」

シユンが自分達の所に来た男の子の言っていた事にもしかしてR団に人質にされていた観客の人達だったのかと訪ねると、子供の母親がその通りだと言ってお礼を言い頭を下げる。

「いえそんな！ぼくはR団が許せなかつただけで：お礼を言われることなんて：」

「そんな事ありません！あなたのおかげで私達親子は怪我もせず無事でいられるんです。今日は居ませんが主人もシユンさんには感謝しております」

「そうやでシユンくん！君の機転のおかげでR団に人質されてた人達が誰一人怪我もなく助けられたんや!!充分誇っていいんやで！」

「：はあ：そうですか：」

親子に感謝され謙遜するシユンに母親がそんな事ないと言ってシユンのおかげで自分達は怪我一つなく無事だったのだと言って今日此処に居ない主人も妻と子供を助けてくれたシユンに感謝していると言って、アカネもその通りだと同意してシユンの機転のおかげだからと：充分誇って良いと言い：シユンは謙遜しながらも納得する。

「ねえおにいちゃん！ぼくたちをたすけてくれたポケモンにあわせて！」

「うんいいよ！出て来て、ヒノアラシ！ワニノコ！」

「ヒノ!!」



「ワニャ!!」

男の子のお願いを聞き入れたシュンはボールからヒノアラシとワニノコを出すと2体は勢い良く出て来る。

「わあ〜!!ヒノアラシとワニノコだあ〜!!」

「ヒノ?」

「ワニャ?」

男の子は自分を助けてくれたヒノアラシとワニノコを目をキラキラとさせて喜び、ヒノアラシとワニノコは目の前の子供をなんだ?と言った表情で見つめる。

「ねえ!おにいちゃん!ヒノアラシ達撫でていい?」

「うんいいよ!優しく撫でてあげてね」

「うん!!よしよし!」

「ヒノ〜」

男の子のお願いにシュンはいいよと言って優しく撫でてあげてねと言って男の子は言われた通りにヒノアラシの頭を優しく撫でてヒノアラシも気持ち良さそうにしていく。

その微笑ましい様子をシュンとアカネ、母親は笑顔で見つめていた。

「それでシュンくん。次はどこに行く?コガネにはまだ良い所がたくさんあるで!!」

「そうですね・どうしましょうか」

あの後、親子と少し会話した後に周りに居た他の人達もシユンがR団を倒して人質だった自分や人達を助けてくれたトレーナーだと気づくと一齐に集まって来て口々にお礼を言われり、シユンやポケモン達を誉めてくれたり、コガネシティでお馴染みのアカネと一緒にた事もあって色々とからかって来る人も居た。

女性や女の子達はアカネにデートなのと言ってからかいアカネは顔を真っ赤にして照れてしまい、シユンもからかわれたり、可愛いアカネとデートしてるのを羨ましがられたりしたがシユンは照れたりせずに苦笑いを浮かべていた。そしてシユン達は話しても程々にみんなと別れてコガネデパートを出てから：地下のショッピングモールや、色々なお店を軽い食事をしながら見たりした後には道を歩きながら次にどこに行くのかを話し合っていた。

「ん？あれは……」

「ああ！あれはコガネのゲームコーナーや。行ってみるかシユンくん」

そしてしばらく歩いているとシユンの目の先に派手な色彩の看板のある建物が見えて、シユンがあれば何だろうと思っているとアカネがコガネのゲームセンターだと説明した後、次にそこに行くことを決めてゲームセンターの中に入るとけたたましい音が鳴り響きそこでたくさんの方がゲームをしていた。

「凄い音ですね：タمامシシテイのゲームセンターも凄かったですけど：此処も凄いですね：」

「そうやでシュンくん！此処はコイン売り場でコインを買ってスロットやカードめぐりをしてコインを増やして景品と交換出来るんや！」

「へえ：アカネさん少しやって来ても良いですか？」

「ええでシュンくん。ウチはあそこの休憩所で待つてるから遊んで来ていいで！」

「はい！分かりました」

アカネはシュンに向こうの休憩所で待つていると言つて遊んで来ていいと言つてシュンも了解して売り場でコインを買つてスロットで遊び始めた。

数十分後……。

「シュンくん遅いなあ：もうそろそろ遊び終わつて来てもええのに：」

アカネは休憩所で待つててもいつまでたつても来ない事に不思議に思ったアカネは休憩所から出てゲームコーナーにシュンを探しに行く。

「なんや？あそこだけあんなに人だかりが？」

するとスロットコーナーに来た時にある1カ所のスロットの場所に人だかりが出来ている事に気づいて向かうとそこには……。

「また：揃つた：コインがいっぱいになる：」

そこにはシユンがスロットで遊んでおり、次々に出目が揃いまた777が揃ってしまいコインが箱から溢れてしまう。シユンの左右や後ろにコインのいっぱい入った箱が山積みになっており今も出続けている。

「シユンくん!!」

「アカネさん?」

アカネはシユンが凄いスロットでコインを当てている事に驚きシユン呼びシユンもアカネが来ていた事に気づく。

「シユンくん……このコインの山はなんやねん……」

「それが……次から次に揃ってしまいコインがたくさん出て来るんです……」

アカネが驚いてそう聞くとシユンはやるたびにスロットの出目が揃い連続で777が出てしまうためコインが次から次に大量に出てしまうと困ったように呟く。

「……（シユンくん……意外な特技があったんやな……）」

「あつ!!また揃っちゃった……」

アカネはシユンがまたも777を揃えてコインがたくさん出て来るのに困っているのを横にアカネは内心でシユンの意外な特技に苦笑いで見つめる。

その間もシユンはまた揃えてコインが増えてしまう。

「……あつ……シユンくん。そろそろ終わりにせえへんか?」

「えっ?」

「ほら…此処のゲームセンターの店長さんも謝つとるし…この辺で勘弁したってやシュンくん」

「はい…」

シュンがスロットで当てまくりコインを大量に出しているためゲームセンターの店長はこれ以上は止めてほしいと地面に手をつけて謝っているのを見て、アカネはシュンにそろそろ勘弁してやるように伝えてシュンも言う通りにしてスロットを止める事にする。

そしてシュンはアカネと店長に連れられて今まで取ったコインを景品と交換するために景品コーナーへと来ていた。そこでシュンは幾つかのポケモンに関する道具とコインを交換した。

「こんな所で色んな道具が手に入るとは思わなかったよ…儲けたな」

「良かったなシュンくん!」

シュンはまさかこんな場所で色んなポケモンに関する道具が手に入るとは思わなかったと言つて儲けたと喜び、アカネもシュンに良かったなと微笑む。

「これでコインは全部交換出来たかな?」

「いえ…後700枚ほど残っておりますが…」

シユンがこれでコインを全て交換出来たのか確認していると店長が後700枚ほどコインが残っていると教えてくれた。

「まだ700枚もあるのか：どうしようかな？」

シユンがまだそんなにコインが有るのが分かりどうしようか考えていると：あるコーナーが目に入る。

「此所のゲームコーナーはポケモンも景品になってるんですね」

「はい！復業でやっている育て屋で景品用に育てたポケモン達を取り扱っております」  
「へえ、そうなんですか：それにしても色んなポケモンが居るな：」

シユンは景品コーナーの一角にポケモンも景品として扱われている事に気づき、店長いわく復業でやっている育て屋で景品用に育てたポケモンを取り扱っている事らしい。

シユンは聞きながらも景品コーナーのポケモンを眺めていた：ケーシイ、サンド、カラカラ、ミニリュウと数多いポケモンが並べられていた。

「シユンくん、残りのコインでポケモンと交換するんか？」

「うん：どうしよう。見たところ持つてるポケモンばっかだし：」

シユンがそう言いながらどうしようかと迷っていると……。

「ん？あれは……」

シユンは景品コーナーのポケモンが並んでいる場所の端にあるポケモンに気づく。

「：アゝボ……」

そこにはアーボがしょんぼりとした様子でたたずんでいた。

「あのアーボ：何だか元気がなさそうだけど……」

「ああ：あのアーボは随分前に育て屋から入って来て此処に居るのですが：コインを交換しに来た客にも相手にされずに此処に居るのです：あのアーボと同じ時に入ってきたポケモン達は既に交換されていったのに：そのアーボだけはずっと此処に残っているのです：選ばれないだけならまだ仕方ないと思えるのですが：時には酷い言葉を言われたりと色々と可哀想な目にもあつておりまして：このまま後数日の間に貰われないのであれば育て屋に戻そうと検討しているところですよ……」

シュンがアーボに疑問を持つていると：店長からアーボについての説明を聞く：それは今までのアーボの境遇でアーボが元気がないのには十分な理由のある話であった。

「そうなんですか：ちなみに酷い言葉とはいったい?」

「はい：何でも気持ち悪いとか目障りだから早くこの店から撤去しろとか等の苦情を言われた事もありました……」

「ひどい!貰われへんだけなら仕方ないけど：そんな事を言うやなんて!!」

アーボに浴びせられた酷い言葉の数々を聞いたアカネは怒り、シュンも静かに怒りを

募らせる。

シユンは黙ってアーボの所へと向かう……。

「アボ……」

アーボもシユンが来たことに気づくが……どうせまた酷い言葉を言われるだけで選ばれはしないのだと思ひ顔を俯かせる。シユンは後ろの店長へと振り返り……。

「店長さん……決めました！」

「はい？」

シユンはそう言うのとアーボに向き直る……そして……。

「ちようどこのアーボと交換に必要なコインも700枚だし……残りのコインとこのアーボを交換します」

「アボ!!」

「えっ！ よろしいんですか!!」

「はい！ ぼくがこのアーボを貰います……いいかいアーボ？」

「アボ!!アボ……!!」

「おっと……ハハッ！ よしよし！」

シユンが残りのコインでアーボを貰う事に決めると店長とアーボも驚き、シユンはアーボにもいいかと聞くとアーボは涙目になり声を震わせて喜び思わずシユンの腕か



ら顔の部分に抱きつくように巻き付く：そんな嬉しそうなアーボの様子にシュンは苦笑しながらアーボを優しく撫でてアーボもシュンの手にすり寄る。

「やっぱりシュンくんは優しいなあ!アーボの事を聞いてほっとく事ができへんかったんやろ」

「本当に優しいお人なんですネ。あの方にならアーボを安心して任せられます!これで私達も肩の荷がおりました」

アカネは相変わらずのシュンの優しさに微笑み、店長もアーボの事を想ってくれる優しいシュンにならアーボを任せられると、これで肩の荷もおりたと安心する。

その後、シュンは店長からアーボのモンスターボールを貰ってゲームセンターを出てデートの続きを再開する：現在、シュンは手持ちが6体でいっぱいのためアーボはオーキド博士の所に転送される。

ゲームセンターを出た後にシュンとアカネは軽く昼食を済ませて道を歩いていた。

「シュンくんは本当に優しいなあ!」

「そんな事：ぼくはただアーボをほっとけなかつただけで：」

「フフフ。謙遜するところもシュンくんらしいで!」

軽い昼食の後に先程のゲームセンターでの出来事を話しながらシュンとアカネは楽しそうに歩き、う次はどこに行こうかと話していると……。

「あつ!!居た居た!おくくいい!」

後ろからシユンとアカネを呼ぶ声に振り向くと、こちらに向かい眼鏡をかけた男性が走って来ていた。

「なんや!市長の秘書さんやないの!どうしたんや?」

「ハア・ハア・君達をずっと探して街の中を走っていたんだ:コガネジムの人達に聞いても朝早く出掛けたって言うし、それであちこち聞いて探していたんだ!!」

「はあ?それで僕達に何の御用で探していたんでしようか?」

シユンは自分達を探していたという市長の秘書の話しを聞いて自分達に何か御用があるのかと訪ねる。

「ああ・実はね、コガネフェスティバルに襲撃してきたR団達を倒して街のみんなやポケモン達、フェスティバルを守ってくれた君とアカネさんを街を挙げて表彰しようと言う話しが決まったんだ!」

「ええ!!そんな突然過ぎますよ!!いきなり街を挙げての表彰式なんて!!」

「そうや!!事前にそんな知らせも受けてないで!!」

秘書からの自分達への表彰の話しを聞いて突然の話しに驚き、アカネも事前にそんな知らせを受けてもないと慌てるように言う。

「ああ・何せR団の襲撃でフェスティバルは中止になってしまったからね。その事は残

念だけでもしR団によって被害が出ていたら二度と開催されなくなっていたかもしれない：そこで！R団を倒してくれた君達に感謝を込めて街を挙げての表彰が決まったんだ!!それにシュンくんは話しを聞くとジョウトリーグの参加を目指してバツジ集めの旅をしていると言うし：いつまでこの街に居るかも分からないからと急遽決まったんだ！それで君達を探していたんだ」

「そうだったんですか：」

「・・・それで、準備とかは出来てるんか？急遽表彰するのが決まったんやろ？」

秘書からその事についての説明を聞かされてシュンはそうだったのかと納得し：アカネはシュンがいつまでこの街に居るか分からないという部分で一瞬、顔を俯かせた後に準備は出来ているのかと訪ねる。

「ああ！もう準備は出来てるんだ！フェスティバルの会場だったコガネ公園に簡単な会場を整えてある。後は君達さえ来れば始められる、さあ！一緒に来てくれ!!」

「えつと：ぼくは表彰なんてそんなら大それたこと：」

「ええやないかシュンくん。表彰されるのに相応しい行いをしたんやから！さっ行くで!!」

「アツ、アカネさん!!」

遠慮がちのシュンにアカネは後ろからシュンの肩を押して秘書に連れられて会場の

コガネ公園へと向かい中に入り、フェスティバルの会場だった広場に簡単な表彰式の舞台の準備がされていてその回りには人質にされていた観客だった人達やその家族や恋人や友達、街の人達がシユンとアカネに感謝しておりシユンとアカネが来た事に気づくと盛り上がりみんな次々にお礼を言う。

「みんな!! R 団から俺達を助けてくれたヒーローが来たぞ!!」

「フェスティバルを守ってくれてありがとう!!」

「「シユンく〜ん!!!」」

「「アカネちゃん!!」」

みんな次々にシユンとアカネの2人にお礼を言つて、シユンやアカネに感謝しており手を振っている。

「あわわ!! こんなにたくさんの方が来ているなんて!!」

「驚くことないさ! みんな君達には感謝しているんだから!」

「そうやでシユンくん! ここは堂々としていいんや!」

シユンがたくさんの方が来ている事に驚き、そんなシユンにみんなシユン達に感謝しているのだから当然だと言つてアカネも同意して堂々としていいんやと言つて周りの人達に手を振っている。

「おお! よく来てくれたアカネくん、そしてシユンくん! よく来てくれたね」

「市長さん!!」

「さあ、もう準備は出来てるよ。これで表彰式が開始できる」

そう言つてシュンとアカネを表彰式のために用意した簡単な舞台の上へと連れて行く。

そしてシュンとアカネの表彰式が始まる。

『表彰：シュン殿、アカネ殿、あなた達はR団から我が街の伝統あるコガネフェスティバルを救い、街の人々やポケモン達を救つてくれた事に感謝し、その勇気とポケモンを想う愛情に敬意を表しここに表彰状を送ります』：本当にありがとう。アカネくん、シュンくん」

「ありがとうございます!!」

ワア~~~~パチパチパチ

市長が表彰状を読み上げ、シュンとアカネに表彰状を渡し2人に再度お礼を言い、シュンとアカネもお礼を返し表彰状を受け取るとシュンとアカネの表彰式に来ていた人達も一斉に拍手してシュン達に感謝し称えている。

「そして人質になつていた自分達を助けてくれた2人に感謝の印にと育て屋の老夫婦のお二人からお礼の品を授与したいとの事です。それではお二方お願いします」

そして表彰状を受け取つたシュン達に次は人質になつていた観客達の中に育て屋の

老夫婦が居て、自分達を助けてくれたシユン達に感謝の印として育て屋の老夫婦からお礼の品が授与されると言う。

そして表彰台の上にながって来た老夫婦は笑顔を浮かべながらその手にタマゴらしき物を持っていた。

「私達夫婦をR団から助けてくれた君達2人に感謝の印に私達の育て屋で取れたポケモンのタマゴを送ります」

「本当にありがとうございますね2人とも。さあ、受け取って」

育て屋の老夫婦は笑顔で感謝の印にと持っていたポケモンのタマゴをシユンとアカネに手渡す。シユンとアカネは茶色に白色の縞模様が入った2つのタマゴを受け取った。

「おじちゃん、おばちゃん!!ありがとうございます!!とっても嬉しいで!!」

「ありがとうございます……でもポケモンのタマゴなんて貴重な物を貰っていいのかな?」

「どういたしまして：アカネちゃん、シユンくん」

「シユンくん：そんな事気にしないで大丈夫だよ!うちにはトレーナーのポケモン以外のポケモンも育てていてポケモンのタマゴもたくさんあるんだよ!だから私達の感謝の気持ち受け取ってもらえるかな?」

「はい…そういう事ならありがたく受け取らせていただきます。これがポケモンのタマゴ：初めて見た…温かい…」

シュンは育て屋の老夫婦の感謝の気持ちを素直に受けてポケモンのタマゴを受け取り、タマゴを受け取り優しく抱きしめるとポケモンのタマゴを始めて見るシュンは：抱きしめているタマゴから感じる温かさど命の鼓動に感動していた。

そして老夫婦がお礼のポケモンのタマゴをシュン達に渡すと表彰台から降りて行くどまた市長が上がって来る。

「続いてR団を倒しコガネシティの人々やポケモン、伝統を守ってくれたシュンくんをこの街の名誉市民に任命したいと思います」

ワア〜！キャア〜！パチパチパチ!!!

そして続いて市長からシュンをコガネシティの名誉市民に任命すると宣言するとシュンの表彰式を見に来ていた街の人達はそれを聞いても再度盛り上がり歓声を上げて拍手をしている。

「名誉市民ですか…それって…」

「文字通りコガネシティの住人や他の街の人なんかコガネシティのために貢献した人が任命される荣誉ある称号の事や！ちなみにジムリーダーのアタシも名誉市民になつとるんやで!!」

「街のために貢献したなんて・ぼくはそんな大それた事は…」

「謙遜する必要はないよシユンくん。君は名誉市民になるに相応しい事をしたんだ。街の人達も誰一人不満に思ってる者は居ないよ！」

謙遜するシユンに市長はシユンが名誉市民になるに相応しい行いをしたと言いつい街の人達も全員納得しており不満に思ってる者は居ないとシユンに説明する。

市長の言う通り表彰式に来ている街の人達は誰一人不満な表情をしておらずに寧ろシユンが名誉市民になるのを喜んでいるようであった。

コガネシティの人達はR団からこの街の人達やポケモン、フェスティバルを救ってくれたシユンが名誉市民に任命されるのは当然であると思っているからである。

みんなはシユンが任命される事に盛大な拍手で祝う。

「皆さん・ありがとうございます!!」

「それではシユン殿、あなたを我がコガネシティの名誉市民に任命し名誉市民証と記念メダルを贈呈します」

「ありがたく受け取らせていただきます」

ワア〜!パチパチパチ!!!

シユンが名誉市民証と記念のメダルを受け取るとみんな拍手でシユンの任命を心から祝福している。



「これにて・シュン殿、アカネ殿の表彰式、及び名誉市民の授与式を終了したいと思います。本日はお集まりいただき誠にありがとうございました」

「ありがとうございます」

パチパチパチ!!!

これでシュンとアカネの表彰式と授与式が終了し、市長とシュン、アカネが本日集まってくれたみんなにお礼を言つて頭を下げる。街のみんなは拍手をして表彰式は終了するのであった。

「いやあ・本当に驚きました。まさか自分のためにコガネシティの皆さんが表彰をしてくれてその上、名誉市民に任命してくれるなんて……」

「あはは・いきなりで悪かったなあシュンくん!!でもみんなそれだけシュンくんには感謝してらつて事や!!」

あの後、シュンとアカネは表彰式が終了すると来てくれ街の人達も解散して会場の片付けも市長や秘書のスタッフ達に任せて2人は再びデートを再開していた。

シュンは突然の自分の表彰に驚いており、アカネも苦笑しながらもみんなそれだけシュンに感謝しているのだと微笑む。

「それにポケモンのタマゴまで貰えて本当に嬉しいです」

「ほんまやなあ！ウチも嬉しいで！どんな子が生まれてくるのかほんまに楽しみやで！！」

アカネはそう言ってケースに入ったポケモンのタマゴを嬉しそうに笑顔で抱きしめている、シユンもポケモンのタマゴが貰えて嬉しくてどんなポケモンが生まれるのかワクワクしている。

そうしてしばらくシユンとアカネが歩いていると……

「おっ！居た居た。おっい、待ってくれ〜！！」

先程のように後ろから自分達に声を掛ける男の声が聞こえて来る。

「今度はなんや？」

アカネはまたも自分達のデートに横やりが入り少々不満になりつつも後ろを向きシユンも振り向くとそこには……。

「おっい！！」

そこには緑色の短髪に紳士服のような服装の青年がシユン達の元へと走って来る。

「はあ・はあ・はあ・ようやく追い付いた・」

「あんたは確か：ウチと同じフェスティバルの審査員をしまったポケモン研究家の：えっと？」

「そうや！！ぼくはマサキ！！ポケモン研究家のマサキや！！」

青年はやつとシュン達に追い付き走つて来たため息切れを起こして深呼吸をしており、アカネは目の前に居る青年に見覚えがあり確か自分と同じでフェスティバルの審査員をしていたポケモン研究者である事に気づくが名前を思い出せない、すると見かねて青年がマサキと自分の名を名乗る。

「マサキ・マサキつてもしかしてカントーで有名なポケモン研究者の灯台守のマサキさんですか？」

「よう知つとるな!!そうや、ぼくがポケモン研究者のマサキや!!よろしくなシュンくん！」

シュンはマサキの名に聞き覚えがありそう訪ねるとマサキはそうだと言ってシュンによろしくと挨拶する。

「そんな有名なポケモン研究者の人がウチらに何の用なんや？」

「君達と言うより君に用があつて追い掛けて来たんやシュンくん！」

「ぼくにですか？」

「ああ!先ずはお礼を・R団に襲われてたぼくを助けてくれてほんまにありがとう！」

アカネがそんなに有名なポケモンの研究者が自分達に何の用なのかと聞くとマサキは2人と言うよりシュンに用があつて追い掛けて来たと言つて、マサキは自分をR団から助けてくれたシュンにお礼を言う。

「どういたしまして：それでわざわざお礼を言うために追い掛けて来たんですか？」

「それもあるけど実はシユンくんにお願いが有つてきたんや」

「お願いですか？」

「ああ！実はぼくジョウト地方のポケモンを研究するために此処コガネにあるぼくの別荘に来て研究してるんや！ポケモン学会に発表する資料の作成やらそのポケモンの住む環境についても調べるために明日から出掛けないといけないんや！」

「それがシユンくんへのお願いとどんな関係があるんや？」

「ああ、それでシユン君にお礼も兼ねてあるポケモンを譲りたいんや！」

「ポケモンをですか……」

「ああそうや！シユン君に譲りたいポケモンはこのポケモンや！出て来るんやイーブイ！」

「ブイ!!」

マサキはジョウト地方のポケモンの研究のためにもコガネにある別荘に来ており、ポケモン学会に発表する資料やポケモンの生息する環境についても調べるために明日から出掛けないといけないと説明すると、アカネはマサキにシユンへのお願いの話しとどんな関係が有るのかと聞きマサキはシユンにお礼も兼ねてあるポケモンを譲りたいと言い、マサキはシユンに譲るポケモンをボールから出してボールから茶色に所々に白い

毛並みの小さなポケモンが飛び出して来る。

「このポケモンはイーブイ!」

シュンは出てきたポケモン：イーブイにポケモン図鑑を向ける。

「イーブイ：…しんかポケモン。周りの環境に合わせて：体の作りを変えていく能力のポケモン：色んなタイプのポケモンに進化する可能性を見せている…。」

「きゃあ〜!イーブイ可愛い!!」

「ブイブイ!!」

図鑑にイーブイのデータが表示されてボールから出てきたイーブイにアカネは可愛いとメロメロになりイーブイも可愛く笑顔で反応する。

「マサキさん：どうしてぼくにイーブイを?」

「ああ：理由は3つある!：1つはフェスティバルの時にR団からぼくを助けてくれたお礼や!」

どうして自分にイーブイをと訪ねるとシュンにマサキは理由は3つあると言って話し始める! 1つ目はフェスティバルの時にR団から自分を助けてくれたお礼だと言う。

マサキとはある縁でフェスティバルの審査員を勤める事になり、審査員をしていた所にR団が襲って来てシュンのおかげで助かったそのお礼だと言う。

「2つ目はぼく自身これから忙しくてそのイーブイの面倒を見て暇がないんや…」

2つ目の理由はマサキ自身がこれから研究や発表などで忙しくイーブイの面倒を見ている暇がないと言う。

「そのイーブイはある研究者とのツテで自分の元に来たんやけど：ぼくはこの通り忙しくて殆どボールから出していないんや！ボールから出す時も食事の時だけやし、これじゃあイーブイが可哀想と思つてな、そこでシユン君にイーブイを任せたいんや!!」

とある研究者とのツテで自分の元へと来たイーブイだったがマサキはこの通り研究などで忙しく殆どボールから出しておらず、出ている時も食事の時だけでこれではイーブイが可哀想だと思いそこでシユンにイーブイを任せたいのだと説明する。

「イーブイをぼくに：」

「ブイ？」

マサキのお願いを聞いてシユンはイーブイを見つめイーブイもシユンに見られている事に気づいてシユンを見つめる。

「どうしてぼくに：マサキさん程の人なら他にイーブイを任せられる人も居るでしょう？」

シユンは疑問に思っていた：マサキ程の有名なポケモン研究者なら他にイーブイを任せられる程のツテや人脈もあるだろうと：それなのにどうして自分にイーブイを任せるのかと訪ねる。

「まあな：だけどぼくはシュン君にイーブイを任せたいと思ったんや!」

「えっ?」

「どうしてなんや?」

シュンにそう聞かれてマサキは同意しつつもそれでもシュンにイーブイを任せたいと思つたというマサキにシュンはえっ?となり、アカネはどうしてなのかと訪ねる。

「それが3つ目の理由や!ぼくがR団に人質になつた時、R団がポケモンを道具だと酷い事を言つてた時に他のみんながR団に言い負かされて臆してしまつたのに：君だけは臆する事なく反論した：ポケモンは道具なんかじゃない!君にとってはポケモンは大切な家族だと：」

3つ目の理由は自分がR団の人質になつていた時にR団がポケモンを道具扱いする酷い言葉に他の人達がR団に言い負かされて臆してしまい反論出来ずにいる中、シュンだけが臆する事なく反論した。

ポケモンは道具などではなく：シュンにとってポケモンは大切な家族だと：。

「君のその言葉を聞いてみんな勇気を貰つたんや!迷いを振り切つて自分達にとつてポケモンは大切な存在だと気づけた：ぼくは君のその言葉に感動した：そしてポケモンを家族だと言う君ならイーブイの事も大切にしてくれるやろうと思つたんや!」

シュンのその言葉を聞いてみんな勇気を貰つたのだと：迷いを振り切り自分達に

とつてポケモンは大切な存在だと気づけた・マサキはシユンのその言葉に感動し、ポケモンを家族だと思っているシユンならイーブイの事も大切にしてくれるだろうと思つたと言う。

「どうや？イーブイの事、頼まれてくれへんか！ぼくは誰でもない君にイーブイを任せたいんや！」

「ブイ……」

マサキは改めてシユンにイーブイを頼むようにお願いする：他でもないシユンに任せたいと……イーブイも不安そうにシユンを見つめている。

「……」

シユンはマサキの言葉を聞いてただ黙つてイーブイの前に座り込みイーブイを見つめる。

「イーブイ・君はどうなの？ぼくがトレーナーでもいいのかい？」

「ブイ……？ブイ!!」

イーブイの頭を優しく撫でてからシユンはイーブイに自分がトレーナーで良いのかと訪ねるとイーブイは少し頭を傾けた後にイーブイはシユンの優しさが伝わったのか笑顔で頷いた。

「うん！マサキさん。喜んでイーブイを引き取らせてもらいます」



「ほんとにかシュン君!!」

「ブイ!!」

「はい! イーブイはぼくが責任を持つて育てます。マサキさんのご好意ありがたくいただきます」

「ありがとなシュン君!!」

「ブイ!」

「おっと・ハハ! これからよろしくねイーブイ!」

「ブイ!」

シュンはイーブイを引き取る事を決めるとマサキとイーブイは喜び、シュンはイーブイを責任持つて育てる事を誓い、マサキの好意をありがたく受け取ると、マサキもシュンにお礼を言いイーブイもシュンがトレーナーになってくれて嬉しかったからかわずシュンの胸に飛びつきシュンは慌ててイーブイを受け止めると少し苦笑した後イーブイにこれからよろしくと言いイーブイも笑顔で頷く。

「良かったなシュン君」

「はい!」

アカネは笑顔で祝福しシュンも笑顔で喜ぶ。

そしてその後、一度マサキの持つてるボールのリリースボタンを押してイーブイを逃

がしシユンの持つモンスターボールを軽くイーブイに当てるとイーブイはボールに吸い込まれ一度も抵抗の証であるボールが揺れる事なくシユンにゲットされた。

「これからよろしくねイーブイ！」

シユンがそう言った後に現在シユンの手持ちが6体のためイーブイのボールはオーキド博士の元へと転送された。

「それじゃシユン君！イーブイの事よろしくお願いするわ！後助けてくれて本当にありがとう。それじゃ自分はこれから出掛ける仕度があるからこれで失礼するで、それじゃ！」

「はい！イーブイを譲っていただきありがとうございました」

マサキはイーブイの事を改めて頼んだ後に再度助けてくれたお礼を言うのと、マサキは出掛ける仕度をするためにこれで失礼すると言って走って去っていきシユンもイーブイの事でお礼を再度言つてマサキと別れた。

「フウ・すいませんアカネさん！自分の事で長々と待たせてしまつて……」  
「ええつて！それだけシユン君に感謝してる人が多いつて事やしな!!」

マサキに別れの挨拶を済ました後にシユンはアカネへと向き直り自分の事で長い時間待たせてしまった事を謝り、アカネは大丈夫だと言つてそれだけシユンに感謝してる人が多いつて事だからと嬉しそうに言う。

「ありがとうアカネさん。それじゃ次はどこに行きましようか?」

アカネにお礼を言つてシュンは次にどこに行こうかとアカネに聞く。

午前9時頃からデートを始めて色々な場所を周りその間に色々と有つて現在時計は午後2時を回つていた。

「そりゃなあ、あらかたコガネの有名所も見て回つたしどうしよかなあ……そりゃ!!」

粗方のコガネシティの名所を周り、次はどこに案内しようかと考えているアカネ……してとある事を思い付く。

「アカネさん?」

「シュンくん!ちよつとコガネの街から離れてまうけど良い所に案内したるで!!」

そう言つてアカネはシュンをその場所まで案内しようと歩き出す。

「えつと?アカネさん……いったいどこへ行くんですか?」

アカネに連れられてしばらく歩いていたシュンは景色も変わり、コガネシティの都心部からだいぶ離れて山の上を歩いており、おそろおそろどこに行くのかと訪ねる。

「この先にな!ウチの知り合ひのやつてるミルタンクの牧場があんねん」

「ミルタンクの牧場ですか?」

「そりゃ!そこの牧場で取れるミルタンクのミルクは栄養満点でなあ!オマケに味もピ

カイチや。その美味しいミルクをシユンくん達にご馳走したるわ！美味しいミルクをたっぷり飲んでコンデイションをバッチシにして明日のジム戦に挑んでやシユンくん！

「ありがとうございますアカネさん!!」

するとアカネはこの先に知り合いの経営しているミルクの牧場があると話し、そこで取れるミルクのミルクは栄養満点で美味しいのでシユン達にご馳走してあげるといふことで、美味しいミルクを飲んでポケモン達のコンデイションをバッチシにして明日のジム戦に挑んでほしいという心遣いに感謝してシユンは笑顔でお礼を言う。

そんな話しをしながらしばらく歩いてみると広大な草原に木の柵が建てられその向こうにたくさんさんのミルクが居て、草を食べていたり寝そべっていたり気持ち良さそうに眠っていたり仲良く遊んでいたりとたくさんさんのミルクが思い思いに過ごしていた。

「わあ〜・凄いたくさんのミルク！まさにミルク牧場ですね」

シユンは広大な草原にたくさんいるミルクを見て感動しまさにミルクの牧場だと思う。

「あつ!!お〜い！ハワードじいちゃん!!お〜い、じいちゃん!!」

「よう〜!!アカネちゃん!!」

しばらく柵づたいに道を歩いているとアカネが誰かに気づいて片手を大きく振ってその人の名を呼ぶ：シュンもそちらに視線を向けると牧場の中でテンガロンハットを被った老人が藁を備中鍬で山積みに集めており老人も気づいてアカネに手を振る。

「じいちゃん！遊びに来たで！」

「いらつしやいアカネちゃん。よく来たのお」

おじいさんはアカネが来たことに気づくとシュン達のいる柵の近くへと行き、遊びに来たと言うアカネに笑顔でよく来たのと応える。

「じいちゃん、紹介するで！彼はシュンくん。じいちゃんも知つと思うけど：ウチと一緒にR団と戦ってくれたんや!!」

「シュンです。はじめまして！」

「おお！君がR団を倒してくれた少年か！話しは面白いとるよ。大したもんじゃ！わしはハワード、よろしくのお」

アカネはシュンをハワードじいちゃんに紹介しシュンも挨拶すると：ハワードじいちゃんもR団を倒してくれたシュンの話しを聞いており大したものだとシュンを誉めると自身もシュンに自己紹介する。

「今日はシュンくんにごガネの街の色んな場所を案内しとんのや！それでシュンくんに此処の美味しいミルクをご馳走したくて来たんや！今、大丈夫かじいちゃん？」

「もちろんじゃよ。ちょうど作業も今、終わったところじゃ！ウチのミルクをご馳走しよう。さっ、おいで！」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます!!」

アカネのお願いをハワードじいさんは快く引き受け、アカネとシユンはお礼を言う：そして2人はハワードじいさんに連れられて牧場の中にある家へと案内される、家の隣にある建物は倉庫のようである。

「さっ！ウチの自慢のミルクじゃ。飲んでくれ！」

「これがミルタンクのミルク。美味しそうですね」

「シユンくん、せっかくやからシユンくんのポケモン達にも飲ませたりや！」

「そうですね。みんな出て来て」

ハワードおじいちゃんは3人分のミルクの入ったコップと色んな器に入ったミルクをおぼんに乗せてシユンに提供し、シユンは初めて見るミルタンクのミルクに目を輝かせているとアカネがシユンにポケモン達にも飲ませるように言い、シユンは同意してみんなをボールから出す。

「ヒノー！」

「ワニャー！」

「チコ!」

「リル!」

「レディ!」

「ソウ!」

「みんな、ハワードさんが出してくれたミルクをいただきます。ハワードさんご馳走になります」

「うむ。たと飲みなさい」

「はい!いただきます。ウムツ:美味しい!!」

「ヒノ」

「ワニヤ」

「チコ」

「リル」

「レディ」

「ソウ」

シュンとヒノアラシ達はミルクタンクのミルクのその美味しさに目を輝かせて喜ぶ。

「素朴で喉ごしがあつてほんのりとした甘さ、最高です!」

「そうやる!ここのミルクは最高なんや!」

「ウチのミルクをそんなに誉めてくれるなんて嬉しいのおく。どうじゃもう一杯」

「遠慮はいらんでシユンくん、どんどん飲みや！」

「はい！お言葉に甘えて頂きます」

ミルトANKのミルクの味わいに感激したシユン：アカネの言う通り最高だった：ハワードじいさんは自分の牧場のミルクをそんなに誉めてくれるシユン達に嬉しくて笑顔でシユン達にもう一杯どうじゃと進め、アカネにも遠慮しないで飲むように言われ、シユンはお言葉に甘えておかわりを貰う。

ヒノアラシ達も美味しそうにぐくぐくとおかわりのミルクを飲んでいる。

「ウチーチーズ食べよっと！シユンくん達も食べるやろ？じいちゃん貰って来るで！」

「おうー！」

そう言つてアカネは倉庫にチーズを取りに行った。

「すいませんハワードさん。ミルクだけでなくチーズまでご馳走になって！」

「良いんじゃないよ。遠慮しないでたんと食べなさい」

ミルクだけでなくチーズまでご馳走になってしまい悪いと思うシユンにハワードじいさんは遠慮しないでたんと食べるように言う。

「お待たせや！これがじいちゃん牧場の牧場で作ったチーズやで!!」

「いただきます！うーん!!チーズも濃厚でとても美味しいです!!」



「チコ〜」

「ヒノ〜」

「ワニヤ〜」

「レディ〜」

「リル〜」

「ソウ〜」

アカネが倉庫から持って来た大きいホールチーズをテーブルに置くとアカネがナイフで切り分けてくれる：シュンはナイフで小さく切ってフォークで食べると、そのチーズの濃厚な味わいと舌でとろけるようなチーズのコクにほっぺたが落ちそうな程美味しく笑顔になりチコリータ達もその美味しさに喜ぶ。

「ご馳走さまでした！ミルクもチーズも本当に美味しかったです」

「やっぱりじいちゃん牧場で取れるミルクとチーズは最高やで！」

「ホッホッ!!ありがとうアカネちゃん、シュンくん」

シュンはチーズとミルクを食べ終わりナイフとフォークを置いてご馳走さまでしたと言って、アカネもやっぱりじいちゃん牧場のミルクとチーズは最高やと言い、2人のそんな言葉を聞いたハワードじいさんは笑顔で2人にお礼を言う。

「それにしてもアカネちゃんがまさかボーイフレンドを連れて来るとはのお：びつくり

したわい」

「えっ？」

「なっ／＼／＼!!なに言ってるんねんじいちゃん!!! シュンくんとはそんなんじゃないで／＼／＼!!!」

ハワードじいさんの突然の一言にシュンはキョトンとした表情になり、アカネは顔を真つ赤にしてテレテ慌てて否定する。

「なんじゃ? 違ったのか・わしはてつきりアカネちゃんにステキなボーイフレンドが出来たと思ってたんじゃがの。しかしアカネちゃんのその反応を見る限り全くの見当違いというわけでもなさそうじゃのおく〜!」

「だから違うって言うてるやろ／＼／＼!! やめてえなあじいちゃん／＼／＼!!」

「あはは……」

ハワードじいさんはアカネの否定の言葉にてつきりアカネに素敵なボーイフレンドが出来たのかと思っていたのだが違うのだと分かるが・アカネの顔を真つ赤にして言う様子に全くの見当違いというわけでも無さそうだと笑みを浮かべて言い、アカネはますます顔を真つ赤にして否定しその2人の様子をシュンは苦笑いをしながら見つめている。

「シュンくん! アカネちゃんは少々落ち着きがなくておてんばじゃがとっても良い子な

んじゃよー!じゃからぜひ仲良くしておくれ」

「はー!」

「もう／＼／＼!!いい加減にしてえな／＼／＼!!」

ハワードじいさんは改めてシュンにアカネは少々落ち着きがなくておてんばだけどもとても良い子だから仲良くしてほしいとお願ひし、シュンもハワードじいさんのアカネを思う優しい気持ちを感じて笑顔で頷き、そんな2人の話しを聞いていたアカネはさらに顔を真つ赤つかにして恥ずかしさで少し涙目になり叫ぶ。

そしてその後もシュン達はミルクやチーズを食べながら色々な話題を楽しく会話しながら過ごしていると……。

「さてと…それじゃ仕事の続きに戻るかの…アカネちゃんとシュンくんはゆっくりしてておくれ!」

「大丈夫かじいちゃん? 最近、腰が痛いって言うてたやろ? 今日にはもう止した方がええんちゃう」

「なに、大丈夫じゃよ。よっこいしよつと(グキツ!!)ハウ!!」

ハワードじいさんはアカネとシュンにゆっくりしているように言うのと牧場の仕事の続きに戻ろうと机に手を置いて立ち上がろうとする。

そんなハワードじいさんをアカネは心配するが本人は大丈夫だと言って体を真つ直

ぐにして立ち上がろうとしたその時真っ直ぐにしようにとした腰からグキツ！と嫌な音が鳴り響く。

「じいちゃん!!」

「ハワードさん!!」

腰からグキツとなり痛み出したハワードさんは机に片手を支えて痛む腰を抑えておりアカネとシユンは慌てて駆け寄る。

「アイタタ・腰が・」

「大丈夫かじいちゃん!!ほらだから言うたやろ。シユンくん!じいちゃんをベッドに運ぶから手伝ってくれる」

「はー」

腰を抑えて痛みに呻くハワードじいさんを支えてシユンにベッドに運ぶのを手伝ってとお願いすると、シユンも片側からハワードじいさんの腕を支えて隣の部屋のベッドへと運びハワードじいさんの腰に負担をかけないようにうつ伏せに寝かせる。

「アイタタ・」

「ぎっくり腰やね・じいちゃん無理すぎや。ゆっくり休みい!うちシツプ取って来るからシユンくん、じいちゃんを見ててや」

「分かりました」

ハワードじいさんはうつ伏せに寝て痛む腰に呻き、アカネはハワードじいさんの症状を見てぎっくり腰だと気づき、無理のしすぎだからゆっくり休むように言つてシュンにシップを取つて来るからハワードじいさんを見ているようお願いしシュンも頷く。

「ハワードさん、大丈夫ですか?」

「なあに!これくらいどうつて事ないわい!それよりミルタンク達の世話をしないと: アイタタタ!!」

「駄目ですよハワードさん!安静にしてないと!!」

シュンがハワードに大丈夫かと聞くとハワードじいさんはこれくらいはどうつて事はないと言つてミルタンク達の世話をしないと起き上がろうとして腰に痛みが走り、シュンは慌てて起き上がろうとしたハワードじいさんに駆け寄り安静にするように言つて寝かせる。

「しかし:今日中に残っている仕事を片付けないと:::」

「なに言つてんねんじいちゃん!ぎっくり腰なんやから休んでなきや駄目やで!」

そこにシップを持ったアカネが戻つて来てハワードじいさんに休んでなきや駄目だと言う。

そしてアカネはハワードじいさんの腰に優しくシップを張つて取れないように包帯を軽く巻いていく。

「これでよし！じいちゃん。安静にしないでアカンで！」

「すまんのお：アカネちゃん。フウく少し楽になったわい」

「これくらいなんて事ないわ！それより医者にも電話しといたで！後で来てくれるそうや」

ハワードじいさんの治療が終わった後に安静にするように言い、ハワードもアカネにすまなそうに礼を言うとアカネはこれくらい何でもないと云った後に、医者に電話を済ませてハワードの牧場は街から少し離れているため症状もただのぎっくり腰と言うことで少し後に来てくれるという事である。

「だからもう今日はおとなしくしとき！じいちゃんは無理しすぎたんや！」

「しかし：今日は、後どうしてもやっとなければならない仕事があるんじゃない？」

「やらなければならぬ仕事って何ですか？」

「じいちゃんは朝は牧場やミルクタンク達の小屋の手入れや掃除、ミルクタンク達のご飯や寝床に使う干し草を積み上げたりして、昼食を済ませた後にミルクを取るミルクタンク達の体を洗ってからミルクを取るんや。じいちゃんは毎日こういう風に仕事をしてるんや」

アカネに今日はおとなしくしているように言われたハワードじいさんは今日は、後どうしてもやらなければいけない仕事があると言い、シュンが訪ねると：アカネがハワー

ドじいさんがいつもやっている仕事とその工程を説明しそしてこの時間にやっている作業の内容を説明する。

「他にもやらないといけない事もあるんじゃないか?今アカネちゃんの言っていた事は必ずやらないとミルタンク達がストレスを感じて美味しいミルクが出来ないんじゃないか?」

そしてハワードじいさんはアカネが説明してくれた事以外でもやらないといけない作業があるが、今アカネが説明してくれた作業は必ずやらないとミルタンク達がストレスを感じて美味しいミルクが出来ないと意気消沈している。

「だからわしがやらないと・アイタタ!」

「じいちゃん!安静にしないで駄目やって!」

ハワードじいさんはそう言っただけで立ち上がるとうるが腰が痛みだし、アカネは慌てて抑える。

シュンはぎっくり腰でやらなきゃいけない仕事が出来なくて困っているハワードじいさんを見てある決心をしてその決心をハワードじいさんに伝えようと口を開く。

「あの・よろしければよくにその仕事のお手伝いをさせていただけませんか」

「えっ?」

「なに?」

シュンの突然の提案を聞いた2人はキョトンとしており、そんな2人にシュンは続け

て話す。

「ハワードさんはぎっくり腰でとても仕事が出来る状態じゃありません！だからミルクやチーズをご馳走になったお礼にハワードさんの仕事のお手伝いをさせて下さい」

シユンはミルクとチーズをご馳走になったお礼にぎっくり腰で動けないハワードに変わって仕事のお手伝いをさせてほしいとお願いする。

「ありがとうシユンくん！じいちゃん、シユンくんもこう言ってくれとるしお願いしようやー！」

「そうじゃな・シユンくんありがとう。ぜひお願いするよ」

「はい！任せて下さい」

アカネはそんなシユンの好意に感謝してハワードじいさんをお願いしようと言うと、ハワードも同意してお礼を言ってこちらからお願いとシユンは任せて下さいと言う。

「やり方はアカネちゃんから教えてもらつとくれシユンくん・それでお礼と言ってはなんじゃがミルクとチーズをお土産に用意しとくから頑張っておくれ」

「はい、ありがとうございます」

「それじゃシユンくん行くで！じいちゃん。仕事はわたし達がやつとくから安静にしとくんやで分かったな」



「ああ・分かつとるよアカネちゃん。お言葉に甘えて休ませてもらうよ」

そう言うハワードにシュンはお礼を言うと、アカネはシュンを案内する前にハワードじいさんに安静にしてるように念を推してハワードじいさんもお言葉に甘えて休むことにした。

そしてシュンはアカネに連れられてミルク達の居る牧場へと着いて行く。

「さっ! シュンくん。じいちゃんに教えてもらった今回ミルクを取るんはこのミルク達や。さっ、ミルク達の体を洗うで!」

「はいっ!」

アカネが言ったミルクを取るミルクの数は一〇頭近くおり、そのミルク達の体を洗う作業が始まる。

「シュンくん、ミルクの背中の方から水で濡らしたブラシで優しく磨いてあげるんや!」

「はい、分かりました」

シュンはアカネに言われた通りそつとミルクに近づいてミルクの背中からブラシでゴシゴシとミルクの背中を磨いていく。

「ほうらミルク! 気持ちええか〜!」

「ミルク〜!」

「アカネさんはやっぱり慣れてるなあ！良しほくも！」

アカネはミルタンクをの背中を優しく磨いていきミルタンクも気持ち良さそうしており、シユンはそんなアカネの慣れた手付きを見てシユンもそれを手本にミルタンクを優しく磨いていく。

「ミルミルウ~~~~♪」

するとシユンが磨いているミルタンクが気持ち良さそうに声を上げてうつとりしている。

「フフフ。上手やなシユンくん。ミルタンクも気持ち良さそうやで」

「そうですか？アカネさんを手本にさせてもらったんですが上手に出来てるなら良かったです。ミルタンク、気持ち良いかい？」

「ミルミルウ！」

「あはは！よしよし」

ミルタンクのその気持ち良さそうな様子を見てアカネは始めてなのにシユンがミルタンクを上手に磨いているのを見て微笑み、シユンはアカネを手本にさせてもらったと言つて上手に出来てる事に安心してミルタンクに気持ち良いかと聞くとミルタンクはご機嫌な感じでシユンにすり寄りシユンはミルタンクを優しく撫でる。すると……。

「ミルミル！」

「ミルウ〜!」

「ミルル〜!」

数匹のミルタンクが自分も磨いてほしいとシュンの近くに寄って来る。

「よしよし!みんなちよつと待っててね。順番に磨いてあげるからね」

「「ミルミルウ〜!!」」

シュンは寄って来るミルタンク達を優しく撫でて順番に磨いてあげると言うミルタンク達は笑顔で喜んでいる。

「あはは!」

「……／／／……」

シュンがミルタンク達に微笑む笑顔をしつと見つめるアカネ：顔に赤みを浮かべてうっとり見つめてシュンのミルタンク達に微笑み優しく撫でる様子に見惚れていると……。

「ミルミルウ?」

「あつ!ゴメンゴメン!!ほら気持ちええか〜」

「ミルウ〜!」

ミルタンクにせかされたアカネはミルタンクに謝りミルタンクの体をゴシゴシと磨いていく。

そうしてシユンとアカネはその調子でどんどんと10頭近くのミルタンクの体を磨いていき、そして最後の1頭を磨き終わり次の作業に入る。

「さっ！これで今日ミルクを取るミルタンク達の体も磨き終わつたし、そしたらミルタンク達を小屋に連れて行くで！」

「はい・だけどうやって連れて行くんですか？」

ミルクを取るミルタンク達の体を磨き終わるとミルクを取るために小屋へと連れて行くと言うアカネにシユンはどうやって連れて行くのかと訪ねる。

体を磨いてもらったミルタンク達は気持ち良さそうに寝そべったりしていて動きそうにない。

「んくそうやね。じいちゃんならいつもやってるから一声掛けるだけでミルタンク達も付いて行くんやけど・」

「それじゃあどうしたら・」

「大丈夫やシユンくん！じいちゃんからこういう時のためのポケモンを借りてきたんや！出て来てや！」

「ウワァン!!」

訪ねられたアカネはワードじいさんが言えばミルタンク達も言うことを聞いて付いて行くんだけどと頭を傾けて人差し指を片頬に当てて困った様子にシユンはどうし

たらと訪ねると、アカネは大丈夫だと言ってハワードからこういう時の為に役立つポケモンを借りて来たと言つてボールを取り出し投げるとボールから『こいぬポケモン』「ガーディ」が出て来る。

「ガーディですか?」

「そうや! じいちゃんの仕事を手伝つてくれるじいちゃんの相棒や。じいちゃんの言うことを素直に聞かんミルタンクもたまにおつて、そういうミルタンク達を先導して連れて来たり、番犬にもなつてるんや」

「なるほど!」

「さつ! ガーディ。ミルタンク達をあの小屋まで連れて来てや」

「ワン! ワンワン!!」

このガーディはハワードじいさんの仕事を手伝つてくれる相棒で、ごくたまにハワードじいさんの言うことを素直に聞かなかつたり、機嫌の悪いミルタンク達を先導して連れてきたり、番犬にもなつている事を説明し、ガーディに今、体を磨いたミルタンク達をミルクを取るための小屋へと連れて来るようにお願いしガーディは頷くとミルタンク達に向かつて吠えてミルタンク達を誘導しミルタンク達もおとなしく連れられて行く。その小屋はシュン達がミルクとチーズをご馳走になった小屋の隣の建物だった。

そしてミルタンク達が入つて行つた後でシュンとアカネもその小屋へと入つて行く

と……。

「これは？」

「驚いたかシユンくん！この機械でミルクタンクからミルクを集めるんやで！」

小屋の中には青い巨大な機械に3つのガラスケースがあり、その下にチューブが延びておりその先に何かをセットするように穴が空いている。

「さっシユンくんこの機械をミルクタンクのお乳にセットしてベルトを閉めてや」

「あっ！はい！」

シユンはアカネに習ってその機械をミルクタンクのお乳にセットしてベルトをカチツと閉める。ミルクタンク達も敷き詰められた藁の上におとなしく座り機械をセットされている。そして3匹のミルクタンクにミルクを抽出する機械がセットされる。

「よし！これで準備OKや。シユンくん、端にある黒い先のレバーを引いてくれや」

「分かりました。よつと！」

機械のセットが完了すると、シユンに機械の端にある黒い先のレバーを引くようにお願いしシユンは言われた通りにレバーを下ろすとミルクタンクからミルクの抽出が開始されて3つのガラスケースにミルクが集まっていく。

「へえ！ミルクタンクのミルクってこうやって集めるんですね」

「そうや！この美味しいミルクからバターやチーズが作られるんやで！」

セットされた機械から吸い出されたミルクがチューブを通って3つのガラスケースへと集まっていく。

「さっシュンくん、ミルクの抽出にはしばらく時間が掛かるからその間にミルタンク達の小屋の掃除をしようか!」

「はい、アカネさん」

「ガーデイ!ミルタンク達のこと見ててや」

「ワン!」

そしてミルタンクのミルクの抽出にはしばらく時間が掛かるためその間にミルタンク達の小屋の掃除をしようと言うことになり、アカネはガーデイにまだミルクの抽出をしていないミルタンク達を見ているようお願いし、シュン達は掃除用具を持ってミルタンクの小屋の掃除を始める。

ミルタンクの小屋は藁や干し草が敷き詰められており水や餌を入れる籠などが置いてあった。まずは床などをブラシで磨いた後に古くなった藁や干し草を変えて水も変えていく。

「ふう・ふう・ふう・ハワードさんは毎日こんな大変な作業を1人でしているんですね」

「ふう・ふう・ふう・そうやで!じいちゃんが常にミルタンク達にストレスを掛けないように綺麗に掃除したり、ミルタンク達の体を磨いたりして健康を保ってるから美味しいミルクが出

来るんやで！」

シユンは床をブラシで掃除し藁を運んだりで体力を消耗し額の汗を拭いながらハワードが毎日こんな大変な作業を一人で行っている事に感心し、アカネも新しい藁や干し草を運び終えて一息つきながらハワードじいさんがいつもミルク達にストレスを掛けないように身の回りを清潔にしてミルク達の体を磨いて健康を保っているおかげで美味しいミルクが出来るのだと嬉しそうに説明する。

「よし！ミルク達の小屋の掃除も一段落したし、そろそろミルク達のミルクの抽出も終わつとるやろうし：行こっかシユンくん」

「はいアカネさん」

ミルク達達の小屋の掃除も一段落して、そろそろミルク達のミルクの抽出も終わつて頃だろうと掃除用具を片付けてミルク達がミルクを抽出している小屋へと向かうとそこには……。

「あれっ？ケンリーさん。テリーさん。ロイドさん！」

「おお！」

「やあアカネちゃん！」

「お疲れさま2人とも」

そこには2人のハワードと同じくらいの老人と1人の男性が居て今、ミルク達か



ら抽出して満タンになったガラスケースを新しい物にセットして次のミルトン達とのミルクを抽出するのをしていた。

「みんなどうしたんや?どうしてじいちゃんの牧場に:」

「実はハワードさんから連絡を受けてね。ぎっくり腰になってしまい仕事をアカネちゃんとその友達に任せてしまったから良ければ手伝いに来てくれないかと頼まれてのう」

「これは一大事と駆けつけて来たと言うわけじゃよ」

「私も以前ハワードさんには牧場の経営の事で世話になったからね。その時のお礼もあるからね」

そこにはハワードじいさんの牧場関係で親しい友人の人達が居て、ハワードじいさんの体調不良の連絡を受けてこれ一大事と駆けつけて来たと言うことである。

「みんな!どうもありがとう。あつ!シュンくん。紹介するで、この人達はハワードじいちゃんの友人でケンリーさん、テリーさん、ロイドさんや!」

「はじめましてシュンです。よろしくお願いします」

「おおよろしくの!!」

「君とアカネちゃんのおかげで仕事も後僅かじゃ!後はワシらに任せて遊んでおいで!」

「今、ハワードさんは一緒に来た医者に見てもらってるよ。それとハワードさんからの

伝言で君とアカネちゃんにお疲れ様だと言ってたよ。頑張ってお腹も空いてるだろうから机にミルクとパンにチーズを用意しといたから食べとくれだつてさ」

アカネから3人を紹介されるシュン：お互いに簡単に挨拶した後に、後は自分達に任せてシュンとアカネに遊んで来るように言って、ハワードは今一緒に来ていた医者診察を受けていると言ってハワードからの伝言を伝えてくれた。

「大きにみんな！それじゃシュンくん。後はケンリーさん達に任せて、うちはじいちゃんの様子を見てくるからシュンくんは頑張ってお腹も空いたやろうしミルクやチーズを食べててや」

「はい：分かりました」

後はケンリー達に任せてアカネは診察を受けているハワードじいさんの様子を見に行き、シュンには頑張ってお腹も空いただろうから机の上のミルクやチーズを食べてるように言ってハワードじいさんの所に向かった。シュンは言われた通りに最初の部屋に向かうとその机の上にはぎつしりとテーブルからはみ出しそうなくらいにミルクやチーズ：バターにパンが置いてあつた。

「ハワードさん：こんなにたくさん：嬉しいんだけどぼくとアカネさんの2人に対して多いな：そうだ!!出て来てメロエツタ、ディアンシー」  
「どうしましたマスター？」

「ごきげんよう!マスター!」

机いっぱいミルクやチーズにシュンは2人分に対して多いと思ったシュンはこっそりボールからメロエツタとディアンシーを出す。

「どうしたんですかマスター!今日はジムリーダーのアカネとお出掛けをしているのではなかったのですか?」

「うん!それで今、アカネさんの知り合いのやつてる牧場に居るんだけど:色々あつて牧場の仕事を手伝ったお札にこんなにミルクやチーズをご馳走になってね:ぼくやアカネさんと2人だけじゃ食べきれないし、せつかくだからメロエツタとディアンシーにもこの美味しいミルクやチーズを食べてほしいと思つてね」

「まあ、♪なんて美味しそうなミルクとチーズ何でしょう!」

「ありがとうございますマスター!ぜひいただきます!」

「うん!だけど此処じゃアカネさん達に見つかつて大変な事になるだろうから、牧場の端に小さな林と茂みがあつたからそこで隠れて食べてね。ほらこのシートの上にミルクやチーズを置いてね。それとそこでヒノアラシ達も出して食べさせてあげてね:さつきヒノアラシ達もミルクやチーズをご馳走になったから少しでいいから分けてあげてね」

「はい!分かりましたマスター!はあ!」

メロエツタはシュンの言う通りにして”サイコキネシス”で机のミルクとチーズ、パンにバターを浮かせる。

「それじゃマスター！お言葉に甘えてみんなでいただきますわ！」

「うん！でもメロエツタとディアンシーはまだ食べてないんだからメロエツタ達はたくさん食べていいんだからね」

「はい。ありがとうございますマスター！それではみんなで仲良くいただきますね。では……」

ディアンシーはシュンから受け取ったヒノアラシ達の入ったボール6つを持ってみんなであげると笑顔で言い、シュンはまだメロエツタとディアンシーは食べてないからみんなより食べていいと伝えた。メロエツタも領いてディアンシーと”サイコキネシス”で浮かべたミルクやチーズなどやシートを浮かべて近くのと茂みのある場所に”レポート”した。

「さてと・それじゃぼくも小腹が空いたし食べながらアカネさんを待つてようかな……」

メロエツタとディアンシーが自分達の分のミルクやチーズ、パンやバターを持っていつてもまだ充分たくさんあり：2人では食べきれないほどであった：そしてシュンは小腹が空いていた事もあり食べながらアカネを待つていようと椅子に座る。

「ふう・やつぱりこのミルクとチーズは美味しいな。パンもバターも凄く美味しい」

シュンが体を動かしたためお腹が空いて再び美味しいミルクとチーズ、バターを付けたパンに舌鼓を打ってその美味しさを味わっていると……。

「お待たせシュンくん！」

「アカネさん！」

そこに向こうの部屋からアカネが来てシュンの真正面の席の椅子に座る。

「ハワードさんの容態はどうでしたか？」

「大丈夫や！牧場の仕事で体に無理をしすぎたのが良くなかったみたいや：2、3日も安静にすれば良くなるってお医者さんも言ってたわ。痛み止めの薬とシップをいくつか貰ったわ」

「そうですか。たいしたことがなくて良かったです」

ハワードの容態を訪ねるシュンにアカネは医者による診断結果を伝えて安心するよう言うに言っただけシュンもたいしたことがないようで安心する。

「ふう・ウチもお腹空いたわ！いっぱい食べよつと!!」

そしてアカネも牧場の仕事の手伝いで体力を使いすっかりお腹が空いてしまったため机の上にあるミルクやチーズにバターの付いたパンを食べる。

そしてシュンとアカネはたわいのない話をしながら楽しく食事していると部屋にある時計の針がもう16時30分を回っていた。

「アカネ！もうこんな時間になつとる：ゴメンなシユンくん：昨日のお礼に街を案内するはずやったのに：仕事を手伝つてもらつたりして：」

「いえ：街ならもう充分に案内してもらいましたし、それにミルクやチーズをご馳走になりましたかそのお礼ですし気にしなくて大丈夫ですよ」

アカネは自分が思うよりも時間が進んでいた事に驚いた後に、せっかく牧場に行つた後にもコガネシテイの穴場や人気スポットに案内しようとしたのに、牧場の仕事を手伝つてもらつたりさせてしまい遅い時間になつてしまつた事を謝ると、シユンはアカネに気にしなくて大丈夫だと言つて街なら充分に色々楽しいところに案内してもらえ、ミルクやチーズもご馳走になつたのだからお礼に手伝うのは当然だから気にしないでいいとアカネに言う。

「ありがとなシユンくん：そうや!!そろそろお腹もいっぱいになつとるし最後にウチのお気に入りの場所に連れてつたので、付いてきやシユンくん」

「アカネさん？」

シユンの優しい好意にアカネは笑顔でお礼を言つた後にお腹もいっぱいになつたから、今日のデートの最後に自分のお気に入りの場所にシユンを連れて行くと言つて付いて来るように言う：シユンはアカネに付いて行く。

そうしてシユンはアカネに連れられてお気に入りの場所まで歩いていると：：牧場

の端にある茂みに：。

「ソツゴクゴク!プハア!このミルクは凄い美味しいですね。マスターが絶賛していたのも分かります」

「ええ!まったくとした喉ごしに素朴な甘さ：とつても美味しいですわ!」

「ヒノヒノ」

「ワニヤ〜」

「チコリ〜♪」

「リル〜」

「ソウ：zzzzz：」

「レディ〜」

メロエツタはその美味しいミルクをゴクゴクと飲んでおり、ディアンシーもそのミルクの美味しく味わい笑顔を浮かべている。

ヒノアラシとワニノコもまだ全然食べてないメロエツタやディアンシーの事も考えながらミルクやチーズを食べており、チコリータとマリルはあの時食べれなかったパンを美味しそうに食べている。

フシギソウは先程までミルクやチーズを食べていたがお腹一杯になったため気持ち良さそうに眠っており、レディアンもお腹が一杯になると食後の運動とばかりに飛び

回っている。

「さて、それではチーズも食べましょう。(パクッ!) ウ〜ン♪この濃厚なチーズのkok  
・たまりませんね」

「本当! 美味しいですわ! このバターをつけたパンも最高です」

そしてチーズも食べるメロエツタとディアンシー: その濃厚なkokにウツトリとしており、ディアンシーはパンにバターをつけて美味しく食べている。

「そうですわ! ヒノアラシ: 炎で少しこのチーズを溶かして下さるかしら」

「ヒノ? ヒノ〜!!」

するとディアンシーがあることを思い付きヒノアラシにそうお願いするとヒノアラシは炎の威力を調節して弱火の熱でお皿のチーズを少し溶かす。

「チーズを溶かしてどうするんですかディアンシー?」

「この溶けたチーズをパンに挟んで食べるんです。きつと美味しいですわ」

ディアンシーは2種類のパン: 食パンとロールパンの間にチーズを挟んでみんなに手渡す。

「それではいただきますわ(パクッ!) ウウ〜♪美味しいですわあ♪」

「ではワタシも: アムツ: 本当! 美味しいです」

「ヒノヒノ♪」



「ワニヤ〜♪」

「チコ〜♪」

「リル〜♪」

「レディ〜♪」

「ソウ♪」

そして香ばしく溶けたチーズを挟んだパンをみんなで食べるとその美味しさに喜び、ヒノアラシ達と先程まで寝ていたが：チーズの香ばしいその美味しそうな匂い匂い目を覚ましたフシギソウも嬉しそうに食べている。

「さっ！せっかくマスターが頑張ったお礼に貰ったミルクやチーズ、バターとパンを分けてもらいましたし残さず食べましょうね」

「はい。もちろんですわ♪」

「ヒノヒノ」

「ワニヤ」

「チコリ！」

「リル！」

「ソウソウ」

「レディ！」

メロエツタ達はシュンが牧場の仕事を手伝ったお礼にまたご馳走になったミルクやチーズなどを自分達のために分けてくれたのだから残さず食べるように言ってみな美味しく味わうのであつた。

そしてシュンはアカネの案内でアカネの言うお気に入りの場所へと来ていた：辺りはもう夕方の時間な事もあり徐々に日が当たらない場所も出来てきていた。

「着いたでシュンくん！此処がウチのお気に入りの場所や！」

「此処は…」

そこは牧場から少し離れた小高い丘となつており：そこから見える夕日が大きく写り：山の向こうに沈んでいく夕焼けに美しい景色が一望出来た。

「綺麗やろシュンくん。此処から見える夕日がウチ大好きでな！暇な時や嫌な事があつて落ち込んだ時とかよく此処に来んねん」

アカネはそう言つた後にゆっくりその場に座つて前方に写る綺麗な夕日を眺める：シュンもその綺麗な夕焼けの景色をじつと見つめていた。

「ほら！シュンくんも座りや！」

「あつ！はい」

シュンはアカネに促されてアカネの隣に座る。

「シュンくん今日はどないやつた？ウチ：ちゃんと街を案内出来とつたか？」

「はい！アカネさんにコガネシティの色々な場所に案内してもらって今日は本当に楽しかったです。ありがとうございます(ニコツト)」

「ツツ／／!!そつ、そうか／／楽しんでもらえたなら何よりやわ(アカン！アカンでシュンくん／／いきなりその笑顔はズルいで／／)」

アカネはシュンの浮かべる笑顔に見惚れて照れて顔が赤くなりながら楽しんでもらえたなら良かったと言いい内心でいきなりのシュンのその笑顔に思わず見惚れて照れてしまいズルいと思っている。

「?・アカネさん大丈夫ですか?顔が赤いですけど…」

「だつ！大丈夫やシュンくん!!何でもあらへんで!!」

シュンは顔の赤いアカネを心配するとアカネは慌てて大丈夫だと誤魔化す。

「フウ。だけど・さつきはゴメンなシュンくん:せっかくお礼のつもりで牧場に連れて来たのに牧場の仕事を手伝わせてしまうて…」

「いえ・そんな謝る必要なんてないですよ。ミルクやチーズをいっぱいご馳走になりましたし困った時は御互い様ですし、あの状態のハワードさんをほっておけませんでしたし、何より色々貴重な体験をさせてもらいましたし:とても楽しかったです」

「シュンくん…」

「アカネさんがこの街が大好きな気持ちいっぱい伝わりましたよ。コガネシティの色々

な楽しい場所やポケモンを思う優しい住人の皆さん：そして自然溢れる豊かな牧場で美味しいミルクやチーズを作ってるハワードさんの努力に：困った時に助けに来てくれる同じ牧場仲間の皆さん：そして此処から見える綺麗な夕焼け：コガネシティはとっても良い街だつて言うのが良く分かりました」

R団を倒したお礼にと街を案内して牧場に連れて来たのに：牧場の仕事を手伝わせてしまった事を謝るアカネにシユンは謝る必要はないと言つて、ミルクやチーズをいっぱいご馳走になつた上にぎっくり腰になつたハワードさんに無理はさせられずほつとけなかつたと言ひ：そして何より牧場の仕事など自分に取つて色々と貴重な体験をさせてもらえて楽しかつたと言つと：アカネはシユンのその優しさを感じてシユンを見つめる。

シユンは今日アカネにコガネシティを案内してもらつた中でアカネのこの街が大好きな気持ちがいっぱい伝わつて来るのを感じた：コガネシティにある色々な楽しい場所、ポケモンを思う優しい街の人達、自然豊かな牧場で美味しいミルクやチーズを作るために頑張るハワードや困つた時に直ぐに助けに来てくれる牧場仲間の人達、そしてこの場所から見える綺麗な夕焼け：それら全てがコガネシティの良い所であり：それらを感じてシユンはコガネシティはとても良い街である事が良く分かつた。

「シユンくん／／／：コガネの街を誉めてくれてありがとう／／ウチもこの街が

とつても大好きや／＼!!」

アカネはシュンの優しき溢れる笑顔に見惚れて自分の大好きな街をそんなに誉めてくれた事に嬉しくなり自分もこの街が大好きだと赤みがさした笑顔を浮かべ微笑む。

「シュンくん／＼／＼」

「アカネさん?」

アカネはシュンの優しき溢れる笑顔に見惚れて顔に赤身を浮かべてドキドキと鼓動が速くなり：胸のときめきを感じていた：アカネはうつとりとした表情でシュンを見つめてシュンの手に自分の手を添えるとシュンはどうしたのかとアカネを見ている？

「シュンくん／＼／＼夕日：綺麗やなあ」

「そうですね。とても明るくて綺麗に輝いてますね」

アカネはシュンの手に自分の手を添えながら綺麗な夕日を見つめシュンも明るく綺麗に輝く夕日を静かに見つめている。

そうしてシュンとアカネが夕日をしばらく見つめているとアカネが突然、シュンの肩に頭を乗せて体をすり寄せて来る。

「えつと・どうしたんですかアカネさん?」

「シュンくん／＼／＼暫くこうしててええかな／＼／＼」

シュンはアカネが自分にすり寄って来たため少々ドキドキしながらアカネにどうし

たのかと訪ねると、アカネはうつとりとした様子で可愛く目を潤ませてシユンに暫らくこうしてて良いかと訪ねる。

「はい／＼／＼!!ぼくなんかで良ければ／＼／＼:」

シユンは目を潤ませて頬に赤身をさして見つめるアカネの可愛さに顔を赤くして恥ずかしくなりながらも自分で良ければと言う。

「ありがとうシユンくん／＼／＼!フフフ／＼／＼」

「／＼／＼!!」

アカネは嬉しそうにシユンの肩に頭を乗せて両手でシユンの腕に抱きつき体をすり寄せて来てシユンも思わず照れてしまう。

「ウチ／＼／＼やっぱりシユンくんのこと:／＼／＼」

アカネは自分の中にシユンに対してとある感情が芽生えるのを感じていた:。

アカネは自分の迷子になったピツピを助けてくれて、R団からシユンがコガネフェスティバルとポケモン達を守り、そして何度も自分を助けてくれた昨日の日からシユンの事が気になっていた:。

ポケモンとの絆を大切にし:自分を励ましてくれたり、R団に立ち向かう勇氣と強さ、ポケモンの事を想う優しさに何度も危ないところを自分が怪我をするのも構わず身を呈して助けてくれたシユンに少しずつ惹かれていくのを感じていた。

そして今日のお礼にとコガネシティの街を案内という意味のデートで：出掛ける準備をしていた時にジムのみんなにからかわれて色々大変に意識してしまっていた。

そして今日一日、街を案内して自分が散々道に迷い（本人は方向音痴と自覚していない）迷惑をかけたのに怒らず気にしないで色々フォローしてくれた：そしてポケモンセンターでシュンとシュンのポケモン達の仲の良い様子をシュンがポケモンの事を大切にしている事を改めて感じていた。

そしてその後、色んな所を回り楽しく遊んで、その途中で寄ったゲームセンターで可哀想なアーボをほっとけずにはいた心優しいシュンにアカネは好印象を抱いていた。

そしてその後に分分達を街を挙げて表彰してくれたりシュンが名誉市民に任命されたり、人質の中に居たポケモン研究家のマサキから助けてくれたお礼にとイーブイを貰ったりと色々とおつたが：次にアカネはシュンに自分の知り合いのやっている牧場の美味しいミルクをご馳走したくて牧場へと案内して、シュンは美味しいミルクやチーズをご馳走になっていると牧場を経営しているハワードがぎっくり腰になってしまうという予想外のアクシデントにあい、シュンのお礼に仕事を手伝うという好意に甘えて手伝ってもらった事になった：シュンがミルクの体を優しく磨いて気持ち良いと聞いた時にミルクが気持ち良さそうな様子にシュンは嬉しくて笑顔が浮かぶ：そのシュンの笑顔に思わず見とれてしまうアカネ：その後仕事をしている途中にハ

ワードの牧場仲間のが応援に来てくれて後は任せて自分達はアカネのお気に入り場所へと来ていた。

そこは小高い丘でそこから見える綺麗な夕日を見つめながら今日1日のデートでちゃんと街を案内出来たのかと不安に思っているアカネに、シユンは微笑んで楽しかったと伝えるとシユンの突然の笑顔にアカネは顔を真っ赤にしてズルいと内心で呟く。

そしてアカネはシユンの優しさと笑顔に胸がときめき、ドキドキと鼓動が早くなつていくそしてシユンの手に自分の手を添えて顔をさらに真っ赤にさせて綺麗な夕日を見つめる。

そして夕日を見つめるアカネはシユンの肩に頭を乗せて体をすり寄せるアカネに、シユンもアカネの可愛さにドキドキと鼓動が速まり照れて顔を赤くしてしまうシユンであった。

「それじゃそろそろ帰ろっか／＼／＼シユンくん／＼／＼」

「はい！アカネさん／＼／＼」

しばらく綺麗な夕日を見つめていた2人は夕日が静かに沈んでいくのを見届けると牧場へと戻るのであった。

牧場に戻った2人はハワードさんに挨拶して帰り仕度を始めていると……

「(マスター！)」



「戻りましたわ♪」

「メロエツタ、ディアンシー!」

そこにみんなの入ったボールを持ってミルクやチーズを食べ終わったメロエツタとディアンシーが戻って来る。

「(どう?ミルクやチーズは美味しかった?)」

「(はい!とつても美味しかったですわ!)」

「(お皿やコップは”テレポト”で洗い場に置いておきましたわ)」

「(ありがとうメロエツタ!それじゃあ2人ともボールに戻ってくれる?)」

「(はい!)」

「(後でどんなデートだったか聞かせて下さいねマスター!)」

そう言つてメロエツタとディアンシーはボールへと戻って行った。

そしてハワードに挨拶をしたシュンとアカネは牧場を出てコガネシティのジムの近くまで来た所でシュンがアカネにあることを伝える。

「アカネさん!今日一日楽しかったです!ぼくは明日のジム戦に備えて対策を考えたいから今日はポケモンセンターに泊まります」

「そっか!シュンくんとの明日のジム戦:楽しみにしてるで!言つとくけど手加減はせえへんからな!」

「はい！全力で挑ませていただきます!!」

シユンは明日のジム戦の対策のためにポケモンセンターに泊まる事にして、アカネは明日のジム戦を楽しみにしていて手加減はしないことを宣言するとシユンも全力で挑む事を誓う。

「それじゃシユンくん。また明日な!」

「はい！また明日!」

こうして今日：アカネのお礼に街を案内するというデートは終了するのであった。

アカネはジムに帰るとジムの女性や女の子達にシユンとのデートの事を寝彫り葉彫り聞かれて、からかわれてアカネは恥ずかしくて顔を真っ赤にするのであった。そして育て屋からお礼に貰ったタマゴの手入れをしたりしていた。

一方シユンもメロエツタとディアンシーにデートの事を寝彫り葉彫り聞かれた後にシユンは、育て屋に貰ったお礼のポケモンのタマゴとイーブイの事を教えてみんなは興味津々でポケモンのタマゴを見つめるのであった。その間もシユンは明日のアカネとのジム戦の対策について考える…：昨日見たアカネのミルタンクの物凄いパワーにどう対抗するか考えていた…。

アカネの他のポケモン達も侮れないし：シユンは色々と考えて夕食を済ませると程々に明日のジム戦に備えて就寝するのだった。

今日のアカネとのデートはシュンに取って貴重で楽しい1日を過ごしたのであった  
(途中、名誉市民になったりと予想外な事もあったが本当に楽しい1日であった)。

# ポケモン検定試験！トントントン拍子でリーグ出場？

これはシユンがシロガネ山でポケモンと一緒に修行する日々を過ごしていたある日  
：。

メロエツタの一言から始まった。

これはある日：メロエツタがこんな事を言った事から始まったもしもの物語。

シユンがシロガネ山でポケモン達と一緒にジョウト地方に向けて修行を始めてから  
数日：。

今日もシユンはポケモン達の体調を気づかいケアをしてポケモンのコンディション  
をチェックしながらポケモン達の技を研きパワーアップのための特訓をシロガネ山の  
岩場近くの草地にみんなで協力して簡単な拠点を作りそこでポケモン達のレベルアッ  
プの特訓を行っていた。

今は岩場に巨大な岩と小さい岩を幾つか並べて技のパワーを上げる特訓と技の命中  
精度を上げる特訓を行っていた。

「行くよーリザードン！かえんほうしゃ！！」

「ウオウ〜！！」

リザードンの”かえんほうしゃ”が巨大な岩を粉碎する。

「良いよりザードン! 今度は向こうだ。狙いを定めて”かえんほうしゃ”!!」

「ウオウ!! ウオウ!!」

そして今度は小さな岩が4つ並んでる所に狙いを絞って”かえんほうしゃ”を当てる。

「良いよりザードン! ナイスコントロール! 技のパワーもだいぶ上がってるね」

「ウオウ!!」

シユンはリザードンの技の威力と命中率が上がってる事を誉めてリザードンも頷く。

「よし! 次はキミだ。行くよストライク!”きりさく”だ!!」

「ストライク!!」

シユンの指示を受けたストライクはその鋭いカマで岩を一刀両断する。

「よし、次は”かまいたち”だ!!」

「ストライク!!」

続いてカマから真空の刃を飛ばして百発百中で小岩を切り裂く。

「よし良いよストライク!!」

「ストライク!!」

「次はキミだ! ケンタロス、”とっしん”で岩を粉碎するんだ!!」

「モオ〜!!」

次はケンタロスに”とっしん”を指示しその強烈なパワーで大岩を粉々にする。

「良いよケンタロス。またパワーが上がったね」

「モオ〜」

シユンがケンタロスの頭を撫でるとケンタロスも喜ぶ。

「みんな順調に技のパワーを上げてるねメロエツタ！そつちはどうだい？」

「はい！こつちも順調ですよマスター！スリーパーもわたしのアドバイスのおかげでエスパー技の威力も少しずつ上がってきています」

「スリー」

メロエツタはエスパータイプのスリーパーの指導をしておりメロエツタのアドバイスのおかげで少しずつエスパータイプの技の威力も上がってきていた。

「スリーパー、”サイコキネシス”は使う時にエスパーの力を頭に集中させてそれを一気に解き放つようにするのです。さあやってみなさいスリーパー」

「スリー！スリー〜パ〜！」

スリーパーはメロエツタのアドバイス通りに頭にエスパーの力を集中させて一気に解き放ち”サイコキネシス”で岩場にある大岩を粉々に砕く。

「良いですよスリーパー！その調子です」

「スリスリ!」

アドバイス通りに成功させたスリーパーを誉めるメロエツタ。

「向こうの調子も良さそうだな。ディアンシー! そっちはどうだい?」

「はいマスター! こっちもバツチリですわ。イワークもカラカラもどん力をつけておりますわ」

シユンに聞かれたディアンシーは自分が見ているイワークとカラカラの調子もバツチリでどんどん力をつけている事を伝えてイワークとカラカラに視線を向ける。

「ウオオ〜!!」

「カラ〜!!」

イワークは大岩を「しめつける」で砕き、カラカラは「ホネこんぼう」で大岩を砕く。

「その調子ですわ! イワーク、カラカラ!!」

「ウオオ〜!」

「カララ!」

調子の良いイワークとカラカラを笑顔で誉めるディアンシー。

「うん! みんな絶好調だね。良しみんな! この調子で特訓を続けるよ」

「はい(ですわ)!」

「ウオウ!!」

「ストライ!」

「モオ!」

「スリー!」

「ウオオ〜!」

「カラカラ!」

そうしてシユンがそう言うときみんなやる気全開で返事をしてより一層気合いを入れて特訓に勤しむのであった。そしてしばらく特訓をした後で現在シユン達は休憩もかねた昼食を取っていた。

「ふう〜。みんなの調子も絶好調だし、この調子でもう少し特訓をしてジョウト地方に行けるかな?」

「そうですわマスター! みんなも特訓でどんどん強くなっていますわ。この調子でいけば大丈夫ですわ」

「うん! そうだねディアンシー! この調子でみんなも強くなっていったら、ぼくもみんなのトレーナーとして相応しいように頑張らないと。ぼくもバトルに勝てるようにもつとポケモンの勉強をしないと。」

「そのいきですわマスター!」



シユンがシロガネ山でポケモンの特訓を始めて今日で1週間：ポケモン達を鍛え上げて順調にステータスや技の威力、身体能力を上げていた。

この調子でいけばジョウト地方のリーグに挑戦出来る日も近いかな?と思うシユンにディアンシーも頷いてみんなも特訓でどんどん力をつけてきてるのでこの調子でいけば大丈夫だと言うとシユンもポケモン達が頑張って特訓して強くなっているのだから自分もみんなのトレーナーとして相応しいトレーナーであるように頑張らないとと決心して歩けバトルで有利に戦い勝てるようにもつとポケモンの勉強をしようと思気込みメロエツタも笑顔で応援する。

「でもメロエツタにも色々とかポケモンについての知識を教えてもらってるけど：：どれくらい知識がついてるのかな?」

メロエツタにポケモンについての知識を色々とかわっているシユン：しかし自分にとれだけ知識がついているか分からなかった。

「それならマスター!マスターの知識と実力を試すのに丁度良い場所がありますわ!」  
「えっ?メロエツタ。それって：」

「ポケモンリーグ検定試験ですわ!」

「ポケモンリーグ検定試験?」

メロエツタの提案にキョトンとなるシユンそしてトントン拍子に話しが進むシユン

達は簡単な準備を済ませてシロガネ山からポケモンリーグ検定センターに来て受付で説明を聞いていた。

『ポケモンリーグに出場するためには：幾つかの街のジムを回ってジムリーダーに勝利した証のバッジを8つ集めなければならない：しかし：』

「とうポケモンリーグ検定センターでは筆記と実技の総合点で合格の判定を行います。そして合格者にはポケモンリーグ挑戦資格バッジが与えられます」

「おお〜!!」

ポケモンリーグ検定センターに来ていたシユンはメロエツタの言う通りに今の自分の実力と知識がどれくらいなのか試すためにメロエツタに“エレポート”で案内されて受付で説明を聞いて合格した物に贈られる赤く中心にPのエンブレムが輝くバッジにシユンはテンションが上がる。

「はい！君の受験番号だよ」

「ありがとうございます」

シユンは受付から自分の受験番号：51番を受け取る。

「それにしても：今日はやけに人が多いんですね？みんな受験しに来た人達ですか？」

「ああそうだよ！何しろポケモンリーグセキエイ大会の開催が近いからね。ジムリーダーからバッジを集め切れなかったトレーナーが最後のあがきに受験してきたり、普段

仕事などで忙しくてジムを回れない人達も来てるからね。日数的に今回の受験が合格出来る最後のチャンスだからね。みんな必死というわけなんだよ」

「はあ・・そうなんですか・・」

シユンはセンターにやけに人が多い事に疑問に思っていると・受付の人がその理由を話してくれる・ポケモンリーグの開催が近いためか最後のあがきにと受験に挑んでいるという事らしい。

「それではモンスターボールをお預かり致します」

「えっ?ボールをですか?」

「試験は君のポケモンでは行わないんです」

「そうなんですか・・分かりました。はい!お願いします」

「確かに!お預かりします」

シユンはメロエツタとディアンシーの入ったボール以外のリザードン達の入ったモンスターボールを受付の係員に預ける。

「それでは頑張つて下さい」

そう言つて受付の人はシユンから預かったモンスターボールを持って奥へと入つて行った。

「さて、これで受付も終わったし・・それにしても色んな人が受験に来てるんだな・・」

受付で受験の参加の手続きを終わらせたシユンは辺りを見るとシユンの他にも受験に来ていた人達を見る：一般のトレーナーや坊さんにジョーイさんまで居る。

そして数分待った後に場所を移動して第1試験の会場の自分の受験番号の席に座りパソコンに出題される問題を解いていく。

「それでは第1の試験はポケモンに関する知識を計る物です。それでは始め!!」

そうしてポケモンに関する第1の試験が始まり問題がパソコンに映し出される。

『ベロリンガの舌は身長の2倍である。 ○か×か』

「これは○だね。 良し!」

シユンは迷うことなく○のボタンを押す。

『ポケモンのことわざ キュウコン千年、カメルル万年。 ○か×か』

「これも○だね」

『サワムラーの別名はパンチの鬼。 ○か×か』

「……こんな簡単な問題も出るんだ……×」

シユンは基本的な知識の問題に呆れながらも×のボタンを押す。

『コイキングが始めから覚えている技は”はねる”だけ。 ○か×か』

「○だよね」

『もつとも小さいポケモンはキヤタピーである。 ○か×か』

「×だね」

『ドガースが初めて発見された場所はお風呂屋さん。 ○か×か』

「確かドガースが発見されたのは排気ガスの酷い工場の近くだったから×」

『タマタマが進化するのに必要なのはほのおのいし。 ○か×か』

「×だね」

『♂のみ存在するポケモンはケンタロスである? ○か×か』

「○と」

『ポケモンの中で最も重いポケモンはゴローニャである。 ○か×か』

「これは×と!」

『ギャラドスはきょうぼうポケモンである。 ○か×か』

「ギャラドスはきょうあくポケモンだから×と」

「これで第1の試験が終了して第2試験に入る。

「第2試験はポケモンの認識度を計ります。 ええ、ここにポケモンのシルエットや体の

一部が映ります。 何のポケモンか当てて下さい」

第2試験はポケモンの認識度を計る試験であった。

「では第1問。 このポケモンは何?」

前のモニターに丸いシルエットが映し出される。

「えっと・まん丸だからビリリダマかマルマインかな？ん・？」

シユンがそう考えているとシルエットの真ん中部分が少し尖っている事に気づく。

「これってもしかして・」

シユンはある考えが頭を過りその答えを用紙に書く。

「では正解は上から見たプリンです」

シルエットが消えて上から見たプリンが映し出される・その答えにてつきりビリリダマかマルマインかと思っていた他の受験生達から不満の声が上がる。だがシユンの答えは……。

「良かった・当たってた」

シユンはシルエットの丸の中心が少しの尖っている事に気づいてその部分が耳の部分だと思ったシユンは耳があつて丸いポケモン”プリンではないかと思いついたが勘が当たり正解だったので良かったと安心する。

「第2問。この模様の持つポケモンは？」

続いてはうずまきの模様が映し出される。

「あのうずまきの模様はニョロモかな？」

シユンは用紙にニョロモと書く。

「正解はニョロモです」

正解はやっぱりシユンの予想通りニヨロモであった。

「よく間違えられるのですが・ニヨロモは進化してニヨロゾになるとお腹のうずまきが逆になるのです」

モニターにはニヨロモとニヨロゾが映りお腹のうずまきの模様の違いが分かるように映っていた。

そしてどんどんと問題が進んでいきシユンは苦戦しながらも解いていきいよいよ第2試験も終わりが近づいていた。

「第15問。この尻尾を持つポケモンは何でしょう?」

モニターには赤い炎にオレンジ色の混ざった炎が映っていた。

「あの炎の色はヒトカゲやリザードとは違うし、ポニータかな?」

シユンは少々迷いながらも用紙にポニータと記入する。

「正解はポニータです」

「よし!正解だ!」

ずばり正解しシユンはガッツポーズする。

「ではこれで筆記の試験は終了と成ります。試験結果は受付近くのモニターで見れますのでそこで確認して下さい」

シユンと受験生達は受付近くの場所に移動すると上からモニターが降りて来る。

モニターは三段階の評価に別れており、右から『もうひとがんばり』、『よくできました』、『たいへんよくできました』となっており、受験番号51番のシユンは『たいへんよくできました』の欄にあった。

「やった！勉強してきた成果があつた!!」

シユンは好成績に喜び今まで勉強してきた甲斐があつたと嬉しくなる。

そして場所を移動してセンターの試験用のバトルフィールドに移動して実技の第3試験が始まる。

バトルフィールドの至るところでは受験生が受験用に選んだポケモンで試験官とバトルをしていた。

「さあ、どれでも好きなのをどうぞ!」

「ええと・どれにしようかな?」

その頃シユンは試験用のポケモンを選んでいた：ベルトに3つポケモンの入ったボールが幾つかある中でシユンはどれを選ぶか迷っていた。

「良し!これにしよう」

シユンは真ん中にある3つのボールの付いたベルトを選び手に取る。

「決めましたか!ボールの中のポケモンは試験のバトル開始まで分かりませんが、バトル用に訓練されているのであなたの言うこともちゃんと聞きますのでご心配なく：見た



「いのはどんなポケモンが出てきてもちゃんとトレーナーが対応出来るかどうかです」  
「なるほど・・良し頑張るぞ!!」

試験用のポケモンの入ったベルトを選んだシユンは自分の番が来るまで他の受験生のバトルを見ており、そしてとうとう自分の番が来てシユンはバトルフィールドのトレーナーサークルに入る。

試験開始の合図が鳴り、回りの観客は盛り上がりバトルを観戦する。

「それでは試験を開始します!それ!!」

「ゴバア〜!!」

試験官の先生が試験開始を宣言してボールを投げると中からゴルダックが出て来る。

「先生のポケモンはゴルダックか・ぼくのはどうかな?いけえ〜!!」

「イワ〜!!」

「ぼくのポケモンはイワークか。よろしくね」

「ウオオ〜!」

シユンの1体目のポケモンはイワークだった:シユンがイワークによりしくと挨拶するとイワークはこちらこそとばかりに頷く。

「それではこちらからいくぞ!ゴルダック、”みずでっぼう!!”」

「ゴバア〜!!」

「早速弱点を狙ってきたな・イワーク!! 前方に”いわおとし”で岩を落とすんだ」  
「イワーク!!」

シユンはイワークに”いわおとし”を前方に落とすように指示し、イワークは尻尾で地面を叩くと巨大な岩が舞い上がりイワークの前方に落ちてその岩がイワークを守り、盾のようにゴルダツクの”みずでつぼう”を防ぐ。

「”おお〜〜!”」

「ほう! 中々やるな!」

「イワーク!”いやなおと”!!」

「イワーク!!」

「ゴバア〜」

「これはイカン! ゴルダツク、”あなをほる”で地面に逃げるんだ」

「ゴバア!」

シユンはイワークに”いやなおと”を指示し、その凄まじい音にゴルダツクは苦しみ防御力がぐ〜んと落ちる。不味いと思つた先生はゴルダツクに”あなをほる”で逃げるように指示し、ゴルダツクはその場で穴を掘つて地面に潜る。

「今だイワーク!!”じしん”!!」

「ウオオ〜!!」

シユンは今がチャンスだとイワークに“じしん”を指示し、イワークはその尻尾を思いきり地面に叩きつけて“じしん”を繰り返す：すると……。

「ゴバア〜」

「ゴルダック!!しまった…」

“あなをほる”で地面に潜っていたゴルダックには“じしん”は通常の倍近いダメージになります。イワーク!止めの”すてみタックル”!!」

「イワーク〜」

「ゴバア〜」

「ゴルダック!!」

「ゴバア…」

地面に潜っていたゴルダックは“じしん”を通常よりもダメージを受けて地面から飛び出して来る：そこへすかさず止めの”すてみタックル”を指示しゴルダックを吹っ飛ばす：数回地面を転がるゴルダック：そして戦闘不能となる。

「よし!まずは1勝目!ありがとうイワーク!!」

「イワーク!!」

シユンはまずは1勝出来た事を喜びイワークに御礼を言うといワークも笑顔で頷く。観客の人達もシユンのバトルに興奮して歓声が響く。

「戻れゴルダック・自分のポケモンに対して苦手なポケモンを相手にしても焦らず冷静に指示を出す判断力。そしてポケモンの技に対しての知識の深さ・何より始めてバトルするポケモンとあそこまで息を合わせられるとは・これは当センター始まって以来の優秀な受験生のようだな・さあ！次はどうする」

「リザード!!」

「先生の次のポケモンはリザードか・ぼくの次のポケモンは何かな? いけ!!」

「パラセクト!!」

「パラセクトか! よろしくね」

「パラセクト!!」

先生の2体目はリザード、シユンはパラセクトだった・そして2回戦が始まる。

「ではいくぞ! リザード、”かえんほうしゃ”!」

「リザード! ザア〜!」

リザードはパラセクトに効果ばつぐんのほのおタイプの技”かえんほうしゃ”を放つ。  
つ。

「まずいな・そうだ! パラセクト、回転して”しびれごな”!」

「パラセクト・パラ〜!!」

パラセクトはシユンの指示通り回転しながら”しびれごな”を放つ。

「いったい何を?それではリザードの攻撃を防ぐ事は出来ないぞ!」

先生はシユンの指示の意図が分からずにいると:「かえんほうしや」が回転して舞い上げられた”しびれごな”に触れると爆発して”かえんほうしや”をかき消した。

「何!!」

「リザ!!」

”しびれごな”が爆発して”かえんほうしや”をかき消した事に先生は驚愕を露にしている。

「今だ!パラセクト、”しびれごな”!」

「パラセクト!!パラ〜」

「リザツ!!リザ〜」

「しまった!!」

そこへすかさずパラセクトの”しびれごな”がリザードに決まり、リザードはまひ状態になってしまう。

「今だパラセクト!れんぞくぎり!!」

「パラセクト!!」

「リザ!リザツ!リザツ!」

痺れて動けないリザードに”れんぞくぎり”が面白いように決まっていく。

「くっ！リザード、”かえんほうしや”だ！」

「リザツ：ザア〜!!」

リザードは体を痺れながらも反撃の”かえんほうしや”をパラセクトに放つ。

「交わして”きりさく”だ!!」

「パラ！パラ〜セクト!!」

「リザツ：…」

”かえんほうしや”を交わしたパラセクトは接近してリザードに”きりさく”で攻撃しリザードは倒れて戦闘不能になる。

「やった！ぼく達の勝ちだよパラセクト！」

「パラパラ！」

シユンは自分達が勝利したことをパラセクトと一緒に喜ぶ。

「戻れ：驚いたよシユンくん。まさかあんな方法で技を防ぐなんて：さっきのもしかしして：」

「はい！粉塵爆発です。パラセクトが”しびれごな”を使えると分かったのでもしかしてと思いついて見ました」

「なるほど：しかし粉塵爆発なんてそう簡単には起きるはずは：」

「はい！だから酸素とよく混ざるようにパラセクトに回転させて”しびれごな”を撃た

せたんです。全力で放って酸素と良く混ぜたか”しびれごな”がりザードの高熱のかえんほうしや”が接触して粉塵爆発したというわけです”

「そうだったのか・まったく・君は本当に優秀な生徒のようだな：ポケモンの知識だけでなく幅広い知識でバトルを有利に進める・もっと君のバトルを見せてくれ!」

「ゴロー!!」

戦闘不能になったリザードを戻した先生は先程のリザードの”かえんほうしや”をあのような方法で防がれた事に驚き、先程の現象に気づいた先生がそう聞くとシユンは先程の現象『粉塵爆発』だと説明し、粉塵爆発なんてそう簡単に起こるはずないと疑問に思う先生にシユンは粉塵爆発が起こった理由を説明しその説明に納得した先生は只の受験生とは思えぬその優秀さに呆れてポケモンの知識だけでなく幅広い知識でバトルを有利に進めるシユンに感心し、もっとシユンのバトルを見せてくれと期待を込めた様子で最後のポケモン”ゴローニヤをボールから出す。

「はい!ばくも最後まで全力で戦います。いけえ!!」

「カイカイ!!」

シユンも最後まで全力で戦うと気合いを入れて最後のポケモン：カイロスが出て来る：頭ハサミをキンキンと鳴らして出て来る。

「では行くよ！ゴローニヤ、”いわおとし”だ!!」

「ゴロ〜!!」

「カイロス！交わして、ゴローニヤに接近するんだ!!」

「カイカイ!!」

カイロスはゴローニヤの”いわおとし”を交わしてゴローニヤへと迫る。

「ならばゴローニヤ! ”ころがる” 攻撃だ!!」

「ゴロ〜!!」

接近してくるカイロスに向かってゴローニヤは体を丸めて”ころがる” 攻撃で迫って来る。

「カイロス! ”ころえる” で受け止めるんだ!!」

「カイ!!」

カイロスは”ころえる” の体勢でゴローニヤの”ころがる” を迎え撃つ。

「ゴロ〜〜!!」

「カイ〜〜」

カイロスにゴローニヤの”ころがる” が決まり、むしタイプのカイロスに効果ばつぐんのいわタイプの技が決まり少なくともダメージを負いながらその威力にカイロスを後退させる。



「カイ!!」

「ゴロー!!」

「なに!!」

「よし、今だよカイロス”あてみなげ”だ!!」

「カイ!!カイ!!」

「ゴロー」

後退したカイロスだが”こらえる”のおかげで耐えきる事が出来て、ゴローニヤの”ころがる”を受け止める事が出来た：そしてシユンはカイロスに”あてみなげ”を指示し、カイロスはゴローニヤの体を横に反らすように持ち上げて投げ飛ばす。

これならポケモンの中でも重量級のゴローニヤも投げ飛ばす事が出来てゴローニヤに効果ばつぐんの”あてみなげ”が決まり地面を転がる。

「うん!こらえる”でダメージを抑え”ころがる”を受け止めた後に”あてみなげ”を確実に決める：見事な戦術だ!ならこれはどうかな?ゴローニヤ!”いわなだれ”」

「ゴロー!!」

シユンの見事な戦術を誉める先生：そして次はゴローニヤに”いわなだれ”を指示し、岩が雪崩のようにカイロスに迫る。

「くっ!!カイロス、”こらえる”で耐えるんだ」

「カイ！」

避けきれない事を悟ったシユンはカイロスに再び“こらえる”を指示し耐える。

「カイ〜〜!!」

「(ごめんねカイロス：ここは耐えてほしい!)」

カイロスに“いわなだれ”が直撃し大ダメージを受けて耐えるカイロス：シユンはカイロスを苦しめてしまう事を謝り耐えてくれる事を願う。

「カイ：カイ：」

“こらえる”を使っていた事もありカイロスは体力ギリギリで耐える事が出来た。

「良く耐えたねカイロス!!」ハサミギロチン“だ!!”

「カイ！カイ〜〜」

そしてすかさずシユンはカイロスに“ハサミギロチン”を指示し、カイロスは頭のハサミを輝かせてゴローニヤに接近する。

「カイ！カイ〜〜」

「ゴロ〜〜」

ハサミギロチンでゴローニヤを挟み込み投げ飛ばす。

そして……

「ゴロ〜〜」

一撃必殺の技を受けたゴローニヤは戦闘不能になる。

「そこまで!試験終了!!」

3体のポケモンが全て倒れた事を確認したシユンの試験の対戦相手だった先生は、試験終了を宣言してシユンに近づいて来る。

「シユンくん、実に見事なバトルだった。バトルの状況を判断して相手の技に對して的確な指示を出してバトルを有利に進める冷静さに博学な知識を持ち焦らず対応していた。とても良いバトルだった!私が1勝も出来ずにやられたのは久方ぶりだったよ。これで君の試験は終了だ」

「はい!ありがとうございます先生!!」

「うむ!実に良いバトルだったよ」

先生がシユンに見事なバトルだったと誉めて、教官である自分が1勝も出来ずに逆に受験生に負けてしまったのは久方ぶりだったと言ってシユンの試験は終了だと教えてくれた。

シユンは自分のシユンのを担当してくれた先生にお礼を言い先生も良いバトルだったと誉めてお互いに握手すると回りでシユンの試験を見ていた他の受験生や教官の人達も拍手をしてくれる。

教官の人達の中にはシユンが教官を相手にストレートで勝った事に驚いている者も

いた：何しろシユンの対戦相手だった教官は試験用のポケモン達を育てた元優秀なトレーナーでトレーナーとしての強さもセンターで一番だったため受験生であるシユンが勝利したことに驚愕していたのである。

そしてシユンの後も受験生達の三次試験が続いていく：ポケモンを巧みに操ってバトルをしたり、知識が乏しく上手くバトルが出来ずにやられて焦ってしまったりと様々なトレーナーや立場の人が試験を受けて勝ったり負けたりとしていた。みんな合格したいために必死に良い結果を残そうと頑張っていた特にセキエイリーグ開催がギリギリまで迫っているのにジムバッジを集めきれなかったトレーナーの人達は覇気迫る勢いで頑張っていた。しかし試験官に勝てたのはシユンだけであった。

そして全ての受験生の試験が終了して、第一、第二、第三次試験と全ての試験が終了してシユンを含む受験生達はセンターの教官に案内されて最初に試験参加の受付をした広場に集まり合格者の発表がされるのを待っていた。受験生のみんなはそれぞれの思いを抱きながら発表を待っていた。

ポケモンリーグ検定センターには毎回百名を越える試験の参加希望者が受験をしに来るが超難問の試験内容のため数多い受験生の中でも合格者は数名、酷い時は合格者0という時もあるのである。

そして合格者の発表を待つ受験生達の前に教官がやって来る。

「それでは今から当センター試験の合格者を発表したいと思います」

今から合格者の発表が開始される。

「今回の試験参加者506名のうち、合格者は10名になります」

ガヤガヤガヤ：：センターの教官から告げられた事実を受験生達は驚愕を露にしていた：：506名の大勢の受験生からたった10名しか合格者がいないと言われたからである。

この検定センターの合格者のあまり出ない狭き門であることは聞いていたがそれでも驚きを隠せずにいた。

「：：たった10名しか合格出来なかったんだ：：やっぱり評判通り難しいんだな：：」

検定センターの厳しい査定に噂通り難問なんだなとシユンは思い、自分では学科も実技も良く出来たと思った方がが：：これでは自分は合格は無理だろうなと思ってしまう。だけど元々自分の今の実力を知りたくて参加した試験なので別に良いかなと思ってしまう。もう自分がいた。

「それでは合格者の発表をします。前のモニターをご覧ください」

そして合格者の発表がされて前のモニターに試験合格者の受験番号が掲載される。

「えっ?」

前のモニターに映し出された合格者のの番号を見てシユンは呆然としてしまう：：な

ぜなら：。

ポケモンリーグ検定センター試験 合格者発表

|     |       |     |       |       |       |       |       |   |
|-----|-------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|---|
| 5   | 2 4   | 5 1 | 1 2 3 | 1 3 4 | 2 1 1 | 2 4 5 | 3 9 8 | 4 |
| 2 8 | 5 0 1 |     |       |       |       |       |       |   |

合格者発表のモニターに自分の番号51が載っていたからである。

「今モニターに出た受験番号の者達が今回の試験の合格者となります。おめでとございます」

ワアア〜!!!

今モニターに出ている番号の合格者の受験生達は大喜びで騒ぎそれ以外の不合格の受験生達は残念がったり落ち込んだり、また頑張ろうと気合いを入れ直したりしてる者も居た。しかしその中でもリーグ参加のために今回の試験に賭けていた参加者達は悔しさで溢れて涙を流しているものまでいた。

リーグ開催前の最後の試験に落ちてしまったため今年のポケモンリーグに開催するにはジムバッジを集めるより他なく、リーグ開催が迫っているためそれも厳しい、元々ジムバッジを集めきれずにこの試験を受けに来たのであり試験に落ちてしまった以上もう諦める他になかった。足りないバッジが1つや2つならまだ希望があったかもし

れないが今試験に参加しているトレーナー達はジムバッジが3つ以上も足りないのに対しジムリーダーも強敵で只でさえバッジを獲得するのさえ困難であるため試験に落ちてしまった以上どうしようもなく悔し涙を流すしかないのである。

「試験に合格した者達はポケモンリーグ挑戦資格バッジの授与と手続きがありますのでしばらくお待ち下さい。今回残念ながら不合格になってしまった方々はこれにめげずにまた当センターの試験を受けて今度こそ合格出来るよう頑張ってください。それでは今回の試験を終了致します」

そして教官から合格者のポケモンリーグ挑戦資格バッジ者の授与と簡単な手続きの説明と今回の不合格になってしまった受験生達を軽くフォローして合格者であるシユン達を連れていく。不合格になってしまった者達は残念がりながらも帰っていった。悔し涙を流していた者達も手で涙を拭いてまた頑張ろうと立ち直り帰っていった。

「それでは合格者の君達にはこのポケモンリーグ挑戦資格バッジを進呈します」

そして教官から合格者であるシユン達にセンター合格の証のバッジが授与されて渡されていく。そしてシユンもバッジを受け取る。

「おめでとうー!」

「ありがとうございます!」

シユンは教官からポケモンリーグ挑戦資格バッジを受け取る。

「まさか：ぼくが合格出来るなんて思わなかったな：」

「いやいや：君のポケモンに関する知識の深さやポケモンバトルの実力、充分合格に値する物だったよ」

「いや、そんな！」

まさか自分が合格出来るとは思わなかったシユンに先生は謙遜する事はないと：シユンのポケモンの知識の深さとポケモンバトルの実力の高さを誉めて充分合格に値すると言ってくれた。

「これで君はもうすぐ開催される今年のポケモンリーグセキエイ大会に参加する事が出来るよ」

「あつ！そうでしたね：」

「セキエイリーグの会場の受付にこのバッジと先程君から預かったポケモン図鑑にこのセンターで合格してバッジを進呈した証明書のデータを入力しておいたからね。これを見せれば君も何事も問題なく参加登録が出来るよ」

「分かりました：」

「うむ！君のポケモンリーグでの活躍に期待しているよ。何しろ君は私が担当した受験生だからね。応援してるよ」

「はい！ありがとうございます。それじゃあ失礼します」



教官からポケモンリーグに参加出来ると言われたシユンは改めて自分がこれでポケモンリーグに参加出来る事を自覚し呆然としており、そして教官からセキエイリーグ会場での参加登録の方法を説明されて先程バッジ授与の前に預けたポケモン図鑑にこのセンター合格してバッジを授与したという証明書のデータを図鑑に入力した事を伝える(以前、偽物のバッジを使って不正にリーグに参加しようとした者がいたための対策であり図鑑に入力される証明書のデータは特殊な者であり決してコピー出来ない者となっており、図鑑の無いものは特殊な写真つきのカードを渡されて番号もその合格者の物であるため例え盗んでもリーグには参加出来ないのである)。

そしてシユンは教官の人にお礼を言つてポケモンリーグ検定センターの会場から出る。

どうしようかと迷いながら……。

「はあ……どうしようかな?」

シユンは取り合えずセンターの片隅にあるベンチに座りどうしようかと迷っていた。

元々は自分の今のポケモンの知識力とバトルの実力というトレーナーとしての実力の程を確かめたいと思ひ参加しただけでまさか合格するとは思わなかったのである。

シユンがそうして悩んでいると……。

「どうしましたかマスター?」

「いかがしましたかマスター？」

するとシユンの悩んでいる様子をボールの中から見ていたメロエツタとディアンシーがボールの中から出て来て、シユンを心配そうにどうかしたのかと訪ねる。

「メロエツタ、ディアンシー！」

「なにか悩んでいる様子に見えますけど：あつそう言えば試験はどうでしたかマスター！」

「そうでしたわ！マスター、検定試験の結果はどうでしたか」

「実は合格しちゃったんだ：：」

「えっ!!」

「凄いですわ!!流石はマスターですわ!!」

シユンは出て来たメロエツタとディアンシーを見つめ、メロエツタはシユンが何か悩んでいるような様子に気になっているとシユンが試験を受けてるのを思い出し、どうでしたかと訪ねてディアンシーも試験の結果を訪ねるとシユンは合格したことを伝えメロエツタは驚き、ディアンシーは流石はマスターですわ！と大喜びではしゃぐ。

「それではマスターが悩んでいる理由は：」

「うん：セキエイリーグに出場しようかどうか悩んでるんだ：」

「えっ？どうしてですかマスター：マスターの夢のためにもリーグの出場は必要な事の

「は、はずですわ!!」

「うん・・・そうなんだけど・・・だけどぼくはまだ自分のポケモンを充分に育てたと言えないしこんなぼくが出てても大丈夫かなって不安になっちゃうんだ。何しろリーグにはジムリーダーからバッジを8つ集めた手強いトレーナーばかりが集まる大会・ぼくがその人達に太刀打ち出来るのか少し不安になっちゃって・・・」

メロエツタはシユンの悩んでいると理由に気づき、シユンはセキエイリーグに出場しようか悩んでいる事を伝えると・・・ディアンシーはどうしてだと不思議そうな表情になる・シユンの夢のためにはリーグの出場は必要な事はと・・・言っていると、シユンはその通りだと同意しつつも・シユンは自分の不安をメロエツタとディアンシーに打ち明ける・・・それで出場を迷ってしまっているのだと。

「確かにマスターが不安になる気持ちも分かります。本来ならもう少しシロガネ山でポケモンを育ててからジョウトリーグに挑戦する予定でしたしね。ですがマスターは難題と呼ばれる試験に合格出来たのです。充分自信を持って大丈夫ですわ! マスターならみんなと一緒にリーグでも戦えます!」

「そうですわ!! マスターとみんななら優勝も夢ではありませんわ!!」

「・・・メロエツタ・ディアンシー・ありがとう・」

「あつ／／／! マスター／／／」

「恥ずかしいですわ／＼／＼」

自分に自信を与えようと勇気づけてくれたメロエツタとディアンシーを抱き寄せるシユン：シユンに抱き締められたメロエツタとディアンシーは心地よさそうに感じた後に頬を赤くして恥ずかしくなり身をよじらせる。

「ありがとうメロエツタ、ディアンシー：まだはつきりとは決められないけどみんなとも相談して考えて見ることにするよ」

「はい！それが良いですね。ガイドブックによるとセキエイリーグ開催までまだ2週間ありますのでみんなと相談したり最終調整に特訓したりする時間はまだたっぷりありますわ」

「はい♪マスターが思うようにして下さい。わたくし達はマスターの結論に従いますわ！」

「うん！ありがとうメロエツタ、ディアンシー。それじゃ取り合えずシロガネ山の拠点に帰ろっか！」

「はい！（ですわ）」

シユンはまだはつきりと決める事は出来ないからみんなと相談して考えて見ようとして決めて、メロエツタもガイドブックによればセキエイリーグ開催までまだ2週間もあるのでみんなと相談したり最終調整の特訓をしたりする時間は充分あると言ってディア

ンシーもシユンが出した結論に従うと笑顔で言い、シユンはメロエツタとディアンシーにお礼を言った後に取り合えずシロガネ山の拠点に帰る事にしてメロエツタの”テレポート”で帰って行くのだった。

こうしてメロエツタの突如の一言から始まったポケモンリーグ検定センターの検定試験にシユンはまさかの合格を果たしてしまい、セキエイリーグへの参加する条件を満たしてしまった。

当初は自分の今の実力を確かめるためだけに試験を受けに来たシユンはまさかの合格に、シロガネ山でポケモン達と特訓をしてからジョウトリーグに挑戦しようとした計画に迷いを生んでしまう物であった。どうしようかと悩むシユン：まだセキエイリーグ開催まで2週間あるので取り合えずシロガネ山の拠点に戻りみんなと相談して考える事にするのだった

始めてのポケモンリーグ！セキエイ大会編！

ポケモンリーグ開会式！サトシとの再開とR団パニック

！

自分の実力や知識を試すためにポケモン検定試験に参加したシユンは：難関と言われた試験に見事、合格をした日から2週間――。

一度 シロガネ山に戻ったシユンはメロエツタやディアンシー、そしてリザードン達にも相談してセキエイリーグに出場するかどうか考えていた。

リザードン達はシユンの夢を聞いていてシユンと一緒に頂点に立ちたいと思い、やる気満々でシユンに出場したいと強く真剣な眼差しでシユンを見つめる。

メロエツタとディアンシーも賛成しておりシユンも不安な気持ちを打ち消してセキエイリーグに出場する事を決めた。

出場を決めてからシユンはリーグ開催の前日までシロガネ山でポケモン達の最終調整を行いリザードン達はさらにパワーアップして、全ての準備を済ませるとメロエツタのレポートでセキエイスタジアムの近くの茂みの影に来ていた。

「ここがセキエイスタジアム……ポケモンリーグの会場か。」

「すごいな……。ここでジムリーダーからバッジを8つ集めた実力者のトレーナー達が集まるんだ。ぼく達がどこまで通用するか分からないけど……ぼくは仲間を信じて戦うよ」

「その息ですわマスター」

「応援していただけますわ!」

シユンは目の前に立つ巨大な建物——。セキエイスタジアムに圧倒されここで繰り広げられる激しい実力者同士のバトルを想像して武者震いをした後に自分達がどこまで通用するか少し不安になりながらもそれでもポケモン達を信じて戦う事を決意すると横にいるメロエツタとディアンシーもシユンにエールを送る。

今更だが基本の公式のポケモンバトルにメロエツタやディアンシーは出さない事を決めていて二人もそれは納得している、ディアンシーはともかく……メロエツタは強すぎるために普通のポケモンでは太刀打ち出来ず簡単に勝ててしまう。それではシユンとポケモン達で本当の勝利とは言えず、あくまでシユン達の特訓に協力するだけであり、今回もシユン達とリザードン達だけでポケモンリーグに挑むのである。

今までの努力の成果を信じて自分達の全ての力を最大限に発揮して挑むのである。

「それじゃ明日の開会式に備えて休みましょう。近くに大会参加者やリーグを見に来た





クを見ながらポケモンリーグの開会式に伴い使用する聖火を届けるリレーだと説明する。

そしてその聖火の炎が何と伝説のポケモンのファイヤーの炎であると教えるとシユンはあまり驚いた感じに見えない様子でそれは凄いと言う。

ディアンシーはシユンのあまり驚かない様子を見てその理由が分かっているのか可笑しくて微笑みを浮かべて言うとしユンもこれでも驚いているつもりだがやはり驚いているように見えない。それもそのはず――。

「それはそうでしょう…。何と言ってもマスターは本物のファイヤーをゲットしているのですから…。今更炎くらいで驚きはしないでしよう」

「ハハハ…。まあそうだよね…」

メロエツタがその理由を言つてシユンは苦笑いを浮かべて同意する。

そう…シユンはシロガネ山で特訓をしていた時に偶然シロガネ山に舞い降りた伝説のポケモンのファイヤーとバトルして激闘の末にファイヤーをゲットする事が出来たのである。

今更炎くらいでは驚かないのも当然である。

何しろシユンはゲットした翌日にファイヤーと心を通い合わせるために一緒に特訓して、その美しく気高い姿と輝く炎の旋律を目の当たりにしているので、他の人には伝

説のポケモンのファイヤーの凄さとその美しく燃える炎に見とれていても…シユンは本物のファイヤーの美しく燃えるその姿を目にしているため少しの種火程度では驚かないのである。

「因みに…現在ポケモンリーグで使われているファイヤーの炎は、遙か昔にポケモンリーグの起源とされるポケモンと人間の絆の強さを競い会う戦いの場で…偶然その場を飛んでいたファイヤーがその人間とポケモン達に敬意を評して当事使われていた松明に炎を点火させて飛び立ったという事です。

それから現在のポケモンリーグまでファイヤーの炎は大切に保存されてきたというわけです」

「なるほど…それにしてもメロエツタ…。良くそんな事を知ってたね？」

「昔に…マスターやディアンシーに出会う前にファイヤーと出会って聞いたのです。

因みにマスターのゲットしたファイヤーではなく、それよりもだいたい年上のファイヤーですよ？」

「そうだったんだんだ…。そう言えば数は少ないけど他にもファイヤーがいるって言うってたね？」

「はい。因みにマスターのゲットしたファイヤーはファイヤーの中では若い方ですよ」

メロエツタからポケモンリーグについての紀元とファイヤーの炎について聞いた

シユンは驚きながらメロエツタの知識の深さに感心していると、以前シユンとディアンシーに出会う前にその聖火の炎を与えたファイヤーと出会いその事を聞いたのだと言う。

因みにシユンのゲットしたファイヤーよりもだいぶ年上のファイヤーで有ることを教えられるとシユンはさらに驚いて、以前メロエツタから聞いたファイヤー等の準伝説のポケモンは数こそ少ないが他にもいることを教えられた事を思いだし、さらにメロエツタからシユンのゲットしたファイヤーはその中でも若い方だと教えてくれた。

「マスター、メロエツタ。お話しもよろしいですが、そろそろ選手村という場所に向かいましょう。マスターも明日に備えてゆつくり休んだ方がよろしいですわ」

「そうだね。そろそろ行くっか2人とも」

「はいー!」

「はいですわー!」

そうしてシユンとメロエツタ、ディアンシーは聖火リレーの見学も程々に選手村へと向かい歩き出した。

「ただシユンは気づいていなかった……その聖火を運んでいる中に自分のよく知る幼馴染みがいたことを――。」

「ここが選手村か……人がいっぱい賑やかなところだなあ……」

空が夕焼け色に染まる頃に選手達が無料で利用出来る飲食店や宿泊施設のある選手村に到着する。

森の中にあり湖が夕日に照らされて美しく輝いている。

この選手村にはリーグ参加者だけではなく、リーグを見に来た観客達も来ており、リーグの開会式の後には色んなお土産屋が開かれたりしてさらに賑わうのである。

「ここに実力者のトレーナー達が集まって来てる。ぼくも頑張らないと……」

シユンはここに実力者のトレーナー達が集まって来てる事を改めて実感して気合を入れ直す。因みにメロエツタとディアンシーは人の多さと賑やかさにうんざりしてボールの中へと戻ってしまった。メロエツタとディアンシーは基本シユン以外の人間には馴れていないためあまり人の多いところではこうしてボールの中に入ってしまふのである。

こうして選手村の中を歩いていると――。

「ん？あれは……」

道にいる一人の帽子を被った少年と髪を逆立てた少しキザった少年が言い争いをしている姿が目に入る。

最も帽子の被った少年が一方的に興奮しているだけで髪を逆立てた少年がは冷静に

受け流しているが……、その少年の後ろには彼を慕うガールフレンド達が少年を応援している。

その見覚えのある二人の姿にシユンは相変わらずの様子に笑みを浮かべてそこに向かい、その二人に声をかける。

「ハハハ……。相変わらずだね2人とも」

シユンがそう声をかけるとそこにいたみんなはシユンの方に顔を向けると……声をかけて来たシユンの姿に気づいて二人の少年は目を丸くして驚く。

「久しぶりだね。サトシ、シゲル!」

「シユン!!」

そこにはマサラタウンを旅立って以来、久しぶりの再会となる幼馴染みのシユンがいて、シユンも久しぶりに会う仲良しの幼馴染みであるサトシとシゲルの相変わらずの様子に笑みを浮かべていたのだった。

「さあ、選手村に着いたぞ!」

「ここに凄腕のポケモントレーナー達が勢揃いしてるってわけかあ〜」  
シユンが選手村に着いたのと同時刻――。

少年と青年と少女の3人組が到着していた。

ポケモンリーグ公認の帽子を被りピカチュウを連れた少年とトゲピーを連れた少女、一番年上のしつかりとしてそうな青年である。

この少年はマサラタウンのサトシ。シユンの幼馴染みで昔から仲の良く遊んでいた。

マサラタウンから最初のポケモンを貰い旅立つ日に遅刻してしまいオーキド博士から初心者用のポケモンを貰い損ねたが、何とか余っていたポケモン“ピカチュウ”を貰いマサラタウンを旅立った。最初ピカチュウはサトシに全くなつかずに仲が悪かったが、共にピンチを切り抜け絆を結び綺麗な朝日を見つめていた時に虹色に輝く謎のポケモンを目にするのだった。

その後はポケモンをゲットして新たな仲間を増やしながらポケモンマスターを目指し旅をしている。その途中で2人の旅の仲間を増やして各地のジムに挑戦していき、リーグの参加に必要なバッジを8つ集めてポケモンリーグに参加するためにセキエイ高原へとやって来た。

その途中で聖火リレーのランナーを目撃して自分もやりたいと思い頼みに行くが当然止められるが、そこにいた聖火を管理するリーグ実行委員会の会長タマランゼに許可を貰い聖火を会場まで運ぶ途中にR団に聖火を奪われるアクシデントがあったが、予備の種火を会長が持っていたため引き続き聖火のバトンを繋いでいき無事にゴールの会

場に辿り着いた。

その後には選手村へとやって来たのである。

そんなサトシと一緒に旅をしているトゲピーを連れた少女の名はカスミ。

カントーのジムの一つであるハナダシティにあるハナダジムのジムリーダーの美人三姉妹と出がらし(ゴスツ!!)……美人四姉妹の末っ子でみずタイプのポケモンをこよなく愛する世界一のみずポケモンマスターを目指す自称『おてんば人魚』の少女である。サトシに壊された自転車を弁償してもらうためにサトシに着いて来ているが、旅をしているうちにその事を忘れて純粋にサトシ達との旅を楽しんでいる。

今回、サトシがポケモンリーグに挑戦するのを応援しつつトレーナーとしてまだまだ未熟なサトシのサポートもしようと思っている。

サトシと旅をする青年の名はタケシ。

元ニビシティのニビジムのジムリーダーでいわタイプを得意としており、ニビジムに挑戦してきたサトシと出会う。最初はサトシのポケモンの知識の無さに呆れていたが、ポケモンとの絆の強さとポケモンを思う優しさに負けを認めてグレーバッジをサトシに渡し、世界一のポケモンブリーダーを目指している事をサトシに話し、十人もの兄妹の面倒を見ており旅に出れずにいてサトシに夢を託そうとしていた。その時に究極のポケモントレーナーを目指して旅立ったが芽が出なかったダメ親父のムノーが現れて、

兄妹達の事は自分に任せてタケシに自分の分まで夢を叶えてほしいとタケシに気にせず旅に出ると言った。

タケシに言っておく事があると云われて、ムノーは家族をほって何年も家を出ていた酷い父親の自分が何を言われても仕方ないと覚悟を決めていたが渡されたのは糸と針だった。

そしてタケシはいつも兄妹達に出している献立の説明と家事の説明をしていき、ムノーは慌ててメモをするのだった。

その後タケシはサトシと共に旅をする事にしてその家庭的な料理の腕とブリーダーとしての腕とポケモンの知識でサトシ達をサポートしている。しかし、綺麗なお姉さんに弱いのが玉に瑕……。旅で色々な事を経験しブリーダーとしてのスキルを磨いている。

そしてサトシ達が選手村の中を歩いていると――。

「遅いなあ〜サ〜トシくん!」

「その声は!」

テーブルのところを通り掛かった時に声を掛けられその聞き覚えのある声に振り向くとそこには――。

「シゲル!」



「「「良いぞ!良いぞ!シゲル!頑張れ!頑張れ!シゲル!」」」」

そこにはテーブルで優雅にコーヒーを飲んでる少年……サトシの幼馴染みであり、ライバルであるシゲルがいた。その後ろではシゲルのガールフレンドである六人の美女達が手に持つボンボンを振ってシゲルにエールを送っている。

この少年はシゲル。サトシと同じでマサラタウン出身のトレーナーでサトシと同じ日にオーキド博士から初心者用のポケモンを貰い旅立った。

あのポケモン研究で有名なオーキド博士の孫であり、ルックスも良くてシゲルを慕うガールフレンドが六人もいる。

トキワジムのジムリーダーの謎のポケモンに敗北したその後も…順調に旅を進めてポケモンをゲットし、強く育ててバッジをゲットしてポケモンリーグに挑戦しようとセキエイ高原にサトシよりも早く来たのである。

「やあ!ぼくはとつくにライバル達の情報を集めたぜ!」

「情報なんて欲しくないね!出たとこ勝負!それがおれの戦い方さ!」

「ふん!それで勝てるのかな。4番目のサトシくん?」

「なに!」

その余裕そうに構えるシゲルにサトシは熱くなり身を乗り出して、出たとこ勝負が自分の戦い方だと意気込み、そのせいで肩に乗っていたピカチュウが地面に落ちてしま

う。

熱くなるサトシにシゲルは冷静に受け止めてサトシを挑発しサトシも熱くなりやすい性格だからか簡単に乗っってしまう。

そうしてサトシとシゲルが話しているところに――。

「ははは…相変わらずだね2人とも」

「ん？」

「えっ？」

突然 声を掛けられてサトシとシゲルの二人とそこにいる全員が視線を向けると声を掛けてきた人物の姿が視線に入りサトシとシゲルは目を丸くして驚く。

「久しぶりだね。サトシ、シゲル」

「シユン!!」

そこにいたのはサトシとシゲルのもう一人の幼馴染みであるシユンであった。

「シユン久しぶりだな!シゲルからオーキド博士にポケモンを貰ってすぐに旅立ったって聞いたから、あれからどうしてるかと思ってたんだ。オーキド博士から聞いて元気なのは知ってたけど!」

「久しぶりだね。サトシこそ旅立つ大切な日に遅刻したってオーキド博士から聞いたけどちゃんとポケモンは貰えたの?」

「あつ…ああ…寝坊しちゃったけどちゃんとポケモンは貰えたぜ。なっピカチュウー!」  
「ピカ!!」

久しぶりに会う幼馴染みのシユンにサトシは嬉しそうに近づいて、ポケモンを貰いマサラタウンを旅立った日から会っておらず、どうしてるのかと思っていた。

オーキド博士への近況の報告の時にシユンの様子を少し聞いており元気なのは聞いていた。シユンもオーキド博士から聞いた話でサトシがポケモンを貰う最初の旅立ちの日に遅刻したと聞いており、ちゃんと初めてのポケモンは貰えたのかと尋ねるとサトシは寝坊したけどちゃんとポケモンは貰えた足下にいるピカチュウを呼びピカチュウも答える。

「俺がオーキド博士からこのピカチュウを貰って旅立ったんだ。今では俺の一番の相棒なんだぜ!」

「そうなんだ!良かったねサトシ」

「ああ!」

「ピッカ!」

シユンとサトシがそうして久しぶりの再会に喜び話していると――。

「そろそろ良いかい?ぼくにも久しぶりに会う幼馴染みと話しをさせてくれよ」

そこにシユンのもう一人の幼馴染みのシゲルが自分もシユンと話しをさせてくれよ

と言う。

「シゲル！」

「そうだね。シゲルも久しぶり！オーキド博士の研究所以来だね」

「そうだな。シユンとはあの時以来会ってなかったな。久しぶりに会えて嬉しいよ」

「うん、ぼくもだよ。シゲルもサトシも相変わらずみたいで何よりだよ」

シユンとシゲルも久しぶりの再会を喜びあい楽しく話していると――。

「ちよつと！三人で楽しそうに話してないでわたし達にも紹介してよ！」

すると自分達をほつといて……楽しそうに話しているサトシにカスミが自分達にも紹介するように言う。

「ああ、紹介するよ。こいつはシユン。シゲルと同じ幼馴染みでマサラタウンで小さい頃に良く一緒に遊んでたんだ」

「シユンです。よろしく」

「よろしくね。わたしはカスミ！」

「おれはタケシだ。よろしくな」

サトシがシユンの事をカスミとタケシに紹介するとシユンも二人に挨拶し、二人もシユンに自己紹介する。

シゲルもガールフレンド達にシユンが自分の幼馴染みである事を教えている。

そして数分の間シユンは久しぶりに会った幼馴染みのサトシとシゲルと旅の間の事に着いて話していると――。

「そう言えばシユン…。お祖父様から聞いた話だと、きみは幾つかのジムを回った後にしばらくポケモンを育てる事に集中したいからリーグには出ないって聞いてたけど…どうしてここに?」

シゲルが祖父のオーキド博士から聞いた話してシユンは幾つかのジムを回った後にしばらくはポケモンを強く育てる事に集中したいからカントーのリーグには出ないと聞いていたためどうしてリーグの開催地であるセキエイ高原に居るのかと尋ねる。

「もしかしておれが優勝するところを見に来てくれたのか!」

「君が優勝?そんな事万に一つもあり得ないね!」

「なにいく!!」

するとサトシが浮かれた様子で自分がポケモンリーグで優勝するところを見に来てくれたのかと笑顔で言い、それを聞いたシゲルは馬鹿にした感じでそんな事は万に一つもあり得ないねと心底馬鹿にした様子で吹きそれを聞いたサトシはまたも怒りシゲルを睨む。

「あはは……本当に変わってないね二人とも。残念だけど違うよ。ぼくもセキエイ大会に出場するために来たのさ!」

「えっ! シュンもセキエイ大会に出るのか。でもリーグ出場にはジムリーダーに勝った証のジムバッジが8つ必要だぞ!」

「お祖父様から聞いた話しじや君はバッジを集めきれなかったって聞いたけどこの短い間にバッジを8つ集めたのかい?」

シュンもセキエイ大会に出場する事を教えられるとサトシは驚いた後にリーグに出場するには各地のジムリーダーに勝利した証のジムバッジを8つ必要だと言い、シゲルも祖父のオーキド博士から聞いた話してバッジを集めきれずにいることを聞いたけどこの短い間にバッジを集めたのかと尋ねる。

「違うよ。ぼくはこのポケモンリーグ挑戦資格バッジで出場するんだ」

シュンはリュックのチャック付きポケットからポケモンリーグ挑戦資格バッジを取り出して二人に見せてこれで出場するのだと教える。

「ポケモンリーグ挑戦資格バッジ!」

「てことは……シュンはポケモンリーグ検定試験に合格したの!」

「あの超難関の試験に合格するなんて……サトシの幼馴染みのシュンは相当ポケモンの知識やバトルの実力があるということだな」

サトシはシユンがポケモンリーグ挑戦資格バッジを見て驚き、カスミはシユンがポケモンリーグ検定試験に合格した事に驚き、タケシも超難関のポケモンリーグ検定試験に合格したシユンは相当のポケモンの知識やポケモンバトルの実力があるという事だと驚いている。

「なるほど……それじゃシユンもぼくと優勝を争うライバルという事だな。シユン、リーグで当たる事があれば正々堂々と戦おう」

「うん!ぼくもシゲルと戦う時は正々堂々と自分達の持てる全てを出して戦うよ」

「ああ、ぼくも全力でライバルの君と戦うよ」

シゲルとシユンはマサラタウン出身で幼馴染みであり同じ日に旅立ったライバル同士である二人。もしリーグで当たる事があればお互いに全力でバトルする事を誓いお互いの健闘を称えて握手する。

「ちよつと待てよ二人とも!おまえらのライバルはここにもいるぜ!」

すると健闘を称えあっているシユンとシゲルにサトシが二人に近づいて自分も2人のライバルで有ることをアピールする。

「フン……。きみなんかぼくのライバルだとは思っていないさ。出たところ勝負で情報の大切さを軽んじるキミなんかわね。本当の戦いは敵を知るところから始まるんだぜ!」

「くっ!!」

「最も……きみなんかどんなに敵の情報があっても勝てはしないだろうけどね。シユン、会場でまた会おう……ふっははは！」

「……」「良いぞ！良いぞ！シゲル!!」「……」

シゲルは出たとこ勝負のサトシを……敵の情報を軽んじるサトシなんかは自分のライバルだとは思っていないと厳しい言葉を放ち、本当の戦いは敵を知るところから始まるのだと言うとサトシは怒りの表情でシゲルを睨む。

そして最後に一言そう言うと言いつて高笑いしながらガールフレンド達と一緒に去っていった。

「……」

サトシはそんなシゲルをじっと見つめる。

「サトシ……シゲルはああ言ってたけど、ぼくはキミとバトル出来るのも楽しみにしてるよ。その時は全力でバトルしよう」

「ああ！おれも全力でバトルするぜ。そしてシユンに勝つ！」

「ハハハ……。ぼくもこの日のためにポケモン達を鍛えて来たんだ。簡単には勝てないよ」

「望むところだぜ！」

「ピツカ！」



シユンはサトシともバトル出来るのを楽しみにしていると行って、全力でバトルしようと言うとサトシも全力でバトルしてシユンに勝つと言う。

それを聞いたシユンもこの日のためにポケモン達を鍛えて来たから簡単には勝てないよと告げて、それを聞いたサトシも望むところだぜ!!と言ってシユンと握手しトレーナーの気合いを感じてピカチュウも意気込む。

「それじゃサトシ! ぼくもそろそろ行くよ。カスミさん、タケシさん、サトシの事よろしくお願いします」

「カスミで良いわよ。任せて!」

「おれもタケシで良いぞ。サトシの事は任せて貰って大丈夫」

「分かったよカスミ、タケシ。それじゃぼくはこれで! サトシ: 明日、会場で会おう」

シユンはサトシにそろそろ行くと伝えてカスミとタケシの2人にサトシの事をお願いすると、カスミとタケシは呼び捨てで良いと言ってサトシの事を任せて貰って大丈夫だと言う。

それを聞いたシユンは安心してサトシに明日会場で会おうと約束しその場から立ち去った。

「…まさかシユンまでリーグに出場するなんて…」

サトシはシユンが去った方を見つめながらシゲルだけでなくもう1人の幼馴染みの

シユンもリーグに出場する事を予想しておらず驚いていた。

「それにしてもサトシにあんな幼馴染みがいたなんて驚いたわ」

「ああ…幼馴染みはシゲルだけじゃなかったんだな」

「ああ…。俺達3人で小さい頃からよく遊んでたんだ。シゲルとはよく競い合ってたけど、喧嘩になりそうな時はシユンがよく止めてくれたっけ？」

カスミはシユンの端正な顔立ちと和やかで落ち着いた雰囲気からサトシや、シゲルともタイプの違う幼馴染みがいた事に驚き、タケシが幼馴染みはシゲルだけじゃなかったんだなと聞くとサトシは三人で小さい頃からよく遊んでいてシゲルとは何かに掛けてはよく競い合ってた喧嘩になりそうになった事も合ったがその度にシユンが冷静に優しく止めてくれた事を話す。

「なるほど…サトシとシゲルに取ってシユンは喧嘩を仲裁してくれたり、困った時に頼りになる存在だったんだな」

サトシの話からタケシは…サトシやシゲルに取ってシユンは喧嘩を仲裁してくれたりして2人の仲を取り持ち、困った時に頼りになる幼馴染み何だと思う。

そして話してもそこにサトシ達は明日のポケモンリーグ開会式に備えて休息を取るためにポケモンリーグの間に宿泊する施設へと向かうのだった。

「それにしてもまさかサトシとシゲルに会うなんて思わなかったな……。まあ二人ともポケモンリーグに出場するんだしているのは当たり前だけど……。それにしても……。フフ♪サトシもシゲルも全然変わってなかったな」

一方……。サトシとシゲルと再会したシユンは明日の開会式に備えてリーグ開催の間泊まる宿泊施設の部屋で、明日の開会式に備えて休息を取りながらポケモン達のコンデイションをチェックしていた。

部屋で過ごししながら先程の事を思い出す。まさかマサラタウンで仲良しだった幼馴染みのサトシとシゲルに会えるとは思わなかった。だけど、よく考えたら二人はポケモンリーグに出場するんだからいるのは当たり前だと気づき、逆にリーグに出ないと聞いていたはずの自分がいたことで2人が驚いていたかも知れない。

しかし何、よりも小さい頃から仲良しの2人が旅に出る前と全然変わらさずいつものサトシとシゲルだったのが何よりも嬉しかった。

「あの2人がマスターの幼馴染みですか? マスターとは全然性格が違うみたいですね……」

「そうですね。帽子を被ったサトシと言う方は直ぐに熱くなって直球勝負と言う言葉が似合う方でしたし、シゲルという方はクールで自信家な面のある方でしたわ」

シユンの右隣にいたメロエツタは先程ボールの中から見ていた……。シユンの二人の

幼馴染みがシユンとは全然性格が違うと思ひ、左隣のデイアンシーもシユンの幼馴染み二人を見て感じた：簡単な性格を。パツと思ひ当てる。

「うん：二人ともマサラタウンで小さい頃からよく遊んでたんだ。メロエツタとデイアンシーに会う前は毎日と言つていいほど良く遊んでたかな？」

シユンはマサラタウンで小さい頃から2人と良く遊んでたいた事をメロエツタとデイアンシーに話し、二人に出会う前は毎日と言つて良いほど良く遊んでいた事を話す。

「サトシとシゲルは何かとぶつかつて競い合つたりしてたね…。まあ大体シゲルは冷静に受け止めてサトシは直ぐに熱くなつちやつて負ける事が多かつたけどね。仲を取り持つのも大変だつたよ」

「なるほど……。あの二人は幼馴染みでありライバルなのですね」

「ですけどマスターに取つてもあの二人はライバルですわ♪」

シユンから更に詳しいサトシとシゲルとの事を聞いたメロエツタはサトシとシゲルは幼馴染みでありライバルなのだと思ひ、付け足すようにデイアンシーがシユンに取つても二人は幼馴染みであると同時にライバルだと指摘する。

「そうだね。リーグに出る以上は二人はライバルだ。もし試合で当たる時は全力でバトルして勝つよ」

「その意気ですマスター」

「応援していただきますわマスター♪」

「うん!ありがとう。メロエツタ、ディアンシー!!」

そしてシユン達は話しもそこそこに明日の開会式に備えて就寝するのだった。

その夜――始めてのポケモンリーグ出場でプレッシャーを感じてしまうサトシは中々眠る事が出来ずにいた。

みんなの言葉が頭を過る……そしてサトシは着替えて気分転換にと着替えて部屋から出ていった。そのサトシの様子を眠っているふりをしていたカスミが「らしくないな」と思いながらも見送った。

サトシは真夜中のスタジアムの観客席に来ていた。そこで自分が戦う事にプレッシャーを感じながらも自分は自分の戦い方で戦う事を強く決心するのだった。

そのサトシの様子をスタジアムのチェックをしていたタマランゼ会長の目に入り「たまらんなあ」といつもの口癖を言いながら笑顔を浮かべるのであった。

そして夜が明けて太陽が上る――。大きくす玉が割られて中から大量のポップと紙吹雪が出てくる。そして数発の小さな花火が上げられる。

『さあ、いよいよポケモンリーグの開会式が始まります。優秀なポケモントレーナー達とそのポケモンが技と力を競い合うポケモンリーグ!この大会で優勝する事はポケモ

ントレーナーとしての名誉を得るだけでなく、ポケモンマスターになるために通過して行かなければならない試練なのです！」

そしていよいよポケモンリーグの開会式が始まる――。観客席は超満員でみんな試合を見に來たり参加者の応援に來たりしていた。

観客のボルテージは最高潮であり実況放送も声高く響き選手達が入場してくるのを今か今かと待ち受けていた。

客席の中にはサトシを応援するタケシとカスミ、その間に座るタマランゼ会長もいた。

『「さあ選手達が続々と入場してきます。全員8つ以上のバッジをゲットしてきた…あるいはあの超難関なポケモン検定試験に合格し、リーグ挑戦資格バッジをゲットしてきた強者揃いです！」』

選手を引き連れるトーチを持った大会スタッフの女性の後ろにリーグ参加の選手達が続いて入場してくる。その何れの参加者達はリーグ参加資格である8つ以上のバッジをゲットしてきた…あるいは超難関の検定試験を合格して挑戦資格バッジをゲットした強者揃いのトレーナーである。

「ああ〜！ いたいたサトシ」

「えっ！ どこどこだあ〜」

「あそこあそこ!」

「あつ!!本当だ」

「あくあ…緊張しちゃって…」

「おっ!シゲルとシユンもいるぞ!」

「さすがね。あの二人はサトシと違って堂々としてるわ」

入場してくる選手達の中にいるサトシを見つけたカスミ。タケシがどこだと聞くとカスミはサトシのいる場所を指差しタケシも気づく。

カスミは客席からでも分かる程にサトシが緊張している事に気づいてタメ息をつく……そのサトシの少し後ろにシゲル、その少し右横にシユンを見つける。カスミはサトシと違い二人が堂々としている事に流石と感心する。

「(マスター……堂々と入場している姿…ステキですわ／／／♪)」

「(ええ…流石はわたし達のマスターです!)」

シユンが堂々と入場しているのをボールの中から見ていたディアンシーはシユンを見つめてうつとりしており、メロエツタも流石は自分達のマスターだと尊敬の眼差しを向ける。

「(う〜ん…。やっぱり少し緊張するな。いよいよポケモンリーグが始まるんだ!ぼくがどこまでいけるか分からないけど…出場するからには勝ち上がって見せる)」

シユンは入場しながらも内心では少し緊張しており、いよいよポケモンリーグが始まる。

自分がどこまでいけるかは分からないが参加するからには勝ち上がる事を強く決意する。

そして選手全員、今大会参加者256名が出揃い聖火台に続く階段前へと整列する。

『さあ！聖火ランナーがやって参りました。ここまで何百人者人の手から手へと繋いで来た聖火が今聖火台へと向かいます』

そして選手達の間を走り聖火ランナーの女性が聖火台に灯すための聖火を手に持ち走って来る。ここまで何百人という人の手で繋がれて来た聖火……。様々な人の思いをその火に灯しいよいよ聖火台へと運ばれて行く。

「タマランゼさん。種火は？」

「聖火台じゃー！」

「えっ？」

タマランゼに聖火の種火はどこにあるのか尋ねるカスミにタマランゼは聖火台だと答えると、カスミとタケシは聖火台に視線を向けると聖火台に小さく種火の炎が燃えていた。

そして聖火ランナーが階段を上り聖火台に近づいていく……。その前に古代ギリシャ



のような服装で三日月の先のトーチと花のリングを持った女性達が出てくる。

『おっと?!これは驚きの演出です。最後に点灯する女性がいるようですよ!』

実況は知らなかったのか驚いた様子で実況し 聖火ランナーの女性もそんなことは聞いておらず不思議に思いながらもその女性に聖火のトーチを渡そうと手を伸ばす……すると――。

「(苦)苦勞さんでした……」

紫の長髪の女性の口元が怪しく微笑む。

「待てえ〜!聖火を渡しちや駄目だあ〜!」

「えっ?きやつ!」

聖火台にいるのが誰か気づいたサトシは急いで階段を駆け上がり聖火を渡しちや駄目だと叫ぶが時すでに遅し、女性がえっ?と思っている間に聖火トーチを紫の長髪の女性がひったくるように奪い取る。

「遅いんだよ!!ジャ〜ン!!」

そう言つて二人は変装を解いて元の服装に戻る…その服装は全体的に白く胸に大きなRの文字が刻まれていた。

「R団!」

「本当にしつこい奴らだなあ!」

「ピカピカ!!」

カスミはその2人の正体……R団の登場に気づき、サトシとピカチュウはそのしつこさに怒りの眼差しで睨み付ける。

「悪の道は努力の道ニヤア!!」

そこにいつもサトシはのピカチュウを狙うR団の最後の1人？喋るニヤースが出てきてそう言う。

「このファイヤーの炎はR団が頂くわ!」

「そうはさせるか!」

紫の長髪の女性ムサシがそう言うのと、サトシはそうはさせないと怒りの感情をむき出して聖火を取り替えそうとピカチュウと一緒にR団へと向かっていく。

「やれ!!マタドガス!」

「マアタドガス!!ドガス!!」

すると隣の青紫の短髪の男性コジロウがボールからマタドガスを出す。

出て来たマタドガスは口から「スモッグ」を出して周りの目を曇らせる。

サトシ達はたまらず目を閉じて口元を押さえてしまう。

「ホッホホホ!ファイヤーの炎はもう私達の物よ!」

そう言うってムサシは聖火台にトーチの炎を灯し、炎が聖火台に引き寄せられるように

中心に吸い込まれて炎が大きくなる。

煙が消える頃にはR団達は消えておりそこには大きく燃える聖火台だけが残っていた。しかし、聖火台の後ろから緑色の足と緑色に赤色の目をした何かが出てくる。

「今週のけっこうやる気のイケてるメカ!!燃えるんだあ!!」

「あ〜ん!いい感じ!」

「にやんだか今週は違うにや!」

「聖火をゲットするため燃えて見ました!」

それは巨大なバツタ型のメカでその中でR団3人が操縦席に座っていた。そしてコジロウは目に炎を灯して燃え上がっていた。

「はあ〜いゲット!!」

『「とんでもない事になってしまいました!聖火台が奪われてしまいました!」』

「ああ…ワシが守ってきた聖火が…:聖火が…」

バツタメカは聖火台を背負い、実況は現在の状況を緊迫した様子で伝えて、タマランゼ会長は長年自分が守ってきた聖火が奪われてしまった事に言葉をなくしてしまう。

「ついでにここに集まったポケモンも手当たり次第捕まえていくニヤア!!」

「言われなくても今やるところなの!!燃えるんだあ!!レディ、ゴー!」

ニヤースがリーグの参加者達のポケモンを捕まえると指示するとコジロウは今やる

ところだと怒り、レバーを引くと聖火台からスタジアムへと飛び降りて来る。参加者達は慌ててその場から逃げる。

「俺は燃えるんだあ！」

コジロウはそう言つて叫び、みんなは慌てて一目散に逃げていく。

「ピカチュウ!! “10まんボルト”だ！」

「ピイカ、チュウ〜!!」

サトシは聖火台から階段で降りてくるとピカチュウに “10まんボルト” を指示し、ピカチュウは頬を帯電させて強力な電撃 “10まんボルト” を放ち、電撃がバツタメカに直撃する。

しかし、全く聞いた様子もなく進路を替えてサトシ達の方に向かってくる。

「駄目だ!効かない!」

「ピカチュウ……ピカ!」

迫り来るバツタメカから逃げるサトシとピカチュウ!!

「「ダア（ワア）（ニヤ）〜ハツハハ!!」」

「予算奮発して電気に強いボディにしてみました」

R 団の3人は電撃が効かない事に狼狽えているサトシ達を見て高笑いしている……  
予算を奮発して電気に強い装甲になっているのである。

「フシギダネ!!キミに決めた!」

「ダネエ!!」

電気が効かないならとサトシはボールからフシギダネを出す。

「フシギダネ! “はっぱカッター”だ!」

「ダネフツシ!!」

フシギダネは “はっぱカッター” を放つがバツタメカは背負っている聖火台を向けて “はっぱカッター” を防ぐ。 “はっぱカッター” は聖火の炎に瞬時に燃やされてしまう。

「ああ…」

「ピツカ!」

「ダネエ…」

サトシ達は “はっぱカッター” が燃やされてしまった事に驚く。

「そんなもの!この炎の敵じゃないわ!」

ムサシは愉快そうに笑いながらサトシ達を嘲笑う……そして。

「ウエへへへ!!!」

コジロウは聖火台を向けて怪しく笑いながらサトシへと迫って来る。

壁際まで追い込まれてしまったサトシ……逃げ場が無くなってしまう。

「ウエエエ〜イ!!!」

そしてゴジロウはサトシを脅すように聖火台を向けて炎を突きつける。

「サトシ!」

「逃げろサトシ!」

「逃げるもんか!!この場所は……ここは……おれ達ポケモントレーナーが夢にまで見たポケモンリーグの会場だ。おれ達はポケモントレーナーとしての誇りを懸けて戦う場所なんだ!!絶対に逃げたりなんかするもんか!!」

サトシの危機にカスミは叫び、タケシは逃げるように言うがサトシは逃げるもんかと手を広げて心からの想いを叫ぶ。

この場所は自分達ポケモントレーナーが夢にまで見たポケモンリーグの会場……ここで自分達はトレーナーとしての信念、誇り、ポケモンとの絆を……これまで経験し努力した全てを懸けて戦う場所だと……だから絶対に逃げたりしないとこの場所を守るように手を広げて立ち自分達ポケモントレーナーの神聖なポケモンリーグの開会式を汚すR団を睨み付ける。

そんなサトシに無慈悲にも聖火の炎が放たれる。

「サトシ!!!」

サトシに迫る炎にカスミは悲鳴を上げてサトシの名を叫ぶ……サトシ達に炎が迫る

うとしたその時――。

「フリーデイン!」

サトシ達の前にあるポケモンが現れてサトシ達を抱えてその場から消える。

「ダア〜ハツハハハ!!これで生意気なジャリボーイもおしまいだ!!」

「散々、ニャー達の邪魔をした報いニャアス!」

「良い気味ね!」

炎に包まれたサトシを見てR団は愉快そうに高らかに笑う。今まで自分達の邪魔をした憎きサトシ事…ジャリボーイを倒すことが出来たと喜びを露にしている。

「そんな…サトシ…」

炎に包まれたサトシ達を見てカスミは茫然としてしまう。

「いや…待て!少し様子が可笑しいぞ!」

「えっ?」

「おお!!」

タケシは炎に包まれたサトシ達の状況が少し可笑しい事に気づいてカスミとタマランゼ会長も視線を向ける…するとR団達も様子が可笑しい事に気づく。

「さて…ジャリボーイ達もやつつめたしここに集まった奴らのポケモン達を奪うわよ」

「まとめてボスに献上するニャース!!」

「おお!!ん? いや…ちよつと待て!!少し変だぞ!」

「ん(ニャ)?」

サトシ達をやつつけたと思ったムサシはリーグの参加者達のポケモンを奪うわよとテンション全開で叫び、ニャースも捕まえたポケモン達を纏めてR団のボスに献上すると笑い、2人に言われてゴジロウがやる気全開で行うとしたその時…傾けていた聖火台が上げると少し様子が可笑しい事に気づく…なぜなら――。

「なっ!!ジャリボーイ達がいらないぞ!」

「そんなばかニャ!!生きてたとしても大火傷で動けないはずニャース!」

「きつと綺麗さっぱり燃え尽きちゃったのよ!!」

聖火台を上げて炎が止むと炎に包まれたはずのサトシ達がいらない事にゴジロウが気づき、あの炎に包まれて例え生きてたとしても大火傷で動けないはずだとニャースも驚くがムサシは驚きつつもきつと綺麗さっぱり燃え尽きたのだと言う。

「見て!!あそこ!」

カスミがバツタ型のメカの後方のスタジアムの入場ゲートの近くに何かを見つけて指を差し、みんながそこに視線を向けるとそこには――。

「ツツ…おれ…どうなったんだ?」



「ピカピ?」

「ダネダネ?」

「ピカチュウ、フシギダネ…おれ達炎に包まれたはずじゃ…ここは…」

迫り来る炎に恐怖して目を閉じて迫る炎に身構えていたサトシが恐る恐る目を開けると、そこは自分がいたスタジアムの壁側ではなくスタジアムの入口近くにいる事に気づき、炎に包まれたはずの自分達が何故ここにいるのかと疑問に思っていると――。

「フリーデイン!」

「えっ?フリーデイン!おまえが助けてくれたのか?」

「デイン!!」

「ピカピカ!」

「ダネダ!」

「デイン!」

サトシは自分の後ろにフリーデインがいることに気づいてフリーデインに助けてくれたのかと聞くとフリーデインが頷く。すると自分達を助けてくれたフリーデインにピカチュウとフシギダネがお礼を言いフリーデインも頷く。

「よくやったねフリーデイン…」

「デイン!」

「えっ？ シュン！ そうか… フーデインはシュンのポケモンか」

「うん。 サトシが危ないと思ってフーデインにテレポートで助けてもらったんだ」

「そうだったのか… ありがたいがどうシュン、 フーデイン」

「どういたしまして」

「サトシ… 無事で良かった…」

「ああ… シュンが助けてくれたんだな」

フーデインの後ろからシュンが来てフーデインを誉める。 それを見たサトシがフーデインはシュンのポケモンであることに気づき、 シュンはサトシの危機を見てフーデインに助けるように指示しフーデインはテレポートでサトシ達の近くに移動して炎が迫る寸前のところで間一髪レポートでサトシ達を助ける事が出来たのである。

自分達を助けてくれたのがシュン達だと分かるとサトシはシュンとフーデインに礼を言う。

その様子を客席から見たカスミはサトシが無事だった事に安心し、 タケシはシュンがフーデインの側で話すのを見てシュンが助けてくれたのだと気づく。

シュンとサトシがそうやって話していると――。

「ちよつとちよつと！ あんた!! 何わたし達の邪魔をしてんのよ!」

「そうだそうだ!! ようやく散々俺達の邪魔をした憎きジャリボーイを倒したと思って喜んでたのに!!」

「関係ない奴がニャー達の邪魔をするんじゃないニャー!!」

サトシが自分達の攻撃から助かっている事に気づいたR団の3人がシユンに文句を言っただけで自分達の邪魔をするんじゃないと怒りの声で叫ぶ。

「サトシはぼくの幼馴染みなんだ…。そのサトシが危ないのに黙って見てるわけない。突然の事態で状況が飲み込めなくて助けに行くのが遅れちゃったけど…。ぼくも一緒に戦うよサトシ。R団から聖火を取り返して ぼく達でポケモンリーグを守ろう!」

「シユン…。ああ!一緒に戦おう。俺達でR団から聖火を取り返してポケモンリーグを守るんだ!」

「ピカア!!」

「ダネエ!!」

「デイン!!」

R団の怒りの声にシユンは一切怯む事なく…。幼馴染みであるサトシが危ないのに黙って見てるわけないと反論し、突然のR団の襲撃に…。状況を理解するのが遅れて助けに行くのが遅れたが自分も一緒に戦うと…。R団から聖火を取り返して自分達でポケモンリーグを守ろうと強い眼差しでサトシを見ながら言う。

サトシもその強い決意の籠った目に頷いて一緒に戦うことを決めて、R団から聖火を取り返して自分達がポケモンと共に今までの経験や努力の成果を発揮して自分達の誇りをぶつけ合う憧れのポケモンリーグを守る事を誓い、目の前のR団を怒りの眼差しで睨み付ける。

トレーナー達の想いに触発されてピカチュウ達も前方のR団達を睨み付ける。

「ジャリボーイと同じで生意気なジャリボーイその2ね。あたし達に歯向かうとどうなるか分かってないみたいね…。コジロウ！やっておしまい!!」

「ラジャー!! 2人まとめてボコボコに叩きのめしてR団の恐ろしさを味会わせてやるぜ！」

「覚悟するニャー!!」

シユンの自分達に歯向かう態度に怒ったR団達はサトシ同様シユンも叩きのめしてR団の恐ろしさを味会わせてやろうとバツタ型のメカを操作してシユン達に襲いかかる。

「来るよサトシ！」

「ああ！」

サトシとシユンが迫り来るR団のメカに身構えて反撃しようとしたその時――。

「ニドキング!! 〴〵つのでつく〴〵だ！」

「ニドオ〜!」

「「へっ? ウワアア (イヤアア) (ニヤアア) !!!」」

突如、そんな声が聞こえたかと思うと…バツタ型のメカの横にニドキングが攻撃してその威力にバツタ型のメカは吹っ飛び、中にいたR団達は悲鳴を上げる。

「今の声は…」

「もしかして…」

サトシとシユンは聞き覚えのある声と…サトシはこのニドキングに見覚えがある一人の姿が頭に浮かぶ…するとサトシとシユンの後ろから――。

「まったく…。4番目のサトシくんの癖に随分と勇ましい事を言うじゃないか?」

「シゲル!!」

そこにいたのはサトシとシユンの幼馴染みであるシゲルだった。R団を攻撃したニドキングがシゲルの近くに戻って来る。

「シゲル…おまえどうして…」

「どうして? キミやシユン、幼馴染みの2人が奴らからポケモンリーグを守ろうとしているのにぼくだけ逃げるわけないだろう。ぼく達の神聖なリーグを汚す奴らをぼくも許せないと思っただけさ」

不思議そうに尋ねるサトシにシゲルは幼馴染みの二人がR団からポケモンリーグを

守ろうとしてるのに同じ幼馴染みである自分だけ逃げるわけないだろうと当然だと言うように眩き、自分達が戦う神聖なポケモンリーグを汚すR団を許せないと思っただけだと告げる。

実を言うとシゲルもR団が聖火を奪い…巨大なバッタ型のメカで現れてスタジアムに下りたった時には他の参加者と一緒に逃げていたが……。サトシが必死にR団と戦っている光景とサトシの…追い詰められているのにも関わらずR団に堂々と勇ましく強い想いの籠った言葉を聞いたシゲルは……自分がピリや4番目と馬鹿にしていたサトシが勇ましくR団に立ち向かっているのに自分だけ逃げている事を恥じてサトシを助けに行こうと決意する。

すると間に合わずにサトシが炎に包まれたのを見て動揺するが、シユンが助けたのを見て幼馴染みだけあって考える事は同じかと嬉しくなり、ニドキングをボールから出して攻撃するように指示を出して現在に至る。

「シゲル！うん、そうだよね！」

「ああ。一緒に戦おう！俺達3人でR団から聖火を取り返して俺達が戦うポケモンリーグを守ろうぜ！」

「ふん……。キミに言われるまでもないね。奴らはぼくが倒して見せる」

シユンとサトシは幼馴染みのシゲルも一緒に戦ってくれる事に笑顔で喜び、一緒に戦

おうと自分達でR団から聖火を取り返して自分達が戦うポケモンリーグを守ろうと言う。シゲルはサトシに言われるまでもないと言って自分がR団を倒して見せるとR団を睨む。

「ピカア〜!!」

「ダネエ!!」

「デイン!!」

「ニドオ!!」

ポケモン達もトレーナーの強い感じ取り闘志全開でR団達を睨み付ける。

「テテテ(痛)：生意気言いやがって!!おまえら全員、この燃えるんだあ!でやつつけてやる!」

「そうよ!!やつちやいなさい」

「ニャー達の怖さを思い知らせてやるニャース!!」

「おお!!行けえ!!燃えるんだあ!!」

ニドキングに攻撃されて倒れていたR団のメカが起き上がるとR団は怒り心頭でシユン達を睨み付けてシユン達をやつつけようと可動レバーを引いて飛び上がりシユン達に襲いかかる。

「任せて!!フリーデイン：サイコキネシス!!」

「フリーデイン!!フリー!!」

シユンは襲いかかってくるR団のメカの動きを止めようとフリーデインに指示し、フリーデインは“サイコキネシス”でR団のメカの動きを止める。

「あれ?動かないぞ!!可笑しいな…?」

「何やつてるのよコジロウ!!しつかりしなさいよ!」

「そんな事言つたつて動かないんだからしょうがないだろう!!」

「まづいニヤース!!」

フリーデインの“サイコキネシス”が決まりR団のメカは空中で動けずについて、R団は焦ってしまふ。

「あんな巨大なメカの動きを空中で止めるなんて…なんて強力な“サイコキネシス”なの…!」

「ああ…流石だ。シユンのフリーデイン…よく育てられている——」

観客席でシユンとシゲルがサトシに力を貸して協力してR団に立ち向かう様子に喜んでいたカスミは、R団の巨大なメカの動きを空中で止めたフリーデインの“サイコキネシス”のパワーに驚き、タケシも流石だと…シユンのフリーデインはよく育てられていると感心している。

「今だニドキング!!もう一度、”つのでつく”だ!」



「ニドオ!!ニドオ!!」

「「うわあゝゝ!!!」」

空中で制止しているR団のメカにニドキングの「つのでつく」が再び決まり吹っ飛ぶと同時にフリーデインは「サイコキネシス」を止める。そしてR団は吹っ飛ぶ。

「今だ!!ピカチュウ、10まんボルト」!フシギダネは「ソーラービーム」!

「ピカチュウゝ!!」

「フツシゝダネエゝ!!」

ピカチュウは最大パワーで「10まんボルト」を放ち、フシギダネも「ソーラービーム」のエネルギをチャージして一気に解き放つ。

「フリーデイン!「サイコキネシス」で足を折るんだ」

「デイン!!」

「ニドキング!「つのでつく」で後ろ足を破壊しろ!」

「ニドオ!!」

ピカチュウとフシギダネの攻撃がR団のメカの右前足を破壊し、フリーデインの「サイコキネシス」が中心の左足を折り曲げて破壊、ニドキングの「つのでつく」が右後足を粉砕し破壊する。

「うわあゝ!!燃えるんだあの足があゝ!」

「このままじゃ不味いニヤース!!」

「こうなったらコジロウ!! あいつらに聖火の炎をお見舞いしてやんのよ!!」

「分かった!! これでもくらえええ!!」

追い詰められたR団はこうなったら最後の手段とシユン達に向かって聖火の炎を放つ。

「しまった!!」

「くっ!!」

「うわああ!!」

3人が気づいた時には遅く…シゲルはしまったと思い、シユンは苦虫を噛み潰した表情になりサトシは迫りくる炎に恐怖し悲鳴をあげる…そして3人とポケモン達はなすすべもなく炎に包まれる。

「サトシくっ!!?」

「シユン、シゲル!!」

カスミは先程と違い3人全員が炎に包まれたのを見て今度は助ける者が誰もおらずに本当に炎に包まれてしまった事にカスミは悲鳴を上げ、タケシもシユンとシゲルの名を呼ぶ。

シゲルのガールフレンド達もシゲルが炎に包まれたのを見て悲鳴をあげて何人かは

その場で気を失う。

「ぐっ!ぐうくく………熱くない?」

「えっ? 本当だ……」

「確かに熱くない……でも、なぜだ?……」

「ピカ?」

「ダネエ?」

「デイン?」

「ニド?」

炎に包まれたサトシ達は炎に包まれているのにまったく熱くない事に気づく。

ファイヤーの炎なら高温で有ることは間違いないのに火傷も負わずに全然熱くない事にシユンは不思議そうにしており、シゲルも確かにといいながらなぜだと考えている。

ポケモン達も不思議そうに自分の体と回りの炎を見つめている。

「ニヤンだ?」

「どうなってるの?」

「炎に包まれてるのに何であいつら平気そうにしてるんだ?」

R団はサトシ達が炎に包まれているのに全く平気な様子に驚き呆然としている。

するとシユン達の目の前で不思議な事が起こった……。シユン達に降り注いだ聖火の炎が集束してまるでファイヤーの如く火の鳥となり大きく翼を羽ばたかせている。

「ファイヤー!!」

「まさか!あの聖火は確かにファイヤーの炎だが……!」

「こんな事が起きるなんて……!」

サトシは聖火が火の鳥の如く舞う様子にファイヤーを連想し、シゲルはあの聖火を確かにファイヤーの炎なのは知っていたが……それでもあり得ない事に驚愕し、シユンもこんな事が起きるなんてと呆然と驚く。

『フオオオオ——!!!!』

そして聖火の炎はファイヤーの如くサトシ達の勇氣ある想いに応えるようにトレナー達の誇りをかけた神聖なポケモンリーグを汚す悪党達に向かっていく。

「ファイヤーじゃ!!あれがファイヤーの炎じゃ!!」

観客席にいたタマランゼ会長はその光景に驚きと共に興奮を露にしていた——。サトシ達の身を心配していたカスミとタケシもその不思議な光景を呆然と見つめている。

カスミの抱くトゲピーだけはその光景を見て笑顔ではしゃいでいる。

「いや!!なによぉ〜!!?」

「来ないでええええ!!」

「ニャ〜!?」

自分達に迫りくる怒りの炎にR団は怯えて来ないでえええ!!と叫ぶが……私利私欲のために聖火を盗もうとしてポケモンリーグ開会式を汚した悪党の願いを聞くはずもなく、ファイヤーの炎がどんと迫ってくる。

「はああああああ(ニャヤアアア)」

ヒュ〜〜ドガアアアアアアアアアア!!!

!!?!?!?!?!

R団は迫りくる怒りの炎に悲鳴を上げる……。そして怒りの炎がR団のメカを貫くように通りすぎた。するとR団のメカは光輝くと煙を上げて大きく爆発してバラバラになった。

「やなカンジイ〜〜!!」

R団の3人は体を黒こげにしながら空のかなたへと振つとんでいった。

ヒュ〜〜ドスン!!

するとメカの上に乗っていた聖火台が爆風によって上空に上がっていたのが元の聖火台の有った場所に落ちてくる。そしてファイヤーの如く火の鳥は聖火台に自ら戻り中に入ると元の炎に戻り大きく燃えている。

「聖火の炎がファイヤーになってR団を倒した…」

「まさかこんな不思議な事が起こるなんて…」

シユンとシゲルは先程起こった不思議な現象に呆然と聖火台を見つめている。

「きつと俺達のポケモンリーグを守りたいって想いにファイヤーが応えてくれたんだ！

ありがとうシユン、シゲル。一緒に戦ってくれて！」

「ふん…キミに礼を言われる筋合いはないね…。ぼくが戦うポケモンリーグを汚す奴らが許せなかっただけさ。戻れニドキング…」

サトシはきつとファイヤーが自分達の想いに答えてくれたのだと喜び一緒に戦ってくれたシユンとシゲルにお礼を言う。

するとシゲルはサトシに礼を言われる筋合いはないと言って自分が戦うリーグを汚すR団が許せなかっただけだと…ニドキングをボールに戻してその場から立ち去っていく。

「戻ってフリーデイン…。サトシ、あいつらを倒せたのはサトシが一生懸命に聖火とポケモンリーグを守ろうとしたからだよ」

「えっ！そうかな？そう言われると何だかテレちやうな！」

シユンにそう誉められてサトシは照れてしまい手で頭をかか

「ハハ。それじゃサトシ…。開会式が再開されるみたいだし戻ろう」

「ああ！」

シユンが向こうに目を向けるとポケモンリーグの職員達によって荒らされたスタジアムの整備がされており、少しして最低限開会式を始められる位に整備が終わったようで：職員に連れられて避難してきた参加者達が戻ってきて整理している。

シユンとサトシも戻りその中に並ぶと開会式が再開される。

『ただいまより：開会式を再開します。それでは：タマランゼ会長の開会宣言です！』

開会式が再開されてタマランゼ会長の開会宣言が始まる。

「ポケモンリーグは……ポケモンを真に愛する人達の戦いの場所です」

タマランゼ会長の開会宣言の出だしはポケモンリーグはポケモンを真に愛する人達の戦いの場所だと告げる。勿論トレーナー達はみんなポケモンを愛しているだろうがリーグに参加しているトレーナーはそれ以上にその気持ちと想いが強いという事である。

「聖火が：ファイヤーの炎が我々を見守ってくれています」

聖火台のファイヤーの炎がポケモンリーグの参加者達を見守っているように大きく燃え上がっている。

「ポケモントレーナーの諸君!! 正々堂々! 悔いのない戦いをして下さい」

『『『『ワアアアア〜!!!』』』』

タマランゼ会長の最後の宣言を皮切りに参加者達と観客達はテンション全開で大きく盛り上がりスタジアムに歓声がこだまする。

「おれ達を守ってくれてありがとうファイヤー」全力を尽くそうぜピカチュウ！」

「ピッカチュウ!!」

サトシは聖火台を見つめて自分達を守ってくれたお礼を言い、ピカチュウを見て全力を尽くす事を誓い共に聖火台を見つめる。

「いよいよ始まるんだ……ぼくの……いや……ぼく達の挑戦が！」

「(先程はどうなるかと思いましたが無事に始まりそうですわ!)」

「(ええ。もしもの時はいつでも飛び出せるようにしていましたが、ファイヤーの炎のおかげでその必要もなくマスターも無事でしたし、後はマスターを全力で応援するだけです)」

「(そうですわね。マスターをしつかり応援いたしましょう)」

シユンは聖火台を見つめて……いよいよ始まる自分の……自分達のポケモンリーグへの挑戦に期待で胸を膨らませており、ボールの中でディアンシーとメロエツタも先程のR団の襲撃にヒヤヒヤとしていたがシユンが無事に済んで安心し、後は全力で応援するだけだとシユンを応援する。

「(ははは！誰が相手だろうと優勝するのはこのぼくに決まっているさ！)」



そしてシゲルは自信満々に優勝するのは自分だと思っていた。

いよいよポケモンリーグが始まった――。

果たしてどんなバトルがサトシを――シユンを――シゲルを待っているのか――。

そして優勝するのは誰なのか――。

今、トレーナー達のこれまでの努力の成果と――ポケモンと共に歩んだこれまでの全  
てと――ポケモンとの絆――トレーナーとしての誇りをかけてぶつかり合う――。

こうして参加者256名によるポケモンリーグが始まるのであった。

そして開会式に出ている参加者達の一人。大きな青いマントを羽織り、顔を半分近く  
布で覆った怪しげな服装の男の口元が怪しく歪む。

その彼の腰元の1つのボール……そのボールには収まり切らないようにかすかな電  
撃が漏れ出ているのであった。

# 第一回戦 水のフィールド！スローニューフェイ！！

ポケモンリーグセキエイ大会に出場する事を決めたシユンはセキエイ高原のポケモンリーグ会場へと訪れる。

大会の参加者達が宿泊する選手村に訪れるとそこで幼馴染みのサトシとシゲルの二人と再会した。

そしてポケモンリーグ開会式に出ているシユンやサトシ達にポケモンリーグの聖火を狙って迫り来るR団。

だがシユン、サトシ、シゲルのマサラタウン出身の幼馴染み3人の活躍で無事、聖火は守られた。

シユンやサトシ、シゲルのポケモンリーグを守りたいと言う強い想いに応えた聖火がファイヤーとなりR団達を倒したのだった――。

そしていよいよ開催されるポケモンリーグセキエイ大会!!

手強いジムリーダー達からジムバッジを8個以上集め、あるいはポケモンリーグ検定試験の超難関な試験を突破した強者達の祭典が今、始まる。

ここはマサラタウンにある大きな建物はオーキド研究所。広大な庭と大きな風車の特徴のマサラタウンでも有名なポケモン研究家のオーキド博士が住んでいる。

そこでオーキド博士やマサラタウンに住む人達……そしてサトシの母親のハナコがポケモンリーグが行われている会場での中継をテレビで見ている。

『ポケモンリーグのセキエイ大会の開会式を無事終えたトレーナーの皆さんは第一回戦のバトルフィールドを決めるため、この抽選会場へ続々と集まっております』

ポケモンリーグの抽選会場が映しだされてそこに一回戦の抽選をしに来たサトシ達が横切る。

「おおー」

「サトシ…ママはここよお」

抽選会場の中継にサトシが映りオーキド博士とハナコがテンションを上げてテレビに映るサトシに手を振る。

そしてしばらく中継を見ていると……サトシ達を通った後に少ししてシユン達（透明になっているメロエツタ、ディアンシー）が通りかかる。

「んお? あれはシユンくんではないか?」

「まあ本当……シユンくんを見るのも久しぶりだわ」

「しかし彼はポケモンを育てるのに集中したいからジムバッジも集めずにいたはずな

んじやが…はて?…」

シユンが中継に映るとオーキド博士とハナコは驚き、シユンがポケモンリーグの会場にいたことに不思議そうにしている。そして場面はポケモンリーグの抽選会場へとうつる。

「ここが抽選会場か…」

ポケモンリーグが無事に開幕し、シユン達は予選一回戦の抽選をしに抽選会場へと訪れていた。その抽選会場は巨大なドーム型の建物であり、扉は無く中には幾つもの丸いテーブルに真ん中が空いており、そこに一本台の上に伸びるモニターと出場者に関する説明をしたりするリーグ係員の女性がいる。

シユンは右端のテーブルで自分の抽選を聞く…：順番を待ち、そしてシユンの番になる。

「お待たせしました。トレーナーの登録証を出して下さい」

「はい」

シユンはポケモン図鑑をリーグ係員の女性に渡すと、係員はポケモン図鑑のあるボタンを押してシユンのトレーナーとしての証明書であり登録証のページを出す。

「マサラタウンのシユンくんね。少々お待ち下さい」

すると係員の女性はポケモン図鑑のある機械にセットしてキーボードで入力してい

く。

「はい、登録完了です」

「ありがとうございます」

登録が完了すると係員の女性はポケモン図鑑をシユンに返し、シユンはお礼を言つて受け取る。

「それではバトルフィールドの抽選を行わせて頂きます。

ポケモンリーグセキエイ大会では——岩、水、草、氷の4つのバトルフィールドをレットによる抽選で選んで頂きます。そして4つのフィールドで行われる予選を勝ち抜けば5回戦からはメインスタジアムによる本選へと進めます」

「なるほど……」

シユンは係員の女性からポケモンリーグのバトルフィールドによる説明が行われており、シユンは一言も聞き漏らさないようにしっかりと聞き耳を立てて聞いている。

「後でもう一度確認したい時は……全参加トレーナーに配られたトレーナーハンドブックにも記入されていますのでご確認下さい」

「分かりました」

そして後でもう一度確認したい時はポケモンリーグセキエイ大会の参加者全員に配られるトレーナーのハンドブックに記入されていると教えられシユンも頷く。

「それではバトルフィールドの抽選を始めます。上のボードの光が回るから自分の好きなタイミングでボタンを押して下さい。止まった所が1回戦の会場です」

係員の女性が目の前のボタンを押すと4つのバトルフィールドの欄が光りルーレットが回り始める。シユンの好きなタイミングで止めていいのでシユンは別にどこでも大丈夫だが、一応良く見てそしてある程度たった時にボタンを押すとルーレットの光のスピードが落ちてきてそして止まる。

果たしてシユンの予選一回戦のバトルフィールドの会場は――。

「シユン選手の一回戦のバトルフィールドは水のフィールドです」

「水のフィールドか……」

ルーレットは水のフィールドの枠で止まり、シユンの1回戦のバトルフィールドは水のフィールドで決定する。

「それではトーナメントボードに入力します」

そして係員の女性はたった今、決まった結果をトーナメントボードに入力すると画面が変わりシユンと金髪に髪を逆立てた派手な服装の男性だった。

「あの人がぼくの対戦相手か」

「水のフィールド……第5試合です。試合開始は16時ですから遅れないようにして下さい」

「はい、分かりました」

シユンは試合の抽選結果を知ると今日の試合で使うポケモンを考えるためにポケモンセンターへと向かい、じっくり考える事にする。

ポケモンセンターに着いたシユンは目立たないように端のテーブルに座りメロエツタとディアンシーと一緒に相談する。

「1回戦は水のフィールドか…みずタイプは必ず入れないと」

「そうですね。それと相手が”みずタイプ”のポケモンを使う事も考えて”でんきタイプ”のポケモンも加えた方が良いでしょう」

「空を自由に飛べる”ひこうタイプ”のポケモンも加えた方が良いでしょう」

「そうだね…初めてのポケモンリーグの1回戦だし慎重に考えないと」

シユンは1回戦に使用するメンバーを慎重に考える。初めてのポケモンリーグ…そして第1回戦のためシユン慎重になっていた。メロエツタとディアンシーに相談のつてもらいながら考える。

「2体は決まったけど…後1体が決まらないしどうしようかな…」

今日の試合で使うポケモン3体のうち2体は決まったが残り1体が決まらずに悩むシユン。

「マスター取り合えず今、決めた2体を引き取りに行ったらどうですか?」

「そうですわ。マスターの住む町の方に連絡をいれるのも久しぶりでしようし……話してるうちに最後の1体も決まるかもしれないわ」

「うんそうだね。オーキド博士に連絡してみよう」

メロエツタとデイアンシーの提案通りにシユンは今日の試合で使うポケモンを送ってもらうためにポケモンセンターの電話コーナーに向かいダイヤルを回しオーキド博士に電話するとモニターにオーキド博士が映る。

「こんにちはオーキド博士」

「おお シユンくん！久しぶりじやのう。ポケモンリーグの中継を見ていた時に君の姿が映っておったから気になってこっちから連絡しようと思つとつたからちようど良かったわい。

シユンくん、確か君はしばらくポケモンをじっくり育てる事に集中したいからとジムバッジを集めずにカントーリーグの参加はしない事に決めたと云っておらんかったかな？」

「はい……最初はそのつもりだったんですけど……ポケモンリーグに参加出来るようになったのでせっかくだし、今の自分がどこまで出来るか試したいとセキエイ大会に出る事にしたんです」

「そうじゃったのか……しかしよくこの短期間でジムバッジを集めたのお……」



電話に出たオーキド博士に挨拶するシユン。オーキド博士は久しぶりに見るシユンの姿に喜び、ポケモンリーグの中継を見ていた時にシユンが映ったのを見て気になっていらしく連絡しようと思っていたからちようど良かったと言う。

そしてオーキド博士は前に一度シユンから連絡があった時に、しばらくポケモンを育てる事に集中したいからジムバッジを集めずにポケモンリーグの参加はしない事にしたと言っていたはずだと聞くと、シユンは最初はそのつもりだったが……ポケモンリーグに参加出来るようになったのでせつかくだから今の自分がどこまで出来るか試したいからとセキエイ大会に出る事を決めたと伝えると、オーキド博士は納得しつつこの短期間でジムバッジを集めた事に驚いている。

「実はポケモン検定試験に合格して参加資格バッジを貰えたんです」

「なんと!あの超難関な検定試験に合格したのか!驚いたのお。しかしシユンくんなら合格しても不思議じゃないかもしれんのお」

シユンから検定試験に合格した事を教えられたオーキド博士は驚きつつも……シユンなら合格しても不思議じゃないかもしれないと納得している。

「ところで先程シングルからポケモンの交換の連絡があったがシユンくんはどうするんじゃない」

「はい……ぼくもポケモンの交換をお願いしたくて連絡したんです。??と??……それから

……そうだ！ ??をお願いします」

「なんと!!前の2体はともかくあやつを使うのか。大事な一回戦じゃし大丈夫かの?」

「はい。オーキド博士に連絡した時に思い出して今回の試合で試してみたいと思っただけです。転送お願いします」

「うむ。シユンくんがそう決めたのなら良いじやろう。少し待つておれ:」

シユンがオーキド博士に事前に決めていた2体と今、オーキド博士に連絡して思っていたポケモンを送ってもらうように頼むと、オーキド博士は驚き大事な1回戦なのに大丈夫かと心配するが:シユンは大丈夫だと言つて今回の試合で試したいと言うシユンにオーキド博士はシユンがそう決めたのならと納得して今、シユンが言ったポケモンを転送するための準備をしに電話の前から離れる。すると――。

「はあいシユンくん♪お久しぶり!」

「ハナコさん!お久しぶりです」

オーキド博士が電話の前からどいた後にサトシのママ ハナコが電話に出て、シユンに笑顔で挨拶してシユンは驚きながらも挨拶を返す。

「久しぶりにシユンくんの元気な姿が見れて嬉しいわ。わたしや町のみんなも応援してるから頑張つてね!」

「ありがとうございます。頑張ります」

ハナコは久しぶりに元気なシユンの姿を見て嬉しうと言ひ、自分や町のみんなも応援しているから頑張つてねとエールを送り、電話のモニターを少しずらすとマサラタウンの町のみんながシユンやサトシ、シゲルのマサラタウン出身の3人を応援しているフアイトと書いた紙を持ちたり、旗を振つて応援したりしていたのを見てシユンはお礼を言つて頑張りますと答える。

そしてその後にはオーキド博士から3体のポケモンを転送してもらい手持ちのポケモンをその分送つた。

「頼んでいたポケモンが届きました。ありがとうございます。どうぞいます。オーキド博士」

「うむ!シユンくん!君の活躍、テレビで見ながら応援しとるぞ!!」

「頑張つてねシユンくん!」

そう言つて電話をきつたシユンは最終調整のために人目のつかない森の中へと向かつた。

その頃サトシは——お互いに気づかなかつたがシユンもサトシも抽選会場にいて抽選でサトシは水のフィールドで第3試合でありサトシはカスミとタケシのアドバイスを自分には自分のやり方があると一言いながら歩いていると……ガールフレンド達とティータイムを楽しむシゲルと会う。

そして相変わらずの様子でシゲルがサトシを挑発しシゲルは試合の時間だと言つて

去って行った。

その後サトシは自分に電話があるとアウンズを聞いて行くとオーキド博士から電話があり、ポケモンの交換は必要かと気づかって連絡してくれたのだ。

先程、シゲルとシユンも1回戦で使うポケモンを交換していったと教えてくれた。そしてその後サトシはクラブを送ってもらった。

そしてサトシは母 ハナコとも色々と話した後には頑張ると言って電話を切った。

その後 ポケモンセンターを出てクラブの入ったボールを嬉しそうにも見つめてみると、サトシの1回戦の対戦相手……。ジャグラーのコウムがいて挑発じみた挑戦を受けてサトシは闘志を燃え上がらせるのであった。

サトシは1体目はクラブに決めたが後の2体はどうするかとお昼を食べながら考えていた。

カスミのアドバイスをうるさがるサトシに、タケシが言う。

試合では3体のポケモンしか使えない……。どのポケモンを選ぶか……。今の時点で試合は始まっているのだとアドバイスをしてくれる。

2人から重要なアドバイスを受けて慎重に考えていると……。モニターに氷のフィールドで第1回戦を勝ち抜いたシゲルがインタビュウを受けていた。

シゲルが1回戦を勝ち抜いたのを見てサトシも負けていられないと闘志を募らせる。

一方こちらでもシユンが――。

「シゲルは1回戦勝ったんだ。よし!ぼくも頑張るぞ!」

「頑張つて下さいねマスター」

「応援していますわ」

オーキド博士から送られた3体のポケモンの調整を行っていて先程終えたシユンが歩いていると外部モニターにシゲルが1回戦を勝ち抜いた中継が映っており、幼馴染みのシゲルが勝ち上がって自分も勝とうと意気込む。メロエッタとデイアンシーも応援してくれる。

そして時間がたち水のフィールドでは白熱したバトルが次々に行われていた……。

水のフィールドの1回戦第2試合では……緑サイドのトレーナーのアズマオウの1体を残し、赤サイドのトレーナーはドククラゲ1体で健闘していたが虚しくアズマオウの”つのドリルが決まりドククラゲは戦闘不能となり緑サイドのトレーナーが1回戦を勝ち進んでいた。

――そして――。

『ゴルフバトル戦闘不能!!よってこの試合!!サトシ選手の勝ち!!』

『『『『ワアアアア~~~~!!』』』』』

『試合終了!!マサラタウンのサトシ選手の勝利です!!ポケモンを交換することなくキ

ングラー1体で第1回戦を突破しました!」

「やったあー!!1回戦ゲットだぜ!!」

「ピツピカチュウ!!」

「おれの華麗なテクニックが…負けるなんて……」

水のフィールド第3試合でサトシが勝利を決めて歓声が響き渡る――。

サトシとピカチュウは飛び上がって喜び、対戦相手のコウムは敗北からシヨックで動き項垂れていた。

そしてサトシは頑張ってくれたキングラーに抱きつく。「ありがとう」や「おまえのおかげだよ」と言うときングラーも嬉しそうに笑顔を浮かべていた。

マサラタウンのオーキド研究所ではオーキド博士やハナコに町のみんながサトシの勝利を祝福していた。その後サトシは中継しているカメラの前で手を振りとても喜んでいた。

サトシは1体目のクラブでコウムの1体目のポケモンのナツシーを倒すと勝利の勢いに乗るようにキングラーへと進化を果たし、そのまま破竹の勢いでコウムの2体目シードラ、そしてゴルバットを倒し1体だけでストレートの完全勝利を決めたのである。

「ハハハ…。サトシ、すごい喜んでるな。まあ一回戦をストレートで勝ったんだし、喜ぶのも無理ないかな?」

シユンはサトシのその物凄い喜びように苦笑いを浮かべて見つめていた。

「フフフ♪まるで幼い子供がはしゃいでいるようですわ」

ディアンシーはサトシの喜ぶ様子を見て、まるで幼い子供がはしゃいでいるように見えて可笑しいと微笑む。

「しかしピカチュウを連れたマスターの幼馴染みは…トレーナーとしての能力はだいぶ未熟ですね。マスターの幼馴染みですからあまり悪く言いたくないですが…：：：所要所での確かな指示を出していれば相手も大した事はなかったのもう少し楽に勝てたでしょう。

あのクラブ…：：：いえキングラーも大きさのわりにレベルは高い方でしたしね」

シユンは選手の待機する控え室のスペースでサトシのバトルを見ており、メロエツタはサトシのバトルの指示を見てサトシのトレーナーとしての能力はだいぶ未熟であると辛口な評価を出す。

メロエツタはシユンと出会う前にも旅をしており…：：：そこでポケモンを匠に操る凄腕のトレーナー達を目にしており、サトシの未熟さが引き立って見えたようである。

「厳しいねメロエツタ…。でもサトシとキングラー、すごい息がピッタリだったよ」

「ええ！まるで一心同体みたいでしたわ」

「そうですね…。トレーナーとしての能力はまだだいぶ未熟のようですが……トレーナーとして ポケモンとの絆は強いようですね」

シユンはメロエツタの厳しい評価に苦笑いを浮かべながらも…サトシとキングラーの息がピッタリだと思いディアンシーも頷く。

メロエツタもサトシのトレーナーとしての能力は未熟だと思いつつもサトシのトレーナーとして…ポケモンとの絆の強さは本物だと認めている。

そしてサトシの試合もそこに水のフィールドでの第4試合が始まる。

この試合が終われば次はいよいよシユンの試合である。

シユンはこの試合が終われば次はいよいよ自分の試合の番になり段々と緊張して心臓の鼓動が早くなっている。

「シユン！」

「サトシ！」

緑サイドの選手の待機スペースに選手の通路を通って先程試合を終わらせたサトシとコーチということで付いて来ていたカスミとタケシが待機スペースに来てシユンに声を掛ける。

メロエツタとディアンシーは透明になり姿を隠す。



「サトシ!1回戦の勝利おめでとう」

「ありがとうシユン!今の試合が終わったらシユンの試合だよな。頑張れよ!応援してるからな」

「ピツカ!!」

「うん!ありがとうサトシ、ピカチュウ。ぼくも頑張るよ」

シユンはサトシの2回戦進出を祝い、サトシはシユンにお礼を言つて次の試合に出るシユンを頑張れと応援しシユンもお礼を言つて自分も頑張ると応える。

「頑張つてねシユン!」

「応援してるからな!」

「うん!ありがとうカスミ、タケシ!」

「そう言つてサトシ達は緑サイドの選手待機スペースから観客席へと向かつて歩いて行つた。

「さて…サトシ達も応援してくれてるし、頑張らなくちゃ!」

「(マスター。わたし達はボールの中に入ってマスターを応援していますわ)」

「(マスターなら大丈夫だと思いますが頑張つて下さい)」

「うん、ありがとうメロエッタ、ディアンシー」

シユンはサトシも応援してくれてるし頑張らないと気合いをいれていると、メロ

エツタとディアンシーは第4試合の映るモニターを見て、もうすぐ終わりそうになっているのに気づき二人はシユンの集中力を乱さないようにボールの中へと入り応援していると言つて、シユンなら大丈夫だと思つて応援してボールの中へと入つた。

シユンはメロエツタとディアンシーに「ありがとう」とお礼を言つた後にモニターに目を向けると、第4試合は赤サイドのトレーナーのジユゴンのオーロラビームが緑サイドのトレーナーのピジョットに決まり戦闘不能になり第4試合は赤サイドのトレーナーの勝利となつた。そしていよいよシユンの出場する水のフィールドの第5試合が始まる。

『第4試合も終了し、いよいよ！水フィールドの第5試合が始まります！』

シユンは実況のアナウンスと共に緑サイドの選手入場ゲートから水のフィールドのスタジアムへと入る。スタジアムの大型モニターに赤サイドにユウラ選手、緑サイドにシユンが表示される。

『緑サイドのトレーナーは本日2人目のマサラタウンのトレーナーのシユン選手！』

シユン選手は今大会で少数であるあの超難関なポケモンリーグ検定試験に合格し参加資格を得た優秀なトレーナーです』

シユンは水のフィールドの緑サイドのトレーナーボックスに上がり、実況はそんな

シユンの簡単な紹介をし、それを聞いた観客は超難関なポケモン検定試験を突破した事に驚いていた。

『対する赤サイドはギターリストのユウラ選手!ユウラ選手はテンション全開のバトルでその筋のトレーナーに人気のトレーナーです』

続いて赤サイドのトレーナー、ユウラの紹介をする——。ユウラは金髪を逆立ててヘビメタ風のアッシュョンにギターを背負っており、テンションを上げるとギターを激しく鳴らす。その筋で……ギターや音楽をやるもの達の間では色々と人気のトレーナーである。

「俺の1回戦の相手はあんなガキか……楽勝だな(ニヤ)——」

シユンの対戦相手……ユウラは自分よりも年下の子供のシユンを見て馬鹿にするように笑みを浮かべて楽勝だなどと呟く。

そしてシユンのバトルが始まるのを……オーキド研究所でみんながシユンの試合が始まるのをテレビを見ながら刻一刻と待っていた。

『使用ポケモンは各々3体!水のフィールド第5試合開始!!』

そして第5試合が始まりカアソンと大きい音が鳴り響く。

「へっ!この勝負貰ったぜ!!いけっ バリヤード!!」

「バリバリ!」

「絶対に勝つ！頼むよヤドン！」

「ヤアドオ〜」

『「ユウラ選手はバリヤード！シユン選手はヤドンでの対戦です！」』

「フハハハ!!何を出すかと思ったら、まぬけポケモンのヤドンとはな！笑えるぜ！」

シユンの1体目のポケモンがまぬけポケモンと言われているヤドンなのを見た対戦相手のユウラは馬鹿にするように嘲笑う。

「あの超難関って言われているポケモン検定試験に合格したらしいが……そんなポケモンを使うようじゃ大した事はねえな！この勝負貰ったぜ！」

超難関と言われているポケモン検定試験に合格したと言うシユンを警戒していたが、まぬけポケモンのヤドンを使っているシユンを大した事はないと馬鹿にしてこの勝負は貰ったとほくそ笑む。

「…ヤドン……相手は きみを見た目の見解だけで侮ってる…。きみと一緒にバトルするのは初めてだけど きみの力をあいつに思い知らせてあげよう」

「ヤアドオ〜……」

シユンは自分の大切なポケモンのヤドンを侮り馬鹿にされた事に静かに怒りを募らせる。

自分を馬鹿にされるのはいい……ただ自分の大切なポケモンを馬鹿にするのは許さ

ないと怒り、ヤドンの力を思い知らせてやろうと言うとヤドンものんびりとした感じで頷く。

「(マスターやヤドンを馬鹿にするなんて絶対に許せませんわ!)」

「(落ち着きなさいディアンシー…それにしてもヤドンとは意外でしたね。マスターのお手並み拝見しよう)」

ボールの中で一部始終を見ていたディアンシーはシユンやヤドンを馬鹿にされた事に怒り、メロエツタはディアンシーを落ち着かせた後にシユンが初めてのポケモンリーグの試合の1体目に…これが初バトルとなるヤドンを出した事を意外に感じており、シユンのお手並みを拝見する事にする。

「いけっ!バリアード! サイコキネシス」だ!

「バリッ!!」

「ヤドン! 水に潜って交わすんだ!」

「ヤアドオッ」

バリアードは目を光らせ「サイコキネシス」でヤドンを捕らえようとするも…シユンの指示でヤドンはのっそりとした動きで水に潜り交わす。

「それで交わしたつもりか? バリアード、分かってるな! 逃がすんじゃないぞ!」

「バリバリ!!」

バリヤードはサ “イコキネシス” で水の中のヤドンを捕らえると水の中から持ち上げる。

「ヤド?」

「なっ! ヤドン!」

「そのまま乗り場に叩きつけろ!」

「バリ〜〜!!」

「ヤアドオ〜〜」

「ヤドン!」

『「おっと! バリヤードの “サイコキネシス” で捕らえられたヤドン…。そのままヤドンは乗り場へと叩きつけられるう〜!」』

“サイコキネシス” で捕らえたヤドンを水のフィールドに浮かぶ乗り場へと叩きつける。

そのまま連続で叩きつけられるヤドン——しかし——。

「ヤアドオ?…」

「よし! 良いよヤドン。よく耐えたね。 “かなしばり” だ!」

「ヤド…ヤアドオ〜」

「バリ!? バリ〜〜!」

「何やってるバリエード!!さっさとそんなもんふりほどけ!!」

「バリ〜?!」

『バリエード、必死に体に入力を入れて“かなしばり”を解こうとするが、“かなしばり”の力が強くふりほどく事が出来ない!ヤドン、チャンスだあ〜!』

“サイコキネシス”で叩きつけられること三度目、ヤドンは“サイコキネシス”を振りほどき立ち上がる。シユンはヤドンが耐えてくれた事を喜ぶ。

水のフィールドであった事も幸いした——。水のフィールドに陸地として浮かぶ乗り場だったため叩きつけられた時の衝撃もある程度緩和されてダメージも最小限に済んだのである。

トレーナーとしての能力の高い者ならある程度予想出来るが、ユウラ自体…あまりトレーナーとしての能力が高いとは言えなかった——。

ユウラはこれで充分シユンのヤドンを倒せると思つて得意気に笑みを浮かべていたが、シユンのヤドンは防御も高く大したダメージもなかったのである。

そしてシユンは“かなしばり”を指示し、ヤドンは目を光らせて“かなしばり”でバリエードを縛り“サイコキネシス”を封じる。

ユウラはバリエードにさっさとふりほどくように言うが、思つたより“かなしばり”の力が強くふりほどけない。

「ヤドン、〃みずでっぼう〃！」

「ヤドオ〜」

「バリ〜!!?」

「そして止めの〃ずつき〃！」

「ヤアドオ〜」

「バリ〜〜」

そして透かさず〃かなしばり〃から〃みずでっぼう〃に切り換えて、〃みずでっぼう〃がバリヤードに直撃し怯む…そこに止めの〃ずつき〃がバリヤードの頭へとクリーンヒットする。

「バリ〜〜……」

そしてバリヤードは目を回して倒れてしまい戦闘不能になる。

「ちっ!!」

『バリヤード…戦闘不能!』

審判が緑サイド側のシユンの方の旗を上げてバリヤードの戦闘不能を宣言する。

「やった!よく頑張ったねヤドン」

シユンは頑張ってくれたヤドンを笑顔で褒める。

「すっげえぜ!さっすがシユン」



「ああ…攻められても慌てずにポケモンに指示を出していた。一つ一つの指示が的確な物だった…やるなシユン…」

「まさか、あののほほんとした感じのヤドンで勝っちゃうなんて…」

観客席でシユンのバトルを見ていたサトシとタケシはシユンの冷静で的確なバトルへの指示に感心し、カスミはのんびりとしたヤドンで勝った事に驚いていた。

「(やりましたわ。見事な勝利ですわ)」

「(ええ。あのヤドンがここまで出来るとは思いませんでした)」

ボールの中で試合を見ていたデイアンシーとメロエツタも喜んでいた。

「ヤアドオ〜〜…」

「えっ…これって…」

バリヤードの上で勝利の余韻に浸るように鳴いていたヤドンの体が突如光り輝いてその姿を変えていく——そして光が止むとそこには——。

「ヤドオラァン〜〜」

勝利の勢いに乗るようにヤドンがヤドランへと進化した。

「なんだと!?!」

「ヤドンが進化した……」

『「ヤドンに勝利に勢いが着いたかヤドランに進化!!これは第3試合のサトシ選手のキ

ングラーのようにド派手な快進撃を見せてくれるのか!」

「ヤドラン——やどかりポケモン。ヤドンの進化系——。ヤドンがヤドランに進化する方法は2通りある——。1つは育ててレベルを上げる事で進化する通常進化——。もう1つはヤドンの尻尾にシエルダーが噛みつく事で進化する特殊進化が確認されている。」

通常進化はトレーナーが持つヤドンに多く、特殊進化は野生のヤドンに多い……感覚が鈍く動作ものろいがその分パワーは強力——」

「すごい!進化おめでとうヤドラン。新しい技も覚えてるし、このまま全力でいくよ!」  
「ヤドラン……」

ヤドンがヤドランに進化した事に驚くユウラとシユン——。

そして実況が先程のサトシの試合でクラブが勝利し、キングラーに進化した時と同じだと言って、その時のようにド派手な快進撃を見せてくれるのかと期待している。

シユンはポケモン図鑑でヤドランのデータを閲覧し、シユンはヤドンが進化した事を祝福しこのまま進化した勢いに乗って全力でいくと言うとヤドランはゆっくりとした動作で頷く。

『さあ!ユウラ選手の残りは2体……シユン選手のヤドランに対し、次は何を出してく

るのか……!』

そしてヤドロンが進化をしたことで一時止まっていた試合が動き出し、大型モニターに映る赤サイドのユウラの手持ちポケモンを表す3つのランプのうち1つが消えてユウラの残りのポケモンは2体であることを示している。

「はっ!!なめた事を言いやがって……。俺がさっきの試合の口先ヤローみたいに負けるわけねえだろう!次はこいつだ!いけっ、アズマオウ!」

「マオウ!!」

「2体目はアズマオウか……」

ユウラは実況の解説に苛立ち、先程の試合で口では達者な事を言っていたにも関わらず……サトシのポケモンを1体も倒せずに負けたコウムを馬鹿にして、ユウラは2体目のポケモンのアズマオウを出す。

「進化したからって鈍い事には変わらねえだろう!アズマオウ! “こうそくいどう”だ!」

「マオウ!!」

ユウラはヤドロンの特徴とも言える動作の鈍さの隙を着いて、アズマオウは “こうそくいどう” で素早さを上げてスピードで攻めて来る。

「ヤドロン!! “みずでっぼう”!」

「ヤアドオ！」

「マオウ!!マオウ！」

「くっ?!当たらない……」

「はっ!!そんなトロい攻撃が当たるかよ！」

シユンはヤドランに「みずでつぽう」を指示し、ヤドランは連続で「みずでつぽう」を放つも……「こうそくいどう」で素早さの上がったアズマオウには当たらない。

『「おおっと!」「こうそくいどう」でスピードの上がったアズマオウをヤドランは捕らえる事が出来ない!アズマオウはぐんぐんヤドランに急接近していくぞ!』

「いけっアズマオウ!!「つのドリル」だ!」

「マオウ〜!!」

そしてヤドランに急接近したアズマオウは角を突き出しドリルのように回転させる「つのドリル」をヤドランに放つ。

「ヤドラン!!」

「ヤドオ〜」

アズマオウの「つのドリル」がヤドランに襲いかかり、ヤドランのピンチにシユンは心配な声で叫ぶ。そしてヤドランにアズマオウの「つのドリル」が直撃しようとした

その時!!

「ヤアド!」

「マオ!」

「なんだと!」

「ヤドラン!」

『「なんと!ヤドランがアズマオウの“つのドリル”を片手で角を掴んで受け止めたあゝ。』

「すごいパワーだあ!!」

ヤドランが迫り来るアズマオウの“つのドリル”をヤドランが角を片手で掴んで受け止めていた。

「すごいよヤドラン。よしチャンスだ。ヤドラン、“メガトンパンチ”だ!」

「ヤアドオゝ!」

「マオゝゝ」

アズマオウの“つのドリル”を片手で掴んで受け止めたヤドランのすごいパワーに驚きと同時に喜び、今がチャンスと進化して新しく覚えた技を指示する。

ヤドランはアズマオウの角を左手で掴んだままもう片方の右手で拳を握りしめて物凄い力を込めた強烈な一撃“メガトンパンチ”を放ち、アズマオウを空高く吹っ飛ばす。

ザブーッン!!!!

“メガトンパンチ”で空高く吹っ飛ばされたアズマオウが水へと落ちて来て、その重さから大きい水しぶきを上げる。

『「凄い大技が決まったあ！動作の遅いヤドランをスピードで攻めようとしたユウラ選手。」

作戦は成功したがヤドランのパワーに攻撃を受け止められ、逆に強烈な一撃を喰らってしまったあ！アズマオウはまだ戦えるのかあ〜〜！』

実況による解説がされ：ユウラは自分が思い描いた結果ではなく逆にやられてしまった事に怒りで歯を食い縛っている。

そして水の中に落ちたアズマオウが浮かんで来る。

「マオ〜〜……」

『アズマオウ：戦闘不能！ヤドランの勝ち！』

アズマオウは強烈な“メガトンパンチ”を喰らって目を回して浮かんで来る。

そして審判によってアズマオウの戦闘不能が宣言され、大型モニターに映る赤サイドのユウラの手持ちの2つ目のランプが消える。

「やった！凄いよヤドラン：その調子で最後まで頑張ろう！」

「ヤドヤド（嬉）！」

「まあ!マスターったら…あんなに嬉しそうに喜んで、フフフ♪」

「まあ仕方ないでしょう。ヤドランに進化して連勝してるんですから試合の流れは完全にマスターの方に向いています)」

ヤドランに進化してパワーアップした力と覚えた技で連勝した事に嬉しくて喜び、ヤドランも嬉しそうに笑っている。

シユン達の様子をボールの中から見ていたディアンシーはシユンとヤドランの嬉しそうに喜ぶ姿に微笑み、メロエツタは試合の流れは完全にシユンに向いていると笑みを浮かべる。

ヤドランに進化して連勝した事と観客による大歓声がシユンが特訓で野生のポケモンとバトルしたり、トレーナーとのバトルの時よりも…精神を高揚させており、より冷静に判断してバトルが出来るようになっていた――。

ポケモンリーグという大舞台でのバトルがシユンの持つポケモントレーナーとしてのまだ内に眠る能力を引き出していた。

『「さあ、試合はいよいよ大詰めです……。ユウラ選手の手持ちポケモンは残り1体。もう後がありません――』

「クソ!!勝負はまだついてねえ!こいつでそのヤドランを倒してやるぜ!」

「……」

「出やがれ!!ペルシアン!!」

「ペルニャア!」

『ユウラ選手のエースはペルシアン…。その柔軟な体としなやかな筋肉で素早い動きの特徴のポケモン。動作の鈍いやドランにはまた厳しい相手です。』

これで勝負は分からなくなりました」

ユウラの最後のポケモンはペルシアン——。シユンの最後のバトルをオーキド研究所でオーキド博士やハナコ…そして町の人達が見ていた。

その中でもシユンやサトシ、シゲルと年の近い女の子や女の子の人達がシユンの試合を集中して見ていた。そしてシユンの姿が映るたびにウツトリとしており、シユンとポケモンが活躍しているところを大声で応援している…先程のシゲルの試合の時も今と同じように応援していた。

シユンとシゲルはマサラタウンにいた時から町に住む女の子や女の子の人達に人気でモテている。2人ともイケメンでルックスもよく…シゲルはクールで優秀な自信家、シユンはその中性じみた容姿と誰にでも優しい性格にメロメロであり、2人がポケモンリーグに出場すると知って一生懸命応援しているのである——そのついでにサトシの事も応援している。

そして試合が始まる——。



「ペルニヤア〜!!」

「ヤド…ラン…」

「速い!さっきのアズマオウ以上だ……」

ペルシアンはそのしなやかで素早い動きで水のフィールドに浮かぶ台を縦横無尽に動き回りヤドランを翻弄し、ヤドランはそのスピードに翻弄されている——シユンはペルシアンのその先程のアズマオウ以上の素早さに驚いている。

「ヤドラン!一旦、水に潜るんだ!」

「ヤアドオ〜」

シユンの指示にヤドランは のっそりとした動きで水の中に潜る。

「あまいぜ!ペルシアン、分かっているな!」

「ペルニヤア!!」

ユウラはニヤリと笑みを浮かべてそう言うとペルシアンは頷く。

「ペルシアン! “きりさく”だ!」

「ペルニヤア!!」

ペルシアンはUターンしてヤドランが潜った場所に “きりさく”を繰り出しながら迫る。

「ヤドラン!! “メガトンパンチ”で迎撃だ!」

「ヤアドオ!!」

シユンは迎撃の指示を出し、ヤドランは上に映るペルシアンの影に向かって「メガトンパンチ」を繰り出しながら上昇していく。

そしてザパ〜ンと水面から飛び出し…ヤドランの「メガトンパンチ」が決まったと思つた瞬間にペルシアンの姿が消える。

「ペルニヤア!」

「ヤド?」

「なっ!」

ヤドランの「メガトンパンチ」をペルシアンはそのしなやかな筋肉を生かして体をクルリと回転させてヤドランの真上を取る。

『「おおつとペルシアン! そのしなやかな動きでクルリと交わしヤドランの上をとつたあ〜!!」』

「ペルシアン!!」  
「10まんボルト」だ!

「ペルニヤア!!」

「ヤド〜!?」

そしてペルシアンは体に電気を纏い「10まんボルト」を放ち、ヤドランに効果抜群の「10まんボルト」が直撃してヤドランを吹っ飛ばし水フィールドの浮台に叩きつ

けられる。

『これは大ダメージ!!みずタイプのヤドランに“10まんボルト”が直撃!!効果ばつぐんだあ〜』

ヤドランは浮台に叩きつけられ効果ばつぐんの技を受けたダメージで苦悶の表情を浮かべている。

「ヤドラン…しっかりするんだ!」

「よし!“10まんボルト”で止めだあ!」

大ダメージを受けたヤドランにエールを送るシユン。そこに止めだとはかりにユウラは指示しペルシアンは止めの“10まんボルト”を放とうと体を帯電させる。

「ヤドラン!!“はかいこうせん”!」

「ヤド!!ヤドオ〜〜!」

シユンはヤドランが進化した事で覚えたもう一つの技を指示し、ヤドランは普段ゆつたりとした目をギラッと開いたかと思うと立ち上がり口元に“はかいこうせん”のエネルギーを集中させて一気に解き放つ。

「ペルニヤア〜〜」

「なっ!」

強烈な“はかいこうせん”が…“10まんボルト”を放とうとしたペルシアンへと

直撃し、＼はかいこうせん＼の強烈なエネルギーがペルシアンに大ダメージを与える。  
「あっ!!」

その＼はかいこうせ＼んの強烈なエネルギーが全て解放たれペルシアンへと直撃し尽くすとペルシアンが浮台へと落ちて来る。

「ペルニヤア〜……ケホツ……」

「ペルシアン!？」

『ペルシアン……戦闘不能!……よってこの試合……シユン選手の勝ち!』

「ヤドオ〜……」

ペルシアンは浮台に倒れると口からケホツと一度黒い煙を吐くと戦闘不能になった。

そして審判によってペルシアンの戦闘不能が宣言され第一回戦のシユンの勝利が宣言される。ヤドランは自身の勝利に普段の鈍い様子からは考えられないくらいの勝闘を上げる。

『試合終了!マサラタウンのシユン選手の勝利です。ポケモンを交換することなくヤドラン1体で第一回戦を突破しましたあ——!!』

実況によってシユンの勝利が宣言されて大型モニターに映るユウラの手持ちを表す3つのランプが全て消えて、シユンの『WINNER、CONGRATULATION S!!』と映り、緑サイドとシユンの手持ちを表す緑のランプが3つともついた状態に変

わった。

「ツツ…! やった〜! 勝ったあ!」

「…そんな…馬鹿な…俺があんなガキに負けるなんて…」

シユンは自分の勝利が宣言されると飛び上がって喜び、敗北したユウラは膝まずいて負けた事にシヨックを受けていた——しかも自分よりも年の離れた子供に負けた事がさらにシヨックを大きくさせた。

ユウラは始めシユンを馬鹿にして実況が先程のサトシの試合と照らし合わせた時にコウムの事も嘲笑い…シユンのポケモンのヤドランも馬鹿にしたポケモンバトルで対戦相手に敬意も払わず失礼な態度ばかり取るユウラにかけてやる言葉などなく……ただ敗北の屈辱を味わうしかないのである。

「すげえぜシユンとヤドラン!」

「ピツカ!」

「ああ、見事な勝利だ!」

「おめでどうシユン!」

観客席でシユンを応援していたサトシ達はシユンの勝利を喜び、サトシはシユンとヤドランを凄いと称賛し、タケシも見事な勝利だったと同意してカスミはシユンの勝利を祝福する。

「やった！ぼく達の勝ちだよアドラン！」

「アドアド（嬉）！」

シユンは勝った事を喜び、水のフィールドの浮台にいるアドランに向かって抱きつきアドランも嬉しそうにシユンにすり寄る。

「ありがとうアドラン！よく頑張ってくれたね」

「アドアド♪」

シユンは頑張ってくれたアドランにお礼を言つてアドランもニコニコと笑顔で頷く。

オーキド研究所でもテレビでシユンのバトルを見ていたオーキド博士やハナコ、町の人達もシユンの勝利を祝福し称賛し感動していた。

「フフフ♪マスターったらあんなに喜んで…おめでとうございます」

「（ええ…だけどもまだまだ大会は始まったばかりですしそう喜んでばかりはいられませんが…まだまだ強いトレーナーもいるはずですよ）」

ボールの中のディアンシーはシユンの喜びように微笑み祝福する。

メロエツタはまだまだ大会は始まったばかりだから喜んでばかりではいけないと言つて、まだまだ強いトレーナーもいるはずだと言う。

「（しかし今は…マスター達の勝利を祝福しましょう）」

「（ええ、2回戦への進出おめでとうございますマスター）」

しかし今はシユンの勝利を祝福しましょうとメロエツタは微笑み、デイアンシーも笑顔で祝福する。

そして今 シユンは報道陣によるインタビュウを受けていた。

第1回戦をヤドランで勝ち進んだシユン――。

まずは最長な滑り出し、果たして2回戦はどのようなバトルになるのか……。

ポケモンリーグセキエイ大会は まだ始まったばかりである――。

いわのフィールド！かくとうのプライド！

ついに始まったポケモンリーグセキエイ大会——！！

第1試合をシユンはヤドロンで挑む。対戦相手の1体目のバリヤードを倒した時にヤドロンはヤドランへと進化した。

2体目のアズマオウをメガトンパンチで、3体目のペルシアンを“はかいこうせんで撃破。

シユンはヤドラン1体で第1回戦を見事に勝ち抜いたのだった——。

そして一回戦から数日 シユンは第二回戦の氷のフィールドで戦っていた。観客達の歓声が響き渡る。

「ルージュラ！れいとうパンチだ」

「ジュラア——！！」

「ニヨロ——!?」

「ニヨロゾ!!」

『「ニヨロゾ戦闘不能!!ルージュラの勝ち！」』



ルージユラの”れいとうパンチがニョロゾに決まり、ニョロゾは凍りついて戦闘不能になる。

『決まったあ!ルージユラの”れいとうパンチでニョロゾをノックアウト!!ルージユラ2体抜きだあ!!』

シユンは1体目のポケモンにルージユラを出して2回戦の対戦相手のポケモンを倒し2体抜きを決めていた。

『ここ氷のフィールドで行われている2回戦。緑サイドのシユン選手の1体目ルージユラがコクト選手の2体目のポケモンを倒し圧倒的な強さを見せつけております。

これでコクト選手の残りポケモンは1体…もう後がないぞ!』

実況によってこの試合の解説が行われており、現在シユンは1体目のポケモンのルージユラで対戦相手のコクトの2体目のポケモンを倒して2体抜きを決めていた。

「後はもうおまえだけだ…頼んだぞ!」

コクトは手に持つボールを見つめてそう呟くとボールを勢いよく投げて最後の1体のポケモンに勝負を託す。ボールから出て来たポケモン――。

「コ〜ン!」

『コクト選手の最後のポケモンはキュウコンだあ!氷のフィールドには意外な選出。

しかしこおりタイプのルージユラには苦しい相手だ。果たしてマサラタウンの

シユン選手はどんな戦術で対抗するのか!」

「ルージュラ…君にとつて厳しい戦いになるだろうけど最後まで頑張つてほしい」

「ジュラ!」

コクト選手の最後の1体はキュウコン——実況の説明が鳴り響き、シユンは出て来たのが「こおりタイプのルージュラに苦手な」ほのおタイプが出て来た事に少し焦り：ルージュラに厳しい戦いになるだろうけど最後まで頑張つてほしいとお願ひするとルージュラも真剣な表情で力強く頷いてくれた。

「コ〜ン!!」

キュウコンはルージュラに向けて「かえんほうしゃを放つ。

「ルージュラ! 交わすんだ!」

「ジュラ!」

迫る「かえんほうしゃをルージュラは氷のフィールドを上手く滑り攻撃を交わす。

「ルージュラ! れいとうビーム!」

「ジュラ〜!!」

すかさずルージュラが「れいとうビームを放ち、キュウコンに直撃するが——。

『「おおつと…：れいとうビームがキュウコンに直撃! しかし ほのおタイプのキュウコンには効果はいまひとつ——』

キュウコンには「こおりタイプの技はいまひとつであまりダメージは見られない。

「キュウコン!」

「コーン!」

トレーナーの合図でキュウコンはルージュラに「ほのおのうずを放つ。

『「キュウコン、一気に決めようと強力な技を放つー!」』

「ルージュラ!サイコキネシス!」

「ジュラア〜!」

「迫り来る」ほのおのうずに向けてルージュラはサイコキネシスを放ち、ほのおのうずをその念の力で押し潰す。

「なんだと!」

「コン!!」

ほのおのうずが相殺された事に驚くコクトとキュウコン。

『「なんと!ルージュラのサイコキネシスが」ほのおのうずを押し潰したあ〜!なんて強力なんだあ!』

「実況もたつた今起きた事態に驚きを露にしており、観客達も驚いている。

「ルージュラ!今度はキュウコンにサイコキネシスだ!!」

「ジュラ!ジュラア〜!!」

「コン!!」

「キュウコン!!」

そして今度は直接キュウコンに向けてサイコキネシスを放ち、キュウコンを青白い光が包んでキュウコンが浮き上がる。

「くそ！キュウコン。振り払え！」

「コン!!コーン!?!」

『「キュウコン……サイコキネシスを振り払おうとするも……ルージュラの強力な技の前になすすべなし」』

「ルージュラ！そのままキュウコンをフィールドに叩きつけるんだ！」

「ジュラ！ジュラア〜！」

シユンの指示を受けてルージュラはサイコキネシスでキュウコンをフィールドに向けて叩きつける。

「コ〜ン！」

「キュウコン！」

勢いよくフィールドに叩きつけられたキュウコンは大きなダメージを受けてしまう。

「よし、ルージュラ！キュウコンを引き寄せるんだ！」

「ジュラア〜！」

「コーン〜!?」

シユンの指示通りにルージュラはサイコネシスで自身の方にキュウコンを引き寄せた。

そしてサイコネシスによってルージュラに向けて引き寄せられるキュウコンに向けて…。

「そのまま!!れいとうパンチだ!」

「ジュラ!ジュラア〜!」

「コ〜ン〜!」

「ああ!」

『「ルージュラの”れいとうパンチがクリーンヒットオー!」』

そのまま引き寄せたキュウコンに向けて”れいとうパンチを繰り出してキュウコンをぶつ飛ばす。

ルージュラの”れいとうパンチを受けて吹っ飛んだキュウコンは巨大な氷にぶつかり地面へと落ちる…そして――。

「コ…ン…」

『キュウコン…戦闘不能!よってこの試合…シユン選手の勝ち!』

審判はキュウコンが倒れたのを見て 戦闘不能のジャッジを下し、シユンのいる緑サ

イドの旗を高く上げてシユンの勝利を宣言する。

「やった！ありがとうルージュラ。よく頑張ってくれたね」

「ジュラジュラア〜♪」

「あはは……分かったからルージュラ。よく頑張ったね」

「ジュラア〜」

審判によってシユンの勝利宣言がされるとシユンは勝利した事を喜び、頑張ってくれたルージュラを褒めるとルージュラも笑顔でシユンに抱きつく。

ルージュラの相変わらずな自分に対しての好感度の高さに苦笑しながら、褒められて嬉しいのは分かったからとルージュラの抱きつく手を外してから……よく頑張ったねとルージュラの頭を撫でるとルージュラは益々笑顔になり頷く。

「（やりましたわ！流石ですわマスター）」

「（これで2回戦も突破です。順調に勝ち進んでいますね）」

ボールの中のディアンシーもシユンが勝利したことを喜び、メロエツタも微笑みシユンが順調に勝ち進んでいる事を喜ぶ。

電工掲示板の赤サイドの相手選手の方が消えて緑サイドのシユンの欄が大きくなり『WINNER』とシユンが勝利した事を表している。シユンの下の3つのランプは1つも消えておらずシユンが1体の手持ちポケモンもやられずに勝利した事を知らしめ

ている。

シユンの勝利に会場中の観客達の歓声と声援が響き渡る。

『シユン選手! 1回戦同様にルージユラー1体で相手のポケモンを全て倒し、圧倒的な強さで第2回戦を通過しました!!』

シユンの圧倒的なバトルに実況の声が響き渡る——。歓声と声援が響く観客席の出口の方でシユンの幼馴染みのシゲルがシユンのバトルをガールフレンド達と見ていた。

「シユン…やはり強いな。流石はぼくのライバル…。君と戦うのが楽しみだよ」

シゲルはシユンのバトルを見てシユンとポケモン達の強さに感心し、流石は自分のライバルだと認めて戦う時が楽しみだよと笑い、ガールフレンド達と一緒に会場を後にした。

シユンとルージユラは自分達に声援を送ってくれる観客達にお礼とばかりに手を振って応える。

「だけどどんなに強くても…最後に勝つのはこのぼくさ!」

シゲルは笑みを浮かべながら最後に勝つのは自分だと呟いて会場から去って行く。

「すっげえ強いな! シユンとルージユラ!」

「ピカチュウ!」

「ああ。苦手な ほんのおタイプにも怯えずに 効果はいまひとつの筈の こおりタイプ

の技で倒した——技も かなり鍛えられている。良く育てられているな……」

サトシ達もシユンの試合を見ており、シユンとルージュラの強さに驚いていた。

タケシも……ルージュラが苦手な ほんのおタイプのキュウゴンにも怯えずに 効果がいまひとつの こおりタイプの技で倒した事から技も かなり鍛えられており、良く育てられていると思いつトレーナーとしての力量の高さに感心している。

「シゲル同様……サトシに取って強力なライバルね……」

「チヨキチヨキイ！」

カスミもシユンの試合を見てその強さに驚き、サトシに取ってシゲル同様に強力なライバルだと思い、カスミの腕の中にいるトゲピーは はしゃいでいる。

「ああ……。シユンもシゲルも強い……。だけど俺は絶対に2人に勝つ！なつ！ピカチュウ」

「ピツカ！」

「もう……。相変わらずその根拠の無い自信はどこから来るのかしら？」

「まあ サトシらしいじゃないか」

カスミの言葉を聞いてサトシは幼馴染みでもあるシユンとシゲルは確かに強いと認めつつも絶対にライバルでもある2人に勝つと気合いが燃え上がり、相棒のピカチュウに同意を求めるとピカチュウも力強く頷く。



そのサトシの相変わらざるの根拠の無い自信にカスミはため息をはき、タケシは相変わらざるのサトシらしさに笑みを浮かべている。

「気合いを入れるのも良いけど…もうすぐ自分の試合がある事忘れないでよね?」

「そうだ。シユンもシゲルも順調に2回戦を突破した。サトシ、おまえも頑張れよ!」

「ああ!2人も勝ち進んでるんだ。俺も絶対に勝つぜ!」

「ピカチュウ!」

気合い入れすぎのサトシに呆れながらカスミはサトシにもうすぐ自分の試合がある事を忘れないでよと注意し、タケシも2人も順調に2回戦を突破したからサトシも頑張れと応援するとサトシも幼馴染みでライバルの2人が勝ち進んでるから自分も絶対に勝つとさらに気合いを入れてピカチュウも頷く。

そしてサトシ達は2回戦の会場——岩のフィールドへと向かい、サトシの2回戦が始まる。

1回戦と違いサトシは少し苦戦し、お互いに2体目のポケモンを失い最後の1体ずつとなり相手のポケモンはニドリーノ、サトシはゼニガメで最後のバトルに挑んだ。

そしてサトシはゼニガメに攻撃を喰らいながらも至近距離まで引き寄せて”みずでつぼうを繰り出した後にすかさずロケットずつきで止めをさしてサトシも無事に2回戦を突破した。

「やったね。サトシも無事に2回戦を突破したね」

「しかし少々 状況に応じて適切ではない指示が多々ありました。やはりマスターの幼馴染みはトレーナーの腕の方はまだまだのようですね…」

「フフフ♪でも、あの方もあの方のポケモン達も生き生きとしていましたわ。」

まるでマスター達のバトルを見ているようでしたわ」

サトシの試合を観客席の出口近くで見ているシユンはサトシが2回戦を勝ち進んだ事を喜び、シユンの隣で一緒に見ていたメロエツタはサトシのバトルを見て厳しめに評価する。

ディアンシーはサトシのバトルを見てサトシもポケモン達も生き生きとバトルしており、まるでシユン達のバトルを見ているようであったと微笑む。

反対側の観客席出口ではシゲルがガールフレンド達とサトシのバトルを見ており、勝利してはしゃいで観客達に手を振っているサトシを見て2回戦を勝ち進んだぐらいで調子に乗っていると不機嫌な表情で会場を後にする——最後に勝つのは自分だと笑みを浮かべながら歩いて行く。

こうしてシユン、シゲル、サトシのマサラタウンの幼馴染み3人は無事に2回戦を突破したのだった。

その夜——。

「さあ、みんな!ご飯の用意が出来たよ。めしあがれ!」

「ウオオウ!」

「デイン!」

シユンはポケモンリーグ協会がそれぞれ選手のために用意したリーグ参加選手のための宿舎で2回戦の疲れを癒し、ポケモン達にご飯のポケモンフーズや木の実とポケモン達の栄養を考えたバランスの良い食事を与える。

シユンの現在の手持ちは——メロエツタとディアンシーを除けば、リザードン、フーデイン、ストライクにゴルダック、オニドリル、ゴリキーは美味しそうにポケモンフーズを食べている。

「ちゃんと良く噛んで食べるんだよみんな」

シユンはポケモンフーズや木の実を美味しそうに食べるポケモン達を見て微笑む。

「さてと…。ルージュラもポケモンセンターに預けて来たし、みんなのご飯も用意できたし、ぼくもご飯にしようかな」

「それが良いですマスター。明日はいよいよ3回戦です。試合に備えて夕食を済ませて早く休みましょう」

「そうですわ。寝不足で明日の試合に影響があつては行けませんわ。後はわたくし達が片付けをしますですので夕食を取ってお休みになってください」

「メロエツタ、デイアンシー……。そうだね。ありがとう2人とも！じゃあぼくも夕食を済ませたら明日に備えて休む事にするよ」

「ええ」

「はい」

ポケモン達の夕食を準備したシユンは——ポケモンセンターが 出場者達が自分のポケモンを回復させようと預けにいっぱい来て混雑してしまう前に 試合が終わってすぐにポケモンセンターまで行つてルージュラを預けた後にサトシの試合を観戦して自分の宿舎へと戻り、ポケモン達のご飯の用意を済まして、自分の夕食の準備をしてメロエツタ達の厚意に甘える事にして 明日の試合に備えて夕食を済ませたらすぐに休む事に決めて、夕食を食べる。

そしてシユンはリーグの参加者が無料で頼める出前のサービスで夕食を頼み、夕食を済ませると片付けをメロエツタ達に任せてお風呂に入りポケモン達のコンデイションをチェックした後明日の3回戦に備えて就寝するのだった。

シユンは大会期間中の宿舎に泊まっている間は手持ちのポケモンをボールから出せるポケモンは出したままにしている……。そしてメロエツタとデイアンシーも食器などの片付けを済ませるとシユンの睡眠の妨げと成らないように隣のベットで眠りに着くのであった。

そして翌日——ポケモンリーグの大会を勝ち抜いた参加者達がそれぞれのバトルフィールドで3回戦を勝ち抜くためにポケモンと共に自分達の持てる力を全て発揮して死闘を繰り広げていた。

『さあ第3回戦!岩のフィールドで戦っているのはシユン選手とダイキ選手!両者とも1体目のポケモンを失い、2体目となっておりまして。ここからどんな激闘が展開されるのか!』

そしてここ岩のフィールドでは現在、シユンと対戦相手の3回戦が行われており、お互いに1体目のポケモンを失い、2体目のポケモンでの試合が行われている。

シユンの2体目のポケモンはゴリーキー!ダイキのポケモンはゴローン……相性の上ではシユンの方が有利ではあるがシユンは今大会で初めて1体目のポケモンを失ったためか、少々の焦りを感じて技の指示をミスしてしまい少々苦戦している状況である。

岩のフィールドの会場にいる観客はシユン達の白熱とした試合に盛り上がり歓声が鳴り響く。

「ゴリーキー!!からてチョップ!」

「ゴリ~~~~!」

「だったら!ゴローン!まるくなるだ!」

シユンは「ゴリキーに」からてチョップを指示し、ゴリキーはゴローンに接近すると、ダイキは「ゴローンに」まるくなるで防御を上げて迎え撃つ体勢を取る。

「ゴリ！ゴリ！ゴリ！！」

ゴリキーは丸くなっているゴローンに連続で「からてチョップをお見舞いしてく。

『「おおっと！ゴリキーの」からてチョップはゴローンの硬い岩の体に阻まれてまるで効果がない！』

いわタイプのゴローンには「ゴリキーの」かくとうタイプの技は効果ばつぐんだが、相手のゴローンの「ぼうぎよ が元々高いからか」まるくなるでさらに上がっているため中々その牙城が崩せない――。

「ゴリ！ゴリ！ゴリ……」

「ゴリキーは連続で」からてチョップをゴローンに繰り返すが、ゴローンは平気な様子で丸くなったまま微動だにしない。

「ゴリ……ゴリ……ゴリ……」

「まずいな……攻め続けた反動でゴリキーが体力を消耗してきてる……」

「ゴリキーの」からてチョップを繰り返す速度が遅くなりゴリキーの顔に汗が浮かんできているのを見て、ゴリキーが攻め続けた事で体力が無くなってきている事に

気付き焦るシユン。

相手のダイキもゴリーキーが攻め続けて体力を消耗してからの反撃を狙っているからか、狙い通りの展開になっている事に笑みを浮かべている。

「交代させるべきか……ん?」

シユンはゴリーキーが体力を消耗しているためシユンはゴリーキーを交代させるべきか考えていた時にある事に気づく。それはゴリーキーの”からてチョップが当たっているゴローンの体の部分が微妙にゴリーキーの手刀の形に凹んできている事に気づく――。

「(マスター……気づきましたね。先程まで動揺して指示をミスしていたようですが……調子が戻って来たようですね)」

シユンがゴローンにダメージが蓄積している事に気づいた事をメロエツタは分かり、先程まで今大会で始めてポケモンを倒された焦りから少なからずバトルの指示をミスしていたが……少しずつ調子が戻って来ている事に安心し微笑むメロエツタ。

「あれは……ゴリーキーの”からてチョップの連続でゴローンにダメージが溜まってる……これなら!」

シユンはゴローンの体に起きている変化に気づいてゴローンにダメージが蓄積している事を確信する。

「ゴリキキー！きみの攻撃はゴローンに効いてる！そのまま攻撃を続けるんだ！」  
「ゴリ！！ゴリ！ゴリ！」

シユンはゴリキキーに攻撃が効いている事を教え攻撃を続けるように指示するとゴリキキーは体力を消耗しながらも領き、からてチョップ”を繰り返していく。

「ゴリ！ゴリ！」

そして指示を出してから3回目の”からてチョップをゴローンに決めたその時——  
メキつとゴローンの体に輝が入った。

「ゴロ～～!?」

「なっ！！しまった！」

ゴローンはその痛みで”まるくなるの体勢を崩してしまい、ダイキは自身の判断ミスに気づいて焦り叫ぶ。

「今だゴリキキー！止めのクロスチョップ！」

「ゴリ！！ゴリ～～！」

「ゴロ～～!?」

「ゴローン！！」

シユンはゴローンが防御体勢を崩したその隙を見逃さず、透かさずゴリキキーに止めの指示を出し、ゴリキキーは勢い良く飛び上がり両腕を交差させた手刀”クロスチョップ



プ”を繰り出してゴローンを吹っ飛ばし、ゴローンは後ろの大岩に激突する。

「ゴロ〜……」

『ゴローン! 戦闘不能!! ゴーリキーの勝ち!』

ゴローンに蓄積したダメージに加えて、効果ばつぐんだった事もあり、そして止めに強烈な“クロスチョップ”を喰らい岩に激突したダメージで倒れ戦闘不能となった。

ゴローンが戦闘不能になったのを見て審判が戦闘不能の判断を下し、緑サイドのシユンの方の緑のフラッグを上げて、シユンのポケモンが勝利した事を宣言する。

「くっ!? 戻れゴローン……俺の判断ミスだ……。ゴローンのダメージの深さを読みきれなかった……」

『ゴローン、ゴーリキーの連続の”からてチョップからの強烈なクロスチョップの一撃を喰らいあえなくダウン! ダイキ選手のパokemonはこれで残り1体……もう後がないぞ!』

ダイキは戦闘不能になったゴローンをボールに戻して、ゴローンのダメージの深さを読みきれなかった自身の判断ミスを悔やむ。

実況は現在のバトルの状況を解説し、赤サイドのダイキの手持ちpokemonを表すランプが消えて残りのpokemonが1体しかいない事を示している。

「後はおまえだけだ……頼んだぞ!」

「プギヤア〜！」

『「ダイキ選手の最後のポケモンはオコリザル！ シュン選手のゴリーキーと同様、かくとうタイプ同士の対決となったあ！」』

ダイキの最後のポケモンはオコリザル——シュンのゴリーキーと同じ”かくとうタイプ”のポケモンである。

「相手の最後のポケモンはオコリザルか……相性ではお互いに互角。油断せずによくよ  
ゴリーキー！」

「リキイ！」

相手の最後のポケモン、オコリザルは”かくとうタイプ——相性はお互いに互角。油断せずに行こうとゴリーキーに指示するとゴリーキーも頷く。

『それでは！ バトル……始め！』

そして審判によつて試合が再開される。

「オコリザル！ からてチョップだ！」

「プギヤ〜！！」

「ゴリーキー！ こつちも”からてチョップ！”

「リキイ！！」

お互いに”からてチョップ”を繰り返しながら迫る。

「ゴリッ!」

「プギッ!」

そしてお互いの手刀が肩へと命中し2体は苦悶の声を上げる――。

そのダメージでお互いに苦痛を感じながら後退する。

「大丈夫…ゴーリキー?」

「リキー!リキー!」

「しっかりしろオコリザル!」

「プギャ!プギィ!」

シユンと対戦相手はお互いのポケモンの状態を確認した後に、トレーナーの言葉に反応した後には2体は先程の同じ技のぶつかり合いと同じ”かくとうタイプとしてのプライドに火が点いたのかお互いに闘志を全開にさせて睨み合う。

「よおし!オコリザル、みだれひつかきで攻撃だ!」

「プギャプギャ!!」

「ゴーリキー!!ガードするんだ!」

「ゴリ!!」

相手のオコリザルは鋭い爪で連続で”みだれひつかきを繰り返り出し、ゴーリキーは腕を交差させてその攻撃をガードする。

「プギヤギヤ〜!!」

「ゴツ…ゴリ…」

『ダイキ選手のオコリザルの怒濤の攻めにシュン選手のゴリーキーは防戦一方だあ  
!』』

オコリザルは「みだれひつかきで激しく攻撃し、ゴリーキーはダメージに苦しみなながらも両腕でガードして耐える。

「良いぞオコリザル!そのまま攻め続けろ!」

「プギヤ〜!」

オコリザルは指示通りに攻撃の手を休める事なくゴリーキーに「みだれひつかきを繰り返す。

「ゴリ……」

両腕でガードしているが少しずつダメージが溜まるゴリーキー。しかし幾らダメージを受け続けても耐え続けるのはトレーナーであるシュンを信頼しているから――。

「……今だ!ゴリーキー、オコリザルの両腕を掴むんだ!」

「ゴリ!!」

シュンはゴリーキーにオコリザルの両腕を掴むように指示し、ゴリーキーはシュンの指示したタイミングに従ってガードを解いて見事にオコリザルの「みだれひつかきを

受け止めて両腕を掴む。

「プギ!?!」

「なっ!?!」

オコリザルとダイキは「みだれひっかきを受け止められた事に驚く。

「なっ!それじゃさつきから黙って攻撃を受け続けてたのはオコリザルの攻撃のタイミングを計ってたって言うのか!?!」

「ふっ!ゴリーキー!あてみなげだ!」

「リツキィ〜!」

「プギヤ〜!!」

ドオオオンンン  
!!!?

「オコリザル!?!」

ダイキはシユンの思惑に気づき驚愕し、シユンは微笑を浮かべてゴリーキーに反撃の技を指示する。ゴリーキーはオコリザルの両腕をしっかりと掴むと体を後ろ向けに反らして投げ飛ばし、オコリザルは投げ飛ばされて後方の岩に激突する。

「オコリザル!大丈夫か!?!」

「プギィ!」

トレーナーが安否を確認するとオコリザルは崩れた岩をどかしながら立ち上がり、

益々ゴリーキーへの闘志を全開にする。

「ゴリ…ゴリ…」

「あてみなげを確実に決めるためとはいえ…ゴリーキーはダメージを受け過ぎてる…。

交代させた方が良いかな…」

ゴリーキーの荒い息づかいを聞いて、ゴリーキーの体力が著しく消耗している事に気づいて残りの1体のポケモンと交代させようかと迷っていると――。

「ゴリ…」

「ゴリーキー…」

ゴリーキーは息づかいを荒くしながらシユンの方に視線を向けて何かを訴えるように見つめている。

「ゴリ！」

「…分かったよゴリーキー！このままバトルしたいんだね。全力でいくよ！」

「ゴリ〜!!」

ゴリーキーが決意を秘めた表情にゴリーキーの伝えたい事が分かったシユンはゴリーキーでの続投を決めてゴリーキーに全力で戦う事を伝えると、ゴリーキーは自分の思いを理解し組んでくれたシユンに感謝して必ず勝つと強い決意を胸に秘めて戦いに望む。

「オコリザル!メガトンキックだ!」

「プギヤ〜!!」

「ゴリキ〜!!クロスチョップ!」

「ゴリ〜!!」

オコリザルは飛び上がり空中で宙返りをして勢いをつけたメガトンキックとゴリキーのクロスチョップが激突する。

『「オコリザルとゴリキ〜、お互いの大技の激突だあ〜!!」』

「プギヤ〜!!」

「ゴリ〜!!」

メガトンキックとクロスチョップ——強力な技同士のぶつかり合い互いの技の威力は拮抗しており、お互いに相手を弾き飛ばそうと力を振り絞る。

「ゴリ〜!!」

「プギヤ!!」

ゴリキ〜はクロスしていた両腕を力付くで開いてオコリザルの蹴りを弾く。弾かれたオコリザルは空中で上手く体勢を建て直して着地する。

「ゴリ…」

「プギイ…」

『「ゴリキーとオコリザル!!一進一退の白熱な攻防を繰り広げているぞお!!」』

白熱とした一進一退の攻防に実況も熱く解説し、会場の大きく盛り上がって来ており声援が響いている。

ゴリキーとオコリザルは一進一退の攻防を繰り広げており、段々と自身のボルテージが高まりお互いに”かくとうタイプとしてのプライドが刺激されて闘志がメラメラと燃え上がり絶対に勝つという…そんなポケモン達の強い決意をトレーナーのシユンやダイキも気づいており、ポケモン達のその思いを尊重し、共に精一杯バトルする事を誓う。

激しくバトルして自分達のこれまでの成果を全て引き出して挑むポケモンリーグ―

そこにはバトルを通じて只の対戦相手という枠を越えて互いを認めて勝利のためにポケモンと心を通い合わせて戦う……。

ポケモンリーグで繰り広げられる数多いバトルの中で生まれる数々のドラマの一つである。

「たまらんのお〜!」

シユンとダイキがポケモンと心を通い合わせて白熱したバトルをしているのをV I P席で見っていた会長のタマランゼは…その激闘から生まれる様々な感情を秘められた



バトルを見て喜び思わず、口癖の言葉が出てしまい笑顔でシユン達を見つめている。

「ゴリキキー!! からてチョップ!!」

「オコリザル!! からてチョップ!!」

「ゴリキキー!!」

「プギャ〜!!」

そしてほぼ同時にお互いに技の指示を出してお互いの”からてチョップがまたも互いの肩に決まる。

「ゴリキキー!!?ゴリキキー……」

「プギャ〜!?プギイ……」

お互いの”からてチョップが決まると……その威力で互いに後退した後に”からてチョップを受けた肩を押さえながら体力の消耗が激しいのか荒く息づかいを繰り返す。

「いけえ!オコリザル!!連続で”からてチョップだ!」

「プギイ!!」

「負けるなゴリキキー!こつちも連続で”からてチョップ!」

「ゴリイ!!」

トレーナーの指示を受けてゴリキキーとオコリザルは相手を倒そうと”からてチョップ”を繰り返しながら迫る。

「プギイプギイ!!」

「ゴリゴリゴリイ!!」

「ゴリキーとオコリザルはお互いに怯まずに相手を打ち倒そうと」からてチョップを連続でお見舞いしていく。

「2体の繰り出す」からてチョップは時にお互いの体に当たり、時には「からてチョップでの打ち合いが繰り広げられるがお互いに一歩も退くことはない——」。

「それは」かくとうタイプ同士のプライドによるためか……それとも自身のトレナーのためか……はたまたその両方か……互いに相手を打ち倒そうと連続で「からてチョップを繰り出す」。

『「ゴリキーとオコリザルによる激しい」からてチョップの打ち合い!その白熱としたバトルに会場の盛り上がりは最高潮に高まっているぞお〜!』』

「先程から繰り広げられる白熱とした激しいバトルに観客達のテンションは最高に高まり、会場全体が熱く盛り上がる。」

「オコリザル!!」

「ゴリキー!!」

「負けるなあ!!」

「シユンとダイキも白熱としたバトルに闘志を熱く燃え上がらせ、互いのポケモンに大

きな声で声援を送る。

「ゴリイ!!」

「プギヤ〜!!」

トレーナー達から声援を受けた2体は益々闘志を熱くさせて互いのトレーナーのためにも勝とうとさらに激しく、からてチョップを打ち出していく。

「ゴリイ〜!!」

「プギヤ〜!!」

かくとうタイプとしてのプライド——。自身の大切なトレーナーのために勝ちたいという想い……互いに譲らない……譲れない……相手を倒し勝利を勝ち取ろうとダメージも体力の消耗もお構い無く死に物狂いで、激しいバトルを繰り広げる。

「ゴリイ……」

「プギイ……」

そして長く激しい打ち合いの末に——再度 互いの”からてチョップ”が肩に決まりダメージを受けて後退する。

「ゴリ……ゴリ……ゴリ……」

「プギ……プギ……プギ……」

ゴリキーとオコリザルはこれまでのダメージと攻防で体力を激しく消耗しており、

今にも倒れてしまいそうな程にフラフラして荒い息づかいを繰り返す。

「オコリザル……フツ……。いけえ〜!!」

「プギャ……。プギィ〜!!」

オコリザルの激しいバトルを行う姿を見つめ、今にも倒れそうになっているオコリザルを見てダイキは悟るように微笑を浮かべてオコリザルに最後まで全力で戦えと言う想いを込めて叫ぶ。オコリザルもそんなトレーナーの想いを感じとり最後の力を振り絞り向かっていく。

「頑張れえ〜!!ゴーリキーー!」

「ゴリ……。ゴリィ〜!!」

シユンも自分のために頑張ってくれるゴーリキーに心からの声援を叫び、ゴーリキーもそんなシユンの想いに応えようと……。こちらも最後の力を振り絞り向かって行く。

「ゴリィ〜〜!!」

「プギャ〜〜!!」

そして互いに技を繰り返す余裕もなく……。しかし構わずに互いに拳を繰り返し、互いの拳が両者の頬にヒットしクロスカウンターのようにもろにパンチがクリーンヒットする。

互いのパンチがクリーンヒットし……。そして訪れる静寂。シユンもダイキも実況や

会場の観客も一切声を出す事もなく静まりかえっており只フィールドの2体を見つめている——。

そして一瞬の静寂から……やがて止まっていた時が動き出したように——。

「ゴリ……」

「プギイ……」

互いに目の光が薄くなり……やがて交差するようにお互いに地面へと倒れる。

これまでの激しい攻防と深すぎるダメージに等々限界が訪れて2体とも倒れてしま  
う。

そして——。

『ゴリキキー……オコリザル……共に戦闘不能!しかしシユン選手のポケモンが1体残っているためこの試合……勝者……マサラタウンのシユン選手!』

『『『『『ワアアアアア……!!』』』』』』

『試合終了了々!!両者の白熱としたバトルを展開し、正々堂々の激闘の末のダブルノックアウト。手持ちのポケモンを1体残したシユン選手が3回戦を勝ち抜き4回戦へと進出を果たしたあ〜!!』

ゴリキキーとオコリザルは両者ダブルノックアウトで引き分け。審判により両者の戦闘不能が宣言されると観客の大歓声が響き渡り、実況の先程の熱いバトルの解説にさ

らに会場が盛り上がり手持ちのポケモンが1体残ったシユンの勝利が決まり、モニターに勝者であるシユンが表示されてファンファーレが鳴り響く。

「ゴリーキー！」

シユンは勝利した事を喜ぶのも忘れてフィールドに倒れるゴリーキーの元へと向かう。

「ゴリーキー、大丈夫？」

「リキ…」

シユンはゴリーキーを抱き起こすとゴリーキーは起き上がるとシユンに勝てなくて申し訳無きそうな顔を向ける。

「そんな顔しないでゴリーキー…。君はよく頑張ってくれたよ」

シユンはそんな顔をしているゴリーキーによく頑張ってくれたと言ってゴリーキーを励ます。

するとシユンと同じようにオコリザルを抱き起こしたダイキがオコリザルと一緒にシユンとゴリーキーへと近づいて行く。

「君とゴリーキーのおかげで良い試合が出来たよ。ありがとう」

「(こちらこそ)」

「ゴリ！」

「ウキー！」

ダイキはシユンの元まで来ると、シユンとゴリーキーのおかげで良い試合が出来たと笑みを浮かべて手を差し出しシユンも自分も同じだと言ってシユンはダイキの握手に応える。

横ではゴリーキーとオコリザルも健闘を認め合い笑顔で握手を交わす。

「負けたのは悔しいけど熱く良い試合が出来たから悔いはない。俺の分まで頑張つてくれよな！」

「うん！頑張るよ。君の分までベストを尽くして戦うよ」

ダイキは負けたのは悔しいけど熱く良い試合が出来たから悔いはないと自分の分まで頑張つてくれとシユンにエールを送り、シユンも自分に負けたダイキの分までベストを尽くしてポケモンリーグを戦い抜く事を誓う。

「やりましたわ。マスターは見事3回戦を突破しましたわ♪」

「(ええ！ゴリーキーもマスターのためによく頑張りました。マスター自身も成長しているようで何よりですね♪)」

ディアンシーはシユンが勝利し3回戦を突破した事を喜び、メロエツタはゴリーキーをよく頑張つたと褒めて、そしてシユンが相手の選手と白熱したバトルの後に互いを認め合い、健闘を称えあう様子を見てシユンがトレーナーとしてだけでなく人間的にも

成長している事が分かり嬉しくなる。

繰り広げられた両者の激闘に会場は大歓声が響き渡っている――。

『白熱とした激闘を繰り広げながらも正々堂々とバトルし、健闘を称えあう両者に盛大な拍手を!!』

お互いに素晴らしいバトルを繰り広げ互いを認め合い健闘を称えあうシユンとダイキに実況や会場の観客達から惜しみない盛大な拍手が贈られる。

ゴーリキーの活躍により、引き分けになりながらも見事3回戦を突破したシユン。

しかしセキエイ大会はまだまだ続く……。まだ見ぬ強敵もおり油断は出来ない――。

シユンは敗れた者の想いを背負いポケモンリーグを戦い抜く事を胸に誓うのであった。